ISSN　0918－9904

研究紀要

第　12　号

森　脇　遺　跡

２００２・９

三重県埋蔵文化財センター

例　　言

1．本書は、昭和 63 年度及び平成元年度に行われた森脇遺跡の発掘調査結果をもとに、2 ヶ年分を総合した分析・考察等をまとめたものである。

2．調査の原因は両年とも県営農業基盤整備事業である。

3．調査の体制は下記によった。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県教育委員会文化課　（第 1 次調査）

三重県埋蔵文化財センター　（第 2 次調査）

調査協力　　三重県農林水産部農村整備課・耕地課、 上野農林事務所

上野南部第二土地改良区、 上野市教育委員会、 財団法人三重県農業開発公社

4．調査面積、期間、担当者は、下表のとおりである。

	面積（㎡）	期　　間	担　当　者
第 1 次調査	4,300	昭和 63 年 8 月 1 日 ～平成元年 1 月 22 日	主　事　　森川常厚・伊藤裕偉 研修員　　小高昌久・平子　弘・豊岡　勇
第 2 次調査	7,000	平成元年 6 月 20 日 ～平成元年 12 月 27 日	主　事　　森川常厚・穂積裕昌 研修員　　山岡　裕

5．本書の作成・執筆は、森川常厚が行った。

6．発掘調査及び本書の作成には、下記の方々から指導、助言を賜った。記して謝意を表する。

泉　拓良　　小笠原好彦　　笠井賢治　　八賀　晋　　増渕　徹　　山中敏史

7．図面における方位は、国土調査法による第Ⅵ座標系を基準とする。

8．本書に使用した事業計画図面は農林水産部の提供による。

9．隣接する上野市遺跡調査会担当調査区の成果については、調査担当の田中秀和氏・前川依久雄氏（上野市教育委員会）のご教示を得た。

10．本書に用いた遺構表示略記号は下記による。

ＳＡ：柱列　ＳＢ：掘立柱建物　ＳＤ：溝・旧河道　ＳＥ：井戸　ＳＨ：竪穴住居　ＳＫ：土坑

ＳＸ：墓・古墳周溝　ＳＺ：不明遺構

目　次

Ⅰ．位置と環境 …… 1

Ⅱ．層序 …… 3

Ⅲ．遺構 …… 5
1．縄文時代の遺構 …… 5
2．弥生時代の遺構 …… 6
3．古墳時代の遺構 …… 9
4．飛鳥時代の遺構 …… 15
5．奈良時代の遺構 …… 23
6．平安時代前期の遺構 …… 46
7．平安時代中期の遺構 …… 51
8．平安時代末～鎌倉時代の遺構 …… 58
9．江戸時代の遺構 …… 64

Ⅳ．遺物 …… 67
1．弥生時代の遺物 …… 67
2．古墳時代の遺物 …… 73
3．飛鳥時代の遺物 …… 87
4．奈良時代の遺物 …… 101
5．平安時代前期の遺物 …… 131
6．平安時代中期の遺物 …… 131
7．平安時代末～鎌倉時代の遺物 …… 131
8．包含層出土遺物…… 131

Ⅴ．考察 …… 165
1．建物配置と変遷 …… 165
2．文字資料 …… 175
3．SD201 出土土器 …… 177
4．SE55 出土土器 …… 179
5．結語 …… 179

挿　図　目　次

Ⅰ．位置と環境

第 1 図　遺跡位置図 …… 1
第 2 図　遺跡地形図 …… 2
第 3 図　調査区位置図 …… 3

Ⅱ．層序

第 4 図　調査区断面図 …… 4

Ⅲ．遺構

第 5 図　縄文・弥生時代遺構配置図 …… 5
第 6 図　SD71 平面図 …… 6
第 7 図　SK68 ～ 70 実測図 …… 6
第 8 図　SK79、SD20・33 ～ 36 平面図 …… 7
第 9 図　SD33 断面図 …… 7
第 10 図　SD20 断面図 …… 7
第 11 図　SH254 実測図 …… 7
第 12 図　古墳時代遺構配置図 …… 9
第 13 図　SH250・251 実測図 …… 10
第 14 図　SH252、SB164・194 ～ 196、SA192、SD212 実測図 …… 11
第 15 図　SK231・232・247、SE37 実測図 …… 12
第 16 図　SD202 遺物出土状況図 …… 14
第 17 図　ぬか塚平面図、周溝断面図 …… 16
第 18 図　飛鳥時代遺構配置図 …… 17
第 19 図　SB12・163・165・187、SA272 実測図 …… 18
第 20 図　SH255・256、SB268・269、SA267・270、SK220 実測図 …… 19
第 21 図　SB271・273 ～ 275 実測図 …… 20
第 22 図　SK248、SE38・57・261 実測図 …… 22
第 23 図　奈良時代遺構配置図 …… 23
第 24 図　SB14 ～ 17・63 実測図 …… 25
第 25 図　SB22 ～ 25 実測図 …… 26
第 26 図　SB28・29・31・32・62・81、SA30、SZ59 実測図 …… 27
第 27 図　SB41 ～ 44 実測図 …… 28
第 28 図　SB45、SA46 ～ 48・73・77 実測図 …… 29
第 29 図　SB51・53・54・284 実測図 …… 31
第 30 図　SB5・67・74・161・166・167 実測図 …… 33
第 31 図　SB169・170・173・182 実測図 …… 34
第 32 図　SB188・189・197 ～ 199 実測図 …… 35
第 33 図　SB276・277・279・280、SA278 実測図 …… 36
第 34 図　SB281 ～ 283、SD209・210 実測図 …… 37
第 35 図　SH253、SB286 ～ 288・296 実測図 …… 39
第 36 図　SB183・290 ～ 292、SA56 実測図 …… 40
第 37 図　SB293 ～ 295 実測図 …… 41
第 38 図　SE50 実測図 …… 43
第 39 図　SE55 実測図 …… 44
第 40 図　SE262 実測図 …… 45
第 41 図　平安時代前期遺構配置図 …… 47
第 42 図　SB186・190・191 実測図 …… 48
第 43 図　SB200・285・289、SA297 ～ 299 実測図 …… 49
第 44 図　平安時代中期遺構配置図 …… 51
第 45 図　SB3・11・13・40・49・78・82・168 実測図 …… 52
第 46 図　SB52 実測図 …… 53
第 47 図　SB174 ～ 178、SA162 実測図 …… 54
第 48 図　SB171・172・184、SA185 実測図 …… 56
第 49 図　SB264 ～ 266、SA193 実測図 …… 57
第 50 図　平安時代末～鎌倉時代遺構配置図 …… 59
第 51 図　SB179 ～ 181 実測図 …… 60
第 52 図　SK236 ～ 241 実測図 …… 61
第 53 図　SK233 ～ 235・242 ～ 246 実測図 …… 63
第 54 図　SX219 実測図 …… 64

Ⅳ．遺物

第 55 図　SK249、SD33・72・75
出土遺物実測図‥‥ 68
第 56 図　SD71 出土遺物実測図 …… 69
第 57 図　SD71 出土遺物実測図 …… 70
第 58 図　SD203 出土遺物実測図 …… 71
第 59 図　SD203 出土遺物実測図 …… 73
第 60 図　SK221・225・226・231
・232・247 出土遺物実測図 …… 75
第 61 図　SB295、SK80・222・223・260、
SD208・257 出土遺物実測図 …… 76
第 62 図　SD202 出土遺物実測図 …… 78
第 63 図　SD202 出土遺物実測図 …… 79
第 64 図　SD202 出土遺物実測図 …… 80
第 65 図　SD202 出土遺物実測図 …… 81
第 66 図　SD202 出土遺物実測図 …… 82
第 67 図　SD202 出土遺物実測図 …… 83
第 68 図　SD202 出土遺物実測図 …… 84
第 69 図　ぬか塚周溝（SX259）
出土遺物実測図‥‥ 85
第 70 図　SE261 出土遺物実測図 …… 86
第 71 図　SK224・SD19 出土遺物実測図…… 87
第 72 図　SD201 出土遺物実測図 …… 89
第 73 図　SD201 出土遺物実測図 …… 91
第 74 図　SD201 出土遺物実測図 …… 92
第 75 図　SD201 出土遺物実測図 …… 93
第 76 図　SD201 出土遺物実測図 …… 94
第 77 図　SD201 出土遺物実測図 …… 95
第 78 図　SD201 出土遺物実測図 …… 96
第 79 図　SD201 出土遺物実測図 …… 97
第 80 図　SD201 出土遺物実測図 …… 99
第 81 図　SD201 出土遺物実測図 …… 100
第 82 図　SD201 出土遺物実測図 …… 101
第 83 図　SD201 出土遺物実測図 …… 102
第 84 図　SE262 出土遺物実測図 …… 103
第 85 図　SE55 出土遺物実測図 …… 105
第 86 図　SE55 出土遺物実測図 …… 106
第 87 図　SE55 出土遺物実測図 …… 107
第 88 図　SE55 出土遺物実測図 …… 108
第 89 図　SE55 出土遺物実測図 …… 109
第 90 図　SE55 枠板実測図 …… 110
第 91 図　SE55 枠板実測図 …… 111
第 92 図　SE55 枠板実測図 …… 112
第 93 図　SE55 枠板実測図 …… 113
第 94 図　SE55 枠板実測図 …… 114
第 95 図　SE55 枠板実測図 …… 115
第 96 図　SE55 枠板実測図 …… 116
第 97 図　SE55 枠板実測図 …… 117
第 98 図　SE55 枠板実測図 …… 118
第 99 図　SE55 枠板実測図 …… 119
第100図　SE55 枠板実測図 …… 120
第101図　SE55 枠板実測図 …… 121
第102図　SE55 枠板実測図 …… 122
第103図　SE55 枠板実測図 …… 123
第104図　SD20 出土遺物実測図 …… 125
第105図　SD58 出土遺物実測図 …… 127
第106図　SZ59 出土遺物実測図 …… 129
第107図　SB23・29・45・51・164・166
・184・199・276、SE50・263、
SK220 出土遺物実測図 …… 130
第108図　SB78、SK79・230 出土遺物実測図‥ 131
第109図　SK160・233 ～ 246 出土遺物実測図‥ 132
第110図　包含層出土遺物実測図 …… 133
第111図　包含層出土遺物実測図 …… 134
第112図　包含層出土遺物実測図 …… 135
第113図　包含層出土遺物実測図 …… 136
第114図　包含層出土遺物実測図 …… 137
第115図　包含層出土遺物実測図 …… 138

Ⅴ．考察

第116図　1 ～ 4 群建物配置図 …… 165
第117図　5-1 群建物配置図 …… 166
第118図　5-2 群建物配置図 …… 167
第119図　5-3 群建物配置図 …… 168
第120図　6 群建物配置図 …… 169
第121図　7・8 群建物配置図…… 170
第122図　9 群建物配置図 …… 171
第123図　10-1・10-2・11 群建物配置図 …… 173
第124図　12 群建物配置図 …… 174
第125図　13 群建物配置図 …… 175
第126図　法量比較図 …… 178
第127図　器種構成図 …… 179

写　真　図　版

PL　1 …… 調査前風景
PL　2 …… 第一次調査全景
…… 第二次調査遠景
PL　3 …… 第二次調査全景
PL　4 ……SH251
…… SH253、SB286・287
PL　5 …… SH255・256、SB268、SA267
……SB13 柱穴
PL　6 …… SB14・15
……SB15 柱根
PL　7 ……SB15・16 と哀園森
…… SB16・17・63
PL　8 ……SB22 ～ 25
……SB25 柱穴断面
PL　9 …… SB29
……SB32 と哀園森
PL 10 …… SB41・42
…… SB43・44
PL 11 …… SB45・49、SA46 ～ 48・73・77
……SB45 柱穴遺物出土状況
PL 12 …… SB51 ～ 54、SA56
……SB53、SA56
PL 13 …… SB74
……SB74 柱穴断面
……SB166
PL 14 …… SB161・167
……SB171
PL 15 …… SB172・173
……SB175 ～ 178
PL 16 ……SB182
……SB187
PL 17 …… SB188・189
……SB195
PL 18 …… SB196・283
……SB198
PL 19 ……SB200
……SB266
PL 20 ……SB269
……SB271
PL 21 …… SB273・274
……SB276
PL 22 …… SB279・280
……SB281
PL 23 ……SB282
……SB288
PL 24 …… SB293・294
……SB296
PL 25 …… SK69
…… SK226 遺物出土状況
PL 26 …… SK247 遺物出土状況
……SK248
PL 27 ……SK233・234 遺物出土状況
…… SK236 遺物出土状況
PL 28 …… SK239 ～ 241 遺物出土状況
…… SK242 ～ 244 遺物出土状況
PL 29 …… SK242 遺物出土状況
…… SK243 遺物出土状況
PL 30 ……SK245・246 遺物出土状況
…… SK246 遺物出土状況
PL 31 …… SE50
…… SE57
PL 32 …… SE55
……SE55 断面
PL 33 ……SE55 遺物出土状況
PL 34 ……SE55 解体作業風景
……SE261
PL 35 ……SE262
…… SD71
PL 36 ……SD71 断面
……SD71 流木出土状況
PL 37 ……SD33 遺物出土状況
…… SD202 内井堰
PL 38 …… SD202 内井堰及び遺物出土状況
…… SD202 内井堰内高杯埋納状況
PL 39 …… SD202 遺物出土状況

PL 40 ····· ぬか塚と SX259
····· SZ59
PL 41 ····· 弥生土器
PL 42 ····· 土師器 壺
PL 43 ····· 土師器 椀
PL 44 ····· 土師器 椀・鉢
PL 45 ····· 土師器 杯・皿・盤
PL 46 ····· 土師器 高杯・蓋
PL 47 ····· 土師器 甕
PL 48 ····· 土師器 甕
PL 49 ····· 土師器 甕
PL 50 ····· 土師器 甕
PL 51 ····· 須恵器 蓋
PL 52 ····· 須恵器 椀・杯
PL 53 ····· 須恵器 杯
PL 54 ····· 須恵器 高杯・皿・鉢・盤
PL 55 ····· 須恵器 壺・甕
PL 56 ····· 須恵器 壺・𤭯・硯
PL 57 ····· 須恵器 平瓶・横瓶
PL 58 ····· 黒色土器 椀・灰釉陶器 皿・瓦器 椀
PL 59 ····· 土師器・陶器・埴輪・土製品
PL 60 ····· 石器・石製品
PL 61 ····· 農具他
PL 62 ····· 農具
PL 63 ····· 農具・腰掛・部材
PL 64 ····· 糸巻・櫛・部材他
PL 65 ····· 剣形・杭・棒他
PL 66 ····· 斎串
PL 67 ····· 容器
PL 68 ····· 桶
PL 69 ····· 妻壁板・部材
PL 70 ····· 部材
PL 71 ····· 柱
PL 72 ····· 部材・木樋・井戸枠
PL 73 ····· SE55 枠板
PL 74 ····· SE55 枠板
PL 75 ····· SE55 枠板
PL 76 ····· SE55 枠板
PL 77 ····· SE55 枠板
PL 78 ····· 火付木
····· 瓢箪
PL 79 ····· 墨書
PL 80 ····· 墨書・刻書
PL 81 ····· 墨書
PL 82 ····· 墨書

表 目 次

第 1 表　掘立柱建物・柱列一覧 ····· 65 ～ 66
第 2 表　遺物観察表 ····· 140 ～ 164
第 3 表　文字資料一覧 ····· 176
第 4 表　遺構番号対照表 ····· 183 ～ 184

付 図

付図　1 ····· 調査区平面図

Ⅰ．位　置　と　環　境

上野市街から近鉄伊賀線に沿って５㎞ほど南下すると、上野市の史跡に指定されている「哀園森」(1)・「垂園森」(2) と呼ばれる小さな二つの森がある。これらの森の名称は、清少納言の『枕草子』に「森は　うへ木の森　岩田の森。木枯の森。うたた寝の森。岩瀬の森。大荒木の森。たれその森。くるべきの森。立聞の森。」[1] と記載されているのが初現と考えられるが、『歌枕名寄』に

「伊賀国

　誰其森

　　経家

さ夜ふけてたれそのもりのほととぎすなのりかけても過ぎぬなるかな

　哀其森

かきくらし雨のふる夜はほととぎすなきてすぐなりあはれその森」[2]

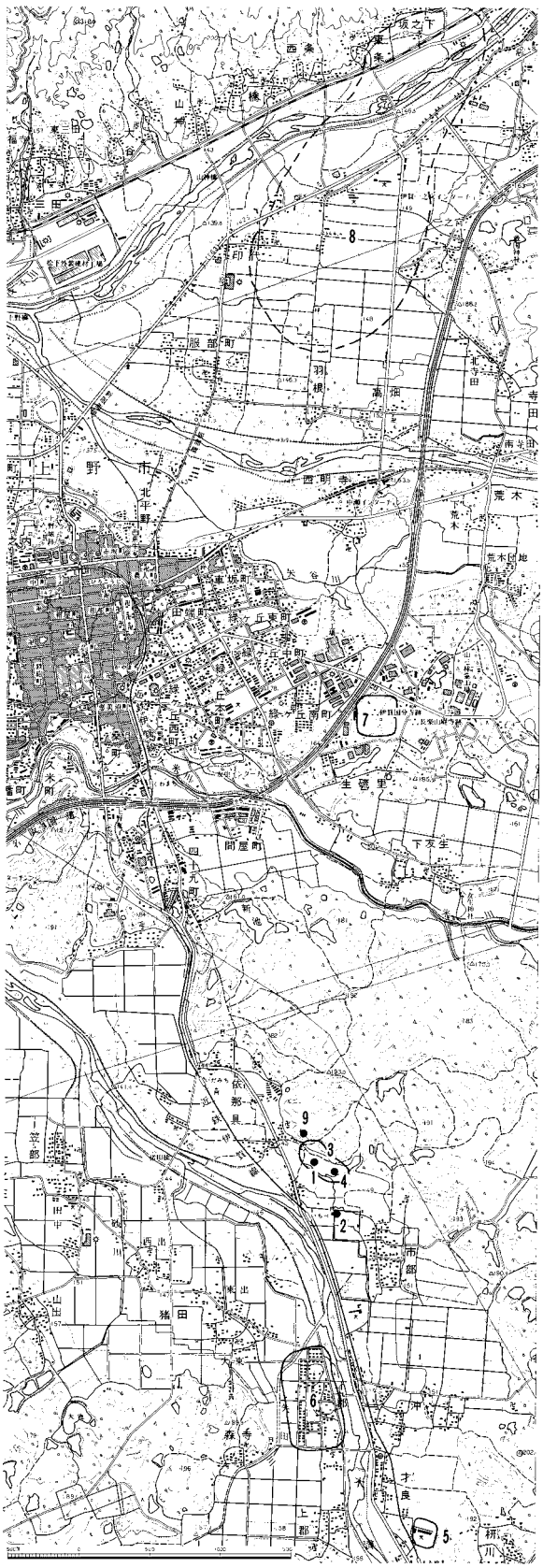
とあり、中世以来和歌の名所として多くの歌人に詠まれていたようである。

近世の町人文学者菊岡如幻は、『伊水温故』に「垂園森‥‥同村（市部村）通路ノ側ナル畑中ニ旧跡アリ‥‥哀其森　淡令園社　市部村東北ノ山際」[3] とし、この二つの森が市部村にあるとしている。

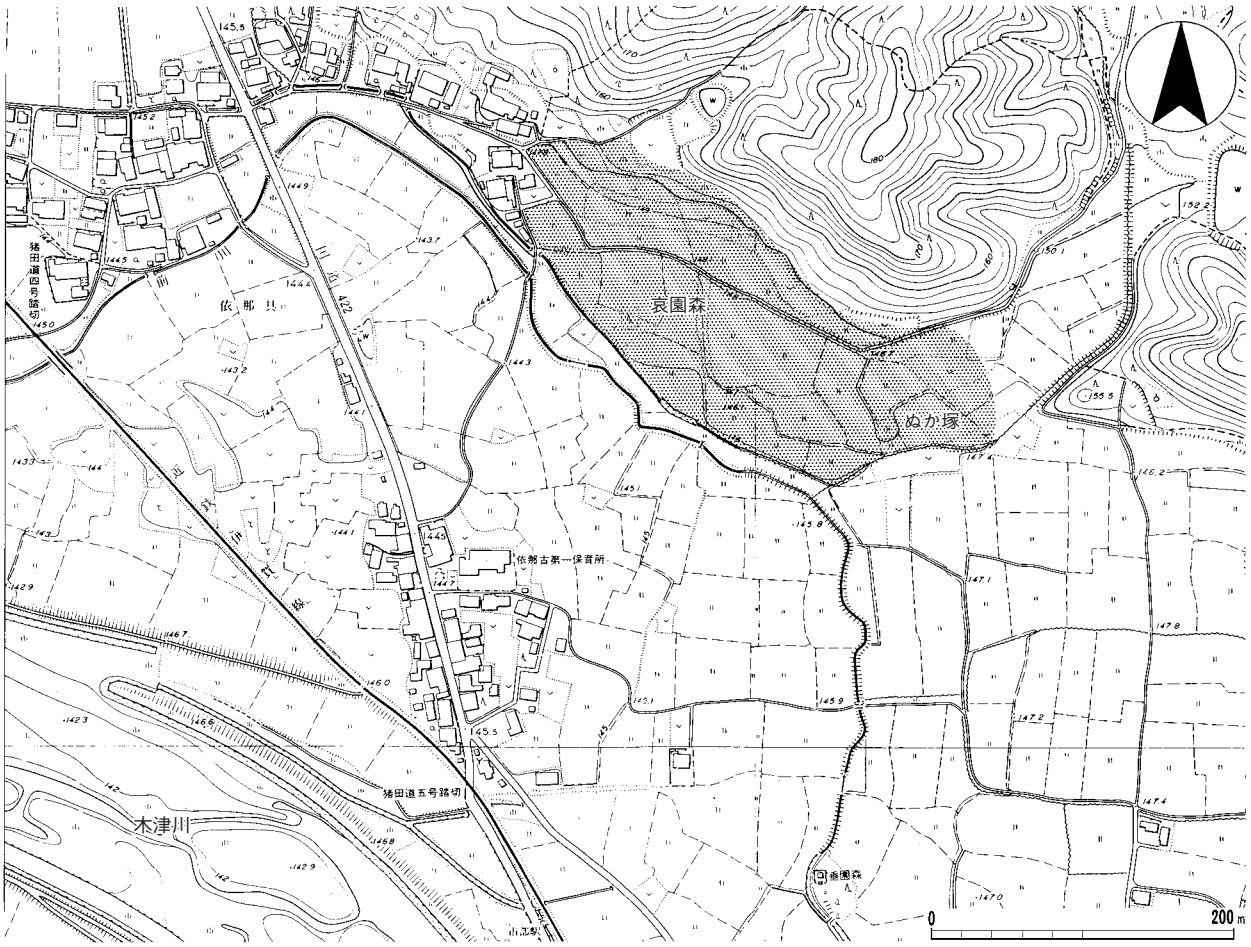
現在、哀園森は上野市市部の北西端、木津川（旧長田川）右岸の、南に広がる沖積地とは約 1m の段差をもつ丘陵裾野に位置する。数本の広葉樹が茂るのみで、森と呼ぶには抵抗を感じるほどである。『日本傳説叢書』は、「此森の守護神は、神楽神といふことで、淡禮園森の中には、時ならぬ音楽の音を聞くことがある」という伝説を記している[4]。

垂園森は、哀園森の南方約 300m の木津川右岸、沖積平野に位置する。現在、誰其神社が鎮座し、この神社は三輪明神を勧請したもの[5]と伝えられている。

この二つの森の周辺は、弥生土器の散布地として知られ、森脇遺跡 (3) と呼ばれてきた。遺跡は、丘陵南側裾野から木津川の沖積平野に広がり、現況は水田、標高は 150m 前後である。昭和 62 年度に行われた範囲確認調査では、垂園森周辺の沖積平野では遺構は検出されず、哀園森を含む丘陵裾野に遺



第１図　遺跡位置図（1：50,000）
『この地図は、国土地理院発行の２万５千分１地形図（上野・伊勢路）を掲載したものである。』



第２図　遺跡地形図（1：5,000）

跡が広がることが確認された。

森脇遺跡内には、哀園森の他に、その東方 200m に「ぬか塚」(4) と呼ばれる古墳がある。径 15m、高さ約 3m の円墳状の墳丘が残存しているが、四周とも削平されており、本来の形を示していない。ぬか塚に関する言い伝えには、「軍記ニ云　延文ノ兵乱ニ伊賀権守橘成忠伊賀國ヲ守ル‥‥多勢襲来テ攻ケル程ニ不適シテ此誰其森ニ入ケルニ‥‥此森ノ側ニシテ成忠自害ス

其古墳此社頭ノ邊ニ有」[6]、「昔、昔、伊賀の亂の時、市部の女は、今の糠塚川で、米を磨いでゐた。‥‥白い外矢が飛んで来て、女の胸を貫いて行つた。女は、ぱつたり倒れる拍子に、磨ぎかけの米を糠塚川に落としてしまつた。‥‥毎年夏の頃になると、きつと日を限つて、糠塚川の川の水が眞白に変わる時があつた‥‥」[7] 等がある。

森脇遺跡の西側から丘陵を越えて友生地区に至る小道がある。壬申の乱では、日本書紀に「隠郡に到りて、隠驛家を焚く。‥‥伊賀の郡に到りて、伊賀驛家を焚く。伊賀の中山に逮りて‥‥」[8] とあり、大海人皇子が隠駅家を焼いた後上野盆地を北上したようである。その時、この小道を通ったとし、森脇遺跡北方の丘陵を「伊賀の中山」に推定する節[9]もある。

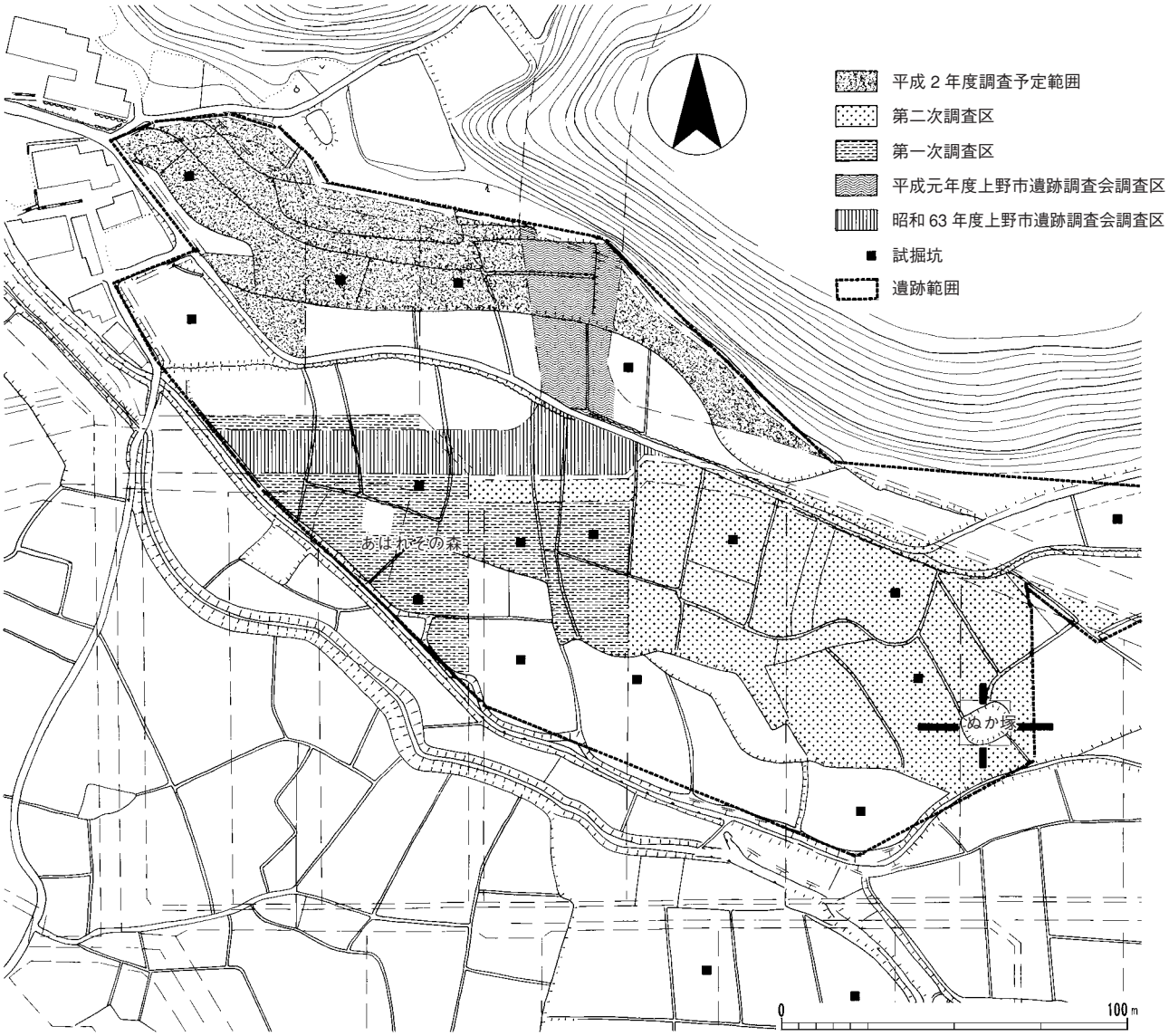
律令制下ではこの地域は伊賀郡に属する。森脇遺跡南方 3 ㎞には、奈良時代前期の財良廃寺 (5) が知られ、対岸の下郡地区は、郡衙の比定地にあげられている。下郡遺跡 (6) は昭和 52 年以来数度にわたり発掘調査され、平安時代前期の木簡が出土しているが[10]、郡衙に相当する遺構は検出されていない。しかし、この周囲には「下郡」の他に「上郡」「古郡」と「郡」のつく地名があり、このいずれかに郡衙が存在したとする考えが一般的である。また、森脇遺跡の真北 3 ㎞で伊賀国分寺跡 (7) に、さらに 3 ～ 5 ㎞で伊賀国府推定地 (8) に至る。国府・国分寺・森脇遺跡が、方位に沿って南北に直線状に並んで位置することは、古代の官道に規制されたためか、興味深い。

中世の伊賀は、東大寺・藤原氏をはじめとする荘園が広がるが、その実態に考古学的には十分迫れな

い状態である。近年、発掘調査例が徐々に増加しており、北堀池遺跡[11]・浮田遺跡[12]等で中世集落跡が検出されている。中世城館は、伊賀国内に600ちかくが知られており、伊勢地方と比べ非常に集中した分布を呈している。その大半は単郭式の小規模なもので、館的性格が強いものである。これらの城館は「天正伊賀の乱」により廃絶するものと考えられてきたが、近年、発掘調査例の増加の結果、必ずしもそうではなく17世紀まで継続するものがある等、個々多様であることがわかってきた[13]。森脇遺跡北西の丘陵上には、大井氏城跡(9)が存在する。本郭は、37×25mで、三方に土塁を巡らす。本郭の西側に空堀を挟んで二段の平坦面があり、北と西に土塁が残存している[14]。

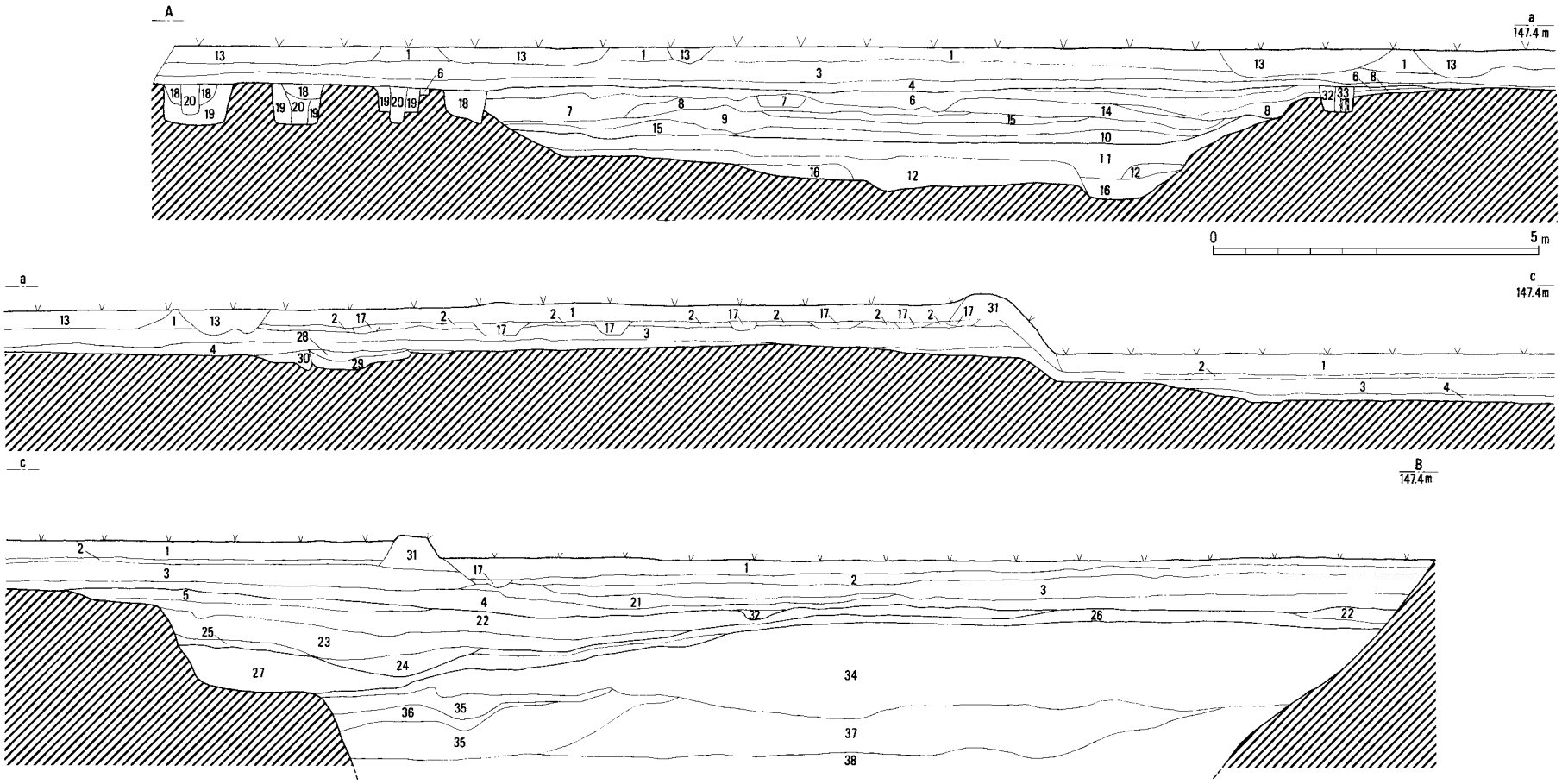
Ⅱ．層　　序

森脇遺跡は、前述のように丘陵裾野に位置するため北から南へ緩やかに傾斜している。そのため、水田一筆毎に北側は削平され、南側は盛土されており、北側の削平は包含層に及ぶ。基本層序は、地表から30㎝が耕作土（第1層）、その下5㎝が床土（第2層）、さらに20㎝の旧耕作土（第3層）の順で、地表から60㎝で包含層（第4層）に至る。包含層は、厚さ10～30㎝で土器を多量に含んでいる。その下は明黄色粘土の地山となり、遺構検出は、この層の上面で行った。



第3図　調査区位置図（1：2,000）

第４図　調査区断面図（１：100）



1. 淡灰褐色土（耕作土）
2. 淡黄褐色粘土（床土）
3. 黄灰色粘質土（旧耕作土）
4. 灰褐色粘土（包含層）
5. 橙灰色粘土（SD58 埋土）
6. 暗青褐色含炭粘土（SD71 第Ⅰ層）
7. 白茶色砂（SD26・27 埋土）
8. 白灰色粘土（SD71 第Ⅱ層）
9. 灰青色粘土（SD71 第Ⅱ層）
10. 白青色粘土（SD71 第Ⅱ層）
11. 暗茶色腐植土（SD71 第Ⅲ層）
12. 11 と白色砂の混り（SD71 第Ⅲ層）
13. 撹乱層
14. 白茶色砂と 8 の混り（SD71 第Ⅱ層）
15. 茶色砂（SD71 第Ⅱ層）
16. 白青色砂（SD71 第Ⅲ層）
17. 灰色粘土
18. 灰茶色粘土（SB23 埋土）
19. 黒灰色粘土（SB23 掘形埋土）
20. 黒青色粘土（SB23 柱痕跡埋土）
21. 明灰褐色粘土
22. 暗灰褐色粘土（SD58 埋土）
23. 暗青色粘土（SD58 埋土）
24. 暗茶色含木砂質土（SD58 埋土）
25. 明灰色粘土（SD58 埋土）
26. 黒褐色粘土（SD72 埋土）
27. 暗灰色含木粘土（SD72 埋土）
28. 黒青色粘土（SD39 上層埋土）
29. 黒青色砂質土（SD39 下層埋土）
30. 灰茶色粘土（SB32 埋土）
31. 淡灰色土（畦畔）
32. 黒灰色粘土（遺構埋土）
33. 黒青色粘土（柱痕跡）
34. 灰緑色微砂
35. 白色細砂
36. 黒茶色木質土
37. 白色含木砂
38. 青緑色微砂

Ⅲ．遺　構

１．縄文時代の遺構

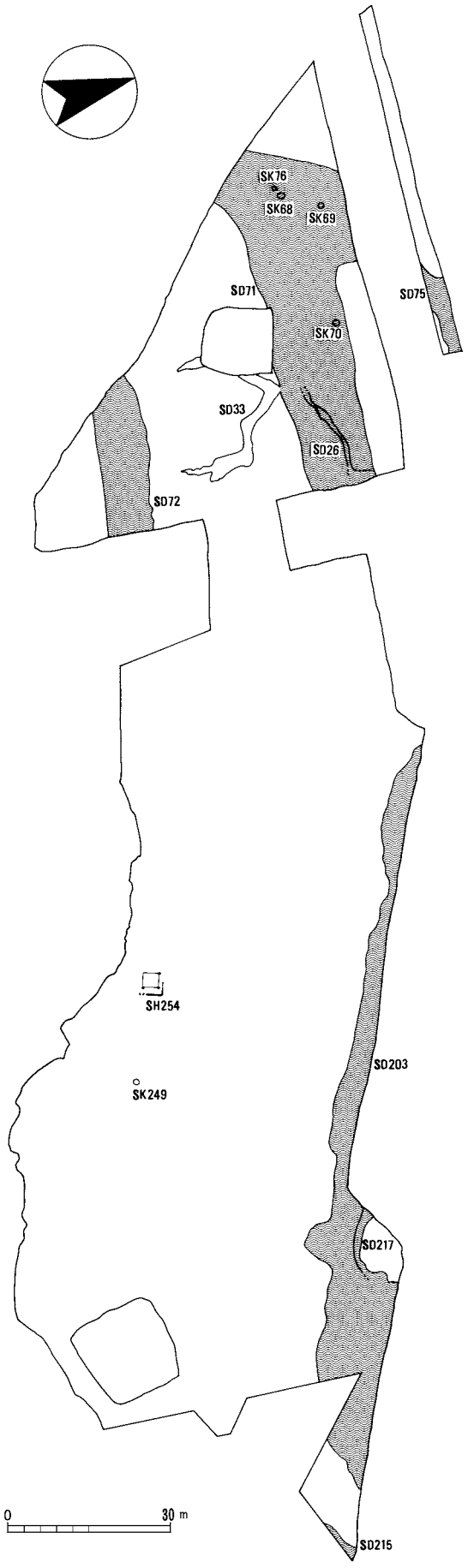
自然流水路 SD71 の底で 4 基の土坑を検出した。遺物の出土は全くないが、隣接する上野市遺跡調査会の調査区でも同じ流水路から同様な土坑が検出されており、縄文時代晩期の遺物が出土している[15]。これにより、当調査区のものもこの時代に属するものと考えられる。これらの土坑は、いずれも袋状の断面形を呈し、埋土に木葉や木実を含むこと等、その立地を含め共通点が多く、木実等の灰汁を除去するために使用された貯蔵穴と考えられる。

ＳＫ６８（第７図） SD71 の最深部で検出した南北 1.8m、東西 1m の楕円形を呈する土坑である。深さは 50 ㎝を測り、西壁は袋状を呈する。袋状を呈することは、他のものと共通するが、埋土には木葉や木実は含まれていない。したがって貯蔵穴とするに疑問も若干残る。長さ 1.6m、直径 30 ～ 40 ㎝の自然木が土坑に覆い被る様に出土した。この木の東端は SD71 の東側斜面に固定するような状態を呈している。

ＳＫ６９（第７図） SD71 最深部と中間平坦面との斜面で検出した南北 80 ㎝、東西 1m の楕円形を呈する土坑である。断面形は袋状を呈することなく、壁は垂直に近い角度で底部に至り、深さは SD71 最深部から 40 ㎝である。埋土は、木葉や、「どんぐり」かまたはそれに類似する木実、木片等で構成される。土坑上部には、直径 10 ㎝前後、長さ 20 ～ 60 ㎝の様々な自然木が土坑を覆うように置かれていた。

ＳＫ７０（第７図） SD71 の最深部より 45 ㎝浅い中間平坦面で検出した直径 1.1m の円形を呈する土坑である。深さは 60 ㎝ほどで断面形は若干袋状を呈する。埋土は上下 2 層に分かれ、20 ㎝までは灰茶色粘土、それ以下は暗茶色腐植土で、木葉や木実片がほとんどである。しかし、SK68・69 で検出した土坑を覆うような木材は検出できなかった。

ＳＫ７６　SD71 最深部より 50 ㎝ほど浅い中間平坦面で検出した。直径 80 ㎝、深さ 40 ㎝の土坑である。他のものより一回り小さく、埋土は白色砂で木実等の混入は少ない。しかし、立地や袋状または垂直に落ちる壁など他のものと共通点が多く、同様な



第５図　縄文・弥生時代 遺構配置図（1：1,200）

目的の遺構と考えられる。

２．弥生時代の遺構

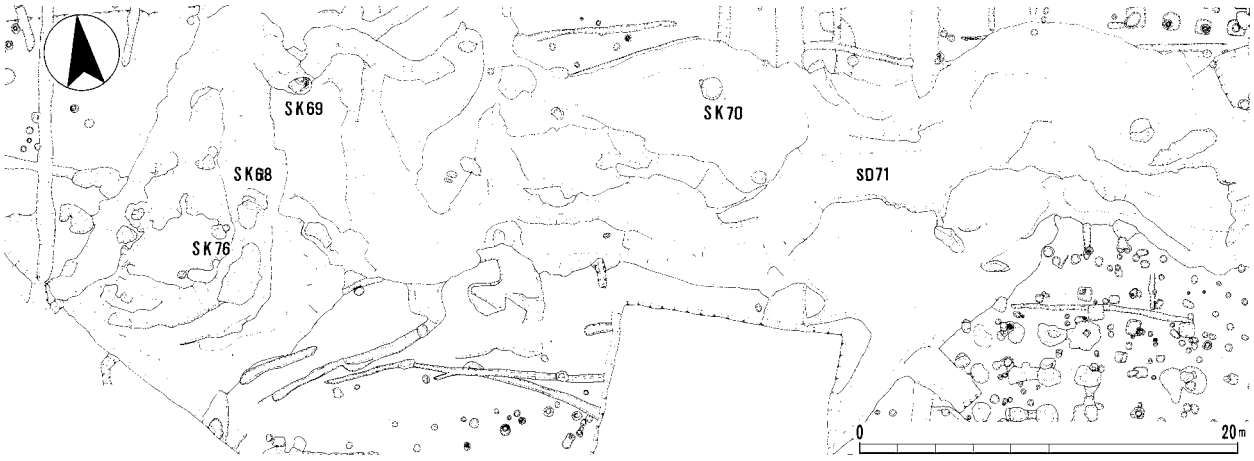
竪穴住居１棟、土坑１基、若干の溝を検出した他は全て自然流水路である。竪穴住居は、そのほとんどが削平された状態で検出されたことから、多くの住居が削平され消滅している可能性が大きい。自然流水路は、既述したように川底から縄文時代晩期の貯蔵穴が検出されたことから縄文時代とすべきであるが、埋土から出土する遺物が弥生時代中～後期のものであるため、ここで扱うことにする。

Ａ．竪穴住居

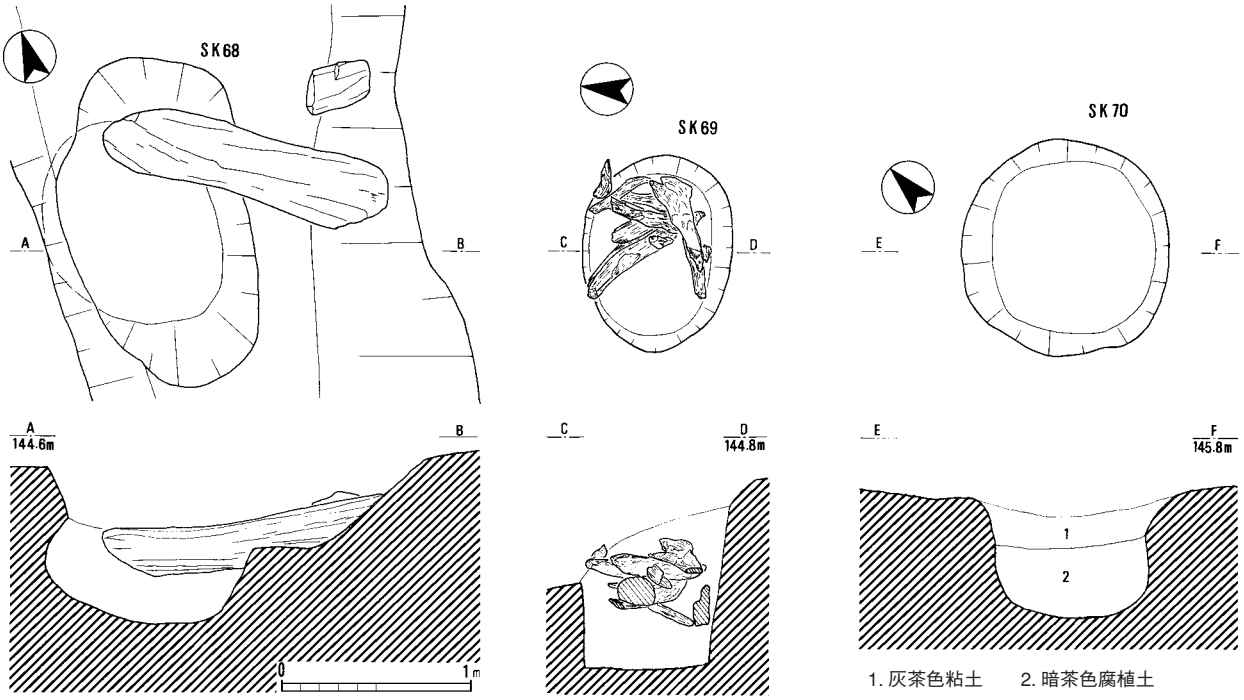
ＳＨ２５４（第 11 図） 調査区中央南端で検出した。残存が劣悪で、北壁から東壁の一部しか検出できなかったため、全体の規模は不明であるが、一辺 4 ～ 5m の方形を呈する小規模なものと推定される。幅 15 ㎝の排水溝が一部確認でき、本来 4 辺に巡っていたものと思われる。主柱穴は、3 基確認できたが、北西のものは小さく疑問もある。出土遺物も小片のみで、詳細な時期は不明であるが、中期と考えられる壺片が出土している。

Ｂ．土坑

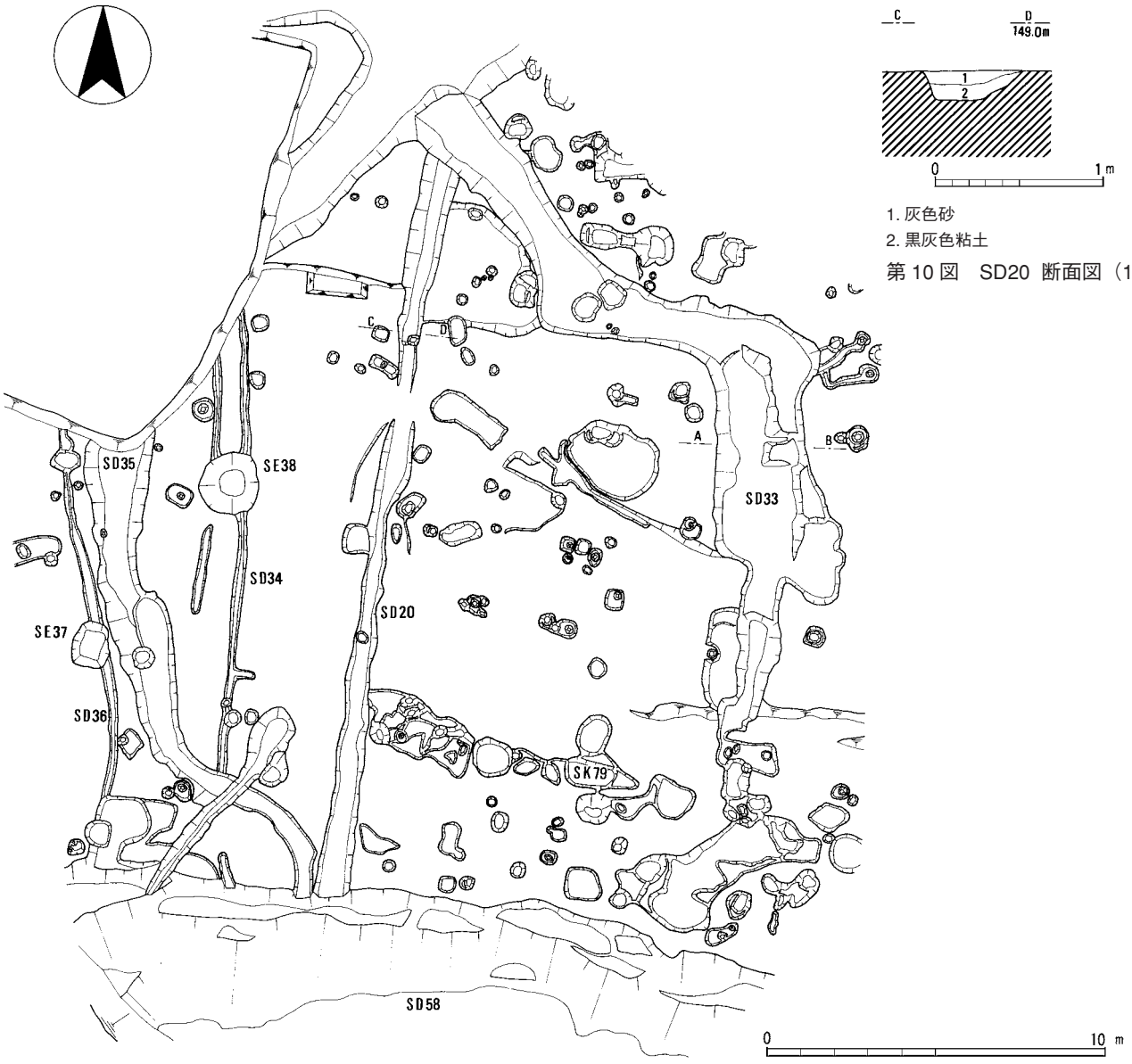
ＳＫ２４９　SD201 の西側で検出した。直径 1m の円形を呈し、深さ 10 ㎝内外の小規模で浅いものであるが、隣接する SH254 の検出状況から相当削平されているものと思われ、本来の深さを示していないも



第 6 図　SD71 平面図（1：400）



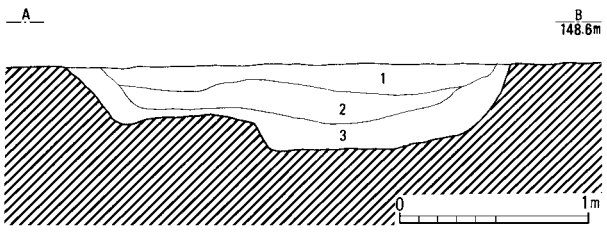
第 7 図　SK68 ～ 70 実測図（1：40）



第 8 図　SK79、SD20・33 ～ 36　平面図（1：200）

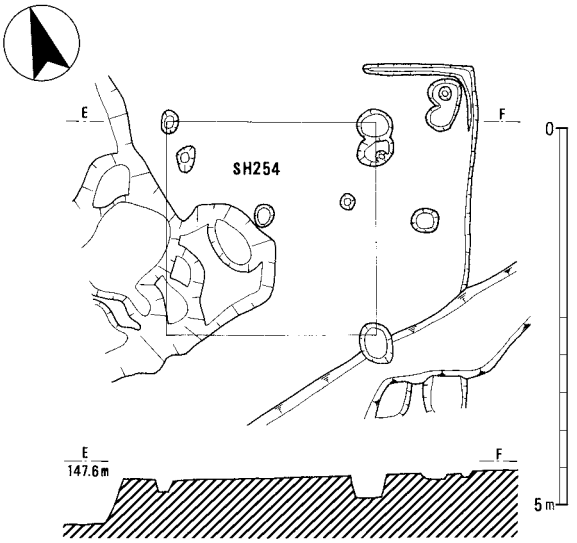
1. 灰色砂
2. 黒灰色粘土

第 10 図　SD20　断面図（1：40）



1. 黒灰色粘土
2. 暗茶色砂
3. 白灰色粘土（炭化物含）

第 9 図　SD33　断面図（1：40）



第 11 図　SH254 実測図（1：100）

のと考えられる。弥生土器壺（1）が出土した。土坑の規模に対して残存がよく、1/3 ほどまで復元できた。埋納されたものかもしれず、その場合、壺棺の可能性も考えられる。弥生時代中期に属するものである。

C．溝

ＳＤ３３（第８・９図）「哀園森」の東側で検出した幅 2m、深さ 40 ㎝を測る複雑な進路を呈する溝である。埋土は 3 層に分かれ、検出面から 10 ㎝ほどが黒灰色粘土、その下 20 ㎝が暗茶色砂、最下層は、幅 20 ㎝の白灰色粘土層となる。この粘土層には炭化物が含まれ、弥生土器が出土する。溝の南端は、徐々にその幅、深さを減じ消滅することから、削平のため本来の姿を呈しないものと考えられる。南北に延び、直角に西に屈曲して後すぐに北西に向きを変える。北端部は SD71 と重複するため不明確になるが、南西に向きを変え「哀園森」の下へ延びるものと推測される。平安時代中期の溝 SD35 の下層は、SD33 第 2 層の暗茶色砂になるため、SD35 と SD33 は重複しているものと考えられる。したがって、南辺が削平された方形周溝墓と考えることも可能であり、溝の芯芯で一辺 19m を測る。そしてその場合、北側に 6m の三角形状の突出部をもつ特異な形態を呈することになる。

東溝北部で土器の小片が比較的まとまって出土した。壺（9）・甕（10）が完形近くまで接合でき、中期に属するものと考えられる。出土状況からは埋納であることを証明できず、また、突出部の溝の深さに差があること等、方形周溝墓とするに否定的要素も多く、その可能性を示すに止めざるを得ない。

D．自然流水路

ＳＤ２６　SD71 第Ⅱ層上面で検出した幅 1m、深さ 20 ㎝前後の溝で、調査区外から 16m ほど西に流れ消滅する。SD71 が埋没する最終形態を示しているものと考えられる。したがって、弥生時代後期に属するものである。

ＳＤ７１（第４・６図）　調査区を東から西に流れる流路である。上野市遺跡調査会の調査結果[16]に基づけば、調査区北部の丘陵を水源として南流する流路が分流して東西に向きを変え、SD71 と SD203 になるものと推定できる。幅 13m、深さ 1.5m であるが、最深部は幅 4m、深さはさらに 20 ～ 50 ㎝の蛇行する溝となる。この部分からは遺物の出土がないため、弥生時代中期までに埋没したものと考えられる。

埋土は、大きく 3 層に分かれる。底から 70 ㎝が第Ⅲ層である。暗茶色腐植土と白色砂で構成される。前者は、ほとんどが植物遺体で、空気に触れると間もなく黒く変色する。基本的に白色砂層との互層であることから流れたり淀んだりを繰り返していたものと考えられる。弥生時代中期の土器や木製品が散見的に出土し、木製品は農具やその未製品である。

第Ⅲ層の上 50 ㎝が第Ⅱ層である。この層に腐植土は含まれず、砂と粘土層で構成されるが、大半が粘土層で、砂層も茶色を呈することから、流れるよりも淀む方が主であったものと推定される。出土遺物は、第Ⅲ層と同様である。

第Ⅱ層の上 30 ㎝が第Ⅰ層である。暗青褐色粘土で炭を含むが、その理由は不明である。この時点では、SD71 はほぼ埋没しており、砂層を含まないことからも流路の機能は全く失われ、その痕跡を留める程度の湿地帯であったものと考えられる。古墳時代～飛鳥時代の土師器・須恵器が出土している。

ＳＤ７２（第４図）　調査区南端を東から西に流れる流路である。北壁が急斜面であるのに対し南壁は緩斜面である。したがって、流路の幅が判然としないが、幅 10m、深さ 1.5m 程度であるものと考えられる。上層は、奈良時代の溝 SD58 が重複する。埋土は基本的に粘土層で、弥生時代中期～古墳時代の遺物が出土している。この溝の中央から南側では、地山としていた黄色～明青色粘土層がなくなり、厚い砂層の堆積となる。深さは地表から 3m 以上あり、現地形の段差とも対応することから、これはある時期の木津川本流と考えられる。したがって SD72 は、木津川が流路を変えた後、その痕跡を残す湿地帯であったものと考えられる。

ＳＤ７５　調査区を南西方向に流れ、上野市遺跡調査会の調査区を横断し、SD71 に合流する流路で、上野市遺跡調査会では SR92 として調査[17]されているものである。上野市遺跡調査会の調査区では、この流路の底から 9 基の縄文時代晩期の貯蔵穴が集中して検出されている。幅 12m、深さ 1.3m で、幅、深さとも SD71 より小規模であるため SD71 の支流と考えられる。埋土は基本的に SD71 と同じである

が、弥生時代後期～古墳時代初頭の土器を含むため、SD71 がその主たる流路を SD203 に変えた後も、流路として機能していたものと考えられる。

ＳＤ２０３　調査区北端を西から東に流れる流路である。その方向から、SD71 とは水源を同じくするものと考えられる。しかし、出土遺物が弥生時代後期のものが中心であるため、SD71 の主たる流路がこの時期に変わったものと考えられる。幅 7m、深さ 1m を測り、埋土は検出面から 30 ㎝が暗褐色土、その下 10 ㎝が灰白色砂質土、さらに 20 ㎝が褐色砂、さらに 5 ㎝が黄灰色砂、最下層が黒灰色粘土である。

ＳＤ２１５　調査区東端で検出した。検出できたのは溝の西端のみで、大部分は調査区外である。調査区外北側の丘陵がこの付近で途絶え、北に入り込む谷筋の延長上にあたることから、丘陵から木津川に流れ込んでいた河川の一部を検出したものと考えられる。

ＳＤ２１７　調査区北東部で検出した緩やかな弧状を呈する溝である。西端は調査区外へ、北端も SD201 と重複するが調査区外へ続くものと考えられる。幅 60 ㎝、深さ 15 ㎝前後を呈するが、SD203 埋土上面での検出のため、それが埋没する最終形態を示すものと考えられる。

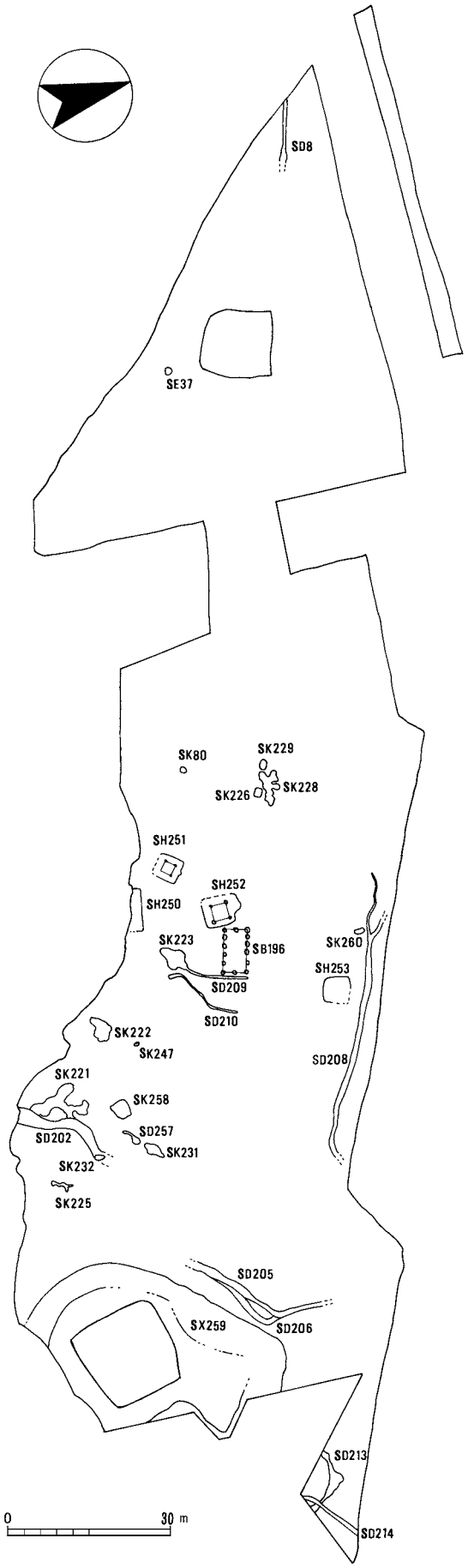
３．古墳時代の遺構

竪穴住居 4 棟、掘立柱建物 1 棟等を検出した他、溝に構築された井堰や、前方後円墳であることが判明したぬか塚が注目される。

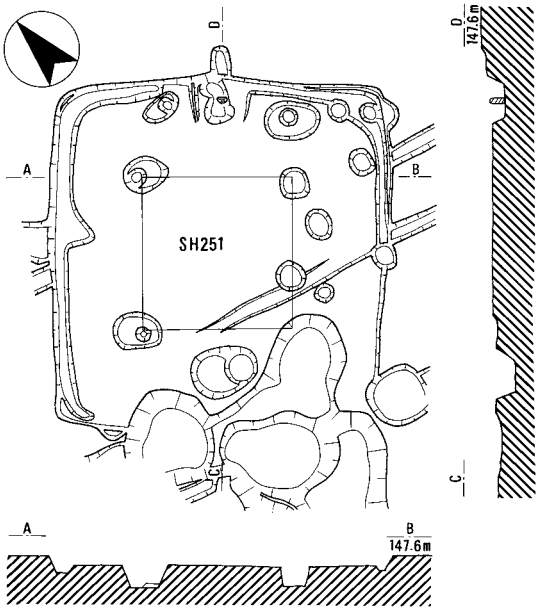
Ａ．竪穴住居

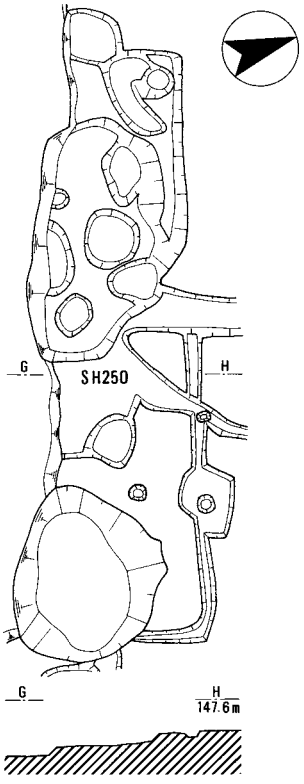
ＳＨ２５０（第 13 図）　調査区中央南端で検出した。南側は調査区外で、しかも水田開発による削平を受けているため不明確であるが、一辺 7.8m の方形を呈するものと考えられる。多数の遺構と重複するため非常に劣悪な残存であり、さらに竈や炉の跡も検出できず、竪穴住居とするに疑問も多い。しかし、東側で幅 20 ㎝の排水溝を検出したため竪穴住居の一部と考えた。詳細な時期は不明であるが、須恵器小片が出土しているため後期に属するものと考えられる。

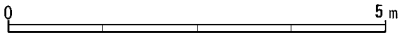
ＳＨ２５１（第 13 図）　調査区中央で検出した。南壁は土坑により消滅しているが、一辺 4.5m の方



第 12 図　古墳時代 遺構配置図（1：1,200）







第 13 図　SH250・251 実測図（1：100）

形を呈し、周囲に幅 20 ～ 30 ㎝の溝が巡る。主柱穴は、土坑により消滅した 1 基を除く 3 基が検出できた。掘形は直径 30 ～ 50 ㎝の不整円形を呈し、直径 20 ㎝の柱痕跡を検出できたものもある。北東壁中央に竈があり、北側の袖は比較的良好に残存する。中央に立石があり支柱石と考えられ、住居外へ延びる小溝は煙出しであろう。しかし、焼土が検出できなかったことは疑問である。土師器壺・長胴甕、須恵器甕片が出土しており、5 ～ 6 世紀に属するものと考えられる。

ＳＨ２５２（第 14 図）　調査区中央で検出した。ほとんど周溝のみの検出であるが、一辺 6m の方形を呈するものと考えられる。周溝は幅 40 ㎝で、深さ 10 ㎝程度である。重複が認められ、70㎝ほど北側と東側に拡張して建て替えられているようである。主柱穴は 4 基検出したが重複はなく、建て替えの際、主柱はそのまま利用されたものと考えられる。焼土等竈の痕跡は、確認できなかった。土師器高杯、須恵器蓋等が出土し、6 世紀後半に属するものと考えられる。

ＳＨ２５３（第 35 図）　調査区北部で検出したが周溝のみの検出のため、竪穴住居とするに疑問も多い。周溝は、幅 20 ～ 50 ㎝、深さ 10 ㎝未満で、幅、深さとも一定でない。北東部分は検出できなかったが、削平されたものと考えられる。主柱穴、焼土ともに検出できなかった。土師器の小片のみの出土であるため、詳細な時期は不明である。

Ｂ．掘立柱建物

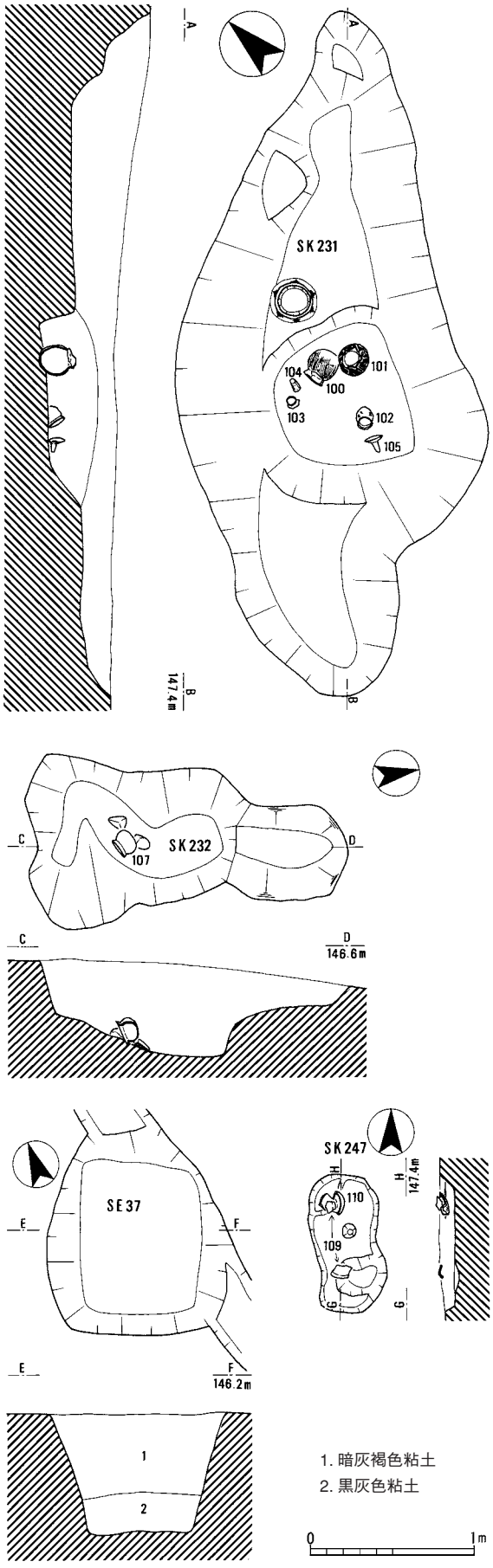
ＳＢ１９６（第 14 図）　調査区中央で検出した 5 間× 2 間の桁行の長い東西棟である。桁行の柱間が北列と南列で異なり、南列が 1.5m の等間であるのに対し、北列は不等間である。柱掘形は、一辺 70 ～ 80 ㎝の方形または長方形を呈する大型のものである。柱痕跡の直径は 25 ㎝であるが、梁行の北端のものは柱通りからはずれ疑問である。出土した須恵器から 6 世紀後半に属するものと考えられる。

Ｃ．土坑

ＳＫ８０　調査区中央で検出した直径 90 ㎝～ 1.2m、深さ 50 ㎝前後を測る土坑である。ほぼ完形の土師器椀（136）が出土した。

ＳＫ２２１　SD202 の西側で検出した土坑群である。直径 50 ㎝～ 2m の円形あるいは不整円形を

第 14 図　SH252、SB164・194 ～ 196、SA192、SD212 実測図（1：100）



第 15 図　SK231・232・247、SE37 実測図（1：100）

呈する様々な土坑が複雑に重複している。深さは、深いもので 70 ㎝を測る。土師器壺（92）・椀（98）・甕（93 ～ 97）等が出土し、接合の結果、完形または完形ちかくまで復元できたものが多い。

ＳＫ２２２　調査区南端で検出した不定形な土坑である。底部は凸凹が激しく、最深部で深さ 50 ㎝を測る。これらから、多数の土坑が重複しているものと考えられ、須恵器杯（140）がほぼ完形で出土した。

ＳＫ２２３　調査区中央で検出した長辺 4.5m、短辺 3.5m の不整長方形を呈する。底部はほぼ平で、深さは 10 ㎝未満である。このため遺構はほとんど削平されているものと考えられ、本来の深さや平面形を示していない。したがって、竪穴住居の痕跡の可能性もあるが決め手がない。須恵器杯（141）が出土している。

ＳＫ２２５　調査区南東部で検出した幅 50 ～ 60 ㎝の溝状を呈する不定形なものである。深さは 15 ～ 20 ㎝の浅いものであるが、南東部は 30 ㎝とやや深くなり、別の遺構が重複する可能性もある。土師器壺（108）が、ほぼ完形で出土した。

ＳＫ２２６　調査区中央で検出した。長辺 1.7m、短辺 1.5m の長方形を呈する。検出面からの深さは 40 ㎝で、底部は平坦である。埋土は他のものと大きく異なり、検出面に酷似した濁黄色粘土である。土師器壺（106）が、ほぼ完形で出土した。

ＳＫ２２８　調査区中央で検出した。直径 1m ほどの土坑が多数重複していると考えられる複雑な平面形を呈する。しかし深さは、各所とも検出面から 40 ～ 50 ㎝で、比較的平坦である。SK229 出土のものと同一個体と考えられる酸化焼成の須恵器甕片が出土している。

ＳＫ２２９　調査区中央で検出した。長径 2m、短径 1m の楕円形を呈する。深さは、検出面から 70 ㎝を測る深いものである。SK228 出土のものと同一個体と考えられる酸化焼成の須恵器甕片が出土している。

ＳＫ２３１（第 15 図）　SD201 の西側で検出した長辺 4.2m、短辺 2m の菱形を呈する。深さは、北側が 50 ㎝、南側は 15 ㎝であるが、検出面の傾斜によるもので底部は平である。土坑中央が一辺 1m の方形状にさらに 20 ㎝深くなっており、この部分から土師器甕（100 ～ 102）・鉢（103）・高杯（104・105）

がまとまって出土した。甕は、ほぼ完形であるが、高杯は脚部のみで混入の可能性もある。整然と並べられた様子はなく､埋納とするに疑問も残る｡しかし、この地点ですでに湧水点に達しており、井戸として使用されていたものかもしれず、その場合これらの甕は、井戸に関わる祭祀関連遺物と考えられる。

ＳＫ２３２（第15図） SD201の底部で検出した。SD202とも重複するが前後関係は不明である。長辺1.2m、短辺1mの不整三角形を呈し、深さは南側で30㎝、北側で60㎝を測り、南から北へ傾斜している。土師器の壺（107）が横倒しの状態で出土した。拳大の石が2個、壺を固定するかのように配置されているが確証はない。他にも高杯等が出土しているが、完形のものはなくSK231の状況と酷似する。SK231と同様、井戸として機能していたものかも知れない。

ＳＫ２４７（第15図） 調査区南部、SK222の北側で検出した。長辺85㎝、短辺40㎝の隅丸不整方形を呈する小型の土坑である。深さは、検出面から10㎝程度の浅いものであるが、削平のため本来の深さを示していないものと考えられる。土坑中央部に位置する小穴は別遺構と考えられるが、南東部が直径20㎝の円形状にさらに20㎝深くなる。これがSK247以前の遺構なのか、一体のものなのかは判然としない。また北西隅は10㎝ほど浅くなり、その境から須恵器杯身（110）に蓋（109）を被せた状態で出土した。

ＳＫ２５８ SD201の西側で検出した。一辺3mの不整方形を呈し、深さ10㎝ほどで底部は平坦である。南壁の中央から小溝がSD201に向かってまっすぐに延びるが、本来はSD202に流れ込んでいたものと考えられる。竪穴住居の可能性もあるが、住居内には排水溝がないこともあり、一応土坑としておく。

ＳＫ２６０ 調査区北部で検出した長辺2m弱、短辺1.2mの楕円形を呈する土坑である。底部は平坦であるが、深さ10㎝未満しかなく、ほとんど削平されたものと考えられる。内面に赤色顔料が付着したミニチュアの鉢（138）が出土している。

Ｄ．井戸

ＳＥ３７（第15図）「哀園森」の南側で検出した。平面形は一辺1.1～1.2mの方形を呈する。深さは70㎝で､検出面から50㎝までは暗灰褐色粘土、それ以下は黒灰色粘土となり、豊かではないものの一応湧水点に達している。井戸枠等の施設は検出できず、素掘の井戸であったものと考えられる。遺物は少なく、土師器高杯や須恵器蓋等の小片が出土したのみである。

Ｅ．溝

ＳＤ８ 調査区西端から東西に延びる溝で、東端はSD71との重複のため不明確である。SD71第Ⅰ層とは時期差がないため、それに流し込む目的で掘られた可能性もある。幅50～70㎝､深さ15～20㎝である。

ＳＤ２０２（第16図） 調査区南端で検出した幅2m、深さ30～40㎝の蛇行する溝である。南端は調査区外へ続き、SD201と重複しているため北端は不明である。SD201の東岸にわずかに古墳時代の層が残る箇所があるため、ほぼSD201と同じ経路をたどるものと考えられ、蛇行することから自然流水路であるものと考えられる。

SD202南端近くで井堰が検出された。SD202の比較的狭く浅い場所を選び、砂混じりの暗灰色粘土を堤防状に積み上げる。その側面には、矢板（194・196・197）を打ち込み補強している。矢板は、板材の転用であり、先端を杭状に加工したもの（197）もある。最も深いもので底から30㎝ほど打ち込まれている。頂上には柱材を転用した丸太（218）を置いて保護し、さらに30㎝間隔で杭（205～208）を打ち込んで補強している。また、堤防状に積み上げた土の中から、ほぼ完形の高杯（161）が横倒しの状態で出土した。高杯は、溝底部に接していることから、井堰構築開始時に埋納されたものと考えられる。

井堰の上流部には、様々な建築部材や土器が大量に投棄されている。これらの部材は、竪穴住居のものと掘立柱建物のものが混在し、焼けたものも散見される。他に導水施設等は検出されないことから、この井堰は、単に水位を上げ、水汲み場とするためのものと考えるのが妥当と思われる。しかし、この狭い流路に投棄された部材と一体になって、梁的な機能を果たしていた可能性も捨て難い。

ＳＤ２０５ 調査区東部で検出した。SD206を掘り直したものと考えられる。北端はSD201に切られ不明であるが、10m南下した地点で「ぬか塚」

第 16 図　SD202 遺物出土状況図（1：40）

を意識するかのように西へ弱く屈曲する。深さは10 ～ 20 ㎝であるが、南端は徐々に浅くなり不明瞭になって消滅する。土師器高杯、須恵器甕等の小片が出土している。

ＳＤ２０６　SD205 に先行する溝で、やはり「ぬか塚」を意識するかのように西へ屈曲する。幅、深さとも SD205 と同様である。

ＳＤ２０８　調査区北端を若干蛇行しながら東西に延びる幅 1m、深さ 20 ㎝の溝である。東端は調査区外へ延び、西端はＹ字に分かれ、一方は調査区外へ、他方は西進するほどその幅を減じ消滅する。時期は異なるものの SD203 とほぼ併行することや、埋土に砂を含むことから、自然流路である可能性が高いものと考えられる。土師器椀・壺、須恵器杯等比較的多くの遺物が出土し、6 世紀後半に属するものと考えられる。

ＳＤ２０９（第 34 図）　SB196 の東側梁行に沿って南下する溝である。隣接する SB283 の西側梁行にも沿うが、方向がやや異なり、同時期の SD210 が SB283 柱穴と重複することから、SB283 より先行するものである。SB196 に沿う区間は幅 50 ～ 60 ㎝、その後はやや狭くなり幅 40 ㎝、南端は SK223 と合体している。深さは、全体に 10 ㎝未満の浅いものである。SB196、SK223 の時期差は少なく、この溝と土坑は SB196 に関連する遺構であるものと考えられる。

ＳＤ２１０（第 34 図）　SD209 の東側 6m をほぼ平行する溝である。重複する SB283 梁行に切られ、方向もやや異なることから、これに先行するものと考えられる。その形態は SD209 に酷似するため、それと同じ機能をもつもので、前後関係にあるものと考えられる。幅 30 ㎝、深さは 15 ㎝程度である。

ＳＤ２１３　調査区東端で検出した弧状を呈する溝である。両端が調査区外のため全体の形態は不明であるが、直径 10m の円形に巡るものと推測される。その場合、古墳の周溝の可能性が高くなり、「ぬか塚」の陪塚と考えたいが確証はない。幅 0.5 ～ 1.5m と一定でなく、深さ 10 ～ 15 ㎝である。

ＳＤ２１４　調査区東端を南北に延び、両端は調査区外へ続く。幅 1m 前後、深さ 40 ㎝程度で、南端は若干東へ向きを変えている。土師器片、須恵器片が出土し、6 世紀に属するものと考えられる。

ＳＤ２５７　SD201 の西側で検出した。幅 50 ㎝、深さ 20 ㎝ほどの小溝であるが、北端は幅 1.3m にまで広がる。土坑が重複するのかもしれないが、深さに変化がないため一連のものと考える。ミニチュアの壺（137）が出土している。

Ｇ．ぬか塚

調査区東部に直径 12m、高さ 3m の草生地として残存している。この盛土は現状で保存されるため、調査対象外となる。ぬか塚周辺は近世の粘土採集により激しく撹乱されているが、円墳という予想に反し前方後円墳であることがわかった。前方部が短い「帆立貝式」に属するものである。墳長 36m、前方部長 10m・幅約 16m、くびれ幅 11m、周溝を含めた総長は 48m と推定される。後円部は長 27m、幅 25m に復元でき、やや楕円形を呈するようである。以上により、現況で残るぬか塚は、周囲をかなり土取りされており、本来の平面形を示していない。

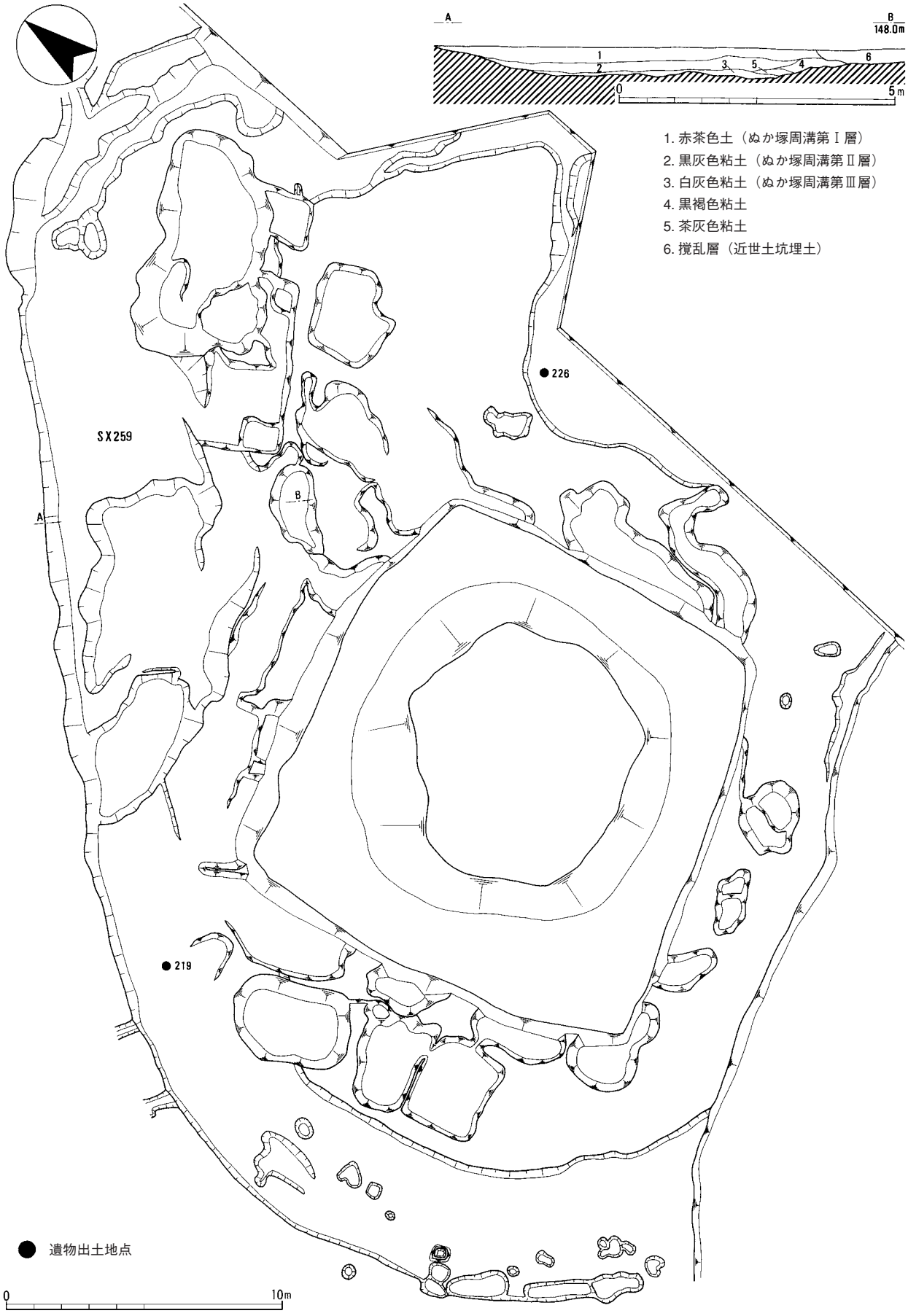
ＳＸ２５９（第 17 図）　ぬか塚に伴う周溝である。東側は調査区外、南側は削平をうけ消滅しているため、全体の形態は不明であるが、盾形を呈するものと考えられる。内側斜面は、前述したように激しく土取りされ、検出不可能な箇所も多い。前方部東側と後円部南西側は比較的明瞭に検出でき、周溝幅は、後円部で 5m、前方部端で 7m を測る。深さは、最深部でも検出面から 50 ㎝程度、平均 30 ㎝前後で、後円部に至るほど削平のため浅くなり、痕跡程度になる。埋土は 3 層に分かれ、最上層の第Ⅰ層には飛鳥時代の須恵器を含む。したがって、周溝は少なくとも 7 世紀末までは残存していたものと考えられる。後円部付近の周溝底部に接して土師器甕(219)、くびれ部から須恵器高杯（226）が出土した。これらは、ぬか塚築造時にちかい遺物と考えられる。

４．飛鳥時代の遺構

竪穴住居 2 棟、掘立柱建物 11 棟の他、土坑、井戸等を検出した。特に調査区東部で検出した桁行の長い建物が注目される。これらの遺構は、すべて SD201 より西側で検出された。なお、この溝からは整理箱 100 箱にちかい大量の遺物が出土している。

Ａ．竪穴住居

ＳＨ２５５（第 20 図）　調査区東部で検出した。



第 17 図　ぬか塚平面図（1：200）、周溝断面図（1：100）

SH256 を北側に 70 ㎝ほど拡大して建て替えたものである。ほとんど周溝のみの検出で、長辺 5m、短辺 4m の長方形を呈する。南隅から SD207 が延び、住居外への排水溝と考えられる。主柱穴、焼土は検出できなかったが、北東壁中央から小溝が外へ 50 ㎝ほど延びる。これを竈の煙道と考えられなくもない。

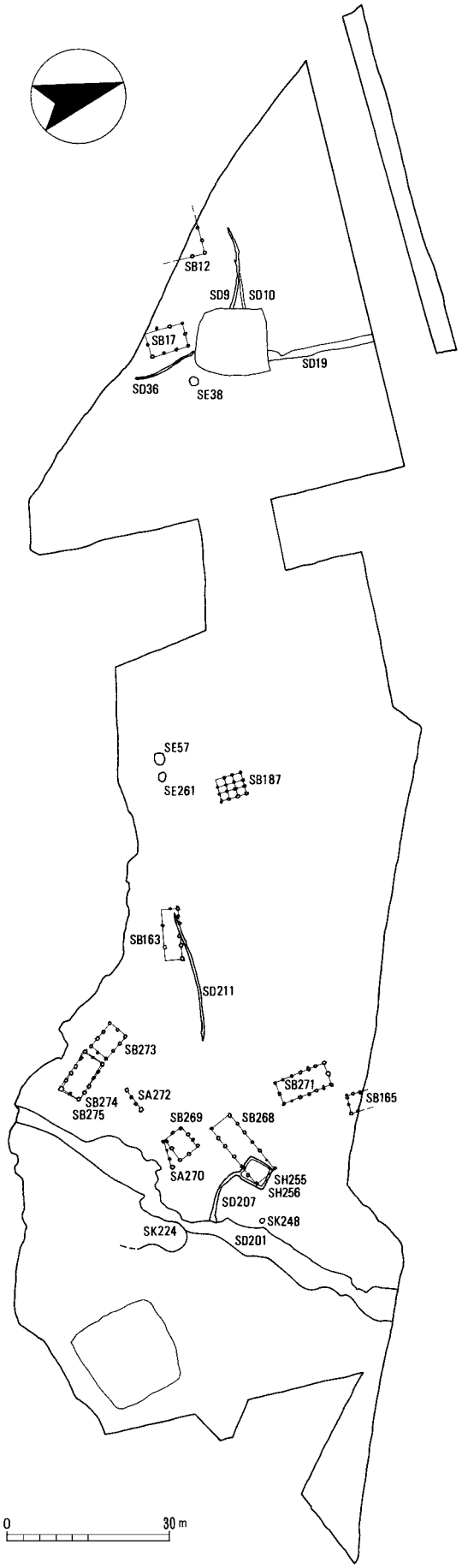
ＳＨ２５６（第 20 図） SH255 に先行する竪穴住居である。長辺 5m、短辺 3.5m の長方形を呈する。竈の位置、住居外への排水溝は SH255 と共通するものと考えられる。

Ｂ．掘立柱建物

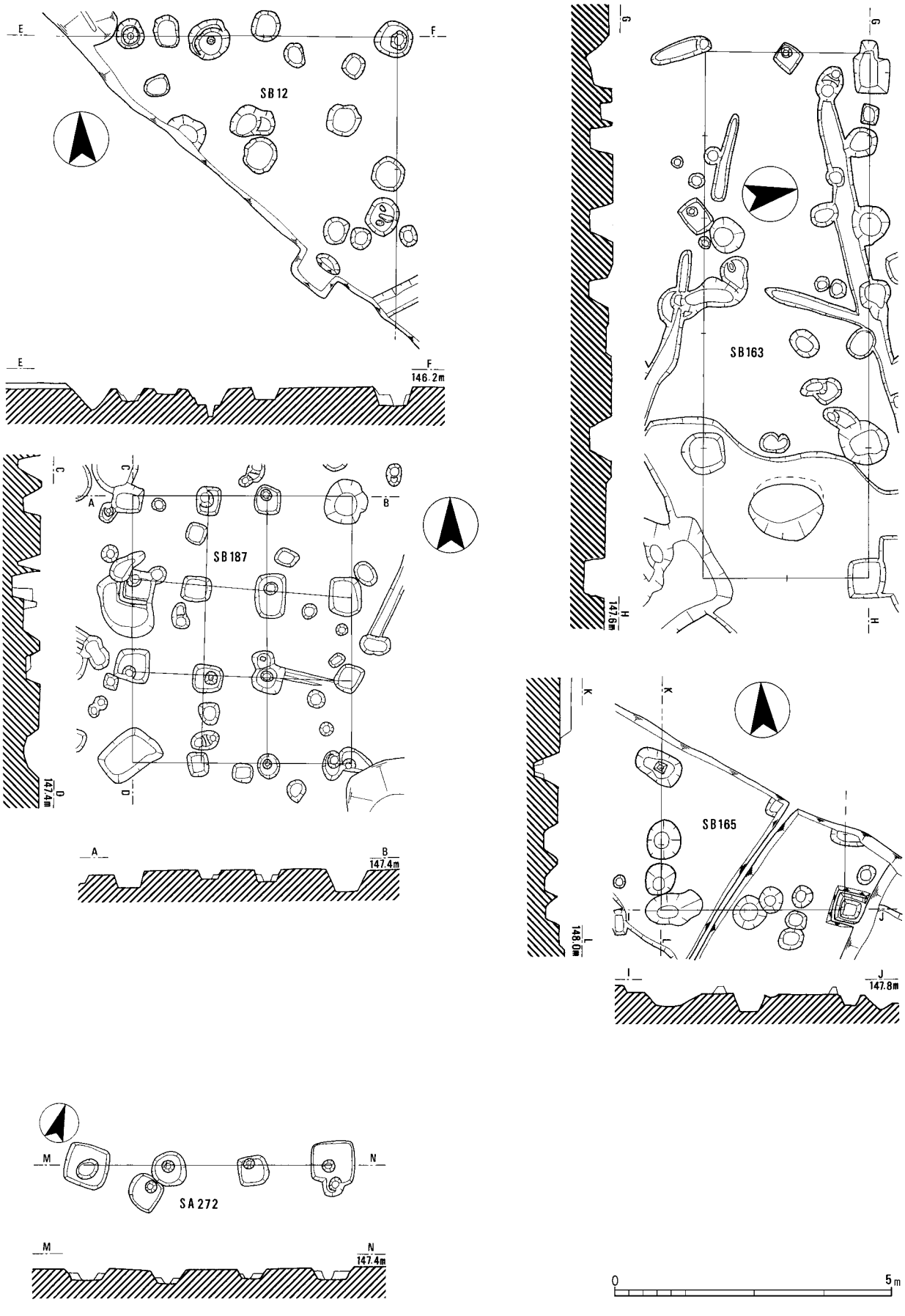
ＳＢ１２（第 19 図） 時期決定の根拠に乏しいが、SB17 と方向が揃うため、この時代の遺構とした。調査区端での検出のため全体の規模は不明であるが、3 間以上×２間以上の東西棟に仮定する。棟方向は座標東、柱間は桁行、梁行とも 2.4m の等間である。柱掘形は直径 50 ～ 60 ㎝の円形を呈し、直径 25 ㎝の柱痕跡を確認できたものもある。

ＳＢ１７（第 24 図）「哀園森」の南側で検出した 3 間×２間の南北棟である。棟方向はおよそ真北、柱掘形は一辺 60 ～ 70 ㎝の長方形を呈するもののほか、50 ㎝の不整円形を呈するものもあり、一様でない。深さも 50 ㎝を測るものから 30 ㎝程度のものまで様々であるが、方形を呈するものはすべて深いものである。直径 20 ㎝の柱痕跡を検出できたものもあり、3 基の柱穴には柱が残存していた。南東隅の柱がもっとも残存がよく、直径 20 ㎝を測り、掘形の南端に立てられていた。柱間は不等間であるが、桁行は中央部のみ長く 2.4m、両端は 2.25m である。SB12 と方向を揃え、また、遠く離れるが SB187 とも棟方向は一致する。さらに、約 6m 離れた方形井戸 SE38 の掘形の方向ともほぼ揃う。このため、SE38 はこの建物に付属する施設と考えられる。したがって、出土した須恵器片は 6 世紀後半を示すものの、この時期とした。

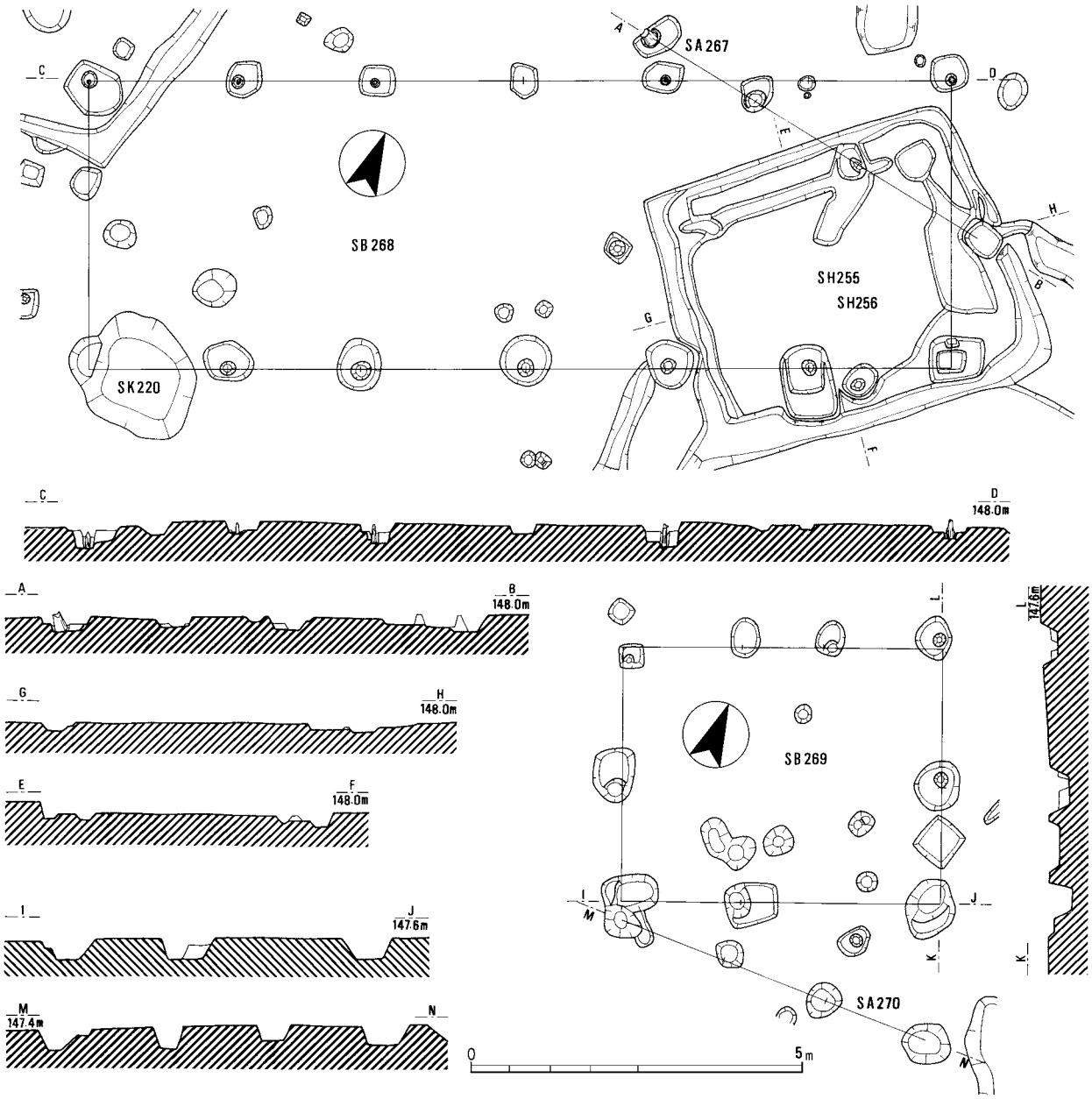
ＳＢ１６３（第 19 図） 調査区中央で検出した 5 間×２間の東西棟としたが、建物とするには疑問の多いものである。南側桁行の柱穴は検出できないものが多く、東側妻柱も検出できない。柱間も不等間であり、北側桁行のみの柱列と考えるべきかもしれない。柱掘形が 60 ～ 80 ㎝の方形または円形の大型



第 18 図　飛鳥時代 遺構配置図（1：1,200）



第 19 図　SB12・163・165・187，SA272 実測図（1：100）



第 20 図　SH255・256、SB268・269、SA267・270、SK220 実測図（1：100）

のものであるため、建物と推定した。

ＳＢ１６５（第 19 図）　調査区北端で検出した。全体の規模は不明であるが、2 間以上×２間の南北棟と考えられる。SD303 埋土上での検出のため、掘形を正確に検出できず、一辺 50 ㎝の方形を呈していたのかもしれない。

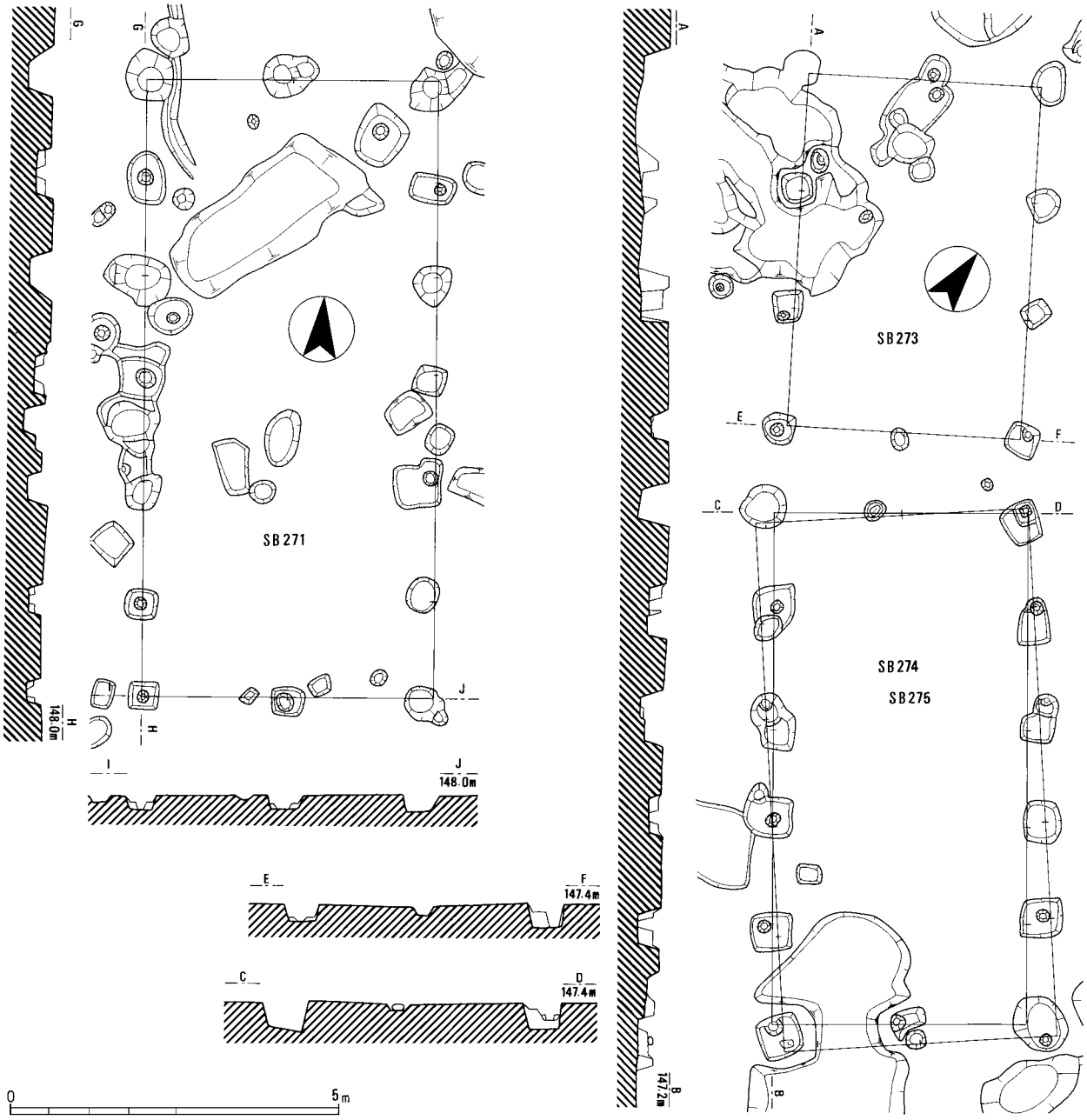
ＳＢ１８７（第 19 図）　調査区中央で検出した総柱の南北棟である。棟方向は、およそ真北である。時期決定の根拠に乏しいが、付近の奈良時代の建物と大きく方向を異にし、遠く離れてはいるものの SB17 と方向が揃うためこの時期とした。柱間は桁行、梁行とも不等間で、しかも相対する柱間も一致しない。柱掘形は一辺 50 ～ 60 ㎝の方形を呈し、柱痕跡の直径は 25 ㎝である。束柱の 1 基のみで根石を検出できた。

ＳＢ２６８（第 20 図）　調査区北東部で検出した 6 間×２間の桁行の長い東西棟である。SB269、SA272 と方向をほぼ揃えて建てられている。出土遺物からは、この時期とする根拠に乏しいが、桁行の長い形態が SB271 等と似るためによる。妻柱が両方とも検出できず、梁行 1 間の可能性もあるが、一応 2 間としておく。掘形は円形に近いものもあるが、一辺 40 ㎝の方形を基本とするようである。北側桁行では、比較的よく柱が残存している。これをもとに柱間を計測すると、2.25m ＋ 2.05m ＋ 2.25m

＋2.15m ＋2.15m ＋2.15m となり不等間となる。南側では柱痕跡をもとに計測すると北側と異なり、柱間寸法は北と南で異なっていたようである。柱は、直径 10 ㎝程度であるが、掘形断面の観察により、もとは 16 ㎝程度のものであったことがわかる。掘形の底は平坦でなく、東側をやや深く掘り下げて、その西端に柱を据えているものが多い。

ＳＢ２６９（第 20 図） SB268 の南側で検出した。時期決定の根拠に乏しいが、SB268 と方向をほぼ揃えるため、この時期とした。桁行の柱間が北側と南側で異なり、掘形も南側が一辺 50 ～ 70 ㎝の不整方形を呈する大型のものに対して、北側は一辺 40 ～ 60 ㎝と小さい。このため、建物とするに疑問も残る。柱痕跡を確認できたものも多いが、その大きさは直径 20 ～ 40 ㎝と様々である。南側桁行の延長上に SA272 が位置する。

ＳＢ２７１（第 21 図） 調査区北部で検出した 6 間× 2 間の桁行の長い建物である。柱掘形は、形の乱れたものもあり、一辺 40 ～ 60 ㎝の方形を呈するものと考えられるが、その規模は一様でない。直径 20 ㎝の柱痕跡が確認できたものも多い。桁行の柱間は 1.5m を基本とするが、不等間である。



第 21 図　SB271・273 ～ 275 実測図（1：100）

ＳＢ２７３（第21図） 調査区南東部で検出した3間×2間の南北棟である。SB274の北に近接して直列に並ぶため、この時期とした。柱掘形はSB274よりやや小さく、一辺50㎝の方形を呈する。直径20㎝の柱痕跡を検出できたものもある。柱間は、桁行、梁行とも1.8mの等間である。

ＳＢ２７４（第21図） 調査区南東部で検出した5間×2間の桁行の長い建物で、SB271と似るためこの時期とした。SB275とは建て替えの関係にあり、それより先行するものである。柱掘形は不整形なものもあるが、一辺60㎝の方形を呈し、直径20㎝の柱痕跡を確認できたものも多い。北側の妻柱が検出できず、SB273と一体の長大な建物とする可能性もあるが、2棟に分けた方が柱通り、柱間ともに素直であるため、近接して2棟並ぶものとした。

ＳＢ２７５（第21図） 調査区南東部で検出した。SB274とは建て替えの関係にあるものと考えられ、それより後出のものである。5間×2間の桁行の長い建物で、柱掘形はSB274より小さく直径40㎝程度の円形を呈する。妻柱の掘形はさらに小さく､深さも浅い。北側のものは、やや東に寄って検出された。すべての柱穴が、SB274と重複するため検出できなかったものもあるが、根石を伴うものが2基認められた。

C．柱列

ＳＡ２７０（第20図） SB269の南側で3間分を検出した柱列である。柱間は1.65mの等間で、重複関係によりSB269より後出のものであることがわかる。SB269を建て替えた建物の一部である可能性があり、また、遠く離れてはいるものの、SB187と方向を揃えるためこの時期とした。

ＳＡ２７２（第19図） 調査区東部で3間分を検出した柱列である。柱間は1.5mの等間、掘形は方形を呈する大型のもので、特に両端のものは一辺80㎝を測る。すべての柱穴で柱痕跡を確認できた。SB269の南側桁行の延長上に位置し、その距離は約7mである。この柱列が掘立柱建物の一部であるとして、SB269と同規模の建物が2棟並列していたと考えたほうがよいかもしれない。このため、出土遺物は皆無であるがこの時期とした。

D．土坑

ＳＫ２２４ SD201の東側に広がる土坑である。深さは北側で40㎝を測るが、南側は浅くなり不明瞭である。SD201との識別が難しく、あるいはそれと一体のものかもしれない。小さくみた場合は、直径4mの不整円形を呈するが、SD201の西側にも浅いくぼみがあり、これを含めると一辺13mの方形土坑とみることもできる。

ＳＫ２４８（第22図） SD201の西側で検出した直径1mの円形を呈する土坑である。壁は、検出面から50㎝までは緩やかに傾斜するが、その後は直径50㎝の円形を呈し、壁は直角になり、80㎝で底に至る。壁の変換点から底までには、直径10～20㎝の石が雑然と投げ込まれた様な状態で詰まっていた。形態や湧水点に達していることから、井戸としたほうがよいかもしれない。遺物は、板状の木片の他に土師器、須恵器の小片が出土したのみである。

E．井戸

ＳＥ３８（第22図）「哀園森」の南東で検出した。平面形は、一辺1.7mの正方形を呈し、深さは1mほどである。井戸とするには浅いものであるが、検出面下60㎝で明灰褐色粘土が黒灰色粘土に変化することから、弱いながらも湧水点に達しているものと考えられる。また、掘形の方向がほぼ一致するSB17と共存したものと考えられる。

ＳＥ５７（第22図） 第一次調査区東端で検出した。掘形は一辺約2mの方形を呈する。埋土の状況では、掘形と井戸本体の区別ができなかった。掘形の南東隅からは板片が出土した。枠板を抜き取る際に残されたものと考えられる。底部には4㎝ほどの小石が、掘形を約5㎝掘り窪めて敷かれている。その範囲は一辺1.3mの方形を呈し、井戸本体の内測を表すものと考えられる。以上から、井戸本体は比較的掘形いっぱいの大きさに設定され、井戸枠は木製で、縦板組であったものと考えられる。

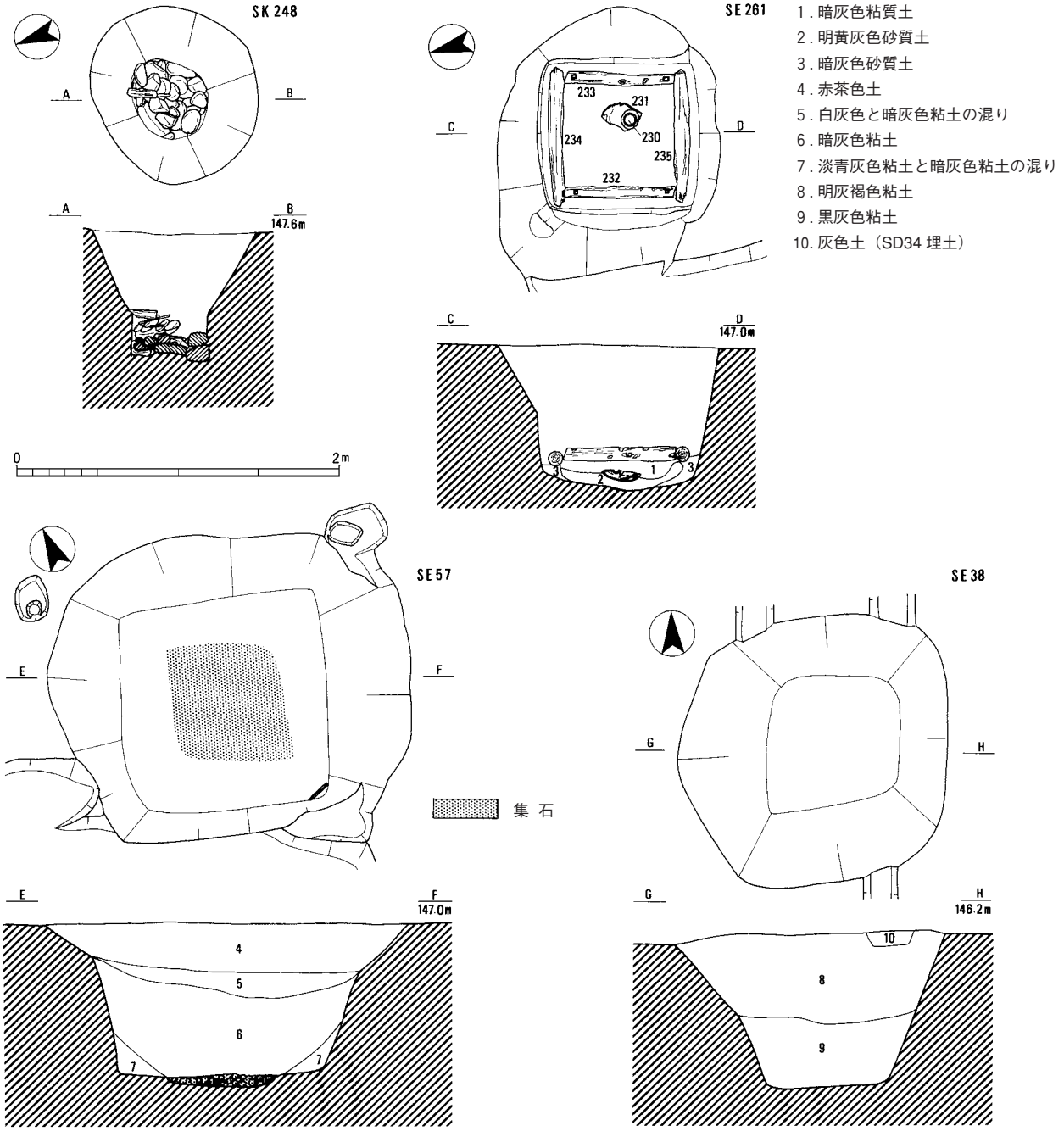
ＳＥ２６１（第22図） SE57の東側3mで検出した。掘形は直径1.4～1.6mの不整方形を呈し、深さは検出面から90㎝を測る。底には、直径8㎝の丸太材（232～235）が、正方形に組まれていた。234・235の枘穴に232・233の枘を差し込むかたちで組まれており、一辺70㎝前後の正方形を形成している。さらに232・233には、上に差し込む枘穴も設けられており、これらの材が井戸枠の基底部

であったことを示している。枠板内から土師器杯(230)、鉢（231）が出土したが、完形ではなく埋納とは考えられない。

F．溝

ＳＤ９　「哀園森」付近で検出した。幅60㎝、深さ10㎝前後の溝である。東端は「哀園森」のため確認できず、西端は徐々にその幅を減じ消滅している。全体として緩やかな弧を描いており、SD36と一連のものである可能性も大きい。SD10と交差しており、それより後出のものである。

ＳＤ１０　「哀園森」付近で検出した。幅40㎝、深さ10㎝程度で、東端は「哀園森」のため確認できず、西端は削平のため消滅しているものと考えられる。SD9と交差し、埋土の観察ではそれより先行するものであるが、平安末～鎌倉時代のSD34と共に奈良時代の建物SB15を取り囲む様な配置であるため、これらの時期決定には疑問も残る。SD9に切られることや、SB15と若干方向を異にすること、SD34から鎌倉時代の遺物が出土していること等から、一応ここではSB15との関連は無いものとしておく。



第22図　SK248、SE38・57・261 実測図（1：40）

ＳＤ１９　調査区中央部をＮ６°Ｅの方向で南下する溝で、北端は上野市遺跡調査会の調査区へ続き、南端は「哀園森」近くで不鮮明になり、消滅するものと考えられる。幅1.5m、深さ15㎝で、東に約6m離れて奈良時代のSD20が並走する。両者は同様な規模であるが、方向が約2°異なり、一組のものとは考え難い。

ＳＤ３６（第８図）「哀園森」直下から若干蛇行しながら南に延びる溝である。幅40㎝前後、深さ10㎝程度で、北端は「哀園森」のため確認できず、南端は奈良時代のSD58に切られる。SD9と一連の溝である可能性も大きい。

ＳＤ２０１　調査区東部で検出した南北に延びる溝である。その大部分を古墳時代の自然流水路SD202と重複しているため、正確な幅、深さを検出できなかった。しかし、調査区南端近くでSD202と分かれる箇所があり、幅2m、深さ40㎝程度を測る。形態は直線的で、深さも一定しており、人工的な溝であることがわかる。この溝を境にして東側からは飛鳥時代の遺構が検出されないことから、当時代の集落の東側を限る溝であるものと考えられる。SD202と大半が重複することは、その痕跡を残す窪地を利用して掘削されたためと推測される。この溝からは整理箱100箱以上の大量の遺物が出土し、その大半は土師器・須恵器の杯・蓋である。

ＳＤ２０７　SH255・256の排水溝と考えられる。東端はSD201と重複し、SD201へ流れ込むように思われるが、確証はない。幅60㎝前後、深さ20㎝ほどである。

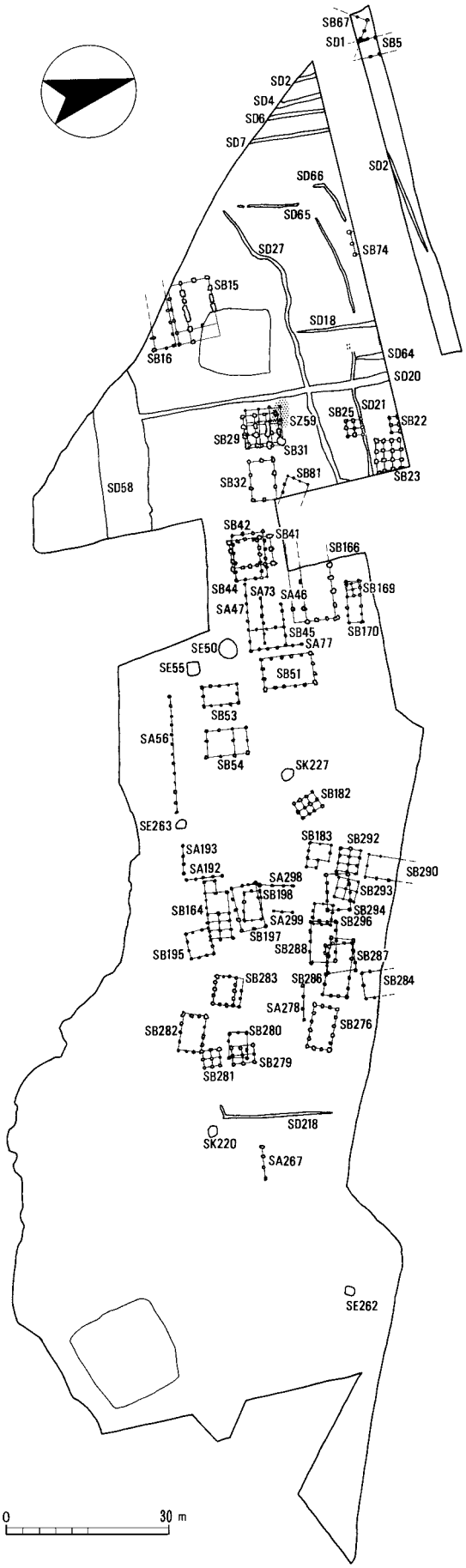
ＳＤ２１１　調査区中央で検出した、東西に延びる溝である。東端を延長すると奈良時代のSD218に至り、両者は同一のものかもしれず、時期決定に疑問も残る。幅40㎝、深さは10㎝程度の規模である。

５．奈良時代の遺構

掘立柱建物43棟、柱列11条、井戸４基等を検出した。特にSB166を中心に規則的に配置された建物・倉庫の一群が注目され、当遺跡が最も盛行する時期である。

Ａ．掘立柱建物

ＳＢ５（第30図）　調査区北西端で検出した。上



第23図　奈良時代 遺構配置図（1：1,200）

野市遺跡調査会の調査結果[18]を合わせると2間×2間の南北棟と考えられる。柱掘形は、一辺40～60㎝の方形を呈するが、直径30㎝の円形のものもある。柱痕跡の直径は20㎝であるが、北側妻柱では検出できず、掘形が他のものより極端に小さいことから、柱痕跡のみを検出したものかも知れない。SB15を中心とする一群と方向を揃えるため、この時期とした。

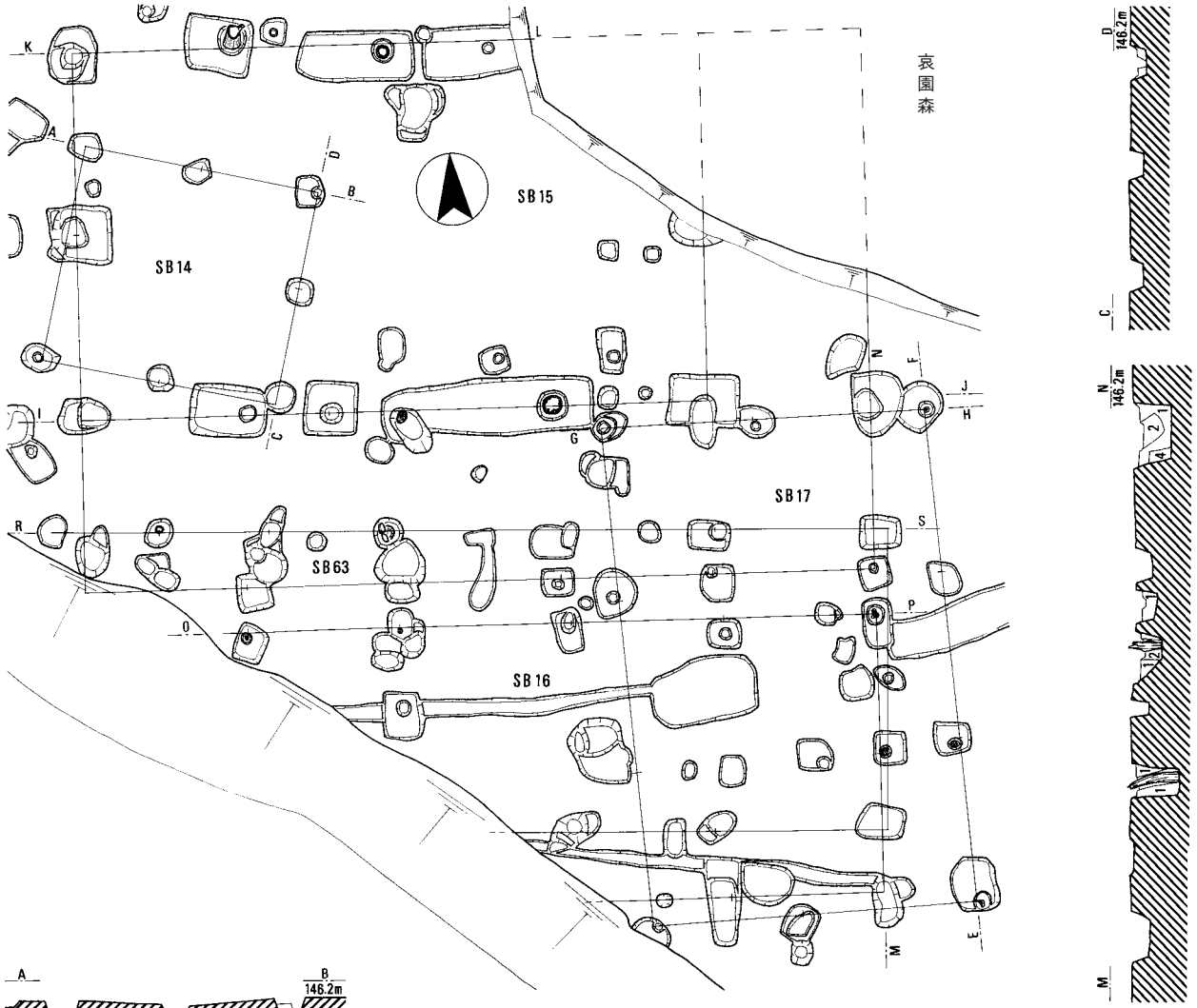
ＳＢ１５（第24図）「哀園森」の直下で検出した2面庇付きの東西棟である。桁行は4間が基本と考えられるが、南側桁行の西から2間目の中央にも柱があり、これを含め5間とすると南北で柱間が異なる変則的建物となる。梁行は2間で、北東部は「哀園森」の下になり調査不可能である。柱掘形は、一辺70㎝～1mの方形または長方形を呈する大型のもので、一部布掘になるものもある。南西隅の掘形のみ50～70㎝の楕円形を呈し、他のものより小さく形も乱れたものである。柱が残存するものがあり、その直径は20～30㎝の太いものである。また、抜き取り痕跡は、いずれも南側に抜き取られたことを示している。東面庇の柱掘形は、直径70㎝の不整円形を呈するもので、その規模は身舎のものと同様だが、形の乱れたものとなっている。南面庇の柱掘形は、一辺45㎝の方形を呈し、規模は小さいが平面形は整ったものである。東面庇の柱も身舎と同規模のものと考えられるが、南面庇の柱は、柱痕跡から推定すると直径15㎝ほどのものである。埋土は、黄色粘土と暗紫色粘土がモザイク状に入り混じったもので、当調査区の他の柱穴埋土と比べ異質なものである。深さは、検出面から60㎝以上を測る深いものであるが、南面庇では30㎝と浅い。南面庇柱列の南側に、柱の芯芯で測って0.6m離れSB16が位置する。両者は方向、柱通りを揃えて非常に接近して建てられている。掘形が接するほど近接し、疑問もあるが、両者が並立していた可能性も大きい。

ＳＢ１６（24図） SB15の南側に柱通りを揃えて検出された東西棟である。北側桁行は、SB15の南面柱筋と0.6m、身舎南側桁行とは丁度3.0m離れる。東側梁行は、SB15の東面庇に揃えており、西側梁行はすでに削平されているが、SB15の西側梁行と揃えるものと考えられ、全体の規模は5間×2間と考えられる。柱掘形はSB15より小さく一辺40㎝の方形を呈し、布掘も認められない。柱が残存する柱穴が4基あり、その直径は10～20㎝程度のものである。そのうち2基は、掘形から30㎝も沈下していた。また、南側へ大きく傾斜しているものもある。

ＳＢ２２（25図） 調査区北端で検出した2間×2間の総柱の東西棟である。北側桁行は調査区外であるが上野市遺跡調査会の調査結果[19]による。南に約1.5m離れたSB25とは同規模で、柱通りも揃えて建てられ、さらに東側梁行はSB29とも揃う。柱掘形は一辺70㎝～1mの方形または不整方形で、形、規模ともに一様でない。3基の柱穴で柱が残存しており、その直径は20～25㎝を測る。柱穴の深さは40～50㎝であるが、束柱は浅く30㎝である。柱間は桁行が不等間、梁行は1.35mの等間である。

ＳＢ２３（第25図） 調査区北端で検出した総柱の東西棟である。調査区端での検出ではあるが、上野市遺跡調査会の調査結果[20]によると梁行は3間である。しかし、桁行については調査区外へ延び、3間以上になる可能性がある。北側桁行はSB22の妻柱列と揃えて建てられているが、方向は3°ほど異なる。柱掘形は一辺70～80㎝の方形を呈する大型のもので、深さは40～50㎝を測り、束柱、側柱とも同じ深さである。8基の柱穴には柱が残存しており、その直径は15～25㎝で、掘形より10㎝ほど沈下しているものもある。南東隅の柱穴では、柱痕跡さえも検出できず、掘形断面の観察でも平行な堆積が認められるのみであった。しかし、掘形の東端が5㎝ほど深くなっており、この位置に柱があったものと考えられる。柱を抜き取る際に、掘形内の埋土をすべて取り除いたためか、疑問を残す結果となった。柱間は桁行が1.95mの等間、梁行は不等間である。土師器甕（1000）が出土している。

ＳＢ２５（第25図） 調査区北部で検出した2間×2間の総柱の東西棟である。柱掘形は一辺70～80㎝の方形を呈し、ほとんどの柱穴に柱が残存していた。柱は直径20～28㎝で、掘形より10㎝ほど沈下しているものもある。一部の柱掘形の底には段が設けられ、深い部分に柱を据えている。深さは50～60㎝であるが、束柱は20㎝で極端に浅い。柱間は桁行が不等間、梁行は1.35mの等間である。SB22・29と東側梁行を揃え、SB22とは同規模で、



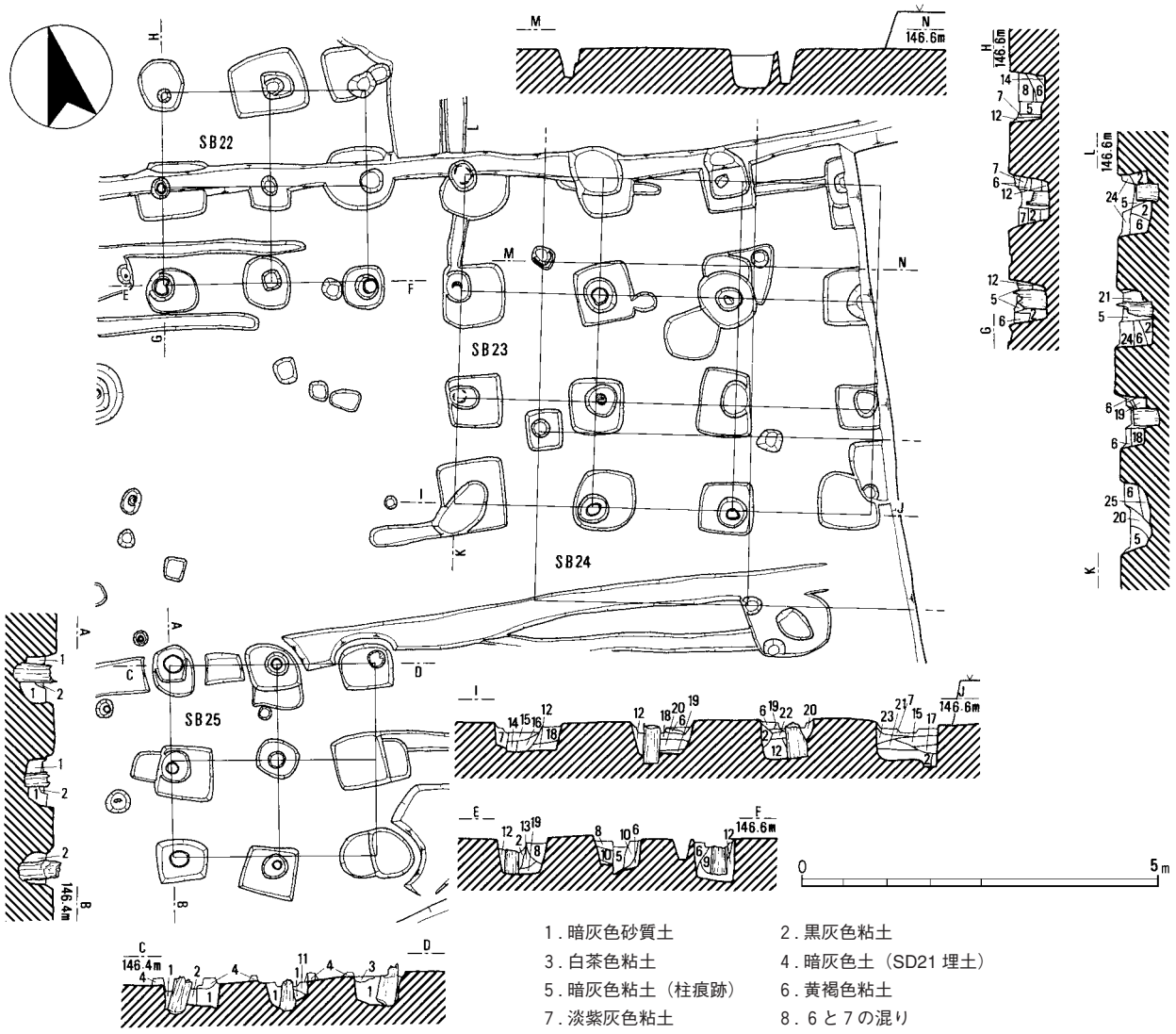
第 24 図　SB14 ～ 17・63 実測図（1：100）

他の柱通りも揃えている。

ＳＢ２９（第 26 図）「哀園森」の東側で検出した 3 間×３間の総柱の南北棟である。柱掘形は 1 ～ 1.4m の不整方形を呈する大型のもので、深さも検出面から 60 ㎝を測る非常に深いものである。布掘状に連結する柱穴が 4 ヶ所ある。連結部は掘形より細い溝状で、深さも 20 ㎝ほど浅い。柱痕跡は、ほとんどの柱穴が SB31 と重複することも一因して検出できなかった。柱間は、桁行が 2.1m、梁行が 1.8m の等間である。東側桁行の延長上に SB22・25 の東側梁行が位置する。墨書土器（1002、1003）が出土し、「 大井 」、「井買入」（?）と記されている。

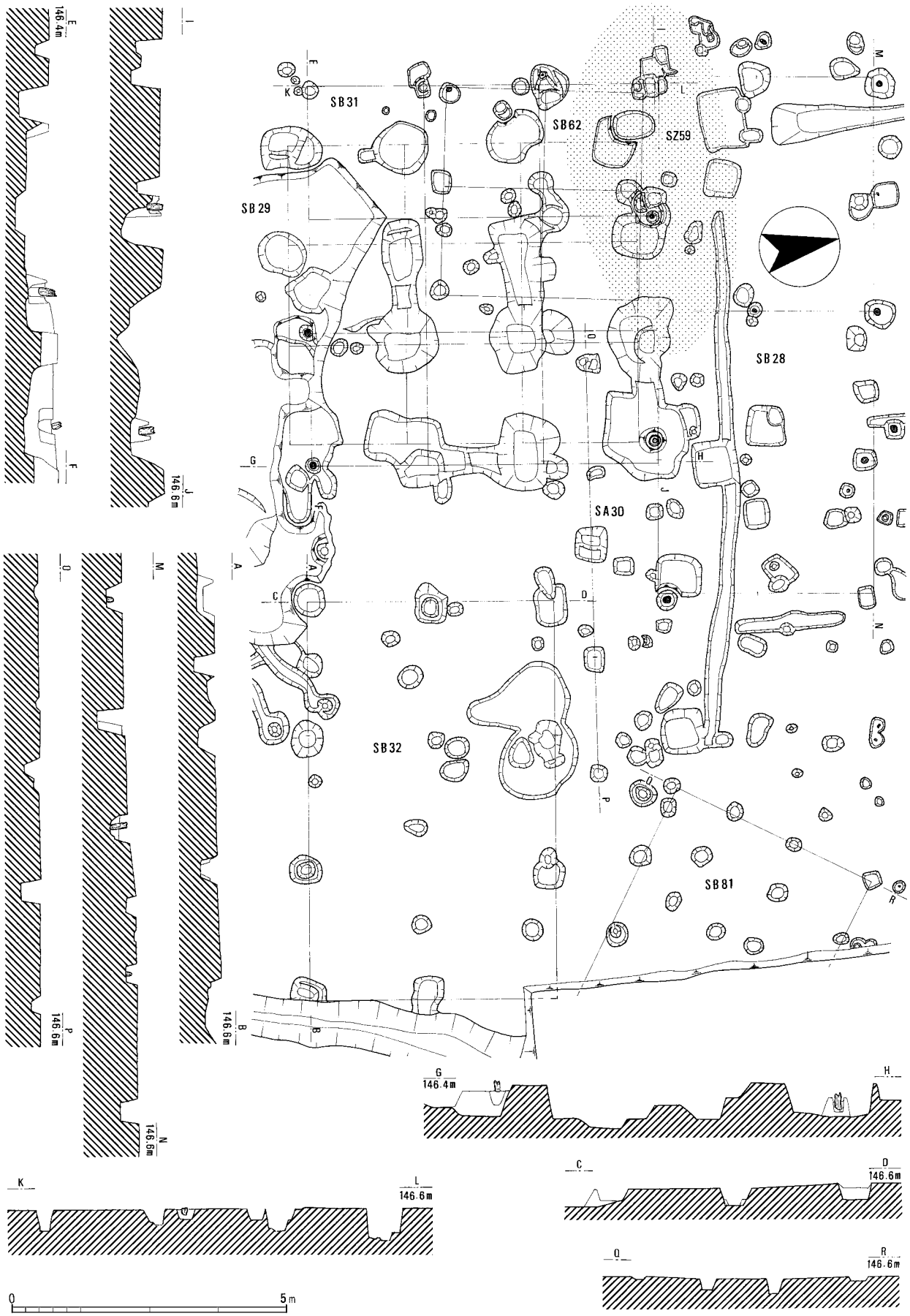
ＳＢ３１（第 26 図）「哀園森」の東側で検出した 3 間×３間の総柱の東西棟である。柱掘形は直径 30 ㎝の円形を呈する小型のものと考えられるが、SB29・SB62・SD33 と重複するものがほとんどであるため、掘形の検出が不十分であったものも多い。柱が残存するものが多くあり、その直径は 20 ㎝ほどのものである。柱間は、梁行は 2.1m の等間、桁行は 2.4m であるが、中央部のみ 2.1m と狭い。SB29 を東西棟に変更して建て替えたものと考えられ、SB32 と南側桁行を揃える。

ＳＢ３２（第 26 図） 調査区中央で検出した 3 間×２間の東西棟である。柱掘形は、形の乱れたものもあるが、一辺 50 ㎝の方形を呈するもので、西側に柱を抜き取られた痕跡を検出できたものもある。柱



1. 暗灰色砂質土　2. 黒灰色粘土
3. 白茶色粘土　4. 暗灰色土（SD21 埋土）
5. 暗灰色粘土（柱痕跡）　6. 黄褐色粘土
7. 淡紫灰色粘土　8. 6 と 7 の混り
9. 暗灰色粘土　10. 暗灰色粘土　11. 白灰色砂質土　12. 青灰色粘土　13. 10 と 14 の混り　14. 灰白色粘土
15. 淡灰色粘土　16. 14 と 15 の混り　17. 灰色粘土　18. 6 と 17 の混り　19. 青白色粘土　20. 6 と 19 の混り
21. 2 と 19 の混り　22. 淡青灰砂質土　23. 6 と 15 の混り　24. 灰黄色粘土　25. 2 と 24 の混り

第 25 図　SB22 ～ 25 実測図（1：100）



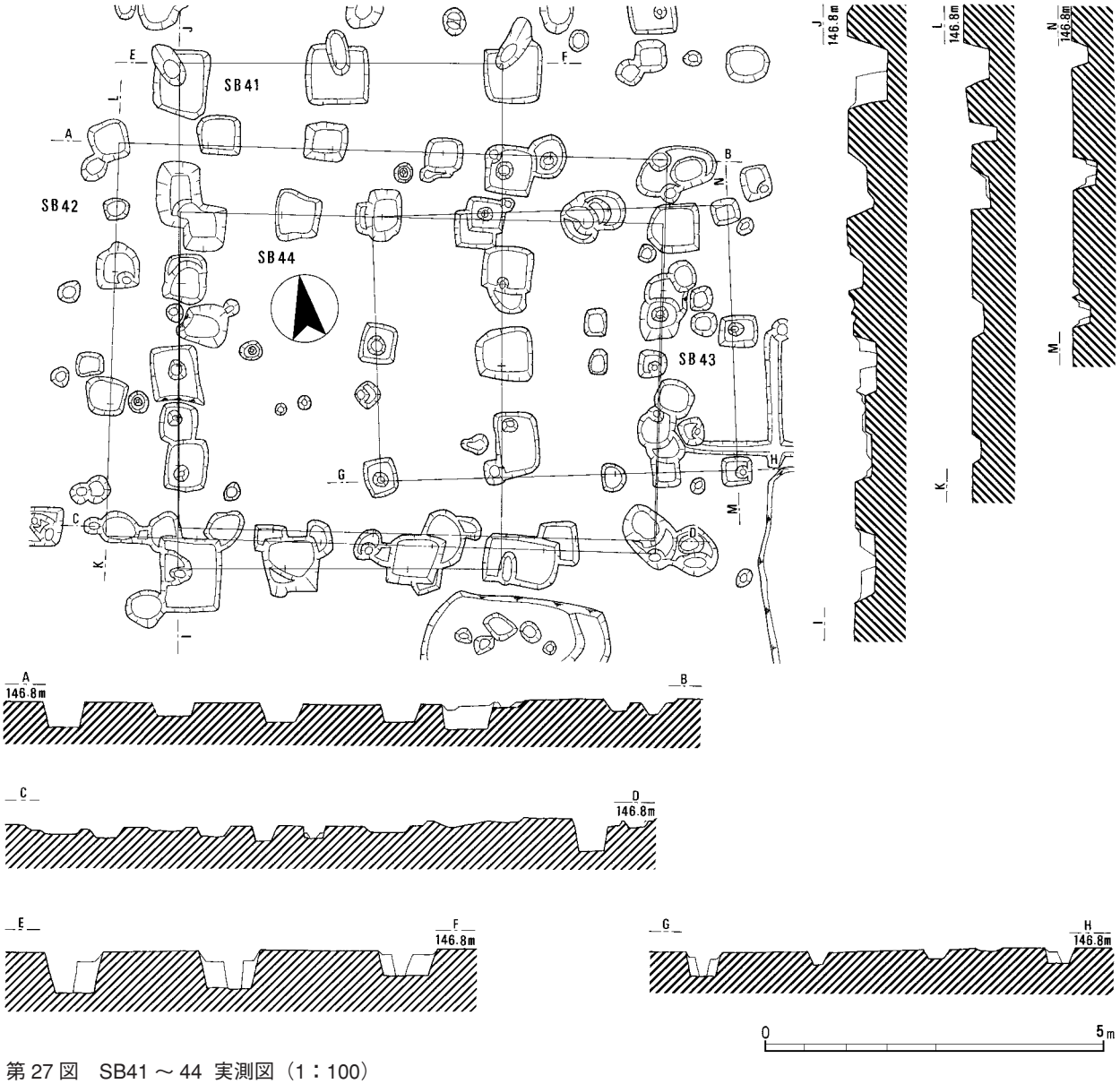
第 26 図　SB28・29・31・32・62・81、SA30、SZ59 実測図（1：100）

痕跡の直径は 30 ～ 35 ㎝で、掘形に対して太いものである。このため、これらも柱抜き取り痕跡と考えた方がよいかもしれない。柱間は、桁行は 2.4m、梁行は 2.25m の等間である。南側桁行を SB31 と揃える。

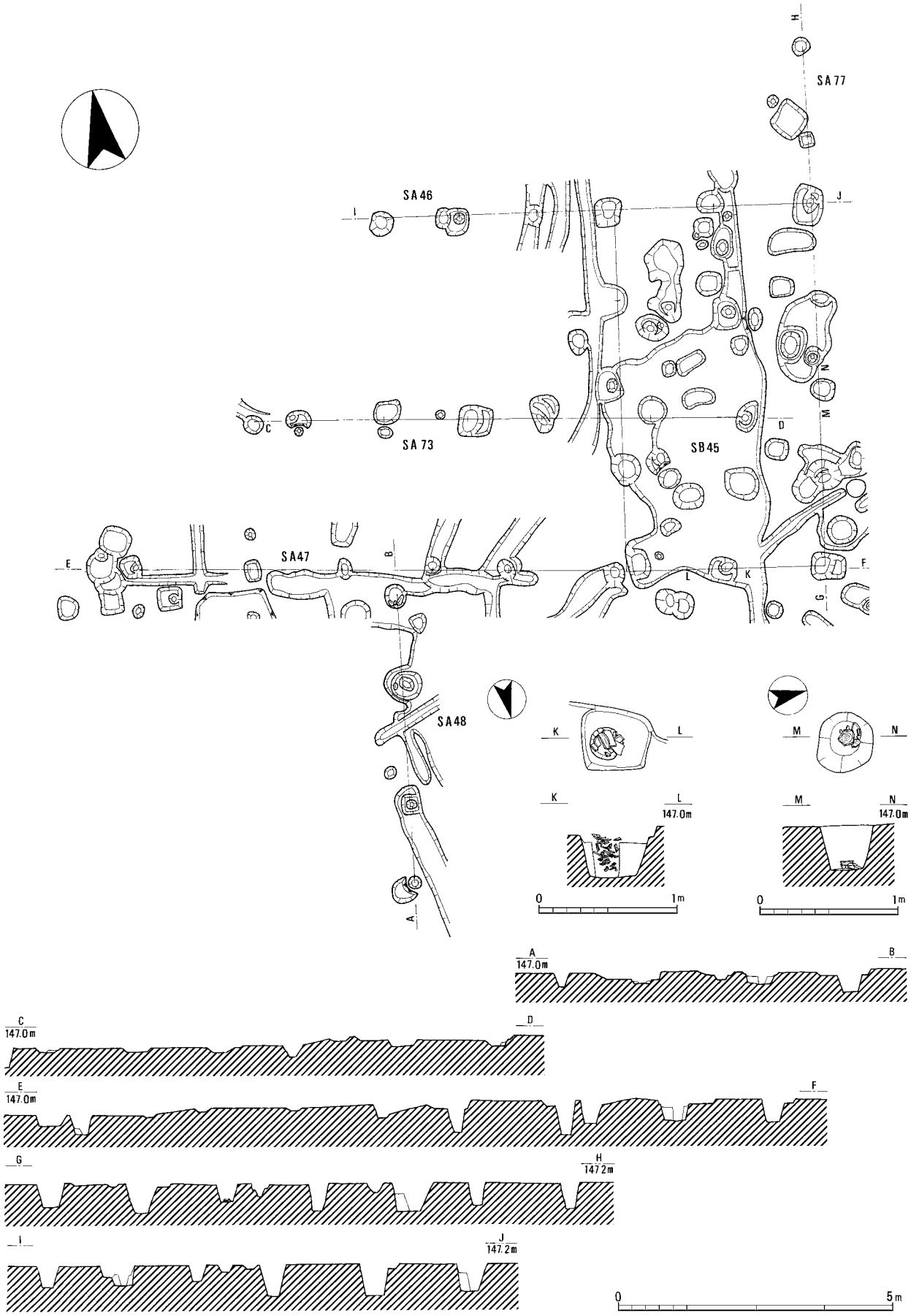
ＳＢ４１（第 27 図） 調査区中央で検出した南北棟である。SB166・45・51 とコの字配列を形成するものである。桁行は 5 間、梁行は北側が 2 間、南側が 3 間の変則的な建物である。柱掘形は、一辺 70 ～ 90 ㎝の方形または長方形を呈する大型のもので、柱が残存するものがあり、その直径は 25 ㎝である。柱痕跡の直径もやはり 25 ㎝で、北側梁行のものは全て北側に抜き取られていた。深さは、検出面から 50 ～ 60 ㎝を測る深いものであるが、桁行には 30 ㎝程度の浅いものもある。柱間は桁行が不等間、梁行北側は 2.4m の等間、南側は両端が 1.5m、中央が 1.8m とやや広い。

ＳＢ４２（第 27 図） 調査区中央で検出した 5 間×3 間の東西棟である。SB44 とは建て替えの関係にあるものと考えられ、柱穴の切り合いから SB44 に先行するものである。柱掘形は形の乱れたものや、小さいものもあるが一辺 50 ～ 60 ㎝の方形を呈する。柱痕跡は 2 基の柱穴でしか検出できず、その直径は 20 ～ 25 ㎝である。柱間は梁行が 1.95m の等間、桁行も 1.95m を基本とするが、西から 2 間目のみ 1.5m と短い。

ＳＢ４４（第 27 図） 調査区中央で検出した 5 間×3 間の東西棟である。SB41・42・43 と激しく重複するため柱掘形の不明確なものも多いが、一辺 60 ㎝の方形を呈するものと考えられる。SB42 とは



第 27 図　SB41 ～ 44 実測図（1：100）



第 28 図　SB45、SA46 ～ 48・73・77 実測図（1：100）

建て替えの関係にあるものと考えられ、SB42の北と南側を縮小して建て替えられている。しかし、柱数には変化がなく、柱間寸法を縮小したものである。桁行柱間は、1.5mであるが、東端のみ1.2mと短い。梁行も1.95mであるが、北端のみ1.35mと短くなっている。直径20㎝の柱痕跡を検出できたものもある。

ＳＢ４５（第28図） 調査区中央で検出した4間×2間の南北棟である。柱掘形は一辺50㎝の方形または不整円形を呈し、柱痕跡の直径は20㎝である。柱痕跡内には多量の土器片が詰め込まれていた。土器は、須恵器の杯、土師器の杯・皿があり、特に特定の器種に限ることはない。また、完形ちかくまで接合するものはなく、一個体を破砕して詰め込んだとは考えられない。柱間は、桁行、梁行とも等間で、東側桁行の北側にSA77、北側梁行の西側にSA46、南側梁行の西側にSA47がそれぞれ取り付く。SB166・41・51とコの字配列を形成するもので、西側桁行の延長上にSB166の東側梁行が位置する。

ＳＢ５１（第29図） 第一次、第二次両調査区にまたがって検出された5間×3間の南北棟である。柱掘形は、形の乱れたものもあるが一辺70㎝前後の方形を呈し、多くの柱穴から直径20～30㎝の柱痕跡が検出できた。柱間は両端が2.1mとやや広く、中央部3間は1.8mである。梁行は、中央が1.95mと広く両端は1.8mである。SB166・41等と品字配列を形成するもので、SB166の南側桁行の延長上に北側梁行を揃えている。「大井」と墨書された須恵器（1008）が出土している。

ＳＢ５３（第29図） 調査区中央で検出した4間×2間の南北棟である。柱掘形は一辺50㎝の方形を呈し、ほとんどの柱穴で直径25㎝の柱痕跡を検出できた。柱間は、梁行は等間であるが、桁行は両端が1.5m、中央2間が1.65mの変則的なものである。SB54と南側梁行を揃えており、SB51の東側桁行の延長上に妻柱が位置する。さらに、南に6m離れてSA56が配置される。

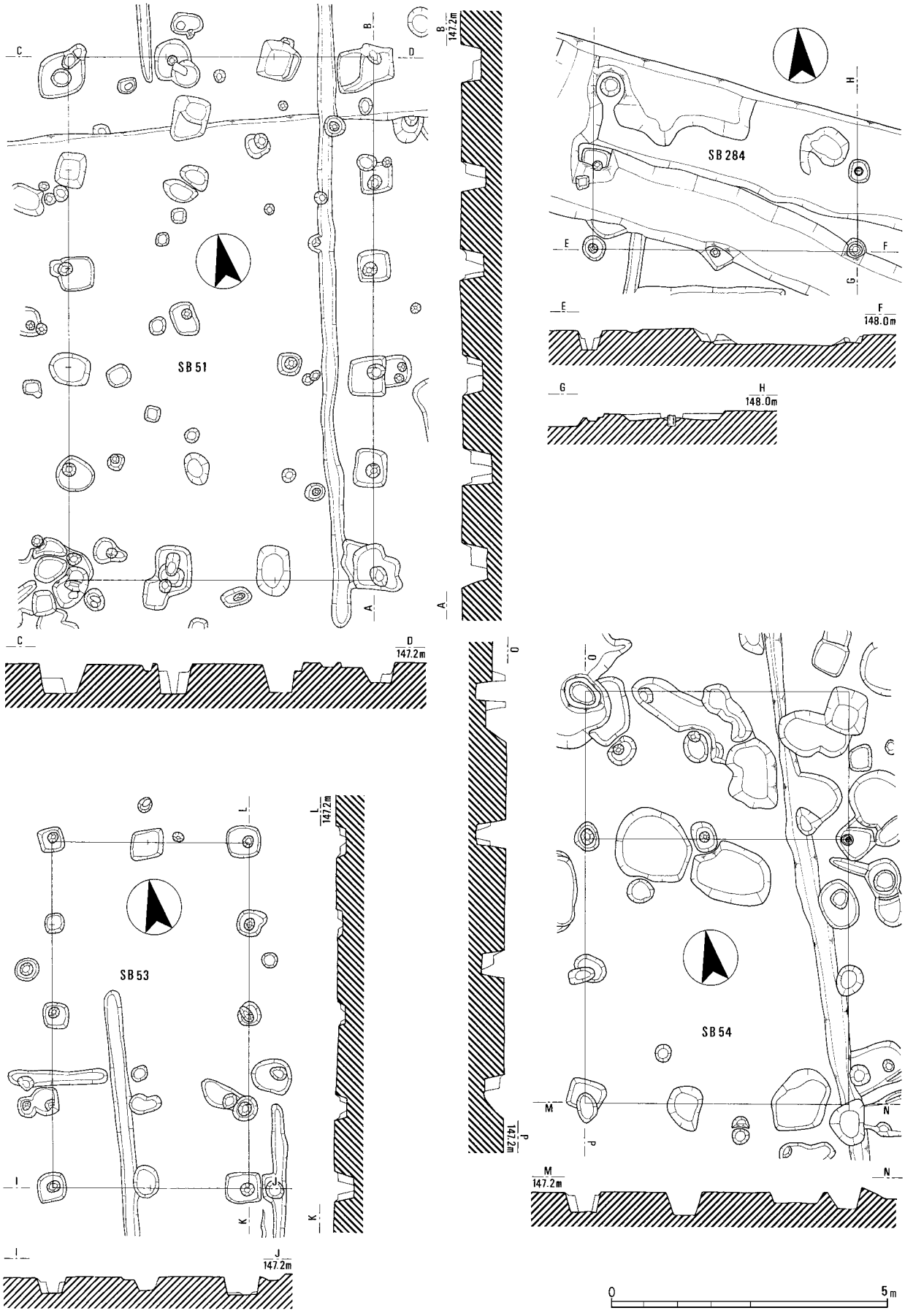
ＳＢ５４（第29図） 調査区南部で検出した2間×2間の北面庇付き南北棟である。桁行の柱間は2.4mの等間であるが、庇部分は2.7mと広い。梁行は不等間であるが、庇部分は2.4mの等間となっている。柱掘形は一辺70㎝の方形を呈するが、小さいものもあり一様でない。柱抜き取り痕跡が2基、柱痕跡が3基の柱穴で検出できた。柱痕跡の直径は30㎝である。SB53と南側梁行を揃えており、南に6m離れてSA56が配置される。

ＳＢ６７（第30図） 調査区北端で検出した。調査区端での検出のため全体の規模は不明であるが、上野市遺跡調査会の調査結果[21]から4間×2間の東西棟と考えられる。しかし、上野市遺跡調査会の調査区では検出できない柱穴も多く、建物とするに疑問も残る。柱掘形は、一辺40～50㎝の方形を呈し、柱痕跡の直径は20～25㎝である。遺物の出土が皆無で、他の建物と大きく方向を異にする等、時期決定の根拠に乏しいが、遠く離れたSB81と方向がほぼ一致するため一応この時期としておく。

ＳＢ７４（第30図） 調査区北部で南側梁行のみを検出した。上野市遺跡調査会の調査結果[22]を合わせると2間×2間の南北棟となるが、桁行の柱数が少なく疑問もある。柱掘形は不整円形のものもあるが一辺40㎝の方形を呈するものと推測され、2基の柱穴では柱が残存していた。柱の直径は15㎝を測るが、妻柱は細く10㎝ほどである。離れてはいるもののSB15西側桁行の延長上に妻柱が位置し、その距離は、27mである。

ＳＢ８１（第26図） 調査区端での検出のため全体の規模は不明であるが、3間以上×3間の東西棟である。柱間は不等間で、深さも一様でなく建物とするに疑問の残るものである。柱掘形は直径20～30㎝の円形を呈する小さいものである。奈良時代の遺物が出土しているため、この時期としておくが、平安時代以降の可能性もある。

ＳＢ１６４（第14図） 調査区中央で検出した6間×2間の東西棟で、西側に1間分の張り出し部がつく。東側3間分には束柱があり、この部分は等間である。西側3間分は不等間で、柱通りも悪い。このため東側のみを3間×3間の総柱建物とした方がよいかもしれない。柱掘形は、一辺40～70㎝の方形または不整円形を呈し、一様ではない。柱痕跡は、直径25～30㎝で、根石を検出したものもある。この時期とする根拠に乏しく、平安時代中期以降のものである可能性も大きいが、奈良時代の遺物しか



第 29 図　SB51・53・54・284 実測図（1：100）

出土しておらず、一応この時期としておく。円面硯（1015）が出土している。

ＳＢ１６６（第30図） 調査区北部で検出した東西棟で、一時期の中心建物と想定されるものである。西端は調査区外で、しかも大きく撹乱されており桁行を確定することができなかったが、5間に推定した。柱掘形は当遺跡最大規模で、一辺80㎝～1mの方形を呈する大型のもので、深さも1mに達するものもある。柱痕跡が確認できないものも多く、唯一検出できたもので直径35㎝である。北側桁行では、3基の柱穴に浅い溝が連絡しているが、布掘とするには浅すぎるものである。南面に庇がつく。庇の柱掘形は、直径30～50㎝の円形を呈する一様でないものである。SB167と重複するが、それに先行するものである。土師器蓋（999）が出土している。

ＳＢ１６９（第31図） 調査区北部で検出した2間×2間の総柱建物である。この時期とする根拠に乏しいが、SB15を中心とする一群と方向を揃えるためによる。棟方向は不明であるが、一応南北棟と仮定する。柱間は、桁行、梁行とも1.35mの等間である。柱掘形は一辺30～70㎝の方形または不整方形を呈し、一様でない。さらに深さが、検出面から10㎝足らずのものもあり、建物とするに疑問の残るものである。柱痕跡の直径も15～40㎝と様々であるが、大きいものは柱抜き取りのためと考えられる。

ＳＢ１７０（第31図） 調査区北部で検出し、SB166を中心とする一群と方向を揃えるものである。5間×1間の桁行の長い建物であるが、南側桁行で1基検出できなかった柱穴がある。桁行の柱間は1.35mであるが、東から2間目だけが1.5mと長い。柱掘形は一辺40～50㎝の方形または不整方形を呈し、柱痕跡の直径は15㎝前後で掘形に対して小さいものである。

ＳＢ１８２（第31図） 調査区中央で検出した3間×2間の総柱の南北棟で、他の建物と大きく方向を違える。柱掘形は一辺60～70㎝の方形または円形を呈する大型のものである。直径20㎝の柱痕跡を確認できたものも多いが、柱通りから外れるものもあり疑問も残る。また、根石が据えられているものが1基ある。深さは30～40㎝であるが、妻柱や束柱はやや浅い。柱間は、桁行、梁行とも等間である。

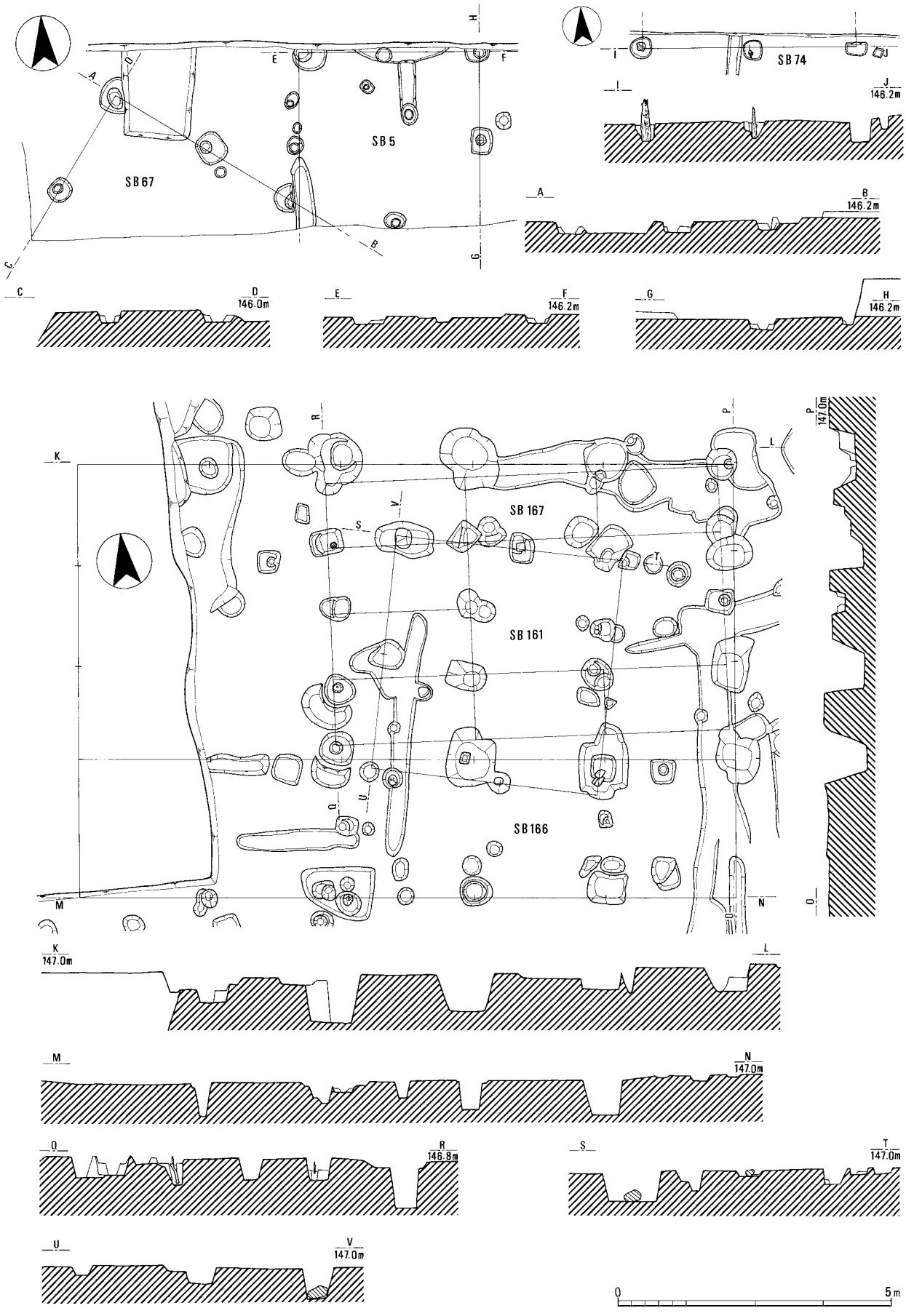
ＳＢ１８３（第36図） 調査区中央で検出した2間×2間の南北棟で、東に1間分の張り出し部をもつ変則的な建物である。この張り出し部の東側は、SB292の東側梁行、SB290の東側桁行と揃う位置にある。柱掘形は一辺30㎝の方形または円形を呈する小型のものである。南側梁行はすべて柱が残存しており、柱の芯芯で柱間を計測すると、1.64m＋1.56mとなる。柱は腐食が激しく正確な直径は不明だが、柱穴土層断面の観察により、20㎝程度のものであったことがわかった。

ＳＢ１９５（第14図） 調査区中央で検出した3間×3間の東西棟である。SB197と方向を揃え、これに付属する建物と考えられる。柱掘形は、一辺40㎝の方形または円形を呈し、柱痕跡の直径は15～18㎝である。柱間は不等間であるが、1.35mと1.65mの組み合わせである。

ＳＢ１９７（第32図） 調査区中央で検出した4間×2間の東西棟である。SB195と方向を揃え、また、遠く離れるもののSB15とも揃うためこの時代とした。柱掘形は、一辺60～80㎝の方形を呈するが、直径50㎝の不整円形のものもあり、統一を欠く。直径15～20㎝の柱痕跡を検出できたものもある。柱間は、桁行は2.1mの等間、梁行は2.1mと2.4mの不等間で、しかも東側と西側が対応しない。

ＳＢ１９８（第32図） 調査区中央で検出した3間×2間の東西棟である。SB280・288と方向を揃えるため、この時代とした。平安時代の建物SB194とも方向が一致し、位置的にも近いが、柱掘形の形態等異なる要素が多いことから別時期のものと判断した。柱掘形は、一辺60㎝前後の方形または不整円形を呈し、一様でない。2基の柱穴で柱が残存しており、その直径は18㎝である。柱周辺の埋土は淡灰色に変色しており、柱の沈下は認められない。柱間は桁行、梁行とも不等間である。

ＳＢ２７６（第33図） 調査区北部で検出した5間×3間の桁行の長い東西棟で、飛鳥時代のものに似るが、この時代の遺物が出土している。SB292と南側桁行を揃える。柱掘形は、形の乱れたものもあるが一辺50～60㎝の方形を呈するものと考えられ、直径10～20㎝の柱痕跡を検出できたものも多い。柱穴の深さは50㎝ほどであるが、妻柱は4基とも浅



第 30 図　SB5・67・74・161・166・167 実測図（1：100）

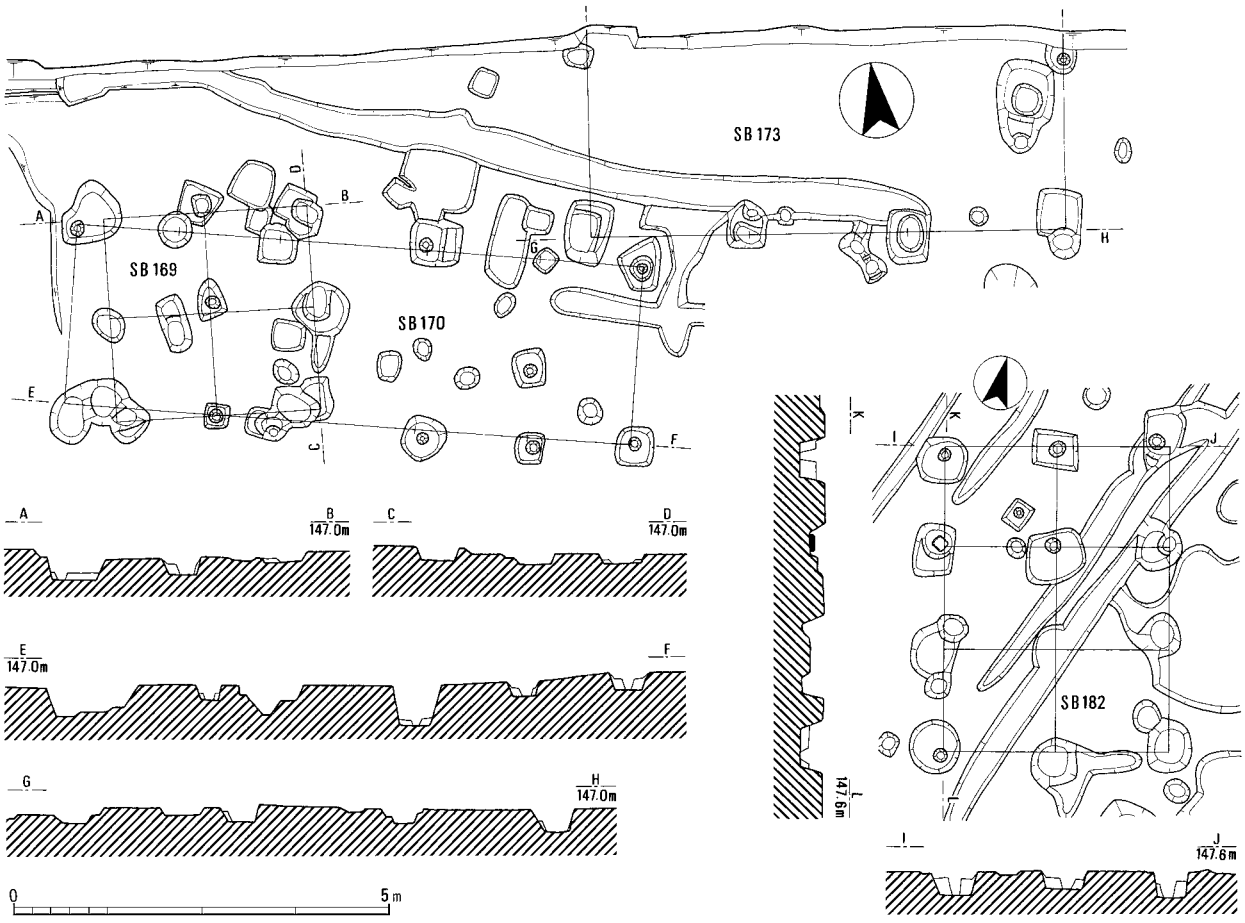
く20㎝程度である。携帯用砥石(998)が出土している。

ＳＢ２７９（第33図） 調査区中央で検出した2間×2間の総柱の南北棟である。南側のSB281と柱筋を揃え、南北に並んで配置される。柱掘形は一辺60～70㎝の方形を呈する大型のものであるが、妻柱と束柱は一辺30～35㎝でやや小さい。西側桁行で、柱が残存していた。北側に大きく傾斜しており、抜き取りの際、下部が残ったものと思われる。直径は14㎝で、10㎝ほど掘形より沈下していた。

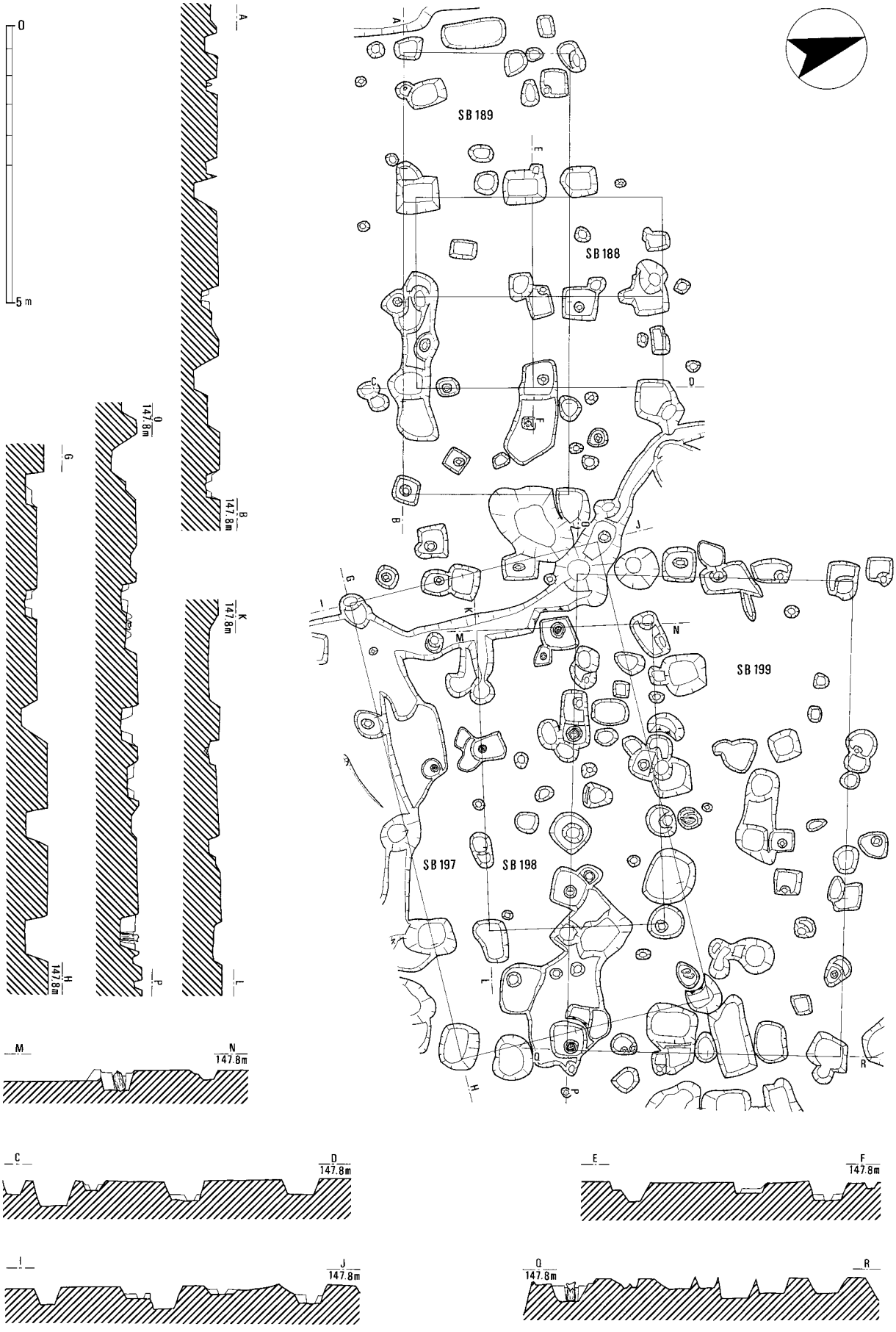
ＳＢ２８０（第33図） 調査区中央で検出した3間×2間の東西棟である。この時期とする根拠に乏しいが、遠く離れるものの北側桁行をSB198南側桁行に揃えていることによる。桁行柱間は不等間で、柱穴の深さが一定でなく、建物とするに疑問もあるが、南側桁行で3本の柱が残存しているため、このように復元した。柱は腐食が激しく詳細は不明であるが、直径10㎝程度の細いものであったようである。柱掘形は、形の乱れたものもあるが、一辺40～50㎝の方形を呈する。

ＳＢ２８１（第34図） SB279の南に2m離れて南北に並ぶ2間×2間の総柱の建物である。柱間は、すべて1.5mの等間である。棟方向は不明であるが、一応南北棟と仮定しておく。柱掘形は、一辺50㎝の方形を呈し、直径25㎝の柱痕跡を確認できたものもある。桁行、梁行、柱掘形とも、SB279より若干小規模である。SB282と重複するが前後関係は不明である。

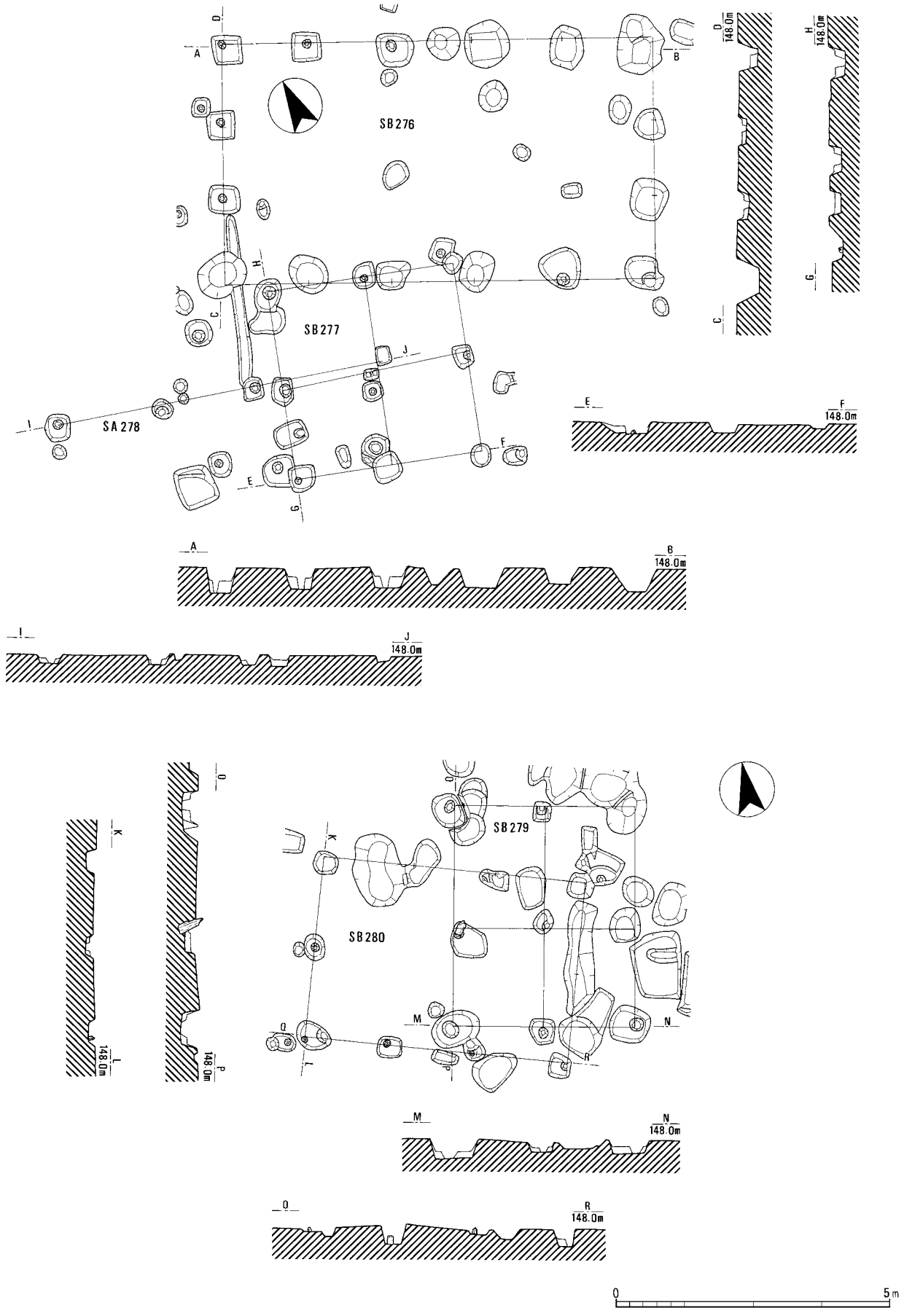
ＳＢ２８２（第34図） 調査区中央で検出した4間×3間の東西棟である。飛鳥時代の遺物が出土しているが、近接するSB283の南側桁行と北側桁行を揃えるためによる。柱間は桁行、梁行とも不等間で、北側桁行東端の柱が、西に寄る。このため北側桁行は、南側より30㎝短くなる。したがって東側梁行の柱通りにのらず、疑問である。柱掘形は一様でないが、一辺50㎝の方形を呈するものが基本となるようである。北側桁行で、柱が2本残存してい



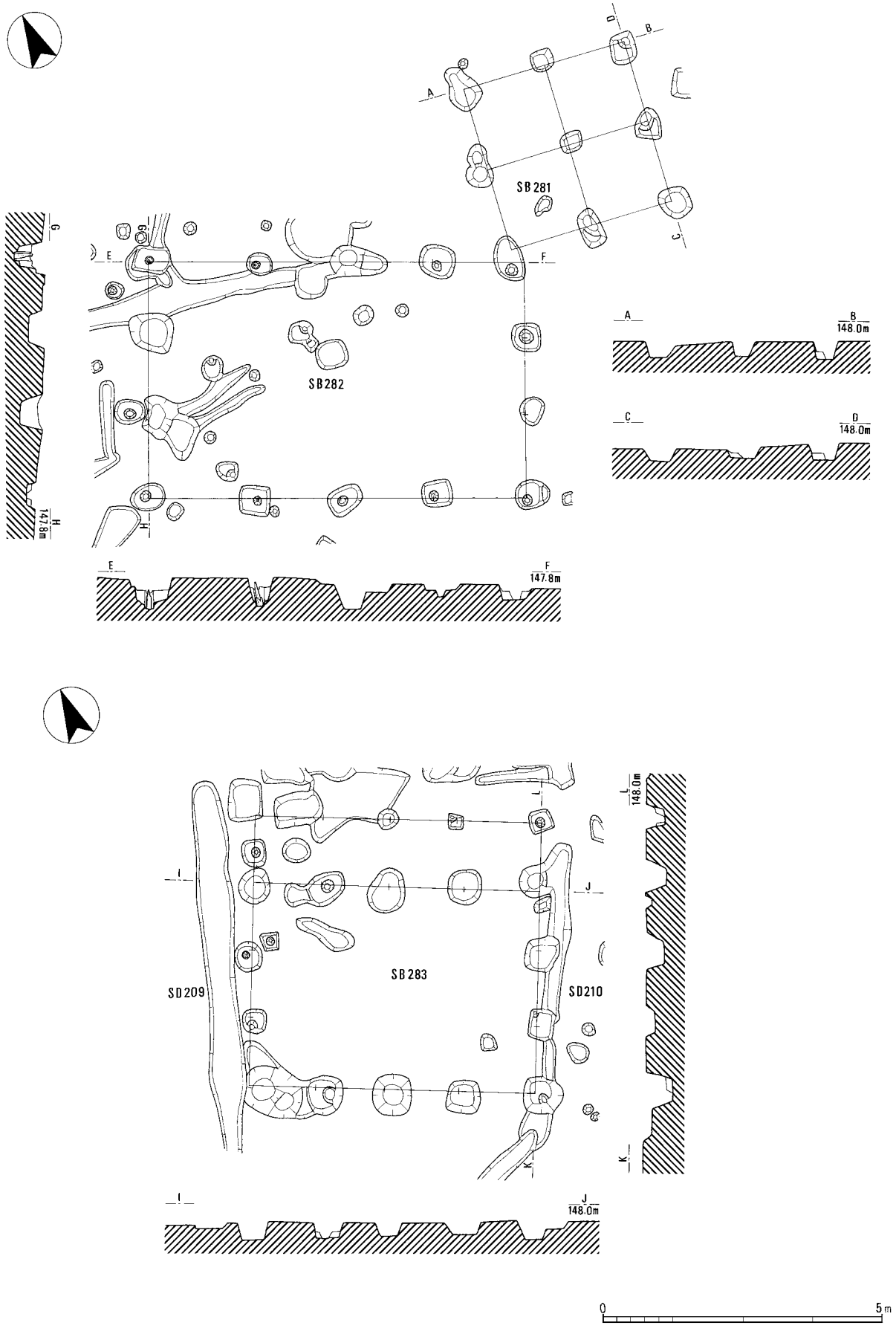
第31図　SB169・170・173・182 実測図（1：100）



第 32 図　SB188・189・197 ～ 199 実測図（1：100）



第 33 図　SB276・277・279・280、SA278 実測図（1：100）



第 34 図　SB281 ～ 283、SD209・210 実測図（1：100）

た。柱は腐食が激しいが、直径15㎝ほどで、柱掘形より10㎝ほど沈下していた。

ＳＢ２８３（第34図） 調査区中央で検出した。4間×3間の東西棟で、北面に庇をもつ。柱掘形は円形に近いものもあるが、一辺60～70㎝の方形を基本とするものと思われる。妻柱はやや小さく、一辺40～50㎝程度で、庇はさらに小さく一辺30～40㎝を測る。西側梁行で、柱の残存が認められたが、腐食が激しく、直径等は不明である。柱間は、一部不等間であるものの1.35mを基本とするものと考えられる。庇柱列は、桁行の北側0.9mに位置し、柱間は不等間で、しかも桁行柱間とも一致しない。建物を東西から挟むように溝SD209・210が南北に延びる。この建物の建築時に何らかの目的で掘られた可能性があるが、既述したように、隣接する古墳時代の建物SB196に付属する溝と考えた。

ＳＢ２８４（第29図） 調査区北端で検出した。この時期とする根拠に乏しいが、SB287と方向をほぼ揃え、建物端を合わせるように建てられていることによる。調査区端での検出のため全体の規模は不明であるが、2間以上×2間の南北棟と仮定した。SD203・208との重複のため、柱掘形が検出できなかったものもある。東側桁行では、柱が残存していた。一辺40㎝の円形に近い方形の掘形の中央に直径15㎝の柱を建てている。柱は、掘形底より10㎝ほど沈下していた。他の掘形では柱痕跡が検出でき、すべて直径15㎝ほどのものである。

ＳＢ２８６（第35図） 調査区北部で検出した6間×3間の桁行の長い東西棟で、飛鳥時代のものに多い形態を呈する。南側桁行の延長上にSB296の北側桁行が位置し、さらにSB292等と一群を形成するものとして、この時代とした。西側の妻柱は全く検出できず、桁行でも検出できないものもあり建物とするに疑問もある。柱掘形は一辺70～50㎝の方形を呈するが、極端に小さいものもあり一様でない。ほとんどの柱穴で直径15㎝の柱痕跡を検出できた。柱間は梁行が等間、桁行は不等間であるが、1.8mと1.65mの組み合わせである。

ＳＢ２８７（第35図） 調査区北部で検出した。棟方向は不明であるが、一応東西棟に仮定する。梁行の柱穴は一基も検出できず、建物とするに疑問もあるが、3間×3間の建物と考えた。SB294と北側桁行を揃える。柱掘形は、一辺70～60㎝の方形を呈する大型のもので、直径20㎝の柱痕跡が検出できた。柱間は不等間で、しかも対応する南北の桁行間でも一致しない。

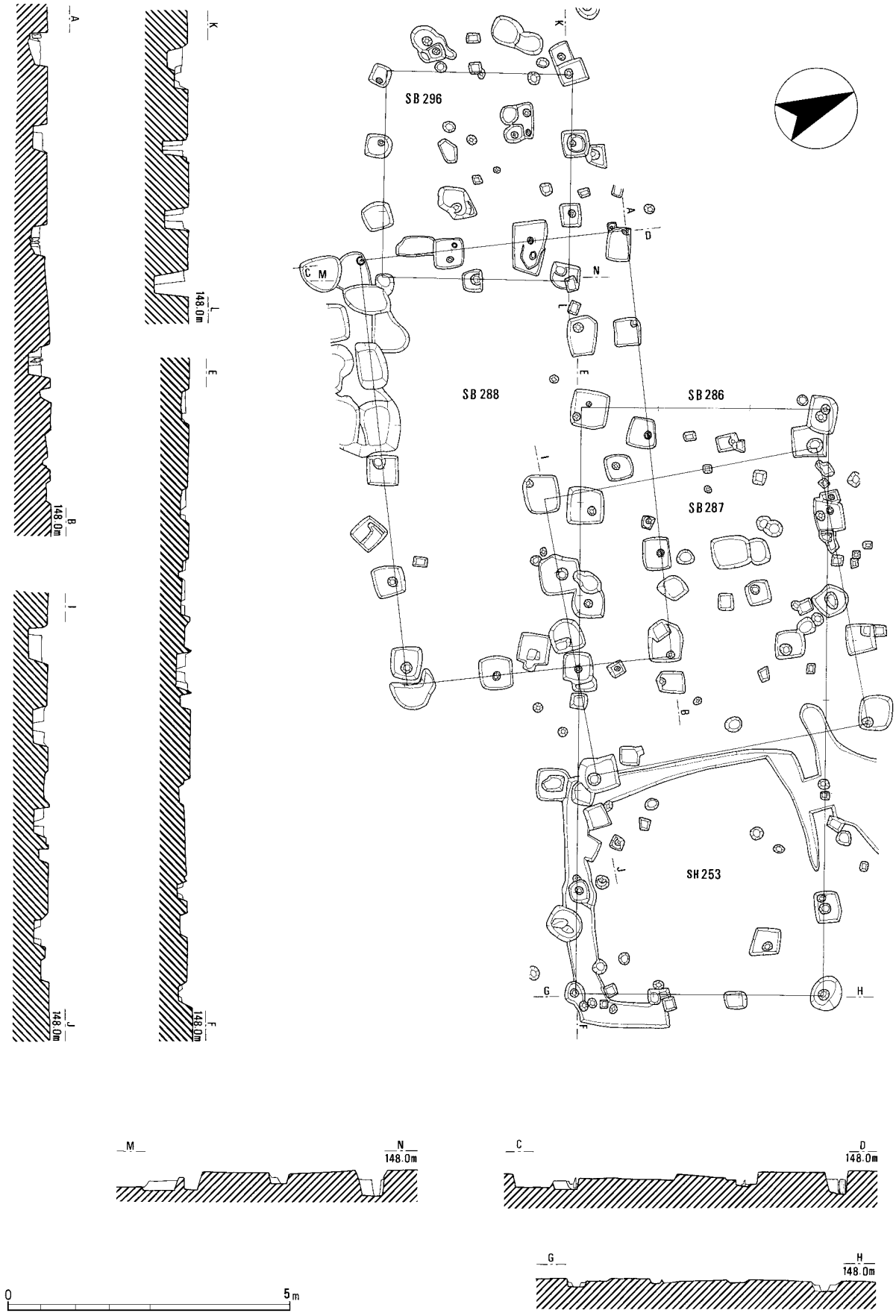
ＳＢ２８８（第35図） 調査区北部で検出した4間×3間の東西棟である。西側梁行をSB198の東側梁行に揃える。柱間は、桁行は不等間、梁行の中央は1.5mと狭く、両端は1.65mである。柱掘形は一辺40～60㎝の方形を呈する。6基の柱穴には柱が残存していたが、腐食が激しくその直径を計測することはできなかった。しかし柱痕跡から推定すると、直径10～20㎝の柱であったものと考えられ、掘形に対してやや細いものである。

ＳＢ２９０（第36図） 調査区北端での検出のため全体の規模は不明であるが、一応桁行2間以上×梁行2間の南北棟と仮定した。その場合、SB292・183と建物の東側を揃え、南北に3棟並ぶ配置となる。柱穴はSD203と重複のため検出できなかったものもあるが、直径30㎝の円形または方形を呈する小型のものである。南東隅の柱穴が極端に浅く、建物とするに疑問もあるが、柱間が2.1mの等間になることもあり、建物とした。

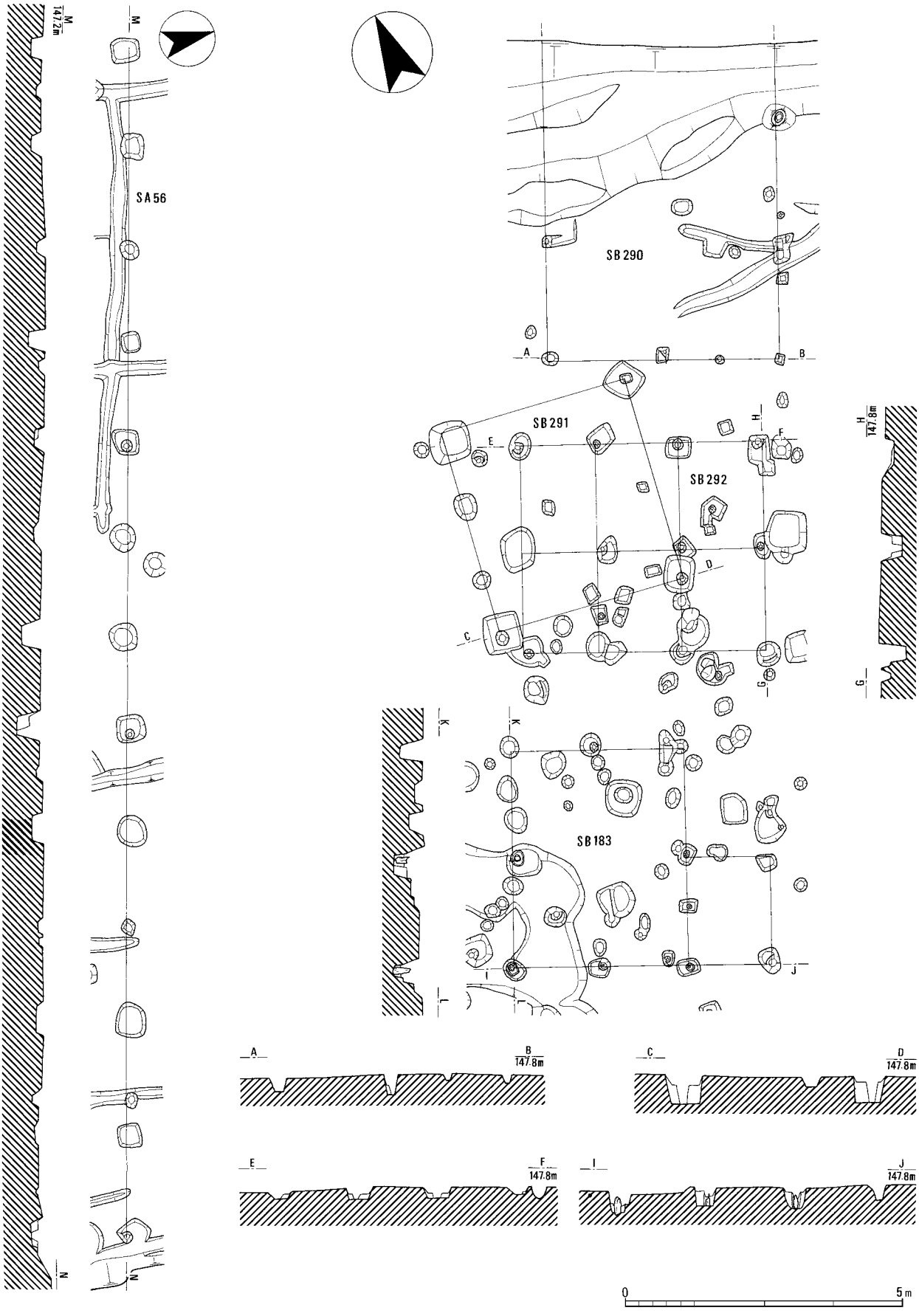
ＳＢ２９２（第36図） 調査区北部で検出した3間×2間の総柱の東西棟である。SB183・290と建物の東側を揃え、南北に3棟並ぶ配置となる。さらにSB276と南側桁行を揃える。柱掘形は形の乱れたものもあるが、一辺40～50㎝の方形を呈し、その多くから直径15～20㎝の柱痕跡が検出できた。柱間は桁行、梁行とも不等間である。SB291と柱穴が重複し、その状態から、これらの建物より先行するものであることがわかった。

ＳＢ２９３（第37図） 調査区北部で検出した2間×2間の総柱建物である。棟方向は不明であるが、一応南北棟と仮定する。柱掘形は直径25㎝の円形または方形を呈する小型のもので、直径15㎝の柱痕跡を検出できたものもある。柱間は不等間であるが、桁行、梁行とも1.8m＋1.95mである。出土遺物からこの時期としたが、平安時代中期以降のものかもしれない。

ＳＢ２９４（第37図） 調査区北部で検出した



第 35 図　SH253、SB286 ～ 288・296 実測図（1：100）



第 36 図　SB183・290 ～ 292、SA56 実測図（1：100）

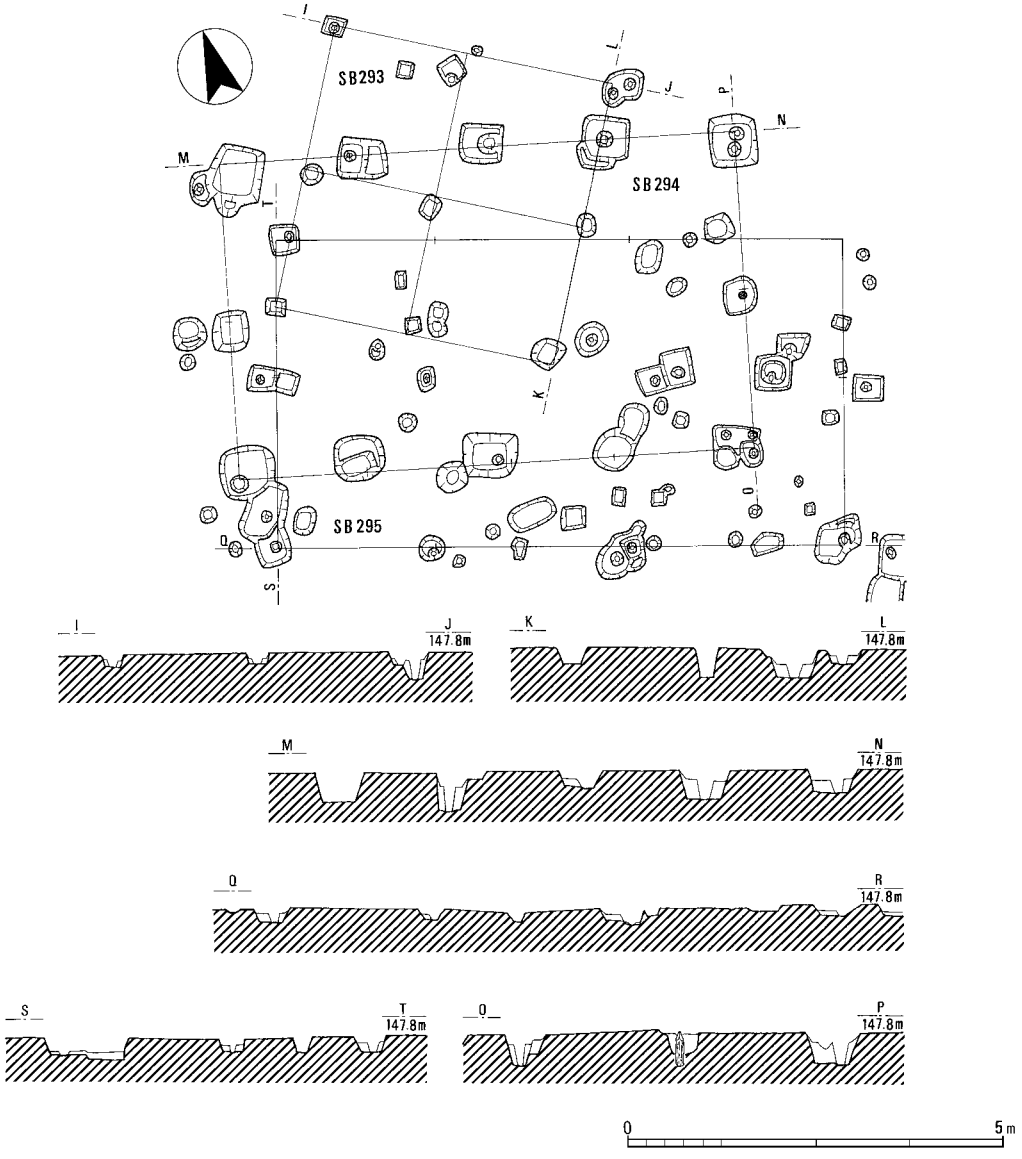
4 間×2 間の東西棟である。古墳時代遺物が出土しているが、SB287 と北側桁行を揃えていることにより、この時代のものとした。柱掘形は、形の乱れたものもあるが、一辺 70 ㎝の方形を呈する大型のものである。しかし、妻柱は一辺 50 ㎝とやや小型である。直径 15 ～ 20 ㎝の柱痕跡を多くの柱穴で検出でき、西側妻柱では柱が残存していた。その柱の直径は 10 ㎝で、掘形に対して意外に細いものである。また、掘形より 20 ㎝も沈下していた。柱間は、桁行は不等間、梁行は 2.1m の等間である。

ＳＢ２９６（第 35 図） 調査区北部で検出した 3 間×2 間の東西棟である。SB286 の南側桁行の延長上に北側桁行を揃えて建てられている。掘形は、一辺 40 ㎝の方形を呈し、直径 15 ～ 20 ㎝の柱痕跡を検出できた。深さは、掘形の大きさに比べ深く、検出面からでも 50 ㎝を測る。柱間は、桁行、梁行とも等間である。

Ｂ．柱列

ＳＡ４６（第 28 図） SB45 の北側梁行を西に延長するかたちで 3 間分を検出した柱列である。柱掘形は直径 30 ～ 40 ㎝の円形または方形で、直径 20 ㎝の柱痕跡を検出できたものもある。

ＳＡ４７（第 28 図） SB45 の南側梁行に揃えて西側へ 5 間分を検出した柱列である。柱間は不等間で、柱掘形は直径 25 ～ 35 ㎝の円形または方形を呈する小型のものである。深さは検出面から 10 ㎝足らずの浅いものと 40 ㎝を測る深いものがあり、東側 2 基と西側 4 基は別遺構の可能性もある。



第 37 図　SB293 ～ 295 実測図（1：100）

ＳＡ５６（第36図） 調査区南部で、12間分を検出した柱列である。SB166を中心とする一群の南限を限るものと考えられるが、方向は3°ほど異なる。柱掘形は一辺50㎝の方形または不整方形を呈し、直径20㎝の柱痕跡を検出できたものもある。柱間は不等間で、深さも一様でない。

ＳＡ７３（第28図） 調査区中央部で5間分を検出した。柱掘形は直径50㎝の円形を呈するものと考えられるが、不整形のものも多く、さらに深さも10㎝程度と浅いため柱列とするに疑問の多いものである。柱間は不等間である。

ＳＡ７７（第28図） SB45の東側桁行を北側に延長するかたちで2間分を検出した柱列である。柱掘形は直径30～40㎝の円形または方形を呈する小型のものであるが、深さは検出面から40㎝を測るしっかりしたものである。柱間は不等間である。

ＳＡ１９２（第14図） 調査区中央で4間分を検出した柱列である。SA56・193と共に、建物群を遮蔽する。柱掘形は一辺35～50㎝の方形または円形を呈し、一様でない。直径13㎝の柱痕跡を確認したものもある。

ＳＡ１９３（第49図） 調査区中央南側で3間分を検出した柱列である。柱掘形は、両端が直径30㎝の円形、中央の2基は小さく直径15㎝のやはり円形を呈する。SA56･192と共に、建物群を遮蔽する。

ＳＡ２６７（第20図） 調査区東部で3間分を検出した柱列である。時期決定の根拠に乏しいが、離れてはいるもののSB279・281と方向がほぼ揃うため、一応この時期としておく。一辺50㎝の不整方形を呈する掘形で、柱痕跡は直径30㎝弱である。西端では直径20㎝の柱が残存しているが、埋土の観察により、もとは30㎝のものが腐植により縮小したことがわかる。柱は、掘形の西側に寄せて建てられており、若干の沈下が認められる。

ＳＡ２７８（第33図） 調査区北部で3間分を検出した柱列である。方向を揃えるSB288に付属するものと考えられる。柱間は1.8mであるが、東端のみ2.4mと広く、しかも柱穴が他のものより浅いことから、2間分とする方がよいかもしれない。柱掘形は一辺40㎝の方形を呈し、柱痕跡は直径20㎝である。

ＳＡ２９８（第43図） 調査区中央で4間分を検出した柱列である。柱掘形は、一辺50㎝の方形を呈するものを基本とするが、長方形のもの、不整形のもの等があり一様でない。柱間も不等間であり、柱列とするに疑問もある。柱痕跡を検出できたものもあり、その直径は20～25㎝である。

ＳＡ２９９（第43図） 調査区中央で2間分を検出した柱列で、SB288に付属するものと考えられる。柱掘形は一辺50㎝の方形を呈するが、中央のものは不整形である。直径20㎝の柱痕跡を確認できたが、北端のものは検出できず、他のものより深さも浅い。このため柱列とするに疑問も残るが、柱間1.8mの等間で並ぶため柱列とした。

Ｃ．土坑

ＳＫ２２０（第20図） 一辺1.6mの正方形に近い形態の土坑である。深さ50㎝で、埋土は上層が赤茶色粘土、下層は黒灰色粘土に変化するが、湧水点に達しておらず、井戸の可能性は低いものと考えられる。須恵器杯（1013・1014）が出土し、1014には「男」と墨書される。

ＳＫ２２７ 調査区中央で検出した。直径2mの不整円形を呈し、検出面からの深さは55㎝で、底部は平坦である。埋土は3層に分かれ、下から黒色粘土、暗茶色土、茶色土の順に平行堆積している。

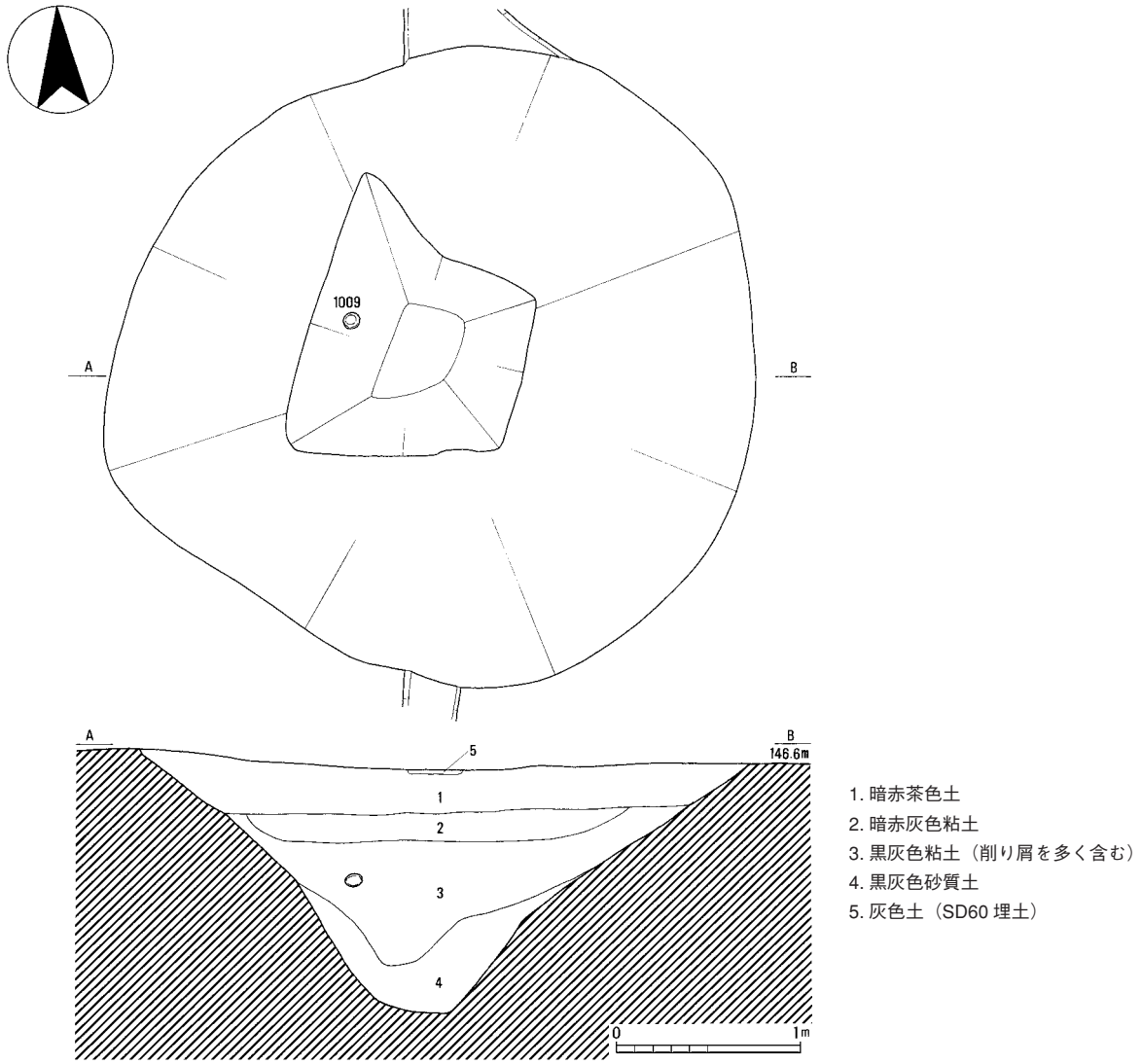
Ｄ．井戸

ＳＥ５０（第38図） 第一次調査区東部で検出した。平面形は直径3.5mの円形を呈し、深さは検出面から1.4mを測る。断面形は、深さ80㎝までは非常に緩やかに傾斜し、それ以下は急に傾斜度を増して底部に至る。この部分の平面形は一辺1.2mの方形を呈し、これが井戸本体の規模を表すものと考えられる。埋土の観察からは掘形との区別はつかず、枠板等の施設は抜き取られたものと考えられる。埋土は4層に分かれる。最上部の第1層は暗赤茶色土、第2層が暗赤灰色粘土、第3層は黒灰色粘土でこの層には手斧の削り屑と考えられる木片が多量に含まれていた。また、「大井」と墨書された須恵器の杯（1009）が出土している。最下層は黒灰色砂質土で、糸巻（1010～1012）が出土している。

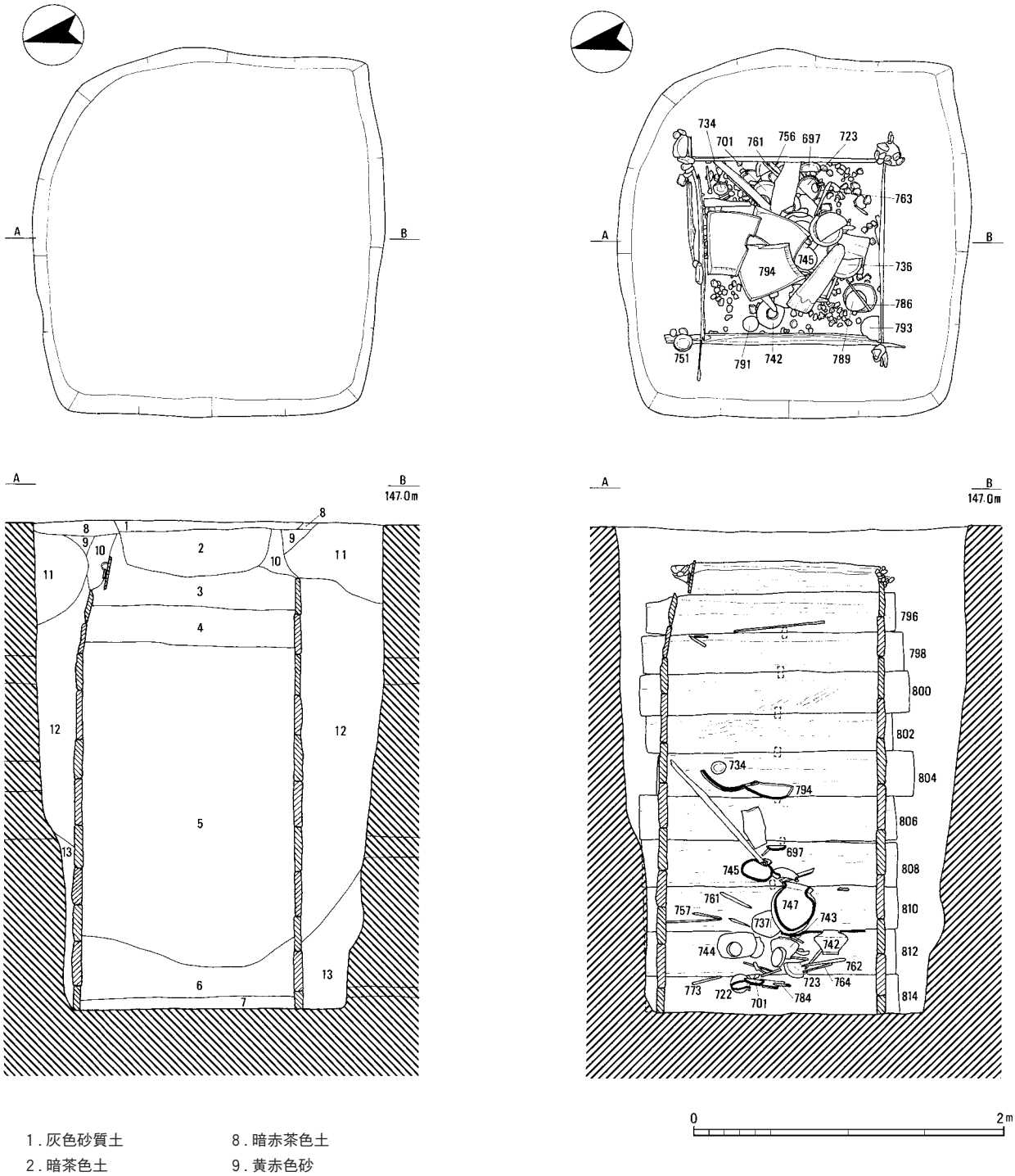
ＳＥ５５（第39図） 第一次調査区東部で検出した。掘形は一辺2.3mの不整方形を呈し、井戸本体に比べ小さいものである。井戸本体は横板井籠組[23]で、

まず掘形の北側に接するように幅 14 ㎝前後の他より細い枠板（854・874）を南北に据えて、その上に東西、南北交互に幅 20 ～ 30 ㎝、長さ 160 ～ 175 ㎝、厚さ 40 ～ 60 ㎝の枠板を組み上げる。底部には枠板の沈下を防ぐための施設はなく、直接掘形に据えている。枠板はその両端に切欠きを設け、その深さにより平行に組み合わされるように調節している。さらに中央には枘穴を設け、駄枘により上下の枠板を連結し、互いの前後左右への不整を抑える丁寧な構造になっている。枠板の外側中央には、組み上げる位置を指定する墨書があり、例えば、北側の最下のもの（874）には「北一」、その上のもの（873）には「北二」と書かれている。さらに、枘穴や切欠きの位置を示す墨線が認められるものもあり、ある設計に基づいて製作されたようである。枠板は北側で 12 段確認でき、検出面から井戸底までは 3.1m を測る。また、底から 12 段目の組み合わせ部外側には小石を集め、枠板の補強としているようである。

埋土は 6 層に分かれ、検出面から 10 ㎝弱までは灰色砂質土、その下が暗茶色土であるが、検出面から 30 ㎝で黒青色粘土に変わり湿気が多くなる。この層から木製品が出土し始め、60 ㎝以下は暗灰色粘土、80 ㎝以下が砂混じり暗灰色粘土で井戸埋土の大部分を占める。2.7m 以下底までは砂混じり淡灰色粘土となり、井戸底には 10 ㎝足らずの小石の広がりが認められる。地山が粘土層であるため、これらの小石は井戸底に敷かれたものと考えられる。検出面下 2.1m で湧水点に達するが、湧水量は少な



第 38 図　SE50 実測図（1：40）



1. 灰色砂質土
2. 暗茶色土
3. 黒青色粘土
4. 暗灰色粘土
5. 砂混り暗灰色粘土
6. 砂混り淡灰色粘土
7. 礫
8. 暗赤茶色土
9. 黄赤色砂
10. 灰色粘土
11. 黒色混り黄色粘土
12. 淡青色粘土と黒色粘土混り
13. 暗灰緑色粘土

第 39 図　SE55 実測図（1：40）

く、井戸内を完全に排水した場合、水位の回復には一夜を要する。

埋土には、多量の土器、木製品が含まれており、土師器の杯（692・695・696・699）、甕（717・718・720・721・724）、須恵器の壺（741 ～ 743）、横瓶（744・745）、甕（747）等完形またはそれにちかいものも多く、木製品では、斎串（756 ～ 780）、桶（788 ～ 793）、皿（795）等が出土している。また、墨書土器も多く、「井」（700）、「田中」（695）、「千倉」（704・736）、「大井」（727）、「安麿」？（729）がある。これらの遺物は、底近くから折り重なるように出土し、埋納的意味をもって投げ込まれたものと考えられ、斎串の出土とあわせて祭祀的な色彩の強い井戸であることがわかる。壺（742）は、その口縁部に板材を接合して出土した。板材に丸く穴をあけ、それに壺口縁部を挿入した状態のもので、壺の使用例の一端を表すものと考えられる。また、枠板12段目の北西角外側の掘形には、土師器杯（751）が埋納されていた。杯は底部を穿孔したものである。

ＳＥ２６２（第40図）　調査区北部で検出した。飛鳥時代の溝SD201と重複しているため、掘形の検出はできなかった。井戸は、劣悪な残存状況であるが、一辺80㎝の方形を呈するものと考えられる。枠板は、北西・北東側は、長さ1m、幅25㎝ほどの板材（685・686）であるのに対し、南東・南西側は直径5㎝、長さ1m前後の杭で代用している。これらの内外両面に多数の杭を乱雑に打ち込んで支えとする簡単な構造のため、残存状態で本来の姿に近いものであった可能性が大きい。したがって、本来の深さは50㎝以下であったものと推測され、井戸というよりは集水升程度のものであったと考えられる。掘形が検出できなかったのは、このためであるかもしれない。枠内から、土師器粗製椀（679・680）・甕（681・682）、須恵器蓋（683）が出土したが、祭祀に直結するような遺物は出土していない。枠板の外側に接して出土した土師器杯（677・678）は、一応掘形出土として扱ったが、SD201のものと思われる。

ＳＥ２６３　調査区南部で検出した。一辺1.5mの方形を呈し、深さは検出面から1.2mである。枠板等の施設は検出できず、素掘りの可能性もあるが、方形の木製枠板が抜き取られたものと推定する。土師器甕（995・996）、須恵器杯（997）・甕（994）が出土しているが、埋納と考えられるものはない。

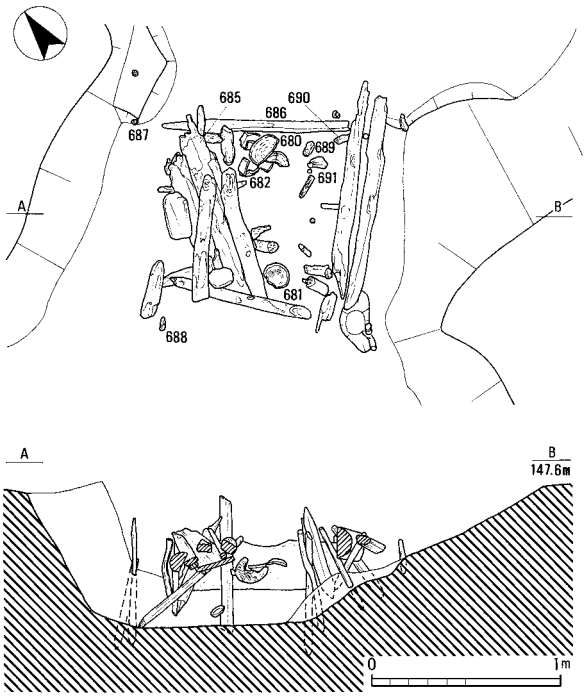
Ｅ．溝

ＳＤ１　調査区北西端で検出した南北に延びる溝で、方向は座標北に一致する。大部分が上野市遺跡調査会の調査区であるが、幅40㎝、深さ10㎝で、SD2とは3mの内側間隔で平行する。北端は調査区内で途切れており、SD2と完全に並走する確証はない。SB67と重複し、それより後出のものである。

ＳＤ２　調査区北端を37mほど西に延び、上野市遺跡調査会の調査区内で98°の角度で南へ屈曲し、10mほど南下して調査区外へ至る。したがって方向は、南北が座標北に沿い、東西がＥ6°Ｎである。幅50㎝、深さ10㎝程度を測り、東端は徐々に消滅するが、本来は調査区外へ続いていたものと考えられる。SD1・4とは、それぞれ3mの内側間隔で並行する。

ＳＤ４　調査区北西部で検出した。溝の内側で測って3mの間隔でSD2と並行する。形態・規模ともにSD2と同様である。

ＳＤ６　調査区北西部を南北に延びる幅50㎝、深さ10㎝前後の溝で、北端部は消滅し、屈曲しない。



第40図　SE262 実測図（1：40）

方向はＮ８°Ｅで、SD1・2・4とは異なり、上野市遺跡調査会の調査結果[24]から、それらに先行するものであることがわかる。溝の内側で測って3mの間隔でSD7と並行する。

ＳＤ７　調査区北西部で検出した。溝の内側で測って3mの間隔でSD6と並行する。形態・規模ともにSD6と同様である。

ＳＤ１８　調査区中央部をＮ６°Ｅの方向で南下する溝で、北端は上野市遺跡調査会の調査区へ続き、南端は、若干西に弧を描く様にして消滅する。幅60～70㎝、深さ15～20㎝である。

ＳＤ２０（第8・10図）「哀園森」の東側を南北に直進する。北端は、上野市遺跡調査会の調査区内で東西溝につながり、南端はSD58につながることから区画溝と考えられる。その場合、SB166を中心とする一群の西を限ることになる。幅は、北側で2m弱、南側で1m足らずを測るが、削平をうけている状況から、本来2mであるものと考えられる。深さは40㎝弱で、埋土は北端付近が上層：暗赤褐色土、下層：灰色砂であるが、南端付近は上層：灰色砂、下層：黒灰色粘土である。このことから、区画溝ではあるが、流水路としても機能していたものと考えられ、その埋没は北側ほど早かったものと考えられる。調査区中央部の溝肩付近から円面硯（1224）が出土している。

ＳＤ２１　調査区北部を東西に延びる溝である。東端は調査区外へ、西端は若干蛇行しながら23mほどで消滅する。幅40㎝、深さ5～10㎝を測り、南側に7m離れてSD27が並走する。若干蛇行する形態や、弥生時代の自然流水路上であることから、流水路的性格が強いものと考えられる。

ＳＤ２７　調査区中央部を東西に延びる溝である。東端は調査区外へ、西端は蛇行しながら50mほどで消滅する。幅40㎝、深さ15～20㎝を測り、北側に7m離れてSD21が並走する。SD21と同様、流水路的性格が強いものと考えられる。

ＳＤ５８（第4図）弥生時代の自然流水路と重複して、調査区南端を東西に延びる溝で、当遺跡の奈良時代の南を限るものと考えられる。北壁は45°の角度で60㎝ほど落ち込むが、南壁は非常に緩やかで、壁としては不鮮明である。したがって、自然流水路と考えた方が妥当であろうが、区画的性格を合わせ持っていたものと考えられる。埋土は大きく3層に分かれ、上層は幅40㎝の暗灰褐色粘土、中層は幅40㎝の暗青色粘土、下層は幅30㎝の暗茶色砂質土である。北壁近くの中層には焼土塊や炭が、下層には木片が多量に含まれていた。土師器三足盤（923）や坩堝（941）が出土している。

ＳＤ６４　調査区中央部を若干蛇行しながら南下する溝で、北端は上野市遺跡調査会の調査区へ続き、南端はSD21を切るが、まもなく消滅する。掘り直されたものと考えられる溝が重複するが、いずれも幅40㎝、深さ10～15㎝である。

ＳＤ６５　弥生時代の自然流水路上で痕跡程度を検出した溝である。方向は異なるが、SD2・4と同様にＬ字に屈曲し、その角度は115°である。したがって、南北方向がＮ16°Ｅ、東西がＥ9°Ｎである。約4m北側をSD66が並走する。

ＳＤ６６　弥生時代の自然流水路上で痕跡程度を検出した溝である。SD65と同様な形態で並走するが、東西方向はＥ11°Ｎでやや異なる。

ＳＤ２１８　調査区東部で検出した。調査区外からまっすぐ24mほど南下した地点で、西へ110°屈曲して途絶える。南北方向はＮ15°Ｅ、幅50㎝、深さ20㎝を測り、幅、深さともに一定である。

Ｆ．特殊・不明遺構

ＳＺ５９（第26図）SB29・31の北側に沿って土器片が集中して検出された。東西約6m、南北約2mの長円形の範囲で、土器は完形に近いものはなく小片で、土坑も伴わない。器種は、土師器杯（942～954）・皿（955・956）・甕（957～964）、須恵器蓋（965～970）・杯（971～981）・皿（982・983）等で、他の遺構出土のものと器種構成による差は認められない。これらの遺物を除去した後、SB29・31の柱穴を検出したため、建物廃絶後に投棄されたものと考えられる。

６．平安時代前期の遺構

ここでいう平安時代前期とは、おおむね9世紀代のものとする。掘立柱建物16棟、柱列4条を検出したが、奈良時代のものとの識別が困難であるため、奈良時代としたものの中に当時期に該当するものが

ある程度含まれている可能性がある。

A．掘立柱建物

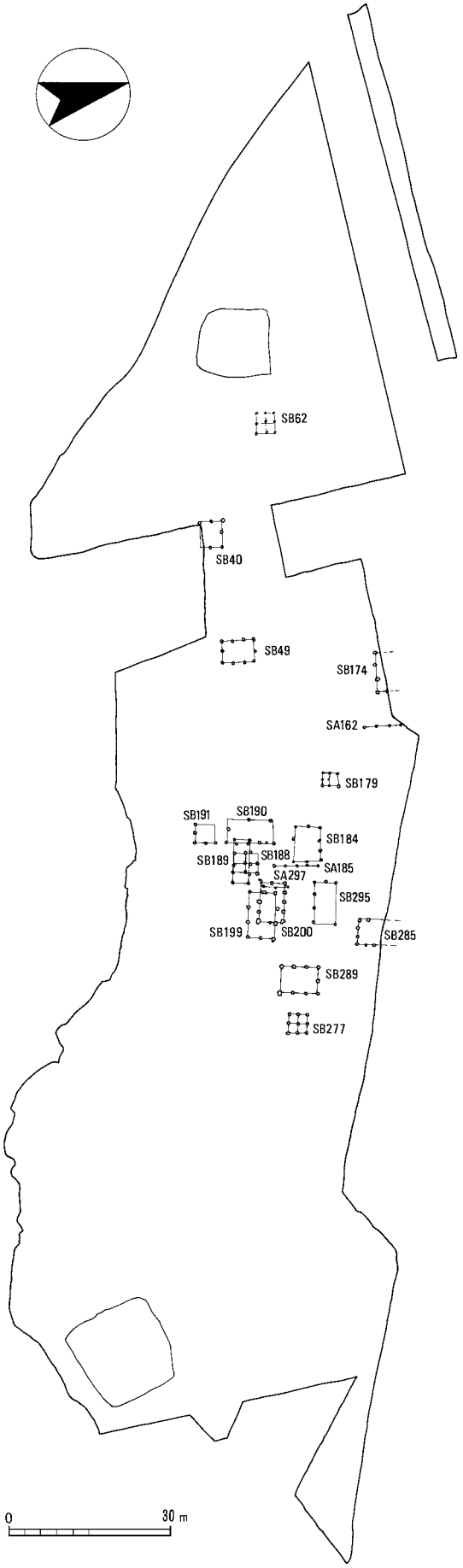
ＳＢ４０（第 45 図） 調査区南端で検出した 2 間×2 間の東西棟である。柱掘形は、形の乱れたものもあるが一辺 60 ㎝の方形を呈するものが基本であると思われる。柱痕跡の直径は 20 ～ 30 ㎝である。柱間は桁行が不等間、梁行は 1.2m の等間であるが、東側妻柱の柱痕跡がややずれるため、東側は不等間の可能性もある。時期決定の根拠に乏しいが、SB49 の南側梁行のほぼ延長上に妻柱が位置することや比較的長い柱間寸法からこの時期とした。

ＳＢ４９（第 45 図） 調査区中央で検出した 3 間×2 間の南北棟である。南側梁行の延長上に SB40 の妻柱が位置するが誤差が大きい。柱掘形は、一辺 50 ㎝の方形を呈するものと考えられるが、形の乱れたものも多い。直径 20 ㎝の柱痕跡が検出できたものもあり、4 基の柱穴からは拳大の石を検出した。柱の固定に使用されたものと考えられる。SE50 と重複するが、それより後出のものである。柱間は、桁行、梁行とも 2.0m の等間である。

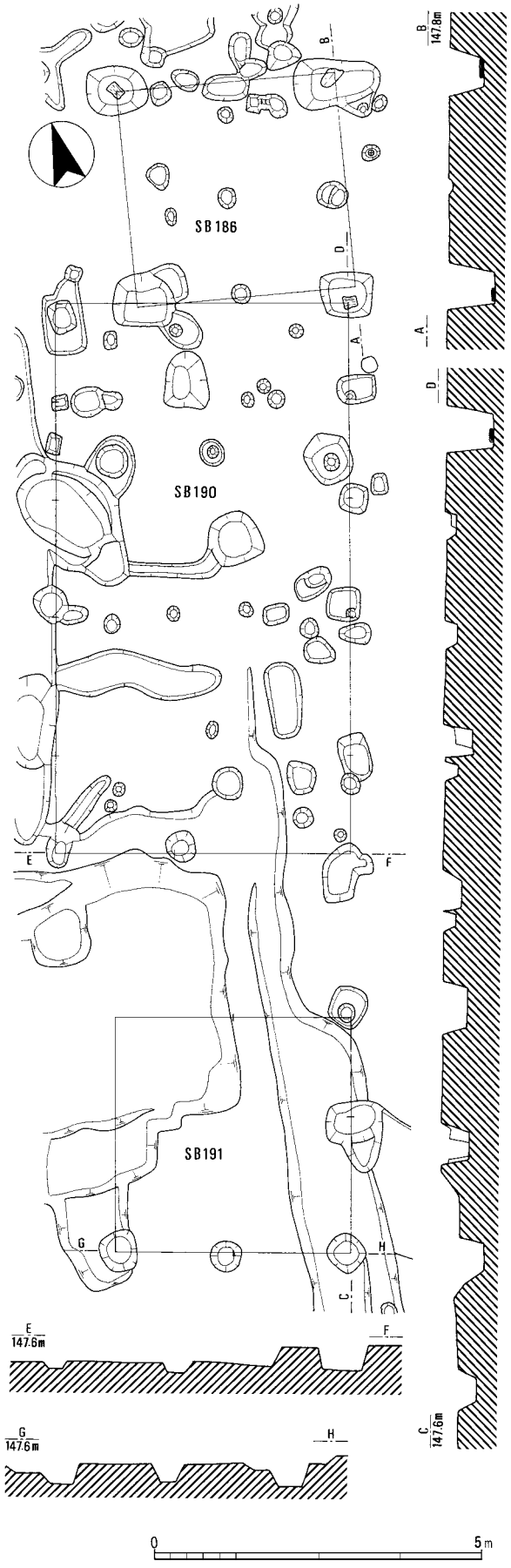
ＳＢ６２（第 26 図）「哀園森」の東側で検出した 2 間×2 間の総柱の東西棟である。柱掘形は直径 40 ㎝の円形を呈する小型のもので、直径 12 ㎝の柱が残存していたものもある。柱間は、桁行は 1.95m と 1.8m の不等間、梁行は 1.8m の等間である。奈良時代の遺物が出土しているが、SB40・49 と方向がほぼ揃うためこの時期とした。

ＳＢ１７４（第 47 図） 調査区北端での検出のため全体の規模や棟方向は不明であるが、3 間×1 間以上の東西棟に仮定する。その場合、桁行の柱間は 2.4m の等間となる。柱掘形は一辺 70 ～ 80 ㎝の方形を呈する大型のもので、南東隅のものには柱が残存していた。しかし腐食が激しく、直径等は不明である。柱痕跡によれば直径 20 ～ 30 ㎝の柱であったものと推定される。東側に SA162 が付属する。

ＳＢ１７９（第 51 図） 調査区中央で検出した 2 間×2 間の小規模な南北棟である。桁行北側の柱間が、相対する両者で異なり、このため東側の桁行が 30 ㎝長い。柱掘形は直径 30 ㎝の方形を呈する小型のもので、北西隅の柱穴には柱が残存していた。しかし、腐食が激しく直径等は不明である。北側の妻



第 41 図　平安時代前期 遺構配置図（1：1,200）



第 42 図　SB186・190・191 実測図（1：100）

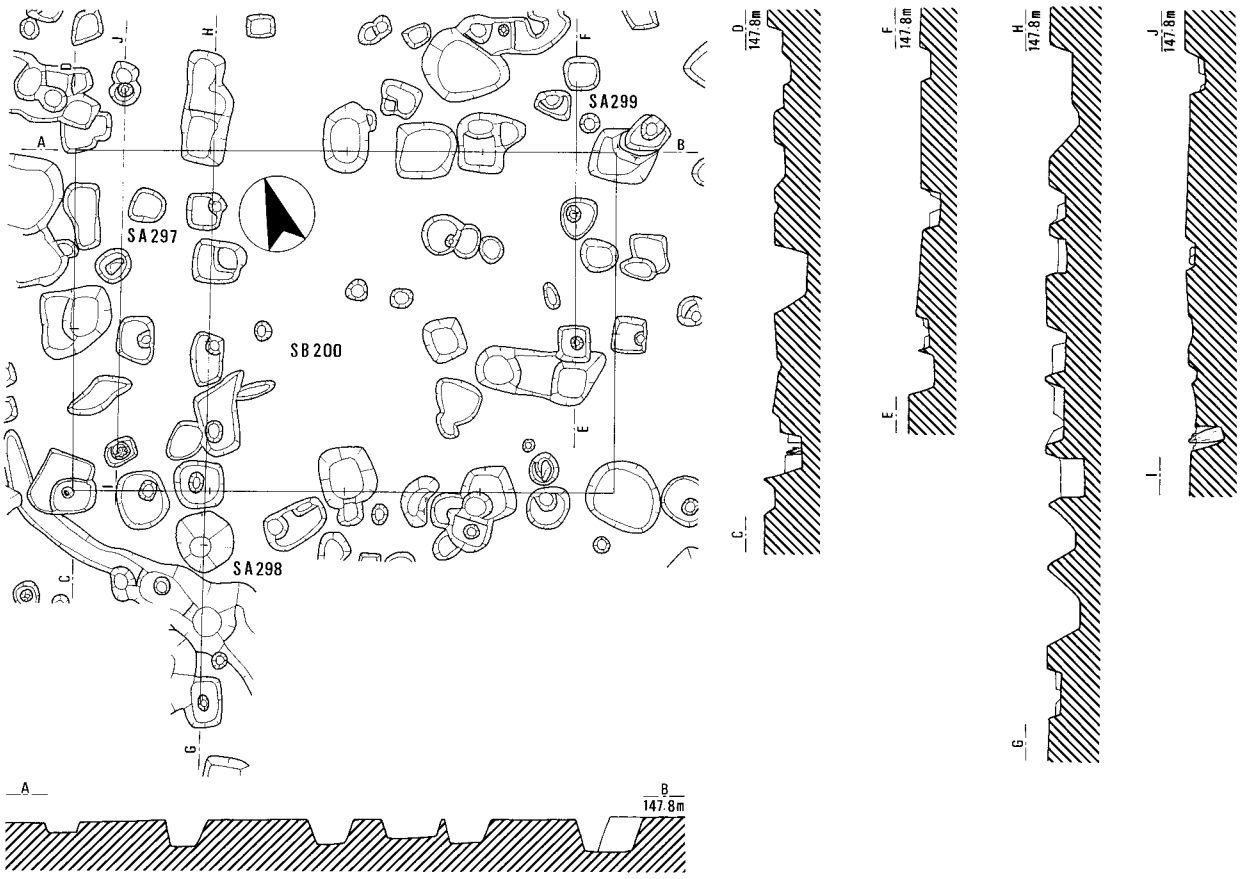
柱が検出できず、南側のものも他の柱穴より浅く検出面から 20 ㎝未満である。中央で偏平な石を検出した。束柱の礎石と考えたいが、掘形が検出できず疑問もある。しかし、検出面は石を含まない土質であるため、一応礎石としておく。時期決定の根拠に乏しいが、SB184 の北側桁行の延長上に南側梁行が位置することから、これと同時期とした。

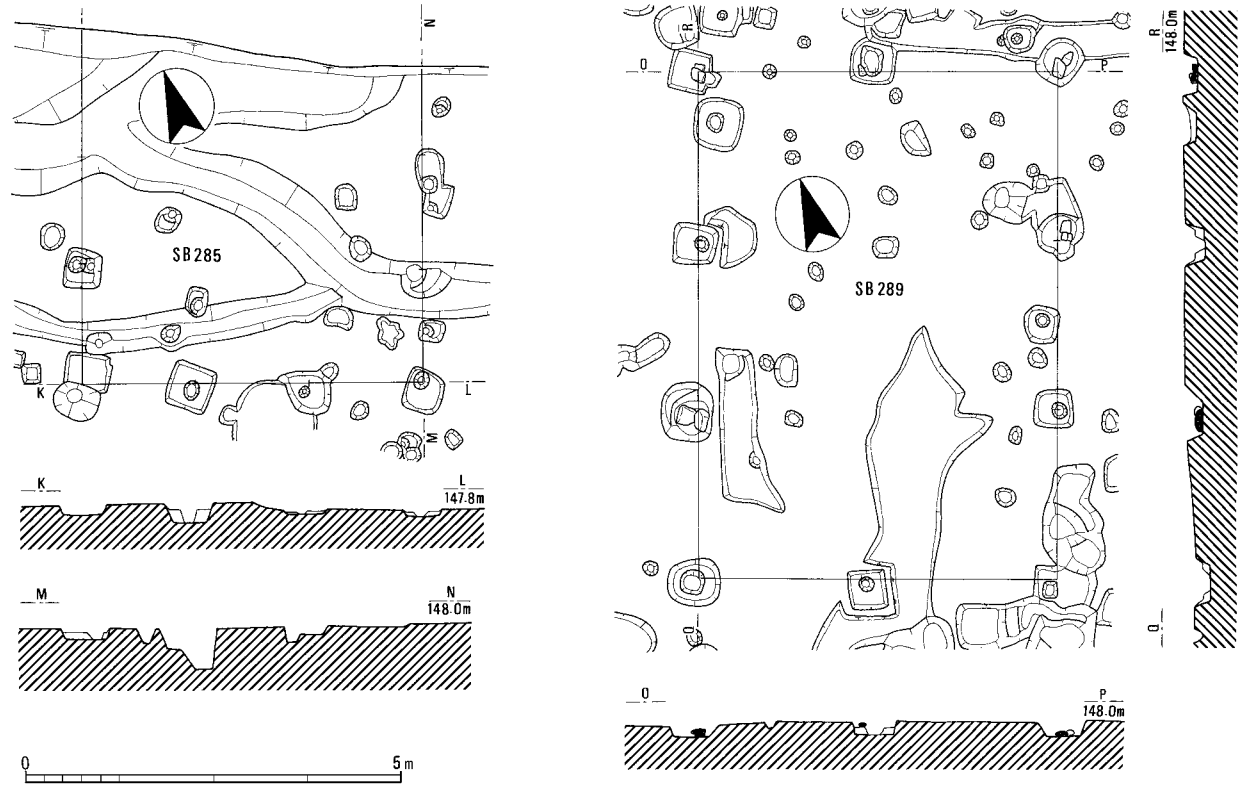
ＳＢ１８４（第 48 図）　調査区中央で検出した 3 間× 2 間の東西棟である。柱間は桁行、梁行とも不等間で、しかも相対する柱間でも一致しない。北側桁行の延長上に SB179 の南側梁行が位置し、同時期と考えられるが、両者とも時期決定の根拠に乏しい。SB189・199 等と方向がほぼ一致するため、疑問が多いものの、一応この時期としておく。柱掘形は、直径 30 ～ 40 ㎝の円形または方形を呈し、直径 15 ㎝ほどの柱痕跡を検出できたものもある。特殊器形土器（1016）が出土している。

ＳＢ１８８（第 32 図）　調査区中央で検出した。検出できなかった柱穴もあるが、2 間× 2 間の総柱の南北棟である。SB190・191 等と方向を揃える。柱掘形は、形の乱れたものもあるが、一辺 70 ㎝の方形を呈する大型のものである。しかし、柱痕跡は直径 20 ㎝の小さいもので、柱通りからやや外れるため誤認の可能性もある。柱間は桁行が 2.1m の等間、梁行は不等間である。

ＳＢ１８９（第 32 図）　調査区中央で検出した 4 間× 1 間の東西棟である。SB199 の南側桁行の延長上に北側桁行を揃えて建てられている。柱掘形は形の乱れたものもあるが、本来は一辺 50 ～ 60 ㎝の方形を呈するものと考えられ、直径 15 ～ 20 ㎝の柱痕跡を検出できたものもある。柱間は不等間である。

ＳＢ１９０（第 42 図）　調査区中央で検出した 5 間× 2 間の桁行の長い南北棟である。東側桁行を SB191 と揃えて建てられている。西側桁行の柱穴は検出できないものが多い。柱掘形の規模、形態は一様でないが、一辺 50 ㎝の方形を呈するものが基本と考えられる。これらから東側桁行のみを SB191 を含め、柱列とする方がよいかもしれない。しかし建物中央で、現況水田の境界にあたり、西側の水田は低く、開墾時にかなり削平しているものと考えられる。このため西側桁行の残存状況が





第 43 図　SB200・285・289、SA297 ～ 299 実測図（1：100）

不良であるものとして、建物と考えることにした。柱間は、桁行、梁行ともに不等間である。

ＳＢ１９１（第42図） 調査区中央で検出した2間×2間の建物である。棟方向は不明であるが、一応南北棟と仮定する。この場合、東側桁行はSB190と揃う。北側妻柱は検出できず、建物とするに疑問もあり、前述したように柱列の可能性もある。柱掘形は一辺50㎝の方形を呈し、直径25㎝の柱痕跡が確認できたものもある。

ＳＢ１９９（第32図） 調査区中央で検出した3間×2間の東西棟である。柱掘形は一辺60㎝前後の方形を呈するが、形の乱れたもの、小さい円形を呈するもの等一様でない。南東隅の柱穴では、柱が残存していた。その直径は20㎝を測り、掘形からの沈下は認められない。その他の柱穴からは、柱痕跡や柱抜き取り痕跡が検出できた。柱痕跡から小石を検出したものがあり、根石と考えられる。柱間は、桁行は等間であるが、2.85mを測る広いもので、梁行は不等間である。黒色土器Ａ類杯（1017）が出土している。

ＳＢ２００（第43図） 調査区中央で検出した4間×2間の東西棟である。北側桁行をSB289の南側梁行に揃えて建てられている。柱掘形は一辺50～70㎝の不整方形を呈する大型のものである。南西角の柱穴には柱が残存していたが、腐食が激しく直径を計測することは不可能である。しかし、土層観察の結果、直径15～18㎝の柱であったようである。柱間は桁行1.8mの等間、梁行は不等間である。

ＳＢ２７７（第33図） 調査区北部で検出した2間×2間の総柱建物である。棟方向は不明であるが、一応南北棟と仮定しておく。SB289と方向を揃え、これに付属する建物と考えられる。柱掘形は、一辺50～30㎝の方形を呈するものを基本とするが、その規模、形態に統一を欠く。さらに、束柱に相当する位置に3基の柱穴があるが、柱通りからはずれるものや、極端に規模が小さいもので、総柱建物とするに疑問である。南西隅の柱穴には柱が残存していたが、腐食が激しく直径等詳細は不明である。柱痕跡を検出できたものも多く、直径15～20㎝を測る。

ＳＢ２８５（第43図） 調査区北端の検出のため全体の規模は不明であるが、3間以上×3間の南北棟と仮定した。柱掘形は一辺60㎝の方形を呈し、直径20㎝の柱痕跡を確認できたものも多い。柱間は桁行、梁行とも1.5mの等間である。古墳～飛鳥時代の遺物が出土しているが、東側桁行がSB199の東側梁行の延長上にほぼ位置するため、これと同時期のものとした。

ＳＢ２８９（第43図） 調査区北部で検出した3間×2間の南北棟である。南側梁行をSB200の北側桁行に揃えて建てられている。柱掘形は一辺50～60㎝の方形を呈し、直径20㎝の柱痕跡を検出できたものもある。しかし、深さは約20㎝未満で、かなり削平されているようである。20～30㎝の石が検出された柱穴が5基ある。柱の沈下を防ぐためのものと考えられる。柱間は、桁行は2.25m、梁行は2.4mのそれぞれ等間である。

ＳＢ２９５（第37図） 調査区北部で検出した3間×2間の東西棟である。北側桁行の柱穴が全く検出できず、柱間も不等間で、建物とするに疑問の多いものである。検出できた柱穴も深さ10㎝前後しかないため、削平されてしまったものも多いと考えられ、一応建物の可能性を提示しておく。柱掘形は一辺30～40㎝の方形を呈するものと考えられるが、形の乱れたものもある。ミニチュアの鉢（139）の他、時期決定の根拠に乏しいが、SB200との位置関係によりこの時代のものとした。その場合、139は混入の可能性が高い。

Ｂ．柱列

ＳＡ１６２（第47図） 調査区北端で3間分を検出した柱列でSB174に付属するものと考えられる。北端は調査区外のため不明である。柱間は不等間で、柱掘形は直径25㎝の円形を呈する小型のものである。北端の柱穴には柱が残存していた。直径8㎝の柱で、掘形より5㎝ほど沈下していた。

ＳＡ１８５（第48図） 調査区中央で4間分を検出した柱列である。柱掘形は一辺30㎝の方形または円形を呈し、直径10㎝の柱痕跡を3基の柱穴で確認できた。この時期とする根拠に乏しいが、SB200･295に付属するものと考え、この時期とした。

ＳＡ２９７（第43図） 調査区中央で2間分を検出した柱列で、SB199に付属するものと考えられる。柱掘形は一辺30㎝の方形または円形を呈し一様で

ない。南端の柱穴に残存する柱は直径 20 ㎝を測り、掘形に比べ非常に太いものである。中央の柱穴には石が据えられており、柱の沈下を防ぐためのものと考えられる。深さは 20 ㎝以下であるが、南端のものは 40 ㎝を測り極端に深い。したがって、他の建物柱穴の可能性もある。

7．平安時代中期の遺構

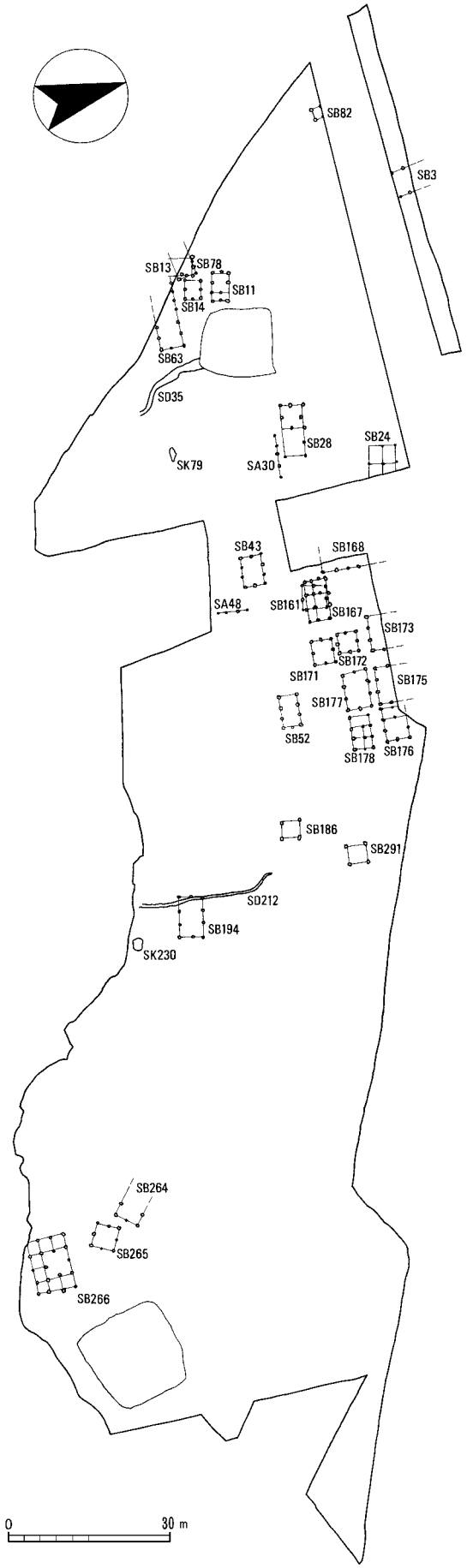
ここでいう平安時代中期とは、おおむね 10 世紀代のものとする。掘立柱建物 27 棟、柱列 2 条等を検出し、掘立柱建物には規則的な配列が認められる一群もある。しかし、奈良時代のものと方向が近似するため、両者の識別に疑問の残るものもある。

A．掘立柱建物

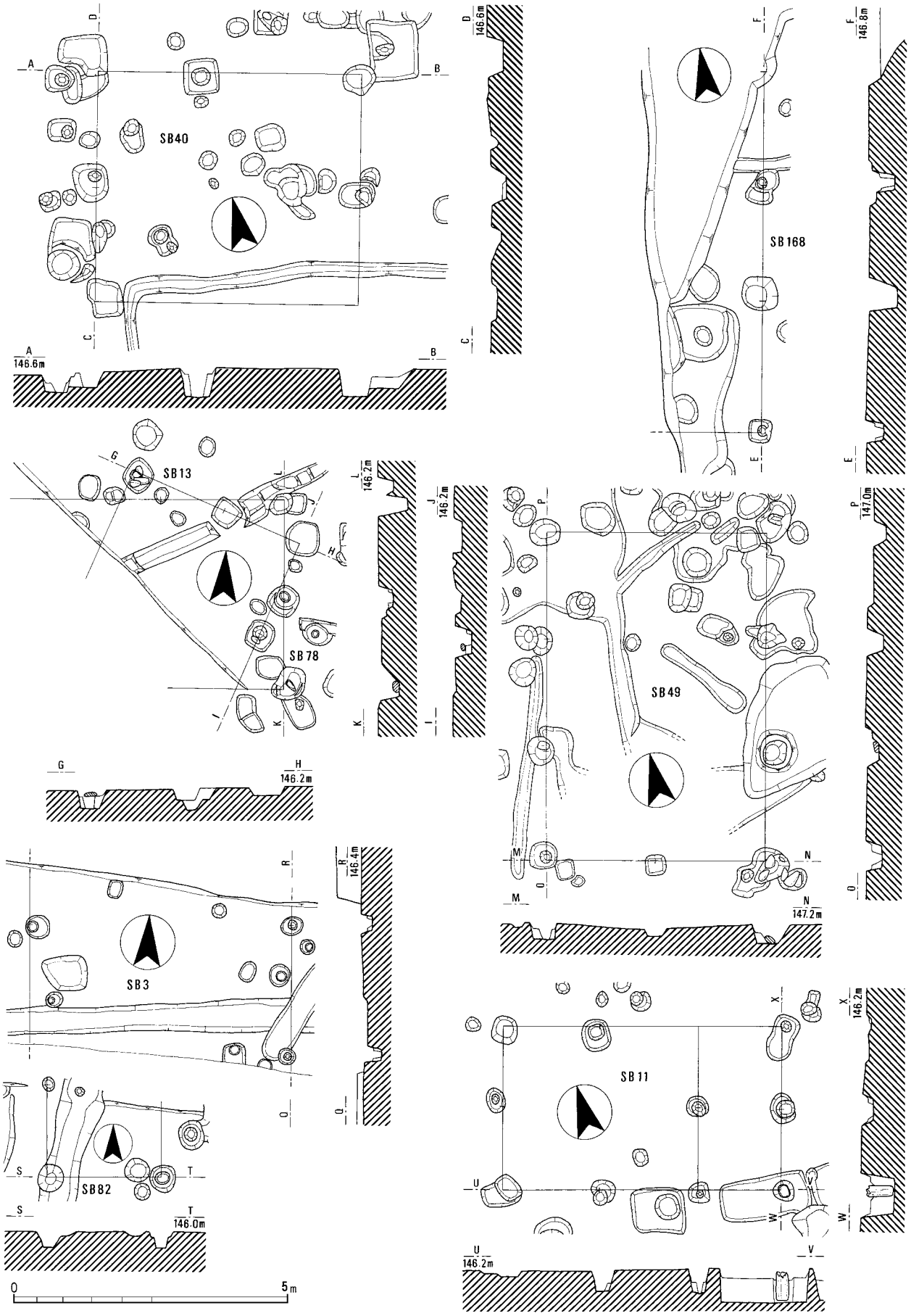
ＳＢ３（第 45 図） 調査区北端での検出のため全体の規模は不明であるが、上野市遺跡調査会の調査結果[20]を合わせると 3 間以上× 2 間の南北棟と考えられる。出土遺物がなく時期決定の根拠に乏しいが、離れてはいるものの SB78 と方向が一致するため、一応この時期としておく。柱掘形は直径 30 ～ 40 ㎝の円形を呈し、直径 15 ㎝の柱痕跡が検出できた。

ＳＢ１１（第 45 図）「哀園森」の西側で検出した 2 間× 2 間の東西棟である。東側に 1 間分の庇が付く。柱間は、桁行 1.8m、梁行 1.5m の等間で、庇部の柱間は 1.5m と狭い。柱掘形は、一辺 40 ～ 50 ㎝の不整方形を呈し、検出できなかった柱穴もある。深さも極端に浅いものがあり、建物とするに疑問の残るものである。SB13・14 と方向を揃えるため、この時期とした。その場合、南東隅に残る柱は、その規模や掘形の深さとの関係から奈良時代の建物 SB15 のものであることは確実と考えられることから、矛盾が生じる。したがって、SB15 廃絶の際、地中に残存した柱の上に偶然に SB11 の柱を据えたものと解釈したい。

ＳＢ１３（第 45 図） 調査区南西端で検出した 2 間以上× 2 間の南北棟と考えられ、SB11・14 と方向を揃える。柱掘形は一辺 50 ㎝の方形を呈し、深さは 40 ㎝を計るが、20 ㎝足らずのものもあり一様でない。直径 20 ㎝の柱痕跡を検出できたものもある。柱痕跡に沿って拳大の石が環状に置かれており、柱の固定に使用されたことが明確である。



第 44 図　平安時代中期 遺構配置図（1：1,200）



第 45 図　SB 3・11・13・40・49・78・82・168 実測図（1：100）

ＳＢ１４（第24図）「哀園森」の南西で検出した2間×2間の東西棟で、SB11・13と方向を揃えて建てられている。柱掘形は直径40～50㎝の円形または円形に近い方形を呈し、直径10㎝の柱痕跡を検出できたものもある。当初、南西角の柱穴が検出できなかったため、サブトレンチを設定し、平面断面の両方から検出につとめた。その結果、柱穴埋土上部が、検出面と酷似した土であったため、検出を難解なものにしていることがわかった。

ＳＢ２４（第25図） 調査区北端での検出のため全体の規模は不明であるが、一応総柱の東西棟と仮定する。上野市遺跡調査会の調査結果[25]を合わせると、梁行は3間、桁行については不明である。柱掘形は直径25㎝の円形を呈する小型のものであるが、一辺50㎝の方形の掘形を検出したものがあり、この小型の掘形としたものは柱痕跡のみが検出できたものであるかもしれない。掘形の深さは、検出面から40㎝までしっかり掘り込まれている。時期決定の根拠に乏しく、飛鳥～奈良時代の須恵器杯が出土しているものの、柱穴に対し柱間が長く、束柱をもつこと等により、平安時代末期にちかいものであるが、柱掘形が整然とした方形であるため、この時期としておく。

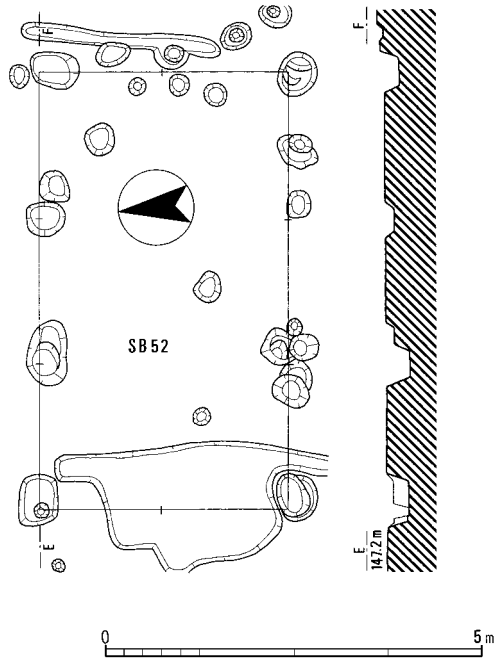
ＳＢ２８（第26図）「哀園森」の東側で検出した4間×2間の東西棟で、中央に間仕切を設ける。柱穴の深さは約30㎝であるが、10㎝足らずの浅いものもあり、建物とするに疑問も多い。柱掘形は一辺50㎝の方形または円形に近い方形を呈し、柱が残存しているものもある。柱は腐植が激しいが、直径20㎝のものであったことがわかる。柱間は、桁行、梁行とも不等間である。奈良～平安時代前期の可能性も大きいが、柱掘形が小型の円形であるため、この時期としておく。

ＳＢ４３（第27図） 調査区中央で検出した3間×2間の東西棟である。柱掘形は一辺50～40㎝の方形を呈するが、直径30㎝の円形を呈するものもある。柱痕跡の直径は20～25㎝である。柱間は、桁行・梁行とも不等間である。飛鳥時代的な土師器高杯が出土しているが、SB167・171等の一群と方向を揃えるため、この時代のものとした。

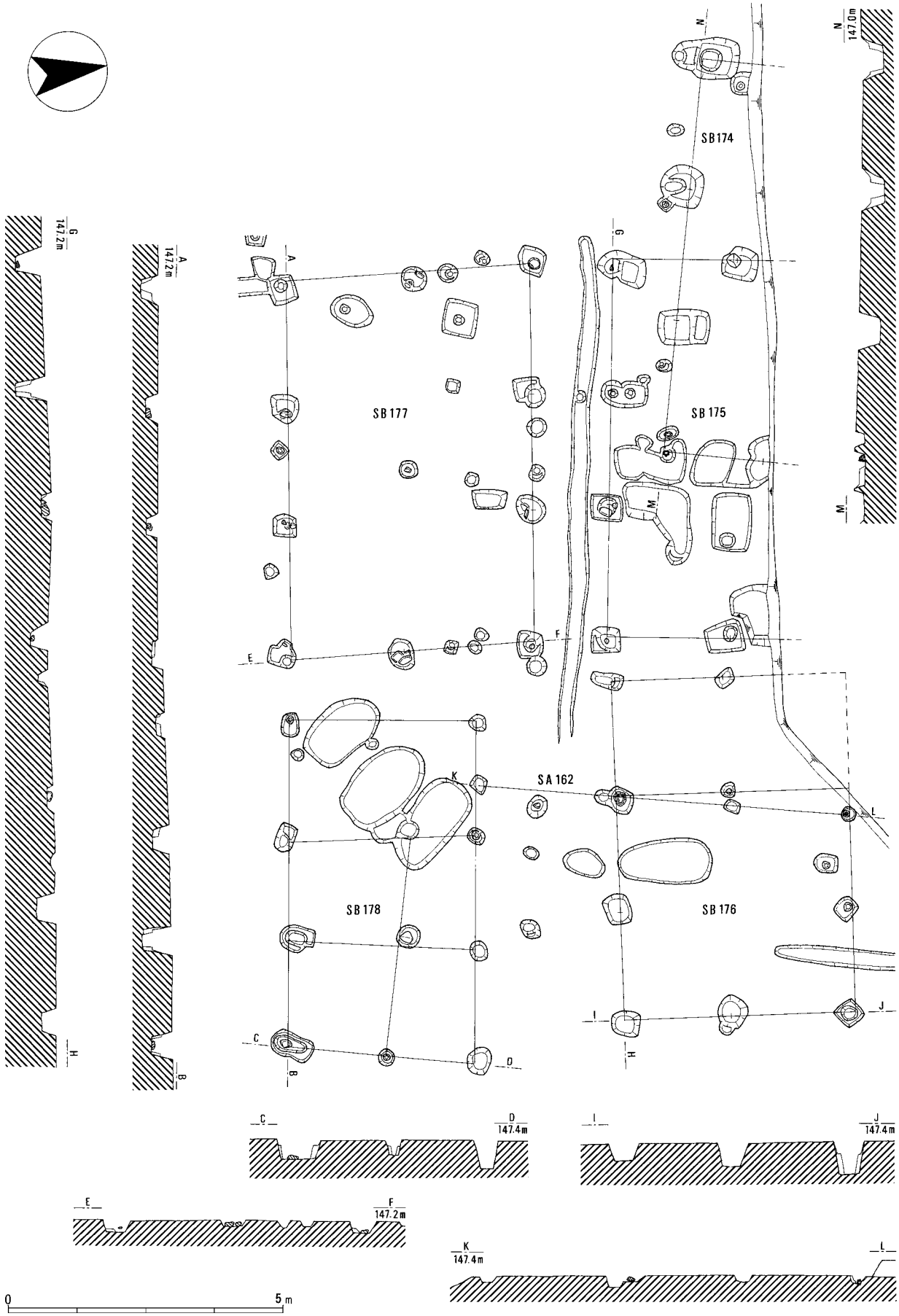
ＳＢ５２（第46図） 調査区中央で検出した3間×2間の東西棟である。柱掘形は一辺50～60㎝の方形を呈するものと考えられるが、形の乱れたものや柱通りからはずれるものもある。西側妻柱が検出できず、東側のものも深さ10㎝程度で、柱通りからはずれ疑問もある。唯一検出できた柱痕跡は、直径20㎝のものである。桁行の柱間は、1.95mの等間である。SB166を中心とする奈良時代の一群とすべきか、SB167等の一群に加えるか迷ったが、後者の方がよく方向が揃うのでこの時期とした。

ＳＢ６３（第24図）「哀園森」の南側で検出した一応6間×2間の東西棟とする。検出面の砂質の強い部分を柱穴として検出したところ10㎝足らずの深さのものであった。建物西部の柱穴には、直径15㎝の柱が残存するもの、根巻き状の石が検出されたものもあり、西側半分のみを建物とした方がよいかもしれない。柱間は不等間ではあるものの、西側3間分と東側では大きく異なり、それを裏付けるかのようである。しかし、浅いながらも一辺40～50㎝の方形の掘形が並ぶため、桁行6間の建物とする。時期決定の根拠に乏しく、奈良時代の可能性も大きいが、離れてはいるもののSB43と方向を揃えるため、この時期とした。

ＳＢ７８（第45図） 調査区南西端で検出した2間以上×2間の東西棟である。柱掘形は一辺50㎝



第46図　SB52 実測図（1：100）



第 47 図　SB 174 ～ 178、SA162 実測図（1：100）

の方形を呈するものが基本と考えられるが、形の乱れたものや小さいものもあり一様でない。南東角の柱穴から20㎝ほどの石を検出した。柱の固定に使用されたものかも知れない。黒色土器A類椀(1020)が出土している。

ＳＢ８２（第45図） 調査区北西部で検出した。柱穴2基のみの検出であるが、上野市遺跡調査会の調査結果[4]と合わせ、2間×1間の南北棟と推測した。しかし、桁行柱間は1.65m ＋ 1.8mと不揃いで柱通りも悪く、建物とするに疑問の多いものである。SB3と方向をほぼ揃えることから、一応建物の可能性を指摘しておく。

ＳＢ１６１（第30図） 調査区北部で検出した2間×2間の南北棟である。柱掘形は直径30 ～ 40㎝の方形または円形を呈し、根石を検出できたものも多い。柱間は不等間で深さも一様でなく、建物とするに疑問も残る。出土遺物は、奈良時代を示すが、根石を伴う状況や、遠く離れるもののSB11・13・14と方向がほぼ揃うために、この時期とした。

ＳＢ１６７（第30図） 調査区北部で検出した3間×4間の東西棟で、SB171・177等と方向を揃えて建てられている。梁行の柱数が桁行より多い総柱建物である。柱掘形は直径50㎝の円形を呈するものが基本で、2基の柱穴で柱が残存していたが、腐食が激しく痕跡程度の残りである。柱穴断面の観察によれば直径20㎝の柱であったことがわかる。

ＳＢ１６８（第45図） 調査区北端で検出した。調査区端での検出のうえに撹乱坑に切られ、全体の規模は不明であるが、一応南北棟と仮定する。その場合、桁行は3間分を確認でき、梁行は全く不明である。このため南北に延びる柱列の可能性も残る。柱掘形は形の乱れたものもあるが、もとは一辺50 ～ 60㎝の方形を呈するものと考えられる。柱痕跡の直径は15㎝である。時期決定の根拠に乏しいが、SB167・171と方向を揃えるため、この時期とした。

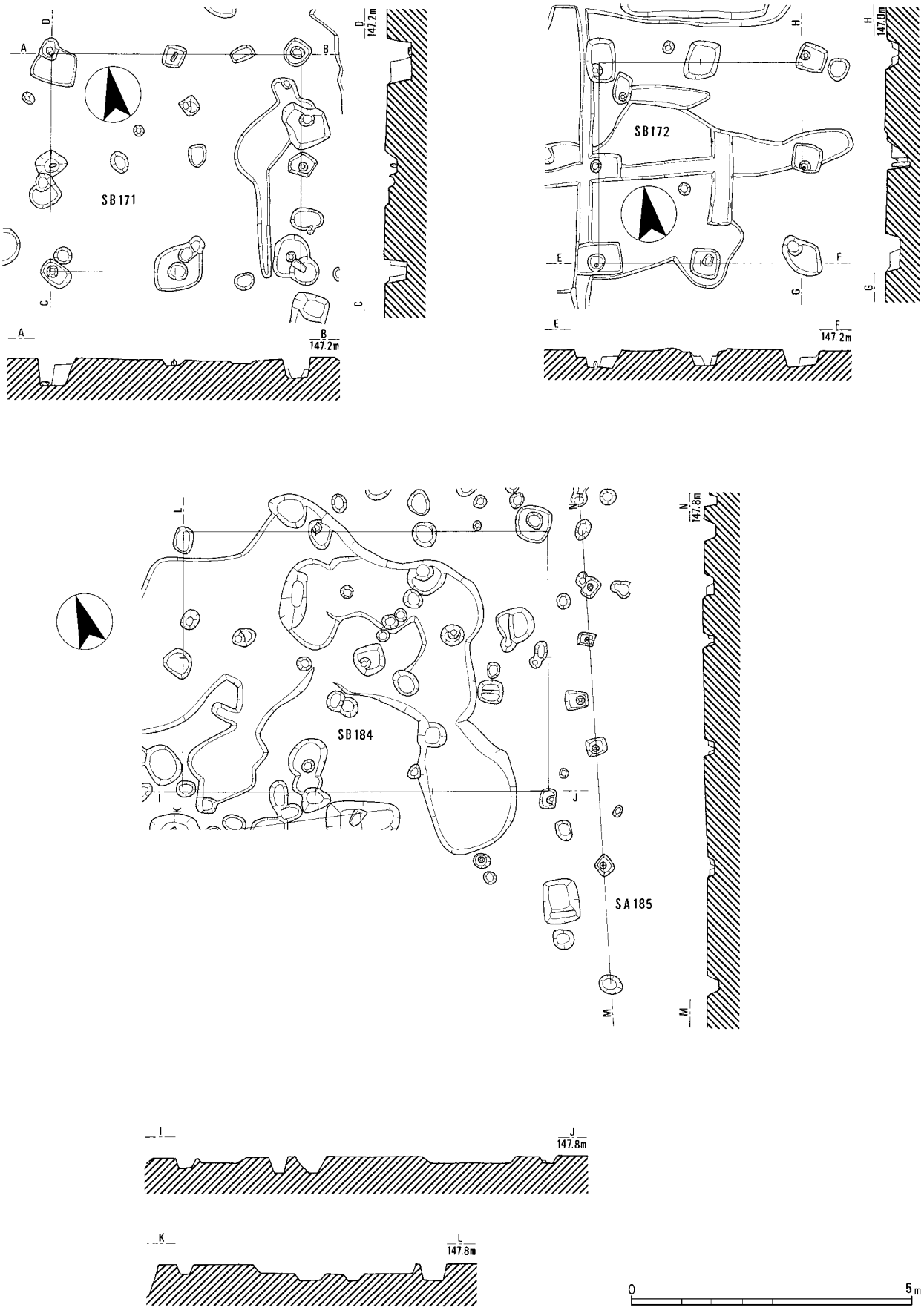
ＳＢ１７１（第48図） 調査区北部で検出した2間×2間の建物で、SB167・172等と方向を揃えて建てられている。棟方向は不明であるが、一応東西棟と仮定する。その場合、桁行は2.25mの等間、梁行は不等間である。柱掘形は一辺40 ～ 50㎝の方形を呈し、直径20㎝程度の柱痕跡を検出できたものもある。柱が残存しているものも2基あったが、腐食が激しく直径等は不明である。また、小石が入れられているものがあり、柱の固定か、沈下防止に使用されたものかもしれない。四隅の柱穴は、深さ40 ～ 50㎝と深いが、中央のものは桁行、梁行とも10㎝足らずの極端に浅いものである。

ＳＢ１７２（第48図） 調査区北部で検出した2間×2間の建物である。棟方向は不明であるが、一応東西棟に仮定する。SB177・178と南側桁行を揃え、3棟並ぶ配置を呈する。柱間は、1.8mの等間で、柱掘形は一辺50 ～ 60㎝の方形を呈し、2基の柱穴には柱が残存していた。柱は腐植が激しく直径等の計測が不可能であるが、柱穴断面の観察により直径20㎝であったことがわかる。また、掘形より若干沈下していた。

ＳＢ１７３（第31図） 調査区北端での検出のため全体の規模は不明であるが、3間×2間の東西棟と考えられる。SB175・176と南側桁行を揃え、3棟並ぶ配置を呈する。桁行は2.1mの等間、梁行は1間分しか検出できなかったが、2間と推定した。柱掘形は一辺60㎝の方形を呈するが、妻柱は一辺40㎝とやや小さい。柱痕跡は、妻柱で直径15㎝ほどのものを検出したが、側柱のものはすべて柱抜き取り痕と考えられる。

ＳＢ１７５（第47図） 調査区北端での検出のため全体の規模は不明であるが、3間×2間の東西棟に推定できる。南側桁行は、やや方向が異なるもののSB173・176と揃えて建てられ、さらにSB177の北側桁行とは柱間を揃えている。柱間は不等間で、柱掘形は一辺50㎝の方形を呈する。直径15 ～ 25㎝の柱痕跡を検出できたものもあり、多くの柱穴から拳大の石が検出できた。その状況から、根巻き石と考えられる。

ＳＢ１７６（第47図） 調査区北端で検出できた3間×2間の東西棟である。南側桁行は、若干方向が異なるもののSB173・175と揃えて建てられている。柱間は桁行、梁行とも不等間で、西側1間分に間仕切りがある。柱掘形は小さいものもあるが、一辺50㎝の方形を呈するものが基本であろう。直径25㎝の柱痕跡を検出できたものもあり、西南隅のものは南側へ抜き取られている。2基の柱穴から

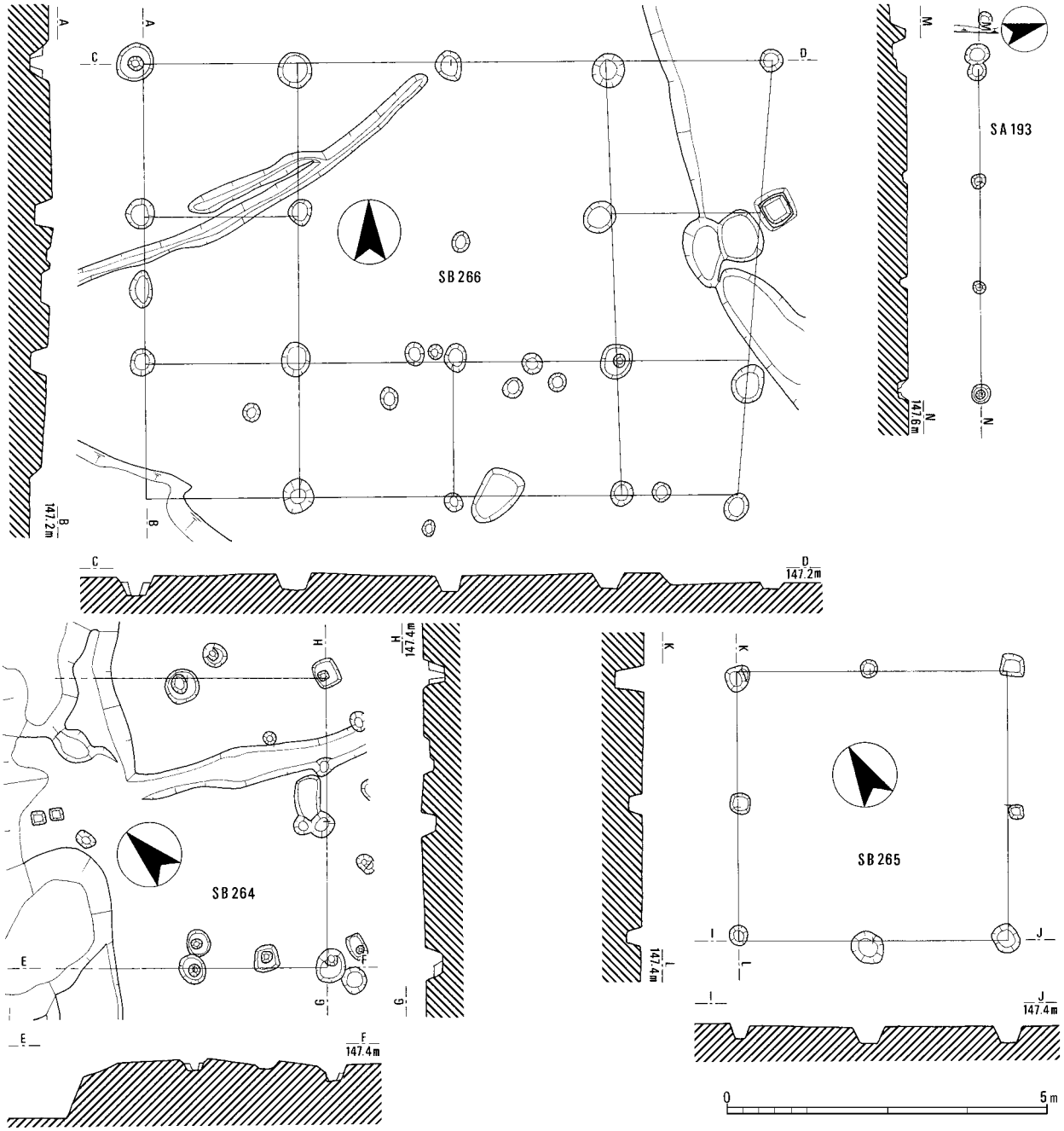


第 48 図　SB171・172・184、SA185 実測図（1：100）

根石が検出できた。

ＳＢ１７７（第47図） 調査区北部で検出した3間×2間の東西棟である。南側桁行はSB172・178と揃えて建てられており、北側桁行はSB175と柱筋を揃えている。桁行が、北側と南側でややずれるために、平行四辺形の平面形となる。柱間は、桁行、梁行とも不等間である。柱掘形は、一辺50～40㎝の方形を呈するものと円形のものがあり、一様でない。大半の柱穴から拳大の石が検出できたが、根石と考えられるものと、根巻き石状のものとがある。

ＳＢ１７８（第47図） 調査区北部で検出した3間×2間の東西棟である。南側桁行をSB172・177と揃えて建てられている。北側桁行は南側より30㎝長く、このため歪んだ平面形を呈する。柱間も桁行、梁行とも不等間であるが、北側桁行のみは2.1mの等間である。東側2間分には束柱が認められる。西側梁行の妻柱が検出できなかったが、総柱建物と考えた方がよいかもしれない。柱掘形は直径20～40㎝の円形を呈する小型のもので、柱痕跡は直径15㎝



第49図　SB264～266、SA193 実測図（1：100）

ほどである。根石を検出できた柱穴が2基ある。

ＳＢ１８６（第42図） 調査区中央で検出した1間×1間の変則的な建物で、棟方向は不明であるが、一応南北棟と仮定する。SB198・287・294と方向を揃えるため、奈良時代とすべきかもしれないが、この時代の建物SB194とも揃うことや、同様な建物SB291をこの時代としたためによる。柱掘形は一辺80～90㎝の方形を呈する大型のもので、深さも検出面から60～80㎝を測る深いものである。3基の柱穴から礎板を検出した。腐食が激しく痕跡程度の残存であるが、20×10㎝程度の板材である。

ＳＢ１９４（第14図） 調査区中央で検出した3間×2間の東西棟である。柱掘形は、直径40～55㎝の円形または楕円形を呈し、柱の残存するものもあるが、腐食が激しく詳細は不明である。また、根石をもつものもある。

ＳＢ２６４（第49図） 調査区南東部で検出した。棟方向は不明であるが、東西棟と仮定した場合、梁行は2間、桁行はSD201と重複のため柱穴を検出できず、1間分しか確認できない。掘形は一様でないが、元は一辺40㎝の方形を呈していたものと考えられる。妻柱以外では、柱痕跡が確認でき、その直径は15～30㎝である。弥生土器が出土したのみで、時期決定の根拠に乏しいが、SD201より東側には飛鳥～平安時代前期の遺構は存在しないことから、一応この時期としておく。

ＳＢ２６５（第49図） 調査区南東部で検出した2間×2間の建物である。棟方向は不明であるが、一応南北棟と仮定する。柱間は等間であるが、掘形は直径30～50㎝の円形を呈し、様々である。時期決定の根拠に乏しいが、SD201より東側には飛鳥～平安時代前期の遺構は存在しないことから、一応近接するSB266と同時期としておく。

ＳＢ２６６（第49図） 調査区南東部で検出した建物である。4間×3間の総柱にちかい構造である。北側の桁行に対して南側が短く、歪んだ平面形を呈する。このため、2間×2間の3面庇付き建物の可能性も残る。

ＳＢ２９１（第36図） 調査区北部で検出した1間×1間の建物である。一応南北棟と仮定する。時期決定の根拠に乏しいが、やや誤差が大きいもののSB167南側桁行の延長上に南側梁行が位置するためこの時期とする。柱掘形は一辺70㎝の方形を呈する大型のもので、柱痕跡は直径25㎝を測る。

Ｂ．柱列

ＳＡ３０（第26図） 調査区中央で4間分を検出し、SB28に付属する柱列である。柱掘形は、東側3基は比較的大きく、一辺30～50㎝の長方形または円形を呈し、深さも20～30㎝と深い。しかし西側2基は直径40㎝の不整円形を呈するやや小さいもので、深さも10㎝足らずの浅いものである。このため一連の柱列とするに疑問もあり、東側2間分のみとすべきかもしれない。柱間は2.1mであるが、西から2間目は1.2mと極端に狭い。

ＳＡ４８（第28図） 調査区中央で3間分を検出した柱列である。SB43南側桁行の延長上に北端の柱が位置する。柱掘形は直径40～50㎝の円形を呈し、直径20㎝の柱痕跡を検出できたものもある。南端の柱穴が直径20㎝と極端に小さいが、柱痕跡のみを検出した可能性がある。柱間は、不等間である。

Ｃ．土坑

ＳＫ７９（第8図） 調査区南部で検出した長辺1.5m、短辺70㎝の方形を呈する土坑で、深さは20㎝程度である。底部は平坦で、黒色土器Ａ類椀（1018）が出土しているが、埋納とは考えられない。

ＳＫ２３０ 調査区南端で検出した、長辺2m、短辺1.5mの楕円形に近い方形を呈する。底部は平坦で、深さは60㎝を測る。近くにも同様な土坑が数基あり、同じ目的で掘られたものかもしれない。黒色土器Ａ類椀（1019）が出土している。

Ｄ．溝

ＳＤ３５（第8図） 若干弧を描きながら南北に延びる溝であるが、北端は「哀園森」のため、南端はSD58との重複のため識別できず、それぞれ不明である。幅1.5m、深さ20㎝程度で、その機能は不明である。SD33と一連の可能性のある弥生時代の溝が重複している様子が、壁付近で伺える。

ＳＤ２１２（第14図） 調査区中央を南北に延びる溝である。北端は若干蛇行しながら消滅するが、南端はほぼまっすぐ調査区外へ延びている。幅30～60㎝、深さ10㎝未満である。

８．平安時代末～鎌倉時代の遺構

掘立柱建物２棟、瓦器椀を埋納した多数の土坑を検出した。掘立柱建物は、いずれもこの時期とする根拠がなく、推定である。

Ａ．掘立柱建物

ＳＢ１８０（第 51 図） 調査区中央で検出した３間×３間の総柱建物である。棟方向は不明であるが、一応東西棟と仮定する。桁行は南側が、梁行は東側がそれぞれ 30 ㎝長く、このため歪んだ平面形を呈する。柱掘形は直径 20 ～ 30 ㎝の円形または方形を呈する小型のもので、直径 15 ㎝の柱痕跡を確認できたものもある。柱が残存する柱穴が１基あったが、腐食が激しく直径等は不明である。奈良時代の遺物が出土しているが、建物の形態から中世のものと考えられ、一応鎌倉時代としておく。

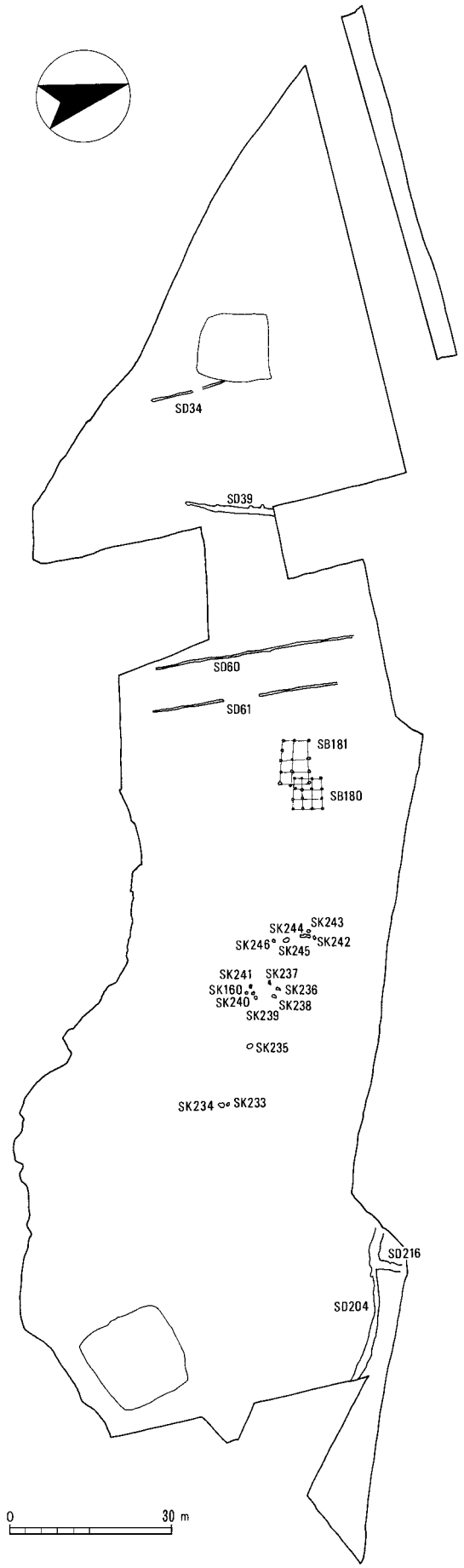
ＳＢ１８１（第 51 図） 一次・二次両調査区にまたがって検出した４間×２間の東西棟である。東側梁行が西側より 20 ㎝長く、非常に歪んだ平面形を呈する。桁行の柱間も不等間で、さらに北側桁行の柱穴が１基検出できなかった。したがって、今回報告する建物の中で一番疑問の多いものであるが、あえてその可能性を提示する。東側２間分には束柱があり、一部総柱となる。柱掘形は直径 30 ㎝の円形または方形を呈する小型のもので、直径 15 ㎝の柱痕跡を検出できたものもある。奈良時代の遺物が出土しているが、建物の形態から中世のものと考えられ、一応鎌倉時代としておく。

Ｂ．土坑

0.6 × 1m の不定方形のものに瓦器椀を１個～２個埋納したもので、調査区中央で 15 基検出した。また、埋納遺物はないものの形態その他が似る土坑も多数混在する。これらの埋土には炭や焼土は含まれず、土坑壁も焼けた様子は認められない。これらは中世墓と考えられるが根拠に乏しく、ここでは埋納遺物を伴うもののみを土坑として扱うこととする。

ＳＫ１６０　調査区中央部の土坑群に南接して検出した。長辺 1.8m、短辺 1m の方形を呈する。深さは 20 ㎝前後で、底部は平坦である。瓦器椀が 1/2 の残存で出土した。確証はないが、他のものと同様に埋納されたものである可能性が大きい。

ＳＫ２３３（第 53 図） 調査区中央東寄りで検出



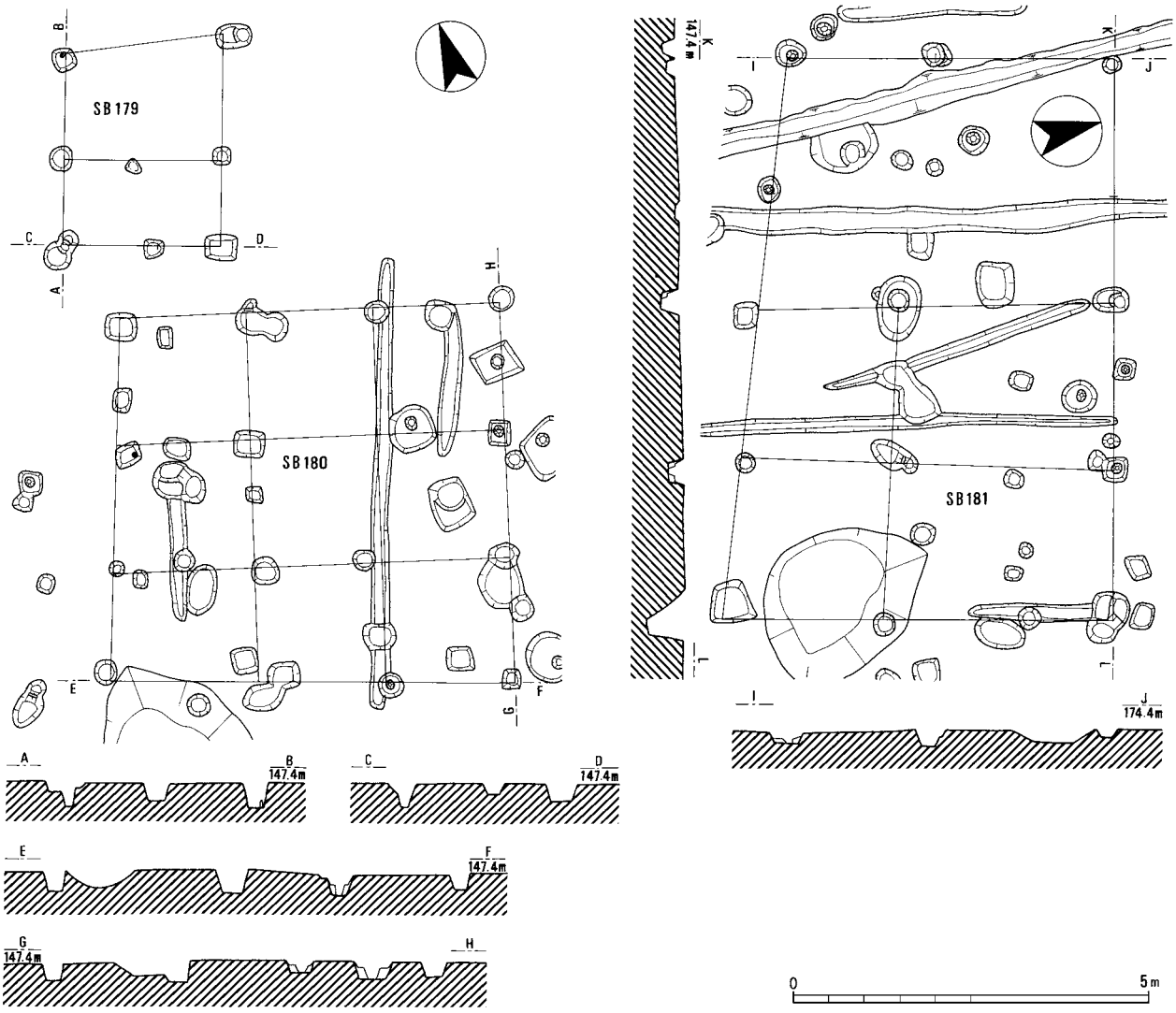
第 50 図　平安時代末～鎌倉時代 遺構配置図（1：1,200）

した。SK234と共に、これら土坑群の中で最も東部に位置する。一辺50×70㎝の不整長方形を呈し、深さは20㎝ほどであるが、南半は5㎝ほど浅くなっている。土坑中央で瓦器椀（1023）が、ほぼ完形で出土した。正立で、土坑底に接する状態である。埋土には炭や焼土が含まれておらず、土坑壁も焼けていない。土坑周囲は、1×1.5mの不整長方形で深さ5㎝程度の土坑となっている。別遺構の重複と考えられるが、同一遺構の可能性も残る。

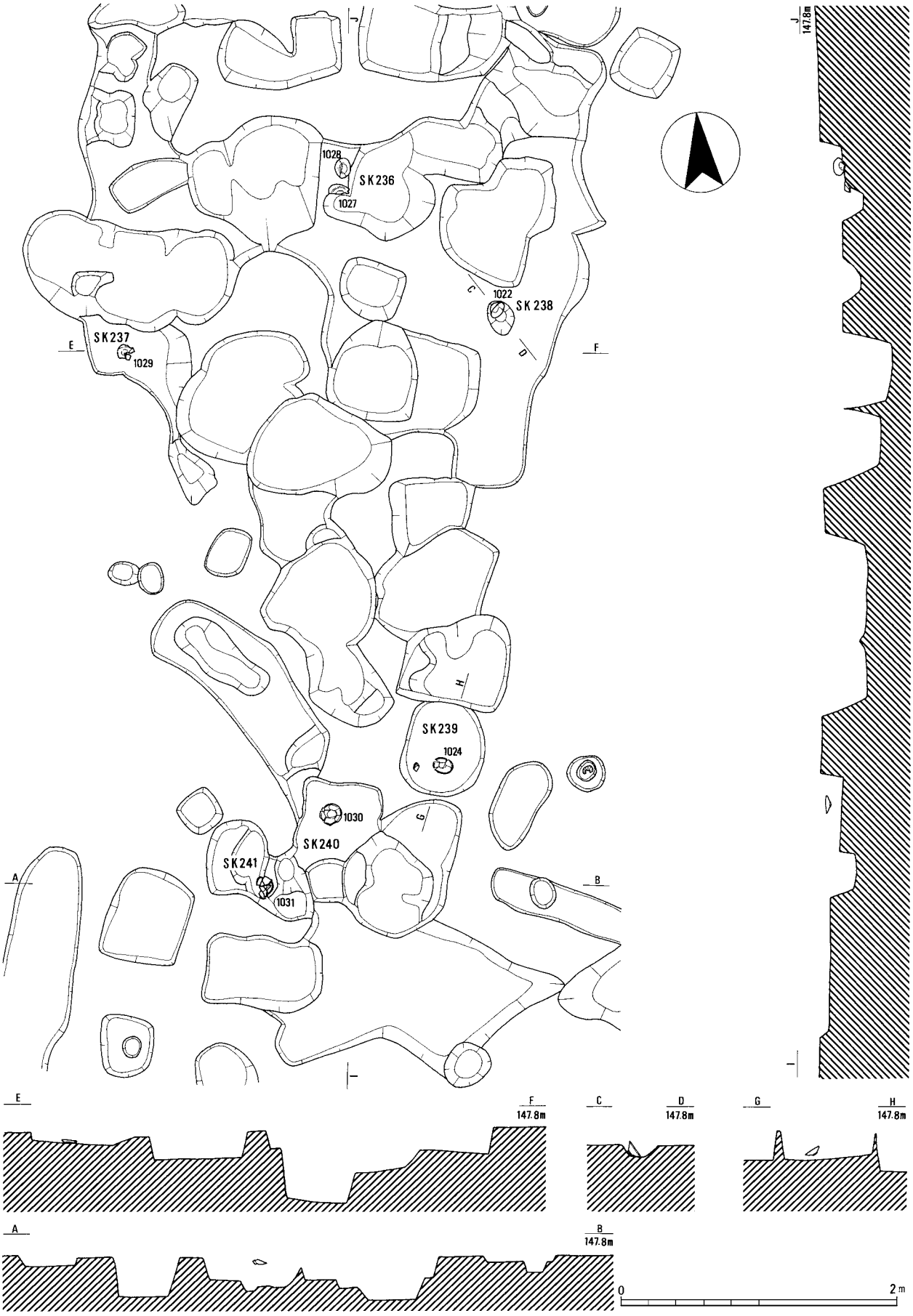
ＳＫ２３４（第53図） 調査区中央東寄りで検出した。SK233とは5㎝の間隔で南接する。一辺85㎝の不整方形を呈し、深さは20㎝で、SK233と異なり均一である。土坑北隅で瓦器椀（1025）が検出された。ほぼ完形であるが、土圧により3片に割れている。正立で、土坑底部から10㎝ほど浮いており、椀口縁部は検出面にちかい。埋土には炭や焼土が含まれておらず、土坑壁も焼けていない。

ＳＫ２３５（第53図） 調査区中央東寄りで1基離れて検出された。0.8×1.2mの不整長円形を呈し、深さは22～28㎝、中央部は瓢箪形にやや窪む。北隅に瓦器椀(1026)が1点､完形で検出された。倒立で、土坑底から2㎝ほど浮いた状態である。埋土には炭や焼土が含まれておらず、土坑壁も焼けていない。

ＳＫ２３６（第52図） 調査区中央で、7×4mの範囲に0.5～1mの土坑が多数重複して検出されている。その土坑群の北部で瓦器椀が2個、南北に並んで検出された。両者とも正立で、深さ20㎝ほどの土坑底に接している。東側と西側は、それぞれ土坑が重複し、さらに20㎝ほど落ち込んでいる。北側の瓦器椀（1028）は完形であるが、南側のもの



第51図　SB179～181 実測図（1：100）



第 52 図　SK236 ～ 241 実測図（1：40）

(1027) は重複する土坑に切り取られたかのように1/2 の残存である。土坑の南端は不明確で、これらの瓦器椀を埋納した土坑の形態は不明である。

ＳＫ２３７（第 52 図） 調査区中央土坑群の西端で検出した。東西は 70 ㎝、北側は深い土坑が重複しており、さらに 50 ㎝ほど落ち込む。南側は不明確であるが、全体として長方形にちかい形態であるものと推定される。深さは 10 ㎝未満で極めて浅い。土坑中央部でほぼ完形の瓦器椀 (1029) を検出した。土圧により潰れているが、正立状態で土坑底に接して埋納されていた。

ＳＫ２３８（第 52 図） 調査区中央土坑群の東部で検出した。検出面から 20 ㎝ほどの深さで平坦な土坑群底部から、直径 20 ～ 25 ㎝の楕円形を呈し、さらに 10 ㎝ほど落ち込む。この小型の落ち込みが、土坑本体の形態なのか、もっと大きな土坑の一部なのかは不明である。ここでは前者と仮定しておく。土坑北壁に接する状態で瓦器椀（1022）が完形で出土した。椀は正立であるが、土坑壁に沿って 45° 傾斜している。埋土には炭や焼土が含まれておらず、土坑壁も焼けていない。

ＳＫ２３９（第 52 図） 調査区中央土坑群の南部で検出した。直径 60 ～ 70 ㎝の楕円形を呈し、土坑群内ではあるが、独立した形態を保っている。深さは 20 ～ 30 ㎝で、底から 5 ㎝ほど浮いて瓦器椀 (1024) が出土した。椀は、土坑中央やや南側で、正立状態であるが、45° 傾斜している。椀の一部は 10 ㎝ほど西に離れて検出されたが、接合の結果完形となった。元は完形で埋納されたものと考えられるが、この破片のみが離れた理由は不明で、SK244 においても類似した状況が認められる。埋土には炭や焼土が含まれておらず、土坑壁も焼けていない。

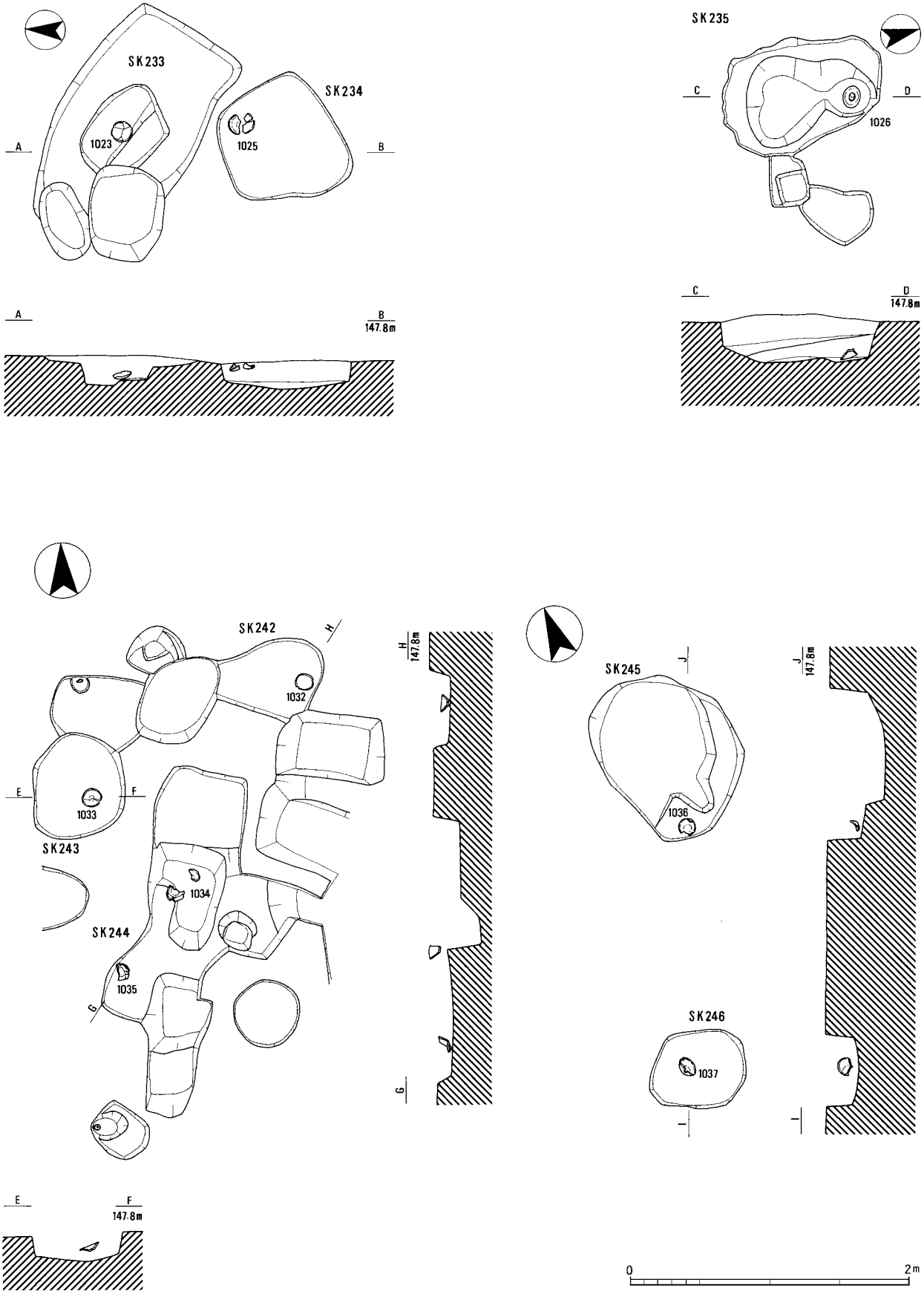
ＳＫ２４０（第 52 図） 調査区中央土坑群の南部で検出した。南側は他の土坑が重複しており不明であるが、東西 60 ㎝の方形又は長方形を呈するものと考えられる。深さは 20 ㎝程度、北東よりで瓦器椀（1030）を検出した。椀は正立状態で、土坑底より 10 ㎝ほど浮き、口縁部は検出面にちかい状態である。口縁部を 1/4 ほど欠損するが、元は完形で埋納されたものと推定する。埋土には炭や焼土が含まれておらず、土坑壁も焼けていない。

ＳＫ２４１（第 52 図） 調査区中央土坑群の南部で瓦器椀 (1031) を検出した。椀は潰れてはいるが、正立状態で埋納されたものと考えられる。深さ 20 ㎝程度の土坑内部に底から 15 ㎝ほど浮いて、45° の傾斜をもつ。したがって、口縁部の一部は検出面から突出する状態となるためか、その部分は欠損している。激しく土坑が重複するため、この瓦器椀を埋納した土坑の形態は不明であるが、南北は 40 ㎝程度の規模である。

ＳＫ２４２（第 53 図） 調査区中央北部で検出した。SK243・244 と近接し、土坑群では最も西部に位置する。西端は他の土坑と重複しているが、60 ～ 80 ㎝の不整形な形態である。深さは 15 ㎝程度でやや浅く、埋土には炭や焼土が含まれておらず、土坑壁も焼けていない。土坑東端で瓦器椀（1032）を検出した。椀は、完形で正立、土坑底部に接するように埋納されている。

ＳＫ２４３（第 53 図） 調査区中央北部で検出した。SK242・244 と近接し、土坑群では最も西部に位置する。直径 70 ～ 80 ㎝の不整楕円形を呈し、深さは 20 ㎝程度である。埋土には炭や焼土が含まれておらず、土坑壁も焼けていない。土坑中央やや南東よりで完形の瓦器椀（1033）を検出した。椀は正立であるが、土坑底から 10 ㎝ほど浮いて、やや西に傾斜している。

ＳＫ２４４（第 53 図） 調査区中央で、SK242・243 と近接して検出された。幅 0.5m、長さ 2m ほどの範囲に 4 ～ 5 基の土坑が重複している。そのため、その規模は不明確であるが、0.5 × 1.3m の不整長方形を呈するものと考えられる。深さは検出面から 10 ㎝程度の浅いもので、土坑の北側と南側で瓦器椀を検出している。南側のもの（1035）は、口縁部を 1/2 ほど欠損しているものの正立で床面に接している。北側のもの（1034）は、床面から 5 ㎝ほど浮いているが正立状態である。土坑北側では深さ 30 ㎝ほどの別土坑が重複しており、1034 はそれに沿うように 1/2 を欠損している。その土坑の底部ちかくから瓦器椀が出土しており、1034 と接合の結果、完形となった。したがって、SK244 には 2 個の瓦器椀が、土坑の北側と南側にそれぞれ 1 個ずつ埋納されていたか、もしくは 2 基の土坑が重複して



第 53 図　SK233 ～ 235・242 ～ 246 実測図（1：40）

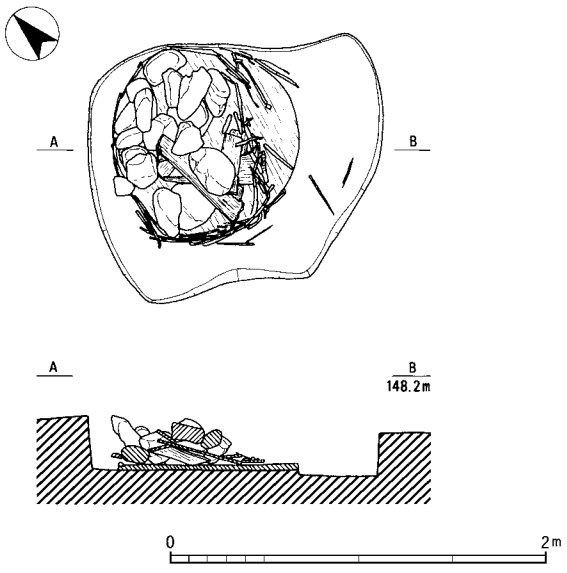
いることになる。その後、土坑北側は後出の土坑により撹乱されたが、その土坑は掘削後直ちに埋め戻されたために1034の破片も土坑内に残されたものとも考えられる。この状況はSK239と似る。

ＳＫ２４５（第53図） 調査区中央で検出した。直径1.2～0.9mの楕円形を呈し、深さは40㎝を測る深いものである。南側には深さ20㎝の浅い部分があり、その部分から瓦器椀（1036）が正立状態で検出された。椀は床面にほぼ接しているが、45°ちかく傾斜している。

ＳＫ２４６（第53図） SK245の南側1mで検出した。一辺0.6～0.5mの不整方形を呈し、深さは20㎝を測る。中央部で瓦器椀（1037）を検出した。椀は、横向きちかくまで傾斜している。元々横向きに埋納された可能性もなくはないが、正立状態のものが土圧により傾斜したものと推測する。

C．溝

ＳＤ３４（第8図） 調査区東南部を南北に延びる溝である。幅20～30㎝、深さ10㎝未満の小溝である。北端は「哀園森」のため不明であるが、その西部で検出した飛鳥時代のSD10と直角に繋がり、奈良時代のSB15を中心とする一群の建物を取り囲む可能性もあるが、出土遺物や埋土が灰褐色で飛鳥・奈良時代のものと明らかに異なること等により、この時期とした。1m西側にも同様な溝が並行して断続的に延びることから、耕作に伴う可能性もある。



第54図　SX219 実測図（1：40）

ＳＤ３９　調査区中央部を南北に延びる溝である。幅70㎝、深さ20～25㎝の比較的規模の大きいもので、北端は調査区外へ、南端は徐々に深さ、幅を減じ消滅する。したがって、本来、南端は調査区外まで延びていた可能性もある。他の遺構と方向が大きく異なり、その性格については不明である。

ＳＤ６０　調査区中央部を南北に延びる溝である。幅30㎝、深さ10㎝未満の小溝で、埋土は灰褐色である。8m西側をSD61が並走し、その他にも並行、直交する同様な小溝があるため、耕作に伴うものの可能性がある。

ＳＤ６１　調査区中央を南北に延び、並走するSD60と同規模の小溝である。途中で6mほど途切れるが、もとは一連のものであったと考えられる。埋土は灰色砂質土で、掘立柱建物柱穴埋土とは大きく異なる。

ＳＤ２０４　調査区北端を東西に横断する溝である。幅1.5m、深さ60㎝の大規模なものであるが、東端では20㎝ほどにまで浅くなる。やや蛇行するが、SD216と直交するため、何らかの区画を目的とした可能性も残る。

ＳＤ２１６　調査区北東部で検出した。幅1.3mで北側は調査区外へ延び、南側はSD204へ繋がる。深さは50㎝ほどであるが、北端は20㎝と急に浅くなる。

9．江戸時代の遺構

この時期の遺構は、墓と土坑がある。特にぬか塚周辺では、多数の不定形な土坑が検出された。これらの多くからは、鉄滓や支脚片等が充満した状態であるが、土坑壁や底は焼けていない。これらから、この土坑群は瓦粘土もしくは壁土等を採取した跡で、その穴に鍛冶の廃棄物を捨てたものと推測したい。

ＳＸ２１９（第54図） 調査区東部で検出した。1.5×1.3mの不整長方形を呈し、深さは30㎝を測る。土坑北東部に接し直径1mの円形の板（3枚組合せ）と多数の木片や10～20㎝の石を検出した。これらの出土状況から土坑内に大型の桶が埋設され、さらにその上に多数の石が置かれたものと推測される。それが土圧や腐食のため潰れたものであろう。以上により、棺桶と考えられる。

番号	規模	棟方向	桁行（m）	梁行（m）	柱間寸法（m）		時期	備　考
					桁行	梁行		
SB3	(3) 以上×(2)	N3.5° W	4.5 以上	4.8	(2.1)+2.4+ α	(2.4+2.4)	平安中	規模については上野市の調査結果を参照。
SB5	(2) × 2	N4° E	(4.2)	3.3	1.65+(2.55)	1.5+1.8	奈良	規模については上野市の調査結果を参照。
SB11	2 × 2	E17° S	3.6	3.0	1.8	1.5	平安中	東側に 1 間の庇。
SB12	3 以上× 2 以上	E	4.8 以上	4.8 以上	2.4+2.4+ α	2.4+ α	飛鳥	東西棟に仮定。
SB13	2 以上× 2	N20° E	1.8 以上	3.3	1.8+ α	1.8+1.5	平安中	
SB14	2 × 2	E17° S	3.3	3.0	1.7	1.35+1.65	平安中	
SB15	4 × 2 (5)	E4° S	8.7	4.5	2.25+2.25+2.1+2.1 (1.2+1.05)	2.25	奈良	2 面庇。東面庇柱間 2.25m、南面庇柱間 2.4m。
SB16	(5) × 2	E4° S	10.8	3.9	(2.1)+2.1+2.4+2.1+2.1	1.95	奈良	
SB17	3 × 2	N	6.9	4.5	2.25+2.4+2.25	2.1+2.4	飛鳥	
SB22	2 × 2	E12° S	2.85	2.7	1.5+1.35	1.35	奈良	総柱建物。
SB23	(3)× 3	E15° S	5.85	4.65	1.95	1.65+1.5+1.5	奈良	総柱建物。桁行き 3 間以上の可能性あり。
SB24	2 以上× 3	E15° S	3.0 以上	7.8	3.0+ α	3.0+2.4+2.4	平安中	東西棟に仮定。
SB25	2 × 2	E12° S	2.85	2.7	1.5+1.35	1.35	奈良	総柱建物。
SB28	4 × 2	E12° S	9.3	3.9	2.1+2.1+2.7+2.4	2.1+1.8	平安中	
SB29	3 × 3	N11° E	6.3	5.4	2.1	1.8	奈良	総柱建物。SB31 に先行。
SA30	4	E10° S	7.5	—	2.1+1.2+2.1+2.1	—	平安中	
SB31	3 × 3	E11° S	6.9	6.3	2.4+2.1+2.4	2.1	奈良	総柱建物。SB29 より後出。
SB32	3 × 2	E11° S	7.2	4.5	2.4	2.25	奈良	
SB40	2 × 2	E13.5° S	4.8	4.2	1.8+3.0	2.1	平安前	
SB41	5 × 2 (3)	N9° E	7.5	4.8	1.5+1.5+1.2+1.65+1.65	2.4+2.4 1.5+1.8+1.5	奈良	
SB42	5 × 3	E11° S	9.3	5.85	1.95+1.5+1.95+1.95+1.95	1.95	奈良	
SB43	3 × 2	E6° S	5.25	3.9	1.65+1.8+1.8	2.1+1.8	平安中	
SB44	5 × 3	E11° S	7.2	5.25	1.5+1.5+1.5+1.5+1.2	1.95+1.95+1.35	奈良	
SB45	4 × 2	N10° E	6.8	3.6	1.7	1.8	奈良	
SA46	3	E10° S	4.2	—	1.4	—	奈良	
SA47	5	E12° S	8.7	—	2.1+1.65+1.65+1.35+1.95	—	奈良	
SA48	3	N9° E	5.25	—	1.5+2.1+1.65	—	平安中	
SB49	3 × 2	N14° E	6	4.0	2.0	2.0	平安前	
SB51	5 × 3	N10° E	9.6	5.55	2.1+1.8+1.8+1.8+2.1	1.8+1.95+1.8	奈良	SB171 に先行。
SB52	3 ×(2)	E7° S	5.85	3.3	1.95	(1.65)	平安中	
SB53	4 × 2	N11° E	6.3	3.6	1.5+1.65+1.65+1.5	1.8	奈良	
SB54	2 × 2	N11° E	4.8	4.8	2.4	2.1+2.7	奈良	北面庇付建物。庇柱間 2.7m。
SA56	12	E13° S	21.15	—	1.8+1.8+1.65+1.8+1.65+1.8 +1.65+1.8+1.65+1.65+2.1+1.8	—	奈良	
SB62	2 × 2	E13° S	3.75	3.6	1.95+1.8	1.8	平安前	総柱建物。
SB63	6 × 2	E6° S	11.55	4.2	1.5+1.5+1.65+2.4+2.1+2.4	2.1	平安中	建物とするに疑問が大きい。
SB67	(4) ×(2)	E35° S	(7.2)	(3.9)	1.95+1.8+（1.8+1.65）	1.95+（1.95）	奈良	規模については上野市の調査結果を参照。
SA73	5	E11.5° S	7.95	—	1.5+1.5+1.35+1.95+1.65	—	奈良	
SB74	(2) × 2	N2° E	(5.4)	3.3	—	1.95	奈良	
SA77	2	N10° E	2.85	—	1.2+1.65	—	奈良	
SB78	2 以上× 2	E3° N	2.25 以上	3.45	2.25+ α	1.8+1.65	平安中	
SB81	3 以上× 3	E37.5° S	2.85 以上	3.9	1.5+1.35+ α	1.2+1.2+1.5	奈良	
SB82	(2) × 1	N4° W	(3.45)	2.1	(1.65) +（1.8）	2.1	平安中	規模については上野市の調査結果を参照。
SB161	2 × 2	N16° E	4.5	4.2	2.4+2.1	2.4+1.8	平安中	SB166 より後出。
SA162	4 以上	N13° E	6.75	—	2.25+2.4+2.1+ α	—	平安前	SB176 に先行。
SB163	5 × 2	E11° S	9.6	3.0	1.5+1.5+2.1+2.1+2.4	1.5	飛鳥	建物とするに疑問が大きい。
SB164	6 × 2	E12° S	8.85	3.9	1.35+1.35+1.2+1.65+1.65+1.65	1.95	奈良	東側 3 間分に束柱、西側 1 間分の張出部。
SB165	2 以上× 2	N2° E	2.55 以上	3.3	1.2+1.35+ α	1.5+1.8	飛鳥	
SB166	(5) × 3	E8° S	(12.0)	5.4	2.4	1.8	奈良	南面庇。庇柱間 2.25m。
SB167	3 × 4	E7° S	7.2	4.8	2.55+2.4+2.25	1.2	平安中	一部総柱建物。
SB168	3 以上× 1 以上	N8° E	6.6 以上	1.5 以上	2.4+2.1+2.1+ α	α	平安中	南北棟に仮定。
SB169	2 × 2	N3.5° E	2.7	2.7	1.35	1.35	奈良	南北棟に仮定。総柱建物。
SB170	5 × 1	E11° S	6.9	2.4	1.35+1.35+1.35+1.5+1.35	2.4	奈良	
SB171	2 × 2	E8.5° S	4.5	3.9	2.25	2.1+1.8	平安中	東西棟に仮定。SB51 より後出。
SB172	2 × 2	E9° S	3.6	3.6	1.8	1.8	平安中	東西棟に仮定。
SB173	3 ×(2)	E6° S	6.3	2.25 以上	2.1	2.25	平安中	
SB174	3 × 1 以上	E14° S	7.2	1.8 以上	2.4	1.8+ α	平安前	東西棟に仮定。
SB175	3 ×(2)	E9° S	6.9	(4.5)	2.4+2.1+2.4	(2.25)	平安中	
SB176	3 × 2	E6.5° S	6.15	4.05	2.1+2.1+1.95	1.95+2.1	平安中	SA162 より後出。
SB177	3 × 2	E7° S	6.9	4.5	2.4+2.1+2.4	2.4+2.1 2.1+2.4	平安中	
SB178	3 × 2	E8° S	6.3 6.0	3.45	2.1+2.1+2.1 2.25+1.8+1.95	1.8+1.65	平安中	東側 2 間分に束柱。
SB179	2 × 2	N19° E	2.7 3.0	2.25	1.2+1.5 1.2+1.8	1.35+0.9	平安前	

第 1 － 1 表　掘立柱建物・柱列一覧

番号	規模	棟方向	桁行（m）	梁行（m）	柱間寸法（m）		時期	備　考
					桁行	梁行		
SB180	3×3	E15.5°S	5.4 5.7	5.1 5.4	1.8 2.1+1.8+1.8	1.8+1.8+1.5 1.8+1.8+1.8	平安末～鎌倉	総柱建物。東西棟に仮定。
SB181	4×2	E15°S	7.95 7.8	4.35 5.55	(1.95+1.5) +2.4+2.1 1.95+1.65+2.1+2.1	2.1+2.25 2.25+3.3	平安末～鎌倉	一部総柱建物。
SB182	3×2	N15°W	4.05	3.0	1.35	1.5	奈良	総柱建物。
SB183	2×2	N25°E	3.9	3.2	1.95	1.64+1.56	奈良	東に1間分の張出部。
SB184	3×2	E19°S	6.6	4.65	2.4+2.1+2.1	2.25+2.4	平安前	
SA185	4	N16°E	8.1	—	2.1+2.1+1.95+1.95	—	平安前	
SB186	1×1	N12°E	3.3	3.3	3.3	3.3	平安中	南北棟に仮定。
SB187	3×3	N	4.8	3.9	1.65+1.65+1.5 1.5+1.5+1.8	1.35+1.05+1.5 1.2+1.2+1.5	飛鳥	
SB188	2×2	N17.5°E	4.2	3.45	2.1	1.8+1.65	平安前	総柱建物。SB189に先行。
SB189	4×1	E18°S	7.95	3.0	2.1+2.4+1.8+1.65	3.0	平安前	SB188より後出。
SB190	5×2	N17°E	8.4	4.5	1.5+2.1+1.8+1.5+1.5	1.8+2.7	平安前	
SB191	2×2	N17°E	3.6	3.6	1.5+2.1	1.8	平安前	南北棟に仮定。
SA192	4	N10°E	6.75	—	1.8+1.35+1.8+1.8	—	奈良	
SA193	3	E13.5°S	5.1	—	1.8+1.65 + 1.65	—	奈良	
SB194	3×2	E15°S	7.2	4.5	2.4	2.4+2.1 2.1+2.4	平安中	
SB195	3×3	E5°S	4.65	4.35	1.35+1.65+1.65	1.35+1.65+1.35	奈良	
SB196	5×2	E18°S	7.5	4.2	0.9+1.5+1.5+1.8+1.8 1.5+1.5+1.5+1.5+1.5	2.1	古墳	
SB197	4×2	E4°S	8.4	4.5	2.1	2.1+2.4 2.4+2.1	奈良	SB200に先行、SB198より後出。
SB198	3×2	E15°S	5.4	3.15	2.1+1.8+1.5	1.65+1.5	奈良	SB197、SB200に先行。
SB199	3×2	E19.5°S	8.55	4.95	2.85	2.55+2.4	平安前	
SB200	4×2	E18°S	7.2	4.5	1.8	2.1+2.4	平安前	
SB264	2以上×2	E45°S	2.1以上	4.5	2.1+ α	2.25	平安中	東西棟に仮定。
SB265	2×2	N31°E	4.2	4.2	2.1	2.1	平安中	南北棟に仮定。
SB266	4×3	E1.5°S	9.8 9.2	6.8	2.4+2.4+2.4+2.6 2.4+2.4+2.6+1.8	2.4+2.3+2.1	平安中	2間×2間の3面庇付建物の可能性あり。
SA267	3	E9°S	5.7	—	1.8+1.8+2.1	—	奈良	
SB268	6×(2)	E22°N	13.0	4.4	2.25+2.05+2.25+2.15+2.15+2.15 2.1+2.0+2.5+2.1+2.15+2.15	(2.2)	飛鳥	
SB269	3×2	E23°N	4.8	3.9	1.8+1.2+1.8 1.8+3.0	2.1+1.8	飛鳥	
SA270	3	E1°N	4.95	—	1.65	—	飛鳥	
SB271	6×2	N5.5°W	9.45	4.2	1.5+1.5+1.5+1.65+1.8+1.5	2.1	飛鳥	
SA272	3	E20°N	4.5	—	1.5	—	飛鳥	
SB273	3×2	N34°W	5.4	3.6	1.8	1.8	飛鳥	
SB274	5×2	N37°W	7.8	3.9	1.5+1.8+1.5+1.5+1.5	1.95	飛鳥	
SB275	5×2	N41°W	8.1	4.2	1.5+1.5+1.8+1.5+1.8	1.8+2.4 2.1+2.1	飛鳥	
SB276	5×3	E26°S	7.65	4.35	1.5+1.5+1.65+1.5+1.5	1.5+1.35+1.5	奈良	
SB277	2×2	N19°E	3.45	3.45	1.65+1.8 1.8+1.65	1.8+1.65	平安前	南北棟に仮定。総柱建物。
SA278	3	E17°S	6	—	1.8+1.8+2.4	—	奈良	
SB279	2×2	N11.5°E	4.05	3.3	2.25+1.8	1.65	奈良	総柱建物。
SB280	3×2	E16°S	4.8	3.3	1.65+1.5+1.65 1.5+1.65+1.5	1.65	奈良	
SB281	2×2	N8.5°E	3.0	3.0	1.5	1.5	奈良	総柱建物。
SB282	4×3	E25°S	6.75	4.2	1.95+1.5+1.65+1.65	1.35+1.35+1.5	奈良	
SB283	4×3	E25°S	5.1	3.6	1.2+1.2+1.35+1.35	1.2	奈良	北面庇付建物。庇柱間1.35m。
SB284	2以上×2	N7°E	1.5以上	4.5	1.5+ α	2.25	奈良	
SB285	3以上×3	N20°E	3.0以上	4.5	1.5+1.5+ α	1.5	平安前	南北棟に仮定。
SB286	6×3	E24°S	10.35	4.35	1.65+1.65+1.8+1.65+1.8+1.8	1.5+1.5 + 1.35	奈良	
SB287	3×(3)	E13°S	4.95	4.95	1.2+2.25+1.5 1.35+1.8+1.8	—	奈良	東西棟に仮定。妻柱検出できず。
SB288	4×3	E17°S	7.65	4.8	1.65+2.1+2.1+1.8	1.65+1.5+1.65	奈良	
SB289	3×2	N19°E	6.75	4.8	2.25	2.4	平安前	
SB290	2以上×2	N25°E	4.2以上	4.2	2.1	2.1	奈良	南北棟に仮定。
SB291	1×1	N9°E	3.75	3.45	3.75	3.45	平安中	
SB292	3×2	E25°S	4.35	3.75	1.35+1.5+1.5	1.8+1.95	奈良	総柱建物。SB291、SB294に先行。
SB293	2×2	N29.5°E	3.75	3.75	1.8+1.95	1.8+1.95	奈良	総柱建物。南北棟に仮定。
SB294	4×2	E14°S	6.8	4.2	1.7+1.9+1.5+1.7	2.1	奈良	
SB295	3×2	E17.5°S	7.5	4.05	2.1+2.55+2.85	2.25+1.8	平安前	
SB296	3×2	E24°S	3.6	3.3	1.2	1.65	奈良	
SA297	2	N19°E	4.8	—	2.4	—	平安前	
SA298	4	N19.5°E	8.4	—	2.1+2.7+1.8+1.8	—	奈良	
SA299	2	N18°E	3.6	—	1.8	—	奈良	

第１－２表　掘立柱建物・柱列一覧

Ⅳ．遺　物

1．弥生時代の遺物

SK249、SD33 から出土したものを除き、すべて旧河道からの出土である。SD33 からは比較的まとまった出土があるが、小片が多く一括資料と断定し難い。

A．ＳＫ２４９出土遺物　（第 55 図）

出土したものは弥生土器の広口壺（1）のみで中期に属するものと考えられる。頸部、体部下半を欠損しており全体の形態は不明である。口縁部は縁帯をもち受口状を呈する。口縁端部から体部上半を羽状刺突文→刻目→横線文→斜格子文→羽状刺突文→横線文で施文する。これらの施文具は、刺突文を除いて 2.2 ㎝に 11 本の櫛によるものと考えられる。

縁帯外面では羽状刺突、下端をヘラによる刻目で装飾する。施文は、羽状刺突の上半→下半→刻目の順で施されている。

頸部では横線文を施すが、欠損と摩滅のため不明瞭である。

体部では頸部ちかくに弱い隆帯を巡らし、その上に刺突による斜格子文を施す。施文順は、右傾斜→左傾斜である。斜格子文の下には 2 段に羽状刺突文が施される。上段上半から下段下半へ順に施文している。さらにその下には横線文を 4 段ほど巡らしている。施文は左回り回転台で行われ、上から下へ施文されたものと考えられるが不明瞭である。

調整は、体部外面底部ちかくで 1 ㎝に 7 本のハケメが認められる。欠損する体部下半においてもハケメのままで、ヘラミガキは施されなかったものと考えられる。

B．ＳＤ７２出土遺物　（第 55 図）

2 は弥生土器の広口壺、3・4 は丸底の壺で古墳時代のものの混入である。

2 は四方を隆起させる山形口縁をもち、外面に刻目、内面に波状文を 2 段に施す。また、頸部には横線文を巡らし、これらの施文具は 1.2 ㎝に 4 本の櫛によるものと考えられる。波状文は下段→上段の順に施文されるが、横線文とともに回転方向は不明である。中期に属するものと考えられる。

4 の頸部外面には、線刻が認められる。調整痕と考えられるが、ハケメ状の単位は無く、鋭利なヘラ状工具によるものであろう。

C．ＳＤ３３出土遺物　（第 55 図）

弥生土器の壺、甕、高杯が出土しているが、全体の形態が明確なものは少ない。これらは、中期後半から後期前半に属するものと考えられる。

壺（5 ～ 9）全体の形態が明確なものはないが、9 は口縁部のみを欠損する。5・6・9 ともに小型のもので、施文は認められない。7・8 は脚部片で、7 のみがハケメで調整される。

甕（10・11）　両者とも小型で受口状の口縁部である。10 は全体の形体を復元できたが、多数の小片を図上で接合したもので確証を欠く。しかし、体部径に比して口縁部径が大きい形体であると推定される。口縁端部外面から体部上半を櫛により施文する。口縁端部外面に刺突列点文、頸部にも 2 段の刺突列点文で、口縁部のものより密に施す。その間には雑な波状文を巡らし、体部最大径付近には横線文と波状文で装飾する。施文順は波状文→横線文である。これらの施文具は、刺突列点文が 1.9 ㎝に 13 本、波状文と横線文が 1 ㎝に 6 本である。11 も同様な部位を施文するが、刺突列点文を 3 段に施すのみである。施文具は 1.3 ㎝に 10 本の櫛である。口径に対し器高が低く、鉢とすべきかもしれない。

高杯（12）　浅い杯部をもつ短脚の高杯と考えられる。直径 1.1 ㎝の透孔を四方に、外から内へ空けている。

D．ＳＤ７５出土遺物　（第 55 図）

弥生土器の壺（13・14）と甕（15・16）がある。16 は壺の可能性もあるが、外面に煤が付着することにより甕とした。口縁部をヘラによる刻目で装飾しているが、他のものには文様が無い。これらは後期に属するものと考えられるが、14・15 は中期に溯る可能性もある。

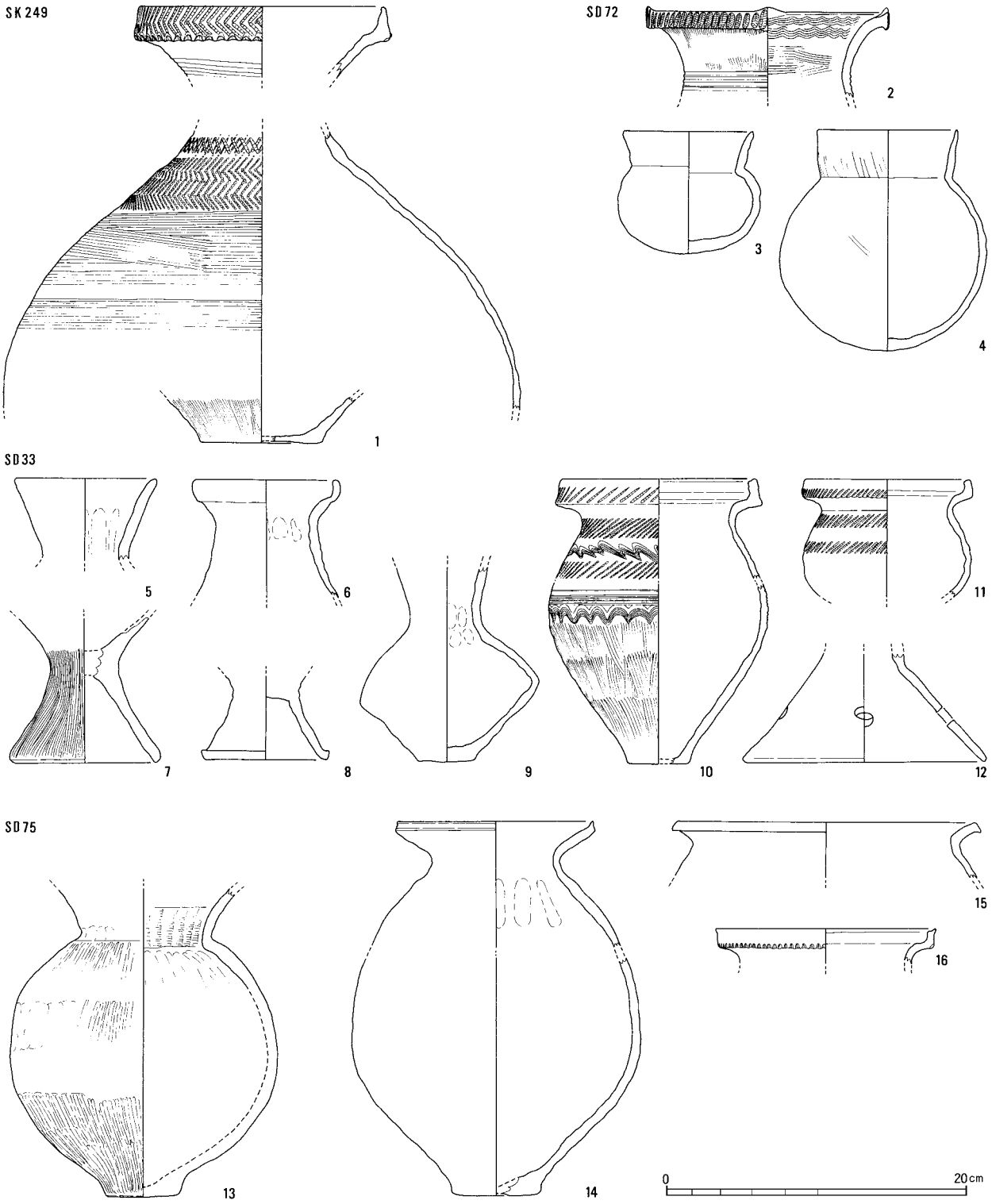
E．ＳＤ７１出土遺物　（第 56 ～ 57 図）

＜弥生土器＞

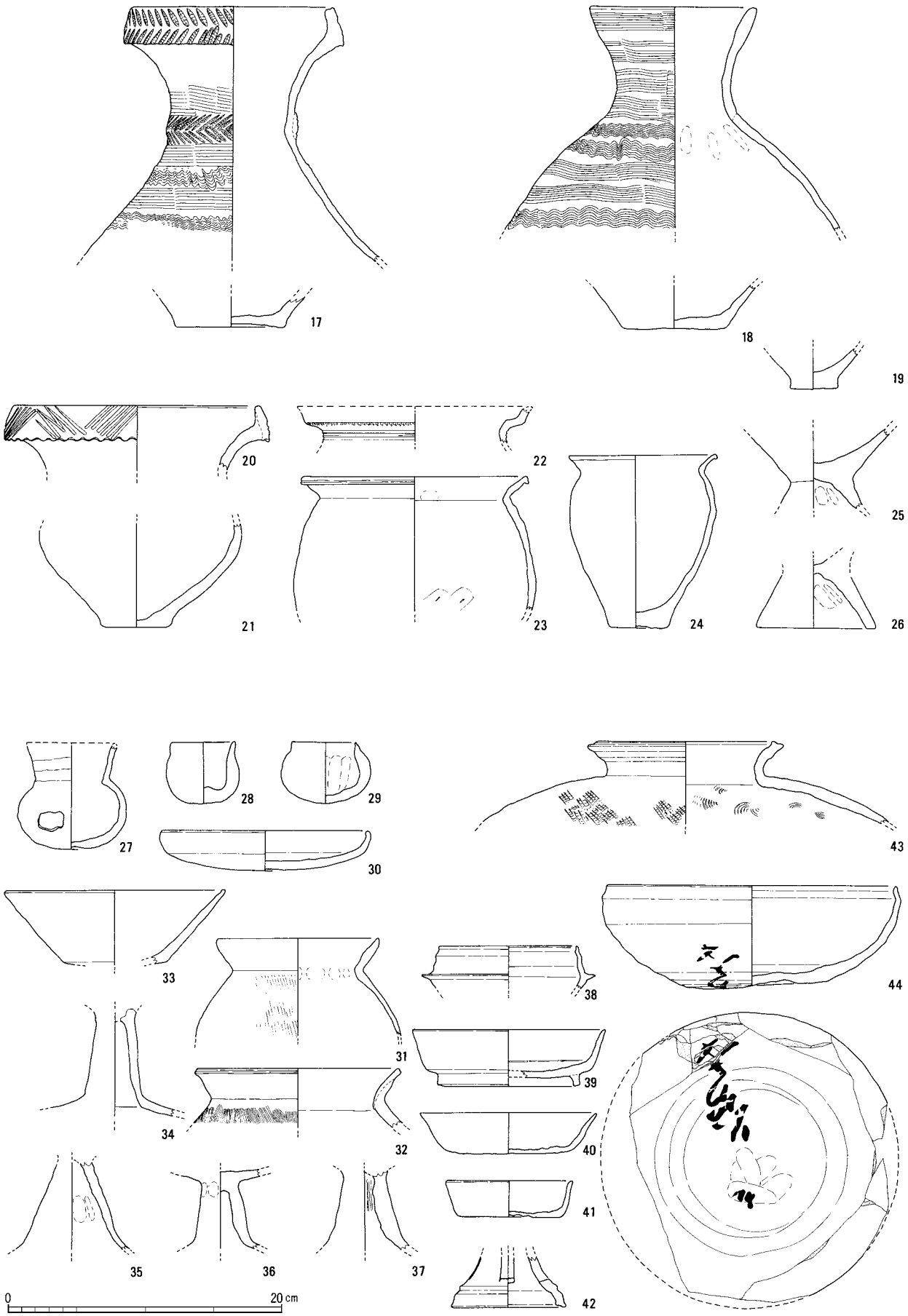
SD71 の埋土は 3 層に分かれる。最も下層の第Ⅲ層では中期の土器、木製品が出土し、第Ⅱ層では中期のものが中心ではあるが､若干後世のものを含み、第Ⅰ層では後期のものから飛鳥時代以降のものまでが混在する。22 の出土層が特定できなかった他は、17・18・20 が第Ⅲ層、19・23・24 が第Ⅱ層、21・25・26 が第Ⅰ層出土である。

壺（17 ～ 21） 全て体部を欠損し、全体の形体は不明確であるが、受口状の口縁部をもつ広口壺（17・20）と端部を肥厚させる広口壺（18）がある。

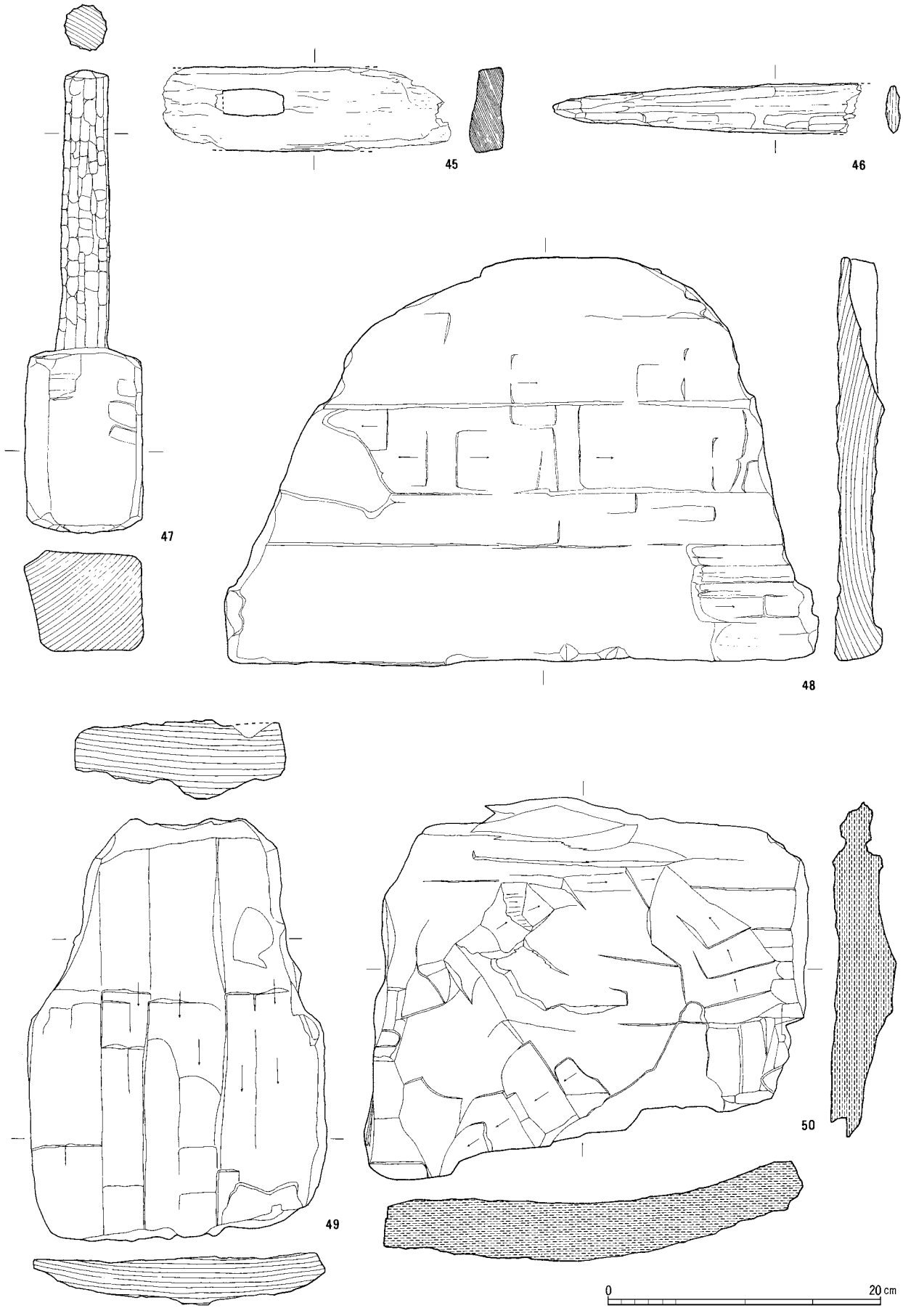
17 は、口縁部外面を羽状刺突文、頸部を横線文、羽状文、波状文で装飾する。施文工具は、全て 1.5



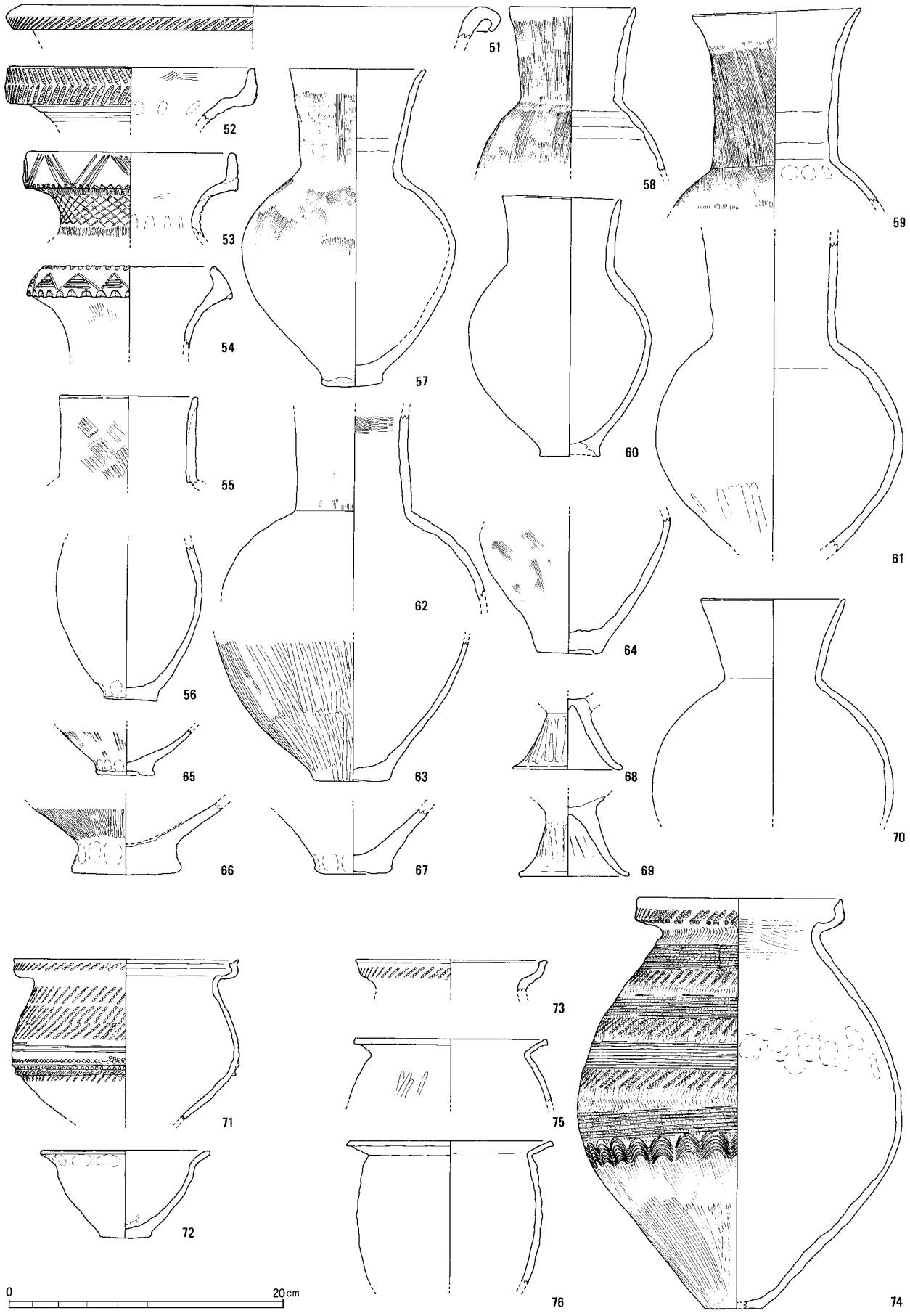
第 55 図　SK249、SD33・72・75 出土遺物 実測図（1：4）



第 56 図　SD71 出土遺物 実測図（1：4）　　27 ～ 44 は上層出土



第 57 図　SD71 出土遺物 実測図（1：4）



第 58 図　SD203 出土遺物 実測図（1：4）

㎝に７本の櫛である。羽状文は櫛による刺突で施文され、口縁部、頸部いずれのものも上段→下段の順、施文時の回転台は、右回転である。頸部のものは低い隆帯を巡らし、その上に施文している。横線文は３段確認でき、施文時の回転台は羽状文と逆の左回転である。波状文は横線文施文後、その間に施される。細かい波長であるものの回転台の速度に遅れたためか、乱れも多く雑な施文である。施文時の回転方向は不明瞭であるが、上段のものと下段のものでは逆方向であるように認められる。

18 は口縁部から体部にかけて横線文４段→波状文２段→横線文２段→波状文１段で装飾されるが、さらに体部下方に続くものと推測される。施文具は、1.4 ㎝に７本の櫛で、17 のものと同一工具の可能性もあるだろう。施文時の回転台方向は、すべて左回転である。

20 は他のものと異なり、ヘラにより施文する。口縁部外面に６本を１単位とする鋸歯文を刻み、口縁部下端の屈曲部に波状の刻みをいれている。

甕（22 ～ 26） 受口状のもの（22）、単純に開く口縁部のもの（23・24）、脚台の付くもの（25・26）がある。 22 は、口縁下端部の屈曲部に刺突列点文、頸部に横線紋を施す。施文工具は両者とも櫛と考えられるが、小片のため原体幅等詳細は不明である。

＜木器・木製品＞

45 は部材、46 は祭祀具、47 ～ 49 は農具である。46 の表面は非常に丁寧に削り磨かれており、武器形の祭祀具と考えられるが、先端部のみ残存のため全体の形体が不明である。一応、剣形としておく。47 は、横槌である。身に対して柄が比較的長く、身の断面は方形である。豆打ち用の農具と考えられるが、工具の可能性もある[28]。48・49 は直柄平鍬の未製品と考えられるが、48 については、横鍬あるいは泥除の可能性もある。50 は、未製品であること以外は不明である。部位中央を工具により削り、窪ませている。外側には表皮が残り、材木の最も外側を用いている。

Ｆ．ＳＤ２０３出土遺物（第 58 ～ 59 図）

＜弥生土器＞

比較的多量に出土している。51 ～ 54・75・76 は中期に属するものと考えられるが、出土の中心は後期である。

壺（51 ～ 70） 51 は口縁部を垂下させる広口壺で、口縁端部外面に櫛による刺突文を施す。単位は不明である。

52 ～ 54 は、受口状の有段口縁をもつ広口壺であるが、54 は端部が内傾し、細頸壺にちかい形体を呈する。52 の口縁端部外面に羽状刺突文が施される。施文具は、櫛で、上段→下段の順に施文されるが、単位は不明である。頸部にはヘラによる横線文が施される。53 の施文は全てヘラによる。口縁部外面に３本を１単位とする鋸歯文、口縁下端部に刻目、頸部に斜格子文を施す。斜格子文は右上から左下へ平行線を刻み、その後、左上から右下へ施文する。54 では口縁部の施文は頸部にまで及んでおらず、口縁部の両端に刻目、その間を鋸歯文で装飾する。施文具はヘラで、刻目は下端の方が大きく深い。鋸歯文は、まず鋸歯状に左から右へ沈線を施し、その中を横線３本で満たす。

55・56 は直口壺あるいは短頸壺、57 ～ 64 は長頸壺である。長頸壺には、ヘラミガキで調整するもの（61 ～ 63）とハケメのままのもの（57 ～ 59・64）がある。ハケメはいずれのものも１㎝に８～ 10 本の細かいものである。

65 ～ 67 は壺の底部、68・69 は脚付壺または水差形土器の脚である。70 は古式土師器の壺と考えられ、混入遺物である。

鉢（71・72） 71 は受口の口縁部をもち、体部上半にかけて列点文と横線文で装飾する。列点文は 1.7 ㎝に５本の櫛による刺突で、口縁部に１段、体部上半に３段、さらに体部最大径付近に２条巡らした突帯上にも施している。上方の突帯に施したものは施文具を横方向に使用している。施文時の回転台方向は、体部上半が左回転、突帯上が右回転である。蔽いを確認できなかったが、手焙形土器の可能性もおおきい。

甕（73 ～ 76） 受口状の口縁部をもつもの（73・74）と単純なもの（75・76）があり、後者は中期に属するものであろう。73 は口縁端部外面に 1.3 ㎝に５本の櫛による刺突列点文を施す。74 では口縁部と口縁下端部の２段に刺突列点文、さらに体部中央にかけて横線文、刺突列点文、波状文で装飾される。

まず、横線文を4段巡らし、それぞれの下に刺突列点文を、最下段のみ波状文を施す。これらの施文具は、2.1㎝に10本の櫛と考えられ、施文時の回転台方向は、横線文で右、列点文で左回転と確認できるものがある。

高杯（77～81） いずれのものも脚部のみの残存で全体の形体が明確なものはない。脚部の形体によりハ字状に開くもの(77～79)と筒状のもの(81)がある。前者には透かし孔が穿たれるが、6方3段(77)、4方3段以上（78)、5方2段以上（79）と多様である。また、79には横線文も施され、残存部内で3本＋3本＋4本の3段が確認できる。施文はヘラで行われたものと考えられる。81の脚部内面は、ヘラケズリ状に強く1周ナデられている。また､80については､短脚で大きく裾が開くものか、81と似た形体のものの裾部か明確でない。あるいは、別器種であるかもしれない。

＜石器＞

82は石斧、83は石包丁である。両者とも磨製で82は両刃、83は若干内弯する刃をもつ。

＜木器＞

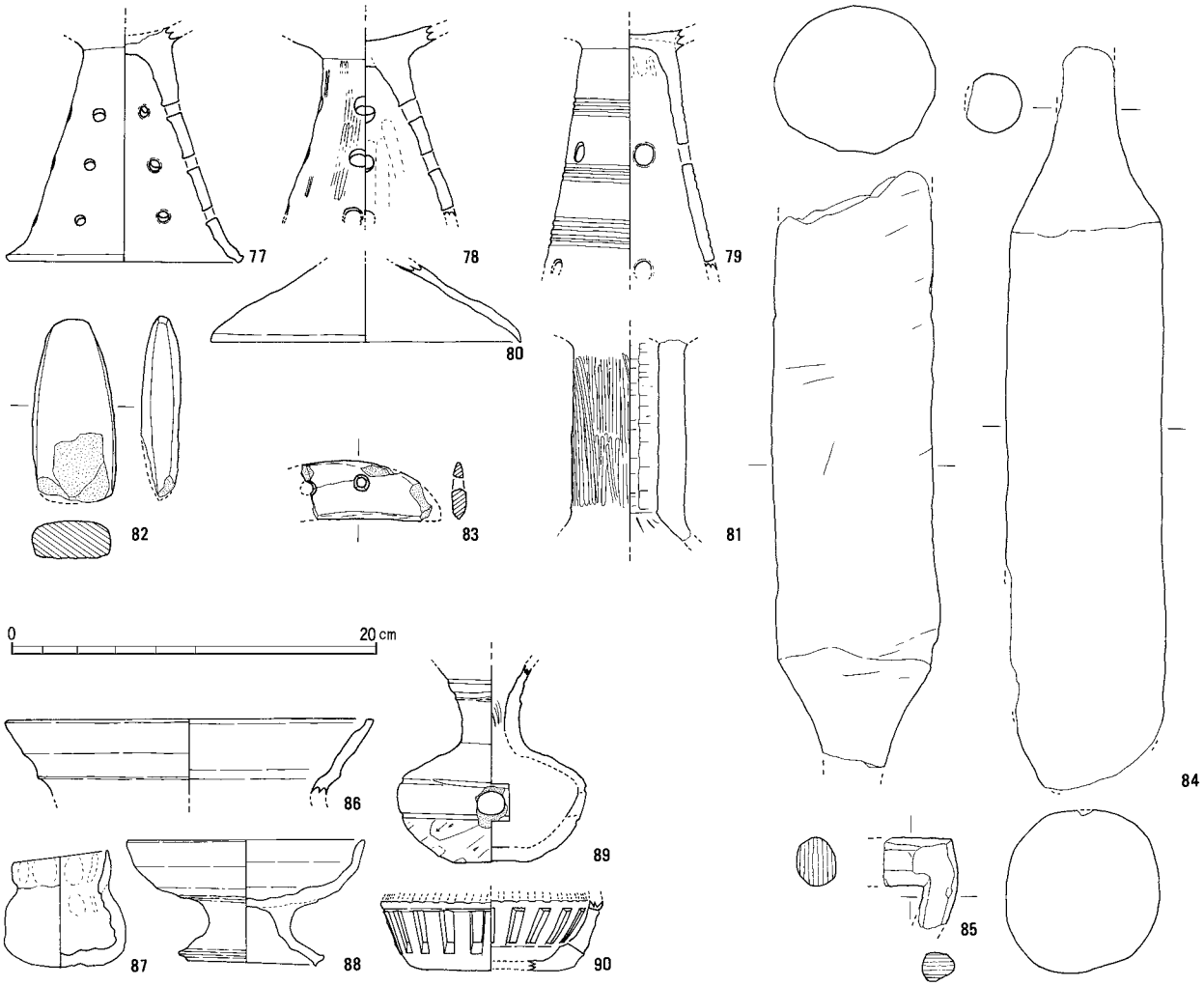
84は竪杵、85は鋤柄の把手と考えられる。84は握部を欠損しているため節の数は不明であるが、表面の仕上げは非常に平滑である。

2．古墳時代の遺物

SK221・231、SD202等から比較的良好な一括出土があった。特にSD202井堰周囲からは土器と木製品が多量に出土している。

A．ＳＤ７１出土遺物（第56図）

弥生時代の流路SD71の上層から出土したものである。第Ⅰ層出土のものがほとんどであるが、第Ⅱ層出土のものも若干ある。出土層位が不明確なものもあり、そのためか30・32・39～41・44は、飛鳥



第59図　SD203出土遺物 実測図（1：4）　86～90は上層出土

時代からの混入であろう。

＜土師器＞

27 ～ 29 は壺、30 は皿、31・32 は甕、33 ～ 37 は高杯である。

27 は小型丸底壺、28・29 は、ミニチュア壺である。27 の体部には焼成後の穿孔が認められる。28・29 は手づくねで成形され、口縁部をつまみ出す。31 のハケメは 1.3 ㎝に 6 本、32 は 1 ㎝に 9 本である。高杯の脚柱部は、下端で大きく開くもの（34・36・37）と杯との接合部から開くもの（35）がある。

＜須恵器＞

38 ～ 41 は杯、42 は高杯、43 は甕、44 は鉢である。

杯には受部をもつもの（38）、高い高台をもつもの（39）、高台の無いもの（40・41）がある。39 の底部内面には口縁部への屈曲に沿って 1 条の沈線が巡る。42 は短脚の有蓋高杯と考えられ、四方の透かしは、ヘラにより上から下へ切り開かれている。43 は一応甕としておく。タタキは格子風で、間隔は疎らである。内面のあて道具痕は、雑にナデ消される。44 は鉄鉢であるが、底部が尖る前の段階のものであろう。底部から体部にかけて墨書がある。流暢に書かれているが、器壁の摩滅が激しく判読不明である。また、底部外面には指による掻き取り痕もある。

B．ＳＤ２０３出土遺物（第 59 図）

弥生時代の自然流水路 SD203 上層から出土したものである。一部に下層出土のものがあるが、混入と考えられる。

86・87 は土師器で、86 は二重口縁壺、87 はミニチュア壺である。88 ～ 90 は須恵器で、88 は無蓋高杯、89・90 は𤭯である。88 は比較的雑な作りで、杯部と脚部の接合痕跡が明瞭である。89 の注口は欠損しているが、突出しているものと推測される。90 は二重𤭯と考えられるが、鈴台付壺の可能性もある。胎土は精良である。

C．ＳＫ２２１出土遺物（第 60 図）

複雑に重複した土坑群出土であるため、一括性には乏しい。すべて土師器で、91 はミニチュア壺、92 は壺、98 は椀、99 は高杯、他は甕である。甕は壺状の形体のもの（95）を含むが、一応甕としておく。球形の体部に外方に開く口縁部をもつものであるが、底部が潰れ平底状になったもの（93・94）もある。摩滅が激しく調整が不明確のものが多いが、96 がハケメにより調整される他は、器壁の凹凸が激しく、ハケメによる調整はないものと推測される。

D．ＳＫ２３１出土遺物（第 60 図）

すべて土師器で、比較的良好な一括資料である。100 ～ 102 は甕、103 は鉢、104・105 は高杯である。甕は、口縁部が内弯するもの（100）と外方に開くもの（101・102）がある。102 にはハケメが認められず、100 の内面は指による強い押圧やナデの痕跡が明瞭である。

E．ＳＫ２２５・２２６・２３２出土遺物（第 60 図）

3 基の土坑からそれぞれ 1 個体づつ完形にちかい形で出土したものである。すべて土師器の壺で、106 は SK226、107 は SK232、108 は SK225 からの出土である。いずれも球形の体部をもつが、106 は比較的長い口縁部で、器壁も他のものより薄い。調整は摩滅のため不明確なものもあるが、107 が体部内面をヘラケズリするほかは、ナデが中心と考えられる。108 のナデは板により、浅いハケメとすることもできる。また、体部下半には幅 1.5 ㎝ほどの凹線が 1 周巡る。未乾燥時または製作時に筒状の台に乗せられていた痕跡のようである。

F．ＳＫ２４７出土遺物（第 60 図）

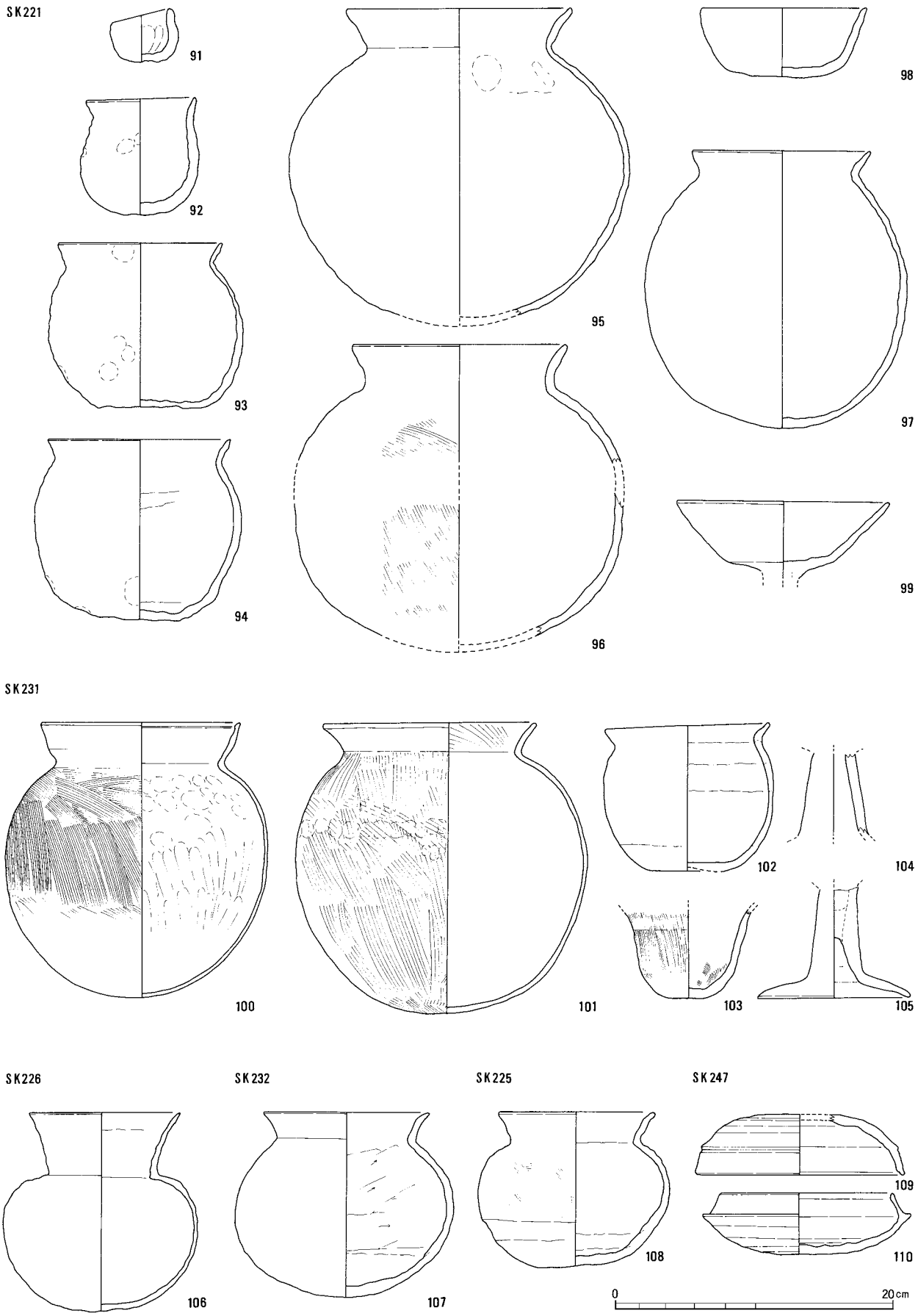
109 は須恵器の蓋、110 は須恵器の杯で、出土状況から両者は対になるものと考えられる。109 の天井部と口縁部の境の稜は沈線状に退化しており、全体に雑な作りである。

G．ＳＤ２０８出土遺物（第 61 図）

小規模な自然流水路から土師器、須恵器が比較的まとまって出土した。

＜土師器＞

椀（111 ～ 118） 半球状の形体のもの（111 ～ 113）、比較的平らな底部をもつもの（114・115）、非常に深いもの（116）、ミニチュア（117・118）がある。115 の口縁端部は強いヨコナデのためか、外反する。調整は口縁部と内面をナデで調整する他は未調整であるが、115・116 は内外面をナデ、特に 116 の内側は板状工具による。また、114 の体部外面下半にはヘラ状工具痕が残るが、調整痕ではない。



第 60 図　SK221・225・226・231・232・247 出土遺物 実測図（1：4）

壺（119 ～ 121） 119 はミニチュア、120・121 は有段口縁をもつものである。119 の内面には指により強くナデられた痕跡が明瞭である。

甕（122・123） 大型のもの（122）と小型のもの（123）がある。前者は口縁端部に面をもつが、後者は明瞭でない。両者ともハケメで調整されるものと考えられるが、123 は摩滅が激しく確認できない。

甑（124） 棒状の把手をもつものと推定され、ハケメは、1 ㎝に 5 本の非常に浅いものである。

鉢（125） 半球状の体部に短く外反する口縁部をもつ特異な形体を呈し、甕とすべきかもしれない。体部外面下半には、ヘラ状工具による掻き取り痕が多数認められる。

高杯（126）欠損のため全体の形体は不明であるが、浅い半球状の杯部がつくものと考えられる。脚筒部は、ナデにより弱い面取り状になる。

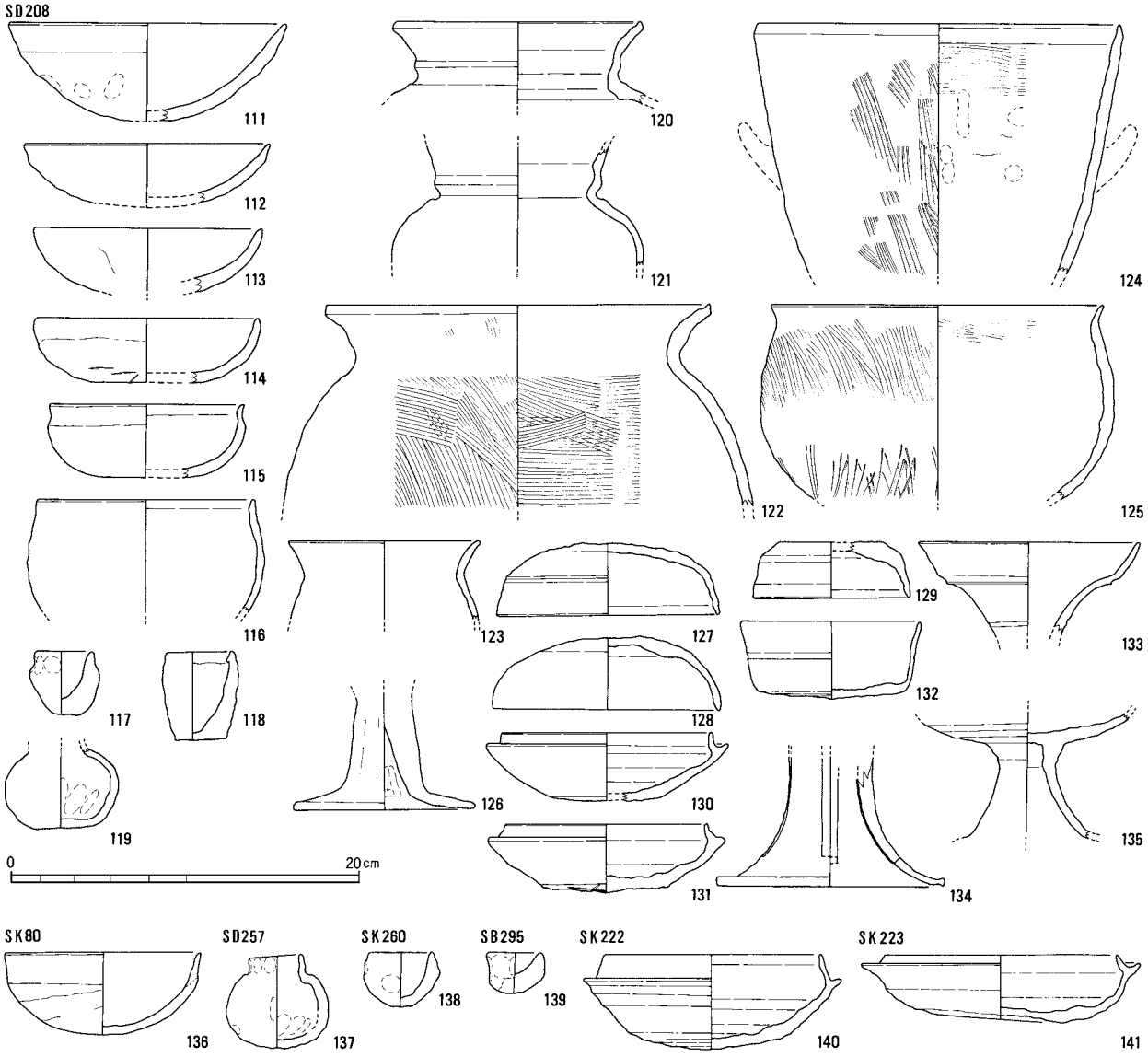
＜須恵器＞

蓋（127 ～ 129） 天井部と口縁部の境が不明瞭なもの（128･129）と沈線を巡らすもの（127）がある。129 は壺の蓋、あるいは杯の可能性がある。天井部端を 1 周弱くロクロケズリする。

杯（130・131） 両者とも短く内傾する口縁部をもつものである。131 の底部外面にはヘラにより「×」と刻まれている。

椀（132）体部に 1 条の浅い沈線を巡らし、底部外面をロクロケズリする。

瓶（133）大きく開く発達した口縁部をもつ。頸部に 1 条の沈線と口縁部との境には小さく鋭い突帯



第 61 図　SB295、SK80・222・223・260、SD208・257 出土遺物 実測図（1：4）

を巡らす。

高杯（134・135）両者とも全体の形体は不明であるが、134は長脚2段透かし孔をもつもの、135は短脚のもので透かし孔をもたない可能性がある。135の杯底部内面には自然釉が厚くかかる。

H．SD202出土遺物（第62～68図）

井堰周辺から完形またはそれにちかい状態で土器や木製品が多量に出土し、溝出土ではあるものの一括性は高いものと考えられる。

＜土師器＞

壺（142～146）全体の形態が不明なものもあるが、球形の体部に外方に開く口縁部をもつものである。143は比較的長い口縁部をもち、146は甕とすべきかもしれない。調整は多くがナデであるが、143の外面は浅いハケメ、145の底部内面はヘラケズリによる。また、142の内面と145の頸部内面のナデは非常に強いものである。145は内面に炭化物が付着し、また外面も同様であることから甕として利用された可能性がある。

椀（147～149）内弯気味の口縁部をもつもの（147・148）と小さい底部から外反する口縁部をもつもの(149)がある。147の内面にはヘラにより「×」の記号が記され、149の外面にもヘラによる痕跡が認められるが記号とは考えられず、調整時に刻まれたものと推測される。

鉢（150～152）150は椀とすべきかもしれず、151・152はミニチュアである。150・151の内面のナデは板状工具により、浅いハケメとすることもできる。

高杯（153～161）杯屈曲部に稜をもつもの（158～161）と弱い段状となるもの（153～157）がある。前者は口径約19～24㎝、後者は14～17㎝程度で大型のものが前者に属す。158の稜は、その剥離痕から張り付けられたことが明確であり、前者の他のものもこれと類似するものと思われる。後者は杯底部と口縁部の段を残して接合したもので、153は段が目立たないためか、弱い沈線を巡らしている。

脚柱部内面をヘラケズリするもの（154・156・157・160）とナデか未調整のもの（155・161）があるが、形体との相関はない。

甕（163～174）脚台の付くもの（163）、球形の体部をもつもの（164～173）、やや長胴のもの（174）がある。このうち球形の体部をもつものには、大型のもの(164～166)と小型のもの(167～173)がある。163は、台付甕の終末にちかいもので、雑な仕上げの脚台をもつ。

外面をハケメ、内面をナデで調整するものがほとんどであるが、171・172にはハケメが認められず、163のハケメは1㎝に4本の粗く深いものである。169・171の内面のナデは板状工具により、165にはヘラ状工具による鋭利な沈線状の痕跡がある。174のみ底部内面をヘラケズリする。

使用の痕跡を残すものも多く、外面に煤の付着するもの（163・164・168・172・173）、内面に炭化物の付着があるもの（164・166・167）がある。173の内面は黒色に変色しており、これも使用によるものと考えられる。

＜須恵器＞

出土したものは無蓋高杯（162）のみである。杯底部外面は不定方向のヘラケズリで調整するが、格子状のタタキが残る。初期須恵器と考えられるが、胎土は陶邑のものとは異なる[29]。

＜石器＞

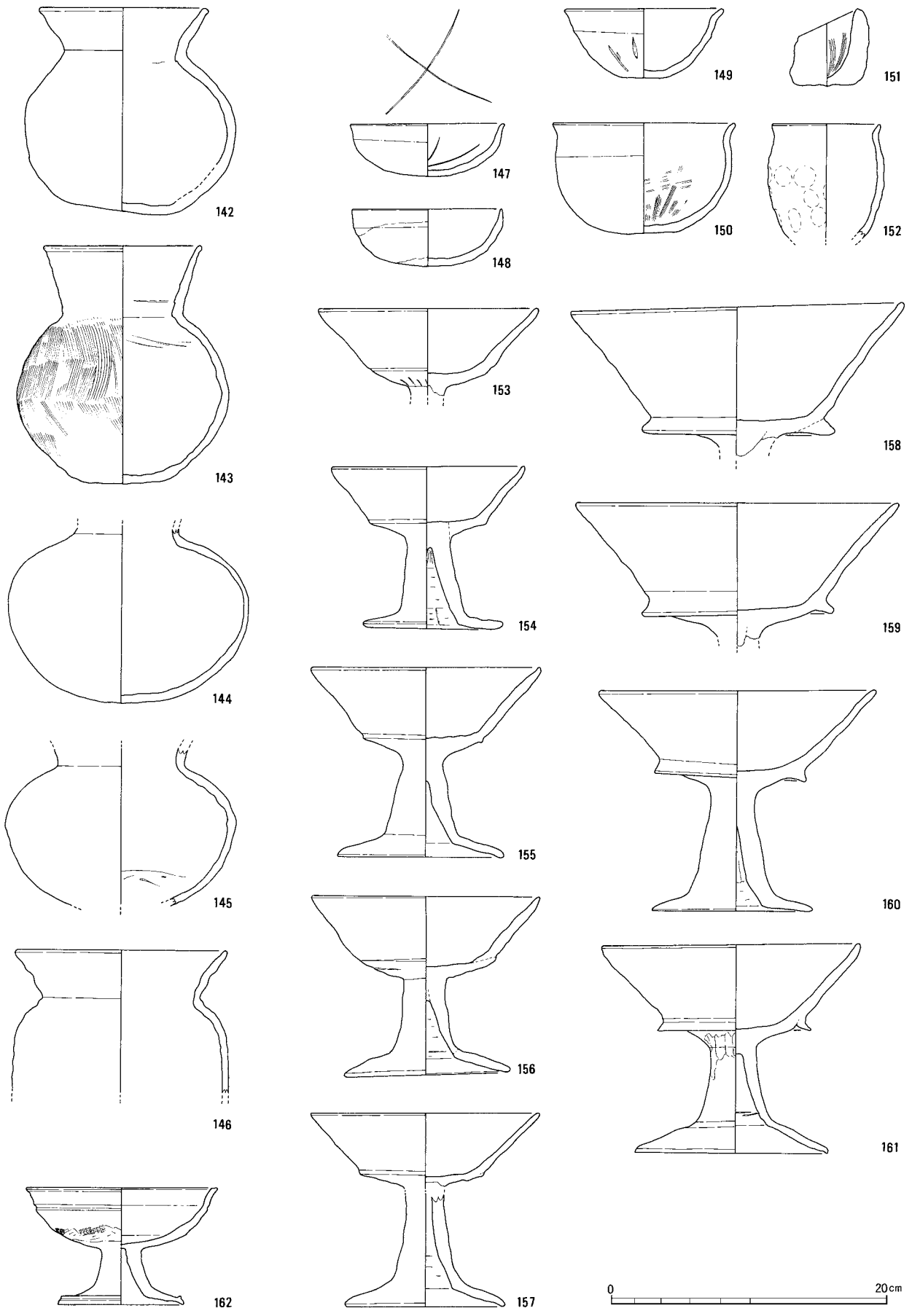
出土したものは175のみである。両面が摩擦により非常に平滑になっており、中央部ほどよく擦り減って凹面状となる。一応石皿としたが砥石かもしれない。

＜木器・木製品＞

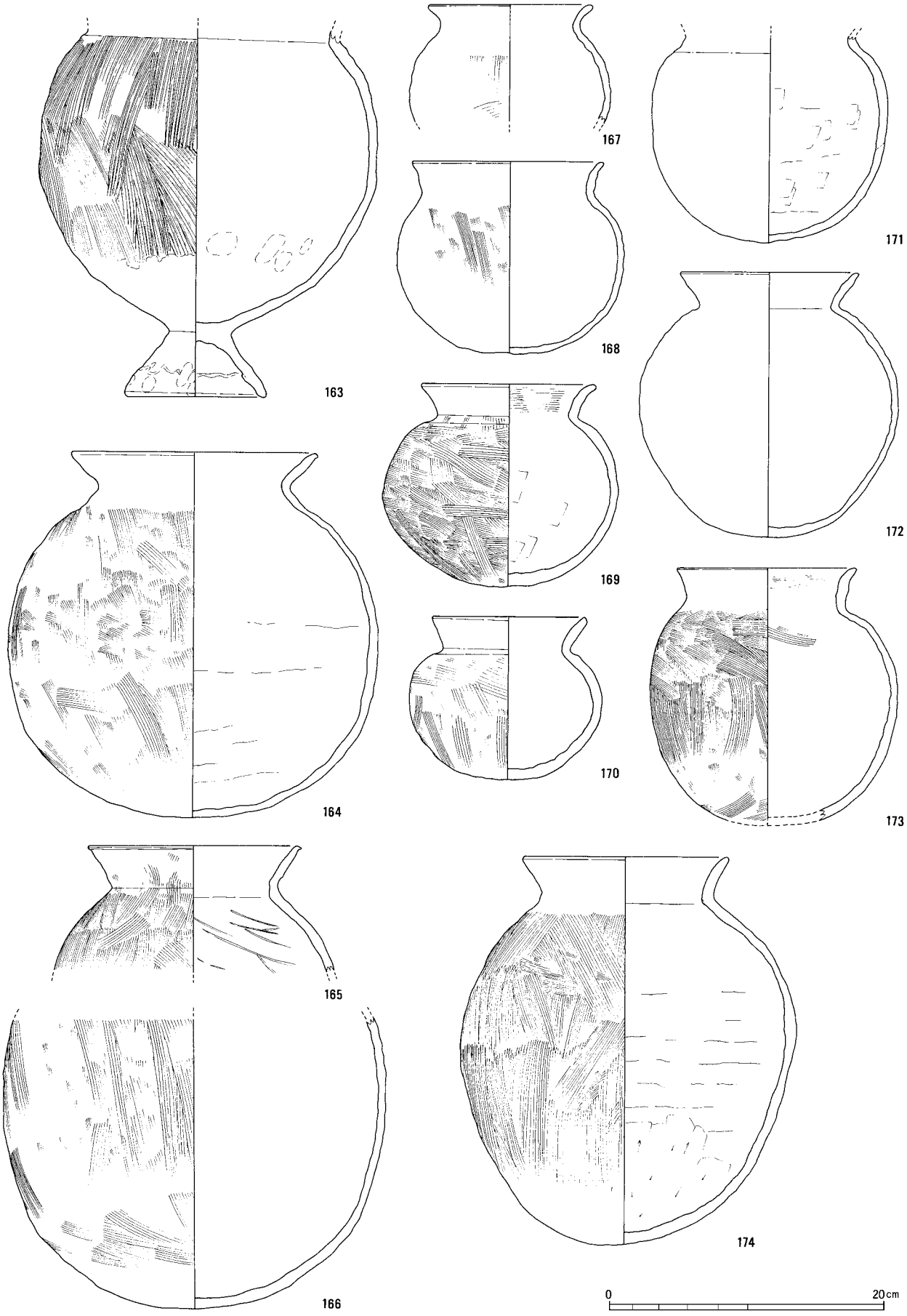
農具、建築部材等が比較的まとまって出土し、井堰に転用されていたものもある。また、これらのなかには火を受けたものも多くある。

鍬（176・181）176は又鍬、181は直柄平鍬で両者とも未製品である。176はやや薄く、181はA型隆起の形状等疑問もあり、他の部材の可能性もある。176は上端を焼失している。

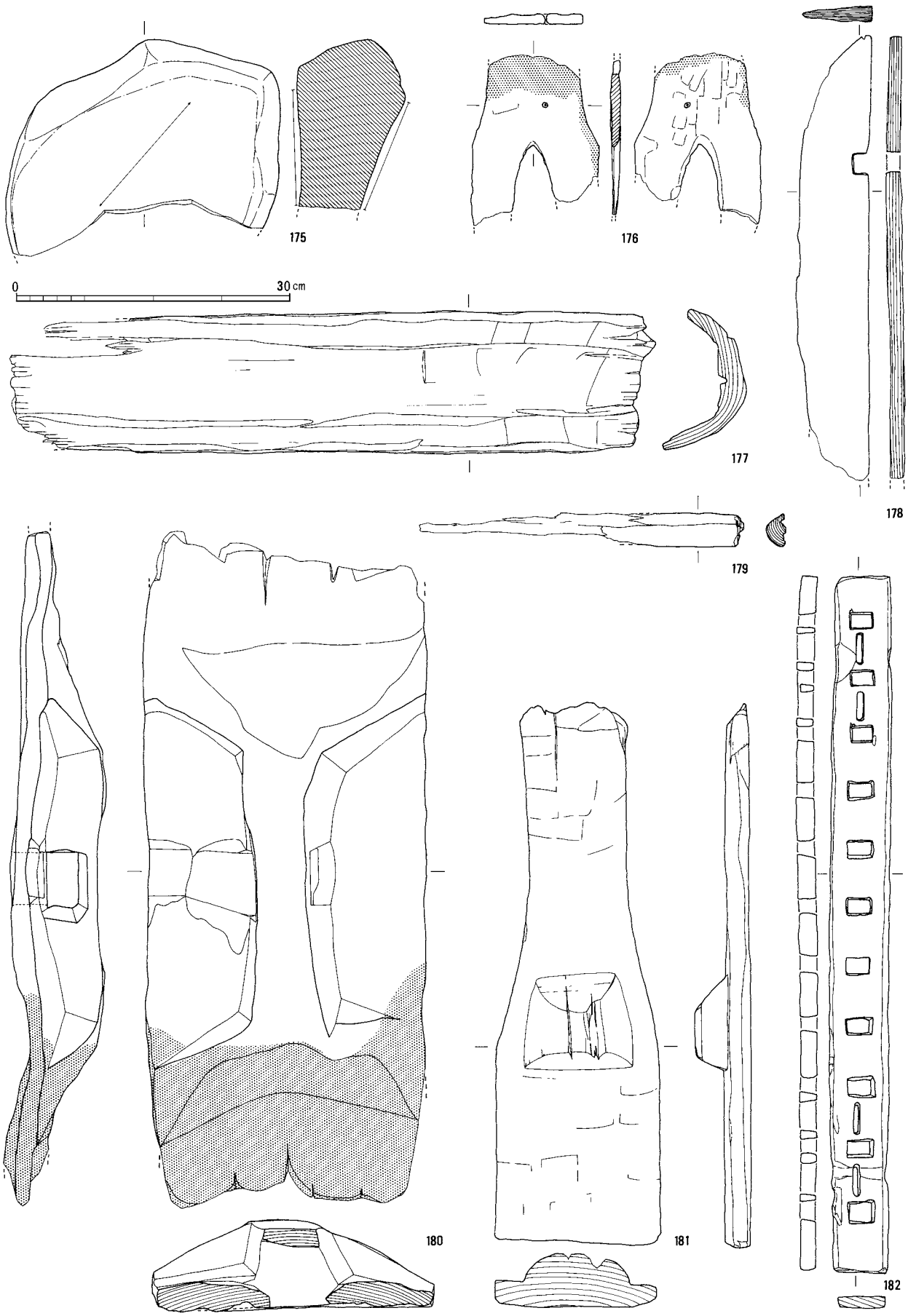
田下駄（182）大型の枠型田下駄の縦枠である。1.6×2.8㎝の枘孔を枘孔中心から6㎝間隔で11個空ける。両側の先端から10㎝に圧迫された痕跡があり、特に図中右側が明確である。手綱をからめた痕跡と考えられる。0.4×3.6㎝の横長の枘孔が両端に2対あり、これを手綱孔とすることも可能であろうが、孔の形状に疑問が残る。さらに、厚さが他



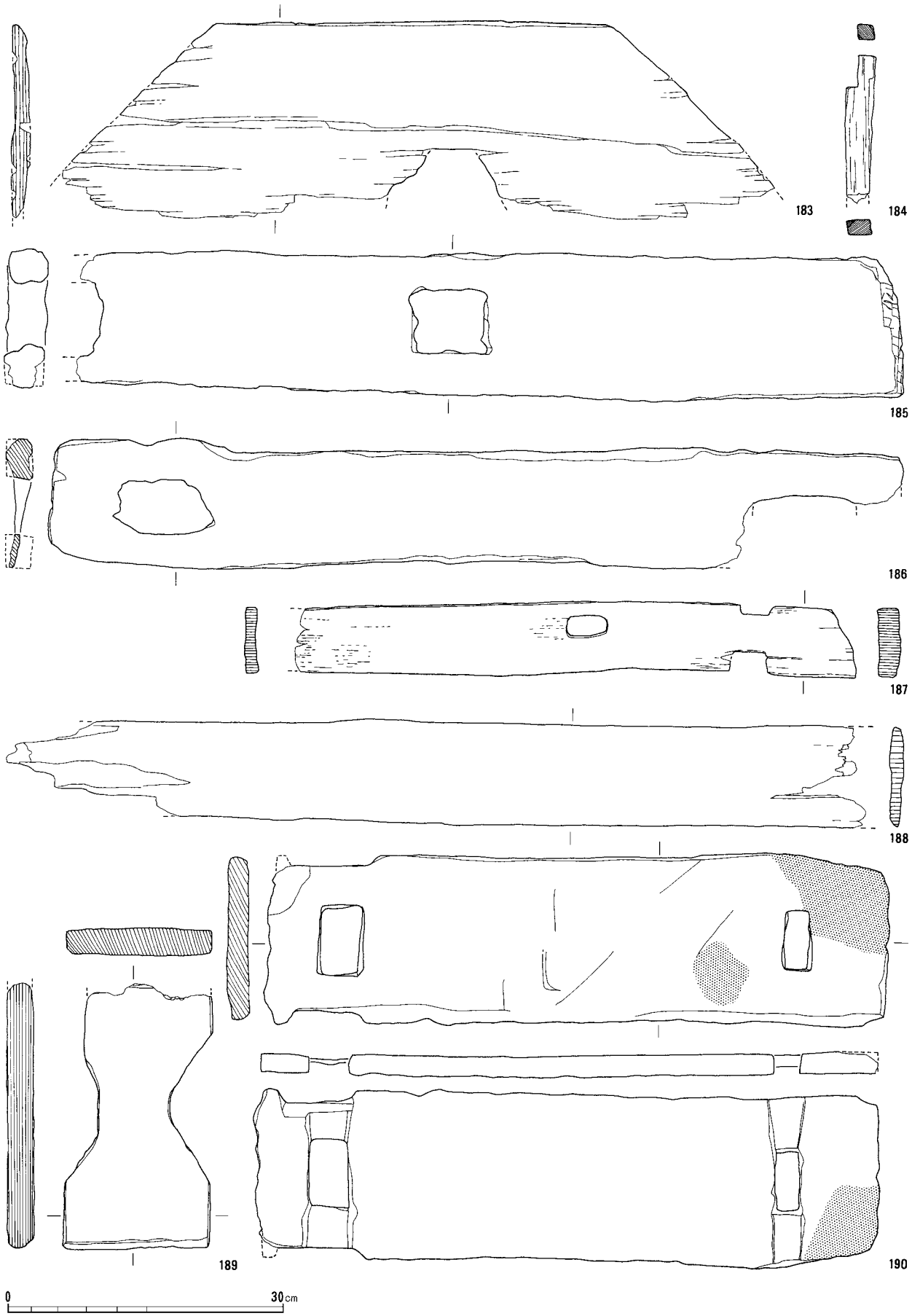
第 62 図　SD202 出土遺物 実測図（1：4）



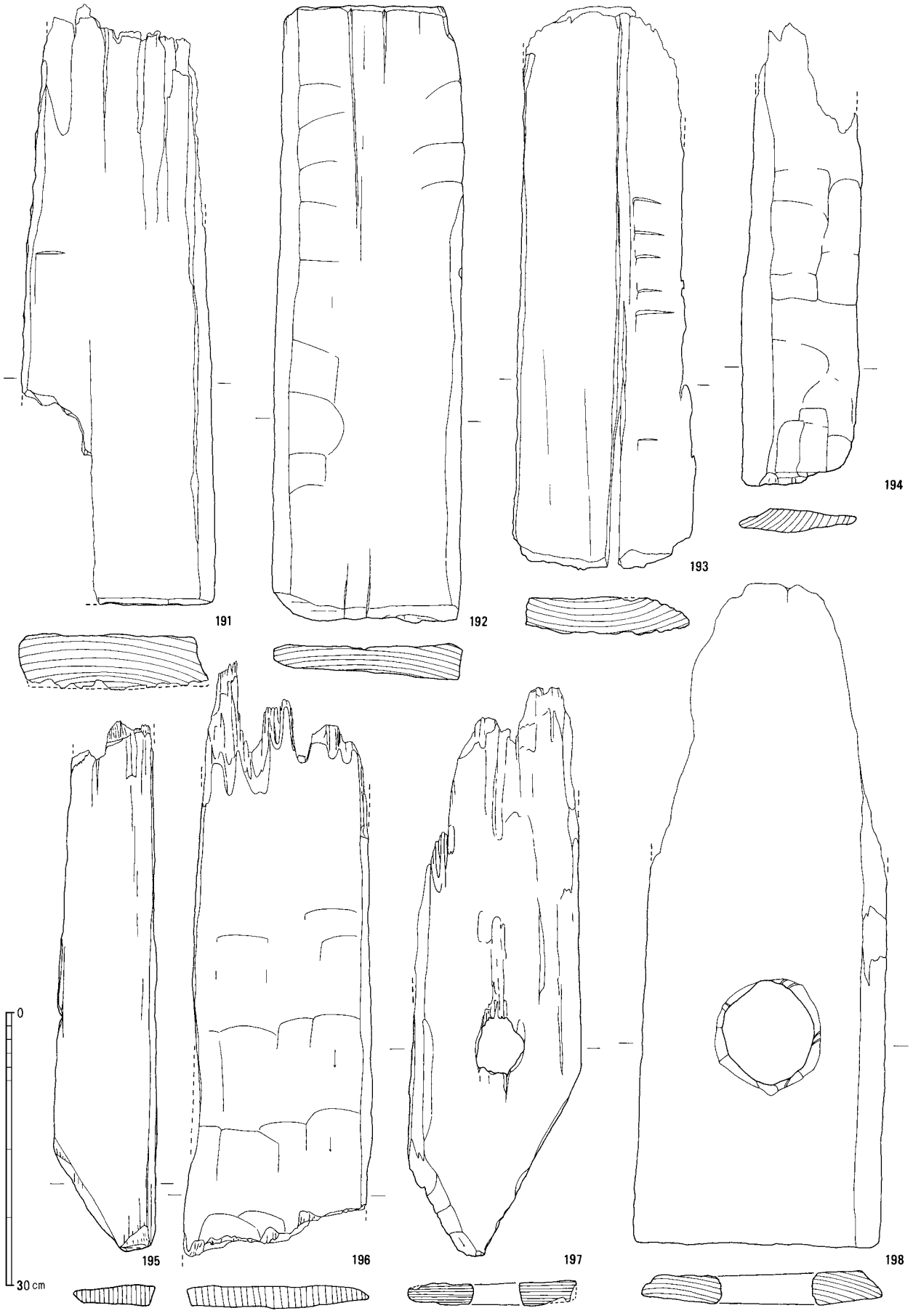
第 63 図　SD202 出土遺物 実測図（1：4）



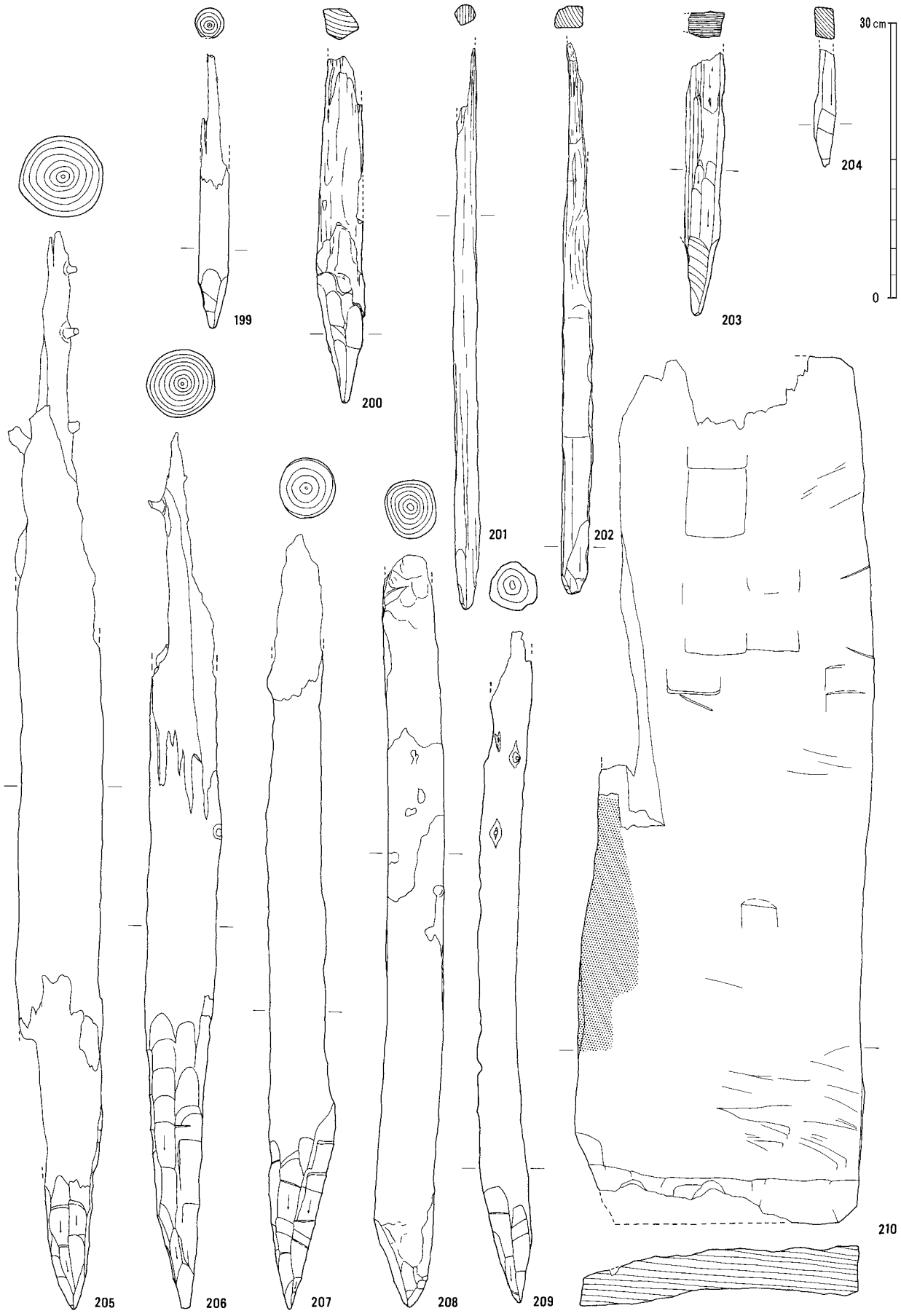
第 64 図　SD202 出土遺物 実測図（1：6）



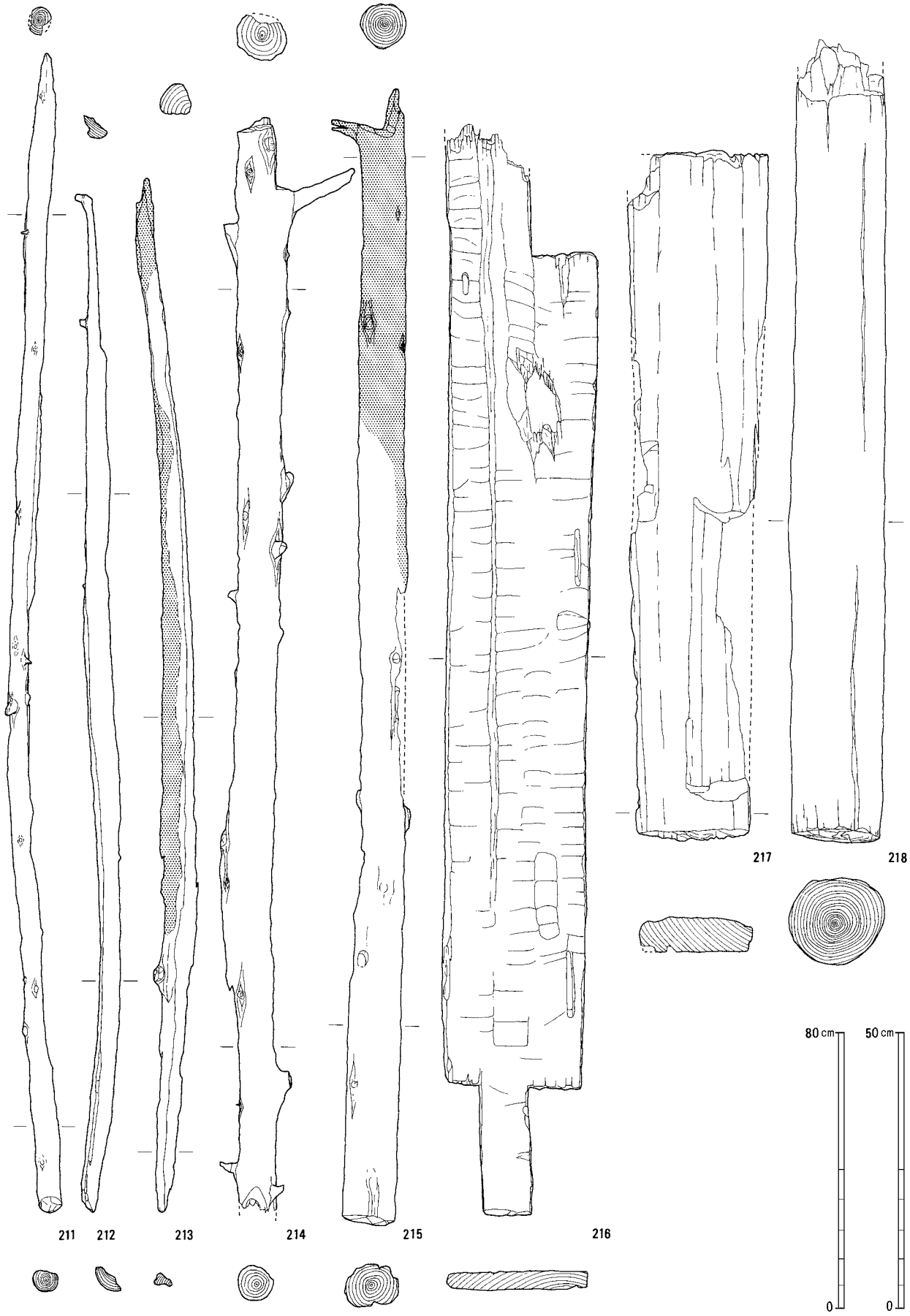
第 65 図　SD202 出土遺物 実測図（1：6）



第 66 図　SD202 出土遺物 実測図（1：6）



第 67 図　SD202 出土遺物 実測図（1：6）



第 68 図　SD202 出土遺物 実測図（213 ～ 218 ＝ 1：10、211・212 ＝ 1：16）

のもの[30]より薄く、他の部材である可能性も残る。

腰掛（189・190） 指物腰掛で、189は脚、190は座板である。しかし、両者を同一とする確証はない。189は、両側に弧形の刳形を設け、出枘部分が腐食のため明確でなく、脚とするに疑問も残る。

190の脚との接合は枘差しによる。両端に幅3.2～4㎝の溝を刳りこみ、その中に2.8～4×6～6.8㎝の枘孔を空ける重枘構造である。火を受けたため炭化している部分がある。

木樋（177） 腐食のため明確でないが、一応片側が原形を保っているとした場合である。仮に、両端が欠損とするならば、舟形や槽の可能性もある。

扉（180） 両端を焼失しているが、扉板と考えられる。閂受けの高さは5.5㎝、閂孔は7.5×4.4㎝の長方形である。

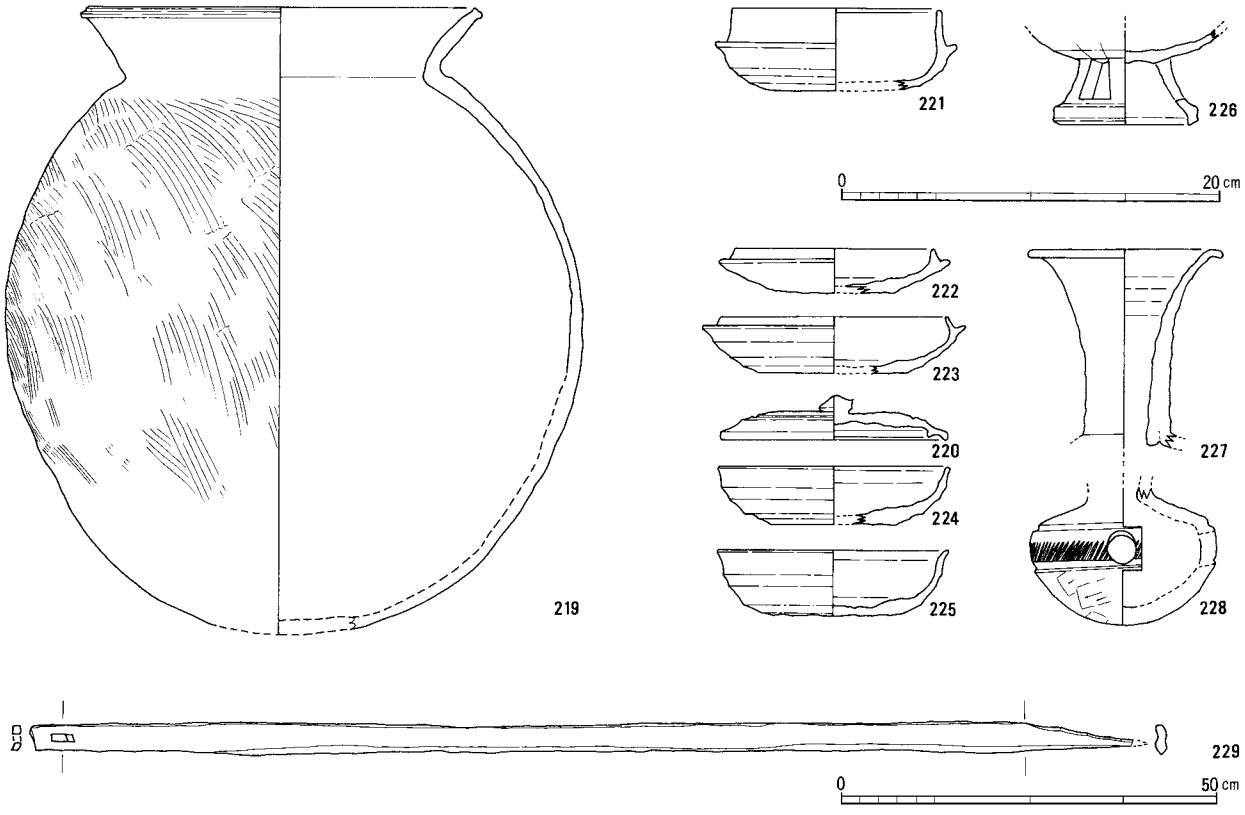
妻壁板（183） 確証はないが、一応妻壁板としておく。腐食が激しく不明確であるが、中央に直径12㎝の円孔を設けるものと考えられる。

柱（214・215・218） 214・215は竪穴住居の主柱、218は掘立柱建物の柱と考えられ、218は井堰に転用されていた。

214・215は、先端部の枝を利用し、さらに幹を切り欠き、梁受けを作り出している。214は下端を欠損しているが、この部分が地面との接点とすれば、地上高は約1.9mである。215の上半は、火を受けて、やや炭化している。

垂木（211～213） 確証はないが、竪穴住居の垂木とした。211は直径7㎝の幹をそのまま利用し、212は直径10㎝の幹を半裁、213は直径5.6㎝の幹を1/4に裂いて利用している。213は両端を、211は片端を尖らしており、212も腐食のため不明確ではあるが、片端または両端を尖らしているようである。3者とも屋根の重みのためか、やや弓状に弯曲する。213は火を受けたためか、やや炭化する。

部材（178・184～187・197・198） 腐食や欠損のため全体の形状が不明確なものが多いが、184は角材、他のものは板材に加工を施したものである。178は2㎝の方形枘孔を設け、184は先端を1.2×3㎝ほど切欠く。185は6.8㎝の方形枘孔を42㎝（14寸）間隔で2個確認できる。186は腐食が激しく不明確ではあるものの両端に6×8㎝の方形枘孔を設ける。指物腰掛の座板とするには、幅が狭い。187は、



第69図　ぬか塚周溝（SX259）出土遺物 実測図（219～228＝1：4、229＝1：10）

片端の両側に2.4㎝の仕口、中央に2.8×1.6㎝の方形枘孔を設けるが、腐食が激しく両端欠損の可能性もある。197は直径6㎝、198は直径10㎝の円孔が中央部に空けられており、197は井堰に転用される際に先端を杭状に尖らしている。

板材（188・191～196・210・216・217） 216の一方の端は、両側を切欠くことにより24㎝の出枘状の突出部を形成する。他方は、欠損のため明確ではないが、片側を12㎝ほど切欠く。壁板か。195は腐食のため片端は不明であるが、端を斜めに切り欠いていることから妻壁板の可能性もある。210は一方の端を薄く尖らせ、一部に火を受けている。

割棒（179） 直径8㎝の丸太を半裁している。

杭（199～209） 丸杭（199～201・205～209）と角杭（202～204）がある。丸杭は自然木の先端を尖らせるものであるが、201は加工された丸棒を利用している。他の部材の転用であろうか。

Ⅰ．ＳＸ２５９出土遺物（第69図）

土師器の甕（219）、木製品（229）の他は全て須恵器である。220は蓋、221～225は杯、226は高杯、227は長頸壺、228は𤭯である。これらの内、220・222・224・225・227・228は上層の出土で、時期がやや降る可能性が大きい。

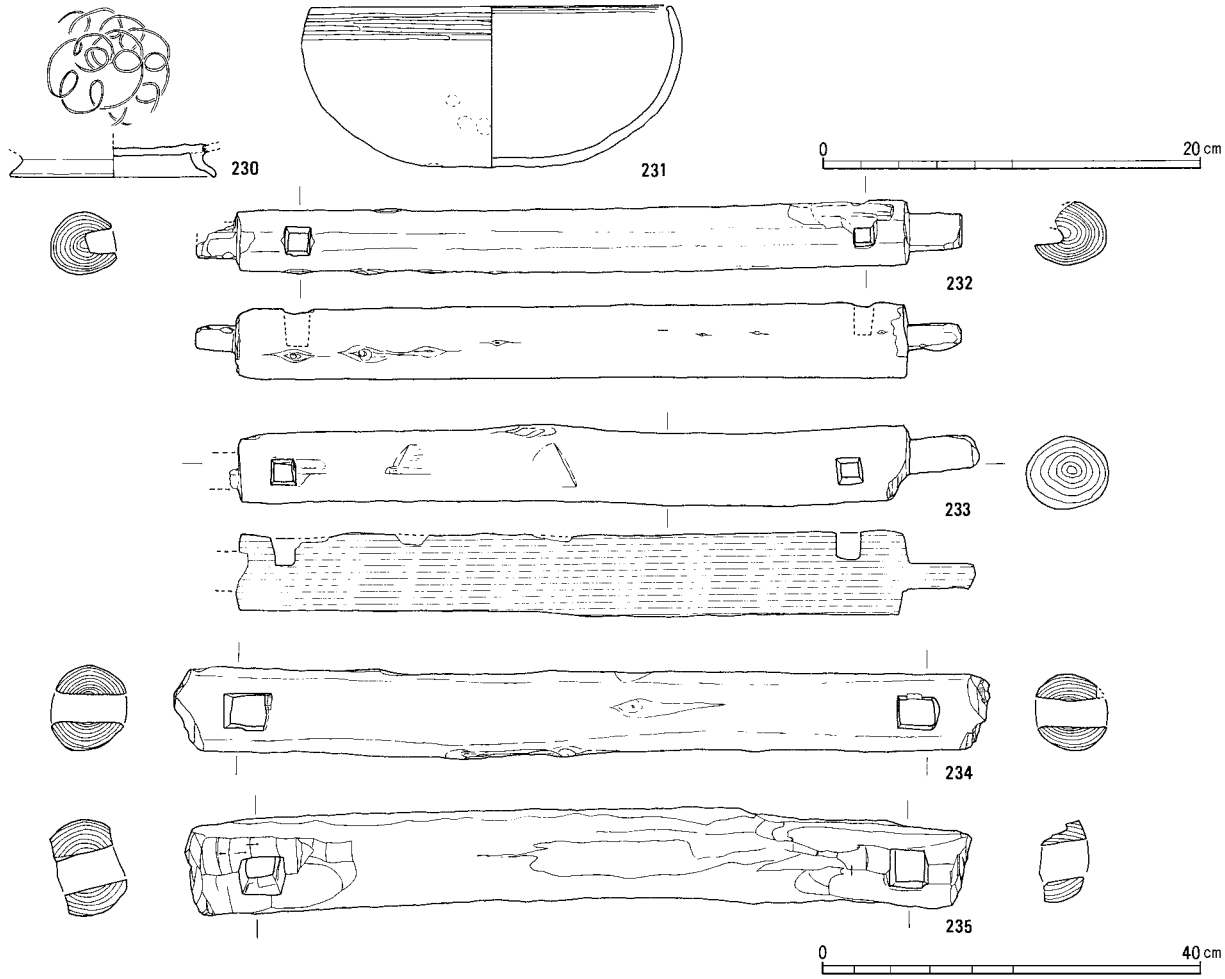
須恵器蓋(220)は宝珠つまみをもつものであるが、工具の接触によるものか一部がつぶれている。

須恵器杯には受部をもつもの（221～223）ともたないもの（224・225）がある。221は、底部外面を丁寧にロクロケズリするが、口縁端部には段を設けず丸くおさめる。225は底部と口縁部の境のみにロクロケズリを施すものである。

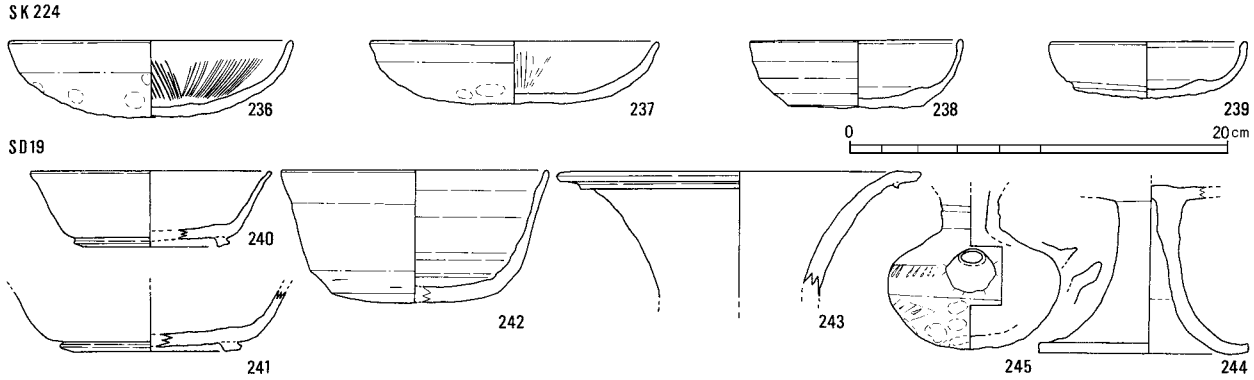
𤭯（228）は、底部外面を浅くヘラケズリし、体部には2条の沈線を施す。沈線間には櫛による刺突文を密に施している。

木製品（229）は、先端を杭状に尖らせ、他方には2.8×1.2㎝の方形枘孔を設ける。

Ｊ．その他遺構出土遺物（第61図）



第70図　SE261出土遺物 実測図（230・231＝1：4、232～235＝1：8）



第 71 図　SK224・SD19 出土遺物 実測図（1：4）

＜土師器＞

136 は SK80 出土の椀、137 は SD257 出土のミニチュア壺、138 は SK260 出土のミニチュア鉢、139 は SB295 柱穴出土のミニチュア鉢である。138 の内面には赤色顔料が付着する。

＜須恵器＞

両者とも杯で、140 は SK222、141 は SK223 の出土である。前者の底部外面は雑にロクロケズリされるが、後者は未調整である。また、140 の口縁部は受部の内側に貼り付けて立ち上げている。

3．飛鳥時代の遺物

最も多くの遺物が出土しているが、ほとんどが SD201 からの出土である。土師器・須恵器杯については、飛鳥藤原京の分類[31]に従う。

A．ＳＥ２６１出土遺物（第 70 図）

230 は土師器の杯、231 は鉢である。230 は比較的高い高台を貼り付けるため、鉢や壺にちかい器種かもしれない。胎土精良の精製品である。231 は口縁部外面のみをヘラミガキする。

232 ～ 235 は木製の井戸枠で、それぞれ枘差しで方形に組まれていたものである。直径 6 ～ 10 ㎝の丸太を長さ 80 ㎝程度に切断し、4 ㎝の方形枘孔を設けるもの（234・235）と 4 ～ 7 ㎝の出枘を設けるもの（232・233）がある。後者には 2.4 ㎝の方形枘孔も設けられており、枠を支える支柱が取り付いていたものと考えられる。235 は枘孔周囲を平坦に加工し、接合の気密を高めている。

B．ＳＫ２２４出土遺物（第 71 図）

図示したものは全て杯で、236･237 は土師器杯 C、238・239 は須恵器杯 G である。土師器杯は両者とも放射暗文を施すが、237 の口縁端部が若干外反するのに対し 236 はそのまま丸くおさめる。236 は胎土精良の精製品であるが､底部内面に煤が付着する。

須恵器杯の底部外面は、ロクロケズリするもの（238）と未調整のもの（239）があり、前者は蓋の可能性もある。

C．ＳＤ１９出土遺物（第 71 図）

図示したものは全て須恵器で、240・241 は杯Ｂ、242 は椀、243 は壺、244 は高杯、245 は甕である。杯は底部のやや内側に高台を貼り付けるものであるが、240 が底部外面をナデるのに対し 241 は未調整である。245 は注口が突出するもので、体部の文様はヘラによる刻目である。文様帯の区画は浅い沈線によるが､上方のみで下方は省略されている。また、底部外面のヘラケズリは多くの未調整部分を残すもので、全体として雑な仕上げである。

D．ＳＤ２０１出土遺物（第 72 ～ 83 図）

建物群を区画する溝から多量の土器や木製品が出土し、当調査出土遺物の半数を占める。

＜土師器＞

杯Ａ（246 ～ 256） 精製の杯で、底部から屈曲気味に立ち上がる口縁部をもつものである。249・252 は特に精製品である。口径24.6㎝の大型のもの(256) と 16 ～ 19.6 ㎝の中型のもの（246 ～ 255）がある。247 を除き、外面にヘラミガキ、内面に 2 段放射暗文、底部にラセン暗文を施す。放射暗文は上段が密で、1 ～ 3 ㎜間隔、下段が 2 ～ 4 ㎜である。残存の良好な 253 によると上段は 6 分割、下段は 3 ～ 4 分割で一周し、底部ラセン暗文は 3 重である。輪は 7 ㎜で外側は 19 個、中は 10 個で一周する。また、外面のヘラミガキは 4 分割である。

246 ～ 248 はラセン暗文を放射間にも施す。また、255 は上段の放射暗文が認められず、ラセン暗文も確認できなかった。外面のヘラミガキも疎らである。251 は、放射暗文を施さず、ラセン暗文のみを 3 ～ 4 段施している。また、247 の外面にはヘラミガキが認められない。252 の底部外面には幅の広いハケ状工具で掻き取る様な痕跡がある。

杯 C（257 ～ 284） 精製の杯で、底部から内弯気味に立ち上がる口縁部をもつものである。口縁端部は外反するものが普通である。口径 15.5 ～ 16.4 ㎝ほどの大型のもの（257 ～ 263）、12.4 ～ 15.0 ㎝程度の中型のもの（274 ～ 284）、8.9 ～ 11.8 ㎝の小型のもの（264 ～ 273）がある。

調整は、外面を未調整、内面には暗文を施すが、257・258・264・265 は外面に雑なヘラミガキを施す。263 の外面には一部に縦方向の強いナデがある。

暗文は底部にラセン暗文、口縁部に放射暗文を施す。264 のラセン暗文は直径 7 ㎜で 2 重に巡り、外側のものは 7 ～ 8 個で一周する。その一方、ラセン暗文が明らかに認められないもの（265・269・271・273・274・278）がある。284 も同様であるが、ラセン暗文の代わりに弧状のものを施す。放射暗文は、3 ㎜間隔で施されるが、不規則なもの（265）や粗いもの（274 ～ 276）がある。

261 には墨書、265 にはヘラによる記号「×」がある。墨書は、口縁部外面に 2 ～ 3 文字書かれ、仮に 3 文字とした場合「小納奴」と読めなくもないが、意味不明である。

皿（285 ～ 301） 底部から内弯して立ち上がる口縁部をもつもの（285 ～ 291）と屈曲して立ち上がるもの（292 ～ 301）がある。両者とも口縁部端部は一様でなく、外反するもの（289・298）、内に肥厚するもの（285 ～ 288・294・295）、そのまま丸くおさめるもの（290 ～ 293・296・297・299 ～ 301）がある。

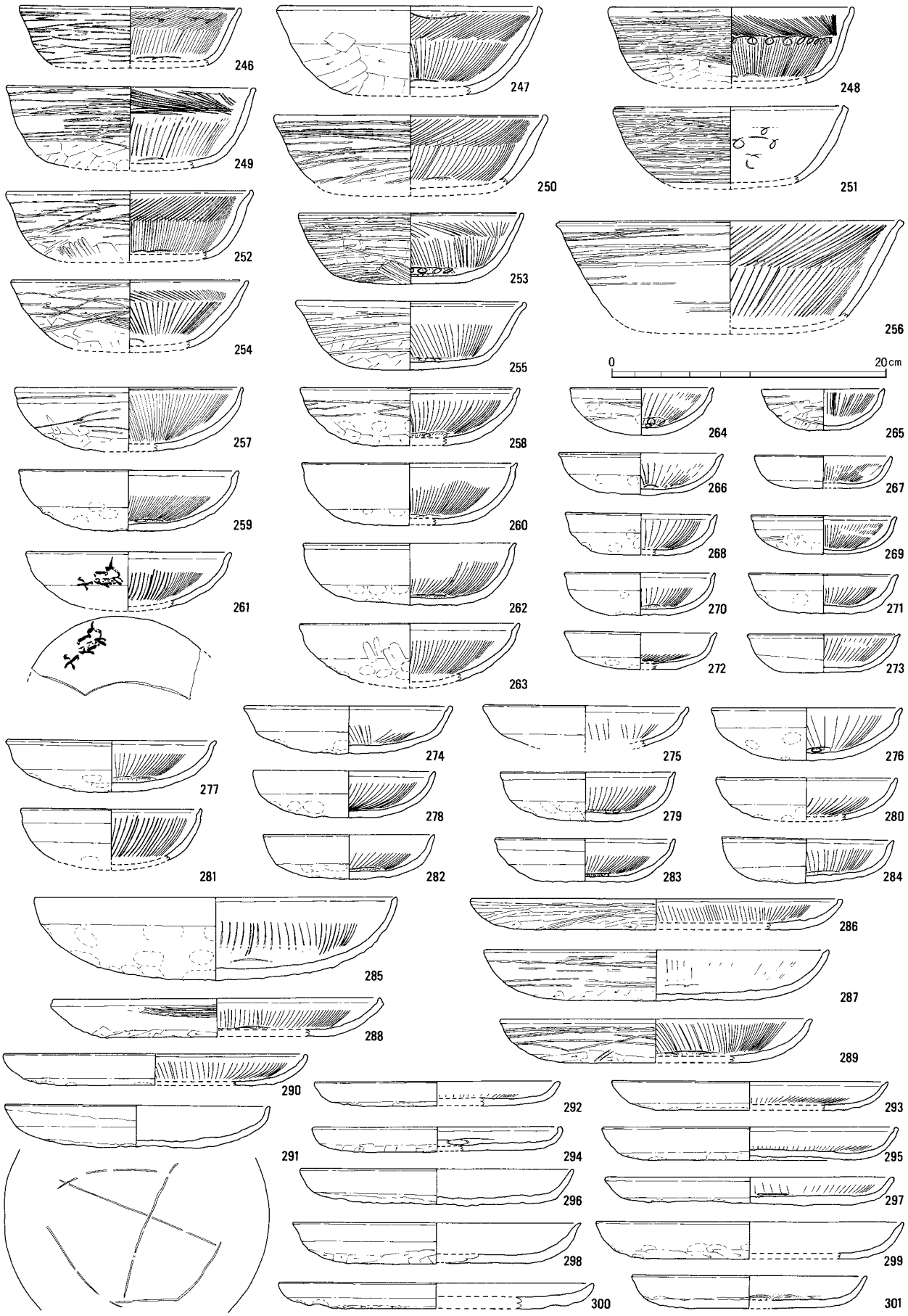
調整も多様で、底部外面をヘラケズリするもの（286 ～ 289・294・298 ～ 300）と未調整のもの（285・290 ～ 293・295 ～ 297・301）があり、286 ～ 289 は口縁部外面にヘラミガキを施す。特に 286 ～ 290 は胎土も精良で、精製品である。

暗文は底部にラセン、口縁部に放射暗文を施すものが普通であるが、ラセン暗文が明らかに認められないもの（292）、放射暗文が無いもの（294）、両方共に無いもの（296・300・301）がある。301 は内面をハケメで調整する粗製のものである。

291 の底部外面には焼成前にヘラによって刻まれた「×」の記号がある。また、296 の底部外面には板圧痕があり、板の上で土器製作した際のものと考えられる。さらに、291・297 の内面には、鋭利な工具による不定方向の線刻状の痕跡が認められる。使用痕であろうか。

椀（302 ～ 355） 半球状の形体を呈し、粗製である。口縁部をそのまま丸くおさめるものが多いが、302・306 の外面に沈線、341 は凹線状に、337・341・355 の内面には弱い沈線を施す。343・347・351 の口縁端部は外反し、精製の杯 C に似た形態である。特に 343 は明赤茶色を呈し杯 C とすべきものであるが暗文はなく、内面を工具によるナデで調整する。また、351 は、放射暗文が認められないものの底部内面にラセン暗文が施され、320 も形体的には杯 C にちかい。また、形体的には異なるが、暗文を試みたものも多く認められる。324・326・333・335 があり、324 は、焼成後、鋭利な工具による放射状沈線を施し、底部にもラセン暗文の模倣と考えられる同様な沈線が認められる。333 は、丁寧な放射暗文を施し、杯 C とすべきかもしれない。335 は、雑な放射暗文で、乾燥不十分で施されたためか沈線状になる。345 の内面にも暗文状の痕跡があるが、単にナデの痕跡とすることもできる。また、329 の内面の仕上げは、粗製椀ではあるものの非常に丁寧なものである。

調整は、大部分のものが内面ナデ、外面未調整であり、305・306・309・313・315・317・322・326・330・332・336・341・349・353 では内面を工具により調整した痕跡が認められ、さらに、314・316・318・331・337・338・343・347 では板状工具であることがわかる。外面をヘラケズリするもの（305・332・333・349・353）、ヘラケズリの後、雑なヘラミガキを施すもの（335・342・346・348）もある。342・346・348 では内面にもヘラミガキを施し、特に 346 では 4 個で 1 周する雑なラセン暗文となる。ハケメを用いるものもあり、313 は外面に、311 は



第 72 図　SD201 出土遺物 実測図（1：4）

外面の一部に、352は内面に施す。352のものは非常に浅く、工具によるナデとすることも可能か。また、352は高杯の可能性もある。

ヘラにより「×」の記号を施すものがあり、303・310・319は内面に、320は外面に認められる。

304・325には漆の付着があり、325は、ヘラ状工具により掻き取った痕跡が残る。漆工芸に使用された容器かもしれない。また、煤の付着するもの（328・334）、赤色顔料が内面に付着するもの（338）もある。

製作技法の一部が観察できるものもあり、322では底部の粘土板を作らず、最初から粘土紐を巻き上げ、2～3段で成形を完了している。また、308の底部外面には木葉痕がある。

高杯（356～368） 杯部は放射暗文とラセン暗文を施すものと考えられるが、359は内外面に不定方向のヘラミガキを粗く施し、異質である。脚部外面は、366・368がヘラケズリの他は、ナデで調整するが、面取り状の強いナデを施すものがある。363は8面、365は6面、368は14面になるものと考えられる。脚部全体ではないが、364は脚部杯部との接合部付近に面取り状の強い指ナデを施す。

361は杯部と脚部の接合が雑であり、362の脚部は絞り痕が外面にも表れている。

甕（369～414） 球形の体部のもの（369～403）と長胴のもの（404～414）がある。

前者のうち、369～371は内弯気味の口縁部をもつものであるが、369は古相を帯びる。370の内面がハケメで調整されるのに対し、371はヘラケズリである。

372・373は比較的長い口縁部をもつもので、壺にちかい形体である。372は口径約18㎝の大型のもの、373は小型で14㎝である。前者の内面はハケメで調整されるのに対し、後者はナデである。

374は短く外反する口縁部をもつもので、全体に厚手である。頸部と体部の接合部が沈線状を呈し、体部外面下半をヘラケズリする。

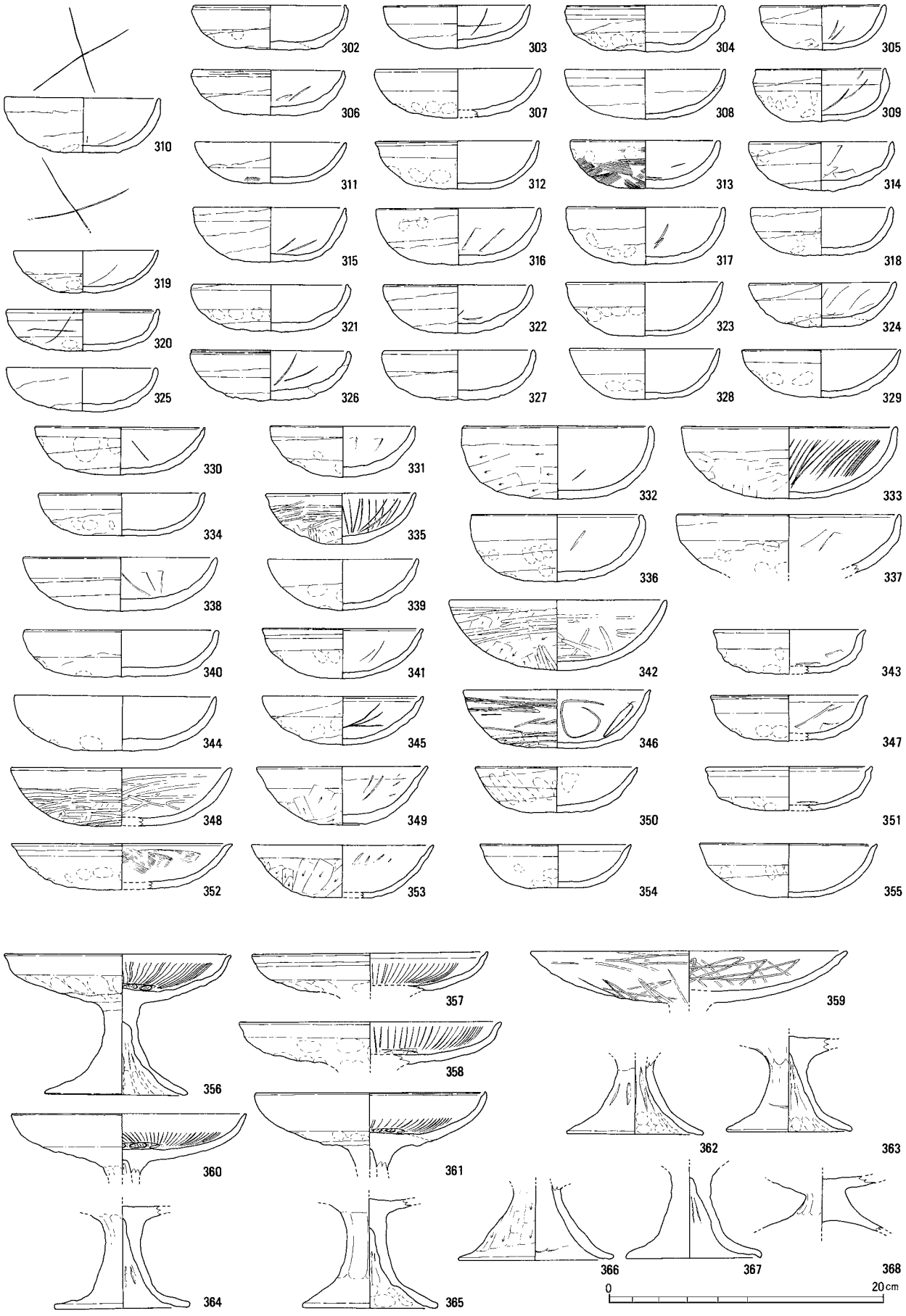
375～386は、体部から口縁部の屈曲が比較的浅いもので、特に386は、短く直立気味の口縁部で鉢にちかい形体である。375・383・384の体部外面には一条の沈線が施される。383は正立状態でみれば、右回りの回転台により施されたようである。また、376の口縁部内面には疎らな放射状沈線が認められる。成形時の工具痕であろうか。調整はハケメを基本とするが、外面下半をヘラケズリするもの（375・383）、内面がナデのもの（380・382・383・386）、内外面がナデのもの（381）、体部内面下半がナデのもの（375）がある。ハケメは内外面を同一工具によって施されていることがわかるもの（377・384）があり、また、385のハケメは非常に間隔が広く、浅いナデ状のものである。

387～392は外反する口縁部で、端部は外に面をもつものである。頸部が他より厚いこと等、南勢方面の特徴をもつ。387・390・391の口縁端部外面には一条の沈線が巡る。調整はハケメで、内面下半をヘラケズリするものと考えられるが、残存率が悪く、388以外では確認できない。391は外面が未調整であり、390は内外面共にナデで一部を雑にヘラケズリする。

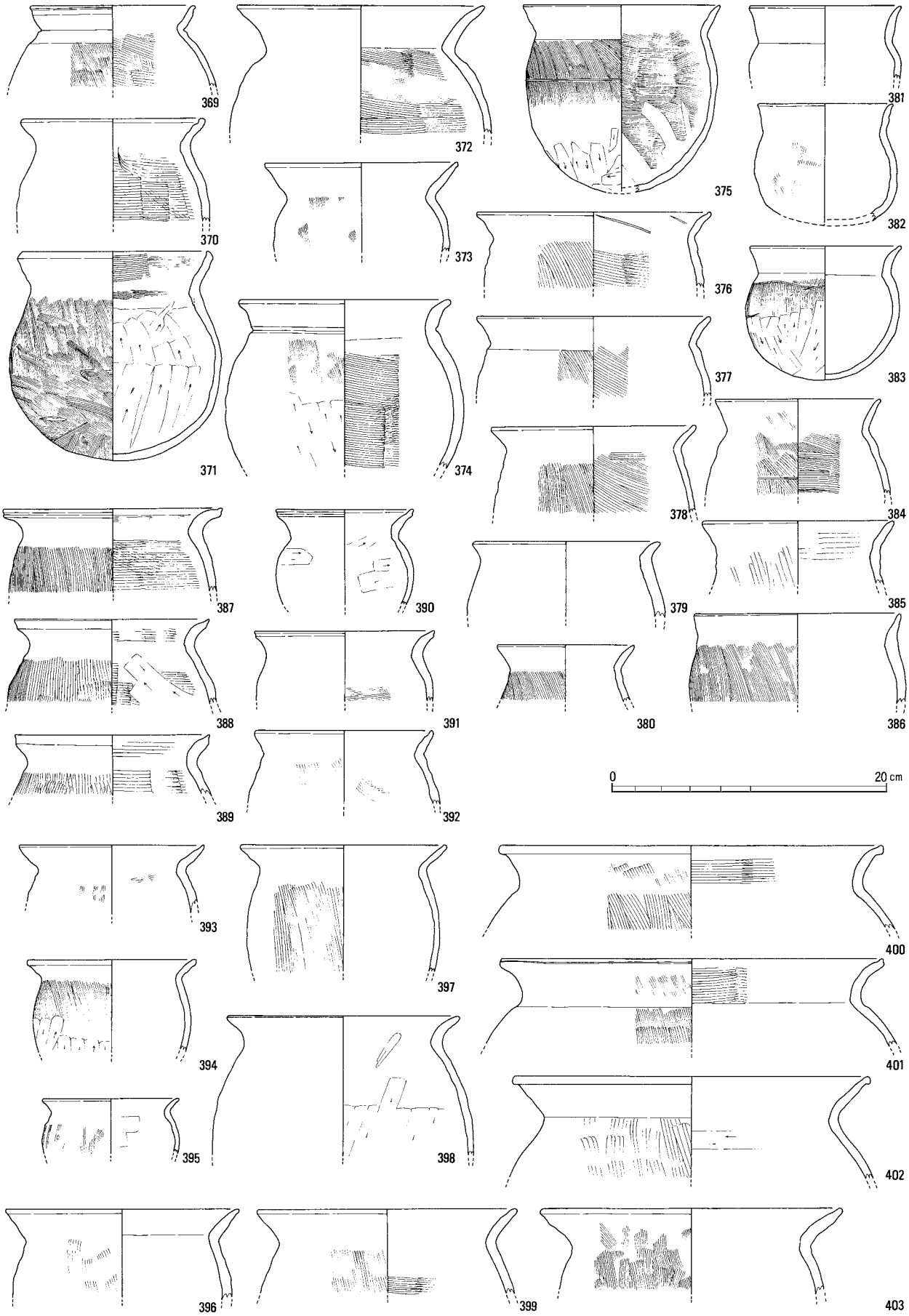
393～403は、体部から「く」字に屈曲する口縁部をもつものである。口径27㎝を超える大型のもの（400・401）から10㎝未満の小型のもの（395）まで多様である。外面をハケメ、内面をナデで調整するものが多いが、393・399は内面にもハケメを施す。体部下半のヘラケズリが確認できるものは、394の外面、398の内面である。また、396のハケメは非常に浅く、工具ナデとすることもできる。398の内面のヘラケズリも浅いものである。

長胴のものでは、内弯する口縁部をもつもの（404～407）と外反するもの（408～414）がある。406・411の口縁端部外面には一条の沈線が巡る。調整はハケメが基本であるが、405のハケメは非常に浅いものである。他に、内面がナデのもの（408～411）、内外面共にナデのもの（413）がある。414の外面はハケメの後ヘラケズリを施す特異なものである。410は体部外面下半のヘラケズリが確認できる。

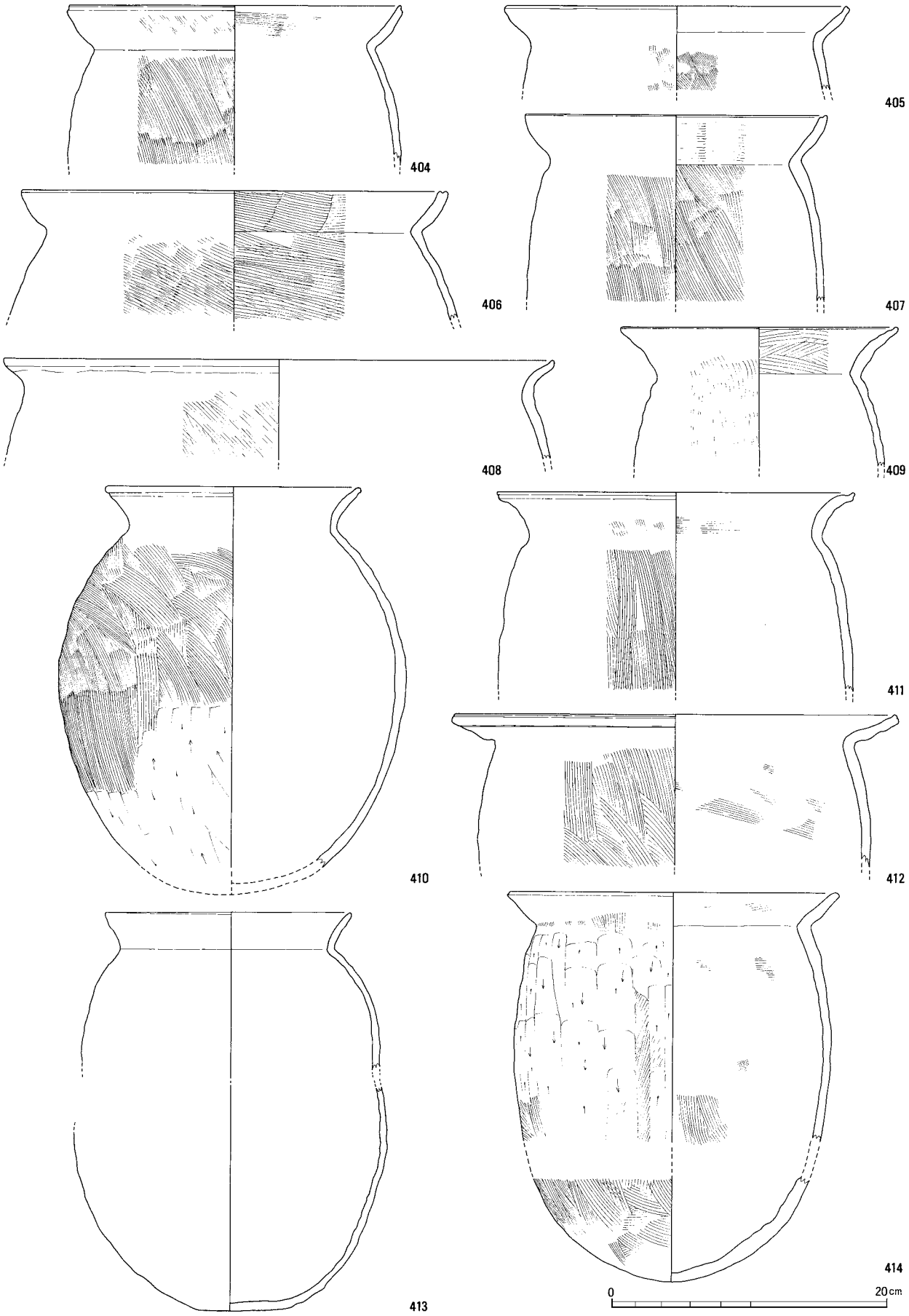
鉢（415～421・426・427） 半球形の形体を呈するもの（418～421）が多い。須恵器鉄鉢を模倣したものかもしれないが、420には片口が設けられ、他のものも同様である可能性もある。他に把手をもつもの（415）、外反する口縁部をもつもの（416・



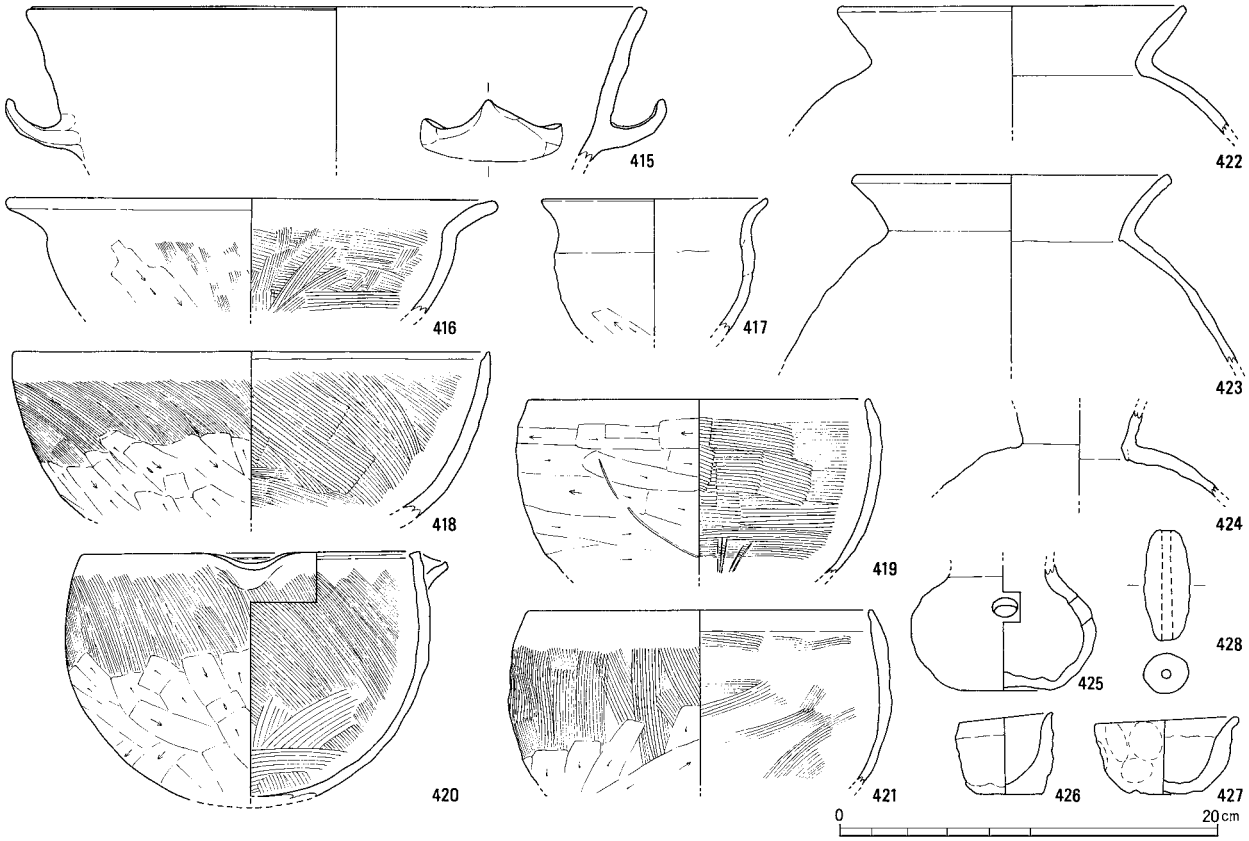
第 73 図　SD201 出土遺物 実測図（1：4）



第 74 図　SD201 出土遺物 実測図（1：4）



第 75 図　SD201 出土遺物 実測図（1：4）



第 76 図　SD201 出土遺物 実測図（1：4）

417)、ミニチュアのもの（426・427）があり、417は甕とすべきかもしれない。調整はいずれも体部外面下半をヘラケズリ、他をハケメで行うものであるが、419は外面全面をヘラケズリし、417はハケメを用いず、ナデや未調整による。419の内外面には鋭利な工具による沈線が認められる。

壺（422 ～ 425）　422・423は甕とすべきかもしれないが、423の調整がヘラミガキの可能性があるため一応壺とした。両者は同一個体の可能性もある。424は前代の混入かもしれない。425は注口をもつ小型壺で、非常に雑なつくりである。

土錘（428）　最大径2㎝の体部に、直径5 ～ 6㎜の孔を空ける。

＜須恵器＞

蓋（429 ～ 485）　半球状の形体のもの（429・430）と宝珠つまみの付くもの（431 ～ 485）がある。前者は杯身との識別が困難であるが、天井部外面をヘラケズリで調整しているため蓋として扱うことにする。430のヘラケズリはロクロで行っているが、429は不定方向の雑なものである。両者の天井部外面には「×」の記号が、焼成後鋭利な工具で記されている。

宝珠つまみの付くものには口径9 ～ 11㎝の小型のもの、14㎝前後の中型のもの、17㎝を超える大型のものがあるが明確でない。大型のものには、口縁部内面のかえりの退化が著しいもの（481）、消失しているもの（482 ～ 484）がある。485は中型であるが、かえりは消失しており、扁平な体部に大きなつまみの付くやや特異な形態である。小型のもののうち431 ～ 433は器高が高く古相を帯びる。また、434・435は壺蓋の可能性がある。調整は自然釉のために不明確なものもあるが、天井部外面をロクロケズリ、他をロクロナデで調整し、天井部内面を一方向のナデで仕上げるものである。462のつまみはヘラ状工具により先端部を刻み取られている。475のつまみは非常に鋭利で均整が取れている。指による成形とは考えにくく、何らかの工具が使用されているかもしれない。

杯H（486）　486のみであり、混入の可能性がある。

杯G（487 ～ 553）　蓋との識別に迷うものもあるが、外面にロクロケズリによる調整を施さないもの

を全て杯として扱う。

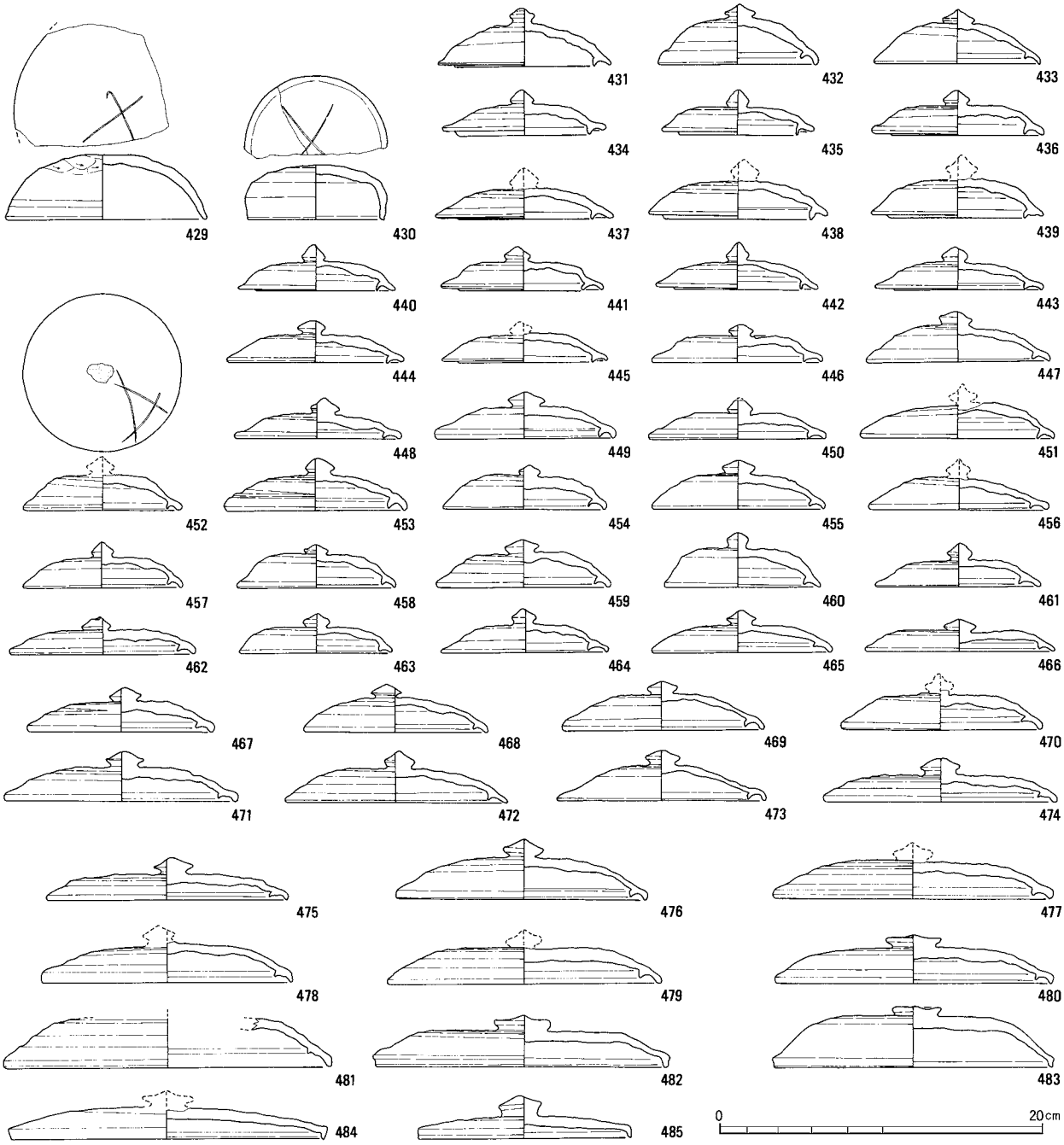
内弯する口縁部をもつものが主体であるが、548・552等端部が外反するものも若干ある。また、544・545等直線的に開く杯Aにちかい形体のものもある。537の体部外面には一条の沈線が巡る。

口径10～11㎝、器高3.5㎝前後であるが、口径8.4㎝、器高3.2㎝の小型のもの（550）や、口径13.4㎝、器高4.3㎝の大型のもの(553)もある。また、口径に対し器高の低い扁平な形態のもの（536･537）もある。

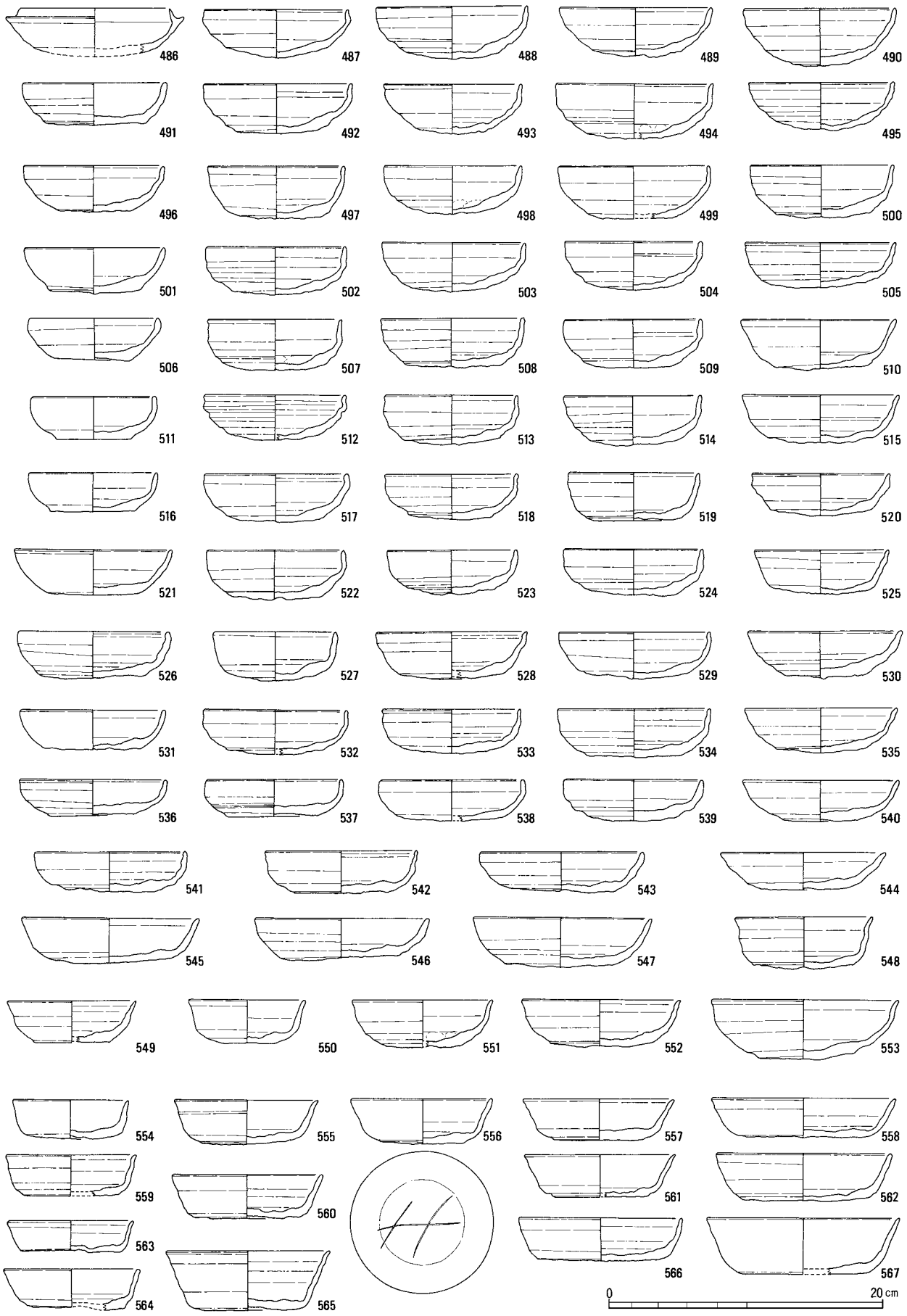
調整は、底部外面をヘラ切のまま未調整、他はロクロナデであるが、底部内面に一方向の仕上げナデを施す。500・511・513・516・519・523・543・547・552は、底部と口縁部の境付近外面にヘラケズリを1周のみ施している。

515、547には、重ね焼きの痕跡が認められる。焼成不良のものが比較的多く、全体の3割程度を占める。酸化焼成のもの（528)、黒斑のつくもの（490他）がある。

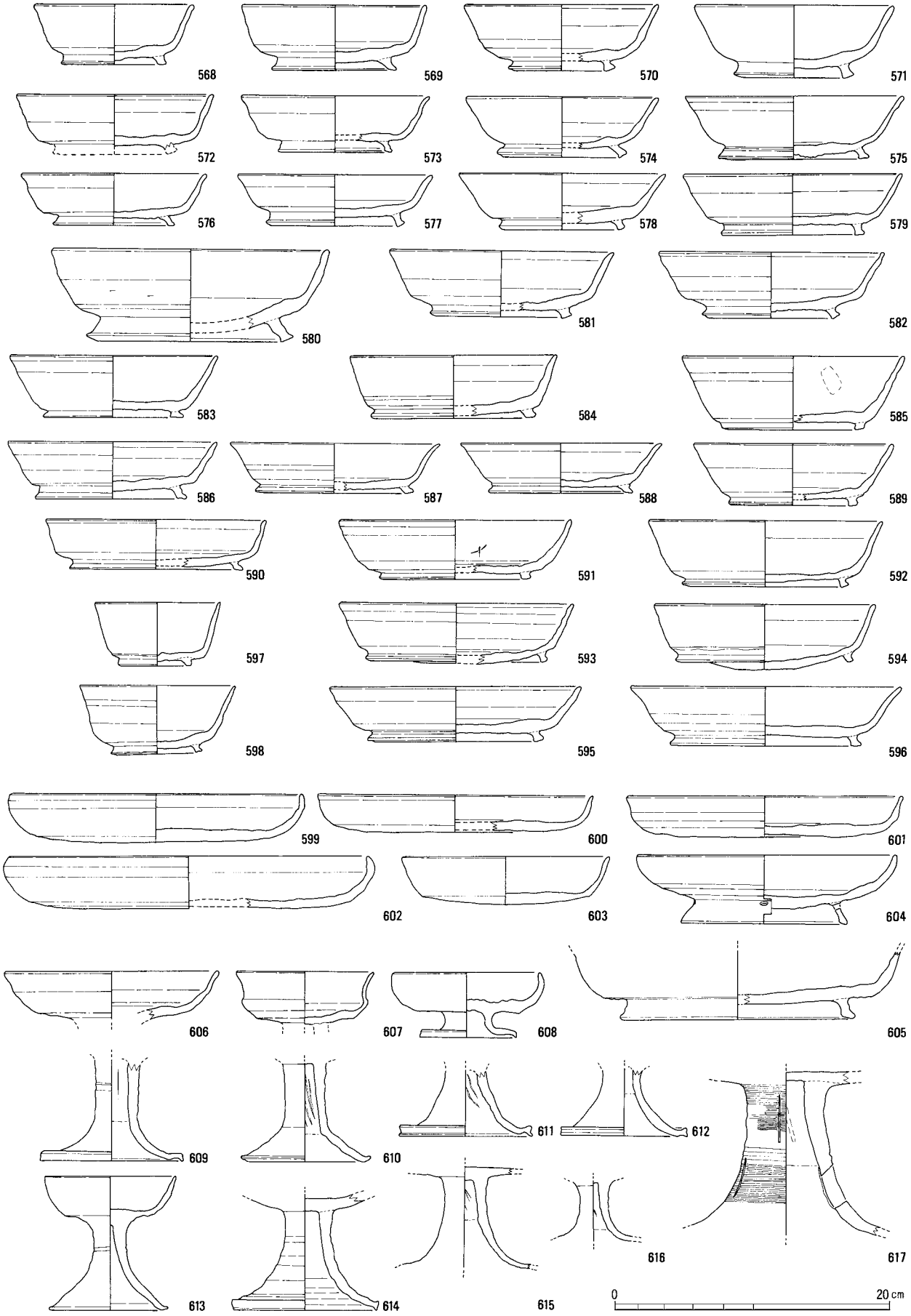
杯A（554～567） 口径8㎝前後、器高3㎝未満



第77図　SD201出土遺物 実測図（1：4）



第 78 図　SD201 出土遺物 実測図（1：4）



第 79 図　SD201 出土遺物 実測図（1：4）

の小型のもの（554）から、口径14㎝、器高4.2㎝の大型のもの（567）まであるが、口径10～11㎝、器高3.2㎝前後のものが主体である。565は口径に対し器高が高く、椀とすべきものかもしれない。全体に古相を示し、559･560の底部と口縁部の境には、杯Gの一部に認められたものと同様なロクロケズリが1周のみ施される。

また、556の底部外面にはヘラにより「＋」と焼成前に記されている。

杯B（568～596） 高台をもつものである。高台は、底部と口縁部の境のやや内側に付き、比較的高いものである。口径15㎝前後、器高4㎝前後のものが多いが、不均一である。597・598は、口径に対して器高が高く、椀とすべきものである。また、逆に口径が20㎝ちかいが器高の低いもの（596）は盤とすべきかもしれない。また、大型の580は壺の底部片と類似した形体で、569もそれにちかい。

調整は、底部外面をロクロケズリするものと未調整のままのものがあり、前者は全体の2割程度である。

後者のなかには、杯Gにみられたような口縁部と底部の境を1周のみロクロケズリするもの（579・586・589・596・597）がある。

瓦質に焼けたもの（573）等、焼成不良のものも比較的多く全体の1割程度である。

591の口縁部内面の底部ちかくにはヘラにより「×」と焼成前に刻まれている。

皿（599～605） 高台をもつもの（604・605）ともたないもの（599～603）がある。底部外面の調整は、ロクロケズリのもの（599・602・603・605）と未調整のもの（600・601・604）がある。ただし604は、口縁部下半を2周程度ロクロケズリする。604の高台には外から内に穿孔されており、直径4㎜である。

高杯（606～617） 比較的長脚のもの（609・610・613～615・617）と短脚のもの（608・611・612）がある。また、前者には筒状の脚部のもの（609・610）と緩やかに外反する脚部のもの（613・614・617）があり、多様である。杯部においても、口径が大きく浅いもの（606）と小さい口径で深いもの（607・608・613）がある。617のみカキメで調整するがロクロ回転が弱く、一部ハケメ状を呈する。透かし孔も617のみにみられ、鋭利な工具により細く刻まれたものである。

壺（618～635） 外方へ開く口縁部をもつもの（618）、長頸のもの（619～628）、小型のもの（629）、短頸のもの（630～634）がある。

長頸のものは、頸部に凹線を1～2条巡らせ、肩部にも1条を施す。624は2条の意識であったが、不慮にして3条となってしまったことを凹線の重なりが示している。619は口縁端部屈曲部に沈線2条、620は同じく突帯を1条貼り付ける。これらは、提瓶の口縁部の可能性もある。

短頸のものの肩部にも凹線を1条巡らすが、633は円形浮文を4方に施す。635は、比較的長い頸部がつくかもしれない。強いロクロナデのため体部下半の一部が凹線状になる。

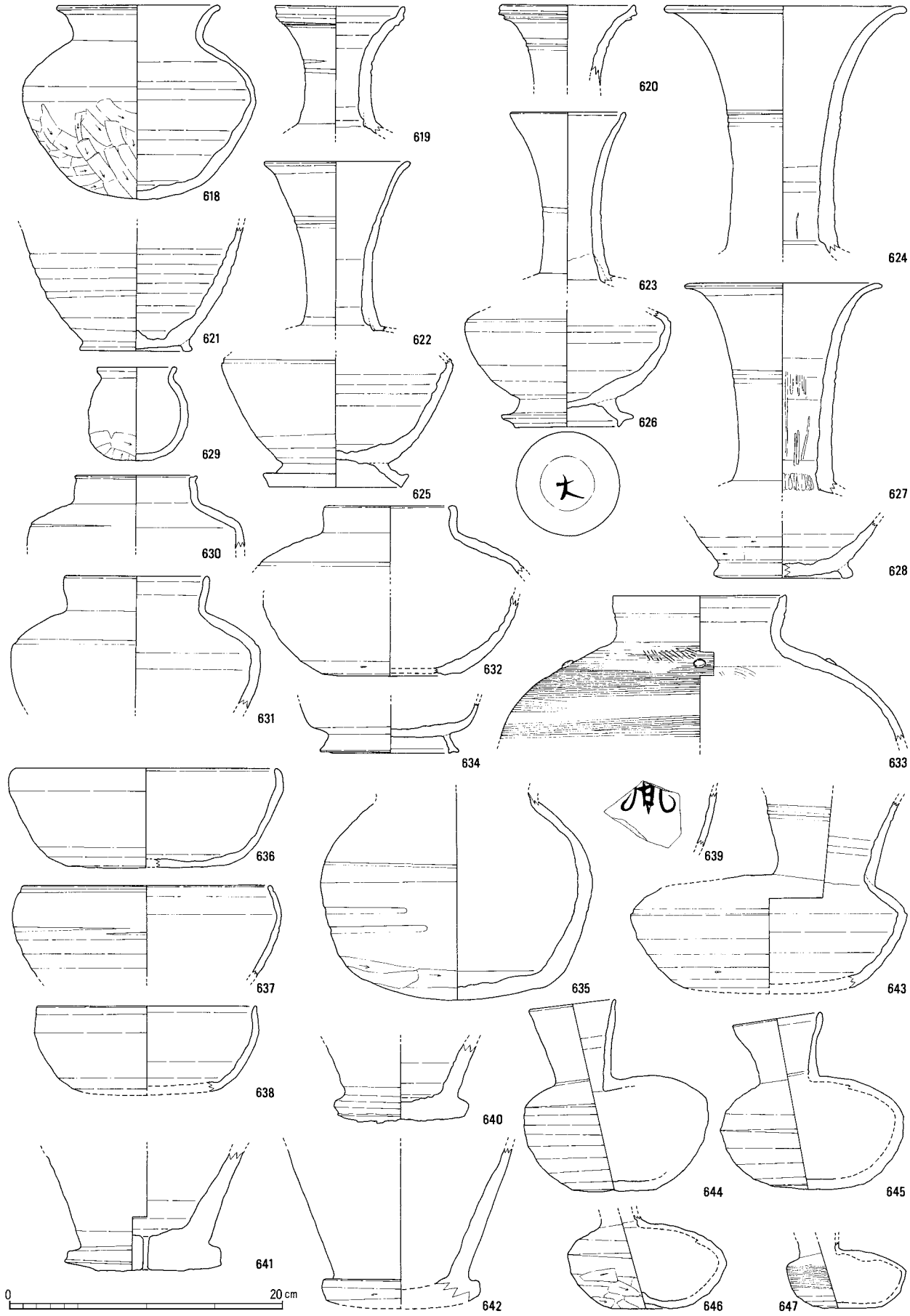
調整は、頸部の形体によらず、体部下半をロクロケズリ、他をロクロナデで調整するが、ヘラケズリにロクロを使用しないもの（618･629･635）もある。622の内面は板状工具によるロクロナデ、627ではロクロを使用せず、細かいヘラ状工具によるナデで調整する。633は、外面を雑なカキメ、内面をロクロナデでタタキの痕跡を消している。

626の底部外面には「大」と墨書される。

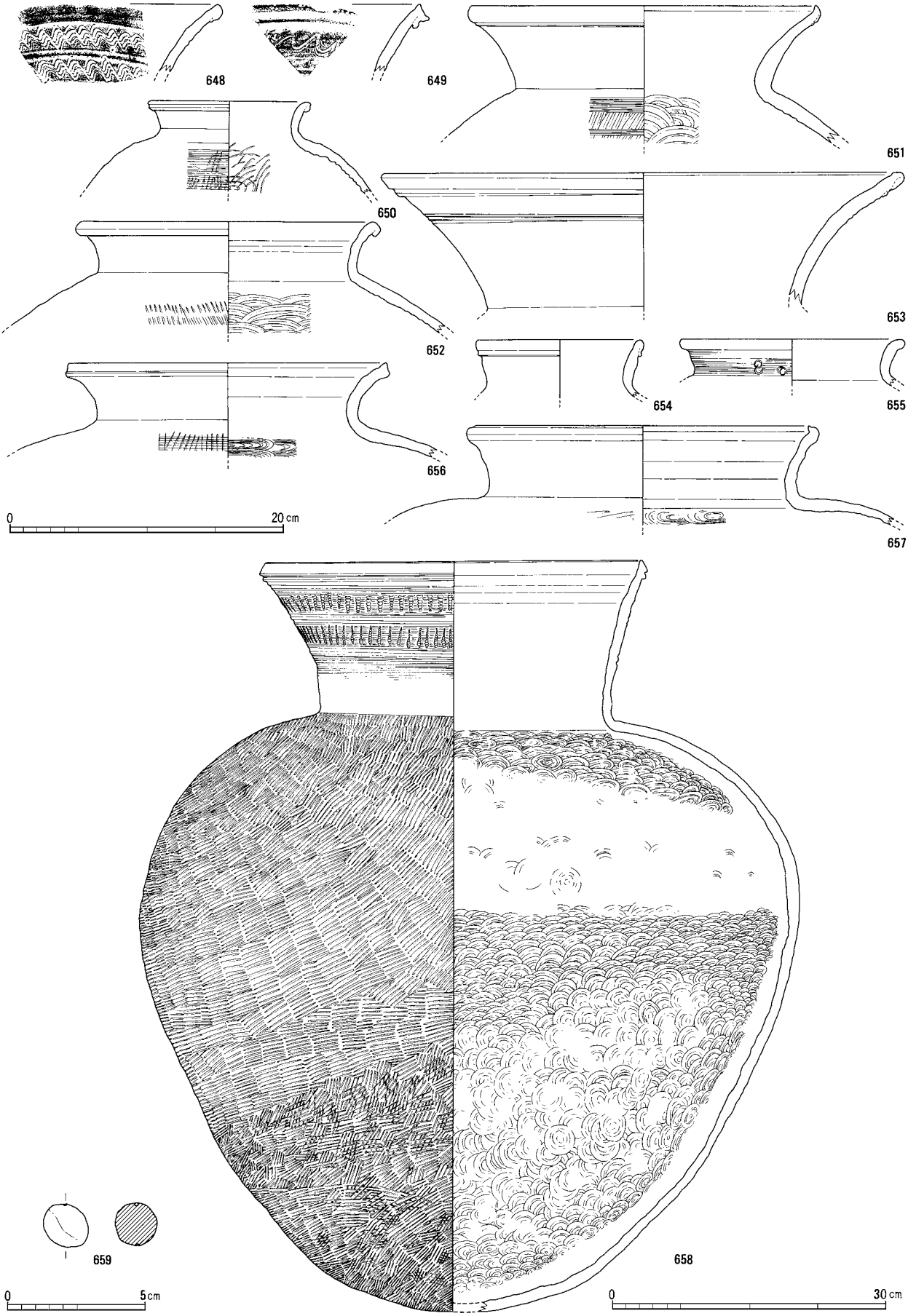
鉢（636～639） 比較的平らな底部をもつものであるが、637の口縁部には3㎝間隔で沈線2条が施されている。639は杯の可能性もある。外面に墨書されるが、全体は不明である。

擂鉢（640～642） 非常に厚い底部をもつものである。641は底部中央に3㎜の穿孔が施される。調整は全て底部外面未調整、他はロクロナデであるが、640・642は体部最下部外面のみロクロケズリを施す。

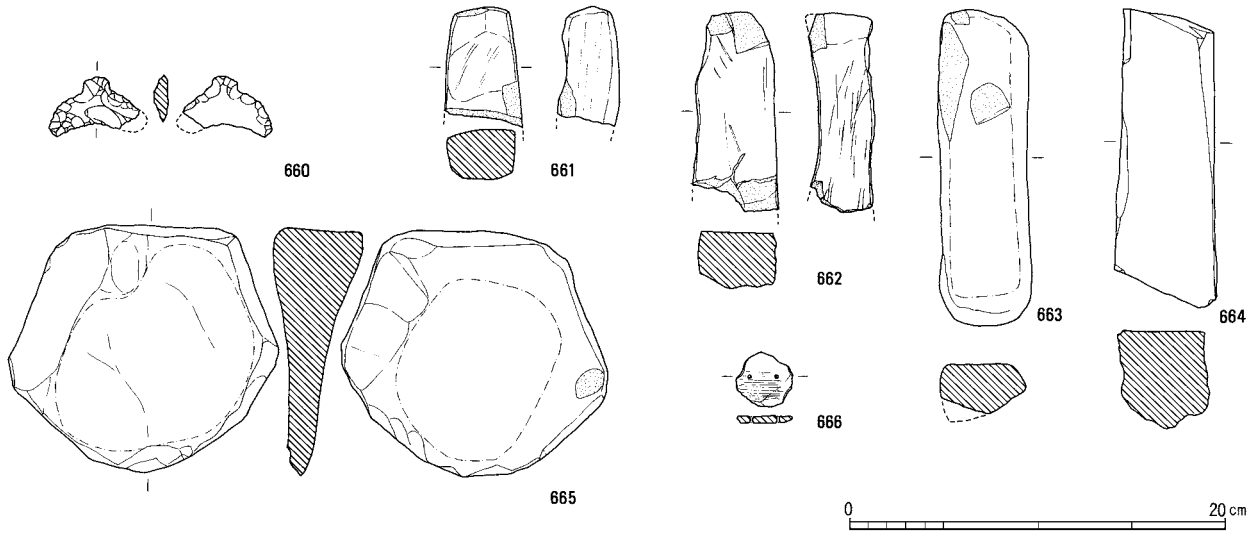
平瓶（643～647） 体部最大径20㎝の大型のもの（643）、13.5㎝前後の中型のもの（644・645）、11.5㎝以下の小型のもの（646・647）がある。大型の643には頸部に2条、体部に1条の沈線が施される。調整は全て体部下半～底部をロクロケズリ、他をロクロナデで行うが、646はロクロケズリの後、雑なヘラケズリを、647はロクロケズリの前に体部上半にカキメを施す。



第 80 図　SD201 出土遺物 実測図（1：4）



第 81 図　SD201 出土遺物 実測図（648 ～ 657 ＝ 1：4、658 ＝ 1：6、659 ＝ 1：2）



第 82 図　SD201 出土遺物 実測図（1：4）

甕（648 ～ 658） 658 が全体の形態を表す他は、口縁部～体部上半のみの破片である。口縁端部は外に折り返され、折り返した先が弱い凸線となるものもある（648・649・651・653・654）。また、波状文で装飾するもの（649）、波状文＋凹線のもの（648）、凸線＋櫛による刺突紋のもの（658）がある他は無文である。しかし、653 には沈線が巡り、655 はカキメを施す。体部はタタキによるが、その後カキメを施すものが多い（650・651・656・657）。

655 の口縁部外面には、直径 5 ㎜の竹管により穿孔を試みた痕跡がある。試みは 3 回ほど行われているが貫通していない。

陶玉（659） 直径 1.6 ㎝ほどの玉である。両方向から直径1.5㎜ほどの穴を空けようと試みているが、両方とも深さ 1 ㎜ほどで中断されている。

＜石器・石製品＞

660 は石匙、661 ～ 664 は砥石、665 は石皿、666 は有孔円盤である。660 のＢ面は剥離面をそのまま生かしている。661 は磨製石斧を転用したものである。662 には鋭利な工具により刻まれた様な痕跡がある。使用痕と断定し難い。666 は直径 2 ㎜の孔を両方から穿孔している。

＜木器・木製品＞

667 は曲柄又鍬であるが、それ以外のものは器種を断定できない。

668 は、先端をひとまわり大きく釘頭状に作り出し、一方の先端を尖らせる。身には先端ちかくに枘孔を穿つ。このような特徴から栓とするが、全長が 35 ㎝を超え、疑問もある。

669・670 は部材としておく。669 は片端を焼失するが、他方は切欠きにより出枘状に仕上げる。武器形とするには刃を成形しておらず、幅も 8 ㎝と広い。仮に武器形とした場合、同一地点から出土した 670 を刀剣鞘装具とする可能性もある。欠損が多く全体の形態が不明であるが、片端は出枘状に作り出す。残存幅が内剝部分に限っても 7 ㎝あり、669 とは矛盾しないものの断定できない。

671 は雑な仕上げであることから一応、匙形木器としたが、叩板の可能性もある。

672 は蓋板と考えた。中央に孔を空ける。周囲を切り欠き、やや薄く加工していることから他の部材の可能性もある。

673･675 は板状の部材である。675 は薄いもので、斎串としたが確証はない。檜扇の可能性もある。

674 は直径 1 ㎝ほどの丸棒である。両端を欠損しており、残存長は約 20 ㎝、やや弯曲している。

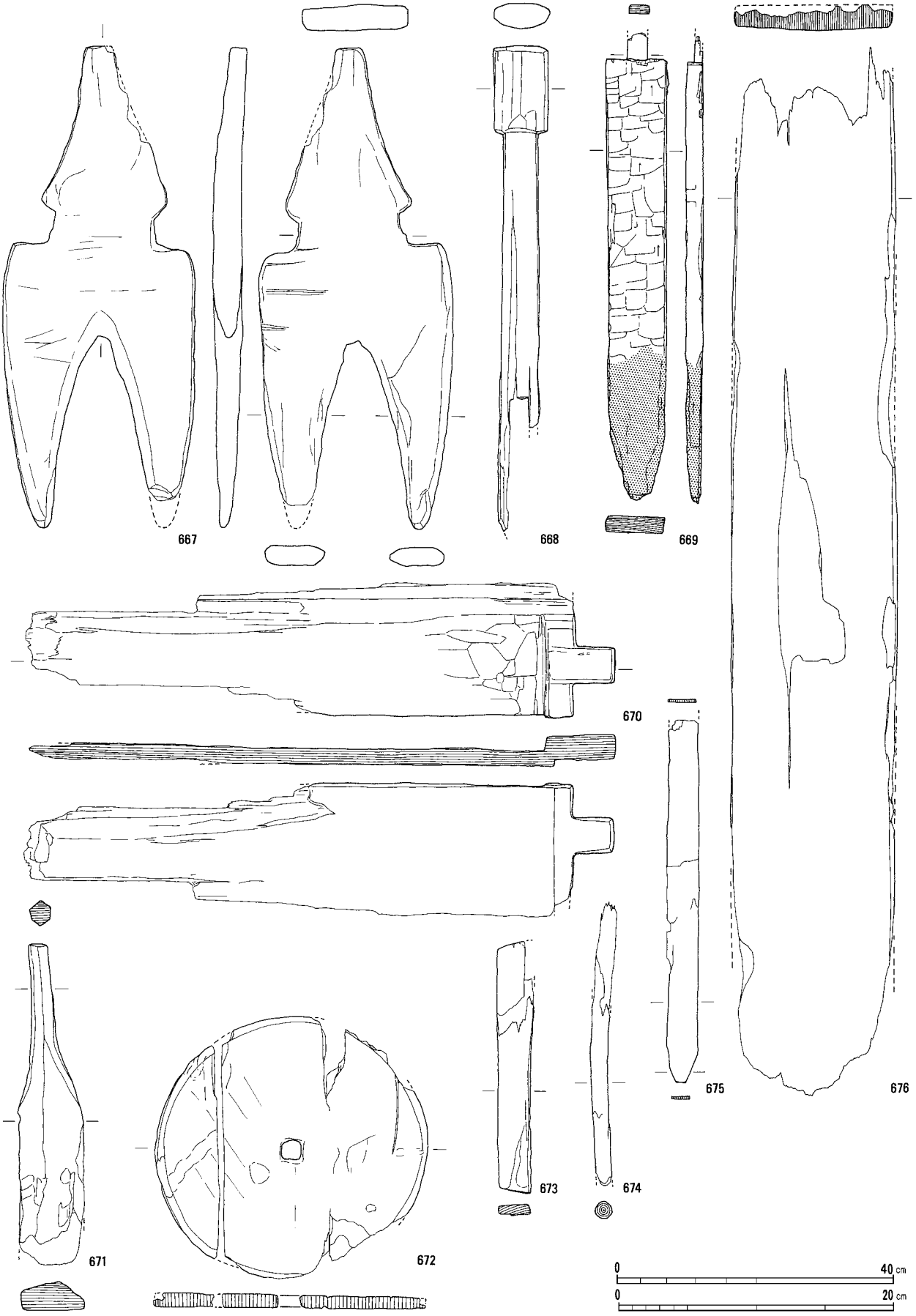
676 は板材で、残存長 150 ㎝である。建物の壁板か。

4．奈良時代の遺物

量的には飛鳥時代のものに劣るが、当遺跡の大半の遺構から出土している。特に SE55 から良好な一括資料がある。土師器・須恵器の一部においては、平城京の分類[22]に従った。

A．ＳＥ２６２出土遺物（第 84 図）

677・678 は掘形出土である。677 は杯Ａ、678 は杯Ｃである。678 の放射暗文は、間隔が広く短い。

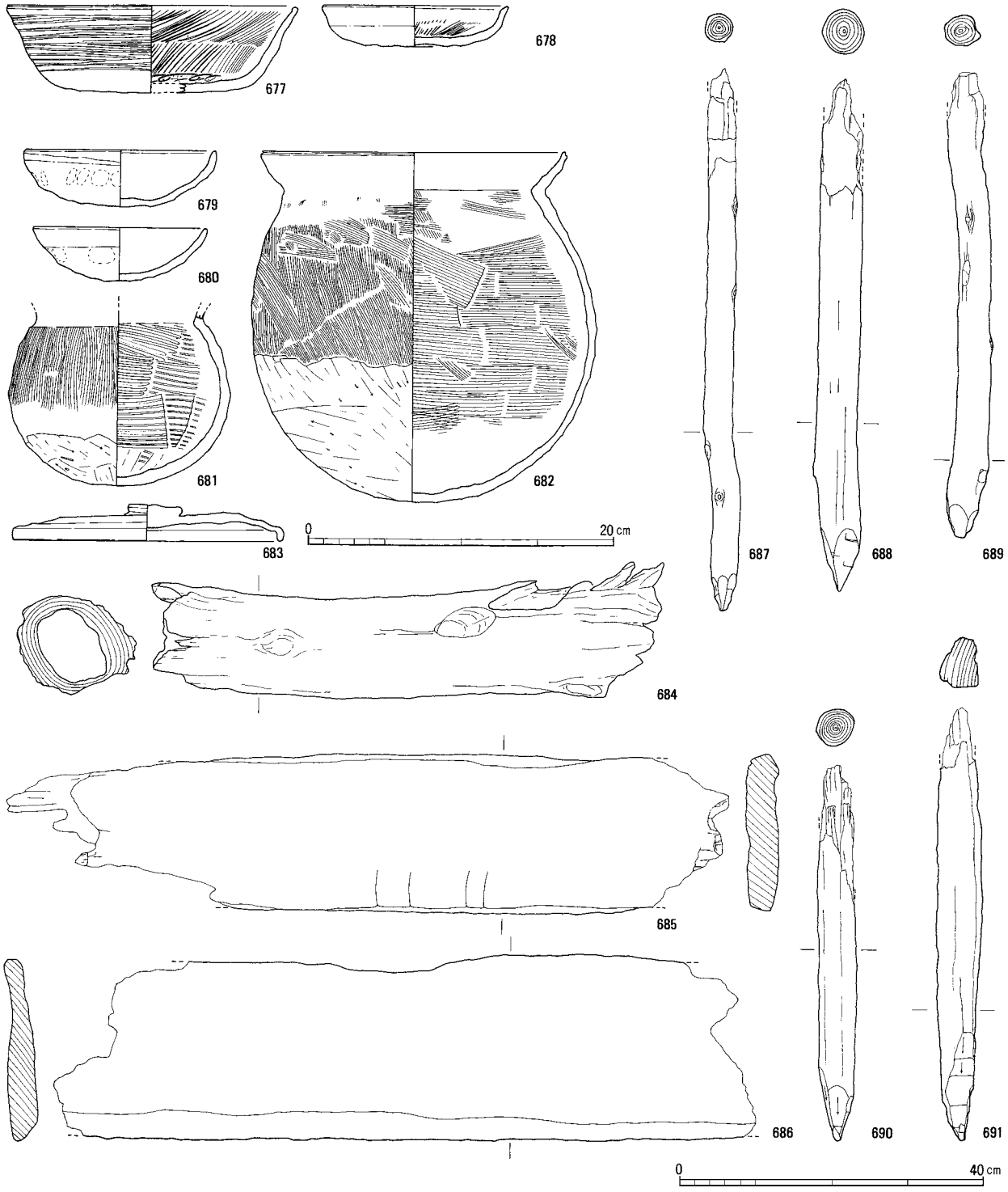


第 83 図　SD201 出土遺物 実測図（669・676 ＝ 1：8 、667・668・670 ～ 675 ＝ 1：4）

両者は重複するSD201からの混入遺物と考えられる。

679～683は井戸枠内からの出土で、679・680は土師器の椀、681・682は甕、683は須恵器の蓋である。甕は外面下半をヘラケズリするもので、口縁部は内弯する。蓋は扁平な形体である。684は木樋で、埋土上面から出土した。自然木の内部を刳り抜くことにより成形している。

685～691は井戸枠を構成していた木製品である。685・686は板材、687～691が杭である。杭は、丸太の先端を加工したものであるが、691のみ割材を用いている。



第84図　SE262出土遺物 実測図（677～683＝1：4、684～691＝1：8）　677・678は掘形出土

Ｂ．ＳＥ５５出土遺物（第85図～第103図）

＜土師器＞

杯Ａ（692 ～ 700） 口径13㎝前後、器高3㎝前後のものであるが、器高が3.4 ～ 3.8㎝を測るやや深いもの（695・698・699）がある。口縁端部の形体は細部では異なり、丸くおさめるもの（692 ～ 695）、外面に沈線を施すもの（696）、内面に沈線を施すもの（697 ～ 700）がある。暗文は消失しており、697のみラセン暗文が施される。調整は底部外面未調整、内面ナデで、ヘラミガキはない。695には「田中」､700には「井」と墨書され､699には「×」の記号が付けられている。

杯Ｂ（701 ～ 703） 杯Ａに低い高台を貼り付けたものである。外面を雑なヘラミガキ、内面にラセン暗文と放射暗文を施すが、703では放射暗文は確認できず、高台より底部が垂下する不安定な状態である。また、703のみ底部外面をヘラケズリする。701の放射暗文は、乾燥不十分で行われたためか、沈線状になっている。

皿Ａ（704 ～ 707） 内弯する口縁部をもつが、707は外反する。707にはヘラミガキや暗文は無く、比較的埋土上層の第3層出土であるため、他のものより後出の可能性がある。704 ～ 706は内面にラセン暗文、外面を雑なヘラミガキを施すが、705にはヘラミガキは無い。704の底部外面には「千倉」と墨書されている。

皿Ｂ（708・709） 両者とも比較的高い高台をもつ精製品である。内面には放射暗文とラセン暗文が施されるが、708ではラセン暗文が確認できない。

鉢（710・711） 710は小片ではあるが、志摩式の製塩土器と考えられる。711はミニチュアの鉢で、内面には強い指押さえの痕跡が明瞭である。

高杯（712） 短脚の高杯である。筒部は6面に面取りされる。

甕（713 ～ 726） 全て球形の体部をもつものである。口縁端部は内側に巻き込む形体であるが、外面に沈線を施すもの（714･718･720･721･722）がある。717は体部上半に沈線を1条施す意識であるが、始点と終点が食い違い、結果的に一部2条となっている。722は頸部に沈線を施す。調整は体部外面上半をハケメ、下半をヘラケズリであるが、内面はハケメのもの（717・718・724）と下半をナデ上げるもの（715・719・720・721・723・726）がある。炭化物の付着したものが多く、実際に煮炊きに使用されたことがわかる。

725は、ハケメが粗く雑な仕上げで、口縁端部を内に巻き込む様子が無い。比較的埋土上層の第3層出土のため、他のものより後出の可能性がある。

＜須恵器＞

蓋（727 ～ 729） 口径17 ～ 18㎝のもの（727・728）と14.5㎝のやや小型のもの（729）がある。いずれも扁平な形体を呈するが、口縁端部の屈曲は無く、そのまま下方へ折り返す。727には天井部外面に「大井」、729には内面中央に「安麿」と墨書される。

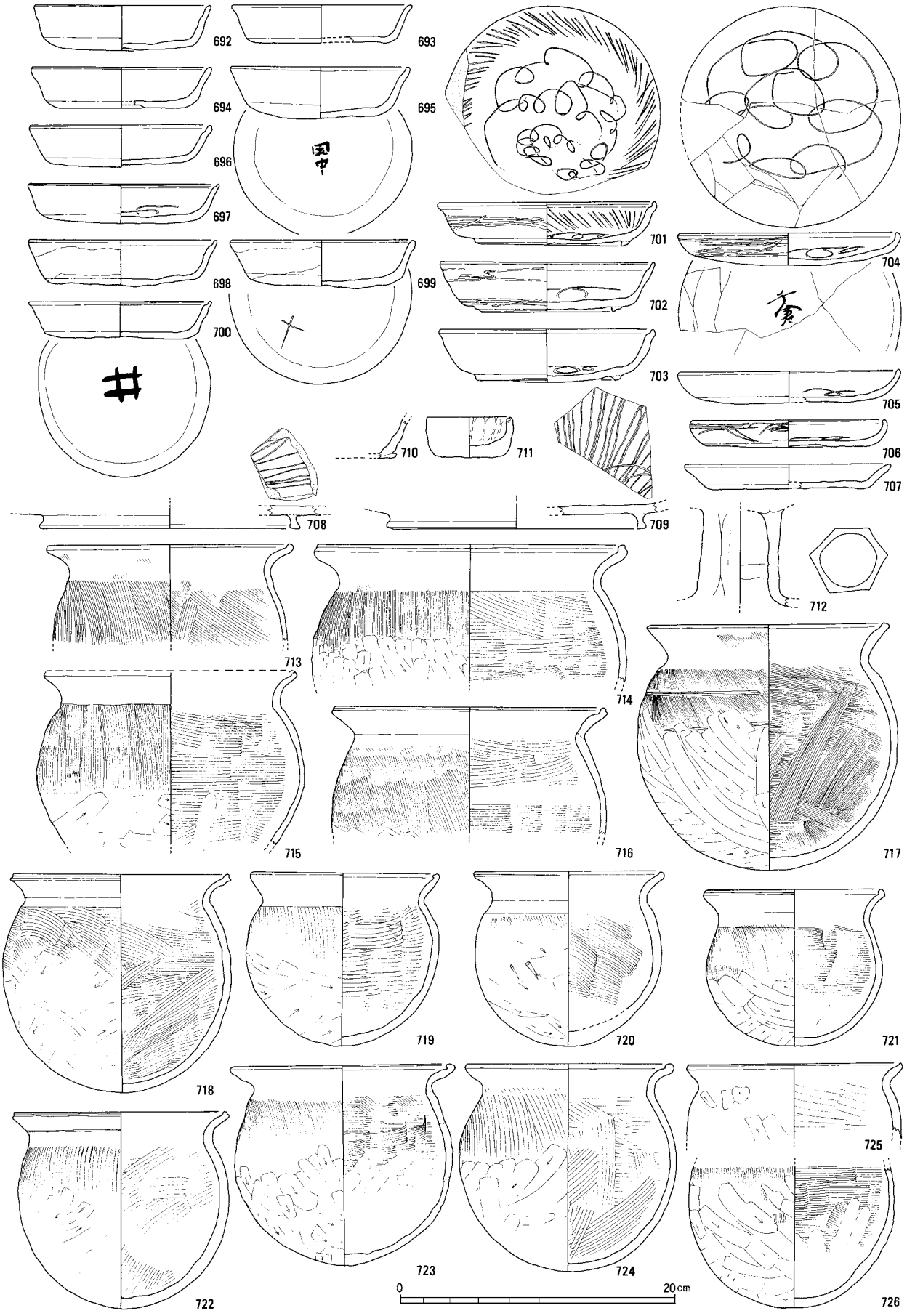
杯（730 ～ 734） 730･731は2片の合成図であり、形態の描写に推測を含む。杯Ａ（730）と杯Ｂ（731 ～ 734）があり、後者は口径11.7 ～ 15.7㎝と多様である。733のみ口縁端部が外反する。また、732は瓦質に焼けた焼成不良品である。734は油煙状のものが付着しており、灯明皿的な使用を受けたものかもしれない。

皿（735･736） 皿Ａ（735）と皿Ｂ（736）がある。前者は底部外面が未調整であるが、後者は体部最下半から底部外面をロクロケズリする。736は瓦質に焼け、一部は黒斑となっている。外面に煤が付着するが、底部には直径14㎝の円形に煤が付着しない部分があり、「千倉」と墨書されている。

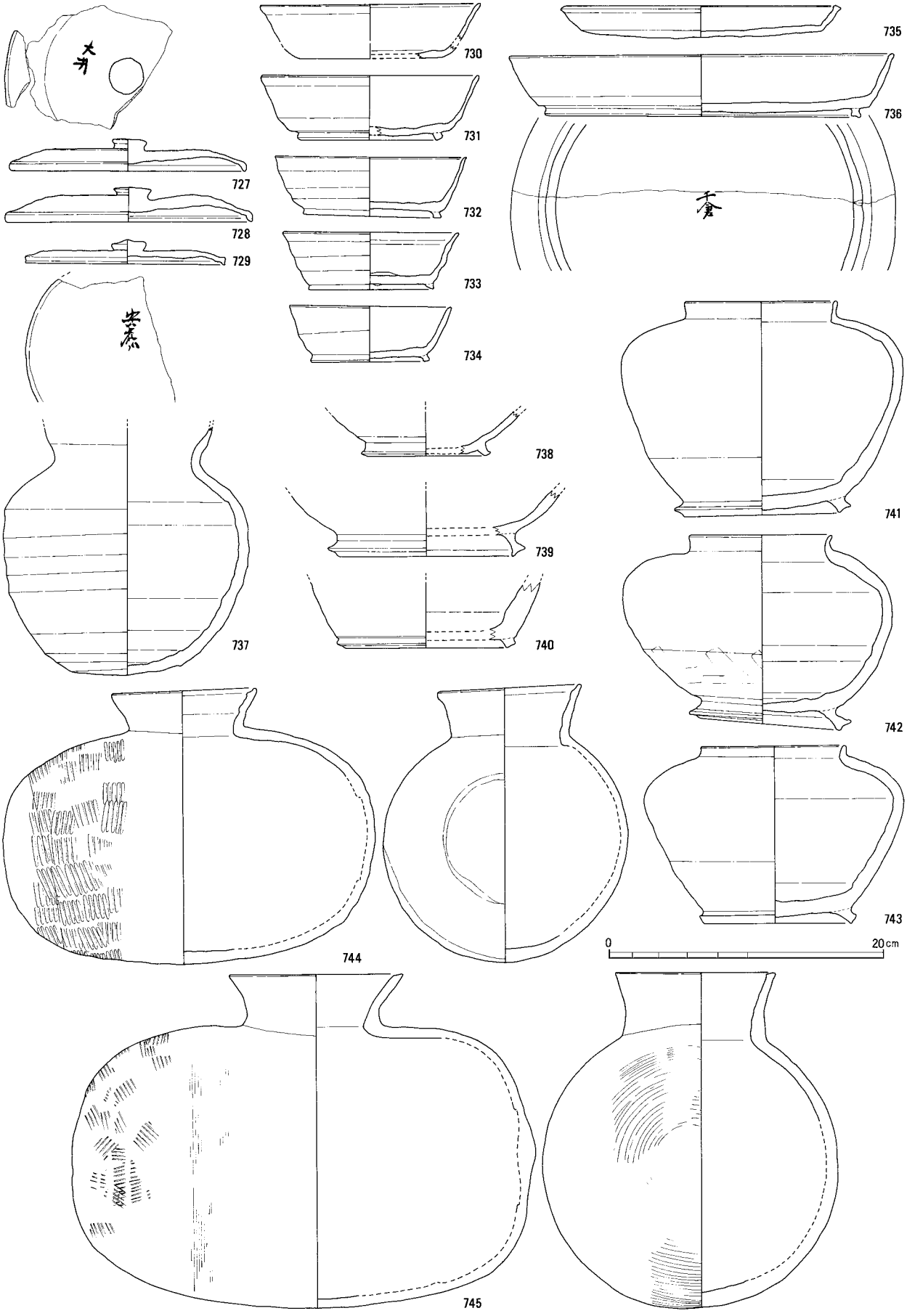
壺（737 ～ 743） 外方へ開く口縁部をもつもの（737）、短く直立する口縁部をもつもの（741 ～ 743）がある。738 ～ 740は底部片のため全体の形体は不明であるが、738・739は長い頸部を、740は短い頸部をもつものと考えられる。調整は体部下半の底部ちかくをロクロケズリするものが多い。

横瓶（744・745） 両者とも単純な口縁部をもつ。調整はタタキの後、744がロクロナデ、745はカキメである。両者とも自然釉がかかり、744は円形に重ね焼きの痕跡が認められる。745は、別個体の破片が釉着しており、焼き膨れもみられる。

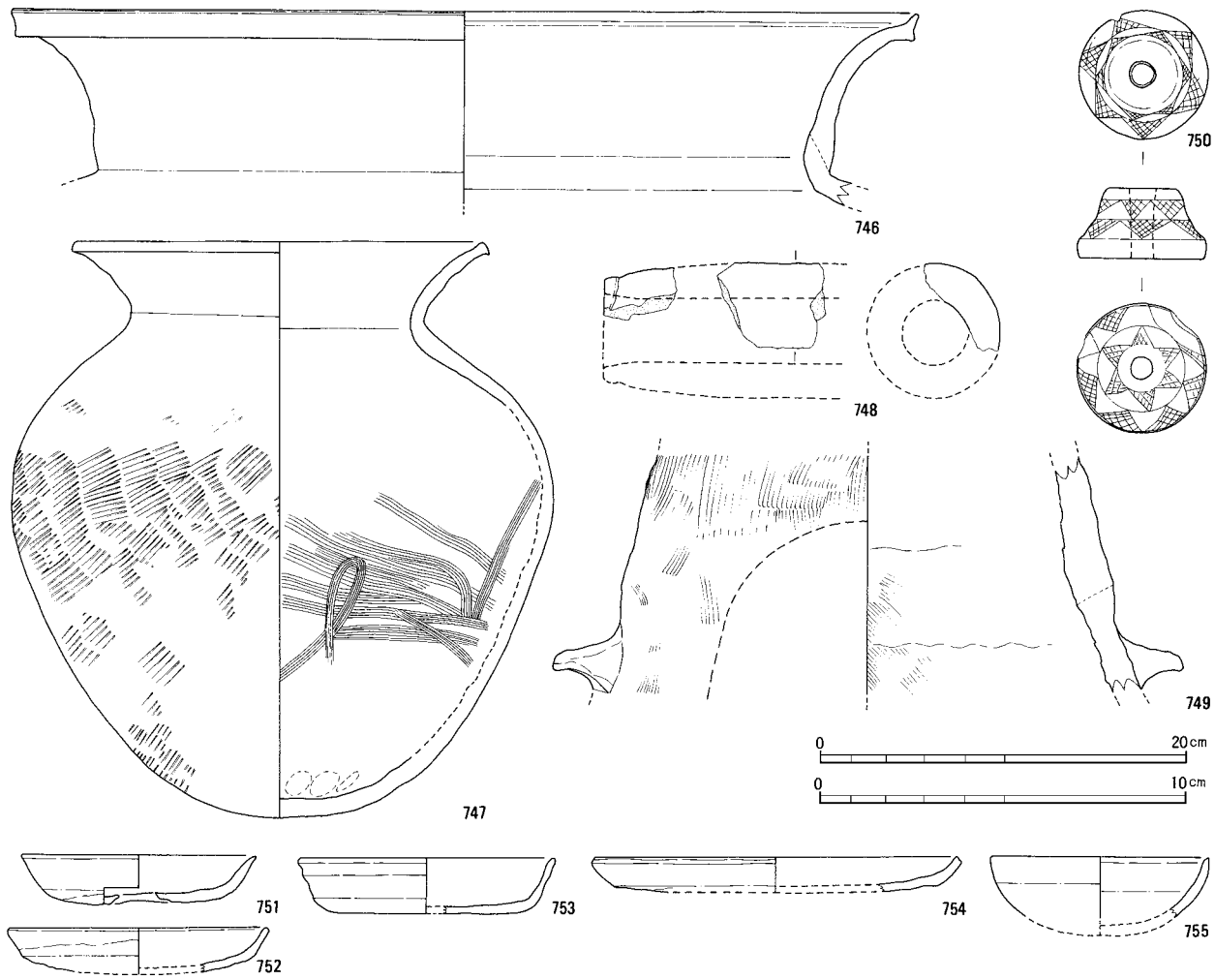
甕（746・747） 746は口縁端部外面に縁帯状の広い面をもつ。747は、体部内面中央を雑なハケメで調整し、その下方は不定方向のナデである。ロク



第 85 図　SE55 出土遺物 実測図（1：4）



第 86 図　SE55 出土遺物 実測図（1：4）



第 87 図　SE55 出土遺物 実測図（1：4、750 ＝ 1：2）　751 ～ 755 ＝掘形出土

ロナデは上半にしか及んでおらず、外面もこれに対応する。したがって､外面にはタタキ痕が多く残る。

＜土製品＞

748 はフイゴの羽口、749 は移動式竈である。748 は先端部と中央部を図上で合成したが、両者が同一個体という確証はない。

＜石製品＞

750 は紡錘車の紡輪である。中央に 6 ㎜の孔を空け、外面を線刻の鋸歯文で装飾する。前代の混入の可能性が大きい。

＜木器・木製品＞

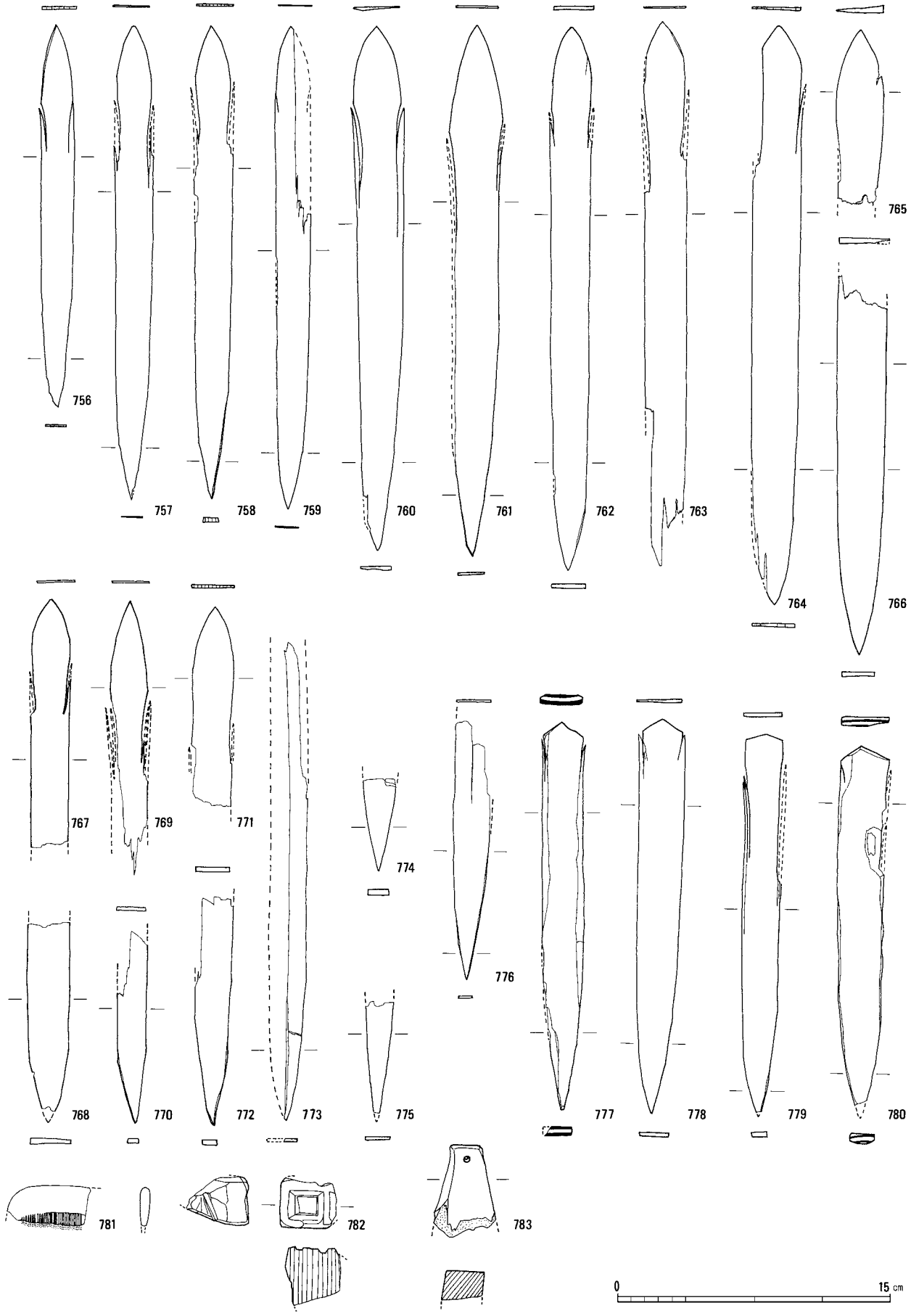
斎串（756 ～ 780）　上端の形状が、鋭角でやや丸みをもって尖るもの（756 ～ 765・767・769・771）と､鈍角にちかく直線的なもの（777 ～ 780）がある。前者は長さ 30 ㎝前後の長いものが多いが、厚さは 2 ㎜程度の薄いものである。後者は長さ 21 ㎝前後で短いが、厚さは 6 ㎜を測る厚いものが多い。切込みは、両者とも両側 1 ヶ所ずつで差はない。

櫛（781）　長方形の横櫛で、肩部は丸みをもつ。歯は 3 ㎝あたり 24 枚を挽きだす比較的粗いものである。

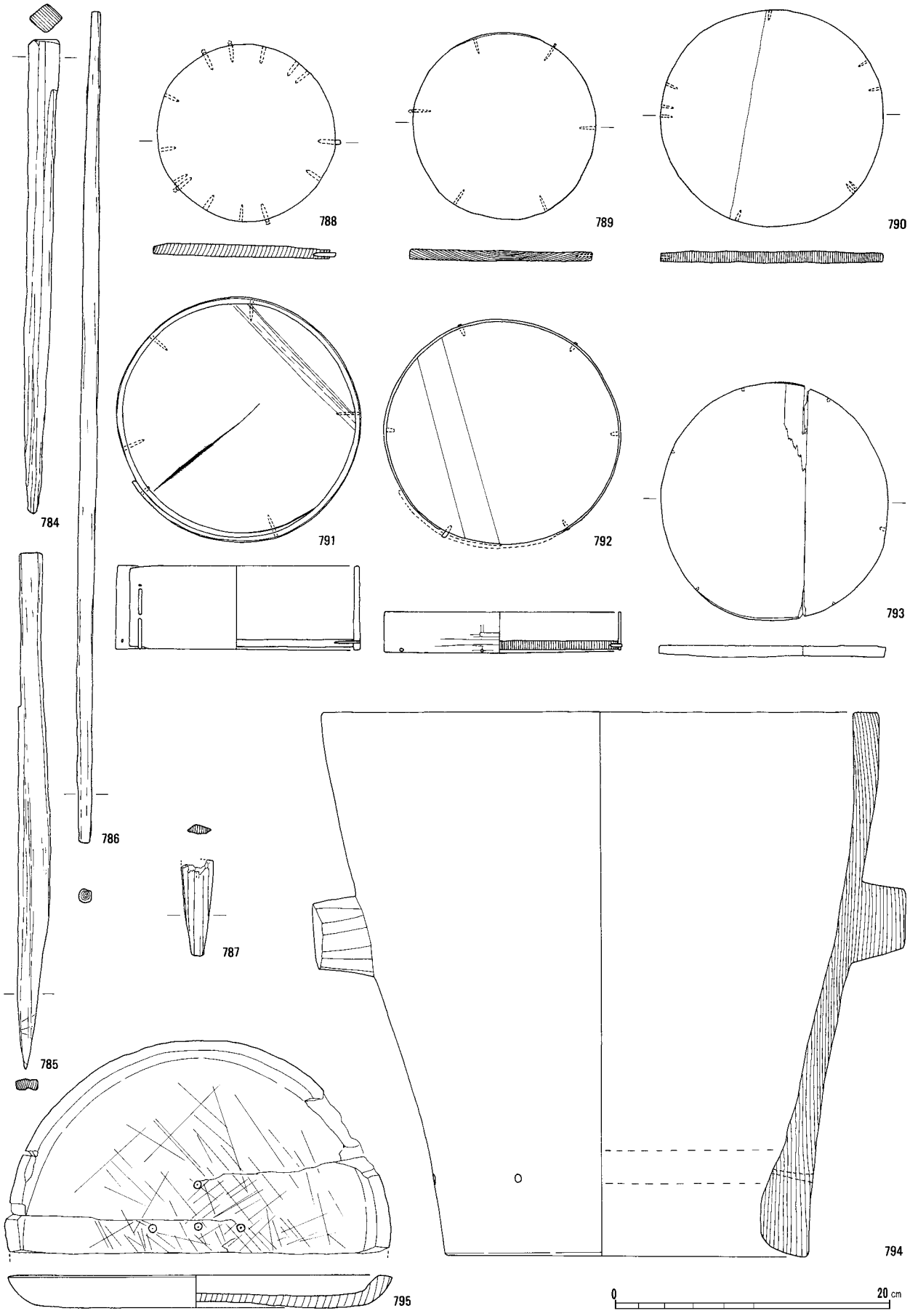
木印（782･783）　一応､木印としたが疑問も多い。その場合、782 は印面、783 は頂部片ということになる。782 に陽刻されているものは文字ではなく、周縁と「■」である。783 には先端近くに小さな円形穿孔がある。紐通し穴か。両者は同一個体の可能性もある。

串（784）　約 2 ㎝方形の割棒の先端を尖らしたものである。先端は焼けている。一応、串としたがやや太く、確証はない。

棒（786・787）　786 は、丁寧な削りによって整形されている丸棒である。菜箸とするにはやや大型



第 88 図　SE55 出土遺物 実測図（1：3）

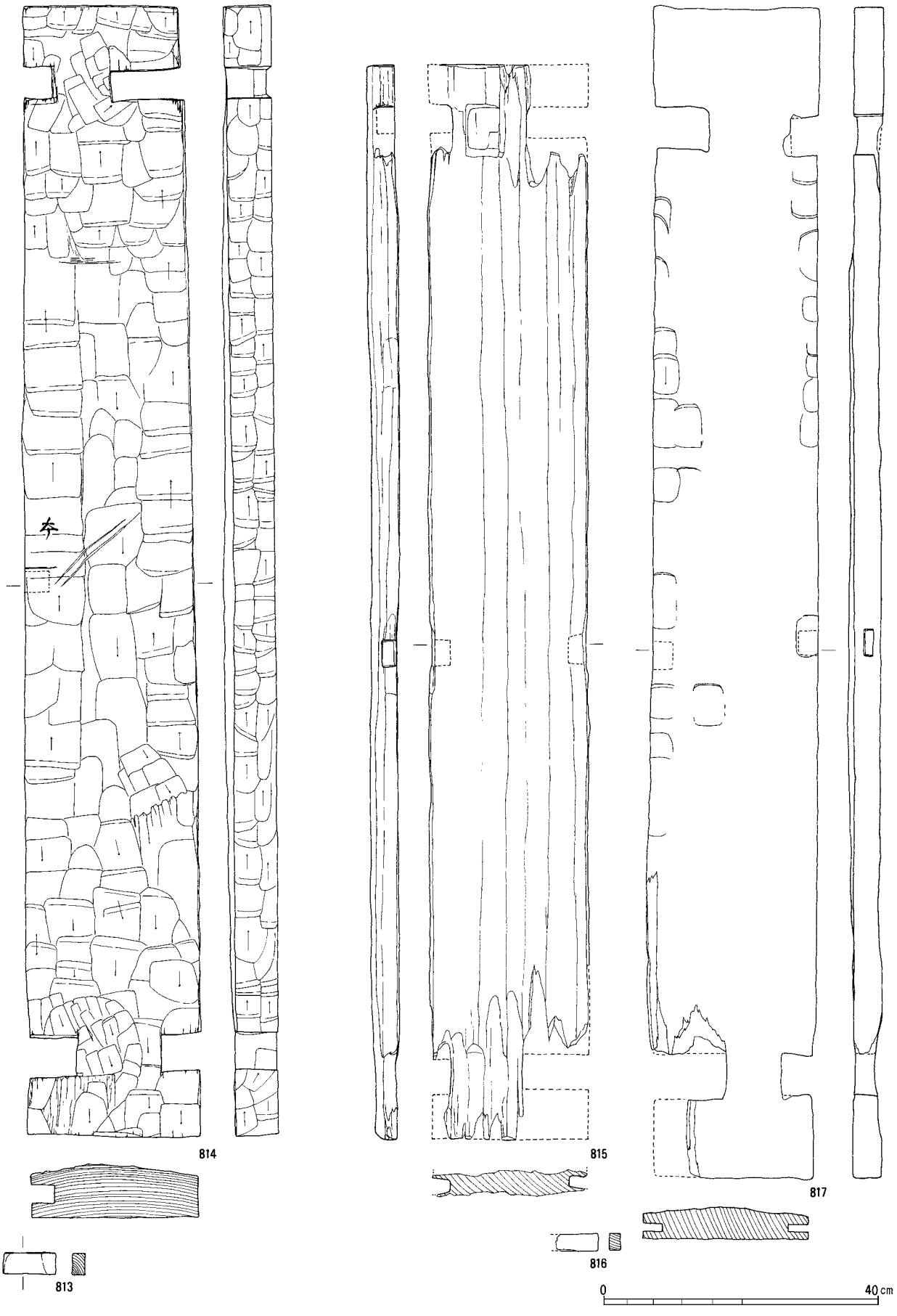


第 89 図　SE55 出土遺物 実測図（1：4）

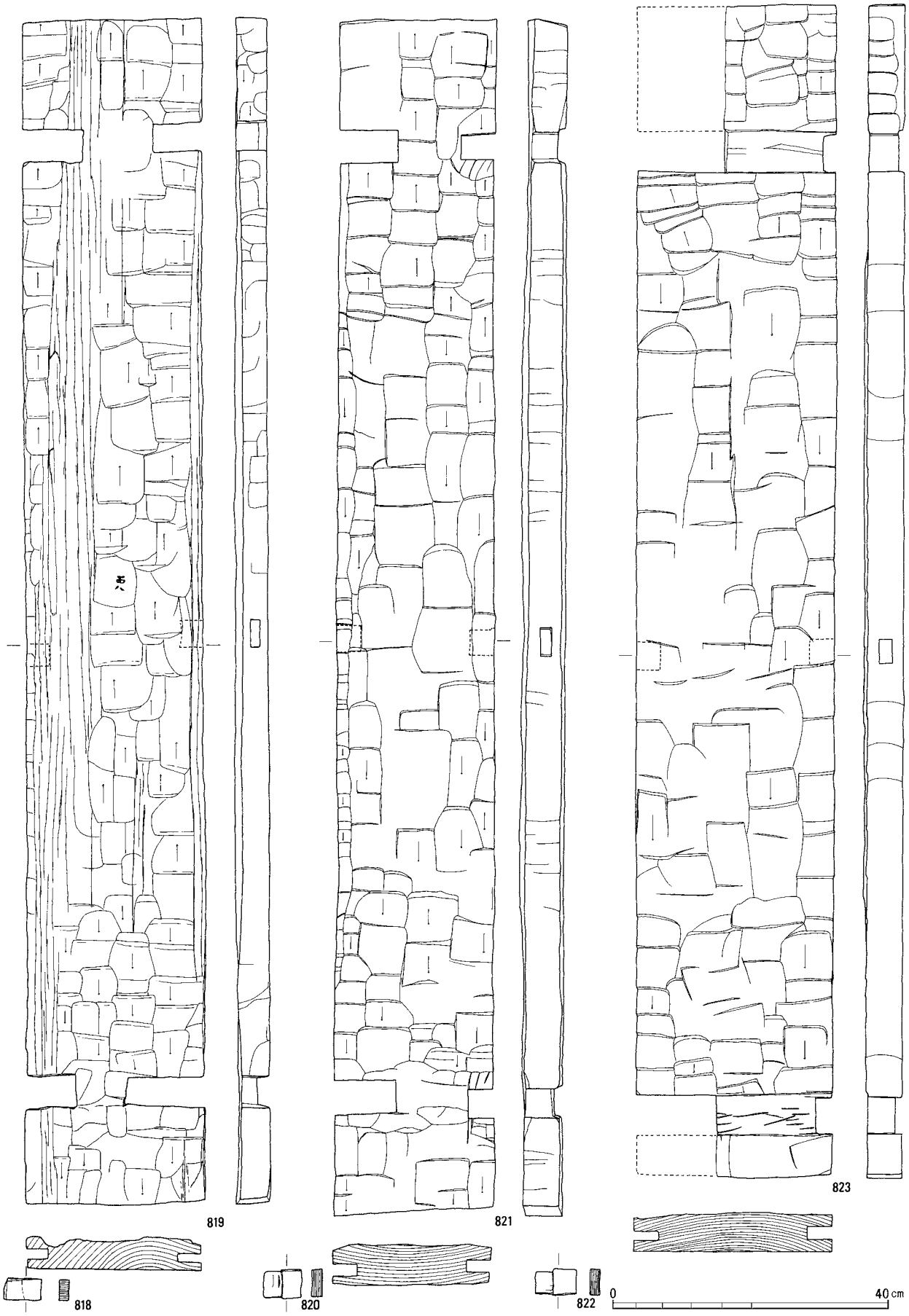
第 90 図　SE55 枠板（東側）実測図（1：8）

第 91 図　SE55 枠板（東側）実測図（1：8）

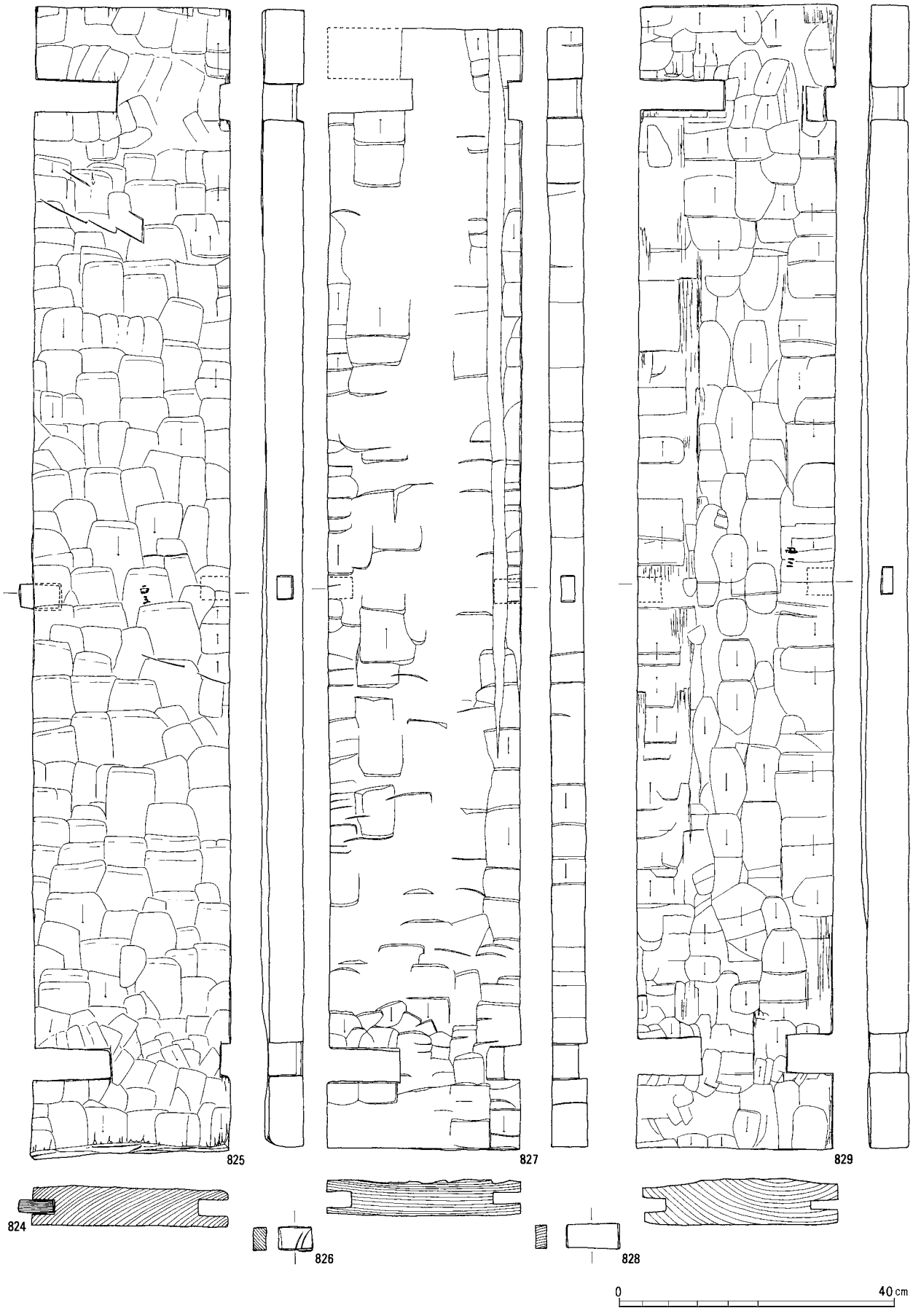
第 92 図　SE55 枠板（東側）実測図（1：8）



第 93 図　SE55 枠板（東・西側）実測図（1：8）

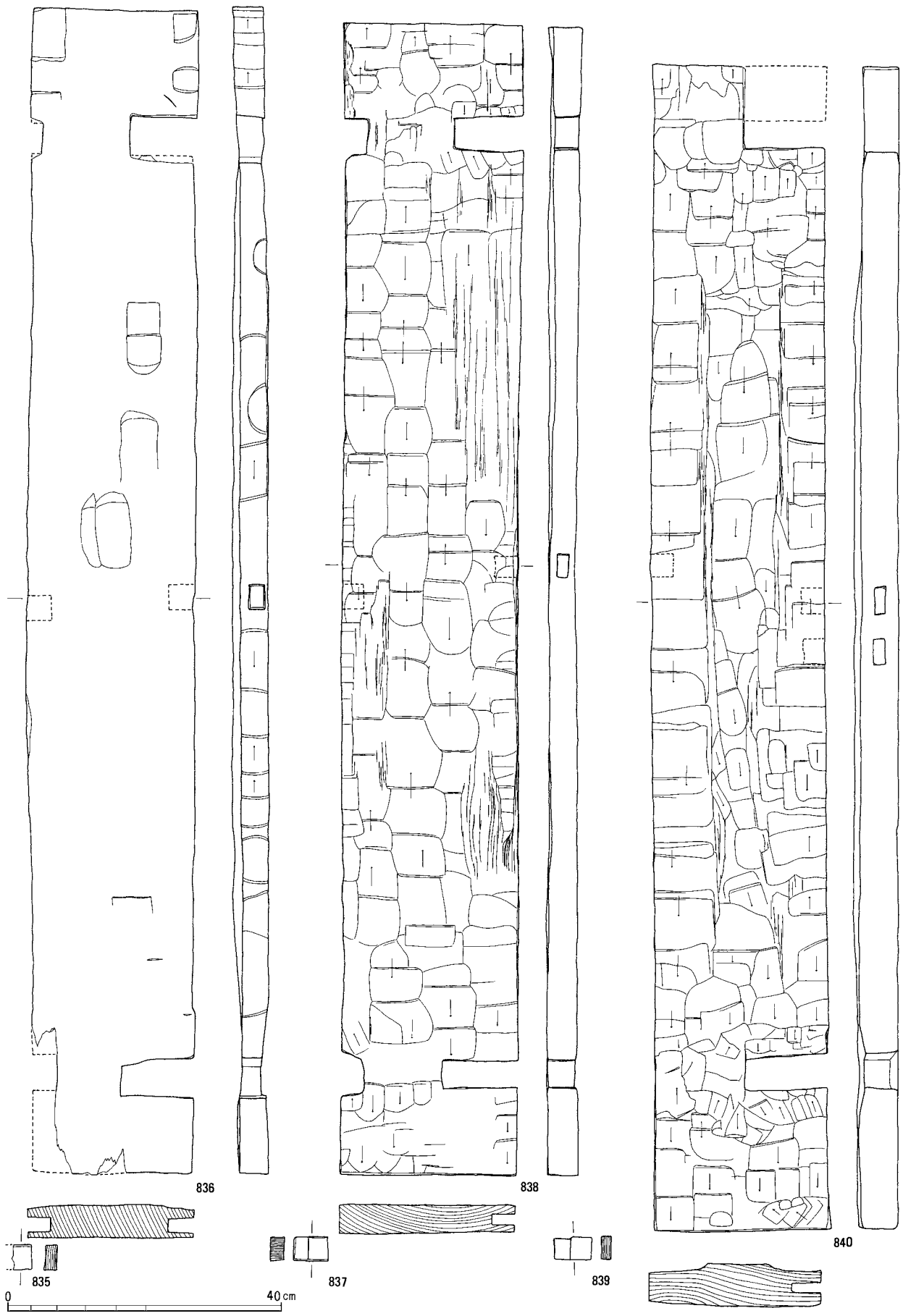


第 94 図　SE55 枠板（西側）実測図（1：8）

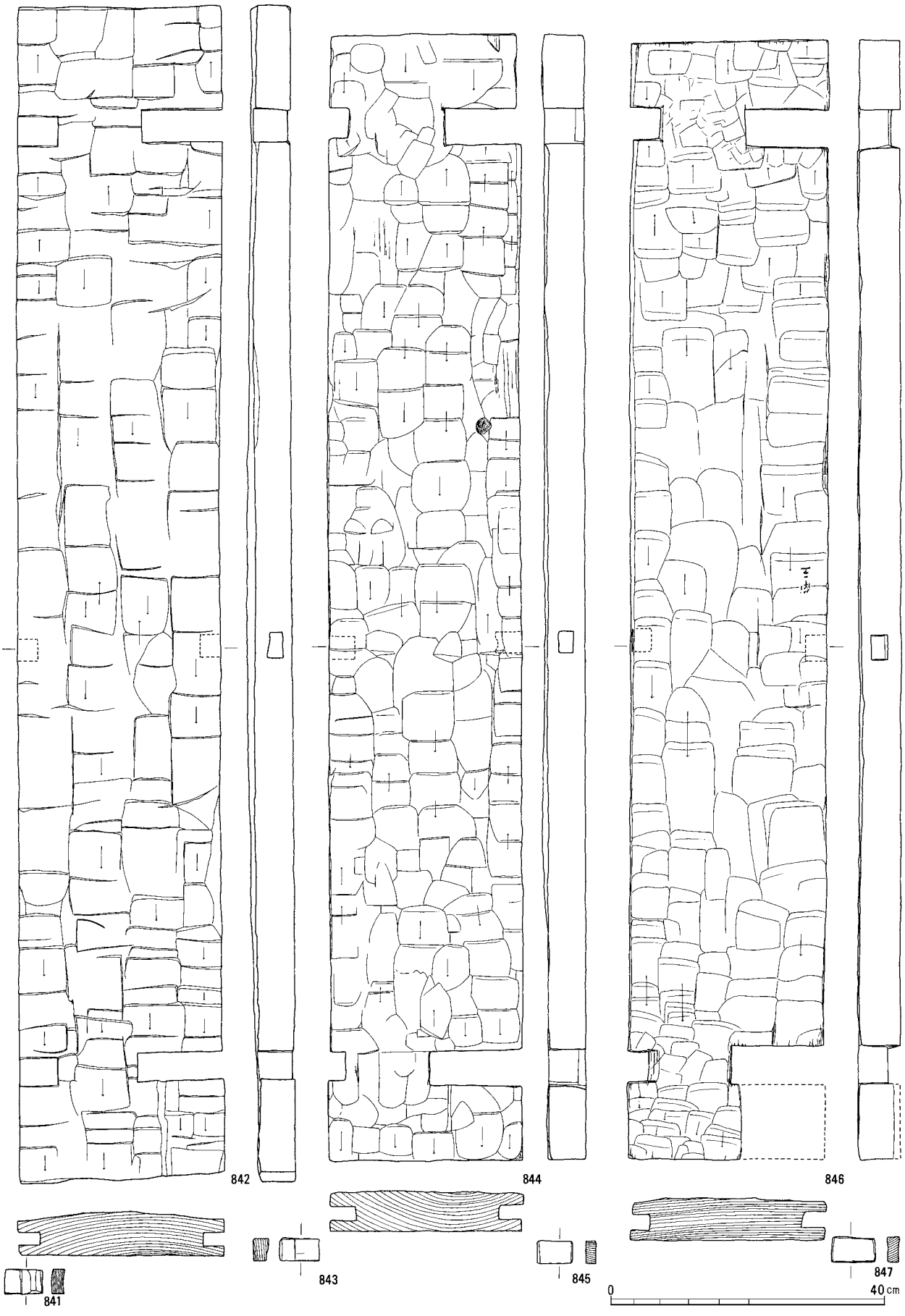


第 95 図　SE55 枠板（西側）実測図（1：8）

第 96 図　SE55 枠板（西・南側）実測図（1：8）

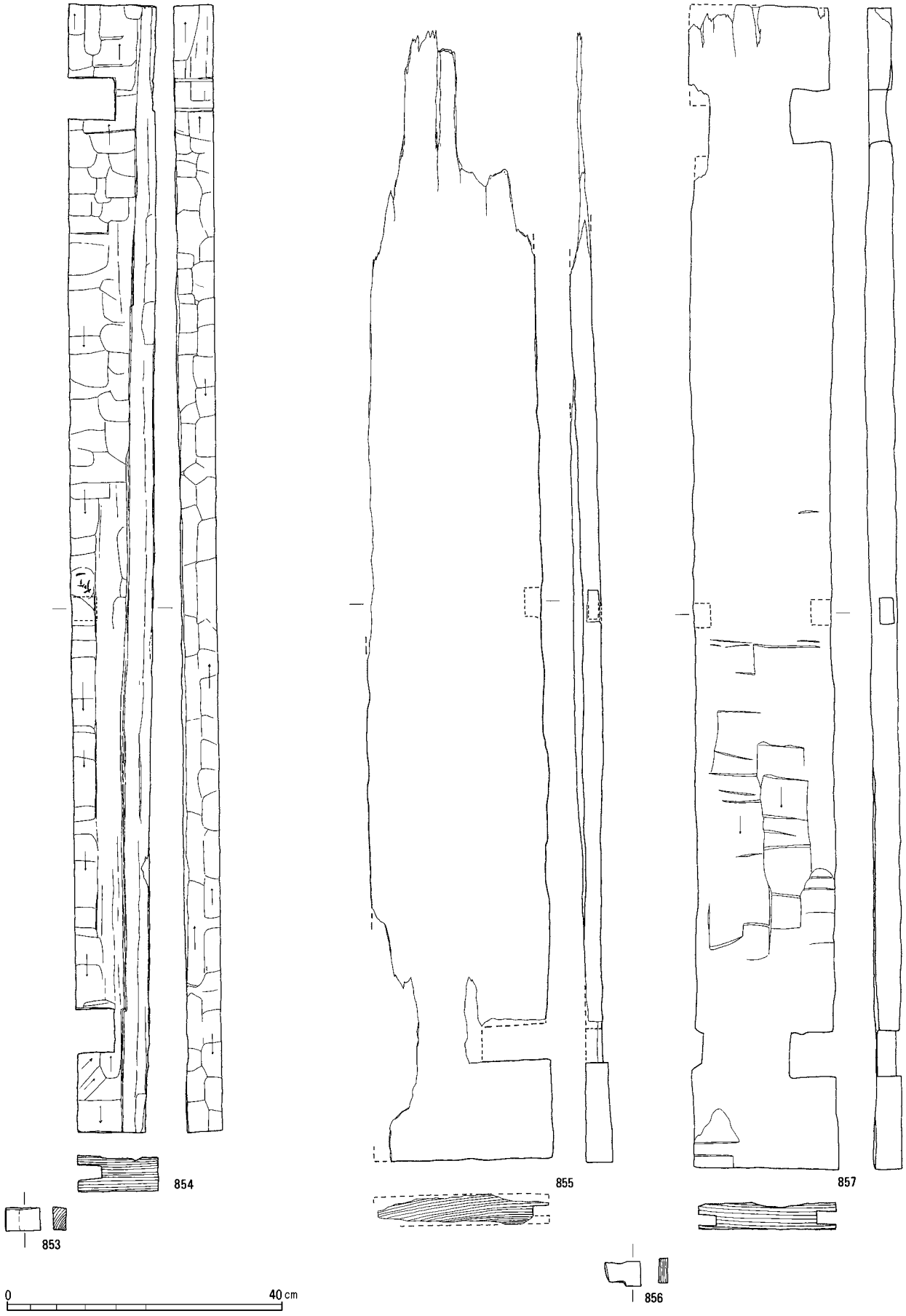


第 97 図　SE55 枠板（南側）実測図（1：8）



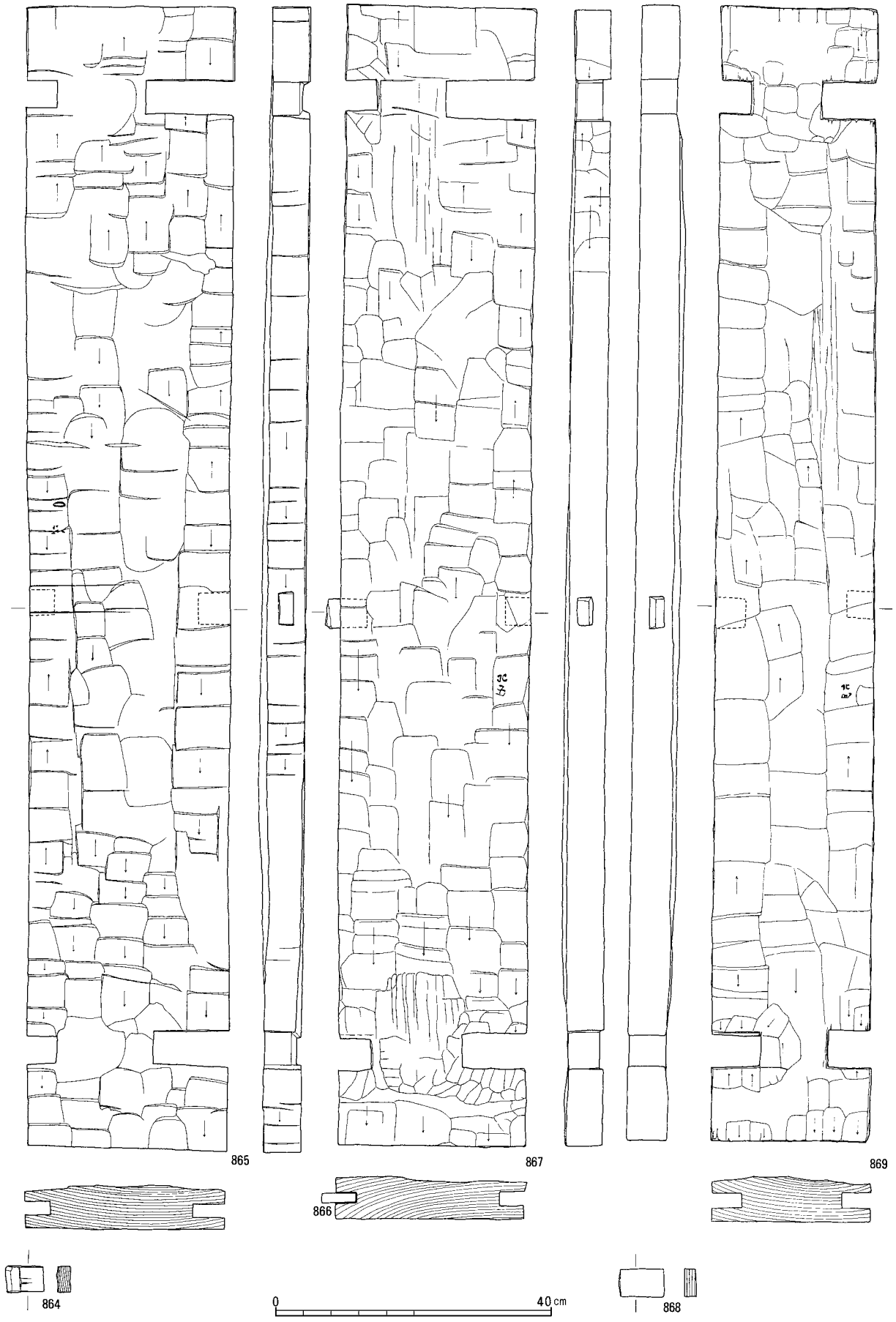
第 98 図　SE55 枠板（南側）実測図（1：8）

第 99 図　SE55 枠板（南側）実測図（1：8）

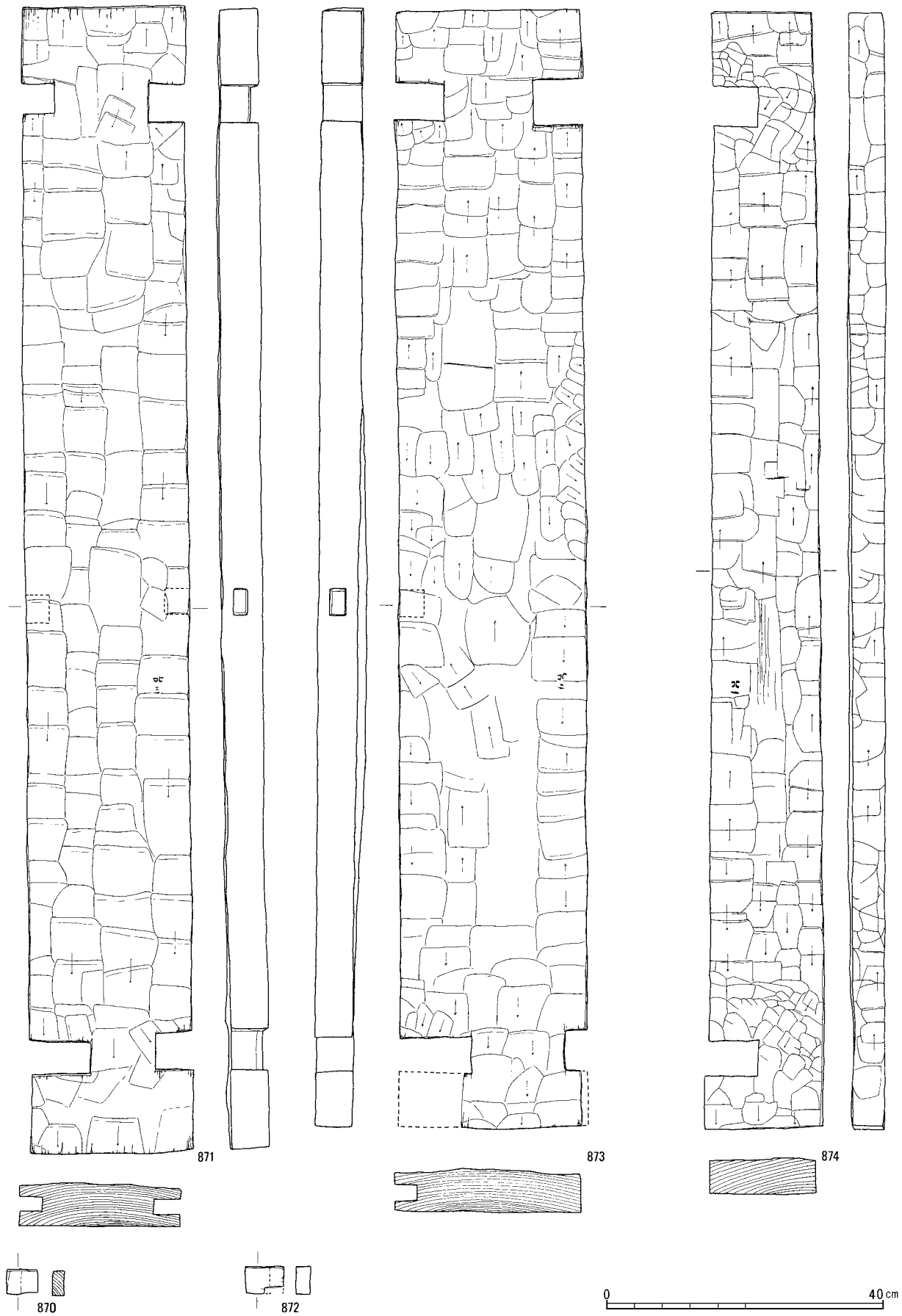


第 100 図　SE55 枠板（南・北側）実測図（1：8）

第 101 図　SE55 枠板（北側）実測図（1：8）



第 102 図　SE55 枠板（北側）実測図（1：8）



第 103 図　SE55 枠板（北側）実測図（1：8）

すぎるか。787は小片のため全体の形体は不明であるが、断面形は菱棒にちかい。

桶（788 ～ 794） 788 ～ 793は円形曲物、794は挽物か。円形曲物には、口径13㎝前後のものと16 ～ 17㎝のものがある。後者には側板が残存するものがあり、器高6.1㎝の深いもの（791）と2.9㎝の浅いもの（792）がある。791は側板を樺皮で1列2段に綴じ合わせる。綴じ始めは側板の内側であるが綴じ終わりは外側である。792は綴じ合わせ部の欠損がはげしく不明確であるが、791と同様なものと推定される。底板との接合は木釘による。木釘が5方から打ち込まれるもの（790・791）と6方のもの（789・792）がある。790は5方のうち3方に補修の木釘が認められ、また、788は補修が激しく、通算14本の木釘が打ち込まれており、本来の木釘数が不明である。793は木釘の打ち込み孔が1ヶ所確認できたのみである。

791と792の底板には墨書があり、791は直線、792は平行線が書かれている。曲物製作との関係は想定しにくく、他の部材を転用したものかもしれない。

794は大型の水桶で、一対の把手を削り出す。丸太を1/3に裁断し、それぞれを成形した後、底板を挟み込んで合体させている。底板は木釘により固定されるが、側板の厚みが接地面ちかくで急激に厚くなり、底板の落下を防ぐ機能をもっていたものと考えられる。

皿（795） 挽物の皿である。底部中央に直径6㎜の円形刳り込みが4ヶ所に施されている。欠損部分を考慮すると四方と中央の5ヶ所に施されていたものと考えられる。蒸器のサナに転用するため、穿孔を試みたものかもしれない。

枠板・駄枘（796 ～ 874） 井戸の枠板とそれを固定する駄枘である。枠板は井桁に組まれるために端ちかくの両側から切欠きを設けている。幅は24 ～ 30㎝、長さ160 ～ 173㎝、厚さ4 ～ 7㎝程度のものが多いが、各板材の大きさは均一でない。これを切欠きの位置や深さで調節し、212.8㎝× 227.6㎝の方形井戸を形成する。したがって、切欠きの深いものは13㎝を超え、浅いものは切欠きを設けないもの（840・842・861）もある。

枠板内側は平滑に仕上げられているが、外側は手斧による調整痕が明瞭に残る荒い仕上げである。手斧は、基本的に枠板中央から端に向かって施されており、切欠き周辺では細かく不定方向に行われるものが多い。したがって、手斧による調整は切欠き形成後に行われたものと考えられる。

側面中央に枘穴を空け、駄枘により上下の横板を固定する。ただし、北側最下段の874と873間は駄枘による固定がなく、枘穴が設けられていない。

これらの枘穴を空ける予定地を示した墨による設計線が800、806、812、814、821、863で認められた。本来は全ての枠板に印されていたものと推測されるが、865では鋭利な工具による線刻となっている。また、840の下方の枘穴は失敗のためか2ヶ所に空けられている。

枠板中央には組上げる位置や順を示した墨書が認められるものがある。たとえば、北側では下から順に「北一」、「北二」、「北三」と記されており、元は全ての枠板に記されていたものと考えられる。800・806では、位置を示す墨書「東八」・「東五」の他に、やや大きく「奉」か「本」、あるいは「東」とも読める文字が書かれている。

C．ＳＥ５５掘形出土遺物（第87図）

751 ～ 755は土師器、785は木製品である。751・752は杯Ｃ、753は杯Ａ、754は皿、755は椀である。杯は、いずれも暗文は消失しており、杯Ａの底部外面はナデで調整されるが、杯Ｃは未調整である。751の底部は、焼成後に外から内に穿孔されている。

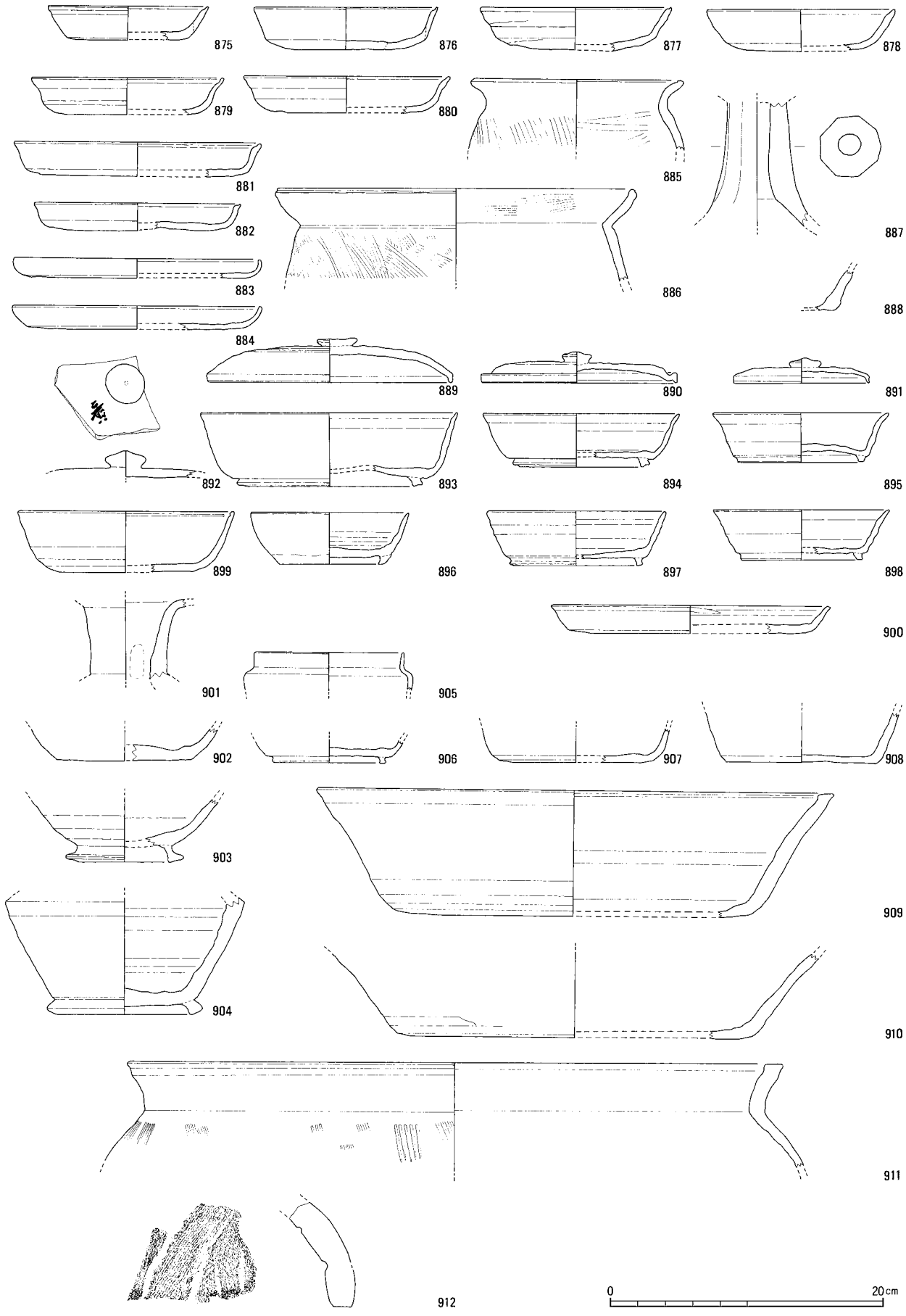
785は、扁平な割棒の先端を尖らし刀身と茎をかたどったものと推定される。雑に成形したのみであり、刀形とする確証はなく串とすべきものかもしれない。

D．ＳＤ２０出土遺物（第104図）

規模の小さな区画溝ではあるが、比較的まとまった出土があった。しかし、埋納されたものではなく残存が劣悪なものが多い。

＜土師器＞

杯（875 ～ 880） 残存が劣悪なものが多く、口径、器高に疑問を残すものもあるが、口径12㎝、器高2.5㎝程度のものと口径14㎝前後、器高3.1㎝程度の2法量はあるようである。口縁端部内面を強くヨ



第 104 図　SD20 出土遺物 実測図（1：4）

コナデするものが多く、凹面状になるもの（879）もある。また、877には沈線が1条巡る。底部外面の調整は、877が雑にナデを施す他は未調整である。

皿（881～884） 杯と同様に口縁端部内面に強いナデを施すもの（881・882）と内弯する口縁部のもの（883・884）がある。底部外面の調整は、881がナデの他は未調整である。

甕（885・886） 885は小型の甕、886は長胴甕と考えられる。886は内弯する口縁部をもつもので、体部内面はナデによる調整である。885は口縁端部を内に巻き込み、体部には粗いハケメを施す。

高杯（887） 筒部は下から上へのヘラケズリにより9面に面取りされる。

鉢（888） 粗い胎土で雑な仕上げであり、製塩土器と考えられる。

＜須恵器＞

蓋（889～892） いずれも宝珠つまみが付くものであるが、細部の形態や口径は様々である。889は大型で平らな天井部をもつが、つまみは扁平である。890は口縁端部が屈曲する。891は小型で、胎土、焼成が非常に良好の精製品である。892の天井部外面には「廣」と墨書されている。

杯（893～899） 杯B（893～898）と杯A（899）がある。前者は、893が口径18.8㎝、器高5.4㎝を測る大型のものである他は、口径11.5～14.3㎝、器高3.6～4㎝である。比較的胎土精良のものが多い。896の高台は体部端から一体的に貼り付けられる特異な形態である。

899は、口縁端部内面に沈線を施し、体部下半をロクロケズリするなど、杯とするに疑問もある。椀か蓋かもしれない。

皿（900） 底部内外面をナデにより調整する。また、口縁部内面にロクロナデの後、非常に強いヨコナデを一周施す。

壺（901～908） 細長い頸部をもつもの（901）と短く直立する口縁部のもの（905）がある。底部片では902～904が前者、906～908は後者であるものと推定される。905～907は胎土が極めて精良の精製品である。同一地点から出土しており、905の底部が906か907のいずれかである可能性が大きい。

鉢（909・910） 両者とも底部外面をロクロケズリするが、910はその後ナデを施す。

甕（911） 短く直立気味の口縁部をもつものである。外面はタタキの後ヨコナデを施す。

＜瓦＞

912は丸瓦の小片で、内面には布の絞り目や木骨痕が残る。

Ｅ．ＳＤ５８出土遺物（第105図）

比較的大型の溝からの出土で、一括性は低い。

＜土師器＞

杯（913～916） 強いヨコナデのため口縁端部外面が凹線状になるもの（913）、内面が凹線状になるもの（914）、端部内面に沈線を施すもの（916）、そのまま収めるもの（915）があり多様である。916の底部外面にはヘラによる沈線が認められる。欠損部のため全体は不明であるが、記号が施されていたものかもしれない。

高杯（917・918） 比較的長脚のもの（917）と短脚のもの（918）がある。筒部は917が10面に、短脚の918においても15面に面取りされる。

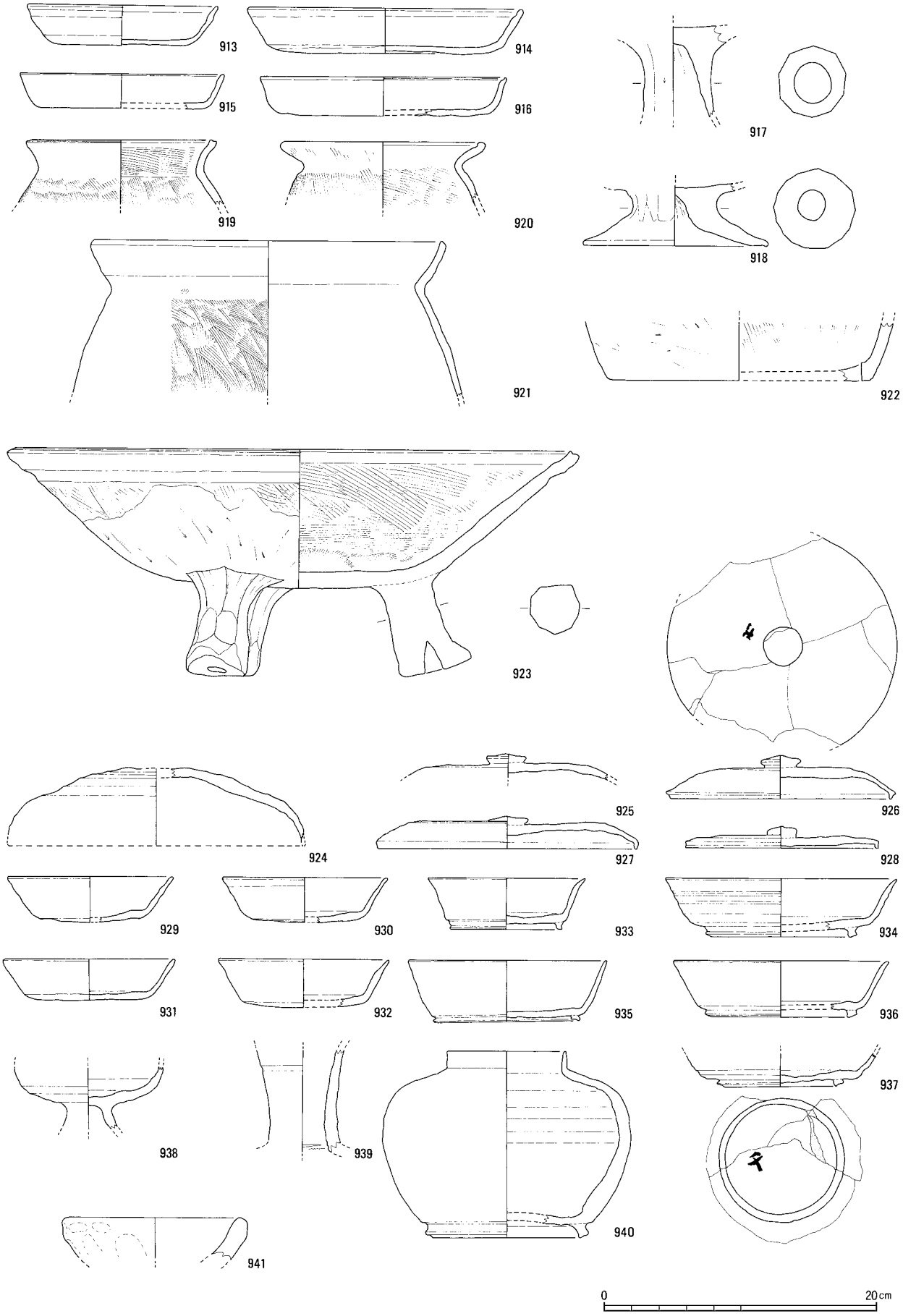
甕（919～921） 小型のもの（919・920）と大型の長胴甕（921）がある。919は口縁上端に沈線を施すが、920は内に巻き込む。921は内弯する口縁部である。919は土師器としては異常に高温で焼成されている。

甑（922） 直径3㎝の円形蒸気孔を空ける。中心に1個、周囲に5～6個を空けたものと推測される。内面のハケメは不鮮明になっており、ナデが施されたものか使用によるものかは断定できない。

盤（923） 3足盤である。足は9面に面取りされ、足底には円錐形の孔が空く。口縁上端部に沈線を1条施し、外面には強いヨコナデのため1条の凹線状になる。外面はハケメで調整した後、下方に向かいヘラケズリを施している。

＜須恵器＞

蓋（924～928） つまみの無いもの（924）と宝珠つまみの付くもの（925～928）がある。前者は前代の混入であろう。後者は、比較的器高が高いもの（925･926）と扁平なもの（927･928）がある。928の天井部外面はロクロケズリを行わず、未調整のままである。926の天井部外面には墨書があ



第 105 図　SD58 出土遺物 実測図（1：4）

るが、判読できない。

杯（929 ～ 937） 929 ～ 932 は杯Ａ、933 ～ 937 は杯Ｂである。杯Ｂは口縁部と底部の境に高台を貼り付けるもの（933・935・936）とやや内側に貼り付けるもの（934・937）がある。935 は、この境付近を１周弱くロクロケズリし、937 は強いロクロナデのため凹線状を呈する。また、934 は体部中央を幅８㎝の板状工具で強くヨコナデされる。937 の底部外面には「千」あるいは「十」と墨書される。

壺（939・940） 939 は頸部の長いもの、940 は短いものである。940 は口縁部片と体部片を図上で接合したもので、全体の形体に推測を含む。

高杯（938） 口縁部、脚部を欠損し、全体の形体は不明であるが、内弯する椀状の杯部をもつものと考えられる。杯部外面下半をロクロケズリする。

＜坩堝＞

941 のみである。器壁１㎝以上の厚いもので、外面は指頭圧痕が明瞭に残り、内面は鉄滓の付着が激しい。

Ｆ．ＳＺ５９出土遺物（第 106 図）

掘立柱建物に重複し、多数の土器が集中して出土した。一括性は比較的高いものと考えられるが、土坑を伴わないため混入もありえる。

＜土師器＞

杯（942 ～ 954） 950 以外は口縁端部内面が凹線状を呈する。口径 14 ㎝前後のもの（942 ～ 948・950 ～ 952）と、18 ㎝前後のやや大型のもの（949・953・954）がある。953 の口縁端部外面には弱い沈線が認められる。

皿（955・956） 口径は異なるが、両者とも口縁端部外面に１条の沈線を巡らす。

甕（957 ～ 964） 長胴甕（957･958）と小型の甕（959 ～ 964）がある。両者とも口縁端部は内に巻き込む形態を呈するが、長胴甕の口縁部は内弯する。また、959 の口縁端部外面には沈線を１条巡らす。962 の頸部屈曲部には非常に強いヨコナデが施される。

＜須恵器＞

蓋（965 ～ 970） 970 は壺の蓋、他は杯の蓋と考えられる。後者には、口縁端部が強く屈曲するもの（965・968）や屈曲が弱いもの（969）がある。969 は天井部外面に沈線を２条巡らすが、成形・調整の過程で偶然に沈線状に残ったものかもしれない。965・970 は口縁端部外面をロクロケズリし、端部を鋭利に仕上げている。965 のみ天井部外面が未調整のままである。

杯（971 ～ 981） 杯Ａ（971 ～ 973）と杯Ｂ（974 ～ 981）がある。後者には口縁端部が外反するもの（974・975）、直立するもの（976 ～ 980）、内弯し端部がおおきく外反するもの（981）がある。口縁部の直立するものには口径 17 ㎝以上の大型のもの（979･980）と 12 ～ 14 ㎝（976 ～ 978）のものに分かれ、大型のものは底部外面をロクロケズリする。981 は底部片と口縁部片の合成図である。全体に丁寧な仕上げの比較的精製品である。

971 は口縁部最下端に１周のロクロケズリを施し、975 では、高台内側面をヘラ状工具でナデることにより鋭利な面を形成している。978 の高台接地面、979 の口縁部内面、980 の口縁端部内面は、強くナデられることにより沈線や凹線状となっている。

墨書されるものも多く、全て底部外面である。973 は「廿」としたが、疑問もある。972 はＯ状の墨痕が認められるが、欠損もあり判読できない。978 は「大」と読めるが、他にも墨痕と疑われる痕跡があり、欠損部にあたることもあって確定できない。

皿（982・983） 口径 14 ㎝の小型のもの（982）と口径 22 ㎝の大型のもの（983）がある。983 は口縁部に対し異常に厚い底部である。

壺（984） 球形の体部に高台を貼り付けたもので、短く直立する口縁部をもつものと推測される。高台接地面に１条の沈線が巡る。

＜埴輪＞

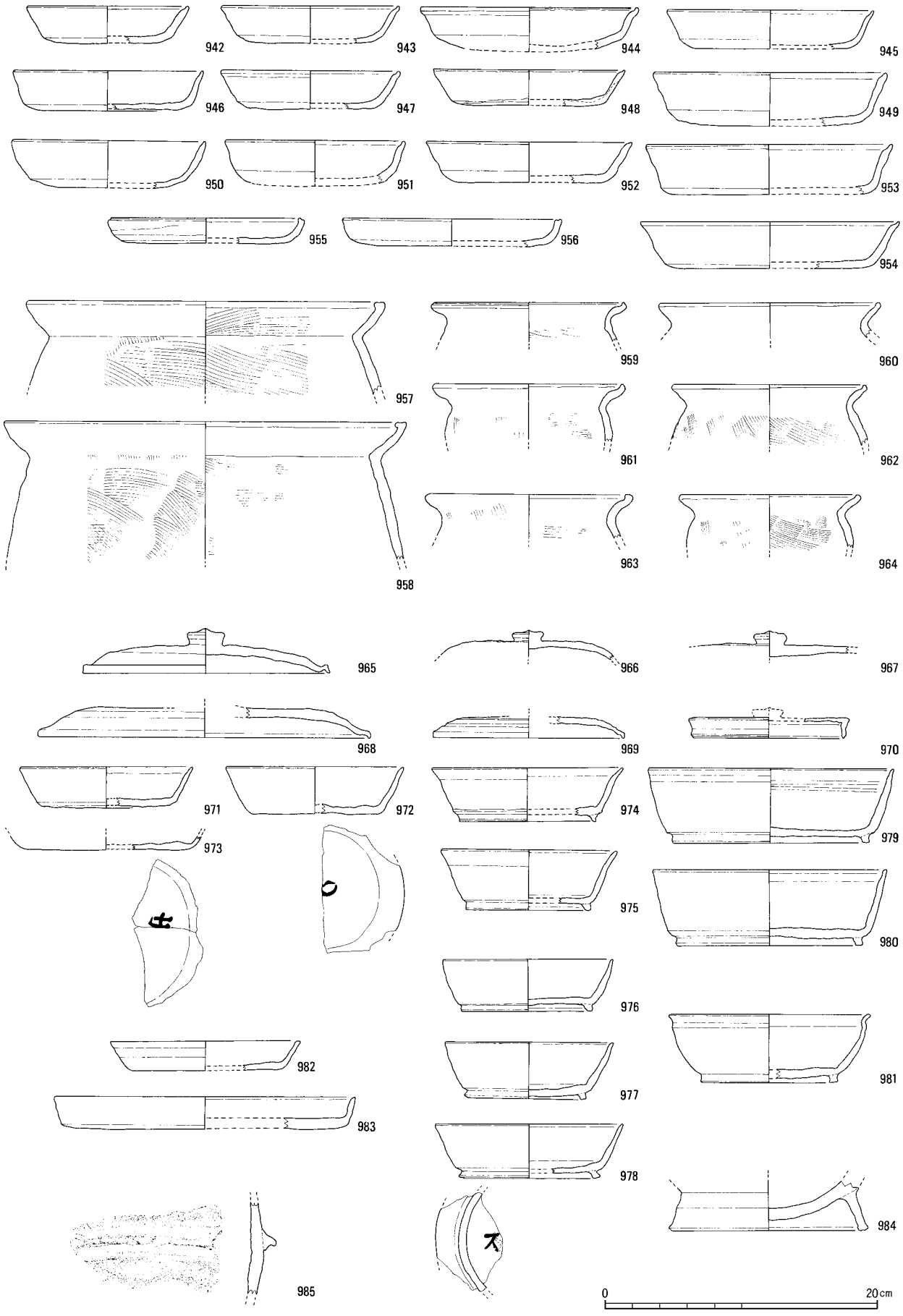
図示したものは混入と考えられる。小片のため詳細は不明であるが、円筒埴輪であろうか。土師質でタガの幅は狭くやや低い。

Ｇ．ＳＢ４５出土遺物（第 107 図）

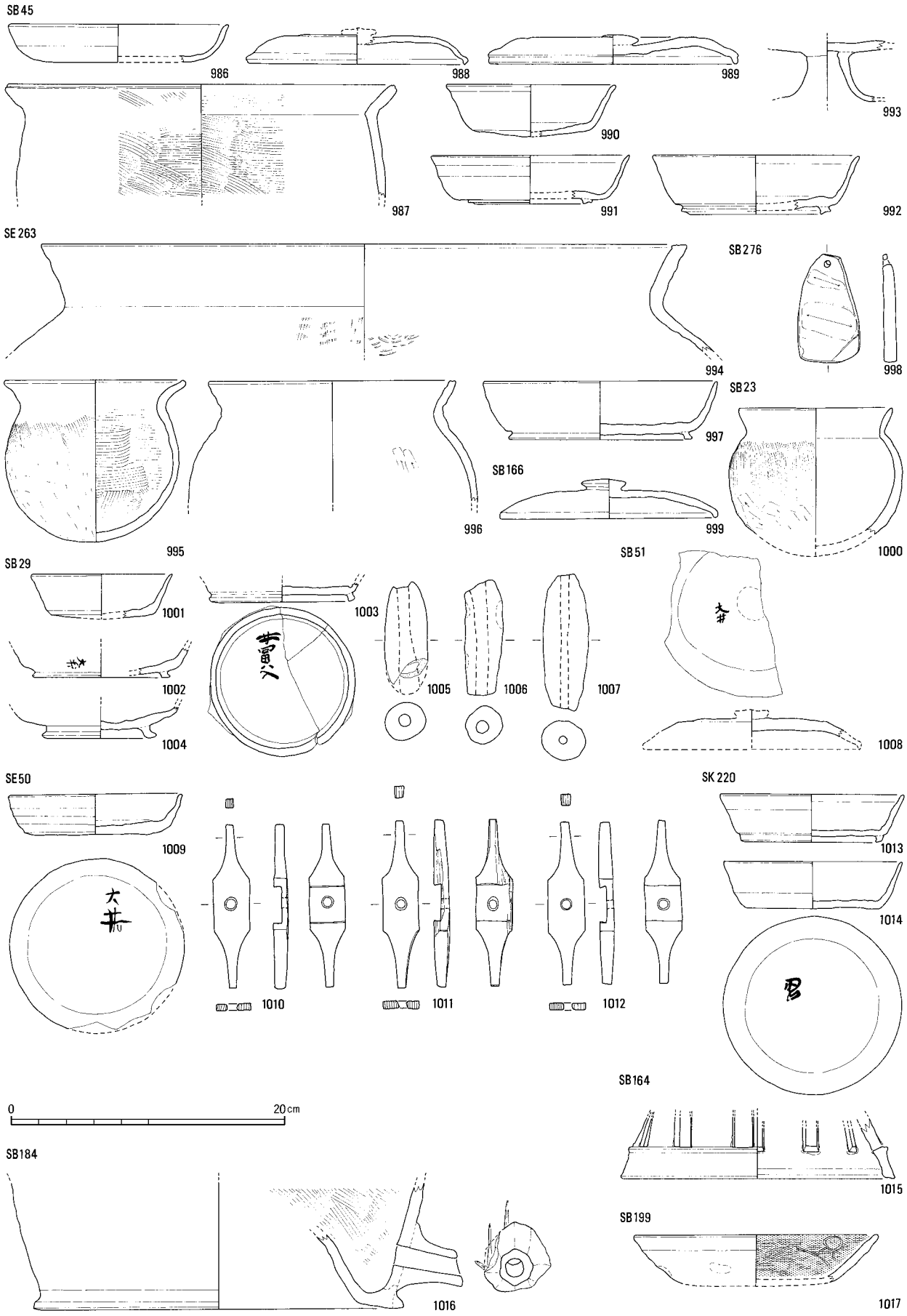
掘立柱建物柱痕跡から比較的まとまって出土したが、大半は小片である。

＜土師器＞

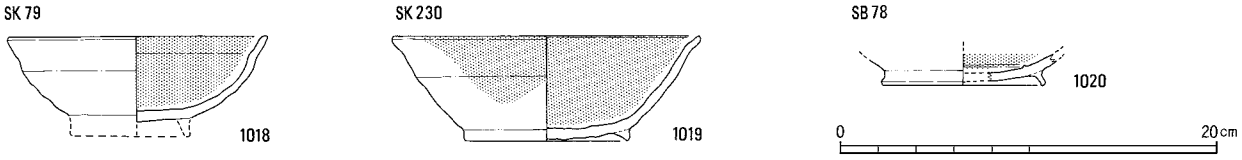
986 は杯、987 は長胴甕である。986 は小片のため口径に疑問が残り、皿の可能性もある。987 の口縁部に内弯はほとんど認められない。端部外面に沈線が１条巡る。



第 106 図　SZ59 出土遺物 実測図（1：4）



第 107 図　SB23・29・45・51・164・166・184・199・276、SE50・263、SK220 出土遺物 実測図（1：4）



第 108 図　SB78、SK79・230 出土遺物 実測図（1：4）

＜須恵器＞

988・989 は蓋、990 ～ 992 は杯、993 は高杯である。杯には杯A（990）と杯B（991・992）がある。杯Bの高台は両者とも底部のやや内側に貼り付けられるが、低く雑な仕上げである。また、989 の口縁端部外面は強いロクロナデが施され、鋭利な面を成形している。

H．ＳＥ２６３出土遺物（第 107 図）

井戸からの出土であるが､埋納されたものはない。995・996 は土師器の甕、997 は須恵器の杯、994 は甕である。994 はタタキや当て道具の痕跡をナデにより雑に消す。

Ⅰ．ＳＢ２７６出土遺物（第 107 図）

図示できるものは 998 のみである。携帯用の砥石で、扁平な形体であるが側面も使用している。直径 3 ㎜の孔を両方からの行為によって空けている。

J．ＳＢ１６６出土遺物（第 107 図）

図示できたものは 999 のみである。土師器の蓋で扁平なつまみをもつ。

K．ＳＢ２３出土遺物（第 107 図）

図示できたものは 1000 のみである。土師器甕で内面はハケメを施さず、ナデにより調整される。

L．ＳＢ２９出土遺物（第 107 図）

1001 ～ 1003 は須恵器の杯、1004 は壺、1005 ～ 1007 は土錘である。杯は杯A（1001）と杯B（1002･1003）がある。1001 の底部外面はロクロケズリされ、口径に対し器高が高く、1002 の高台は底部のやや内側に貼り付けられ、この両者はやや古相を示す。1003 は、口縁部と底部の境を内外面ともに特に強くヨコナデを施す。1002･1003 には墨書があり、1003 は「井買入」としたが、消失した部分があるかもしれない。1002 は「大井」と細い筆で速い筆速で書かれたようである。

M．ＳＢ５１出土遺物（第 107 図）

1008 のみ図示した。須恵器の蓋で天井部外面は未調整のままである。天井部外面に「大井」と墨書される。

N．ＳＥ５０出土遺物（第 107 図）

1009 は須恵器の杯である。杯Gとすべき古相を示す形態であるが、口径に対し器高が低い。口縁部外面のロクロナデは板状工具によるものである。底部外面に「大井」と墨書される。

1010 ～ 1012 は糸巻の横木である。1010 と 1012 が相欠きにより組み合されるものと考えられる。棒軸を通す孔は直径 7 ㎜である。

O．ＳＫ２２０出土遺物（第 107 図）

1013 は須恵器の杯B、1014 も同じく杯Aである。後者には、底部外面に「男」と墨書される。

P．ＳＢ１６４出土遺物（第 107 図）

図示できるものは 1015 のみである。須恵器の円面硯で、方形の透孔を 12 方に空ける。

５．平安時代前期の遺物

おおむね 9 世紀に属するものとするが、奈良時代との識別が困難なものが多く、2 点を図示したに止まる。奈良時代としたもののなかに、この時代に下るものが含まれている可能性がある。

A．ＳＢ１８４出土遺物（第 107 図）

図示したものは 1016 のみである。特殊器形のもので、柱穴出土であるためこの時期とする根拠に乏しく、奈良時代に遡る可能性もある。土師質で、底部が大きく隆起する。体部下端には注口を貼り付け、注口先端は下方を長く切断されている。注口の接合には、体部にヘラによる沈線を多数施し、接着効果を高めている。醸造用に使用されたものであろうか。

B．ＳＢ１９９出土遺物（第 107 図）

図示したものは 1017 のみである。黒色土器の杯で、高台はもたない。内面の一部に連結輪状の暗文を施す。

6．平安時代中期の遺物（第 108 図）

おおむね 10 世紀に属するものを対象とする。遺構からのまとまった出土が無く、散見される程度である。

1018 ～ 1020 は黒色土器のＡ類である。1018 は SK79、1019 は SK230、1020 は SB78 柱穴からの出土である。1020 には底部に 1 条の凸線が巡る。

7．平安時代末～鎌倉時代の遺物（第 109 図）

この時期の遺物は、土坑に埋納された瓦器が主である。全て椀で、口径 14.2 ～ 15.9 ㎝、器高 4.0 ～ 5.1 ㎝で、口縁端部内面に沈線を 1 条施す。1024・1032 の外面に一部ヘラミガキが認められるが、他のものは指頭圧痕を明瞭に残し未調整である。底部内面の暗文は連結輪を 2 個重ねた程度である。燻しが不十分なものも比較的多い。1027・1028 が SK236、1034・1035 が SK244 である他は、1 土坑に 1 個体のみである。

8．包含層出土遺物

分類を行った一部の器種においては、既述したものと同様、平城京の分類[8]に従っている。

Ａ．土師器（第 110 図）

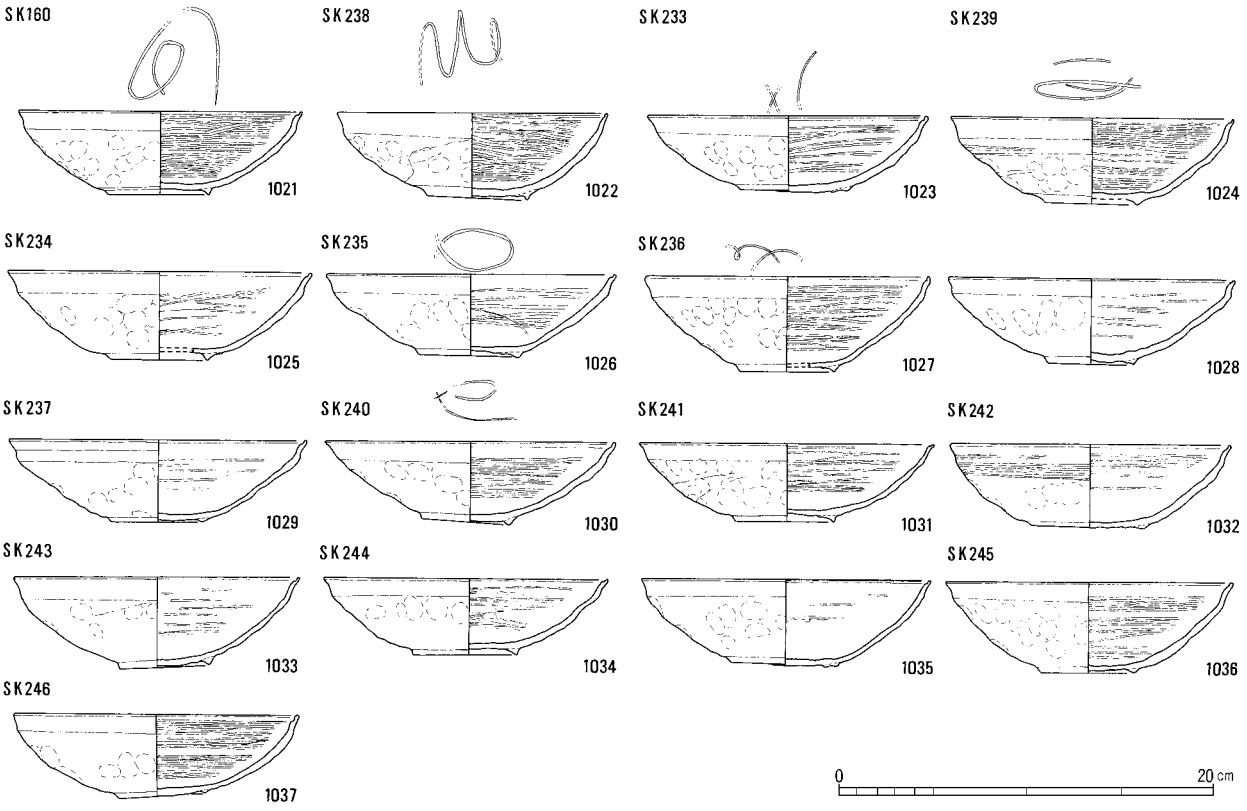
壺（1038 ～ 1044） 1038 は二重口縁壺、1039 は小型の壺で、雑な仕上げである。1042 ～ 1044 は確証を欠くが壺の脚と考えられる。1040・1041 は一応壺の底部としたが、甕の可能性もある。

甑（1045） 底部中央に直径 2 ㎝の円孔を内から外へ空けている。

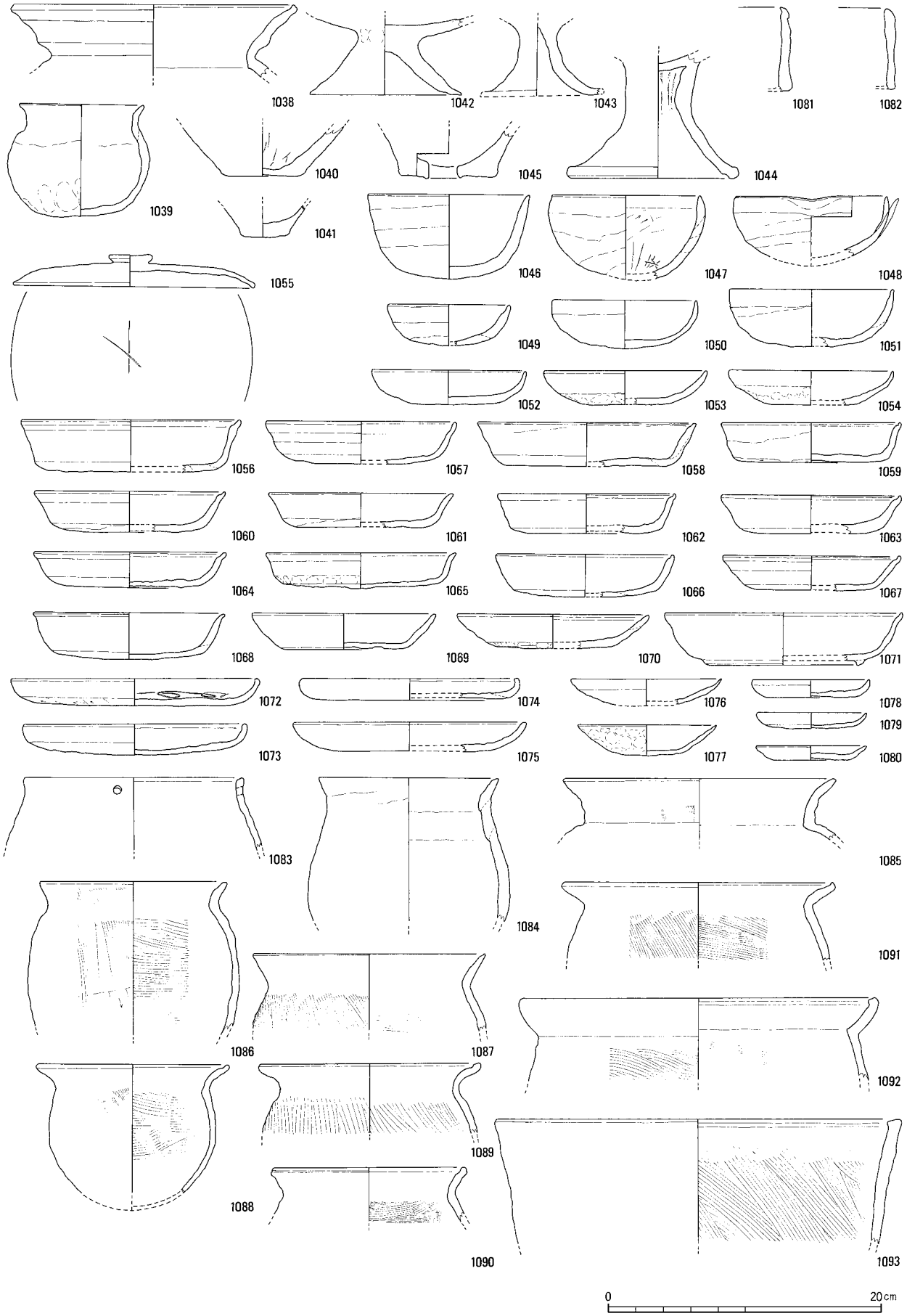
椀（1046 ～ 1054） 1046 は器高が高く鉢状の形体を呈する以外は、内弯する口縁部をもつ半球状の形体のものである。器高に差がおおきく、器高 5 ㎝以上で明確な半球形の形体のもの（1047・1048）、器高約 3 ～ 4 ㎝のやや浅いもの（1049 ～ 1051）、器高 2.5 ㎝の扁平な形体のもの（1052 ～ 1054）があり、1048 は片口をもつものである。1047 のみ、内面をヘラケズリで調整するが、他のものはナデである。

蓋（1055） 杯蓋で、扁平なつまみをもつ。天井部内面に「×」の記号がヘラにより記されている。

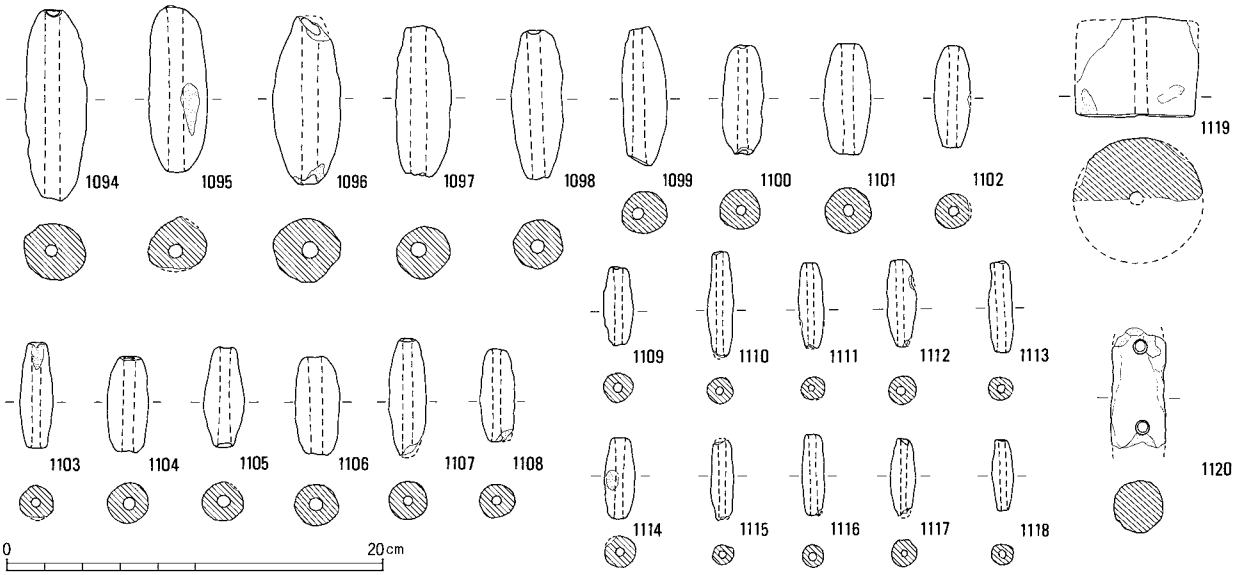
杯（1056 ～ 1071） 1071 は高台をもつ杯Ｂ、他は平らな底部から直立する口縁部をもつ杯Ａであ



第 109 図　SK160・233 ～ 246 出土遺物 実測図（1：4）



第 110 図　包含層出土遺物 実測図（1：4）



第 111 図　包含層出土遺物 実測図（1：4）

るが、1067・1069・1070 は外傾がおおきい。1058・1059・1066・1067 の口縁端部内面には沈線が 1 条施される。また、凹線状になるもの（1056・1060・1062・1064）もある。また、1070 は端部からやや下って幅の広い沈線を施しており、他のものとは異質である。調整は、1059 の底部外面がヘラケズリ、1058・1062・1064・1067 がナデ、他は未調整である。

皿（1072 ～ 1080）　口径 15.5 ㎝以上の大型のものと 11 ㎝以下の小型のものがある。前者は、いずれも内弯する口縁部をもつものであるが、1072 のみ底部外面をヘラケズリし、内面にはラセン暗文を施す。

小型のものには、口径 11 ㎝程度のもの（1076・1077）と 8 ㎝前後の小皿（1078 ～ 1080）がある。小皿のうち 1078・1079 の口縁部は内弯するが、1080 は直線的に外方へ開く。

鉢（1081・1082）　両者とも志摩式の製塩土器である。

甕（1083 ～ 1092）　1083 は無頸で、直径 0.6 ㎝の円孔が外から内に向かって空けられている。確認できたのは 1 個のみであるが、対に 2 個あった可能性もおおきい。

1084 は、短い口縁部のもので非常に粗雑な仕上げのものである。

1085 ～ 1090 は球形の体部をもつものであるが、口縁端部が尖り気味のもの（1087）、内に巻き込むもの（1089）、沈線を施すもの（1090）等多様である。

1091・1092 は長胴の体部をもつものであるが、1091 は外に開く口縁部をもつのに対し、1092 は内弯する。

甑（1093）　一対の把手が付くものと推測される。

B．土製品（第 111 図）

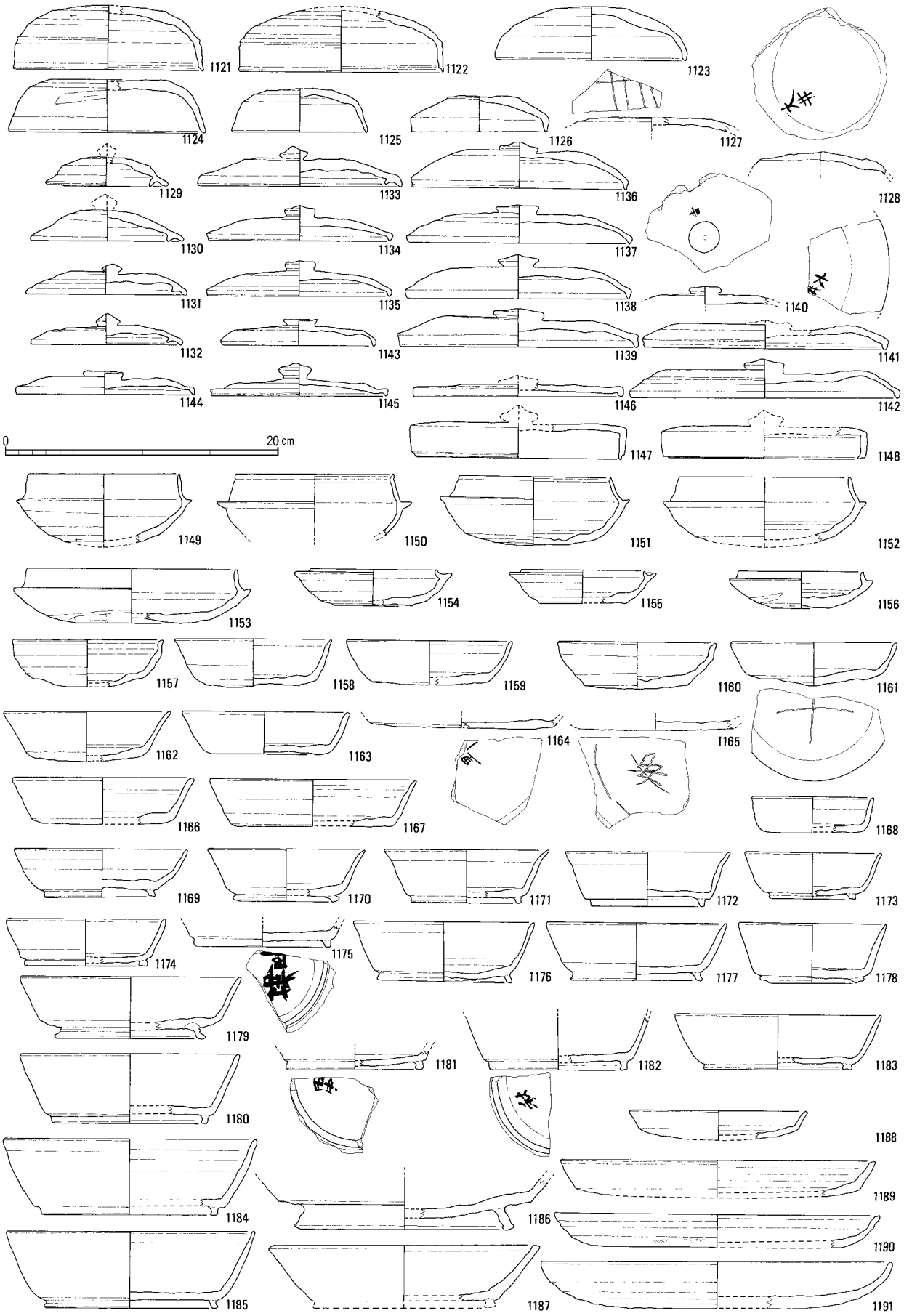
土錘（1094 ～ 1120）　筒状のものには、重さ 80g 以上の重いもの（1094 ～ 1096）、50g 前後のもの（1097・1098）、30g 前後のもの（1099 ～ 1101）、15 ～ 25g のもの（1102 ～ 1108）、10g 前後の軽いもの（1109 ～ 1118）があるが、規格性を欠く。1119 は円柱状の体部に細い孔を空ける。一応土錘としたが、確証はない。1120 は横方向に一対の孔を空けるものである。

C．須恵器（第 112 ～ 114 図）

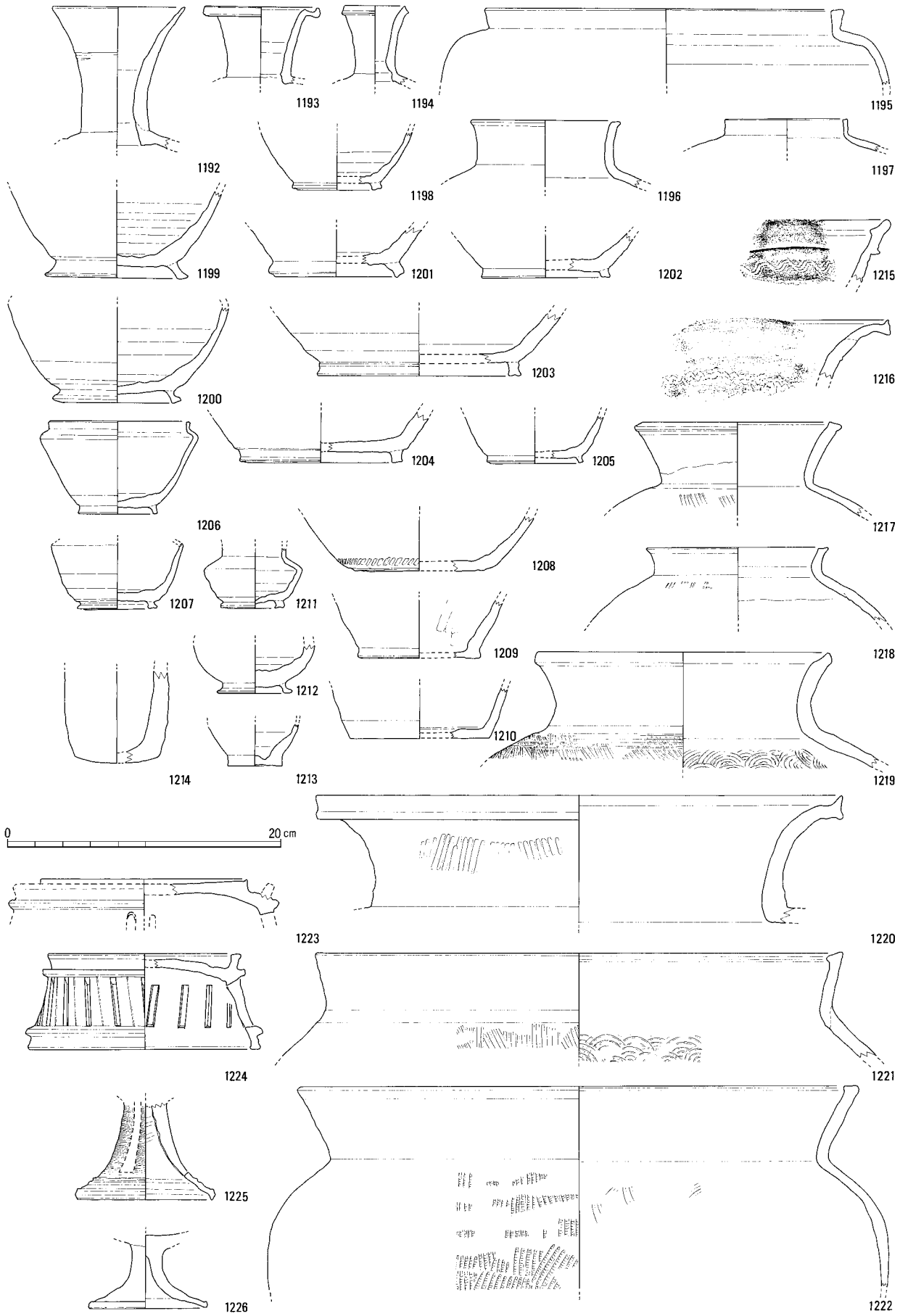
蓋（1121 ～ 1148）　半球状の形体のもの（1121 ～ 1128）と宝珠つまみをもつもの（1129 ～ 1148）がある。

前者のうち、1121 と 1122 は天井部と口縁部の境に弱い稜を残す。天井部外面をロクロケズリするが、1126 は未調整、1128 はナデである。1128 の天井部外面には「大井」と墨書され、1127 には格子状の記号が記されている。

後者は、口縁端部内面にかえりをもつもの（1129 ～ 1133）と端部を折り返すもの（1134 ～ 1148）がある。また、1147・1148 は折り返しが長く壺の蓋



第 112 図　包含層出土遺物 実測図（1：4）



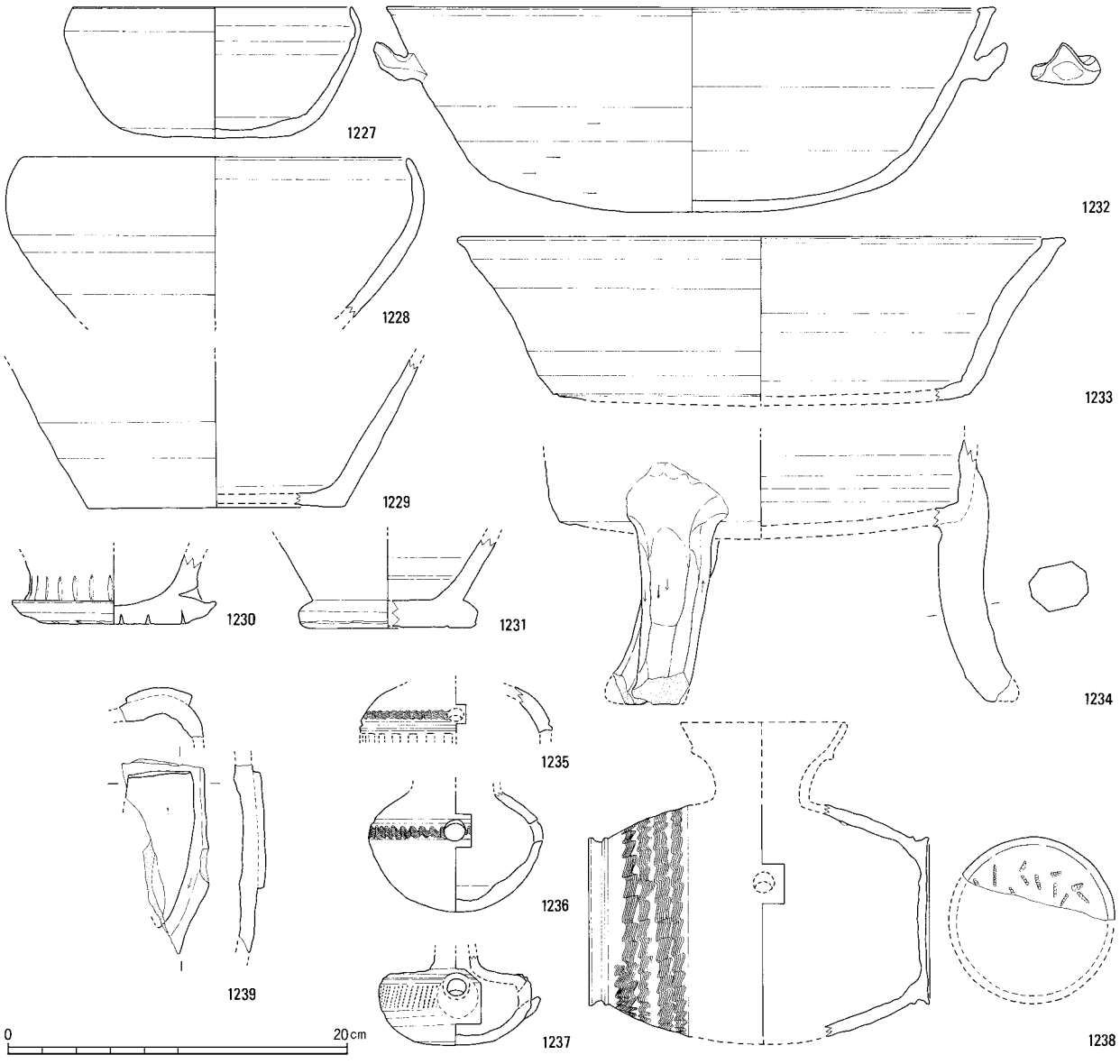
第 113 図　包含層出土遺物 実測図（1：4）

と考えられる。1146 の折り返しは短く、非常に扁平な形体である。1141・1142 は天井部が落ち込む形体を呈し、1144・1145 においても比較的扁平である。1140 の天井部外面には「吉」、1141 には「大井」と墨書される。

杯 H（1149 ～ 1156） 1149 ～ 1152 は、口径 11 ～ 12.5 ㎝で半球形の形体を呈し、底部外面をロクロケズリで調整するものが多い。1151 の口縁端部内面には段が残る。1153 は扁平な形体で、底部外面のヘラケズリはロクロを使用していない。1154 ～ 1156 は口径が縮小し、受部の退化が進んだものである。1156 のみ底部外面をロクロケズリで調整する。

杯 G（1157 ～ 1161） 蓋の可能性のあるものを含むが、一応杯として扱う。底部外面はいずれも未調整であるが、1158 は口縁部と底部の境を 1 周ロクロケズリする。1161 の底部外面にはヘラにより「×」と記されている。

杯 A（1162 ～ 1168） 1168 は口径が小さく口縁部が直立するもので、他器種とすべきかもしれない。1164 の底部外面には「里□」と墨書される。1165 の底部外面にも「安」と線刻され、それを円で囲むような線刻も見られる。「安麿」と表示している[34]ようである。



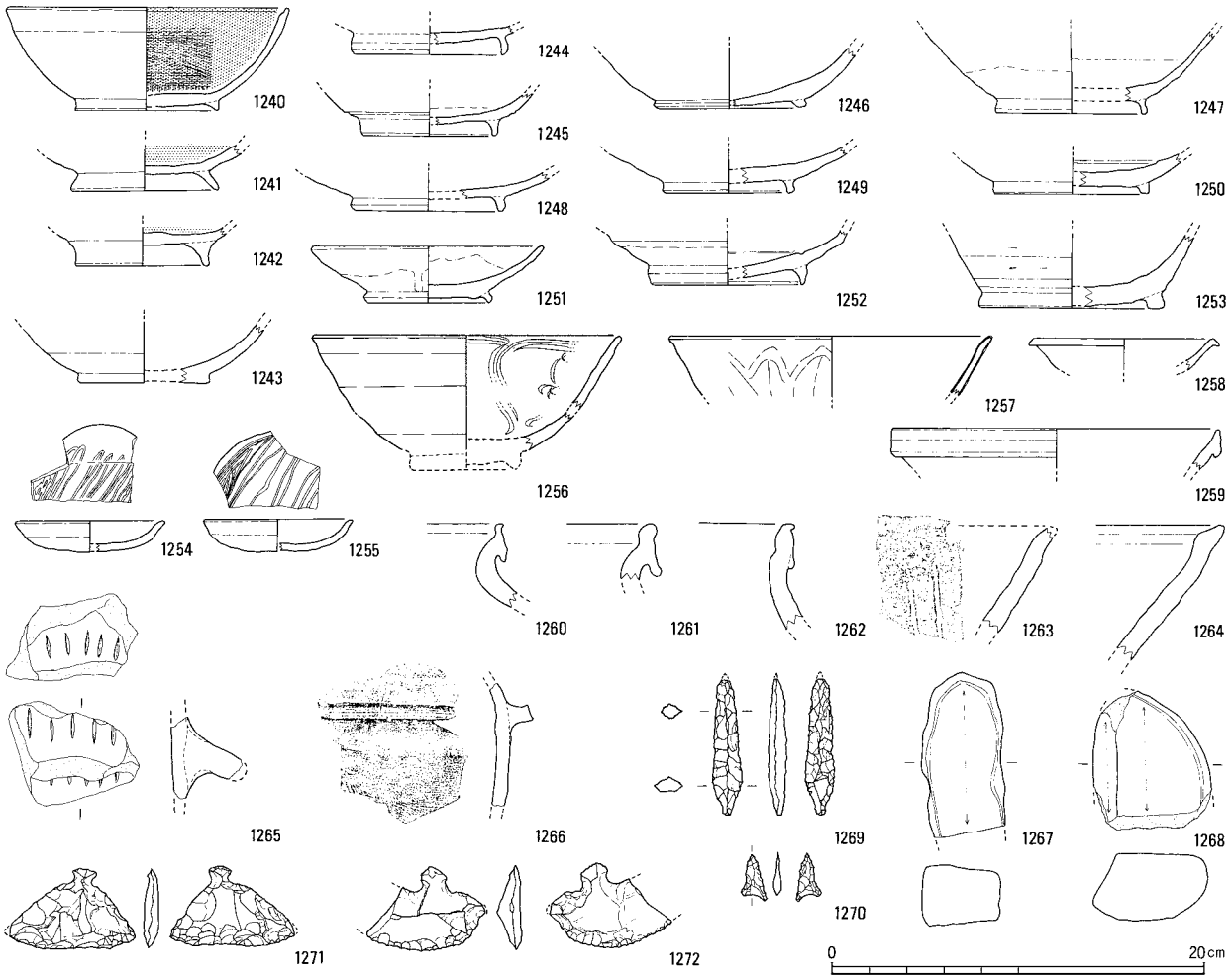
第 114 図　包含層出土遺物 実測図（1：4）

杯Ｂ（1169 ～ 1187） 口縁部は真直ぐ外方へ立ち上がるが、1169 は内弯気味、1171・1172 はおおきく外反する。1187 は厚い器壁で盤状の形体である。1179 の高台は比較的高く、やや内側に貼り付けられ、底部と口縁部の境を１周ロクロケズリする。1186 も同様であるが、大型で体部下半をロクロケズリするようである。盤とすべきかもしれない。1178 は口径に対し器高が高く、椀とすべきかもしれない。1170 は胎土精良の精製品である。底部外面に墨書されるものも多く、1181 は「田中」、1182 は「秋」、1175 は２文字以上書かれているが判読不明である。

皿（1188 ～ 1191） 小型のもの（1188）と大型のもの（1189 ～ 1191）がある。1189・1191 が底部外面をロクロケズリするのに対し 1188・1190 は未調整である。1190 は酸化焼成されており、還元不良である。また、1191 は形態的には土師器にちかい。

壺（1192 ～ 1214） 1192・1199・1200 は 壺Ｋ、1193 は壺Ｌ、1195･1197 は壺Ａ、1206･1207 は壺Ｅで、1198・1201 ～ 1205 はこれらいずれかの底部であろう。1194 は提瓶の可能性があり、1196 は直口壺である。1208 は体部最下端にタタキ状の痕跡が１周巡る。一応壺としておくが確証はない。1214 も同様に特異な形体である。1209･1210 は高台をもたず、底部外面は 1209 が糸切痕、1210 はロクロケズリである。1211 ～ 1213 は小型のもので、1213 の底部外面は糸切痕が残る。ロクロナデの調整が主であるが、1200・1203・1206・1210 は体部下半をロクロケズリする。

甕（1215 ～ 1222） 口径 13 ㎝前後のもの（1217･1218）、21 ㎝程度のもの（1219）、38 ㎝以上の大型のもの（1220 ～ 1222）がある。大型のものには口縁部が直立気味のもの（1221･1222）とおおきく外反するもの（1220）がある。1216 も 1220 と同様



第 115 図　包含層出土遺物 実測図（1：4）

な形体と考えられるが、波長の短い波状文が施される。1215は外面に突帯と波状文、内面には受部状の突帯が巡る。

硯（1223・1224） 両者とも円面硯である。1224は方形の透かし孔を22方に空け、その間に鋭利な工具による線刻を施す。孔はヘラにより外から内へ空けられている。

高杯（1225・1226） 1225は3方に透かし孔を施すが、1226にはない。孔はヘラにより外から内、上から下へ向けて空けられている。

鉢（1227 ～ 1229） 1227・1228は鉄鉢と称されるもの、1229は平らな底部から真直ぐ外方に立ち上がる口縁部をもつものである。1227の底部は平坦であるが、1228は尖るものと考えられる。1228は体部中央をロクロケズリで調整する。

擂鉢（1230・1231） 両者とも底部のみの残存である。1230は底部に深い刺突孔を多数設けるほかにも体部最下端に刺突孔を1周巡らす。これに対し、1231では底部のみに浅い刺突孔を施すのみである。

盤（1232 ～ 1234） 1232は一対の把手をもつものである。1234は全体の形体が不明であるが、一応3足盤としておく。脚は長く、体部最下部に貼り付けられ、ヘラケズリにより8面に面取りされる。1232・1233は体部外面下半をロクロケズリする。

甕（1235 ～ 1238） 1236は体部外面に凹線＋波状文を巡らすが、1237は凹線が2条、波状文の替わりに刺突列点文が巡り、注口が隆起する。調整では、1236の底部外面はヘラケズリの後ナデを施すが、1237では未調整で、体部文様帯の下をロクロケズリする。

1235は小片のため全体の形体が不明であるが、二重甕と考えられる。胎土は精良で暗赤色を呈し、非常に細かい波状文を巡らす。透かし孔は方形で32方に空けられる。1238は樽形甕と推測される。体部には波状文が4条巡らされ、側面にも櫛による刺突痕が不定方向に広がる。

陶製品（1239） 小片のため全体の形体は不明である。残存部のみでみた場合、須恵質で半円柱状を呈し、外面をヘラケズリ、内面は未調整である。外面にはさらに弧をえがく板状部位を貼り付ける。短絡的には鳥形硯の蓋のようにもみえるが、確証はない。

D．黒色土器（第115図）

1240 ～ 1242があるが、全てA類の椀で、全体の形体が明確なのは1240のみである。1240は、口縁端部内面に1条の沈線が巡り、内面は密にヘラミガキを施す。

E．緑釉陶器（第115図）

1243のみである。硬質で、円柱状に削り出す高台をもつ。釉はかかっていない。

F．灰釉陶器（第115図）

1251以外は底部片で、器種等は不明確であるが、1244 ～ 1247は椀、1248 ～ 1252は皿、1253壺と考えられる。釉は、1244 ～ 1246・1248・1250・1252・1253が刷毛塗り、1247・1249・1251が漬け掛けである。底部外面の調整は、1244・1249・1250・1253がロクロケズリするのに対し、1246・1252は未調整、他のものはナデである。

G．瓦器（第115図）

1254・1255とも皿で、比較的深い形態を呈する。

H．青磁（第115図）

1256・1257とも龍泉窯系の椀である。1256は内面に陰刻花文、1257は外面に蓮弁文を施す。

I．白磁（第115図）

1258は皿、1259は椀で、1259は玉縁状の口縁部を呈する。

J．陶器（第115図）

いずれも口縁部片のため、詳細は不明であるが、1260 ～ 1262は常滑産の甕、1263・1264は信楽産の擂鉢と考えられる。1262の縁帯は口縁部に接し、1263は、ヘラによる荒い擂目が施される。

K．埴輪（第115図）

1265は形象埴輪と考えられるが、明確でない。タガ状に隆起させた両側にヘラによる刻目を施す。1266は朝顔形埴輪と考えられ、比較的高いタガを有し、横方向のハケメで調整される。

L．石器（第115図）

1267・1268は砥石、1269・1270は石鏃、1271・1272は石匙である。1269は大型で有茎、1271・1272は、一次加工面を残す。

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種	器形	法量（cm）			調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考
						口径	器高	その他						
1	1064	SK249	V-46 P 1	弥生土器	壺	16.0	—	底径 8.0	体部下部外面ハケメ	外：黄茶色 内：黒色	2㎜の砂粒多含	良	口縁部 1/6・底部 1/4 残	口縁部外面～体部外面上半に羽状・斜格子状刺突文＋横線文。摩滅のため調整不明瞭。
2	177	SD72	P-16 旧河道	弥生土器	壺	16.0	—		外面ハケメ→簡単なナデ、内面ハケメ	暗茶色	3㎜の砂粒多含	良	口縁部 1/2 残	口縁端部四方に浮文、端部内面に波状文、端部外面に刻目、頸部外面に横線文。口縁部に黒斑。
3	175	SD72	P-21 旧河道	土師器	壺	8.5	8.1		ナデ	暗灰色	3㎜の砂粒多含	良	口縁部 1/2 欠損	
4	176	SD72	P-21 旧河道	土師器	壺	9.3	14.8		ナデ	茶色	砂粒・雲母多含	良	完形	底部に黒斑。 頸部外面に線刻。
5	184	SD33	L-19 SX3	弥生土器	壺	9.2	—		ナデ？	外：暗赤色 内：暗灰茶色	2㎜の砂粒多含	良	口縁部完存	
6	185	SD33	M-19 SD1	弥生土器	壺	9.4	—		ナデ？	黄茶色	3㎜の砂粒若干含	良好	口縁部 1/3 残	口縁部に黒斑。
7	187	SD33	I-16 SD1	弥生土器	壺	—	—	脚径 9.5	外：ハケメ 内：ナデ	暗茶色	4㎜の砂粒多含	良	脚部 1/2 残	
8	190	SD33	M-19 SD1	弥生土器	壺	—	—	脚径 8.0	ナデ？	淡黄茶色	砂粒多含	良	脚部 1/2 残	
9	188	SD33	L-19 SX3	弥生土器	壺	—	—	底径 3.8	ナデかヘラミガキ	暗赤茶色	2㎜の砂粒多含	良	口縁部欠損	摩滅のため調整不明。
10	189	SD33	M-19 SD1	弥生土器	甕	13.0	3.8		外面ハケメ、内面ナデ	淡黄茶色	砂粒多含	良	口縁部若干欠損 底部 1/2 残	口縁部外面から体部上半に列点文＋波状文＋横線文。口縁部・体部中央に黒斑。
11	186	SD33	M-19 SD1	弥生土器	甕	10.9	—		ナデ？	淡茶色	2㎜の砂粒多含	良	口縁部 1/2 残	口縁部外面から体部上半に列点文3段。
12	183	SD33	L-19 SX1	弥生土器	高杯	—	—	脚径 16.0	ナデ？	白赤色	4㎜の砂粒多含	良	脚部 1/2 残	脚部に四方透孔。
13	220	SD75	A-13 旧河道	弥生土器	壺	—	—	底径 4.3	外面ヘラミガキ、頸部内面ハケメ、他はナデ	淡褐色	0.5～5㎜の小石含	良好	口縁部欠損	
14	218	SD75	A-13 旧河道	弥生土器	壺	13.0	25.0	底径 5.5	—	外：暗茶色 内：淡茶色	5㎜の砂粒多含	良	口縁部 1/4・底部 1/2 残	摩滅のため調整不明。
15	216	SD75	A-13 旧河道 第Ⅲ層	弥生土器	甕	20.0	—		—	黒茶色	2㎜の砂粒若干含	良	口縁部 1/6 残	摩滅のため調整不明。
16	217	SD75	A-13 旧河道	弥生土器	甕	14.6	—		口縁部ナデ	外：黒茶色 内：暗茶色	2㎜の砂粒多含	良	口縁部 1/6 残	口縁下端部に刻目。外面に煤付着。
17	221	SD71	H-13 旧河道 第Ⅲ層	弥生土器	壺	14.5	—	底径 8.0	—	暗茶色	白色微砂、砂粒多含	良	口縁部完存 底部 2/3 残	口縁部から頸部に羽状刺突文＋横線文＋波状文。摩滅のため調整不明。
18	219	SD71	G-11 旧河道 第Ⅲ層	弥生土器	壺	12.1	—	底径 7.4	—	暗灰茶色	砂粒多含	良	口縁部 1/2 残	口縁部から体部に横線文＋波状文。摩滅のため調整不明。
19	224	SD71	G-10 旧河道 第Ⅱ層	弥生土器	壺	—	—	底径 3.3	ヘラミガキ	灰茶色	2㎜の砂粒若干含	良	底部完存	
20	215	SD71	E-11 旧河道 第Ⅲ層	弥生土器	壺	18.0	—		ナデ	黒茶色	2㎜の白色砂粒多含	やや不良	口縁部 1/6 残	口縁部に鋸歯文。
21	238	SD71	旧河道 第Ⅰ層	弥生土器	壺	—	—	底径 4.9	—	黄茶色	2㎜の砂粒若干含	やや不良	底部完存	内面焼成不良。摩滅のため調整不明。
22	237	SD71	E-8 旧河道	弥生土器	甕	17.1	—		ナデ	暗黄茶色	砂粒多含	良好	頸部 1/8 残	口縁下端部から頸部に列点文＋横線文。
23	226	SD71	E-8 旧河道 第Ⅱ層	弥生土器	甕	16.2	—		体部内面下半ヘラケズリ　他はナデ	暗茶色	3㎜の小石多含	良好	口縁部 1/3 残	口縁端部外面に沈線1条。外面煤付着。
24	222	SD71	E-9 旧河道 第Ⅱ層	弥生土器	甕	10.6	12.6	底径 4.3	—	暗黄褐色	3㎜の小石多含	良	完形	内外面に煤付着。摩滅が激しく調整不明。
25	239	SD71	H-9 旧河道 第Ⅰ層	弥生土器	甕	—	—		—	外：黒茶色 内：淡茶色	6㎜の小石含	良好	脚上部完存	外面に煤付着。摩滅が激しく調整不明。
26	234	SD71	旧河道 第Ⅰ層	弥生土器	甕	—	—	脚部径 8.7	ナデ	暗茶色	3㎜の砂粒多含	良好	脚部 1/2 残	外面に煤付着。摩滅が激しく調整不明確。
27	228	SD71	G-6 旧河道 第Ⅰ層	土師器	壺	6.4	7.8		ナデ	淡褐色	7㎜の小石含	良	口縁端部欠損	体部に焼成後穿孔。
28	240	SD71	E-8 旧河道 第Ⅰ層	土師器	壺	4.6	4.5		ナデ	灰褐色	1㎜の砂粒含	良	完形	ミニチュア。内外面に煤付着。
29	229	SD71	H-8 旧河道	土師器	壺	4.7	4.5		ナデ	暗茶色	砂粒若干含	良	ほぼ完形	ミニチュア。外面に黒斑。
30	245	SD71	H-10 旧河道 上面	土師器	皿	15.0	2.9		ナデ	淡赤茶色	精良	良好	口縁部 1/4 残	摩滅のため調整不明確。
31	225	SD71	G-7 旧河道 第Ⅱ層	土師器	甕	11.7	—		外：ハケメ 内：ナデ	茶色	2㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/6 残	外面煤付着。摩滅のため調整不明確。
32	236	SD71	G-8 旧河道	土師器	甕	14.6	—		外：ハケメ 内：ナデ	淡茶色	2㎜の砂粒多含	良好	口縁部 1/6 残	口縁端部外面に浅い沈線1条。
33	235	SD71	G-12 旧河道 第Ⅰ層	土師器	高杯	15.7	—		ナデ	赤茶色	3㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/4 残	杯上部に黒斑。
34	231	SD71	F-9 旧河道 第Ⅰ層	土師器	高杯	—	—		ナデ	暗茶色	砂粒多含	良好	脚柱部のみ残	
35	233	SD71	H-7 旧河道 第Ⅰ層	土師器	高杯	—	—		ナデ	茶色	4㎜の砂粒多含	良	脚柱部のみ残	摩滅が激しく調整不明確。
36	230	SD71	H-7 旧河道 第Ⅰ層	土師器	高杯	—	—		ナデ	赤茶色	砂粒含	良	脚柱部のみ残	
37	232	SD71	H-8 旧河道 第Ⅰ層	土師器	高杯	—	—		ナデ	白茶色	精良	良好	脚柱部のみ残	
38	244	SD71	G-8 旧河道	須恵器	杯	10.0	—		ロクロナデ	暗青灰色	精良	良好	口縁部 1/8 残	
39	249	SD71	H-10 SX1	須恵器	杯	14.0	4.1	高台径 9.5	ロクロナデ 底部外面未調整	暗灰色	5㎜の小石若干含	やや不良	口縁部 1/3・底部 1/4 残	底部内面に沈線1条。
40	241	SD71	H-8 旧河道 上面	須恵器	杯	13.0	3.0		ロクロナデ 底部外面ナデ	灰色	細砂含	良	口縁部 1/3 残	
41	223	SD71	H-10 旧河道 第Ⅱ層	須恵器	杯	9.0	2.6		ロクロナデ 底部外面未調整	茶白色	精良	不良	完形	
42	243	SD71	G-7 旧河道 第Ⅰ層	須恵器	高杯	—	—	脚径 8.2	ロクロナデ	灰色	4㎜の小石若干含	良好	脚部 1/4 残	透孔四方。白灰色の自然釉が掛かる
43	242	SD71	H-7 旧河道 第Ⅰ層	須恵器	甕	12.8	—		外：タタキ 内：同心円文ナデ消し	灰色	2㎜の砂粒若干含	良好	脚部 1/3 残	白灰色の自然釉が掛かる
44	227	SD71	F-8 旧河道 第Ⅰ層	須恵器	鉢	20.9	7.3		底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	白灰色	雲母多含	不良	ほぼ完形	底部外面に指による掻き取り痕。外面に墨書「□…□」。
45	2071	SD71	G-7 旧河道 第Ⅱ層	木製品	部材	幅 6	—	枘穴 2×5	—	—	—	—	両端欠損	
46	2047	SD71	排土	木製品	剣形	幅 3.6	—	厚 1.0	—	—	—	—	先端部残	
47	2031	SD71	G-6 旧河道 第Ⅱ層	木器	横槌	身径 7～8	全長 33.8	柄長 20	—	—	—	—	完形	
48	2034	SD71	G-7 旧河道 第Ⅱ層	木器	直柄平鍬	刃幅 43	身長 29	厚 3.0	—	—	—	—	完形	未製品。泥除の可能性もあり。
49	2033	SD71	G-7 旧河道 第Ⅱ層	木器	直柄平鍬	刃幅 21	身長 31	頭部長 14	—	—	—	—	完形	未製品。
50	2034	SD71	G-10 旧河道 第Ⅲ層 No 2	木製品	—	幅 31	長 27	厚 4.0	—	—	—	—	完形	未製品。
51	494	SD203	N-56 SD6	弥生土器	壺	36.0	—		ヨコナデ	淡黄茶色	3㎜の砂粒多含	良	口縁部 1/9 残	口縁部に刺突文・黒斑。

第２－１表　遺物観察表

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種	器形	法量（cm）			調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考
						口径	器高	その他						
52	497	SD203	L-47 SD2 第Ⅲ層	弥生土器	壺	18.0	—		弱いヨコナデ（ハケメが残る）	淡茶色	2㎜の砂粒多含	やや不良	口縁部1/6残	口縁部から頸部に羽状刺突文＋横線文。摩滅が激しく調整不明確。
53	483	SD203	H-35 溝3 第Ⅲ層	弥生土器	壺	14.7	—		ヘラミガキ	暗茶色	3㎜の砂粒多含	良	口縁部1/6残	口縁部から頸部に鋸歯文＋刻目＋斜格子文。
54	502	SD203	Q-64 溝3	弥生土器	壺	12.5	—		ハケメ	淡黄茶色	2㎜の砂粒多含	良	口縁部1/2残	口縁部に刻目＋鋸歯文＋刻目。摩滅が激しく調整不明確。
55	485	SD203	N-64 溝3	弥生土器	壺	9.8	—		ハケメ	茶色	1㎜の砂粒含	良好	口縁部1/6残	
56	505	SD203	N-52 溝3	弥生土器	壺	—	—	底径3.6	—	茶色	5㎜の砂粒若干含	良好	口縁部欠損	摩滅が激しく調整不明。
57	486	SD203	O-56 SD2	弥生土器	壺	9.9	23.1	底径4.5	ハケメ	淡茶色	6㎜の小石含	良	口縁部1/8残	体部下半摩滅が激しく調整不明。体部に黒斑。
58	496	SD203	O-55 SD4	弥生土器	壺	9.0	—		ハケメ	茶色	2㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/3残	
59	493	SD203	N-53 SD2 №5	弥生土器	壺	12.3	—		ハケメ	淡茶色	7㎜の小石含	良好	口縁部1/4残	
60	512	SD203	O-56 SK1	弥生土器	壺	8.6	19.0	底径4.4	—	淡茶色	微砂若干含	良好	底部2/3欠損	摩滅が激しく調整不明。
61	511	SD203	O-56 SK1	弥生土器	壺	—	—		ヘラミガキ	赤茶色	6㎜の小石多含	良	口縁部・底部欠損	摩滅が激しく調整不明確。体部に黒斑。
62	478	SD203	G-36 溝3 第Ⅲ層	弥生土器	壺	—	—		ヘラミガキ	赤茶色	5㎜の小石含	良好	口縁部・体部下半以下欠損	摩滅が激しく調整不明確。
63	500	SD203	H-37 溝3 第Ⅲ層	弥生土器	壺	—	—	底径5.7	ヘラミガキ	淡茶色	2㎜の砂粒若干含	良好	体部下半完存	
64	495	SD203	N-53 SD2 №4	弥生土器	壺	—	—	底径4.7	ハケメ	暗茶色	6㎜の小石多含	良	体部下半完存	摩滅が激しく調整不明確。体部に黒斑。
65	492	SD203	N-52 溝3	弥生土器	壺	—	—	底径4.2	ハケメ	暗茶色	3㎜の小石含	良好	底部完存	
66	482	SD203	N-51 溝3	弥生土器	壺	—	—	底径7.9	ヘラミガキ	暗茶色	3㎜の小石含	良	底部完存	底部に黒斑。
67	480	SD203	N-51 溝3	弥生土器	壺	—	—	底径5.5	ナデ	茶色	4㎜の小石含	良	底部完存	摩滅が激しく調整不明確。
68	490	SD203	N-59 SK1	弥生土器	壺	—	—	脚径8.0	ヘラミガキ	暗茶色	5㎜の砂粒多含	良好	脚部3/4残	
69	504	SD203	P-57 溝3	弥生土器	壺	—	—	脚径8.0	ヘラミガキ	暗茶色	5㎜の砂粒含	良好	脚部ほぼ完存	煤付着。
70	501	SD203	N-53 溝3	土師器	壺	10.4	—		—	淡茶色	4㎜の砂粒含	良	口縁部1/2残	摩滅が激しく調整不明。
71	513	SD203	O-56 SK1	弥生土器	鉢	16.4	—		—	黒茶色	3㎜の砂粒多含	不良	口縁部1/6残	口縁部から体部上半に列点文4段＋横線文＋列点文付突帯2条。体部に黒斑。摩滅が激しく調整不明。
72	506	SD203	O-54 SD3	弥生土器	鉢	22.0	6.4	底径3.5	口縁部ヨコナデ、他は未調整	暗茶色	4㎜の砂粒含	良好	口縁部1/4残、底部完存	口縁部に黒斑。
73	498	SD203	N-53 SD2	弥生土器	甕	13.5	—		ヨコナデ	淡黄茶色	4㎜の小石含	良好	口縁部1/10以下残	口縁部に列点文。
74	487	SD203	N-52 SD2	弥生土器	甕	14.8	30.0	底径4.1	ハケメ	淡茶色	砂粒多含	良	底部1/2欠損	口縁部に列点文、体部上半に（横線文＋列点文）3段＋横線文＋波状文。体部下半に黒斑。
75	489	SD203	O-54 溝3	弥生土器	甕	14.0	—		ナデ	暗茶色	2㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/5残	煤付着。
76	484	SD203	N-53 溝3	弥生土器	甕	14.7	—		ナデ	暗茶色	4㎜の小石含	良好	口縁部1/4残	煤付着。
77	491	SD203	N-53 溝3	弥生土器	高杯	—	—	脚径12.6	ナデ	淡茶色	4㎜の砂粒若干含	良好	脚部完存	透孔6方3段。
78	488	SD203	O-54 溝3	弥生土器	高杯	—	—		ヘラミガキ	茶色	5㎜の小礫含	良	脚部上半残	透孔4方3段以上。摩滅が激しく調整不明確。
79	509	SD203	O-56 SK1	弥生土器	高杯	—	—		—	淡茶色	3㎜の砂粒含	良好	脚部上半残	透孔5方2段以上。脚部に横線文。摩滅が激しく調整不明。
80	510	SD203	O-56 SK1	弥生土器	高杯	—	—	脚径17.0	—	暗茶色	4㎜の砂粒多含	良	脚部一部欠損	摩滅が激しく調整不明。
81	479	SD203	H-37 溝3 第Ⅲ層	弥生土器	高杯	—	—		ヘラミガキ	暗茶色	5㎜の小石含	良	脚部上半残	
82	508	SD203	O-64 溝3	石器	石斧	幅4.0	長10.1		磨製	白茶色	—	—	刃部大半欠損	両刃。風化が激しい。
83	481	SD203	H-37 溝3	石器	石包丁	幅11.5	長3.1		磨製	灰緑色	緑泥片岩	—	1/3欠損	刃部内弯式。
84	2053	SD203	P-57 SD3 第Ⅲ層	木器	竪杵	搗き部径8.0	握部径3.0		—	—	—	—	握部欠損	
85	2048	SD203	H-37 SD3 第Ⅲ層	木器	鋤	—	—	把手径2.0	—	—	—	—	把手小片	
86	499	SD203	O-55 SD4	土師器	壺	19.8	—		—	白茶色	3㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/6残	二重口縁壺。摩滅が激しく調整不明。
87	503	SD203	L-47 SD2 第Ⅰ層	土師器	壺	5.2	6.0		手づくね	淡茶色	精良	良好	完形	ミニチュア。
88	507	SD203	O-54 SD3	須恵器	高杯	12.9	6.8	脚径7.0	杯底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	5㎜の砂粒含	良好	1/2残	
89	477	SD203	L-43 溝3 第Ⅰ層	須恵器	甕	—	—	底径4.1	底部外面雑なヘラケズリ、他はロクロナデ	淡灰色	3㎜の小石含	良好	口縁部欠損	頸部と体部に沈線2条。頸部から体部に自然釉。
90	1061	SD203	I-39 SD1 第Ⅲ層	須恵器	二重甕	—	—	底径7.1	底部外面未調整、他はロクロナデ	暗青灰色	精良	良好	体部下半1/4残	体部に透孔多数。体部内面に自然釉。
91	1023	SK221	Y-46 SK7	土師器	壺	4.0	3.3		外面未調整、内面指による強いナデ	淡茶色	精良	良好	完形	ミニチュア。
92	1022	SK221	Y-46 SK7	土師器	壺	7.7	8.2		外面未調整、ナデ	黄茶色	3㎜の砂粒多含	良好	完形	底部に黒斑。
93	1024	SK221	ぁ-46 SK2	土師器	甕	11.7	11.8	底径7.7	外面未調整、ナデ	白茶色	4㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/3欠損	摩滅が激しく調整不明確。
94	1020	SK221	Z-45 SK1	土師器	甕	13.0	12.9		簡単なナデか未調整	淡茶色	3㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/4欠損	内面炭化物付着。
95	1027	SK221	Z-45 SK1	土師器	甕	16.0	22.9		—	外：茶色 内：淡茶色	2㎜の砂粒含	良好	口縁部1/3残	摩滅が激しく調整不明。
96	1025	SK221	Y-46 SK4	土師器	甕	15.2	22.0		外面ハケメ、内面ナデ	外：暗茶色 内：白茶色	3㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/4残	摩滅が激しく調整不明確。
97	1026	SK221	Y-46 SK6	土師器	甕	12.6	19.9		—	淡茶色	3㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/2欠損	摩滅が激しく調整不明。
98	1019	SK221	ぁ-46 SK2	土師器	椀	11.7	4.9		ナデ	黄茶色	3㎜の砂粒含	良好	完形	底部外面に黒斑。摩滅が激しく調整不明確。
99	1021	SK221	Y-46 SK7	土師器	高杯	15.1	—		ナデ	黄赤色	2㎜の砂粒多含	良好	杯部完存	摩滅が激しく調整不明確。
100	1028	SK231	V-49 SK1 №4	土師器	甕	14.0	19.7		外面ハケメ、内面上半未調整、下半ナデ	暗赤茶色	2㎜の砂粒含	良好	ほぼ完形	体部外面下半剥離により調整不明。
101	1029	SK231	V-49 SK1 №1	土師器	甕	14.0	20.8		外面ハケメ、内面ナデ	暗茶色	2㎜の砂粒含	良好	ほぼ完形	

第２－２表　遺物観察表

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種	器形	法量（cm）			調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考
						口径	器高	その他						
102	1033	SK231	V-49 SK1 No 2	土師器	甕	11.8	10.5		ナデ	灰黄褐色	5 ㎜の小石多含	不良	完形	摩滅が激しく調整不明確。
103	1032	SK231	V-49 SK1 No 6	土師器	鉢	—	—		体部外面ハケメ、内面ナデ	淡黄色	5 ㎜の小石多含	良	口縁部欠損	体部外面に黒斑。
104	1031	SK231	V-49 SK1 No 5	土師器	高杯	—	—		—	茶赤色	5 ㎜の小石含	良	脚柱部完存	摩滅が激しく調整不明。
105	1030	SK231	V-49 SK1 No 3	土師器	高杯	—	—	脚部径 10.7	脚柱部内面ヘラケズリ、他は不明	赤橙色	4 ㎜の砂粒多含	良	脚裾部 1/2 残	摩滅が激しく調整不明確。
106	1058	SK226	N-34 SK16	土師器	壺	10.7	14.2		—	淡白茶色	精良	良好	口縁部 1/4 残	摩滅が激しく調整不明。
107	1009	SK232	X-49 SK2	土師器	壺	11.8	13.3		外面ナデ、内面ヘラケズリ	淡茶色	3 ㎜の砂粒多含	良好	ほぼ完形	
108	1034	SK225	ぁ-49 SD1	土師器	壺	11.0	11.0		ナデ	外：暗茶色 内：淡茶色	5 ㎜の小石含	良好	口縁部小片、他は完存	底部外面に黒斑。摩滅が激しく調整不明確。
109	1010	SK247	V-43 SK4 No 2	須恵器	蓋	14.7	4.3		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	紫灰色	2 ㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/4 残	ロクロ右回転。
110	1011	SK247	V-43 SK4 No 1	須恵器	杯	12.2	4.4		底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	紫灰色	3 ㎜の砂粒多含	良好	口縁部小片、受部 1/4 残	ロクロ右回転。
111	990	SD208	K-45 SD1 第 1 層	土師器	椀	15.7	5.7		外面未調整、内面ナデ	暗茶色	3 ㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/3 残	
112	1003	SD208	L-46 SD1 第 1 層	土師器	椀	13.9	3.7		外面未調整、内面ナデ	淡赤茶色	5 ㎜の砂粒若干含	良好	口縁部 1/2 残	摩滅が激しく調整不明確。
113	987	SD208	K-45 SD1 第 1 層	土師器	椀	12.9	—		外面未調整、内面ナデ	淡赤色	1 ㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/2 残	摩滅が激しく調整不明確。
114	986	SD208	K-45 SD1 第 1 層	土師器	椀	12.5	3.7		外面未調整、内面ナデ	暗茶色	6 ㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/4 残	体部外面下半にヘラ状工具痕。
115	1008	SD208	K-43 SD5	土師器	椀	11.0	4.2		ナデ	白茶色	8 ㎜の小石含	良好	口縁部 1/4 残	摩滅が激しく調整不明確。
116	985	SD208	K-44 SD4 第 1 層	土師器	椀	12.3	—		ナデ	黄茶色	1 ㎜の微砂若干含	良好	口縁部 1/3 残	摩滅が激しく調整不明確。
117	1001	SD208	K-45 SD1 第 1 層	土師器	椀	3.1	3.6		手づくね	淡茶色	精良	良好	口縁部小片、体部完存	ミニチュア。
118	999	SD208	J-41 SD8	土師器	椀	3.6	5.0	底径 3.0	手づくね	外：暗黄茶色 内：黒茶色	3 ㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/6 残、底部完存	ミニチュア。
119	1000	SD208	M-48 SD1	土師器	壺	—	—	底径 3.4	ナデ	淡茶色	3 ㎜の砂粒含	良好	口縁部欠損	ミニチュア。体部の 1/2 が黒斑。
120	1002	SD208	N-50 SD1	土師器	壺	14.0	—		—	淡茶色	2 ㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/6 残	口縁部外面に炭化物付着。摩滅が激しく調整不明。
121	1007	SD208	M-49 SD1 第 2 層	土師器	壺	—	—		ナデ	淡赤茶色	2 ㎜の砂粒多含	良好	頸部 1/4 残	摩滅が激しく調整不明確。
122	984	SD208	K-44 SD4 第 1 層	土師器	甕	21.8	—		ハケメ	淡茶色	1 ㎜以下の微砂若干含	良好	口縁部 1/3 残	
123	988	SD208	K-45 SD1 第 1 層	土師器	甕	10.8	—		—	赤茶色	雲母若干含	良好	口縁部 1/6 残	摩滅が激しく調整不明。
124	989	SD208	K-45 SD1 第 1 層	土師器	甑	20.6	—		内面下半未調整、他はハケメ	白茶色	1 ㎜の微砂含	良好	口縁部 1/4 残	
125	991	SD208	K-45 SD1 第 1 層	土師器	鉢	18.9	—		外面上半ハケメ、下半未調整、内面ナデ	淡茶色	4 ㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/4 残	体部外面下半にヘラ状工具痕。
126	992	SD208	K-44 SD4 第 2 層	土師器	高杯	—	—	脚径 10.2	筒部内面ヘラケズリ、他はナデ	淡赤茶色	1 ㎜の微砂含	良好	脚裾部 1/2 残	摩滅が激しく調整不明確。
127	993	SD208	K-44 SD4 第 2 層	須恵器	蓋	12.6	4.1		天井部外面未調整、他はロクロナデ	紫灰色	2 ㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/4 欠損	天井部端に沈線 1 条。ロクロ右回転？
128	994	SD208	K-45 SD1 第 1 層	須恵器	蓋	12.9	4.1		天井部外面未調整、他はロクロナデ	淡青灰色	2 ㎜の砂粒含	良好	ほぼ完形	口縁部外面、天井部内面に自然釉。
129	1005	SD208	K-43 SD5	須恵器	蓋	8.8	3.2		天井部外面未調整、他はロクロナデ	暗青灰色	3 ㎜の砂粒若干含	良好	口縁部 1/4 残	
130	996	SD208	K-45 SD1 第 1 層	須恵器	杯	11.8	3.9		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗紫灰色	2 ㎜の砂粒多含	良好	口縁部 1/4 残	体部外面に自然釉。
131	995	SD208	K-45 SD1 第 1 層	須恵器	杯	11.4	3.9		底部外面未調整、他はロクロナデ	明灰色	3 ㎜の砂粒若干含	良好	受部 1/3 残	底部外面に記号「×」。
132	997	SD208	K-45 SD1 第 1 層	須恵器	椀	10.2	4.5		底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗青灰色	精良	良好	口縁部 1/4 残	体部に沈線 1 条。ロクロ左回転。
133	998	SD208	K-45 SD1 第 1 層	須恵器	甑	12.5	—		ロクロナデ	淡灰色	5 ㎜の砂粒多含	良好	口縁部 1/2 残	頸部に突帯・沈線 1 条。外面に自然釉。
134	1004	SD208	L-46 SD1 第 1 層	須恵器	高杯	—	—	脚径 12.3	ロクロナデ	淡灰色	2 ㎜の砂粒若干含	良好	脚裾部 1/4 残	透孔 2 段 4 方。
135	1006	SD208	L-47 SD1 第 2 層	須恵器	高杯	—	—		杯底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	紫灰色	精良	良好	口縁部・脚裾部欠損	脚部外面・杯底部内面に自然釉。ロクロ右回転。
136	253	SK80	Q-32 P1	土師器	椀	11.1	4.7		外面未調整、内面ナデ	淡赤色	微砂含	良好	ほぼ完形	
137	1056	SD257	W-48 SD4	土師器	壺	2.9	5.2		手づくね	淡黄茶色	3 ㎜の砂粒若干含	良好	完形	ミニチュア。底部に黒斑。
138	1060	SK260	K-41 SK2	土師器	鉢	3.5	3.1		外面未調整、内面ナデ	淡黄茶色	精良	良好	完形	ミニチュア。内面に赤色顔料付着。
139	1059	SB295	K-39 P3	土師器	鉢	3.0	2.3		外面未調整、内面ナデ	淡黄茶色	精良	良好	完形	ミニチュア。
140	1036	SK222	W-43 SK5	須恵器	杯	12.3	5.5		底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	淡灰色	4 ㎜の砂粒含	やや不良	口縁部 1/6 残、受部以下完存	ロクロ右回転。
141	1041	SK223	S-40 SK2	須恵器	杯	13.0	3.4		底部外面未調整、他はロクロナデ	淡紫灰色	4 ㎜の小石含	良好	口縁部 1/4 残	
142	960	SD202	Z-47 溝 2 No 25	土師器	壺	11.9	14.8		ナデ	黒茶色	4 ㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/3 残	
143	956	SD202	Z-47 溝 2 第 1 層	土師器	壺	11.2	17.3		外面ハケメ、内面ナデ	淡赤色	4 ㎜の砂粒多含	良好	口縁部 1/2 残	体部に黒斑。
144	951	SD202	ぁ-47 溝 2 No 43	土師器	壺	—	—		ナデ	茶色	2 ㎜の砂粒含	良好	体部完存	
145	938	SD202	ぁ-49 溝 2 第 2 層	土師器	壺	—	—		底部内面ヘラケズリ、他はナデ	暗茶色	2 ㎜の砂粒含	良好	体部 1/3 残	内外面に炭化物付着。
146	947	SD202	ぁ-47 溝 2 No 72	土師器	壺	15.0	—		ナデ	暗茶色	3 ㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/4 残	頸部に黒斑。
147	942	SD202	Z-47 溝 2 第 2 層	土師器	椀	10.9	3.8		外面未調整、内面ナデ	淡茶色	2 ㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/2 残	内面に記号「×」。外面摩滅が激しく調整不明確。
148	941	SD202	Z-47 溝 2 第 2 層	土師器	椀	10.8	4.1		外面未調整、内面ナデ	黄茶色	4 ㎜の砂粒多含	良好	ほぼ完形	
149	954	SD202	Y-47 溝 2 No 12	土師器	椀	11.4	5.0		外面未調整、内面ナデ	暗茶色	6 ㎜の砂粒多含	良好	完形	口縁部に黒斑。
150	952	SD202	Y-47 溝 2 No 13	土師器	鉢	13.0	8.0		ナデ	暗茶色	6 ㎜の砂粒多含	良好	完形	
151	943	SD202	Y-47 溝 2	土師器	鉢	4.5	5.5		外面未調整、内面ナデ	淡茶色	3 ㎜の砂粒多含	良好	完形	ミニチュア。体部に黒斑。
152	944	SD202	Y-47 溝 2 第 2 層	土師器	鉢	7.7	—		外面未調整、内面ナデ	茶色～淡茶色	4 ㎜の砂粒多含	良好	口縁部 1/4 残	ミニチュア。摩滅のため調整不明確。
153	955	SD202	ぁ-47 溝 2 No 72	土師器	高杯	15.8	—		ナデ	暗茶色	5 ㎜の砂粒含	良好	杯部ほぼ完存	杯屈曲部に沈線。摩滅のため調整不明確。
154	963	SD202	ぁ-46 溝 2 No 34	土師器	高杯	13.8	11.7	脚径 10.1	脚柱部内面ヘラケズリ、他はナデ	黄茶色	2 ㎜の砂粒含	良好	1/2 残	脚部外面炭化物付着。

第２－３表　遺物観察表

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種	器形	法量（cm）			調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考
						口径	器高	その他						
155	967	SD202	ぁ-46 溝2 No 34	土師器	高杯	16.4	13.7	脚径 11.9	ナデ	暗茶色	3㎜の砂粒含	良好	脚部 1/2 残	摩滅のため調整不明確。
156	964	SD202	Z-47 溝2 No 30	土師器	高杯	16.2	13.0	脚径 11.7	脚柱部内面ヘラケズリ、他はナデ	暗黄茶色	3㎜の砂粒多含	良好	口縁部 1/2 残、脚部 1/4 欠損	
157	965	SD202	Y-47 溝2 No 18	土師器	高杯	16.4	14.0	脚径 11.2	脚柱部内面ヘラケズリ、他はナデ	暗茶色	5㎜の砂粒多含	良好	口縁部若干欠損	杯部に黒斑。
158	957	SD202	Z-47 溝2 No 30	土師器	高杯	24.0	—		ナデ	暗茶色	4㎜の砂粒若干含	良好	杯部完存	杯部に一対の黒斑。
159	969	SD202	ぃ-46 溝2 No 32	土師器	高杯	23.0	—		ナデ	暗茶色	2㎜の砂粒多含	良好	口縁部 1/4 残	
160	966	SD202	ぁ-46 溝2 No 34	土師器	高杯	19.8	15.9	脚径 11.4	脚柱部内面一部ヘラケズリ、他はナデ	黄茶色～淡赤茶色	3㎜の砂粒若干含	良好	脚部 1/4 欠損	摩滅のため調整不明確。
161	946	SD202	ぁ-47 溝2 No 76	土師器	高杯	18.7	15.2	脚径 14.1	ナデ	白茶色	3㎜の砂粒含	不良	脚部 3/4 欠損	口縁部・脚裾部に黒斑。
162	953	SD202	Y-47 溝2 No 11	須恵器	高杯	13.8	8.5	脚径 9.2	杯底部外面タタキ後ヘラケズリ、他はロクロナデ	青灰色	精良	良好	脚部 1/4 欠損	初期須恵器。
163	968	SD202	ぁ-47 溝2 No 41	土師器	甕	—	—	脚台径 9.8	外面ハケメ、内面ナデ	暗茶色	4㎜の砂粒多含	良好	脚台部完存、体部 1/4 残	外面煤付着。
164	970	SD202	ぁ-46 溝2 No 64	土師器	甕	17.6	26.4		外面ハケメ、内面ナデ	暗茶色～白茶色	4㎜の砂粒多含	良好	口縁部 1/4 残	内面炭化物付着。体部外面に黒斑。摩滅が激しく調整不明確。
165	940	SD202	Y-47 溝2 No 18	土師器	甕	15.0	—		外面ハケメ、内面ナデ	茶色～淡茶色	4㎜の砂粒多含	良好	口縁部完存	内面にヘラ状工具痕。
166	971	SD202	ぁ-46 溝2 No 64	土師器	甕	—	—		外面ハケメ、内面ナデ	暗茶色	4㎜の砂粒多含	良好	体部 1/3 残	内面に炭化物、体部外面に煤付着。摩滅が激しく調整不明確。
167	939	SD202	Y-47 溝2 第1層	土師器	甕	11.6	—		外面ハケメ、内面ナデ	淡茶色～暗茶色	2㎜の砂粒多含	良好	口縁部 1/4 残	内面炭化物付着。摩滅が激しく調整不明確。
168	961	SD202	Y-47 溝2 No 14	土師器	甕	13.8	14.0		外面ハケメ	淡茶色	5㎜の砂粒多含	良好	体部 1/5 欠損	体部外面煤付着。摩滅が激しく調整不明。
169	950	SD202	ぁ-46 溝2 No 33	土師器	甕	12.5	14.7		外面ハケメ、内面ナデ	暗赤茶色	3㎜の砂粒若干含	良好	口縁部 1/3 欠損	内面に板状工具痕。
170	949	SD202	溝2 No 31	土師器	甕	11.0	11.8		外面ハケメ、内面ナデ	白茶色	3㎜の砂粒多含	良好	ほぼ完形	外面に黒斑。
171	948	SD202	ぁ-47 溝2 第2層 No 72	土師器	甕	—	—		ナデ	淡黄茶色	3㎜の砂粒含	良好	体部下半完存	外面に黒斑。内面に板状工具痕。
172	962	SD202	Y-47 溝2 第2層	土師器	甕	12.8	14.3		ナデ	白茶色	5㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/3 残、底部完存	外面煤付着。摩滅が激しく調整不明確。
173	959	SD202	Z-47 溝2 No 24	土師器	甕	12.9	18.8		外面ハケメ、内面ナデ	暗茶色	2㎜の砂粒含	良好	体部 1/3 欠損	外面煤付着。内面黒色に変色。
174	958	SD202	Y-47 溝2 No 18	土師器	甕	14.7	28.2		外面ハケメ、内面上半ナデ、下半ヘラケズリ	暗茶色	3㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/3 残	外面に黒斑。
175	972	SD202	Y-47 溝2	石器	石皿	29.3	11.7		—	黄白色	花崗岩	—	1/2 残	両面使用。
176	2056	SD202	ぁ-47 溝2 No 72	木器	曲柄又鍬	—	—	厚 1.0	—	—	—	—	刃部、着柄軸欠損	未製品。
177	2120	SD202	Z-47 溝2 No 69	木製品	木樋	幅 15.2	—	厚 2.4	—	—	—	—	片端欠損	
178	2057	SD202	ぁ-47 溝2	木製品	部材	—	—	厚 1.6	—	—	—	—	小片	枘孔あり。
179	2093	SD202	ぁ-47 溝2 No 74	木製品	割棒	—	—	4.0×7.2	—	—	—	—	片端欠損	
180	2046	SD202	Z-47 溝2 No 68	木製品	扉板	幅 30.0	—	厚 3.2	—	—	モミ	—	両端焼失	
181	2119	SD202	Z-47 溝2 No 67	木器	直柄平鍬	刃幅 17.6	—	厚 2.4	—	—	—	—	上端欠損	未製品。
182	2086	SD202	Y-47 溝2 No 17	木製品	田下駄縦枠	幅 6.4	長 76.0	厚 2.0	—	—	—	—	完形	枠型田下駄。
183	2112	SD202	ぁ-47 溝2 No 44	木製品	妻壁板	上端 42.8	—	厚 2.0	—	—	—	—	下端欠損	円孔あり。腐食が激しい。
184	2068	SD202	ぁ-47 溝2 No 42	木製品	部材	—	—	1.6×2.6	—	—	—	—	片端欠損	先端に切欠き。
185	2117	SD202	Z-47 溝2 No 29	木製品	部材	幅 15.6	—	厚 4.0	—	—	—	—	片端欠損	枘孔あり。
186	2108	SD202	ぁ-47 溝2 No 57	木製品	部材	幅 14.0	長 92.0	厚 2.8	—	—	—	—	片端欠損	両端に枘孔あり。腐食が激しい。井堰に転用。
187	2060	SD202	ぁ-47 溝2 No 44	木製品	部材	幅 7.6	長 60.0	厚 2.0	—	—	—	—	完形	枘孔、仕口あり。腐食が激しい。
188	2118	SD202	Y-47 溝2 No 19	木製品	板材	幅 8.8	—	厚 1.6	—	—	—	—	両端欠損	腐食が激しい。
189	2059	SD202	Z-47 溝2 No 19	木製品	腰掛脚	幅 15.8	28.0	厚 2.8	—	—	—	—	ほぼ完形	指物腰掛。両側に弧形の刳形。
190	2099	SD202	ぁ-47 溝2 No 44	木製品	腰掛座板	幅 18.0	長 67.6	厚 2.0	—	—	—	—	完形	重枘構造。一部焼失。
191	2123	SD202	ぁ-47 溝2 No 46	木製品	板材	幅 20.0	—	厚 6.0	—	—	—	—	上端欠損	
192	2083	SD202	ぁ-47 溝2 No 73	木製品	板材	幅 20.0	長 66.8	厚 2.4	—	—	—	—	完形	
193	2114	SD202	ぁ-47 溝2 No 63	木製品	板材	幅 18.8	—	厚 4.0	—	—	—	—	上端欠損	
194	2100	SD202	ぁ-47 溝2 No 56	木製品	板材	幅 12.8	—	厚 2.4	—	—	—	—	上端欠損	井堰に転用。
195	2077	SD202	ぁ-47 溝2 No 42	木製品	板材	幅 10.6	—	厚 1.8	—	—	—	—	上端欠損	
196	2085	SD202	ぁ-47 溝2 No 54	木製品	板材	幅 19.2	—	厚 2.0	—	—	—	—	上端欠損	井堰に転用。
197	2121	SD202	ぁ-47 溝2 No 51	木製品	部材	幅 18.0	—	厚 2.0	—	—	—	—	上端欠損	円孔あり。先端を尖らす。井堰に転用。
198	2113	SD202	ぁ-47 溝2 No 45	木製品	部材	幅 26.0	—	厚 3.6	—	—	—	—	上端欠損	円孔あり。
199	2092	SD202	Y-48 溝2 No 36	木製品	丸杭	6.4	—		—	—	—	—	上端欠損	
200	2072	SD202	X-48 溝2 No 39	木製品	丸杭	5.0	—		—	—	—	—	上端欠損	
201	2061	SD202	ぁ-47 溝2 No 72	木製品	丸杭	2.8	—		—	—	—	—	上端欠損	
202	2062	SD202	Y-48 溝2 No 4	木製品	角杭	2.8	—		—	—	—	—	上端欠損	
203	2063	SD202	X-47 溝2 No 40	木製品	角杭	—	—	2.4×3.8	—	—	—	—	上部欠損	
204	2058	SD202	Y-48 溝2 No 5	木製品	角杭	—	—	2.0×3.0	—	—	—	—	上部欠損	
205	2122	SD202	ぁ-47 溝2 No 47	木製品	丸杭	8.8	—		—	—	—	—	上端欠損	
206	2122	SD202	ぁ-47 溝2 No 59	木製品	丸杭	7.2	—		—	—	—	—	上端欠損	

第２－４表　遺物観察表

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種	器形	法量（cm）			調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考
						口径	器高	その他						
207	2087	SD202	ぁ-47 溝2 No 77	木製品	丸杭	6.0	—		—	—	—	—	上端欠損	
208	2078	SD202	ぁ-47 溝2 No 75	木製品	丸杭	6.0	—		—	—	—	—	上端欠損	
209	2089	SD202	X-48 溝2 No 2	木製品	丸杭	4.8	—		—	—	—	—	上端欠損	
210	2091	SD202	ぁ-47 溝2 No 62	木製品	板材	幅 30.4	長 94.0	厚 4.4	—	—	—	—	ほぼ完形	
211	2102	SD202	Z-47 溝2 No 22	木製品	垂木	7.0	長 336.0		—	—	—	—	完形	一方の先端を尖らす。
212	2103	SD202	Z-47 溝2 No 21	木製品	垂木	—	長 295.0	4.0 × 10.0	—	—	—	—	完形	幹を半裁。
213	2106	SD202	ぁ-40 溝2 No 35	木製品	垂木	5.6	長 187.2		—	—	—	—	完形	幹を 1/4 に裂く。一部若干焼ける。
214	2105	SD202	Y-47 溝2 No 15	木製品	柱	8.8	—		—	—	—	—	下端欠損	梁受けあり。
215	2107	SD202	Z-47 溝2 No 65	木製品	柱	8.0	長 206.4		—	—	—	—	完形	梁受けあり。
216	2101	SD202	Z-47 溝2 No 66	木製品	板材	幅 24.8	—	厚 3.2	—	—	—	—	片端欠損	両端切欠き。
217	2111	SD202	Y-48 溝2 No 8	木製品	板材	幅 24.0	長 124.0	厚 5.6	—	—	—	—	ほぼ完形	
218	2095	SD202	ぁ-47 溝2 No 52	木製品	柱	17.4	—		—	—	—	—	上端欠損	井堰に転用。
219	1072	SX259	X-54 SD1 第Ⅱ層	土師器	甕	20.4	33.2		外面上半ハケメ、他はナデ	外：暗茶色 内：淡茶色	砂粒多含	良	口縁部 1/3 残	摩滅が激しく調整不明確。
220	1071	SX259	R-59 SD2 第Ⅰ層	須恵器	蓋	11.8	2.3		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	明紫灰色	1 ㎜の砂粒若干含	良好	口縁部 1/4 残	自然釉がかかる。
221	1065	SX259	U-57 SD2	須恵器	杯	10.9	5.2		底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	外：暗灰色 内：淡灰色	砂粒多含	良	受部 1/8 残	
222	1070	SX259	X-54 SD1 第Ⅰ層	須恵器	杯	10.4	2.3		底部外面未調整、他はロクロナデ	明紫灰色	2 ㎜の砂粒若干含	良好	受部 1/4 残	自然釉がかかる。
223	1066	SX259	U-57 SD2 第Ⅱ層	須恵器	杯	11.9	3.0		底部外面未調整、他はロクロナデ	淡紫灰色	2 ㎜の砂粒若干含	良好	口縁部 1/6 残	
224	1068	SX259	Y-54 SD1 第Ⅰ層	須恵器	杯	12.0	3.1		底部外面未調整、他はロクロナデ	紫灰色	精良	良好	口縁部 1/8 残	ロクロ右回転。自然釉がかかる。
225	1069	SX259	S-58 SD2 第Ⅰ層	須恵器	杯	12.0	3.5		底部外面一部ロクロケズリ、他はロクロナデ	淡紫灰色	1 ㎜の砂粒若干含	良好	口縁部 1/4 残	
226	1067	SX259	X-61 SK2	須恵器	高杯	—	—	脚径 6.6	杯底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	砂粒若干含	良	脚部完存	透孔 3 方。
227	1073	SX259	T-57 SD2 第Ⅰ層	須恵器	長頸壺	10.2	—		ロクロナデ	青灰色	精良	良好	口縁部小片、頸部完存	自然釉がかかる。
228	1074	SX259	X-54 SD1 第Ⅰ層	須恵器	甕	—	—	体部径 9.8	底部外面ヘラケズリ、他はロクロナデ	明灰色	2 ㎜の砂粒若干含	良好	体部完存	沈線 2 条と刺突文。自然釉が厚くかかる。
229	2042	SX259	V-55 SD2 第Ⅱ層	木製品	部材	幅 3.5	長 145.8	厚 1.2	—	—	—	—	先端部若干欠損	枘孔あり。
230	1016	SE261	R-32 SE6	土師器	杯	—	—	高台径 10.6	ナデ	淡黄茶色	精良	良好	底部完存	内面にラセン暗文。
231	1015	SE261	R-32 SE6	土師器	鉢	19.0	8.4		口縁部外面ヘラミガキ、他は未調整、内面ナデ	黄茶色	5 ㎜の砂粒若干含	良好	口縁部 1/2 残	体部下半に黒斑。
232	2104	SE261	R-32 SE6 No 2	木製品	井戸枠	6.4	長 80.8		—	—	—	—	完形	枘孔・出枘あり。
233	2084	SE261	R-32 SE6 No 5	木製品	井戸枠	8.0	—		—	—	—	—	片側出枘欠損	枘孔・出枘あり。
234	2081	SE261	R-32 SE6 No 3	木製品	井戸枠	8.0	長 86.0		—	—	—	—	完形	枘孔あり。
235	2088	SE261	R-32 SE6 No 4	木製品	井戸枠	10.0	長 82.8		—	—	—	—	完形	枘孔あり。
236	1035	SK224	V-53 SK1	土師器	杯	14.8	4.0		内面放射暗文、外面未調整	黄茶色	精良	良好	口縁部 1/4 残	底部内面に煤付着。
237	1038	SK224	V-53 SK1	土師器	杯	15.0	3.3		内面放射暗文、外面未調整	暗茶色	2 ㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/4 残	
238	1039	SK224	V-53 SK1	須恵器	杯	11.0	3.5		底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗青灰色	精良	良好	口縁部 1/4 残、底部完存	
239	1037	SK224	V-53 SK1	須恵器	杯	10.2	3.0		底部外面未調整、他はロクロナデ	青灰色	2 ㎜の砂粒若干含	良好	口縁部 1/4 残	
240	209	SD19	G-17 SD3	須恵器	杯	12.6	4.0	高台径 7.1	ロクロナデ	淡灰色	2 ㎜の砂粒含	良好	口縁部小片、底部 1/4 残	
241	210	SD19	G-17 SD3	須恵器	杯	—	—	高台径 8.0	底部外面未調整、他はロクロナデ	暗青灰色	2 ㎜の砂粒含	良好	底部 1/4 残	
242	211	SD19	H-15 SD1	須恵器	椀	14.0	7.0	底径 8.8	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	外：暗灰色 内：淡紫灰色	1.5 ㎜の砂粒含	良好	口縁部小片、底部 1/4 残	口縁部外面に自然釉。
243	207	SD19	G-17 SD3	須恵器	壺	18.8	—		口縁端部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	3 ㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/4 残	口縁部に自然釉。
244	212	SD19	H-15 SD1	須恵器	高杯	—	—	脚径 11.1	ロクロナデ	暗灰色	砂粒多含	良好	脚部ほぼ完存	
245	208	SD19	E-15 SD1	須恵器	甕	—	—		底部外面一部ヘラケズリ、他はロクロナデ	淡灰色	精良	やや不良	口縁部欠損	頸部・体部に沈線、体部に刻目。
246	783	SD201	Y-48 溝1 第3層	土師器	杯	16.0	4.5		外面ヘラミガキ、内面暗文	明赤茶色	精良	良好	口縁部 1/7 残	口縁部 2 段放射 + ラセン暗文、底部ラセン暗文。
247	779	SD201	X-49 溝1	土師器	杯	18.8	6.6		外面ヘラケズリ、内面暗文	淡赤茶色	2 ㎜の砂粒若干含	良好	口縁部 1/8 残	口縁部 2 段放射 + ラセン暗文、底部ラセン暗文。
248	856	SD201	X-50 溝1 第3層	土師器	杯	17.6	5.9		外：口縁部ヘラミガキ、底部ヘラケズリ 内：暗文	黄茶色	精良	良好	口縁部 1/4 残	口縁部 2 段放射 + ラセン暗文、底部ラセン暗文。
249	772	SD201	X-50 溝1 第3層	土師器	杯	18.0	6.1		外：口縁部ヘラミガキ、底部ヘラケズリ 内：暗文	明赤茶色	精良	良好	口縁部 1/6 残	口縁部 2 段放射暗文、底部ラセン暗文。
250	785	SD201	O-59 溝1	土師器	杯	19.6	5.9		外：口縁部ヘラミガキ、底部ヘラケズリ 内：暗文	外：暗茶色 内：赤茶色	精良	良好	口縁部 1/8 残	口縁部 2 段放射暗文、底部ラセン暗文。
251	771	SD201	X-50 溝1 第3層	土師器	杯	16.6	6.0		外面ヘラミガキ、内面暗文	赤茶色	精良	良好	口縁部 1/6 残	ラセン暗文 3 ～ 4 段。
252	786	SD201	Y-48 溝1 第3層	土師器	杯	17.7	5.2		外：口縁部ヘラミガキ、底部ヘラケズリ 内：暗文	明赤茶色	精良	良好	口縁部 1/8 残	口縁部 2 段放射暗文、底部ラセン暗文。
253	844	SD201	Y-48 溝1 第3層	土師器	杯	16.2	5.2		外面ヘラミガキ、内面暗文	淡茶色	3 ㎜の砂粒若干含	良好	ほぼ完形	口縁部 2 段放射暗文、底部ラセン暗文。
254	780	SD201	R-55 SD1 第3層	土師器	杯	17.0	5.3		外：口縁部ヘラミガキ、底部ヘラケズリ 内：暗文	暗黄茶色	4 ㎜の砂粒多含	良好	口縁部 1/6 残	口縁部 2 段放射暗文、底部ラセン暗文。
255	852	SD201	X-49 溝1 第3層	土師器	杯	16.5	5.0		外：口縁部ヘラミガキ、底部ヘラケズリ 内：暗文	赤茶色	2 ㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/4 残	口縁部放射暗文、底部ラセン暗文。

第２－５表　遺物観察表

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種	器形	法量（cm）			調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考
						口径	器高	その他						
256	792	SD201	あ-46 溝1 第1層	土師器	杯	24.6	7.6		外面ヘラミガキ、内面暗文	赤茶色～淡茶色	精良	良好	口縁部1/8残	口縁部2段放射暗文。
257	773	SD201	X-49 溝1 第3層	土師器	杯	16.4	4.7		外：口縁部ヘラミガキ、底部ヘラケズリ 内：暗文	淡赤茶色	1㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/8残	口縁部放射暗文。
258	782	SD201	W-50 溝1 第3層	土師器	杯	15.8	4.2		外：口縁部ヘラミガキ、底部ヘラケズリ 内：暗文	淡茶色	2㎜の砂粒含	良好	口縁部1/6残	口縁部放射暗文、底部ラセン暗文。
259	776	SD201	W-50 溝1 第3層	土師器	杯	15.8	4.4		外面未調整、内面暗文	明赤茶色	白色微砂若干含	良好	口縁部1/5残	口縁部放射暗文、底部ラセン暗文。
260	766	SD201	い-46 溝1 第1層	土師器	杯	15.5	4.5		外面未調整、内面暗文	明赤茶色	精良	良好	口縁部2/5残	口縁部放射暗文、底部ラセン暗文。
261	789	SD201	V-50 溝1 第3層	土師器	杯	14.8	4.4		外面ナデ、内面暗文	赤茶色	精良	良好	口縁部1/4残	口縁部放射暗文。口縁部外面墨書「小□奴」。
262	855	SD201	X-49 溝1	土師器	杯	15.3	4.5		外面未調整、内面暗文	赤茶色	精良	良好	口縁部1/2残	口縁部放射暗文、底部ラセン暗文。
263	774	SD201	V-50 溝1 第3層	土師器	杯	15.8	4.4		外面未調整、内面暗文	淡茶色	精良	良好	口縁部1/6残	口縁部放射暗文。
264	845	SD201	W-50 溝1 №2	土師器	杯	10.4	3.5		外面未調整、一部ヘラミガキ、内面暗文	赤茶色	4㎜の砂粒含	良好	完形	口縁部放射暗文、底部ラセン暗文。
265	791	SD201	X-49・50 溝1 第3層	土師器	杯	8.9	3.0		外面ヘラケズリ、一部ヘラミガキ、内面暗文	赤茶色	微砂含	良好	口縁部1/4欠損	口縁部放射暗文。底部外面に記号「×」。
266	842	SD201	V-50 溝1 第3層	土師器	杯	11.8	3.1		外面未調整、内面暗文	淡赤茶色	精良	良好	口縁部1/6残	口縁部放射暗文、底部ラセン暗文。底部外面に煤付着。
267	848	SD201	X-49 溝1	土師器	杯	9.9	2.4		外面未調整、内面暗文	明赤茶色	精良	良好	口縁部1/4残	口縁部放射暗文。
268	850	SD201	Q-55 SD1 第3層	土師器	杯	10.9	3.0		外面未調整、内面暗文	黄茶色	3㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/4残	口縁部放射暗文。
269	846	SD201	V-50 溝1 第3層	土師器	杯	10.5	2.8		外面未調整、一部ヘラミガキ、内面暗文	暗茶色	精良	良好	1/2残	口縁部放射暗文。
270	768	SD201	X-49 溝1 第3層	土師器	杯	10.7	3.1		外面未調整、内面暗文	赤茶色	精良	良好	口縁部1/4残	口縁部放射暗文、底部ラセン暗文。
271	843	SD201	V-51 溝1 第2層	土師器	杯	10.7	2.9		外面未調整、内面暗文	黄茶色	4㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/4欠損	口縁部放射暗文。
272	787	SD201	N-58・O-57 溝1	土師器	杯	11.0	2.7		外面未調整、内面暗文	淡茶色	白色微砂若干含	良好	口縁部1/5残	口縁部放射暗文。
273	832	SD201	Q-56 SD1 第2層	土師器	杯	11.0	2.8		外面未調整、内面暗文	白茶色	2㎜の砂粒含	不良	口縁部1/3残	口縁部放射暗文。
274	853	SD201	Q-57 SD1	土師器	杯	15.0	3.5		外面未調整、内面暗文	淡赤茶色	精良	良好	口縁部1/4残	口縁部放射暗文。一部に黒斑。
275	775	SD201	N-58 溝1	土師器	杯	14.7	—		外面未調整、内面暗文	明赤茶色	精良	良好	口縁部1/4残	口縁部雑な放射暗文。
276	770	SD201	X-50 溝1 第3層	土師器	杯	13.7	3.8		外面未調整、内面暗文	淡黄茶色	5㎜の砂粒含	良	口縁部1/4残	口縁部放射暗文、底部ラセン暗文。
277	767	SD201	M-56 溝1	土師器	杯	15.0	3.8		外面未調整、内面暗文	灰茶色	白色微砂含	良好	口縁部1/10残	口縁部放射暗文、底部ラセン暗文。
278	857	SD201	Q-56 SD1 第3層	土師器	杯	13.1	3.4		外面未調整、内面暗文	黒茶色	精良	良好	口縁部1/2残	口縁部放射暗文。
279	854	SD201	X-49 溝1 第3層	土師器	杯	12.6	3.6		外面未調整、内面暗文	淡茶色	2㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/2残	口縁部放射暗文、底部ラセン暗文。
280	849	SD201	X-49 溝1	土師器	杯	12.9	3.2		外面未調整、内面暗文	淡茶色	1㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/4残	口縁部放射暗文。
281	788	SD201	X-50 溝1 第3層	土師器	杯	13.0	3.8		外面未調整、内面暗文	明赤茶色～淡黄茶色	精良	良好	口縁部1/3残	口縁部放射暗文。
282	769	SD201	V-51 溝1 第2層	土師器	杯	12.4	3.2		外面未調整、内面暗文	淡茶色	精良	良好	口縁部1/2残	口縁部放射暗文、底部ラセン暗文。
283	778	SD201	Y-48 溝1 第3層	土師器	杯	13.0	3.1		外面未調整、内面暗文	明赤茶色	精良	良好	口縁部1/8残	口縁部放射暗文、底部ラセン暗文。
284	765	SD201	X-50 溝1 第3層	土師器	杯	12.4	3.2		外面未調整、内面暗文	明赤茶色	2㎜の砂粒若干含	良好	完形	口縁部放射暗文、底部弧状暗文。
285	764	SD201	W-49 溝1 第2層	土師器	Ⅲ	26.4	6.1		外面未調整、内面暗文	淡茶色	1㎜の砂粒若干含	良好	ほぼ完形	口縁部放射暗文、底部ラセン暗文。摩滅のため暗文不明確。
286	755	SD201	X-50 溝1 第3層	土師器	Ⅲ	26.7	2.2		外面：底部ヘラケズリ、口縁部ヘラミガキ 内面：暗文	淡赤茶色	精良	良好	口縁部1/10残	口縁部放射暗文。
287	747	SD201	X-50 溝1 第3層	土師器	Ⅲ	24.9	3.7		外面：底部ヘラケズリ、口縁部ヘラミガキ 内面：暗文	明赤色	精良	良好	口縁部1/4残	口縁部放射暗文、底部ラセン暗文。摩滅のため暗文不明確。
288	748	SD201	W-50 溝1	土師器	Ⅲ	23.8	2.8		外面：底部ヘラケズリ、口縁部ヘラミガキ 内面：暗文	淡赤茶色	精良	良好	口縁部1/8残	口縁部放射暗文、底部ラセン暗文。
289	746	SD201	X-50 溝1 第3層	土師器	Ⅲ	22.5	3.2		外面：底部ヘラケズリ、口縁部ヘラミガキ 内面：暗文	明赤茶色	1㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/3残	口縁部放射暗文、底部ラセン暗文。
290	754	SD201	W-50 溝1	土師器	Ⅲ	21.8	2.3		外面未調整、内面暗文	淡茶色	精良	良好	口縁部1/6残	口縁部放射暗文。
291	760	SD201	W-50 溝1 第3層	土師器	Ⅲ	19.3	3.0		外面未調整、内面ナデ	淡茶色	5㎜の小石含	不良	ほぼ完形	底部外面に記号「×」。底部の一部黒斑。
292	753	SD201	Z-47 溝1 第3層	土師器	Ⅲ	17.6	1.8		外面未調整、内面暗文	明赤茶色	精良	良好	口縁部1/5残	口縁部放射暗文。
293	757	SD201	X-49 溝1 第3層	土師器	Ⅲ	20.0	2.1		外面未調整、内面暗文	淡赤茶色	精良	良好	口縁部1/10残	口縁部放射暗文。
294	762	SD201	T-53 溝1	土師器	Ⅲ	18.0	1.8		底部外面ヘラケズリ、内面暗文	白茶色	精良	良好	口縁部1/3残	底部ラセン暗文。
295	744	SD201	T-53 溝1	土師器	Ⅲ	21.2	2.4		外面未調整か簡単なナデ、内面暗文	暗茶色	2㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/2残	口縁部放射暗文。摩滅が激しく調整不明確。
296	761	SD201	Y-48 溝1 第3層	土師器	Ⅲ	19.8	2.6		外面未調整、内面ナデ	淡茶色	雲母片含	やや不良	ほぼ完形	底部外面に板圧痕。
297	745	SD201	R-55 SD1 第3層	土師器	Ⅲ	20.8	1.9		外面未調整、内面暗文	暗灰茶色	4㎜の砂粒多含	良好	1/2残	口縁部放射暗文、底部ラセン暗文。
298	749	SD201	X-50 溝1 第3層	土師器	Ⅲ	20.9	3.0		底部外面ヘラケズリ、内面ナデ	白茶色	3㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/4残	摩滅のため暗文不明。
299	763	SD201	R-54 溝1	土師器	Ⅲ	22.4	2.7		底部外面ヘラケズリ、内面ナデ	淡茶色～明赤茶色	5㎜の砂粒若干含	やや不良	口縁部1/3残	摩滅のため暗文不明。
300	759	SD201	あ-46 溝1 第3層	土師器	Ⅲ	22.8	1.9		底部外面ヘラケズリ、内面ナデ	淡黄茶色	3㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/8残	
301	758	SD201	W-50 溝1 第3層	土師器	Ⅲ	16.9	2.4		外面未調整、内面ハケメ	白茶色	精良	不良	口縁部1/6残	
302	823	SD201	V-50 溝1 第3層	土師器	椀	11.0	3.2		外面未調整、内面ナデ	茶色	1㎜の砂粒若干含	良好	口縁部2/3残	
303	801	SD201	W-50 溝1 第3層	土師器	椀	10.6	3.1		外面未調整、内面ナデ	暗茶色	1㎜の砂粒・雲母多含	良好	完形	体部内面に記号「×」。
304	803	SD201	W-50 溝1 第3層	土師器	椀	11.2	3.3		外面未調整、内面ナデ	暗茶色	2㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/4欠損	体部内面に漆付着。
305	794	SD201	R-55 SD1 第3層	土師器	椀	9.0	3.2		外面未調整（一部ヘラケズリ）、内面ナデ	暗茶色	1㎜の砂粒含	良	完形	口縁部に煤付着。体部内面に工具痕。
306	816	SD201	Z-47 溝1	土師器	椀	10.9	3.3		外面未調整、内面ナデ	淡茶色	2㎜の砂粒・雲母若干含	良好	口縁部1/4欠損	体部内面に工具痕。底部に黒斑。

第２－６表　遺物観察表

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種	器形	法量（cm）			調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考
						口径	器高	その他						
307	835	SD201	P-57 SD3 第3層	土師器	椀	11.8	3.6		外面未調整、内面ナデ	黒茶色	雲母微粒子含	良好	口縁部1/4残	
308	815	SD201	X-49 溝1 第3層	土師器	椀	11.5	3.6		外面未調整、内面ナデ	暗茶色	3㎜の砂粒・雲母含	良好	口縁部1/5残	底部外面に木葉痕。
309	819	SD201	X-50 溝1 第3層	土師器	椀	9.4	3.8		外面未調整、内面ナデ	淡茶色	雲母片含	良好	口縁部1/4欠損	体部内面に工具痕。
310	797	SD201	W-50 溝1 第3層	土師器	椀	11.2	4.0		外面未調整、内面ナデ	淡茶色	3㎜の砂粒・雲母多含	良好	口縁部1/2残	体部内面に記号「×」。
311	837	SD201	X-50 溝1 第3層	土師器	椀	10.9	3.0		外面未調整（一部ハケメ）、内面ナデ	茶色	3㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/4残	
312	824	SD201	X-50 溝1 第3層	土師器	椀	11.8	3.5		外面未調整、内面ナデ	淡赤茶色	4㎜の砂粒多含	良好	口縁部若干欠損	底部に黒斑。
313	840	SD201	X-50 溝1 第3層	土師器	椀	10.8	3.5		外面ハケメ、内面ナデ	赤茶色	2㎜の砂粒含	良好	口縁部1/3残	内面に工具痕。内面に炭化物付着。
314	805	SD201	X-49 溝1 第3層	土師器	椀	10.3	3.6		外面未調整、内面ナデ	外：淡茶色 内：淡赤茶色	2㎜の砂粒若干含	良好	完形	内面に板状工具痕。
315	796	SD201	W-50 溝1 第3層	土師器	椀	11.0	4.0		外面未調整、内面ナデ	淡赤茶色	3㎜の砂粒若干含	やや不良	口縁部1/2残	内面に工具痕。口縁部に黒斑。
316	809	SD201	Z-47 溝1 第3層	土師器	椀	11.7	4.1		外面未調整、内面ナデ	淡茶色	3㎜の砂粒多含	良好	完形	内面に板状工具痕。摩滅が激しく調整不明確。
317	795	SD201	X-49 溝1 第3層	土師器	椀	11.3	4.2		外面未調整、内面ナデ	淡茶色	3㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/4残	内面に工具痕。
318	810	SD201	Q-57 SD1 第3層	土師器	椀	10.1	3.5		外面未調整、内面ナデ	暗茶色	4㎜の砂粒含	良好	口縁部1/2残	内面に板状工具痕。
319	813	SD201	X-50 溝1 第3層	土師器	椀	10.4	3.0		外面未調整、内面ナデ	淡茶色	1㎜の砂粒含	良好	口縁部1/4残	体部内面に記号「×」。
320	836	SD201	S-55 SD1 第3層	土師器	椀	10.9	3.0		外面未調整、内面ナデ	淡黄茶色	3㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/3残	体部外面に記号「×」。
321	807	SD201	W-50 溝1 第3層	土師器	椀	11.2	3.4		外面未調整、内面ナデ	茶色（一部赤茶色）	2㎜の砂粒含	良好	口縁部1/4欠損	
322	820	SD201	V-49 溝1	土師器	椀	10.7	3.4		外面未調整、内面ナデ	淡茶色	1㎜の砂粒・雲母若干含	良好	完形	内面に工具痕。
323	833	SD201	X-49 溝1 第3層	土師器	椀	11.3	3.9		外面未調整、内面ナデ	淡赤茶色	3㎜の砂粒若干含	良好	口縁部若干欠損	
324	804	SD201	W-50 溝1	土師器	椀	10.5	3.2		外面未調整、内面ナデ	外：淡茶色 内：茶色	2㎜の砂粒含	良好	口縁部若干欠損	内面に鋭利な工具による放射状沈線。
325	800	SD201	Z-47 溝1 第3層	土師器	椀	10.8	3.2		外面未調整、内面ナデ	淡茶色	4㎜の砂粒若干含	良	口縁部1/2残	内面に漆付着。
326	817	SD201	W-50 溝1 第3層	土師器	椀	11.3	3.7		外面未調整、内面ナデ	淡茶色	1㎜の砂粒・雲母若干含	良好	口縁部1/2残	内面に工具痕。底部に黒斑。
327	830	SD201	W-50 溝1 第3層	土師器	椀	10.8	3.6		外面未調整、内面ナデ	茶色	1㎜の砂粒・雲母含	良好	口縁部1/4残	
328	829	SD201	X-49 溝1 第3層	土師器	椀	10.8	3.7		外面未調整、内面ナデ	淡茶色	2㎜の砂粒含	良好	口縁部1/4欠損	底部に煤付着。
329	799	SD201	X-49 溝1 第3層	土師器	椀	11.5	3.5		外面未調整、内面ナデ	外：淡茶色 内：赤茶色	2㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/4欠損	底部外面に藁圧痕。
330	825	SD201	O-57 溝1	土師器	椀	12.2	3.5		外面未調整、内面ナデ	暗茶色	2㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/4欠損	内面に工具痕。
331	802	SD201	X-49 溝1 第3層	土師器	椀	10.4	3.8		外面未調整、内面ナデ	淡茶色	2㎜の砂粒若干含	良好	完形	内面に板状工具痕。
332	818	SD201	X-49 溝1 第3層	土師器	椀	13.6	5.4		外面ヘラケズリ、内面ナデ	茶色	4㎜の砂粒・雲母含	良好	ほぼ完形	内面に工具痕。体部に黒斑。
333	790	SD201	X-49 溝1 第3層	土師器	椀	15.6	5.2		外面ヘラケズリ、内面暗文	白茶色	2㎜の砂粒含	良好	口縁部1/4残	摩滅が激しく調整不明確。
334	838	SD201	P-57 SD3 第3層	土師器	椀	12.0	3.1		外面未調整、内面ナデ	暗茶色	2㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/4残	一部に煤付着。
335	777	SD201	W-50 溝1 第3層	土師器	椀	10.8	3.7		外面底部ヘラケズリ、体部ヘラミガキ、内面暗文	淡黄茶色	3㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/6残	
336	828	SD201	X-49 溝1 第3層	土師器	椀	12.2	4.9		外面未調整、内面ナデ	淡茶色	2㎜の砂粒若干含	やや不良	口縁部3/4残	内面に工具痕。
337	812	SD201	O-57 溝1	土師器	椀	16.1	—		外面未調整、内面ナデ	暗茶色	1㎜の砂粒・雲母多含	良好	口縁部1/4残	内面に板状工具痕。一部に煤付着。
338	831	SD201	W-50 溝1 第3層	土師器	椀	14.0	3.9		外面未調整、内面ナデ	外：淡茶色 内：明赤茶色	3㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/2残	内面に板状工具痕。内面に赤色顔料付着か。
339	798	SD201	X-49 溝1 第3層	土師器	椀	10.9	3.7		外面未調整、内面ナデ	茶色	2㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/5欠損	
340	839	SD201	ぁ-49 溝1 第3層	土師器	椀	13.9	3.4		外面未調整、内面ナデ	淡茶色	3㎜の砂粒・雲母含	良好	口縁部1/4残	
341	827	SD201	X-49 溝1 第3層	土師器	椀	11.5	3.7		外面未調整、内面ナデ	淡茶色	2㎜の砂粒含	良好	口縁部2/3残	内面に工具痕。
342	781	SD201	X-50 溝1 第3層	土師器	椀	15.7	5.1		外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ	淡黄茶色	3㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/8残	
343	811	SD201	Y-48 溝 第3層	土師器	椀	10.8	3.2		外面未調整、内面ナデ	明赤茶色	1～2㎜の砂粒含	良好	口縁部1/4残	内面に板状工具痕。
344	750	SD201	W-49 溝1 第1層	土師器	椀	14.5	4.0		—	暗茶色	3㎜の砂粒含	やや不良	口縁部1/8残	内面に黒斑。摩滅のため調整不明。
345	808	SD201	溝1 第3層	土師器	椀	11.6	3.5		外面未調整、内面ナデ	暗茶色	2㎜の砂粒・雲母含	良好	口縁部1/2残	内面に暗文状の痕跡あり。
346	793	SD201	P-56 SD2 第3層	土師器	椀	13.5	4.3		外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面暗文	淡茶色	3㎜の砂粒多含	良好	完形	
347	847	SD201	W-50 溝1 第3層	土師器	椀	11.3	3.4		外面未調整、内面ナデ	淡茶色	1㎜の砂粒含	良好	口縁部1/3残	内面に板状工具痕。
348	851	SD201	W-50 溝1 第3層	土師器	椀	16.0	4.2		外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ	赤茶色	3㎜の砂粒含	良好	口縁部1/4残	
349	814	SD201	W-50 溝1 第3層	土師器	椀	12.4	4.2		外面ヘラケズリ、内面ナデ	白茶色	4㎜の砂粒含	良好	口縁部1/4残	内面に工具痕。
350	806	SD201	Y-48 溝1 第3層	土師器	椀	11.6	3.3		外面未調整、内面ナデ	茶色	3㎜の砂粒多含	良好	ほぼ完形	
351	834	SD201	R-54 溝1	土師器	椀	11.9	3.2		外面未調整、内面一部暗文	暗茶色	精良	良好	口縁部1/4残	底部にラセン暗文。
352	841	SD201	R-55 SD1 第3層	土師器	椀	15.9	3.3		外面未調整、内面ハケメ	黒茶色	2㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/6残	
353	821	SD201	O-57 溝1	土師器	椀	13.2	3.8		外面ヘラケズリ、内面ナデ	茶色	3㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/2残	内面に工具痕。
354	822	SD201	X-49 溝1 第3層	土師器	椀	10.9	3.2		外面未調整、内面ナデ	淡茶色	2㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/2残	
355	826	SD201	X-49 溝1 第3層	土師器	椀	12.7	3.9		外面未調整、内面ナデ	白茶色	2㎜の砂粒・雲母多含	やや不良	口縁部2/3残	
356	913	SD201	V-49 溝1 第3層	土師器	高杯	16.4	10.2	脚径10.2	杯部外面未調整、内面暗文、脚部外面ナデ	淡赤茶色	3㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/2残	口縁部放射暗文、底部ラセン暗文。脚部内面絞り痕。
357	756	SD201	X-49 溝1 第3層	土師器	高杯	17.0	—		杯部外面未調整、内面暗文	淡赤茶色	精良	良好	口縁部1/5残、脚部欠損	口縁部放射暗文。
358	752	SD201	ぁ-46 溝1	土師器	高杯	19.0	—		杯部外面未調整、内面暗文	明赤茶色	精良	良好	口縁部1/6残、脚部欠損	口縁部放射暗文、底部ラセン暗文。

第２－７表　遺物観察表

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種	器形	法量（cm）			調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考
						口径	器高	その他						
359	751	SD201	S-55 SD1 第3層	土師器	高杯	22.9	—		杯部内外面ヘラミガキ	外：淡黄赤色 内：明赤茶色	1㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/4残、脚部欠損	
360	914	SD201	W-50 溝1 第3層	土師器	高杯	17.0	—		杯部外面未調整、内面暗文	明赤茶色	2㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/4残、脚部欠損	口縁部放射暗文、底部ラセン暗文。脚部内面絞り痕。
361	915	SD201	X-50 溝1 第3層	土師器	高杯	16.6	—		杯部外面未調整、内面暗文	赤茶色	2㎜の砂粒含	良好	口縁部1/2残、脚部欠損	口縁部放射暗文、底部ラセン暗文。
362	927	SD201	X-49 溝1	土師器	高杯	—	—	脚径10.0	脚部外面ナデ、内面未調整	赤茶色	精良	良好	口縁部欠損、脚部1/4残	内外面絞り痕。
363	929	SD201	ぁ-46 溝1	土師器	高杯	—	—	脚径8.9	脚部外面ナデ、内面未調整	赤茶色	3㎜の砂粒若干含	良好	筒部完存、裾部1/8残	脚部外面弱い面取り。内面絞り痕。底部ラセン暗文。
364	916	SD201	X-49 溝1 第3層	土師器	高杯	—	—	脚径10.0	脚部外面ナデ、内面未調整	淡茶色～淡赤茶色	精良	良好	脚部1/8残	外面面取り風、内面絞り痕。
365	924	SD201	V-50 溝1 第3層	土師器	高杯	—	—	脚径9.8	脚部外面ナデ、内面未調整	淡赤茶色	精良	良好	脚部1/4残	脚部外面弱い面取り。内面絞り痕。
366	928	SD201	Y-48 溝1 第3層	土師器	高杯	—	—	脚径11.2	脚部外面ヘラケズリ、内面ナデ	淡茶色	2㎜の砂粒多含	良好	脚部若干欠損	脚部内面工具痕。
367	925	SD201	R-55 SD1 第3層	土師器	高杯	—	—	脚径9.7	—	淡赤茶色	1㎜の砂粒多含	良好	脚部1/4残	摩滅のため調整不明。脚部内面絞り痕。
368	930	SD201	X-49 溝1 第3層	土師器	高杯	—	—		脚部外面ヘラケズリ、内面ナデ	明茶色	1㎜の砂粒若干含	良好	筒部完存	脚部外面弱い面取り。
369	885	SD201	Y-49 溝1 第3層	土師器	甕	11.7	—		ハケメ	外：暗灰茶色 内：暗茶色	2㎜の微砂・雲母若干含	良好	口縁部1/4残	
370	906	SD201	SD1 第3層	土師器	甕	12.4	—		外面不明、内面ハケメ	暗茶色～黒茶色	3㎜の砂粒含	良好	口縁部1/4残	外面摩滅が激しく調整不明。
371	858	SD201	X-50 溝1 第3層	土師器	甕	13.4	15.2		外面ハケメ、内面ヘラケズリ	外：暗茶色 内：淡茶色	1㎜の微砂含	良好	口縁部1/2残	
372	880	SD201	ぁ-46 溝1 第2層	土師器	甕	17.8	—		外面不明、内面ハケメ	茶色	2㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/8残	内面炭化物付着。外面摩滅が激しく調整不明。
373	865	SD201	W-50 溝1 第3層	土師器	甕	14.0	—		外面ハケメ、内面ナデ	暗茶色	1㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/8残	内面炭化物付着。
374	912	SD201	ぁ-46 溝1 第3層	土師器	甕	15.0	—		外面上半ハケメ、下半ヘラケズリ、内面ハケメ	暗茶色	3㎜の砂粒含	良好	口縁部1/4残	
375	903	SD201	P-56 SD2 第3層	土師器	甕	14.2	13.7		外面上半ハケメ、下半ヘラケズリ、内面上半ハケメ、下半ナデ	淡茶色	3㎜の砂粒含	良好	口縁部小片、肩部1/4残	体部に沈線1条。
376	882	SD201	Z-47 溝1 第3層	土師器	甕	16.8	—		ハケメ	外：黒茶色 内：赤茶色	2㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/6残	口縁部内面にヘラによる放射状沈線。
377	890	SD201	X-50 溝1 第3層	土師器	甕	16.7	—		ハケメ	暗茶色	2㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/4残	
378	891	SD201	ぁ-46 溝1 第2層	土師器	甕	14.7	—		ハケメ	暗茶色	2㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/4残	内面煤付着。
379	868	SD201	N-58 溝1	土師器	甕	13.1	—		外面ナデ、内面不明	外：黒茶色 内：暗茶色	4㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/4残	外面煤付着。内面摩滅が激しく調整不明。
380	866	SD201	P-56 SD2 第2層	土師器	甕	9.8	—		外面ハケメ、内面ナデ	暗茶色	1㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/4残	
381	863	SD201	ぁ-46 溝1 第3層	土師器	甕	10.9	—		ナデ	暗茶色	1㎜の砂粒含	良好	口縁部1/4残	
382	921	SD201	X-49 溝1	土師器	甕	9.7	8.8		外面ハケメ、内面ナデ	暗赤茶色	2㎜の砂粒含	良好	口縁部1/4残	内面炭化物、外面煤付着。
383	902	SD201	Y-49 溝1 第3層	土師器	甕	10.9	9.8		外面上半ハケメ、下半ヘラケズリ、内面ナデ	暗赤茶色	7㎜の砂粒含	良好	口縁部1/2残	体部に沈線1条。
384	884	SD201	P-50 SD2 第3層	土師器	甕	12.0	—		ハケメ	黄茶色	2㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/4残	体部に沈線1条。
385	873	SD201	V-50 溝1 第3層	土師器	甕	13.7	—		ハケメ	外：淡茶色 内：淡赤茶色	1㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/4残	
386	864	SD201	X-49 溝1	土師器	甕	14.8	—		外面ハケメ、内面ナデ	黒茶色	3㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/4残	内外面炭化物付着。
387	896	SD201	X-50 溝1	土師器	甕	15.8	—		ハケメ	暗茶色	2㎜の砂粒含	良好	口縁部1/4残	口縁端部外面に沈線。外面一部に煤付着。
388	861	SD201	Y-49 溝1 第3層	土師器	甕	14.0	—		ハケメ、内面一部ヘラケズリ	白茶色	1㎜の微砂若干含	良好	口縁部1/6残	
389	871	SD201	Y-49 溝1	土師器	甕	14.0	—		ハケメ	白茶色	1㎜の砂粒含	良好	口縁部1/8残	
390	897	SD201	X-50 溝1	土師器	甕	9.8	—		ナデ、一部ヘラケズリ	暗茶色～黒茶色	1㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/4残	口縁端部外面に沈線。外面一部に煤付着。
391	899	SD201	X-49 溝1 第3層	土師器	甕	12.9	—		外面未調整、内面ハケメ	外：淡茶色 内：暗茶色	2㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/6残	口縁端部外面に沈線。内面に煤付着。
392	883	SD201	Z-47 溝1 第3層	土師器	甕	12.7	—		ハケメ	黒茶色	1㎜の微砂若干含	良	口縁部1/4欠損	摩滅が激しく調整不明確。
393	869	SD201	Y-48 溝1 第3層	土師器	甕	13.3	—		ハケメ	暗茶色	1㎜の微砂含	良好	口縁部1/4残	摩滅が激しく調整不明確。
394	876	SD201	P-57 SD3 第3層	土師器	甕	12.1	—		外面上半ハケメ、下半ヘラケズリ、内面ナデ	暗茶色	1㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/4残	内面炭化物付着。
395	898	SD201	X-49 溝1 №8	土師器	甕	9.8	—		外面ハケメ、内面ナデ	黒茶色	3㎜の砂粒含	良好	口縁部1/4残	内面に板状工具痕。
396	909	SD201	W-50 溝1 第3層	土師器	甕	16.7	—		外面ナデ、一部浅いハケメ、内面ナデ	淡赤茶色～暗茶色	1㎜の微砂若干含	良好	口縁部1/4残	
397	877	SD201	Z-47 溝1 第3層	土師器	甕	14.7	—		外面ハケメ、内面ナデ	外：暗茶色 内：淡茶色	雲母片若干含	良好	口縁部1/6残	
398	911	SD201	X-50 溝1 第3層	土師器	甕	16.6	—		外面ナデ、内面上半ナデ、下半ヘラケズリ	暗茶色	1㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/4残	
399	872	SD201	Z-47 溝1 第3層	土師器	甕	18.6	—		ハケメ	茶色	3㎜の砂粒含	良好	口縁部1/4残	摩滅が激しく調整不明瞭。
400	889	SD201	W-50 溝1 第3層	土師器	甕	27.5	—		外面ハケメ、内面ナデ	暗茶色	2㎜の砂粒含	良好	口縁部1/4残	
401	888	SD201	ぁ-46 溝1 第3層	土師器	甕	27.5	—		外面ハケメ、内面ナデ	暗茶色	2㎜の砂粒含	良好	口縁部1/4残	口縁端部外面に沈線。
402	875	SD201	ぁ-47 溝1 第3層	土師器	甕	25.6	—		外面ハケメ、内面ナデ、一部ヘラケズリ	淡茶色	2㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/8残	
403	870	SD201	Y-48 溝1 第3層	土師器	甕	21.4	—		外面ハケメ、内面ナデ	暗茶色	1㎜の微砂・雲母多含	良好	口縁部1/4残	
404	881	SD201	ぁ-46 溝1 第2層	土師器	甕	24.0	—		外面ハケメ、内面不明	淡茶色	3㎜の微砂若干含	良好	口縁部1/4残	口縁端部外面に沈線。内面摩滅のため調整不明。
405	862	SD201	X-49 溝1 第3層	土師器	甕	24.5	—		ハケメ	淡茶色	2㎜の砂粒・雲母多含	良好	口縁部1/6残	
406	907	SD201	O-58 溝1	土師器	甕	30.7	—		ハケメ	淡茶色	1㎜の微砂・雲母若干含	良好	口縁部1/4残	口縁端部に沈線1条。
407	910	SD201	W-49 溝1 第3層	土師器	甕	21.7	—		ハケメ	淡茶色	2㎜の砂粒・雲母含	良好	口縁部1/6残	外面煤付着。
408	874	SD201	V-52 溝1 第3層	土師器	甕	40.0	—		外面ハケメ、内面ナデ	淡茶色	2㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/8残	外面ハケメ不鮮明。
409	905	SD201	O-57 SD1 第3層	土師器	甕	20.0	—		外面ハケメ、内面ナデ	暗茶色	2㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/4残	外面煤付着。外面摩滅が激しく調整不明確。

第２－８表　遺物観察表

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種	器形	法量（cm）			調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考
						口径	器高	その他						
410	900	SD201	ぁ-46 溝1 第2層	土師器	甕	18.1	29.6		外面上半ハケメ、下半ヘラケズリ、内面ナデ	白茶色	3㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/6 残	摩滅のため調整不明。
411	904	SD201	V-51 溝1 第3層	土師器	甕	25.7	—		外面ハケメ、内面ナデ	暗茶色	3㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/4 残	口縁端部に沈線 1 条。
412	878	SD201	Z-47 溝1 第3層	土師器	甕	31.8	—		ハケメ	白茶色	2㎜の砂粒含	良好	頸部 1/4 残	口縁部外面に沈線 1 条。
413	860	SD201	V-50 溝1 第3層	土師器	甕	17.7	—		ナデ	茶色	2㎜の砂粒多含	良好	口縁部 1/4 残	外面に煤、底部内面に炭化物付着。
414	901	SD201	Z-47 溝1 第3層	土師器	甕	23.4	28.4		外面ハケメ後ヘラケズリ、内面ハケメ	淡茶色	3㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/4 残	内面摩滅が激しく調整不明確。
415	895	SD201	X-49 溝1 第3層	土師器	鉢	32.0	—		—	黄茶色	3㎜の砂粒多含	良好	口縁部 1/8 残	摩滅が激しく調整不明。
416	867	SD201	U-53 溝1 第2層	土師器	鉢	25.4	—		外面ハケメ、一部ヘラケズリ、内面ハケメ	暗茶色	5㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/4 残	摩滅が激しく調整不明確。
417	886	SD201	X-49 溝1 第3層	土師器	鉢	11.7	—		外面未調整、一部ヘラケズリ、内面ナデ	外：暗茶色 内：淡茶色	1㎜の砂粒若干含	良好	口縁部 1/6 残	口縁部内面に炭化物付着。摩滅が激しく調整不明確。
418	893	SD201	W-50 溝1	土師器	鉢	25.0	—		外面上半ハケメ、下半ヘラケズリ、内面ハケメ	茶色	3㎜の砂粒多含	良好	口縁部 1/4 残	
419	892	SD201	X-49 溝1 第3層	土師器	鉢	17.8	—		外面ヘラケズリ、内面ハケメ	赤茶色	精良	良好	口縁部 1/4 残	内外面に鋭利な工具痕。
420	859	SD201	Z-47 溝1 第3層	土師器	鉢	17.8	13.4		外面上半ハケメ、下半ヘラケズリ、内面ハケメ	暗茶色	3㎜の砂粒多含	良好	底部若干欠損	
421	894	SD201	X-49 溝1 第3層	土師器	鉢	18.0	—		外面上半ハケメ、下半ヘラケズリ、内面ハケメ	外：淡茶色 内：淡赤茶色	精良	良好	口縁部 1/3 残	
422	887	SD201	ぁ-47 溝1 第3層	土師器	壺	18.0	—		—	茶色	2㎜の砂粒多含	良好	口縁部 1/4 残	摩滅が激しく調整不明。
423	879	SD201	ぁ-46 溝1 第3層	土師器	壺	16.4	—		外面ヘラミガキ？、内面不明	茶色	2㎜の砂粒多含	良好	口縁部 1/4 残	摩滅が激しく調整不明。
424	923	SD201	M-58 溝1	土師器	壺	—	—		—	淡茶色	2㎜の砂粒若干含	良好	頸部 1/4 残	摩滅が激しく調整不明。
425	918	SD201	ぁ-47 溝1 第2層	土師器	壺	—	—		未調整？	淡黄色	3㎜の砂粒多含	良好	体部完存	体部に注口。摩滅が激しく調整不明。
426	919	SD201	Z-47 溝1 第3層	土師器	鉢	4.9	4.0		外面未調整、内面ナデ	淡茶色	1㎜の砂粒若干含	良好	完形	ミニチュア。底部に黒斑。
427	920	SD201	ぁ-46 溝1 第3層	土師器	鉢	7.4	3.9		外面未調整、内面ナデ	暗茶色～黒茶色	精良	不良	完形	ミニチュア。全体が黒斑状。
428	922	SD201	O-57 SD1	土製品	土錘	2.0	5.8	重 24g	未調整	淡茶色	6㎜の砂粒多含	良	完形	孔径 5 ～ 6mm。一部黒斑。
429	668	SD201	X-50 溝1	須恵器	蓋	12.3	4.0		天井部外面ヘラケズリ、他はロクロナデ	暗緑灰色	3㎜の砂粒多含	良好	口縁部 1/6 残	天井部外面に記号「×」。
430	586	SD201	X-46 溝1 第2層	須恵器	蓋	8.5	3.4		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗紫灰色	4㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/2 残	天井部外面に記号「×」。内面に自然釉がかかる。
431	564	SD201	W-50 溝1 第2層	須恵器	蓋	10.6	3.6		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	外：暗灰色 内：黄灰色	2㎜の砂粒多含	良好	完形	
432	545	SD201	V-53 溝1 第3層	須恵器	蓋	9.7	3.7		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	淡茶色	微砂含	良好	完形	内面に自然釉がかかる。
433	544	SD201	W-50 溝1 第3層	須恵器	蓋	10.2	3.3		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	灰色	3㎜の砂粒多含	良好	口縁部若干欠損	
434	523	SD201	X-50 溝1 第3層	須恵器	蓋	9.9	2.8		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	灰色	3㎜の砂粒若干含	良好	口縁部 1/3 欠損	全面に自然釉がかかる。
435	535	SD201	W-50 溝1 第3層	須恵器	蓋	9.4	2.8		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	3㎜の砂粒多含	良好	完形	外面 1/2 に自然釉がかかる。
436	559	SD201	W-50 溝1 第3層	須恵器	蓋	10.4	2.8		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	灰色	5㎜の小石若干含	良好	完形	外面 3/4 に自然釉がかかる。
437	528	SD201	ぁ-46 溝1 第2層	須恵器	蓋	10.5	—		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	灰色	6㎜の小石含	良好	口縁部若干欠損	外面 1/2 に自然釉がかかる。
438	529	SD201	V-52 溝1 第3層	須恵器	蓋	11.0	—		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	3㎜の砂粒若干含	良好	つまみ欠損	
439	519	SD201	X-49 溝1 第3層	須恵器	蓋	10.5	—		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	2㎜の砂粒若干含	良好	口縁部 1/2 残	外面に自然釉がかかる。焼き膨れ多数。
440	558	SD201	X-49 溝1 第3層	須恵器	蓋	9.6	2.8		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	紫灰色	4㎜の砂粒含	良好	完形	外面に自然釉がかかる。
441	548	SD201	Q-56 SD1 第3層	須恵器	蓋	9.9	2.7		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	3㎜の砂粒多含	良好	口縁部 1/2 残	外面に自然釉が厚くかかる。
442	517	SD201	W-50 溝1 第2層	須恵器	蓋	9.9	2.9		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	紫灰色	3㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/2 残	全面に自然釉がかかる。
443	539	SD201	Y-49 溝1 第3層	須恵器	蓋	10.2	2.7		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	淡紫灰色	精良	良好	口縁部 1/2 残	外面に自然釉が厚くかかり、小石が付着する。
444	555	SD201	R-55 SD1 第3層	須恵器	蓋	10.8	2.6		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	6㎜の小石多含	良好	完形	外面に自然釉が厚くかかる。
445	522	SD201	W-50 溝1 第2層	須恵器	蓋	10.1	—		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗紫灰色	3㎜の砂粒含	良好	つまみ欠損	外面に自然釉がかかる。
446	531	SD201	X-49 溝1 第3層	須恵器	蓋	10.5	2.4		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	灰色	微砂含	良好	口縁部 1/4 残	
447	563	SD201	W-50 溝1 第3層	須恵器	蓋	11.2	3.1		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	外：淡青灰色 内：青灰色	1㎜の砂粒若干含	良好	口縁部若干欠損	
448	540	SD201	M-56 溝1	須恵器	蓋	10.0	2.5		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	淡紫灰色	精良	良好	口縁部 1/2 残	外面に自然釉がかかり、窯壁の一部が付着する。
449	549	SD201	X-50 溝1 第3層	須恵器	蓋	10.9	2.9		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	淡灰色	6㎜の小石含	良好	完形	外面 2/3 に自然釉が厚くかかり、別個体の一部が付着する。
450	527	SD201	W-50 溝1 第3層	須恵器	蓋	10.8	2.6		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	明灰色	精良	良好	口縁部 1/2 残	外面 1/2 に自然釉がかかる。
451	514	SD201	R-55 SD1 第3層	須恵器	蓋	11.9	—		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	濃灰色	精良	良好	口縁部若干欠損	外面に自然釉がかかる。
452	562	SD201	X-49 溝1 №10	須恵器	蓋	9.5	—		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	紫灰色	精良	良好	つまみ欠損	天井部外面に記号「△」。外面に自然釉が厚くかかる。
453	546	SD201	W-50 溝1 第3層	須恵器	蓋	10.9	3.2		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	4㎜の小石含	良好	完形	全面に自然釉がかかる。
454	547	SD201	T-53 溝1	須恵器	蓋	9.8	2.7		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	灰色	砂粒含	良好	口縁部若干欠損	外面 2/3 に自然釉が厚くかかり、別個体の一部が付着する。
455	525	SD201	Z-47 溝1 第3層	須恵器	蓋	10.6	3.0		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	灰色	3㎜の砂粒多含	良好	口縁部 1/2 残	外面に自然釉がかかる。
456	556	SD201	V-53 溝1 第3層	須恵器	蓋	11.0	—		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	4㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/3 欠損	内面に自然釉がかかる。
457	538	SD201	W-50 溝1 第3層	須恵器	蓋	9.7	2.7		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗青灰色	精良	良好	口縁部 1/4 欠損	
458	543	SD201	ぃ-46 溝1 第1層	須恵器	蓋	9.6	2.7		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗青灰色	3㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/4 欠損	
459	557	SD201	V-51 溝1 第3層	須恵器	蓋	10.6	3.0		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	淡灰色	6㎜の砂粒含	良好	完形	外面に自然釉がかかる。
460	516	SD201	X-49 溝1 第3層	須恵器	蓋	9.6	3.3		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	淡灰色	3㎜の砂粒含	良好	完形	内面に自然釉が若干かかる。
461	534	SD201	X-50 溝1 第3層	須恵器	蓋	10.1	2.7		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	3㎜の砂粒含	良好	完形	口縁端部外面に自然釉がかかる。

第２－９表　遺物観察表

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種	器形	法量（cm）			調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考
						口径	器高	その他						
462	553	SD201	X-50 溝1 第3層	須恵器	蓋	11.3	2.3		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	灰色	4㎜の小石含	良好	完形	外面に自然釉が若干かかる。
463	532	SD201	X-49 溝1 第3層	須恵器	蓋	9.2	2.4		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	1㎜の微砂多含	良好	口縁部1/3残	外面に自然釉がかかる。
464	526	SD201	X-49 溝1 第3層	須恵器	蓋	10.3	2.7		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	砂粒含	良好	口縁部若干欠損	外面に自然釉が厚くかかり、小石が付着する。
465	550	SD201	W-50 溝1 第3層	須恵器	蓋	10.9	2.6		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	紫灰色	5㎜の小石含	良好	完形	口縁部に自然釉がかかる。
466	524	SD201	ぁ-46 溝1 第2層	須恵器	蓋	11.6	2.0		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	紫灰色	1㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/3残	外面に自然釉がかかる。
467	554	SD201	X-50 溝1 第3層	須恵器	蓋	11.3	2.7		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	灰色	3㎜の小石含	良好	完形	外面1/2に自然釉がかかる。
468	542	SD201	W-50 溝1 第3層	須恵器	蓋	11.0	3.0		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	淡紫灰色	1㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/3欠損	
469	530	SD201	X-50 溝1 第3層	須恵器	蓋	12.3	3.1		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	3㎜の砂粒含	良好	口縁部若干欠損	
470	515	SD201	X-49 溝1 第3層	須恵器	蓋	12.1	—		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	白灰色	2.5㎜の砂粒含	不良	口縁部若干欠損	口縁部黒斑。瓦質に焼ける。
471	537	SD201	Y-49 溝1 第3層	須恵器	蓋	14.2	3.1		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	灰色	砂粒若干含	良好	口縁部1/4欠損	
472	552	SD201	W-50 溝1 第3層	須恵器	蓋	13.5	3.2		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	砂粒含	良好	完形	外面に自然釉がかかる。
473	521	SD201	X-49 溝1	須恵器	蓋	12.9	3.1		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	紫灰色	精良	良好	口縁部1/4残	外面に自然釉がかかる。
474	560	SD201	W-50 溝1 №1	須恵器	蓋	14.2	2.7		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	淡紫灰色	7㎜の小石含	良好	完形	口縁部に自然釉がかかる。
475	541	SD201	ぁ-46 溝1 第1層	須恵器	蓋	14.8	2.6		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	白灰色	微砂含	不良	口縁部1/4残	口縁部黒斑。瓦質に焼ける。
476	536	SD201	ぁ-46 溝1 第2層	須恵器	蓋	15.4	3.8		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	4㎜の小石含	良好	口縁部1/3残	外面に自然釉がかかる。
477	566	SD201	P-56 SD2 第3層	須恵器	蓋	17.0	—		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	精良	良好	口縁部1/2欠損	外面に自然釉が若干かかる。
478	551	SD201	W-50 溝1 第3層	須恵器	蓋	15.4	—		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	3㎜の砂粒含	良好	口縁部1/4欠損	外面に自然釉が若干かかる。
479	520	SD201	ぁ-46 溝1 第2層	須恵器	蓋	16.8	—		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	白灰色	3㎜の砂粒若干含	不良	口縁部1/4残	口縁部黒斑。瓦質に焼ける。
480	561	SD201	X-50 溝1 第3層	須恵器	蓋	17.0	3.0		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	3㎜の砂粒含	良好	口縁部若干欠損	外面に自然釉がかかる。
481	533	SD201	Q-56 SD1 第3層	須恵器	蓋	20.0	—		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	外：暗灰色 内：淡灰色	2㎜の砂粒含	良好	口縁部1/3残	
482	567	SD201	ぁ-46 溝1 第1層	須恵器	蓋	17.8	3.2		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	紫灰色	3㎜の砂粒含	良好	口縁部1/2残	外面に自然釉が若干かかる。
483	568	SD201	P-56 SD2 第1層	須恵器	蓋	17.0	3.8		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	灰色	4㎜の砂粒含	良好	口縁部1/8残	
484	565	SD201	X-49 溝1 第3層	須恵器	蓋	19.3	—		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	茶灰色	3㎜の砂粒多含	良好	口縁部若干欠損	
485	569	SD201	V-49 溝1 第2層	須恵器	蓋	13.0	2.6		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	淡紫灰色	精良	良好	口縁部1/4残	口縁部に自然釉がかかる。
486	518	SD201	Z-47 溝1 第3層	須恵器	杯	10.8	3.5		底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	紫灰色	2㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/3残	外面自然釉が厚くかかり、調整不明確。
487	608	SD201	Y-48 溝1 第3層	須恵器	杯	10.4	3.5		底部外面未調整、他はロクロナデ	外：暗灰色 内：灰色	2㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/3残	口縁部内外面に自然釉がかかる。
488	657	SD201	ぃ-46 溝1 第1層	須恵器	杯	11.0	3.8		底部外面未調整、他はロクロナデ	白茶色	3㎜の小石若干含	不良	口縁部1/3欠損	
489	591	SD201	Y-46 溝1 第3層	須恵器	杯	11.0	3.5		底部外面未調整、他はロクロナデ	紫灰色	6㎜の小石含	良好	口縁部1/3欠損	口縁部内外面に自然釉がかかる。
490	673	SD201	W-50 溝1 №7	須恵器	杯	11.0	4.1		底部外面未調整、他はロクロナデ	淡茶色	精良	不良	口縁部1/2残	口縁部に黒斑。
491	682	SD201	Q-56 SD1 第3層	須恵器	杯	10.3	3.1		底部外面未調整、他はロクロナデ	青灰色	精良	良好	口縁部1/4欠損	口縁部内面に自然釉がかかる。
492	680	SD201	X-49 溝1 第3層	須恵器	杯	10.7	3.6		底部外面未調整、他はロクロナデ	白茶色	5㎜の砂粒多含	不良	口縁部1/4欠損	
493	678	SD201	X-49 溝1 第3層	須恵器	杯	9.9	3.6		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗灰色	2㎜の砂粒含	良好	口縁部1/4欠損	
494	613	SD201	X-50 溝1 第3層	須恵器	杯	11.2	4.0		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗灰色	3㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/4残	
495	601	SD201	Y-48 溝1 第3層	須恵器	杯	10.6	3.5		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗青灰色	3㎜の砂粒含	良好	口縁部1/3欠損	底部内面、口縁部外面に自然釉が若干かかる。
496	589	SD201	Y-48 溝1 第3層	須恵器	杯	10.2	3.4		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗青灰色	精良	良好	口縁部1/2残	口縁部外面に自然釉が若干かかる。
497	593	SD201	X-50 溝1 第3層	須恵器	杯	9.8	3.8		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗青灰色	4㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/3残	
498	650	SD201	ぃ-46 溝1 第1層	須恵器	杯	9.9	3.5		底部外面未調整、他はロクロナデ	白茶色	1㎜の砂粒含	不良	口縁部1/3残	
499	597	SD201	W-50 溝1 第3層	須恵器	杯	10.8	3.9		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗灰色	3㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/2残	
500	605	SD201	X-49 溝1 第3層	須恵器	杯	10.4	3.8		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗灰色	2㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/3欠損	口縁部外面に自然釉が若干かかる。
501	588	SD201	Y-48 溝1 第3層	須恵器	杯	10.1	3.4		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗青灰色	1㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/4欠損	内面に自然釉がかかる。
502	677	SD201	ぃ-46 溝1 第1層	須恵器	杯	10.0	3.5		底部外面未調整、他はロクロナデ	白茶色	2㎜の砂粒含	不良	口縁部1/4残	
503	610	SD201	X-50 溝1 第3層	須恵器	杯	10.4	3.6		底部外面未調整、他はロクロナデ	淡灰色	3㎜の砂粒多含	不良	口縁部1/4欠損	
504	658	SD201	X-50 溝1 第3層	須恵器	杯	9.8	3.6		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗灰色	3㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/2残	
505	616	SD201	W-50 溝1 第3層	須恵器	杯	10.8	3.3		底部外面未調整、他はロクロナデ	淡灰色	2㎜の砂粒含	良好	口縁部1/2残	
506	604	SD201	ぁ-46 溝1 第2層	須恵器	杯	9.3	3.1		底部外面未調整、他はロクロナデ	灰色	2㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/3欠損	外面に自然釉が弱くかかる。
507	615	SD201	X-49 溝1	須恵器	杯	9.6	3.7		底部外面未調整、他はロクロナデ	淡灰色	2㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/2残	
508	587	SD201	X-49 溝1 第3層	須恵器	杯	10.3	3.5		底部外面未調整、他はロクロナデ	灰色	3㎜の砂粒含	良好	口縁部1/2残、底部完存	
509	618	SD201	X-50 溝1 第3層	須恵器	杯	9.9	3.5		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗青灰色	6㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/2残	
510	595	SD201	W-50 溝1 第2層	須恵器	杯	11.1	3.8		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗灰色	5㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/4残、底部完存	
511	659	SD201	X-50 溝1 第3層	須恵器	杯	8.8	3.1		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗灰色	1㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/2残	
512	599	SD201	W-50 溝1	須恵器	杯	10.1	3.3		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗灰色	4㎜の砂粒含	良好	口縁部1/3残	
513	681	SD201	V-50 溝1 第3層	須恵器	杯	9.7	3.5		底部外面未調整、他はロクロナデ	青灰色	4㎜の砂粒含	良好	完形	

第2－10表　遺物観察表

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種	器形	法量（cm）			調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考
						口径	器高	その他						
514	603	SD201	X-50 溝1 第3層	須恵器	杯	9.9	3.6		底部外面未調整、他はロクロナデ	灰色	2㎜の砂粒含	良好	口縁部1/2残	
515	669	SD201	V-50 溝1 第3層	須恵器	杯	11.4	3.5		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗灰色	精良	良好	口縁部1/2残	口縁部外面に重ね焼きの痕跡。
516	617	SD201	Z-47 溝1 第3層	須恵器	杯	11.2	2.8		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗灰色	2㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/3残	内外面に自然釉が弱くかかる。
517	594	SD201	X-49 溝1 第3層	須恵器	杯	10.3	3.5		底部外面未調整、他はロクロナデ	淡黄灰色	精良	不良	口縁部1/4欠損	外面1/2に黒斑。
518	579	SD201	X-50 溝1 第3層	須恵器	杯	9.5	3.3		底部外面未調整、他はロクロナデ	白茶色	5㎜の砂粒含	不良	完形	
519	606	SD201	X-49 溝1 第3層	須恵器	杯	9.4	3.5		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗灰色	2㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/3残	
520	662	SD201	ぃ-46 溝1 第1層	須恵器	杯	10.0	3.1		底部外面未調整、他はロクロナデ	灰色	4㎜の砂粒含	良好	口縁部1/3残	
521	655	SD201	W-50 溝1 第3層	須恵器	杯	11.4	3.3		底部外面未調整、他はロクロナデ	白灰色	2㎜の砂粒若干含	不良	口縁部1/4残	
522	592	SD201	X-50 溝1 第3層	須恵器	杯	9.8	3.5		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗青灰色	6㎜の砂粒多含	良好	完形	口縁部内外面に自然釉がかかる。
523	647	SD201	N-58 溝1	須恵器	杯	9.3	3.2		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗青灰色	5㎜の砂粒含	良好	完形	
524	672	SD201	V-50 溝1 第3層	須恵器	杯	10.0	3.4		底部外面未調整、他はロクロナデ	茶色	4㎜の砂粒含	不良	完形	
525	585	SD201	Y-49 溝1 第3層	須恵器	杯	9.8	3.2		底部外面未調整、他はロクロナデ	紫灰色	1.5㎜の砂粒含	良好	口縁部1/3残	口縁部内外面に自然釉が厚くかかる。
526	675	SD201	Y-49 溝1 第3層	須恵器	杯	10.8	3.4		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗灰色	3㎜の砂粒若干含	やや不良	口縁部1/2残	
527	664	SD201	W-49 溝1 第2層	須恵器	杯	8.9	3.5		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗青灰色	3㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/3欠損	
528	607	SD201	Z-47 溝1 第3層	須恵器	杯	10.8	3.4		底部外面未調整、他はロクロナデ	淡茶色	2㎜の砂粒含	不良	口縁部1/3欠損	酸化焼成。
529	679	SD201	S-55 SD1 第3層	須恵器	杯	10.8	3.4		底部外面未調整、他はロクロナデ	淡灰色	2㎜の砂粒若干含	不良	口縁部1/4残	
530	674	SD201	N-58 溝1	須恵器	杯	11.1	3.5		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗淡灰色	精良	良好	口縁部1/3残	外面に自然釉が弱くかかる。
531	676	SD201	X-49 溝1 第3層	須恵器	杯	10.4	2.8		底部外面未調整、他はロクロナデ	灰色	砂粒若干含	良好	口縁部1/4残	内外面に自然釉が弱くかかる。
532	649	SD201	ぁ-49 溝1 第3層	須恵器	杯	10.3	3.2		底部外面未調整、他はロクロナデ	灰色	2㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/3残	内外面に自然釉が弱くかかる。
533	580	SD201	X-49 溝1 第3層	須恵器	杯	10.0	3.2		底部外面未調整、他はロクロナデ	白茶色	3㎜の砂粒含	不良	口縁部1/4欠損	
534	581	SD201	X-50 溝1 第3層	須恵器	杯	11.0	4.5		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗青灰色	4㎜の小石含	良好	底部1/2残	
535	602	SD201	V-49 溝1 第3層	須恵器	杯	11.0	3.3		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗青灰色	3㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/4残	内外面に自然釉がかかる。
536	670	SD201	P-56 SD2 第1層	須恵器	杯	10.6	2.7		底部外面未調整、他はロクロナデ	紫灰色	2㎜の砂粒若干含	良好	完形	内面に自然釉がかかる。
537	578	SD201	X-49 溝1 第3層	須恵器	杯	9.8	2.7		底部外面未調整、他はロクロナデ	白茶色	2㎜の砂粒含	不良	完形	底部外面に藁圧痕。体部外面に沈線1条。
538	645	SD201	W-50 溝1 第3層	須恵器	杯	10.3	3.0		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗灰色	2㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/3残	
539	642	SD201	M-57 溝1	須恵器	杯	10.0	3.0		底部外面未調整、他はロクロナデ	淡灰色	精良	良好	口縁部1/4残	
540	584	SD201	X-49 溝1 第3層	須恵器	杯	11.2	3.0		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗灰色	3㎜の砂粒含	良好	口縁部1/4残、底部完存	外面3/4、内面1/4に自然釉がかかる。
541	582	SD201	X-50 溝1 第3層	須恵器	杯	10.9	2.9		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗灰色	3㎜の砂粒含	良好	完形	
542	583	SD201	V-49 溝1 第2層	須恵器	杯	11.0	3.1		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗青灰色	7㎜の小石若干含	良好	口縁部1/4残	
543	661	SD201	X-50 溝1 第3層	須恵器	杯	11.8	2.8		底部外面未調整、他はロクロナデ	白茶色	4㎜の砂粒含	不良	口縁部1/3欠損	
544	643	SD201	M-57 溝1	須恵器	杯	12.0	2.7		底部外面未調整、他はロクロナデ	白灰色	精良	不良	口縁部1/4残	
545	666	SD201	O-57 SD1	須恵器	杯	12.8	3.3		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗灰色	3㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/3欠損	
546	651	SD201	N-58 溝1	須恵器	杯	12.6	2.9		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗灰色	4㎜の小石含	良好	口縁部1/3欠損	口縁部内外面に自然釉がかかる。
547	667	SD201	O-57 SD1	須恵器	杯	12.9	3.6		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗紫灰色	1㎜の砂粒若干含	やや不良	口縁部1/4欠損	口縁部に重ね焼きの痕跡あり。
548	609	SD201	X-50 溝1 第3層	須恵器	杯	9.8	3.8		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗灰色	3㎜の砂粒含	良好	口縁部1/4残	外面に自然釉が若干かかる。
549	653	SD201	Z-47 溝1 第3層	須恵器	杯	9.3	3.0		底部外面～体部下半未調整、他はロクロナデ	暗灰色	4㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/3残	外面に自然釉がかかる。
550	611	SD201	X-50 溝1 第3層	須恵器	杯	8.4	3.2		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗灰色	微砂多含	良好	口縁部1/4残	内外面に自然釉がかかる。
551	598	SD201	X-50 溝1 第3層	須恵器	杯	10.0	3.4		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗青灰色	3㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/2残	
552	671	SD201	Z-47 溝1 第3層	須恵器	杯	11.4	3.3		底部外面未調整、他はロクロナデ	白茶色	4㎜の砂粒含	不良	完形	
553	663	SD201	Z-47 溝1 第3層	須恵器	杯	13.4	4.3		底部外面未調整、他はロクロナデ	淡灰色	3㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/3欠損	口縁部外面に自然釉が弱くかかる。
554	614	SD201	X-50 溝1 第3層	須恵器	杯	8.4	2.8		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗灰色	5㎜の砂粒含	良好	口縁部1/3欠損	口縁部外面に自然釉が厚くかかる。
555	596	SD201	W-50 溝1 第3層	須恵器	杯	10.4	3.2		底部外面未調整、他はロクロナデ	淡紫灰色	3㎜の砂粒含	良好	口縁部1/3欠損、底部完存	口縁部外面に自然釉が厚くかかる。
556	600	SD201	Z-47 溝1 第3層	須恵器	杯	10.2	3.3		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗灰色	砂粒含	良好	口縁部1/3欠損、底部完存	底部外面に記号「∓」。
557	612	SD201	W-50 溝1 第3層	須恵器	杯	11.0	3.0		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗灰色	3㎜の砂粒含	良好	口縁部1/4残	
558	590	SD201	O-57 SD1	須恵器	杯	13.3	2.9		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗青灰色	5㎜の砂粒含	良好	口縁部1/4残	口縁部内面に自然釉がかかる。
559	648	SD201	X-50 溝1 第3層	須恵器	杯	9.5	3.0		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗灰色	2㎜の砂粒含	良好	口縁部1/4残	外面に自然釉がかかる。
560	619	SD201	V-49 溝1 第3層	須恵器	杯	10.8	3.2		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗灰色	微粒含	良好	口縁部1/2残	口縁端部外面に自然釉がかかる。
561	644	SD201	X-50 溝1 第3層	須恵器	杯	11.0	3.1		底部外面未調整、他はロクロナデ	明灰色	2㎜の小石若干含	良好	口縁部1/6残	口縁部外面に自然釉がかかる。
562	660	SD201	O-57 溝1	須恵器	杯	12.6	3.5		底部外面未調整、他はロクロナデ	茶灰色	4㎜の小石若干含	不良	口縁部1/2残	口縁部外面に黒斑。
563	656	SD201	X-49 溝1 第3層	須恵器	杯	9.1	2.1		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗灰色	3㎜の砂粒若干含	良好	完形	底部外面以外に自然釉が若干かかる。
564	665	SD201	W-50 溝1 第3層	須恵器	杯	9.8	2.7		底部外面未調整、他はロクロナデ	淡紫灰色	精良	良好	口縁部1/3残	底部内面に自然釉がかかる。
565	646	SD201	W-50 溝1 第3層	須恵器	杯	11.8	4.3		底部外面未調整、他はロクロナデ	淡紫灰色	5㎜の小石含	良好	口縁部1/3残	口縁部外面に自然釉が若干かかる。

第2－11表　遺物観察表

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種	器形	法量（cm）			調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考
						口径	器高	その他						
566	652	SD201	N-58 溝1	須恵器	杯	11.9	3.1		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗紫灰色	3㎜の砂粒含	良好	口縁部1/3欠損	口縁部内外面に自然釉がかかる。
567	654	SD201	P-56 SD2 第1層	須恵器	杯	14.0	4.2		底部外面未調整、他はロクロナデ	淡灰色	2㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/4残	
568	631	SD201	V-53 溝1 第3層	須恵器	杯	11.4	4.4	高台径7.4	底部外面未調整、他はロクロナデ	茶色	砂粒若干含	不良	口縁部小片、底部完存	
569	711	SD201	W-51 溝1 第3層	須恵器	杯	13.2	4.7	高台径8.9	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	外：暗青灰色 内：淡紫灰色	1㎜の微砂含	良好	口縁部小片、底部完存	
570	632	SD201	V-52 溝1 第2層	須恵器	杯	13.9	4.8	高台径6.3	底部外面未調整、他はロクロナデ	暗灰色	4㎜の小石含	良好	口縁部1/4残	
571	696	SD201	Q-55 SD1 第3層	須恵器	杯	14.4	5.3	高台径7.1	底部外面未調整、他はロクロナデ	暗紫灰色	小石若干含	良好	口縁部小片、底部完存	
572	622	SD201	W-50 溝1 第3層	須恵器	杯	14.2	4.4		底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗紫灰色	1㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/3欠損、高台欠損	外面に自然釉がかかる。
573	571	SD201	X-50 溝1 第1層	須恵器	杯	13.7	4.1	高台径8.2	底部外面未調整、他はロクロナデ	灰色	2㎜の砂粒含	不良	口縁部1/4残	体部に黒斑。
574	626	SD201	W-50 溝1 第3層	須恵器	杯	13.8	4.4	高台径8.4	底部外面未調整、他はロクロナデ	暗灰色	2㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/4残	口縁部外面に自然釉が若干かかる。
575	576	SD201	P-57 SD3 第3層	須恵器	杯	15.7	4.6	高台径9.5	底部外面未調整、他はロクロナデ	淡灰色	4㎜の小石含	良好	口縁部小片、底部完存	口縁端部外面に自然釉が若干かかる。
576	573	SD201	W-50 溝1 第3層	須恵器	杯	13.4	3.8	高台径8.8	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	3㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/2残	
577	628	SD201	Y-49 溝1 第3層	須恵器	杯	14.9	3.7	高台径9.0	底部外面未調整、他はロクロナデ	淡灰色	3㎜の小石含	良好	口縁部1/5残、底部1/2残	
578	636	SD201	X-49 溝1 第3層	須恵器	杯	15.0	4.1	高台径8.2	底部外面未調整、他はロクロナデ	暗灰色	2㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/4残	
579	627	SD201	W-50 溝1 第2層	須恵器	杯	15.7	4.5	高台径10.2	底部外面未調整、他はロクロナデ	灰色	2㎜の砂粒含	良好	口縁部1/4残、底部1/2残	
580	635	SD201	W-50 溝1 第2層	須恵器	杯	19.9	6.7	高台径13.3	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	2㎜の砂粒含	良好	口縁部1/8残、底部1/4残	
581	637	SD201	X-49 溝1 第3層	須恵器	杯	16.2	4.8	高台径9.0	底部外面未調整、他はロクロナデ	暗灰色	5㎜の小石含	良好	口縁部1/3残	
582	641	SD201	Z-47 溝1 第3層	須恵器	杯	16.2	4.8	高台径9.0	底部外面未調整、他はロクロナデ	暗灰色	7㎜の小石含	良好	口縁部1/4残、底部完存	
583	633 629	SD201	Z-47 溝1 第3層	須恵器	杯	14.9	4.5	高台径10.0	底部外面未調整、他はロクロナデ	淡紫灰色	2㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/2残	
584	638	SD201	Z-47 溝1	須恵器	杯	14.9	4.6	高台径10.8	底部外面未調整、他はロクロナデ	淡灰色	微砂含	良好	口縁部1/3残	
585	572	SD201	S-55 SD1 第1層	須恵器	杯	16.0	5.3	高台径9.2	底部外面未調整、他はロクロナデ	暗青灰色	精良	良好	口縁部1/4残	外面に自然釉がかかる。
586	623	SD201	W-50 溝1 第3層	須恵器	杯	15.1	4.2	高台径10.9	底部外面未調整、他はロクロナデ	淡茶色	4㎜の小石含	不良	口縁部1/3欠損	
587	630	SD201	Z-47 溝1 第3層	須恵器	杯	15.0	3.6	高台径10.1	底部外面未調整、他はロクロナデ	淡灰色	5㎜の小石含	良好	口縁部1/3残	口縁部外面に自然釉がかかる。
588	577	SD201	Y-48 溝1 第1層	須恵器	杯	14.6	3.6	高台径10.3	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	2㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/4残、底部1/3欠損	口縁部外面に自然釉がかかる。
589	621	SD201	Z-47 溝1 第3層	須恵器	杯	14.4	4.5	高台径9.0	底部外面未調整、他はロクロナデ	暗紫灰色	砂粒若干含	良好	口縁部1/2残	口縁部外面に自然釉がかかる。
590	634	SD201	ぁ-46 溝1 第3層	須恵器	杯	15.8	3.6	高台径12.6	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	精良	良好	口縁部1/3残	口縁部外面に自然釉がかかる。
591	574	SD201	X-50 溝1 第3層	須恵器	杯	16.7	4.3	高台径10.2	底部外面未調整、他はロクロナデ	灰色	3㎜の砂粒含	良好	口縁部1/3残	口縁部内面に記号「×」。
592	640	SD201	Y-46 溝1 第3層	須恵器	杯	16.8	4.8	高台径11.1	底部外面未調整、他はロクロナデ	暗灰色	2㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/4残、底部1/3残	
593	570	SD201	O-57 溝1	須恵器	杯	16.9	4.4	高台径12.3	底部外面未調整、他はロクロナデ	淡紫灰色	精良	良好	口縁部1/4残	口縁部外面に自然釉がかかる。
594	639	SD201	O-57 溝1	須恵器	杯	15.9	4.8	高台径12.0	底部外面未調整、他はロクロナデ	淡灰色	砂粒若干含	良好	口縁部1/2残	口縁部外面に自然釉が厚くかかる。
595	624	SD201	Y-48 溝1 第3層	須恵器	杯	18.2	4.0	高台径11.6	底部外面未調整、他はロクロナデ	淡灰色	2㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/3残	口縁部外面に自然釉が厚くかかる。
596	625	SD201	X-49 溝1 第1層	須恵器	杯	19.5	4.3	高台径13.0	底部外面未調整、他はロクロナデ	灰色	3㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/4残、底部完存	
597	620	SD201	Z-47 溝1 第3層	須恵器	杯	9.1	4.6	高台径4.6	底部外面未調整、他はロクロナデ	灰白色	4㎜の砂粒含	良好	口縁部若干欠損	
598	575	SD201	O-57 SD1 第3層	須恵器	杯	11.3	4.9	高台径5.8	底部外面未調整、他はロクロナデ	暗灰色	4㎜の小石若干含	良好	口縁部1/3欠損、底部完存	
599	685	SD201	X-49 溝1 第3層	須恵器	Ⅲ	21.0	3.5		底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	茶灰色	8㎜の小石含	不良	ほぼ完形	
600	688	SD201	O-57 溝1	須恵器	Ⅲ	11.9	2.7		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗青灰色	3㎜の小石含	良好	口縁部1/4残	
601	687	SD201	ぃ-53 溝1 第3層	須恵器	Ⅲ	11.8	3.0		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗青灰色	3㎜の小石含	良好	口縁部1/4残	
602	686	SD201	ぁ-46 溝1 第1層	須恵器	Ⅲ	26.0	3.8		底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	茶白色	4㎜の小石含	不良	口縁部1/6残	
603	683	SD201	P-56 SD2 第1層	須恵器	Ⅲ	14.9	3.5		底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	赤茶色	微砂含	不良	口縁部1/4残	酸化焼成。
604	697	SD201	ぁ-46 溝1 第2+3層	須恵器	Ⅲ	18.8	6.0	高台径12.0	底部外面未調整、他はロクロナデ	暗青灰色	4㎜の砂粒含	良好	口縁部1/2残、底部完存	高台に1ヵ所穿孔あり。外面に自然釉が若干かかる。
605	731	SD201	W-50 溝1 第3層	須恵器	Ⅲ	—	—	高台径16.7	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	2㎜の砂粒若干含	良好	底部1/4残	
606	684	SD201	Q-56 SD1 第3層	須恵器	高杯	15.4	—		杯底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗茶色	2㎜の砂粒多含	不良	口縁部1/2残	
607	736	SD201	Y-48 溝1 第3層	須恵器	高杯	10.0	—		杯底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	淡紫灰色	3㎜の砂粒若干含	良好	口縁部完存	口縁部内外面に自然釉がかかる。
608	698	SD201	X-50 溝1 第3層	須恵器	高杯	10.6	4.7	脚径7.0	ロクロナデ	暗青灰色	3㎜の砂粒含	良好	脚部若干欠損	口縁部内外面に自然釉がかかる。
609	740	SD201	ぁ-46 溝1 第2層	須恵器	高杯	—	—	脚径10.4	ロクロナデ	暗灰色	2㎜の砂粒多含	良好	脚部1/2残	脚中央に凹線1条。脚部外面に自然釉がかかる。
610	742	SD201	W-50 溝1 第3層	須恵器	高杯	—	—	脚径8.5	ロクロナデ	黒青色	1㎜の砂粒若干含	良好	脚端部小片、筒部完存	自然釉が厚くかかる。
611	737	SD201	ぁ-46 溝1 第1層	須恵器	高杯	—	—	脚径9.7	ロクロナデ	紫灰色	4㎜の砂粒多含	良好	脚部1/4残	脚部内面に絞り痕。
612	738	SD201	O-57 SD1	須恵器	高杯	—	—	脚径9.2	ロクロナデ	灰色	2㎜の砂粒若干含	良好	脚部1/3残	
613	735	SD201	W-50 溝1 第2層	須恵器	高杯	9.0	9.8	脚径8.7	ロクロナデ	暗赤茶色	2㎜の砂粒多含	良好	杯部1/4残、脚部若干欠損	内外面に自然釉が厚くかかる。
614	739	SD201	P-56 SD1 第1層	須恵器	高杯	—	—	脚径10.4	ロクロナデ	紫灰色	精良	良好	脚部1/6残	外面1/3に自然釉が厚くかかる。
615	741	SD201	W-49 溝1 第1層	須恵器	高杯	—	—		ロクロナデ	暗灰色	1㎜の砂粒若干含	良好	筒部完存	内外面に自然釉が若干かかる。
616	743	SD201	ぁ-47 溝1 第1層	須恵器	高杯	—	—		ロクロナデ	淡紫灰色	1㎜の砂粒若干含	良好	筒部完存	
617	734	SD201	P-57 SD3	須恵器	高杯	—	—		筒部外面カキメ、他はロクロナデ	紫灰色	4㎜の砂粒若干含	良好	筒部完存	筒部中央に凹線2条。透孔3方2段。

第2－12表　遺物観察表

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種	器形	法量（cm）			調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考
						口径	器高	その他						
618	717	SD201	U-53 溝1 第3層	須恵器	壺	11.5	14.0		体部外面下半ヘラケズリ、他はロクロナデ	暗青灰色	3㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/3欠損	口縁部内外面に自然釉がかかる。
619	713	SD201	W-50 溝1 第2層	須恵器	壺	9.3	—		ロクロナデ	白灰色	1㎜の微砂若干含	良好	口縁部完存	頸部に凹線2条。口縁部内外面に自然釉がかかる。
620	710	SD201	O-57 溝1	須恵器	壺	9.6	—		ロクロナデ	淡灰色	微砂若干含	良好	口縁部1/4残	口縁端部に突帯1条。頸部に凹線2条。
621	707	SD201	S-55 SD1 第1層	須恵器	壺	—	—	高台径8.1	体部外面下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗紫灰色	微砂若干含	不良	底部完存	底部内面に自然釉が若干かかる。
622	715	SD201	R-55 SD1 第3層	須恵器	壺	10.5	—		ロクロナデ	暗灰色	3㎜の砂粒多含	良好	口縁部若干欠損	頸部に凹線2条。口縁部内外面に自然釉が厚くかかる。
623	712	SD201	W-50 溝1 第3層	須恵器	壺	8.2	—		ロクロナデ	紫灰色	微砂若干含	良好	口縁部1/3残	頸部に凹線1条。口縁部内外面に自然釉がかかる。
624	716	SD201	Z-47 溝1 第3層	須恵器	壺	17.0	—		ロクロナデ	紫灰色	3㎜の砂粒含	良好	口縁部小片、頸部完存	頸部に凹線3条。口縁部内外面に自然釉がかかる。
625	730	SD201	O-57 SD1	須恵器	壺	—	—	高台径9.6	体部外面下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	白灰色	2㎜の砂粒若干含	良好	底部完存	体部に凹線1条。体部内外面に自然釉がかかる。
626	709	SD201	Z-47 溝1 第3層	須恵器	壺	—	—	高台径7.6	体部外面下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	紫灰色	4㎜の小石含	良好	底部完存	底部外面に墨書「大」。体部に凹線1条。体部内外面に自然釉が厚くかかる。
627	714	SD201	Z-47 溝1 第3層	須恵器	壺	13.6	—		ロクロナデ後、頸部内面を工具ナデ	暗灰色	1㎜の微砂若干含	良好	口縁部小片、頸部完存	頸部に凹線2条。体部内外面に自然釉が厚くかかる。
628	728	SD201	X-50 溝1 第3層	須恵器	壺	—	—	高台径9.1	体部外面ロクロケズリ、内面ロクロナデ	白灰色	1㎜の微砂若干含	やや不良	底部1/4欠損	
629	706	SD201	X-50 溝1 第3層	須恵器	壺	5.6	6.8		底部外面ヘラケズリ、他はロクロナデ	明紫灰色	1㎜の微砂多含	良好	ほぼ完形	
630	722	SD201	Q-56 SD1 第2層	須恵器	壺	8.7	—		ロクロナデ	淡紫灰色	2㎜の砂粒若干含	良好	口縁部小片、体部1/4残	肩部に弱い凹線1条。口縁部外面に自然釉がかかる。
631	721	SD201	X-49 溝1 第3層	須恵器	壺	10.2	—		ロクロナデ	白灰色	2㎜の砂粒含	良好	口縁部小片、体部1/4残	肩部に凹線1条。口縁部から肩部外面に自然釉がかかる。
632	733	SD201	P-57 SD3 第3層	須恵器	壺	9.2	—	底径10.1	体部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	茶灰色	4㎜の砂粒多含	良好	頸部1/4残、他は小片	肩部に凹線1条。摩滅が激しく調整不明確。
633	708	SD201	O-57 溝1	須恵器	壺	12.5	—		体部上半外面カキメ、内面ロクロナデ	紫灰色	4㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/2残	肩部に円形浮文4方。外面に自然釉がかかる。
634	727	SD201	X-50 溝1 第3層	須恵器	壺	—	—	高台径8.5	ロクロナデ	青灰色	3㎜の砂粒若干含	良好	底部完存	
635	724	SD201	?-56 SD2 第1層	須恵器	壺	—	—		底部外面ヘラケズリ、他はロクロナデ	青灰色	2㎜の砂粒多含	良好	体部下半完存	体部外面に凹線1条。
636	689	SD201	N-58・O-57 溝1	須恵器	鉢	18.8	7.2		底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗茶色	微砂含	不良	口縁部1/2残	外面に自然釉がかかる。口縁部に黒斑。
637	691	SD201	Z-47 溝1 第3層	須恵器	鉢	17.8	—		ロクロナデ	暗青灰色	精良	良好	口縁部1/6残	口縁部に沈線2条。
638	690	SD201	O-57 SD1 第3層	須恵器	鉢	15.8	6.5		底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗紫灰色	4㎜の砂粒含	良好	口縁部1/4残	口縁部に自然釉が若干かかる。
639	692	SD201	Q-56 SD1 第1層	須恵器	鉢	—	—		ロクロナデ	暗青灰色	微砂含	良好	小片	外面に墨書「□」。
640	694	SD201	Y-48 溝1 第3層	須恵器	擂鉢	—	—	底径9.2	底部外面未調整、他はロクロナデ	淡紫灰色	3㎜の砂粒若干含	良好	底部完存	内面に自然釉がかかる。
641	695	SD201	W-49 溝1 第2層	須恵器	擂鉢	—	—	底径11.4	底部外面未調整、他はロクロナデ	暗青灰色	砂粒若干含	良好	底部完存	底部に3㎜の穿孔。
642	693	SD201	X-49・50 溝1 第3層	須恵器	擂鉢	—	—	底径11.0	底部外面未調整、他はロクロナデ	暗青灰色	4㎜の砂粒含	良好	体部下半完存	外面の一部に自然釉がかかる。
643	729	SD201	ぁ-46・Z-47 溝1 第1・3層	須恵器	平瓶	—	—		底部外面下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	白灰色	1㎜の砂粒若干含	良好	体部1/4残	頸部に沈線2条、体部に1条。口縁部内面、体部上半に自然釉がかかる。
644	720	SD201	X-89 溝1 №7	須恵器	平瓶	6.2	14.0	底径6.0	底部外面下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗赤茶色	1㎜の砂粒多含	良好	ほぼ完形	口縁部内面～体部外面に自然釉が厚くかかる。
645	719	SD201	P-56 SD2 第3層	須恵器	平瓶	6.4	12.9		底部外面下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	灰色	3㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/3欠損	口縁部内面～体部外面上半に自然釉が厚くかかる。
646	723	SD201	V-51 溝1 第3層	須恵器	平瓶	—	—	底径4.8	底部外面ロクロケズリ後ヘラケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	1～5㎜の砂粒多含	不良	口縁部のみ欠損	
647	718	SD201	S-55 SD1 第1層	須恵器	平瓶	—	—	底径3.8	底部外面ロクロケズリ、体部上半ロクロナデ、下半カキメ	暗青灰色	2㎜の砂粒若干含	良好	口縁部のみ欠損	
648	705	SD201	T-53 溝1	須恵器	甕	—	—		ロクロナデ	青灰色	1㎜の微砂若干含	良好	小片	口縁部外面に波状文＋凹線2条＋波状文。自然釉が厚くかかる。
649	704	SD201	X-49 溝1 第3層	須恵器	甕	—	—		口縁部外面カキメ、内面ロクロナデ	淡赤茶色	1㎜の微砂若干含	不良	小片	口縁部外面に波状文。
650	732	SD201	Z-47 溝1 第3層	須恵器	甕	11.2	—		体部外面タタキ後カキメ、内面同心円文	暗青灰色	4㎜の砂粒含	良好	頸部1/4残、口縁部小片	口縁端部外面に凹線1条。
651	701	SD201	ぁ-46 溝1 第2層	須恵器	甕	25.0	—		体部外面タタキ後カキメ、内面同心円文	淡灰紫色	3㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/3残	口縁端部外面に弱い凸線1条。
652	700	SD201	W-50 溝1 第3層	須恵器	甕	21.1	—		体部外面タタキ、内面同心円文	暗灰色	4㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/3残	体部内面に自然釉が若干かかる。
653	699	SD201	Z-47 溝1 第3層	須恵器	甕	37.7	—		ロクロナデ	淡紫灰色	3㎜の砂粒含	良好	口縁部1/4残	口縁部外面に沈線2条。口縁部内外面に自然釉がかかる。
654	725	SD201	Y-48 溝1	須恵器	甕	11.7	—		ロクロナデ	暗青灰色	2㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/4残	口縁部外面に自然釉がかかる。
655	726	SD201	ぁ-46 溝1 第1層	須恵器	甕	16.0	—		口縁部外面カキメ、内面ロクロナデ	暗紫灰色	1㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/4残	口縁部内外面に自然釉が若干かかる。
656	703	SD201	W-53 溝1 肩	須恵器	甕	23.0	—		体部外面タタキ後カキメ、内面同心円文	紫灰色	1㎜の微砂若干含	良好	口縁部1/4残	口縁部内外面に自然釉がかかる。
657	702	SD201	Q-56 SD1 第1層	須恵器	甕	24.0	—		体部外面タタキ後カキメ、内面同心円文	灰色	3㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/6残	
658	1101	SD201	P-57 SD3 第3層	須恵器	甕	40.6	81.4		外面体部タタキ、口縁部カキメ、内面同心円文	青灰色	精良	良好	口縁部2/3残	口縁部外面に櫛刺突＋凸線1条＋櫛刺突＋凸線1条。
659	1102	SD201	X-49 溝1 第3層	須恵器	玉	1.6	—	重5.3g	—	灰色	精良	良好	完形	自然釉がかかる。
660	934	SD201	N-58 溝1	石器	石匙	—	長5.0	残存重8.3g	—	暗灰色	サヌカイト	—	1/5欠損	
661	932	SD201	W-50 溝1 第3層	石器	砥石	—	幅3.5		—	暗青灰色	頁岩	—	1/2残	磨製石斧を転用。
662	931	SD201	W-50 溝1 第3層	石器	砥石	—	幅4.1		—	明灰色	粘板岩	—	2/3残	鋭利な工具による線刻あり。
663	937	SD201	O-57 SD1	石器	砥石	長16.7	幅4.5		—	暗灰緑色	砂岩	—	ほぼ完形	
664	936	SD201	O-57 SD1 第3層	石器	砥石	長15.8	幅4.7		—	暗灰色	粘板岩	—	完形	
665	933	SD201	O-57 SD1 第3層	石器	石皿	13.0	4.7		—	明茶灰色	砂岩	—	完形	
666	935	SD201	R-55 SD1 第3層	石製品	有孔円盤	3.0	0.4		—	黒灰色	滑石	—	完形	穿孔2ヶ所。
667	2054	SD201	W-51 溝1 第2層	木器	曲柄又鍬	—	—	厚1.6	—	—	—	—	ほぼ完形	未製品。

第2－13表　遺物観察表

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種	器形	法量（cm）			調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考
						口径	器高	その他						
668	2075	SD201	R-55 SD1 第3層	木製品	栓	2.2	長 35.2		—	—	—	—	先端一部欠損	
669	2082	SD201	R-55 SD1 第3層	木製品	部材	—	幅 8.0	厚 2.4	—	—	—	—	両端欠損	片端焼失。
670	2076	SD201	R-55 SD1 第3層	木製品	部材	—	—	厚 1.2	—	—	—	—	片端・片側欠損	
671	2050	SD201	R-55 SD1 第3層	木器	匙形木器	長 23.2	幅 4.4	厚 2.0	—	—	—	—	完形	
672	2051	SD201	V-52 溝1 第2層	木器	蓋板	19.6	—	厚 1.0	—	—	—	—	ほぼ完形	孔径 1.6cm。
673	2049	SD201	V-52 溝1 第2層	木製品	板	長 18.0	幅 2.4	厚 0.8	—	—	—	—	ほぼ完形	
674	2124	SD201	V-52 溝1 第2層	木製品	丸棒	1.2	—		—	—	—	—	両端欠損	
675	2064	SD201	P-56 SD2 第3層	木製品	斎串	—	幅 2.0	厚 0.2	—	—	—	—	1方欠損	
676	2043	SD201	R-54 SD1 第2層	木製品	板	—	幅 24.0	厚 2.4	—	—	—	—	両端欠損	
677	977	SE262	O-57 井戸2 掘形	土師器	杯	18.7	5.6		外：口縁部ヘラミガキ、底部未調整 内：暗文	暗茶色	精良	良好	口縁部1/4残	放射暗文＋ラセン暗文。
678	978	SE262	O-57 井戸2 掘形	土師器	杯	12.0	2.6		外：未調整 内：暗文	淡茶色	精良	良好	口縁部1/5残	放射暗文。
679	975	SE262	O-57 井戸2 井戸枠内	土師器	椀	12.4	3.6		外：未調整 内：ナデ	外：淡茶色 内：茶色	精良	良好	完形	
680	974	SE262	O-57 井戸2 No 21	土師器	椀	11.2	3.5		外：未調整 内：ナデ	淡茶色	5㎜の砂粒若干含	良好	口縁部1/3欠損	
681	976	SE262	O-57 井戸2 No 6	土師器	甕	—	—		底部外面ヘラケズリ、他はハケメ	外：茶色 内：暗赤茶色	3㎜の砂粒若干含	良好	体部1/2残	
682	979	SE262	O-57 井戸2 No 22	土師器	甕	19.6	22.8		底部外面ヘラケズリ、他はハケメ	外：黒茶色 内：淡茶色	2㎜の砂粒含	良好	口縁部1/4残	
683	973	SE262	O-57 井戸2 No 21	須恵器	蓋	17.2	2.4		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	3㎜の砂粒若干含	良好	完形	天井部外面に自然釉がかかる。
684	2098	SE262	O-57 井戸2	木製品	木樋	13.2	長 64.0		—	—	—	—	完形	
685	2097	SE262	O-57 井戸2 No 14	木製品	枠板	—	幅 20.0	厚 4.0	—	—	—	—	両端欠損	
686	2109	SE262	O-57 井戸2 No 31	木製品	枠板	—	幅 24.0	厚 3.6	—	—	—	—	両端欠損	
687	2115	SE262	O-57 井戸2 No 32	木製品	杭	3.6	—		—	—	—	—	片端欠損	
688	2110	SE262	O-57 井戸2 No 8	木製品	杭	5.2	—		—	—	—	—	片端欠損	
689	2116	SE262	O-57 井戸2 No 27	木製品	杭	4.0	—		—	—	—	—	片端欠損	
690	2080	SE262	O-57 井戸2 No 30	木製品	杭	4.8	—		—	—	—	—	片端欠損	
691	2094	SE262	O-57 井戸2 No 26	木製品	杭	4.8～6.8	—		—	—	—	—	片端欠損	
692	4	SE55	O-28 SK1 第8層 No 12	土師器	杯	12.8	3.3		底部外面未調整、内面ナデ	淡褐色	細砂含	良	完形	底部外面にタール状物質付着。
693	36	SE55	O-28 SK1 第8層	土師器	杯	13.0	2.8		底部外面未調整、内面ナデ	淡赤茶色	精良	良好	口縁部1/8残	
694	35	SE55	O-28 SK1 第8層	土師器	杯	13.0	3.0		底部外面未調整、内面ナデ	淡茶色	砂粒多含	良好	口縁部大半欠損	底部外面に藁圧痕。
695	34	SE55	O-28 SK1 第8層 No 2	土師器	杯	12.9	3.8		底部外面未調整、内面ナデ	白茶色	3㎜の砂粒多含	良好	完形	底部外面に墨書「田中」。
696	10	SE55	O-28 SK1 No 24	土師器	杯	13.0	3.1		底部外面未調整、内面ナデ	淡褐色	細砂含	良	完形	底部外面にタール状物質付着。
697	1	SE55	O-28 SK1 第8層 No 6	土師器	杯	13.9	2.9		底部外面未調整、内面暗文	淡赤褐色	細砂含	良	口縁部若干欠損	ラセン暗文。
698	12	SE55	O-28 SK1 第9層 No 30	土師器	杯	13.5	3.4		底部外面未調整、内面ナデ	淡黄褐色	2㎜の砂粒含	良	口縁部1/4欠損	
699	9	SE55	O-28 SK1 第8層 No 19	土師器	杯	13.2	3.5		底部外面未調整、内面ナデ	淡褐色	2㎜の砂粒含	良	完形	底部外面に記号「×」。
700	2	SE55	O-28 SK1	土師器	杯	13.3	2.8		底部外面未調整、内面ナデ	暗褐色	6㎜の砂粒含	良	口縁部若干欠損	底部外面に墨書「井」。
701	31	SE55	O-28 SK1 第9層 No 32	土師器	杯	15.7	3.1	高台径 10.3	外：口縁部ヘラミガキ、底部未調整 内：暗文	淡褐色	4㎜の砂粒含	良	口縁部1/3欠損	放射暗文＋ラセン暗文。
702	33	SE55	O-28 SK1 第9層	土師器	杯	15.6	3.7	高台径 9.6	外：口縁部ヘラミガキ、底部未調整 内：暗文	黄茶色	精良	良好	口縁部1/3欠損	放射暗文＋ラセン暗文。
703	30	SE55	O-28 SK1 第9層 No 36	土師器	杯	15.7	3.9	高台径 9.9	外：口縁部ヘラミガキ、底部ヘラケズリ 内：暗文	淡黄褐色	小石多含	良	口縁部1/3欠損	ラセン暗文。
704	24	SE55	O-28 SK1	土師器	皿	16.2	2.4		外：口縁部ヘラミガキ、底部未調整 内：暗文	明褐色	5㎜の小石若干含	良	口縁部若干欠損	ラセン暗文。底部外面に墨書「千倉」。
705	37	SE55	O-28 SK1 第8層	土師器	皿	16.0	2.3		外面未調整、内面暗文	淡茶色	精良	良	口縁部1/4残	ラセン暗文。
706	32	SE55	O-28 SK1 第9層	土師器	皿	14.0	2.0		外：口縁部ヘラミガキ、底部未調整 内：暗文	暗茶色	1㎜の砂粒若干含	良	口縁部1/4欠損	ラセン暗文。
707	61	SE55	O-28 SK1 第3層	土師器	皿	14.9	1.8		ナデ	白茶色	砂粒若干含	良	口縁部1/4残	摩滅が激しく調整不明確。
708	39	SE55	O-28 SK1 第8層	土師器	皿	—	—	高台径 19.0	内面暗文	淡茶色	精良	良好	底部小片	放射暗文。精製品。
709	38	SE55	O-28 SK1 第3層	土師器	皿	—	—	高台径 18.9	内面暗文	白茶色	精良	良好	底部小片	放射暗文＋ラセン暗文。精製品。
710	48	SE55	O-28 SK1 第8層	土師器	鉢	—	—		外面未調整、内面ナデ	外：暗赤色 内：明赤色	砂粒多含	良	体部小片	製塩土器。
711	47	SE55	O-28 SK1 第8層	土師器	鉢	6.0	2.9	底径 5.0	未調整	暗黄茶色	精良	良好	底部1/2残	ミニチュア。
712	25	SE55	O-28 SK1 第8層	土師器	高杯	—	—		外：ヘラケズリ 内：ナデ	淡明褐色	2㎜の小石若干含	良好	筒部完存	面取り6面。
713	46	SE55	O-28 SK1 第8層	土師器	甕	17.5	—		ハケメ	白茶色	小石多含	良好	口縁部1/4残	
714	41	SE55	O-28 SK1 第8層	土師器	甕	22.0	—		体部外面下半ヘラケズリ、他はハケメ	外：暗茶色 内：白茶色	砂粒若干含	良好	口縁部1/10残	
715	42	SE55	O-28 SK1 第8層	土師器	甕	17.9	—		体部外面下半ヘラケズリ、内面下半ナデ、他はハケメ	白茶色	砂粒若干含	良好	口縁部大半欠損	

第2－14表　遺物観察表

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種	器形	法量（cm）			調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考
						口径	器高	その他						
716	40	SE55	O-28 SK1 第8層	土師器	甕	19.5	—		体部外面下半ヘラケズリ、他はハケメ	淡黄茶色	微砂含	良好	口縁部1/3残	
717	21	SE55	O-28 SK1 №27	土師器	甕	16.9	17.9		体部外面下半ヘラケズリ、他はハケメ	明褐色	2㎜の砂粒多含	良好	完形	体部上半に沈線2条。
718	8	SE55	O-28 SK1 第8層 №17	土師器	甕	15.6	16.0		体部外面下半ヘラケズリ、他はハケメ	淡褐色	細砂含	良	口縁部若干欠損	外面に煤付着。
719	3	SE55	O-28 SK1 №3	土師器	甕	13.6	12.6		体部外面下半ヘラケズリ、内面下半ナデ、他はハケメ	淡褐色	細砂含	良	口縁部1/7残	外面に煤付着。
720	16	SE55	O-28 SK1 №25	土師器	甕	13.9	12.8		体部外面下半ヘラケズリ、内面下半ナデ、他はハケメ	淡褐色	3㎜の砂粒含	良	完形	外面に煤付着。
721	5	SE55	O-28 SK1 №26	土師器	甕	12.8	11.3		体部外面下半ヘラケズリ、内面下半ナデ、他はハケメ	黒褐色	細砂含	良	口縁部若干欠損	内外面に煤付着。
722	23	SE55	O-28 SK1 第8層 №20	土師器	甕	15.3	14.4		体部外面下半ヘラケズリ、内面一部ナデ、他はハケメ	明褐色	1㎜の砂粒若干含	良	口縁部1/4欠損	頸部に沈線1条。
723	45	SE55	O-28 SK1 第9層 №31	土師器	甕	15.7	14.7		体部外面下半ヘラケズリ、内面下半工具ナデ、他はハケメ	淡黄色	2㎜の砂粒多含	良好	口縁部1/3残	頸部に沈線1条。
724	44	SE55	O-28 SK1 第9層	土師器	甕	14.7	15.3		体部外面下半ヘラケズリ、他はハケメ	暗黄茶色	2㎜の砂粒含	良好	ほぼ完形	内外面に炭化物（煮こぼれ）付着。
725	60	SE55	O-28 SK1 第3層	土師器	甕	15.5	—		外面一部ヘラケズリ、他は未調整、内面ハケメ	白茶色	精良	良好	口縁部1/6残	外面に炭化物付着。
726	43	SE55	O-28 SK1 第9層	土師器	甕	—	—		体部外面下半ヘラケズリ、内面下半ナデ、他はハケメ	暗茶色	微砂含	良好	体部下半完存	内外面に炭化物付着。
727	53	SE55	O-28 SK1 第9層	須恵器	蓋	17.2	2.4		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗青灰色	砂粒多含	良好	口縁部小片	天井部外面に墨書「大井」。外面に自然釉がかかる。
728	52	SE55	O-28 SK1 第8・9層	須恵器	蓋	18.0	2.5		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	精良	良好	口縁部小片	外面に自然釉がかかる。
729	17	SE55	O-28 SK1 第8層 №15	須恵器	蓋	14.5	1.8		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	5㎜の砂粒若干含	良	口縁部1/4残	天井部内面に墨書「安麿」。
730	58・59	SE55	O-28 SK1 第8層	須恵器	杯	16.0	3.9		底部外面未調整、他はロクロナデ	灰色	精良	良好	口縁部1/6残	
731	57	SE55	O-28 SK1 第8・9層	須恵器	杯	15.7	4.7	高台径9.7	底部外面未調整、他はロクロナデ	外：暗青灰色 内：灰色	2㎜の砂粒含	良好	口縁部1/9、底部1/4残	
732	13	SE55	O-28 SK1 第9層 №33	須恵器	杯	13.9	4.4	高台径10.1	底部外面未調整、他はロクロナデ	淡黄灰色	細砂含	不良	口縁部若干欠損	体部に黒斑。
733	11	SE55	O-28 SK1 第9層 №29	須恵器	杯	12.8	4.2	高台径9.2	底部外面未調整、他はロクロナデ	灰色	細砂含	良好	完形	
734	14	SE55	O-28 SK1 第8層 №4	須恵器	杯	11.7	4.1	高台径8.6	底部外面未調整、他はロクロナデ	灰色	2㎜の砂粒含	良	完形	内外面に油煙付着。
735	27	SE55	O-28 SK1 第8層 №18	須恵器	皿	19.8	2.3	底径17.7	底部外面未調整、他はロクロナデ	暗灰色	3㎜以下の砂粒若干含	良好	ほぼ完形	内外面に火襷。
736	15	SE55	O-28 SK1 第9層 №34・35	須恵器	皿	28.0	4.5	高台径23.0	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	白灰色	3㎜以下の砂粒含	やや不良	完形	底部外面に墨書「千倉」。外面に煤付着。
737	22	SE55	O-28 SK1 第8層 №10	須恵器	壺	—	—		体部外面下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	黒灰色	1㎜以下の砂粒若干含	良	口縁部欠損	外面の1/4に自然釉がかかる。
738	51	SE55	O-28 SK1 第8層	須恵器	壺	—	—	高台径8.6	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	灰茶色	砂粒多含	良	底部小片	
739	55	SE55	O-28 SK1 第9層	須恵器	壺	—	—	高台径12.6	ロクロナデ	灰青色	精良	良好	底部1/5残	
740	56	SE55	O-28 SK1 第8層	須恵器	壺	—	—	高台径12.0	ロクロナデ	暗青色	精良	良好	底部1/6残	
741	20	SE55	O-28 SK1 第8層	須恵器	壺	11.0	15.7	高台径11.3	体部外面下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	黒灰色	4㎜の砂粒含	良	ほぼ完形	肩部外面と底部内面に自然釉がかかる。
742	18	SE55	O-28 SK1 №23	須恵器	壺	10.5	13.8	高台径10.1	体部外面下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	黒灰色	精良	良	完形	
743	19	SE55	O-28 SK1 第8層 №16	須恵器	壺	10.5	12.9	高台径10.6	体部外面下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	灰色	4㎜以下の砂粒若干含	良	完形	肩部外面に自然釉がかかる。
744	26	SE55	O-28 SK1 第8層 №13	須恵器	横瓶	10.3	20.1		体部外面1/3タタキ、他はロクロナデ	灰色	4㎜以下の小石若干含	良好	完形	重焼痕。体部外面に自然釉がかかる。
745	29	SE55	O-28 SK1 第8層 №7	須恵器	横瓶	12.6	24.4		体部外面1/4タタキ、他はカキメ	白灰色	精良	良	ほぼ完形	焼膨。体部外面に自然釉がかかる。
746	54	SE55	O-28 SK1 №1	須恵器	甕	49.4	—		ロクロナデ	暗青灰色	2㎜の砂粒含	良好	口縁部小片	口縁部内面に自然釉がかかる。
747	28	SE55	O-28 SK1 第8層 №9	須恵器	甕	22.3	31.6		体部外面タタキ、内面ハケメ	淡黒灰色	4㎜以下の小石含	良	ほぼ完形	外面に自然釉がかかる。
748	49・50	SE55	O-28 SK1 第8層	フイゴ	羽口	7.2	—	孔径3.5	—	灰茶色	砂粒若干含	良	小片	
749	62	SE55	O-28 SK1 第3層	—	竈	—	—		外面ハケメ、内面一部ハケメ、他はナデ	白黄色	砂粒含	良	1/4残	
750	7	SE55	O-28 SK1 第8層	石製品	紡錘車	5.4	1.9	重21g	—	黒青色	滑石	—	ほぼ完形	線刻鋸歯文。
751	6	SE55	O-28 SK1 掘形 №5	土師器	杯	12.8	2.7		底部外面未調整、他はナデ	淡茶色	砂粒多含	良好	ほぼ完形	底部に焼成後の穿孔。
752	64	SE55	O-28 SK1 掘形	土師器	杯	14.0	2.5		底部外面未調整、他はナデ	淡黄色	砂粒多含	良好	口縁部1/6残	
753	63	SE55	O-28 SK1 掘形	土師器	杯	13.8	3.0		ナデ	淡茶色	砂粒・雲母多含	良	口縁部1/8残	
754	65	SE55	O-28 SK1 掘形	土師器	皿	19.8	2.0		底部外面未調整、他はナデ	暗茶色	砂粒・雲母多含	良	口縁部1/8残	
755	66	SE55	O-28 SK1 掘形	土師器	椀	12.0	4.3		ナデ	黒茶色	微砂含	良	口縁部1/8残	口縁部内面に油煙が付着。
756	2010	SE55	O-28 SK1 第8層 №32	木製品	斎串	幅1.8	長20.9	厚0.2	—	—	—	—	完形	
757	2011	SE55	O-28 SK1 第8層 №28	木製品	斎串	幅2.0	長26.0	厚0.1	—	—	—	—	ほぼ完形	
758	2004	SE55	O-28 SK1 第8層 №26	木製品	斎串	幅2.1	長25.9	厚0.3	—	—	—	—	ほぼ完形	
759	2017	SE55	O-28 SK1 第9層 №50	木製品	斎串	幅2.0	長26.3	厚0.1	—	—	—	—	1/4欠損	
760	2008	SE55	O-28 SK1 №44	木製品	斎串	幅2.7	長28.5	厚0.2	—	—	—	—	ほぼ完形	
761	2005	SE55	O-28 SK1 第8層 №27	木製品	斎串	幅2.8	長29.1	厚0.2	—	—	—	—	ほぼ完形	
762	2015	SE55	O-28 SK1 第9層 №47	木製品	斎串	幅2.3	長29.5	厚0.3	—	—	—	—	ほぼ完形	
763	2014	SE55	O-28 SK1 №43	木製品	斎串	幅2.3	—	厚0.1	—	—	—	—	先端部欠損	

第2－15表　遺物観察表

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種	器形	法量（cm）			調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考
						口径	器高	その他						
764	2018	SE55	O-28 SK1 第9層 №48	木製品	斎串	幅 2.6	長 31.4	厚 0.2	—	—	—	—	ほぼ完形	
765	2006	SE55	O-28 SK1 第9層	木製品	斎串	幅 2.6	—	厚 0.4	—	—	—	—	1/4 残	
766	2007	SE55	O-28 SK1 第9層	木製品	斎串	幅 2.8	—	厚 0.3	—	—	—	—	1/2 残	
767	2012	SE55	O-28 SK1 第9層	木製品	斎串	幅 2.1	—	厚 0.1	—	—	—	—	1/2 残	
768	2013	SE55	O-28 SK1 第3層	木製品	斎串	幅 2.4	—	厚 0.3	—	—	—	—	1/3 残	
769	2025	SE55	O-28 SK1 第8層	木製品	斎串	幅 2.1	—	厚 0.1	—	—	—	—	1/4 残	
770	2024	SE55	O-28 SK1 第8層	木製品	斎串	幅 1.6	—	厚 0.3	—	—	—	—	1/4 残	
771	2009	SE55	O-28 SK1 №45	木製品	斎串	幅 2.3	—	厚 0.2	—	—	—	—	1/4 残	
772	2020	SE55	O-28 SK1 第8層	木製品	斎串	幅 2.0	—	厚 0.2	—	—	—	—	1/4 残	
773	2016	SE55	O-28 SK1 №46	木製品	斎串	—	—	厚 0.2	—	—	—	—	1/3 残	
774	2021	SE55	O-28 SK1 第8層	木製品	斎串	—	—	厚 0.4	—	—	—	—	1/6 残	
775	2023	SE55	O-28 SK1 第8層	木製品	斎串	—	—	厚 0.2	—	—	—	—	1/6 残	
776	2022	SE55	O-28 SK1 第8層	木製品	斎串	幅 2.0	—	厚 0.1	—	—	—	—	1/4 残	
777	2001	SE55	O-28 SK1 №7	木製品	斎串	幅 2.3	長 21.4	厚 0.6	—	—	—	—	完形	
778	2003	SE55	O-28 SK1 第8層 №15	木製品	斎串	幅 2.5	長 21.6	厚 0.2	—	—	—	—	完形	
779	2019	SE55	O-28 SK1 №37	木製品	斎串	幅 2.1	長 20.8	厚 0.3	—	—	—	—	ほぼ完形	
780	2002	SE55	O-28 SK1 第3層	木製品	斎串	幅 2.8	長 20.4	厚 0.6	—	—	—	—	ほぼ完形	
781	2041	SE55	O-28 SK1 第8層	木製品	横櫛	—	—		—	—	—	—	小片	
782	2036	SE55	O-28 SK1 第8層	木製品	木印	幅 3.0	—		—	—	—	—	小片	
783	2035	SE55	O-28 SK1 第8層	木製品	木印	—	—		—	—	—	—	小片	先端部に穿孔。
784	2070	SE55	O-28 SK1 第9層 №49	木製品	串	幅 1.8	長 34.6		—	—	—	—	完形	先端部焼ける。
785	2073	SE55	O-28 SK1 掘形	木製品	刀形	幅 2.1	長 37.6	厚 0.8	—	—	—	—	完形	
786	2067	SE55	O-28 SK1 第8層 №31・42	木製品	棒	1.0	長 60.8		—	—	—	—	完形	
787	2069	SE55	O-28 SK1 第9層	木製品	棒	—	—		—	—	—	—	小片	
788	2027	SE55	O-28 SK1 第8層 №34	木器	桶	13.0	—		釘結合曲物	—	—	—	底板完存	
789	2037	SE55	O-28 SK1 第8層 №24	木器	桶	13.6	—		釘結合曲物	—	—	—	底板完存	
790	2038	SE55	O-28 SK1 第8層 №36	木器	桶	16.2	—		釘結合曲物	—	—	—	底板完存	
791	2028	SE55	O-28 SK1 第8層 №16	木器	桶	17.4	6.1		釘結合曲物、1列上内下外2段綴じ	—	—	—	ほぼ完形	底板に墨書の直線。
792	2029	SE55	O-28 SK1 №23	木器	桶	17.0	2.9		釘結合曲物	—	—	—	側板1/5欠損	底板に墨書の平行線。
793	2026	SE55	O-28 SK1 第8層 №20	木器	桶	16.6	—		釘結合曲物	—	—	—	底板完存	
794	2145	SE55	O-28 SK1 第8層	木器	桶	40.0	39.5		釘結合挽物	—	—	—	底板欠損	
795	2040	SE55	O-28 SK1 №19	木器	皿	28.0	2.4		挽物	—	—	—	1/2 残	底部内面に直径6㎜の円形刳り込み。
796	2202	SE55	O-28 SK1 東②	木製品	枠板	幅 24.8	長 163.2	厚 4.4	手斧痕	—	—	—	ほぼ完形	
797	2212	SE55	O-28 SK1 東③	木製品	駄枘	幅 3.3	長 5.6	厚 2.0	—	—	—	—	完形	
798	2203	SE55	O-28 SK1 東③	木製品	枠板	幅 24.2	長 171.2	厚 5.7	手斧痕	—	—	—	完形	墨書「東九」。
799	2213	SE55	O-28 SK1 東④	木製品	駄枘	幅 3.8	長 5.8	厚 1.8	—	—	—	—	完形	
800	2204	SE55	O-28 SK1 東④	木製品	枠板	幅 25.3	長 170.4	厚 4.7	手斧痕	—	—	—	完形	墨書「奉」か「東」、「東八」。
801	2214	SE55	O-28 SK1 東⑤	木製品	駄枘	幅 3.7	長 4.5	厚 1.4	—	—	—	—	完形	
802	2205	SE55	O-28 SK1 東⑤	木製品	枠板	幅 24.3	長 159.2	厚 5.5	手斧痕	—	—	—	完形	
803	2215	SE55	O-28 SK1 東⑤	木製品	駄枘	幅 4.2	長 5.7	厚 1.6	—	—	—	—	完形	
804	2206	SE55	O-28 SK1 東⑥	木製品	枠板	幅 29.1	長 172.0	厚 5.8	手斧痕	—	—	—	ほぼ完形	
805	2216	SE55	O-28 SK1 東⑦	木製品	駄枘	幅 3.5	長 5.8	厚 2.0	—	—	—	—	完形	
806	2207	SE55	O-28 SK1 東⑦	木製品	枠板	幅 28.0	長 165.6	厚 5.6	手斧痕	—	—	—	ほぼ完形	墨書「奉」か「東」、「東五」。
807	2217	SE55	O-28 SK1 東⑦	木製品	駄枘	幅 3.5	長 6.1	厚 2.0	—	—	—	—	完形	
808	2208	SE55	O-28 SK1 東⑧	木製品	枠板	幅 30.0	長 167.2	厚 6.0	手斧痕	—	—	—	ほぼ完形	墨書「東□」。
809	2218	SE55	O-28 SK1 東⑨	木製品	駄枘	幅 3.6	長 5.7	厚 2.1	—	—	—	—	完形	
810	2209	SE55	O-28 SK1 東⑨	木製品	枠板	幅 27.8	長 165.6	厚 7.0	手斧痕	—	—	—	完形	墨書「東三」。
811	2219	SE55	O-28 SK1 東⑩	木製品	駄枘	幅 3.2	長 5.5	厚 1.7	—	—	—	—	完形	
812	2210	SE55	O-28 SK1 東⑩	木製品	枠板	幅 28.3	長 164.8	厚 6.4	手斧痕	—	—	—	完形	墨書「奉」か「東」。
813	2220	SE55	O-28 SK1 東⑪	木製品	駄枘	幅 3.0	長 7.8	厚 1.9	—	—	—	—	完形	
814	2211	SE55	O-28 SK1 東⑪	木製品	枠板	幅 24.3	長 165.6	厚 7.7	手斧痕	—	—	—	完形	墨書「奉」か「東」。

第2－16表　遺物観察表

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種	器形	法量（cm）			調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考
						口径	器高	その他						
815	2302	SE55	O-28 SK1 西 ②	木製品	枠板	幅 23.4	長 157.6		—	—	—	—	両端一部欠損	腐食が激しい。
816	2312	SE55	O-28 SK1 西	木製品	駄枘	幅 2.6	—	厚 1.7	—	—	—	—	先端部欠損	
817	2303	SE55	O-28 SK1 西 ③	木製品	枠板	幅 24.0	長 171.2	厚 4.6	手斧痕	—	—	—	ほぼ完形	
818	2313	SE55	O-28 SK1 西 ④	木製品	駄枘	幅 3.1	長 5.4	厚 1.4	—	—	—	—	完形	
819	2304	SE55	O-28 SK1 西 ④	木製品	枠板	幅 25.4	長 172.8	厚 4.7	手斧痕	—	—	—	完形	墨書「西八」。
820	2314	SE55	O-28 SK1 西 ⑤	木製品	駄枘	幅 4.0	長 5.5	厚 1.5	—	—	—	—	完形	
821	2305	SE55	O-28 SK1 西 ⑤	木製品	枠板	幅 22.9	長 174.4	厚 5.8	手斧痕	—	—	—	完形	
822	2315	SE55	O-28 SK1 西 ⑤	木製品	駄枘	幅 3.8	長 5.8	厚 1.4	—	—	—	—	完形	
823	2306	SE55	O-28 SK1 西 ⑥	木製品	枠板	幅 28.6	長 171.6	厚 5.7	手斧痕	—	—	—	ほぼ完形	
824	2316	SE55	O-28 SK1 西 ⑦	木製品	駄枘	幅 3.4	長 5.8	厚 2.0	—	—	—	—	完形	825 から分離できず、長さ不明確。
825	2307	SE55	O-28 SK1 西 ⑦	木製品	枠板	幅 28.4	長 167.2	厚 5.7	手斧痕	—	—	—	完形	墨書「西五」。
826	2317	SE55	O-28 SK1 西 ⑧	木製品	駄枘	幅 3.4	長 4.9	厚 1.9	—	—	—	—	完形	
827	2308	SE55	O-28 SK1 西 ⑧	木製品	枠板	幅 28.0	長 164.0	厚 5.1	手斧痕	—	—	—	ほぼ完形	
828	2318	SE55	O-28 SK1 西 ⑨	木製品	駄枘	幅 3.6	長 7.6	厚 1.6	—	—	—	—	完形	
829	2309	SE55	O-28 SK1 西 ⑨	木製品	枠板	幅 28.3	長 167.2	厚 6.6	手斧痕	—	—	—	完形	墨書「西三」。
830	2319	SE55	O-28 SK1 西 ⑩	木製品	駄枘	幅 3.9	長 5.3	厚 1.9	—	—	—	—	完形	
831	2310	SE55	O-28 SK1 西 ⑩	木製品	枠板	幅 27.3	長 167.2	厚 6.3	手斧痕	—	—	—	ほぼ完形	墨書「西二」。
832	2320	SE55	O-28 SK1 西 ⑪	木製品	駄枘	幅 3.4	長 6.6	厚 1.7	—	—	—	—	完形	
833	2311	SE55	O-28 SK1 西 ⑪	木製品	枠板	幅 26.8	長 165.6	厚 7.0	手斧痕	—	—	—	完形	墨書「西一」。
834	2401	SE55	O-28 SK1 南 ①	木製品	枠板	幅 26.8	—	厚 4.0	手斧痕	—	—	—	両端一部欠損	腐食が激しい。
835	2412	SE55	O-28 SK1 南 ②	木製品	駄枘	幅 3.7	—	厚 1.9	—	—	—	—	1/2 残	
836	2402	SE55	O-28 SK1 南 ②	木製品	枠板	幅 24.6	長 171.2	厚 4.8	手斧痕	—	—	—	ほぼ完形	墨書「□□」。腐食が激しい。
837	2413	SE55	O-28 SK1 南 ③	木製品	駄枘	幅 3.5	長 5.0	厚 2.0	—	—	—	—	完形	
838	2403	SE55	O-28 SK1 南 ③	木製品	枠板	幅 25.7	長 169.6	厚 4.1	手斧痕	—	—	—	完形	
839	2414	SE55	O-28 SK1 南 ③	木製品	駄枘	幅 3.2	長 5.4	厚 1.5	—	—	—	—	完形	
840	2404	SE55	O-28 SK1 南 ④	木製品	枠板	幅 25.2	長 171.2	厚 6.2	手斧痕	—	—	—	ほぼ完形	
841	2415	SE55	O-28 SK1 南 ⑤	木製品	駄枘	幅 3.5	長 5.4	厚 1.9	—	—	—	—	完形	
842	2405	SE55	O-28 SK1 南 ⑤	木製品	枠板	幅 29.5	長 172.0	厚 6.4	手斧痕	—	—	—	完形	
843	2416	SE55	O-28 SK1 南 ⑥	木製品	駄枘	幅 3.3	長 5.7	厚 2.2	—	—	—	—	完形	
844	2406	SE55	O-28 SK1 南 ⑥	木製品	枠板	幅 28.0	長 165.6	厚 5.8	手斧痕	—	—	—	完形	
845	2417	SE55	O-28 SK1 南 ⑥	木製品	駄枘	幅 3.5	長 5.1	厚 1.5	—	—	—	—	完形	
846	2407	SE55	O-28 SK1 南 ⑦	木製品	枠板	幅 28.6	長 164.2	厚 6.1	手斧痕	—	—	—	ほぼ完形	墨書「南五」。
847	2418	SE55	O-28 SK1 南 ⑦	木製品	駄枘	幅 3.8	長 6.4	厚 1.8	—	—	—	—	完形	
848	2408	SE55	O-28 SK1 南 ⑧	木製品	枠板	幅 27.2	長 167.2	厚 5.8	手斧痕	—	—	—	ほぼ完形	
849	2419	SE55	O-28 SK1 南 ⑨	木製品	駄枘	幅 4.1	長 7.6	厚 1.6	—	—	—	—	完形	
850	2409	SE55	O-28 SK1 南 ⑨	木製品	枠板	幅 22.0	長 167.2	厚 5.1	手斧痕	—	—	—	完形	墨書「□三」。
851	2420	SE55	O-28 SK1 南 ⑩	木製品	駄枘	幅 3.6	長 6.9	厚 2.0	—	—	—	—	完形	
852	2410	SE55	O-28 SK1 南 ⑩	木製品	枠板	幅 25.6	長 165.6	厚 6.8	手斧痕	—	—	—	完形	墨書「南二」。
853	2421	SE55	O-28 SK1 南 ⑪	木製品	駄枘	幅 3.3	長 5.1	厚 2.0	—	—	—	—	完形	
854	2411	SE55	O-28 SK1 南 ⑪	木製品	枠板	幅 12.6	長 164.8	厚 5.1	手斧痕	—	—	—	完形	墨書「南一」。
855	2501	SE55	O-28 SK1 北 ②	木製品	枠板	幅 26.2	—	厚 4.5	—	—	—	—	1/10 欠損	腐食が激しい。
856	2512	SE55	O-28 SK1 北 ③	木製品	駄枘	幅 3.5	長 5.1	厚 1.3	—	—	—	—	完形	
857	2502	SE55	O-28 SK1 北 ③	木製品	枠板	幅 20.2	長 170.4	厚 3.8	手斧痕	—	—	—	ほぼ完形	腐食が激しい。
858	2513	SE55	O-28 SK1 北 ④	木製品	駄枘	幅 3.2	長 5.1	厚 1.1	—	—	—	—	ほぼ完形	
859	2503	SE55	O-28 SK1 北 ④	木製品	枠板	幅 23.7	長 171.2	厚 4.4	手斧痕	—	—	—	ほぼ完形	腐食が激しい。
860	2514	SE55	O-28 SK1 北 ④	木製品	駄枘	幅 3.6	長 5.1	厚 1.5	—	—	—	—	完形	
861	2504	SE55	O-28 SK1 北 ⑤	木製品	枠板	幅 30.8	長 172.0	厚 4.8	手斧痕	—	—	—	完形	墨書「北□」。
862	2515	SE55	O-28 SK1 北 ⑥	木製品	駄枘	幅 3.9	長 5.5	厚 1.6	—	—	—	—	完形	863 から分離できず、長さ不明確。
863	2505	SE55	O-28 SK1 北 ⑥	木製品	枠板	幅 25.1	長 172.0	厚 6.8	手斧痕	—	—	—	完形	墨書「北七」。
864	2516	SE55	O-28 SK1 北 ⑦	木製品	駄枘	幅 3.8	長 5.6	厚 2.0	—	—	—	—	完形	
865	2506	SE55	O-28 SK1 北 ⑦	木製品	枠板	幅 29.0	長 165.6	厚 6.4	手斧痕	—	—	—	完形	墨書「□□」。
866	2517	SE55	O-28 SK1 北 ⑧	木製品	駄枘	幅 4.2	長 5.1	厚 1.5	—	—	—	—	完形	867 から分離できず、長さ不明確。

第２－17表　遺物観察表

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種	器形	法量（cm）			調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考
						口径	器高	その他						
867	2507	SE55	O-28 SK1 北⑧	木製品	枠板	幅 27.6	長 165.2	厚 6.1	手斧痕	—	—	—	完形	墨書「北五」。
868	2518	SE55	O-28 SK1 北⑨	木製品	駄枘	幅 4.0	長 6.5	厚 1.7	—	—	—	—	完形	
869	2508	SE55	O-28 SK1 北⑨	木製品	枠板	幅 23.0	長 164.8	厚 6.6	手斧痕	—	—	—	完形	墨書「北四」。
870	2519	SE55	O-28 SK1 北⑩	木製品	駄枘	幅 3.6	長 4.5	厚 1.7	—	—	—	—	完形	
871	2509	SE55	O-28 SK1 北⑩	木製品	枠板	幅 23.2	長 166.4	厚 6.3	手斧痕	—	—	—	完形	墨書「北三」。
872	2520	SE55	O-28 SK1 北⑪	木製品	駄枘	幅 3.9	長 5.5	厚 2.1	—	—	—	—	1/8 欠損	
873	2510	SE55	O-28 SK1 北⑪	木製品	枠板	幅 27.1	長 162.4	厚 6.2	手斧痕	—	—	—	ほぼ完形	墨書「北二」。
874	2511	SE55	O-28 SK1 北⑫	木製品	枠板	幅 15.8	長 162.0	厚 5.3	手斧痕	—	—	—	完形	墨書「北一」。
875	97	SD20	N-16 SD1	土師器	杯	11.7	2.5		底部外面未調整、他はナデ	赤茶色	精良	良好	口縁部 1/6 残	
876	95	SD20	I-17 SD2	土師器	杯	13.4	3.1		底部外面未調整、他はナデ	明赤色	精良	良好	口縁部 1/3 残	
877	100	SD20	L-16 SD2	土師器	杯	14.0	3.1		底部外面未調整を多く残すナデ、他はナデ	外：白茶色 内：淡赤茶色	3 ㎜の砂粒多含	良好	口縁部 1/2 残	口縁端部内面に沈線 1 条。
878	96	SD20	I-17 SD2	土師器	杯	13.8	3.1		底部外面未調整、他はナデ	赤白色	砂粒多含	良好	口縁部 1/4 残	
879	99	SD20	I-17 SD2	土師器	杯	13.8	2.7		底部外面未調整、他はナデ	明赤茶色	精良	良好	口縁部 1/10 以下残	
880	98	SD20	I-17 SD2	土師器	杯	15.0	2.7		底部外面未調整、他はナデ	淡茶色	精良	良	口縁部 1/8 残	口縁部に煤付着。
881	101	SD20	I-17 SD2	土師器	皿	18.0	2.4		ナデ	白茶色	砂粒若干含	良好	口縁部 1/8 残	
882	102	SD20	I-17 SD2	土師器	皿	15.0	2.0		底部外面未調整、他はナデ	白茶色	3 ㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/4 残	
883	104	SD20	L-16 SD2	土師器	皿	18.0	1.4		底部外面未調整、他はナデ	白茶色	精良	良	口縁部 1/10 以下残	
884	103	SD20	N-16 SD1	土師器	皿	18.0	1.7		底部外面未調整、他はナデ	淡茶色	精良	良	口縁部 1/4 残	摩滅が激しく調整不明確。
885	105	SD20	I-17 SD2	土師器	甕	15.2	—		ハケメ	茶色	砂粒含	良	口縁部 1/4 残	摩滅が激しく調整不明確。
886	106	SD20	I-17 SD2	土師器	甕	26.0	—		外面ハケメ、内面ナデ	淡黄茶色	精良	良好	口縁部 1/7 残	口縁端部外面に沈線 1 条。
887	91	SD20	L-16 SD2	土師器	高杯	—	—		筒部外面ヘラケズリ、内面未調整	淡赤色	砂粒含	良	筒部完存	筒部 9 面に面取り。
888	92	SD20	I-17 SD2	土師器	鉢	—	—		外面未調整、内面ナデ	茶赤色	砂粒多含	やや不良	小片	製塩土器。
889	76	SD20	F-17 SD1	須恵器	蓋	17.7	3.2		天井部外面ロクロケズリ、、他はロクロナデ	淡紫灰色	砂粒多含	良好	口縁部小片	
890	75	SD20	N-16 SD1	須恵器	蓋	14.1	2.3		天井部外面未調整、他はロクロナデ	灰色	3 ㎜の砂粒含	やや不良	口縁部 3/4 残	
891	77	SD20	F-17 SD1	須恵器	蓋	9.9	1.8		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	明灰色	精良	良好	口縁部小片	精製品。天井部外面に自然釉がかかり、調整不明確。
892	78	SD20	N-16 SD1	須恵器	蓋	—	—		ロクロナデ	黄茶色	砂粒含	良好	天井部小片	天井部外面に墨書「廣」。
893	70	SD20	O-16 SD1	須恵器	杯	18.8	5.4	高台径 12.3	底部外面未調整、他はロクロナデ	紫灰色	砂粒含	良好	口縁部 1/6、底部 1/2 残	
894	71	SD20	N-16 SD1	須恵器	杯	14.3	3.9	高台径 9.0	底部外面未調整、他はロクロナデ	淡紫灰色	砂粒若干含	良好	口縁部 1/3、底部 1/2 残	
895	69	SD20	J-17 SD2 第 1 層	須恵器	杯	12.8	3.6	高台径 9.0	底部外面未調整、他はロクロナデ	灰色	精良	良好	口縁部 1/4、底部 2/3 残	
896	74	SD20	N-16 SD1	須恵器	杯	11.5	3.8	高台径 7.6	底部外面ナデ、他はロクロナデ	淡灰色	砂粒若干含	良好	口縁部 1/2 残	外面一部に自然釉がかかる。
897	68	SD20	I-17 SD2	須恵器	杯	13.0	4.0	高台径 9.0	底部外面ナデ、他はロクロナデ	紫灰色	精良	良好	口縁部 1/6 残	外面一部に自然釉がかかる。
898	72	SD20	N-16 SD1	須恵器	杯	12.8	3.7	高台径 9.0	底部外面ナデ、他はロクロナデ	紫灰色	4 ㎜の小石含	良好	口縁部 1/8、底部 1/4 残	
899	67	SD20	N-16 SD1	須恵器	杯	15.8	4.4		底部外面未調整、体部下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	灰色	砂粒若干含	良好	口縁部 1/4 残	口縁端部内面に沈線 1 条。
900	73	SD20	I-17 SD2	須恵器	皿	20.0	2.0	底径 17.9	口縁部ロクロナデ、他はナデ	暗灰色	砂粒若干含	良好	口縁部 1/6 残	
901	83	SD20	N-16 SD1	須恵器	壺	—	—		ロクロナデ	外：暗灰色 内：淡灰色	砂粒若干含	良好	頸部完存	
902	82	SD20	E-17 SD3	須恵器	壺	—	—	底径 9.9	底部外面ロクロケズリ、内面ナデ	紫灰色	砂粒含	良好	底部 1/2 残	内面に自然釉がかかる。底部外面に窯壁状物質付着。
903	80	SD20	F-17 SD1	須恵器	壺	—	—	高台径 6.6	体部外面ロクロケズリ、内面ロクロナデ	紫灰色	砂粒若干含	良好	底部 1/4 残	底部内面に自然釉がかかる。
904	79	SD20	L-16 SD2	須恵器	壺	—	—	高台径 9.8	体部外面ロクロケズリ、内面ロクロナデ	外：暗灰色 内：紫灰色	砂粒多含	良好	底部 1/4 残	
905	88	SD20	F-17 SD1	須恵器	壺	11.0	—		ロクロナデ	灰色	精良	良好	口縁部 1/6 残	精製品。
906	90	SD20	F-17 SD1	須恵器	壺	—	—	高台径 7.6	ロクロナデ	淡灰色	精良	良好	底部 1/4 残	精製品。外面一部に自然釉がかかる。
907	89	SD20	F-17 SD1	須恵器	壺	—	—	底径 11.4	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	灰色	精良	良好	底部 1/6 残	精製品。内外面一部に自然釉がかかる。
908	81	SD20	E-17 SD3 上	須恵器	壺	—	—	底径 11.0	体部外面ロクロケズリ、内面ロクロナデ、底部ナデ	外：灰色 内：暗灰色	砂粒含	良	底部 1/2 残	外面一部に自然釉がかかる。
909	87	SD20	K-16 SD3 直上	須恵器	鉢	37.8	9.2	底径 26.5	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	砂粒含	良好	口縁部 1/7 残	
910	86	SD20	M-16 SD1	須恵器	鉢	—	—	底径 26.0	底部外面ロクロケズリ後ナデ、他はロクロナデ	暗灰色	微砂含	良好	底部 1/6 残	
911	85	SD20	H-17 SD1	須恵器	甕	47.6	—		外面タタキ後ヨコナデ、他はロクロナデ	淡黄白色	砂粒含	やや不良	口縁部 1/8 残	還元不良。
912	84	SD20	L-16 SD2	瓦	丸瓦	—	—		内面布目、側面ヘラケズリ	淡茶色	砂粒含	良好	小片	木骨痕。布の絞り目。
913	169	SD58	P-18 旧河道	土師器	杯	14.0	2.9		底部外面未調整、内面ナデ	淡赤茶色	2 ㎜の砂粒多含	良	口縁部 1/3 残	摩滅が激しく調整不明確。
914	170	SD58	P-20 旧河道	土師器	杯	20.0	3.3		底部外面未調整、内面ナデ	赤茶色	精良	良好	口縁部 1/3 残	
915	165	SD58	P-21 旧河道	土師器	杯	15.0	2.5		底部内外面ナデ	白灰色	砂粒若干含	不良	口縁部 1/6 残	
916	171	SD58	P-19 旧河道	土師器	杯	18.0	2.8		底部外面未調整、内面ナデ	淡黄茶色	3 ㎜の砂粒含	良好	口縁部小片	口縁端部内面に沈線 1 条。底部外面に沈線。
917	173	SD58	P-19 旧河道	土師器	高杯	—	—		外面ヘラケズリ、内面ナデ	赤茶色	精良	良好	脚部 1/3 残	筒部 10 面に面取り。
918	174	SD58	P-19 旧河道	土師器	高杯	—	—	脚径 13.5	外面ヘラケズリ、内面ナデ	白赤色	4 ㎜の砂粒含	良好	脚部完存	筒部 15 面に面取り。摩滅が激しく調整不明確。
919	172	SD58	P-20 旧河道	土師器	甕	13.1	—		ハケメ	茶黄色	微砂含	良好	口縁部 1/8 残	口縁上端部に沈線 1 条。
920	181	SD58	P-18 旧河道	土師器	甕	14.4	—		ハケメ	淡茶色	砂粒若干含	良好	口縁部 1/3 残	
921	179	SD58	P-15 旧河道	土師器	甕	25.6	—		外面ハケメ、内面ナデ	明茶色	1 ㎜の砂粒多含	良	口縁部 1/6 残	摩滅が激しく調整不明確。

第 2 － 18 表　遺物観察表

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種	器形	法量（cm）			調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考
						口径	器高	その他						
922	182	SD58	P-16 旧河道	土師器	甑	—	—	底径 19.1	外面ヘラケズリ、内面ハケメ	白赤色	砂粒多含	良好	底部 1/8 残	蒸気孔は円形。
923	178	SD58	O-15 旧河道肩	土師器	盤	40.8	16.6		外面ヘラケズリ、内面ハケメ	白茶色	5 ㎜の砂粒多含	良	口縁部 1/6 残	3 足。口縁上端部に沈線 1 条。
924	164	SD58	P-16 旧河道	須恵器	蓋	21.7	5.6		天井部外面一部ロクロケズリ、他はロクロナデ	白灰色	砂粒多含	不良	天井部 1/2 残	摩滅が激しく調整不明確。
925	162	SD58	P-19 旧河道	須恵器	蓋	—	—		天井部外面一部ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗紫灰色	砂粒多含	良好	天井部 1/8 残	
926	163	SD58	P-20 旧河道	須恵器	蓋	16.2	3.2		天井部外面一部ロクロケズリ、他はロクロナデ	明褐色	2 ㎜の砂粒含	良好	口縁部一部欠損	天井部外面に墨書「土（?）」。
927	161	SD58	O-15 旧河道肩	須恵器	蓋	19.0	2.4		天井部外面一部ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	砂粒多含	良好	口縁部 1/6 残	
928	160	SD58	P-18 旧河道	須恵器	蓋	14.0	1.6		天井部外面一部未調整、他はロクロナデ	暗灰色	微砂若干含	良好	口縁部 1/6 残	
929	157	SD58	P-20 旧河道	須恵器	杯	12.0	4.4	底径 7.4	底部外面未調整、他はロクロナデ	明灰色	微砂若干含	良好	口縁部 1/4、底部 1/3 残	
930	158	SD58	P-18 旧河道	須恵器	杯	12.0	3.3	底径 7.7	底部外面未調整、他はロクロナデ	暗灰色	2 ㎜の砂粒若干含	良好	口縁部 1/6、底部 1/5 残	
931	156	SD58	P-20 旧河道	須恵器	杯	12.4	3.0	底径 7.6	底部外面未調整、他はロクロナデ	灰色	1 ㎜の砂粒若干含	良好	口縁部 1/2 残、底部若干欠損	
932	159	SD58	P-16 旧河道	須恵器	杯	12.5	3.5	底径 9.0	底部外面未調整、他はロクロナデ	暗青灰色	微砂含	良好	口縁部 1/4 残	
933	153	SD58	P-21 旧河道	須恵器	杯	11.5	3.7	高台径 8.2	底部外面未調整、他はロクロナデ	淡紫灰色	2 ㎜の砂粒若干含	良好	口縁部 1/3、底部 1/2 残	
934	154	SD58	P-20 旧河道	須恵器	杯	16.8	4.2	高台径 10.0	ロクロナデ	暗青灰色	2 ㎜の砂粒若干含	良好	口縁部小片、底部 1/4 残	体部外面中央を板状工具でロクロナデ。
935	152	SD58	P-19 旧河道	須恵器	杯	14.5	4.5	高台径 10.6	底部外面未調整、他はロクロナデ	暗紫灰色	3 ㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/4 残、底部ほぼ完存	体部下端を 1 周ロクロケズリ。
936	155	SD58	O-18 旧河道肩	須恵器	杯	15.6	4.1	高台径 10.0	ロクロナデ	白灰色	砂粒若干含	良好	口縁部小片、底部 1/4 残	
937	151	SD58	O-17 旧河道肩	須恵器	杯	—	—	高台径 8.0	底部外面未調整、他はロクロナデ	暗青灰色	微砂含	良好	底部ほぼ完存	底部外面に墨書「千」か「十」。
938	166	SD58	P-15 旧河道	須恵器	高杯	—	—		杯部外面下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	4 ㎜の小石含	良好	口縁部、脚部欠損	
939	167	SD58	P-19 旧河道	須恵器	壺	—	—		ロクロナデ	紫灰色	精良	良好	頸部完存	頸部に凹線 1 条。
940	180	SD58	P-21 旧河道	須恵器	壺	8.6	13.7	高台径 10.7	ロクロナデ	暗青灰色	2 ㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/5、底部 1/4 残	外面に自然釉がかかる。
941	168	SD58	P-18 旧河道	坩堝	鉢	12.5	—		未調整	灰白色	5 ㎜の小石多含	やや不良	口縁部 1/5 残	内面に鉄滓の付着が激しい。
942	136	SZ59	I-17 SX1	土師器	杯	12.0	2.7		底部外面未調整、他はナデ	暗赤色	2 ㎜の砂粒多含	良好	口縁部 1/6 残	摩滅が激しく調整不明確。
943	132	SZ59	I-17 SX1	土師器	杯	13.0	2.7		底部外面未調整、他はナデ	淡赤色	砂粒多含	良好	口縁部 1/4 残	
944	137	SZ59	I-17 SX1	土師器	杯	16.0	3.2		底部外面未調整、他はナデ	白赤色	精良	良好	口縁部 1/4 残	
945	133	SZ59	I-17 SX1	土師器	杯	15.0	2.8		底部外面未調整、他はナデ	淡赤茶色	3 ㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/6 残	
946	131	SZ59	I-17 SX1	土師器	杯	14.0	2.9		底部外面未調整、他はナデ	外：淡茶色 内：白茶色	砂粒若干含	良	口縁部 1/4 残	摩滅が激しく調整不明確。
947	134	SZ59	I-17 SX1	土師器	杯	13.0	2.9		底部外面未調整、他はナデ	白茶色	精良	良好	口縁部 1/6 残	
948	135	SZ59	I-17 SX1	土師器	杯	14.0	2.7		底部外面未調整、他はナデ	淡赤色	微砂含	良好	口縁部 1/8 残	
949	129	SZ59	I-17 SX1	土師器	杯	17.0	3.9		底部外面未調整、他はナデ	赤茶色	精良	良好	口縁部 1/8 残	
950	130	SZ59	I-17 SX1	土師器	杯	14.0	3.4		底部外面未調整、他はナデ	白茶色	5 ㎜の砂粒多含	良好	口縁部 1/4 残	摩滅が激しく調整不明確。
951	138	SZ59	I-17 SX1	土師器	杯	13.0	3.4		底部外面未調整、他はナデ	淡赤茶色	砂粒多含	良好	口縁部 1/4 残	摩滅が激しく調整不明確。
952	139	SZ59	I-17 SX1	土師器	杯	15.0	3.0		底部外面未調整、他はナデ	暗赤色	精良	良	口縁部 1/4 残	摩滅が激しく調整不明確。
953	128	SZ59	I-17 SX1	土師器	杯	18.0	3.7		底部外面未調整、他はナデ	赤茶色	精良	良好	口縁部 1/4 残	口縁端部外面に弱い沈線 1 条。
954	127	SZ59	I-17 SX1	土師器	杯	19.0	3.4		底部外面未調整、他はナデ	明赤茶色	精良	良好	口縁部 1/5 残	摩滅が激しく調整不明確。
955	141	SZ59	I-17 SX1	土師器	皿	13.8	1.9		底部外面未調整、他はナデ	暗茶色	砂粒多含	良好	口縁部 1/8 残	口縁端部外面に沈線 1 条。
956	140	SZ59	I-17 SX1	土師器	皿	16.0	2.0		底部外面未調整、他はナデ	白茶色	2 ㎜の砂粒若干含	良好	口縁部 1/8 残	口縁端部外面に沈線 1 条。摩滅が激しく調整不明確。
957	148	SZ59	I-17 SX1	土師器	甕	26.0	—		ハケメ	淡赤色	2 ㎜の砂粒多含	良	口縁部 1/7 残	
958	149	SZ59	I-17 SX1	土師器	甕	29.5	—		ハケメ	明赤色	2 ㎜の砂粒多含	良好	口縁部小片、頸部 1/8 残	摩滅が激しく調整不明確。
959	144	SZ59	I-17 SX1	土師器	甕	14.0	—		外面ナデ、内面ハケメ	白茶色	砂粒含	良好	口縁部 1/6 残	口縁端部外面に沈線 1 条。
960	147	SZ59	I-17 SX1	土師器	甕	16.0	—		—	暗赤茶色	1 ㎜の砂粒多含	良好	口縁部 1/8 残	
961	142	SZ59	I-17 SX1	土師器	甕	14.0	—		ハケメ	淡茶色	砂粒多含	良	口縁部 1/8 残	摩滅が激しく調整不明確。
962	145	SZ59	I-17 SX1	土師器	甕	14.0	—		ハケメ	外：明赤色 内：白茶色	砂粒多含	良好	口縁部 1/8 残	摩滅が激しく調整不明確。
963	146	SZ59	I-17 SX1	土師器	甕	15.0	—		ハケメ	外：白赤色 内：暗茶色	1 ㎜以下の砂粒多含	良	口縁部 1/8 残	摩滅が激しく調整不明確。
964	143	SZ59	I-17 SX1	土師器	甕	13.0	—		ハケメ	外：暗赤茶色 内：淡赤茶色	2 ㎜の砂粒若干含	良好	口縁部 1/4 残	外面摩滅が激しく調整不明確。
965	118	SZ59	I-17 SX1	須恵器	蓋	18.1	3.3		天井部外面未調整、他はロクロナデ	淡紫灰色	砂粒若干含	良好	口縁部 1/4 欠損	外面に火襷痕。
966	122	SZ59	I-17 SX1	須恵器	蓋	—	—		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗青灰色	1.5 ㎜の砂粒多含	良好	天井部 1/4 残	口縁部内面に自然釉がかかる。
967	121	SZ59	I-17 SX1	須恵器	蓋	—	—		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗青灰色	2 ㎜の砂粒若干含	良好	天井部完存	
968	119	SZ59	I-17 SX1	須恵器	蓋	24.2	—		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	淡灰色	砂粒若干含	良	口縁部 1/2 残	
969	120	SZ59	I-17 SX1	須恵器	蓋	14.0	—		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	紫灰色	3 ㎜の小石若干含	良好	口縁部 1/3 残	天井部外面に沈線 2 条。口縁端部外面に自然釉がかかる。
970	123	SZ59	I-17 SX1	須恵器	蓋	11.0	2.2		天井部・口縁端部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗青灰色	精良	良好	口縁部 1/4 残	外面に自然釉がかかる。
971	113	SZ59	I-17 SX1	須恵器	杯	12.6	3.0	底径 9.5	底部外面未調整、他はロクロナデ	淡紫灰色	精良	良好	口縁部 1/8、底部 1/4 残	口縁端部外面に自然釉がかかる。
972	115	SZ59	I-17 SX1	須恵器	杯	13.0	4.4	底径 9.4	底部外面未調整、他はロクロナデ	青灰色	3 ㎜の小石若干含	良好	口縁部 1/6、底部 1/2 残	底部外面に墨書「□」。
973	117	SZ59	I-17 SX1	須恵器	杯	—	—	底径 6.8	底部外面未調整、他はロクロナデ	灰色	3 ㎜の小石含	良好	底部 1/3 残	底部外面に墨書「廿」。
974	109	SZ59	I-17 SX1	須恵器	杯	14.0	3.9	高台径 6.8	底部外面未調整、他はロクロナデ	青灰色	精良	良好	1/5 残	

第 2 － 19 表　遺物観察表

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種	器形	法量（cm）			調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考
						口径	器高	その他						
975	110	SZ59	I-17 SX1	須恵器	杯	12.9	4.4	高台径 9.0	底部外面ナデ、他はロクロナデ	暗灰色	3㎜の砂粒含	良好	1/4 残	
976	107	SZ59	I-17 SX1	須恵器	杯	12.5	3.8	高台径 9.7	底部外面未調整、他はロクロナデ	暗青灰色	砂粒若干含	良好	1/2 残	
977	112	SZ59	I-17 SX1	須恵器	杯	12.4	4.1	高台径 8.2	底部外面未調整、他はロクロナデ	灰白色	精良	やや不良	ほぼ完形	摩滅が激しく調整不明確。
978	111	SZ59	I-17 SX1	須恵器	杯	13.8	4.0	高台径 9.5	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	外：暗青灰色 内：淡灰色	3㎜の砂粒多含	良	口縁部小片、底部 1/5 残	底部外面に墨書「大（?）」。
979	108	SZ59	I-17 SX1	須恵器	杯	17.8	5.5	高台径 14.1	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	青灰色	砂粒若干含	良好	1/2 残	外面に火襷痕。
980	114	SZ59	I-17 SX1	須恵器	杯	17.0	5.1	高台径 13.6	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	外：淡灰色 内：暗青灰色	精良	良好	口縁部小片、底部 1/2 残	
981	116	SZ59	I-17 SX1	須恵器	杯	14.4	5.0	高台径 9.8	底部外面未調整、他はロクロナデ	淡紫灰色	砂粒含	良好	口縁部 1/8、底部 1/4 残	外面に自然釉がかかる。
982	125	SZ59	I-17 SX1	須恵器	皿	14.0	2.1		底部外面未調整、他はロクロナデ	明灰色	4㎜の小石含	良好	口縁部 1/8 残	口縁端部に自然釉がかかる。外面に火襷痕。
983	124	SZ59	I-17 SX1	須恵器	皿	22.0	2.5		底部内外面ナデ、他はロクロナデ	外：灰色 内：暗青灰色	砂粒若干含	良好	口縁部 1/8 残	口縁端部外面に自然釉がかかる。
984	126	SZ59	I-17 SX1	須恵器	壺	—	—	高台径 13.7	ロクロナデ	明灰色	精良	良好	底部 1/4 残	高台接地面以外の外面に自然釉がかかる。
985	150	SZ59	I-17 SX1	埴輪	—	—	—		外：不明　内：ハケメ	白茶色	2.5㎜の砂粒多含	良	小片	土師質。
986	197	SB45	K-21 P1	土師器	杯	15.9	2.8		底部外面未調整、他はナデ	外：赤茶色 内：淡茶色	精良	良	口縁部小片	摩滅が激しく調整不明確。
987	199	SB45	L-28 P10	土師器	甕	28.2	—		ハケメ	白茶色	1.5㎜の砂粒多含	良好	口縁部小片	口縁端部外面に沈線 1 条。
988	195	SB45	L-28 P10	須恵器	蓋	15.8	2.6		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗青灰色	精良	良好	口縁部 1/8 残	外面に自然釉がかかる。
989	194	SB45	L-27 P8	須恵器	蓋	18.0	2.2		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗青灰色	5㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/6 残	外面に自然釉がかかる。
990	193	SB45	L-27 P7	須恵器	杯	12.2	3.8	底径 8.6	底部外面未調整、他はナデ	暗灰色	3㎜の砂粒若干含	良好	口縁部 1/3 残	
991	191	SB45	L-27 P7	須恵器	杯	14.4	4.6	高台径 8.0	ロクロナデ	淡灰色	3㎜の砂粒若干含	良好	口縁部 1/8、底部 1/4 残	
992	192	SB45	L-28 P5	須恵器	杯	15.0	4.3	高台径 9.6	ロクロナデ	淡紫灰色	精良	良好	口縁部小片、底部 1/6 残	外面一部に自然釉がかかる。
993	196	SB45	L-28 P5	須恵器	高杯	—	—		ロクロナデ	白灰色	精良	良好	筒部 3/4 残	
994	982	SE263	Q-35 SK6	須恵器	甕	47.0	—		外：タタキ後ナデ 内：同心円文後ナデ	明灰色	精良	良好	口縁部 1/7 残	
995	983	SE263	Q-35 SK6 上層	土師器	甕	12.8	11.8		体部外面下半ヘラケズリ、他はハケメ	白茶色	4㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/2 残	
996	980	SE263	Q-35 SK6	土師器	甕	18.0	—		体部内面一部ヘラケズリ	外：淡赤色 内：淡茶色	4㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/6 残	摩滅が激しく調整不明。
997	981	SE263	Q-35 SK6	須恵器	杯	17.0	4.2	高台径 13.2	底部外面未調整、他はロクロナデ	青灰色	4㎜の砂粒多含	良好	口縁部 1/4、底部 1/2 残	
998	1063	SB276	N-45 P1	石器	砥石	長 7.9	厚 1.0	重 63g	—	暗灰色	砂岩	—	完形	携帯用。
999	254	SB166	J-25 P5 掘形	土師器	蓋	15.8	2.9		ナデ？	白茶色	2㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/4 残	摩滅が激しく調整不明確。
1000	214	SB23	D-21 P3	土師器	甕	11.1	10.9		体部外面上半ハケメ、下半ヘラケズリ、内面ナデ	淡黄茶色	微砂若干含	良	口縁部小片、頸部 1/4 残	
1001	250	SB29	I-18 SK5	須恵器	杯	10.2	3.3		底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗青灰色	砂粒若干含	良好	口縁部 1/4 残	
1002	252	SB29	I-18 P10	須恵器	杯	—	—	高台径 10.0	ロクロナデ	淡灰色	3㎜の砂粒含	良好	底部 1/8 残	体部外面下端に墨書「大井」。
1003	201	SB29	I-18 P12	須恵器	杯	—	—	高台径 9.8	底部外面未調整、他はロクロナデ	白灰色	精良	やや不良	底部完存	底部外面に墨書「井買入」。
1004	203	SB29	J-17 P1	須恵器	壺	—	—	高台径 7.5	底部外面未調整、他はロクロナデ	淡紫灰色	3㎜の砂粒若干含	良好	底部完存	
1005	204	SB29	J-18 P10	土製品	土錘	3.0	8.1	残存重 56g	ナデ	茶色	精良	良	1/5 欠損	孔径 8 ㎜。
1006	205	SB29	J-17 P7	土製品	土錘	2.7	8.4	重 58g	未調整	暗茶色	5㎜の砂粒多含	良	完形	孔径 9 ㎜。
1007	206	SB29	J-18 P10	土製品	土錘	3.2	10.0	重 85.9g	ナデ	淡茶色	2㎜の砂粒若干含	良好	完形	孔径 5 ㎜。
1008	200	SB51	L-29 P4	須恵器	蓋	15.8	2.9		天井部外面未調整、他はロクロナデ	青灰色	精良	良好	天井部 1/4 残	天井部外面に墨書「大井」。
1009	213	SE50	M-27 SE6 No.1	須恵器	杯	12.5	2.9	底径 10.0	底部外面未調整、他はロクロナデ	暗灰色	精良	良好	完形	底部外面に墨書「大井」。内面に自然釉が厚くかかる。
1010	2030	SE50	M-27 SE6 ④	木製品	糸巻	幅 2.6	長 11.8	厚 1.0	—	—	—	—	完形	
1011	2044	SE50	M-27 SE6 ④	木製品	糸巻	幅 2.6	長 12.0	厚 1.0	—	—	—	—	完形	
1012	2045	SE50	M-27 SE6 ④	木製品	糸巻	幅 2.6	長 11.7	厚 1.0	—	—	—	—	完形	
1013	1018	SK220	S-49 SK4 ①	須恵器	杯	13.2	3.5	底径 9.4	底部外面未調整、他はロクロナデ	淡灰色	2㎜の砂粒若干含	良好	口縁部 1/3 残	
1014	1017	SK220	S-49 SK4	須恵器	杯	12.7	3.4	底径 9.6	底部外面未調整、他はロクロナデ	灰色	9㎜の小石含	良好	口縁部 1/2 残、底部完存	底部外面に墨書「男」。
1015	1062	SB164	P-38 P6 掘形	須恵器	円面硯	—	—	脚径 19.7	ロクロナデ	淡紫灰色	微砂含	良好	脚部 1/8 残	透孔 12 方。外面一部に自然釉がかかる。
1016	1057	SB184	K-36 P1	土師器	—	—	—	底径 27.0	外面ナデ、内面ハケメ	明淡茶色	2㎜の砂粒含	良	底部 1/3 残	注口直径 1.3cm。摩滅が激しく調整不明確。
1017	1102	SB199	S-38 P14	黒色土器	杯	17.6	3.8		外面未調整、内面ヘラミガキ	淡茶色	精良	良好	口縁部 1/8 残	口縁部内面に暗文。A 類。
1018	246	SK79	N-18 SK5 直上	黒色土器	椀	13.8	5.2		外面ナデ、内面ヘラミガキ	淡茶色	5㎜の小石含	良	口縁部 1/4 残、高台欠損	A 類。
1019	1040	SK230	U-39 SK1 上層	黒色土器	椀	16.1	5.5	高台径 8.5	外面未調整、内面ナデ	暗黄茶色	2㎜の砂粒多含	良	口縁部 1/6 残、底部完存	A 類。摩滅が激しく調整不明確。
1020	247	SB78	K-10 P5	黒色土器	椀	—	—	高台径 8.5	外面ナデ、内面ナデ？	淡茶色	微砂含	良	底部 1/3 残	底部内面に凸線 1 条。A 類。
1021	1104	SK160	P-42 P5	瓦器	椀	14.8	4.4	高台径 5.3	外面未調整、内面ヘラミガキ	暗灰色	精良	良好	口縁部 1/2 残	口縁端部内面に沈線 1 条。
1022	1049	SK238	O-43 SK6 No.3	瓦器	椀	14.2	4.5	高台径 5.3	外面未調整、内面ヘラミガキ	黒色	精良	良好	完形	口縁部に燻しのかからない部分あり。口縁端部内面に沈線 1 条。
1023	1055	SK233	R-47 SK4	瓦器	椀	14.6	4.0	高台径 5.5	外面未調整、内面ヘラミガキ	黒色	精良	やや不良	ほぼ完形	口縁端部内面に沈線 1 条。摩滅のためミガキ不明瞭。
1024	1046	SK239	P-43 P5	瓦器	椀	14.8	4.5	高台径 4.7	外面一部、内面ヘラミガキ、他は未調整	明黒灰色	精良	良好	ほぼ完形	口縁端部内面に沈線 1 条。
1025	1053	SK234	S-47 SK1	瓦器	椀	15.9	4.6	高台径 5.0	外面未調整、内面ヘラミガキ	黒色	精良	やや不良	口縁部 1/4 欠損	口縁端部内面に沈線 1 条。摩滅が激しく調整不明確。
1026	1050	SK235	Q-45 SK8	瓦器	椀	15.1	4.3	高台径 5.3	外面未調整、内面ヘラミガキ	外：淡赤茶色 内：黒色	精良	不良	完形	口縁端部内面に沈線 1 条。外面燻し不良。

第 2 － 20 表　遺物観察表

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種	器形	法量（cm）			調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考
						口径	器高	その他						
922	182	SD58	P-16 旧河道	土師器	甑	—	—	底径 19.1	外面ヘラケズリ、内面ハケメ	白赤色	砂粒多含	良好	底部 1/8 残	蒸気孔は円形。
923	178	SD58	O-15 旧河道肩	土師器	盤	40.8	16.6		外面ヘラケズリ、内面ハケメ	白茶色	5 ㎜の砂粒多含	良	口縁部 1/6 残	3 足。口縁上端部に沈線 1 条。
924	164	SD58	P-16 旧河道	須恵器	蓋	21.7	5.6		天井部外面一部ロクロケズリ、他はロクロナデ	白灰色	砂粒多含	不良	天井部 1/2 残	摩滅が激しく調整不明確。
925	162	SD58	P-19 旧河道	須恵器	蓋	—	—		天井部外面一部ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗紫灰色	砂粒多含	良好	天井部 1/8 残	
926	163	SD58	P-20 旧河道	須恵器	蓋	16.2	3.2		天井部外面一部ロクロケズリ、他はロクロナデ	明褐色	2 ㎜の砂粒含	良好	口縁部一部欠損	天井部外面に墨書「土（?）」。
927	161	SD58	O-15 旧河道肩	須恵器	蓋	19.0	2.4		天井部外面一部ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	砂粒多含	良好	口縁部 1/6 残	
928	160	SD58	P-18 旧河道	須恵器	蓋	14.0	1.6		天井部外面一部未調整、他はロクロナデ	暗灰色	微砂若干含	良好	口縁部 1/6 残	
929	157	SD58	P-20 旧河道	須恵器	杯	12.0	4.4	底径 7.4	底部外面未調整、他はロクロナデ	明灰色	微砂若干含	良好	口縁部 1/4、底部 1/3 残	
930	158	SD58	P-18 旧河道	須恵器	杯	12.0	3.3	底径 7.7	底部外面未調整、他はロクロナデ	暗灰色	2 ㎜の砂粒若干含	良好	口縁部 1/6、底部 1/5 残	
931	156	SD58	P-20 旧河道	須恵器	杯	12.4	3.0	底径 7.6	底部外面未調整、他はロクロナデ	灰色	1 ㎜の砂粒若干含	良好	口縁部 1/2 残、底部若干欠損	
932	159	SD58	P-16 旧河道	須恵器	杯	12.5	3.5	底径 9.0	底部外面未調整、他はロクロナデ	暗青灰色	微砂含	良好	口縁部 1/4 残	
933	153	SD58	P-21 旧河道	須恵器	杯	11.5	3.7	高台径 8.2	底部外面未調整、他はロクロナデ	淡紫灰色	2 ㎜の砂粒若干含	良好	口縁部 1/3、底部 1/2 残	
934	154	SD58	P-20 旧河道	須恵器	杯	16.8	4.2	高台径 10.0	ロクロナデ	暗青灰色	2 ㎜の砂粒若干含	良好	口縁部小片、底部 1/4 残	体部外面中央を板状工具でロクロナデ。
935	152	SD58	P-19 旧河道	須恵器	杯	14.5	4.5	高台径 10.6	底部外面未調整、他はロクロナデ	暗紫灰色	3 ㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/4 残、底部ほぼ完存	体部下端を 1 周ロクロケズリ。
936	155	SD58	O-18 旧河道肩	須恵器	杯	15.6	4.1	高台径 10.0	ロクロナデ	白灰色	砂粒若干含	良好	口縁部小片、底部 1/4 残	
937	151	SD58	O-17 旧河道肩	須恵器	杯	—	—	高台径 8.0	底部外面未調整、他はロクロナデ	暗青灰色	微砂含	良好	底部ほぼ完存	底部外面に墨書「千」か「十」。
938	166	SD58	P-15 旧河道	須恵器	高杯	—	—		杯部外面下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	4 ㎜の小石含	良好	口縁部、脚部欠損	
939	167	SD58	P-19 旧河道	須恵器	壺	—	—		ロクロナデ	紫灰色	精良	良好	頸部完存	頸部に凹線 1 条。
940	180	SD58	P-21 旧河道	須恵器	壺	8.6	13.7	高台径 10.7	ロクロナデ	暗青灰色	2 ㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/5、底部 1/4 残	外面に自然釉がかかる。
941	168	SD58	P-18 旧河道	坩堝	鉢	12.5	—		未調整	灰白色	5 ㎜の小石多含	やや不良	口縁部 1/5 残	内面に鉄滓の付着が激しい。
942	136	SZ59	I-17 SX1	土師器	杯	12.0	2.7		底部外面未調整、他はナデ	暗赤色	2 ㎜の砂粒多含	良好	口縁部 1/6 残	摩滅が激しく調整不明確。
943	132	SZ59	I-17 SX1	土師器	杯	13.0	2.7		底部外面未調整、他はナデ	淡赤色	砂粒多含	良好	口縁部 1/4 残	
944	137	SZ59	I-17 SX1	土師器	杯	16.0	3.2		底部外面未調整、他はナデ	白赤色	精良	良好	口縁部 1/4 残	
945	133	SZ59	I-17 SX1	土師器	杯	15.0	2.8		底部外面未調整、他はナデ	淡赤茶色	3 ㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/6 残	
946	131	SZ59	I-17 SX1	土師器	杯	14.0	2.9		底部外面未調整、他はナデ	外：淡茶色 内：白茶色	砂粒若干含	良	口縁部 1/4 残	摩滅が激しく調整不明確。
947	134	SZ59	I-17 SX1	土師器	杯	13.0	2.9		底部外面未調整、他はナデ	白茶色	精良	良好	口縁部 1/6 残	
948	135	SZ59	I-17 SX1	土師器	杯	14.0	2.7		底部外面未調整、他はナデ	淡赤色	微砂含	良好	口縁部 1/8 残	
949	129	SZ59	I-17 SX1	土師器	杯	17.0	3.9		底部外面未調整、他はナデ	赤茶色	精良	良好	口縁部 1/8 残	
950	130	SZ59	I-17 SX1	土師器	杯	14.0	3.4		底部外面未調整、他はナデ	白茶色	5 ㎜の砂粒多含	良好	口縁部 1/4 残	摩滅が激しく調整不明確。
951	138	SZ59	I-17 SX1	土師器	杯	13.0	3.4		底部外面未調整、他はナデ	淡赤茶色	砂粒多含	良好	口縁部 1/4 残	摩滅が激しく調整不明確。
952	139	SZ59	I-17 SX1	土師器	杯	15.0	3.0		底部外面未調整、他はナデ	暗赤色	精良	良	口縁部 1/4 残	摩滅が激しく調整不明確。
953	128	SZ59	I-17 SX1	土師器	杯	18.0	3.7		底部外面未調整、他はナデ	赤茶色	精良	良好	口縁部 1/4 残	口縁端部外面に弱い沈線 1 条。
954	127	SZ59	I-17 SX1	土師器	杯	19.0	3.4		底部外面未調整、他はナデ	明赤茶色	精良	良好	口縁部 1/5 残	摩滅が激しく調整不明確。
955	141	SZ59	I-17 SX1	土師器	皿	13.8	1.9		底部外面未調整、他はナデ	暗茶色	砂粒多含	良好	口縁部 1/8 残	口縁端部外面に沈線 1 条。
956	140	SZ59	I-17 SX1	土師器	皿	16.0	2.0		底部外面未調整、他はナデ	白茶色	2 ㎜の砂粒若干含	良好	口縁部 1/8 残	口縁端部外面に沈線 1 条。摩滅が激しく調整不明確。
957	148	SZ59	I-17 SX1	土師器	甕	26.0	—		ハケメ	淡赤色	2 ㎜の砂粒多含	良	口縁部 1/7 残	
958	149	SZ59	I-17 SX1	土師器	甕	29.5	—		ハケメ	明赤色	2 ㎜の砂粒多含	良好	口縁部小片、頸部 1/8 残	摩滅が激しく調整不明確。
959	144	SZ59	I-17 SX1	土師器	甕	14.0	—		外面ナデ、内面ハケメ	白茶色	砂粒含	良好	口縁部 1/6 残	口縁端部外面に沈線 1 条。
960	147	SZ59	I-17 SX1	土師器	甕	16.0	—		—	暗赤茶色	1 ㎜の砂粒多含	良好	口縁部 1/8 残	
961	142	SZ59	I-17 SX1	土師器	甕	14.0	—		ハケメ	淡茶色	砂粒多含	良	口縁部 1/8 残	摩滅が激しく調整不明確。
962	145	SZ59	I-17 SX1	土師器	甕	14.0	—		ハケメ	外：明赤色 内：白茶色	砂粒多含	良好	口縁部 1/8 残	摩滅が激しく調整不明確。
963	146	SZ59	I-17 SX1	土師器	甕	15.0	—		ハケメ	外：白赤色 内：暗茶色	1 ㎜以下の砂粒多含	良	口縁部 1/8 残	摩滅が激しく調整不明確。
964	143	SZ59	I-17 SX1	土師器	甕	13.0	—		ハケメ	外：暗赤茶色 内：淡赤茶色	2 ㎜の砂粒若干含	良好	口縁部 1/4 残	外面摩滅が激しく調整不明確。
965	118	SZ59	I-17 SX1	須恵器	蓋	18.1	3.3		天井部外面未調整、他はロクロナデ	淡紫灰色	砂粒若干含	良好	口縁部 1/4 欠損	外面に火襷痕。
966	122	SZ59	I-17 SX1	須恵器	蓋	—	—		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗青灰色	1.5 ㎜の砂粒多含	良好	天井部 1/4 残	口縁部内面に自然釉がかかる。
967	121	SZ59	I-17 SX1	須恵器	蓋	—	—		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗青灰色	2 ㎜の砂粒若干含	良好	天井部完存	
968	119	SZ59	I-17 SX1	須恵器	蓋	24.2	—		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	淡灰色	砂粒若干含	良	口縁部 1/2 残	
969	120	SZ59	I-17 SX1	須恵器	蓋	14.0	—		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	紫灰色	3 ㎜の小石若干含	良好	口縁部 1/3 残	天井部外面に沈線 2 条。口縁端部外面に自然釉がかかる。
970	123	SZ59	I-17 SX1	須恵器	蓋	11.0	2.2		天井部・口縁端部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗青灰色	精良	良好	口縁部 1/4 残	外面に自然釉がかかる。
971	113	SZ59	I-17 SX1	須恵器	杯	12.6	3.0	底径 9.5	底部外面未調整、他はロクロナデ	淡紫灰色	精良	良好	口縁部 1/8、底部 1/4 残	口縁端部外面に自然釉がかかる。
972	115	SZ59	I-17 SX1	須恵器	杯	13.0	4.4	底径 9.4	底部外面未調整、他はロクロナデ	青灰色	3 ㎜の小石若干含	良好	口縁部 1/6、底部 1/2 残	底部外面に墨書「□」。
973	117	SZ59	I-17 SX1	須恵器	杯	—	—	底径 6.8	底部外面未調整、他はロクロナデ	灰色	3 ㎜の小石含	良好	底部 1/3 残	底部外面に墨書「廿」。
974	109	SZ59	I-17 SX1	須恵器	杯	14.0	3.9	高台径 6.8	底部外面未調整、他はロクロナデ	青灰色	精良	良好	1/5 残	

第 2 － 19 表　遺物観察表

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種	器形	法量（cm）			調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考
						口径	器高	その他						
975	110	SZ59	I-17 SX1	須恵器	杯	12.9	4.4	高台径 9.0	底部外面ナデ、他はロクロナデ	暗灰色	3㎜の砂粒含	良好	1/4 残	
976	107	SZ59	I-17 SX1	須恵器	杯	12.5	3.8	高台径 9.7	底部外面未調整、他はロクロナデ	暗青灰色	砂粒若干含	良好	1/2 残	
977	112	SZ59	I-17 SX1	須恵器	杯	12.4	4.1	高台径 8.2	底部外面未調整、他はロクロナデ	灰白色	精良	やや不良	ほぼ完形	摩滅が激しく調整不明確。
978	111	SZ59	I-17 SX1	須恵器	杯	13.8	4.0	高台径 9.5	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	外：暗青灰色 内：淡灰色	3㎜の砂粒多含	良	口縁部小片、底部 1/5 残	底部外面に墨書「大（?）」。
979	108	SZ59	I-17 SX1	須恵器	杯	17.8	5.5	高台径 14.1	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	青灰色	砂粒若干含	良好	1/2 残	外面に火襷痕。
980	114	SZ59	I-17 SX1	須恵器	杯	17.0	5.1	高台径 13.6	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	外：淡灰色 内：暗青灰色	精良	良好	口縁部小片、底部 1/2 残	
981	116	SZ59	I-17 SX1	須恵器	杯	14.4	5.0	高台径 9.8	底部外面未調整、他はロクロナデ	淡紫灰色	砂粒含	良好	口縁部 1/8、底部 1/4 残	外面に自然釉がかかる。
982	125	SZ59	I-17 SX1	須恵器	皿	14.0	2.1		底部外面未調整、他はロクロナデ	明灰色	4㎜の小石含	良好	口縁部 1/8 残	口縁端部に自然釉がかかる。外面に火襷痕。
983	124	SZ59	I-17 SX1	須恵器	皿	22.0	2.5		底部内外面ナデ、他はロクロナデ	外：灰色 内：暗青灰色	砂粒若干含	良好	口縁部 1/8 残	口縁端部外面に自然釉がかかる。
984	126	SZ59	I-17 SX1	須恵器	壺	—	—	高台径 13.7	ロクロナデ	明灰色	精良	良好	底部 1/4 残	高台接地面以外の外面に自然釉がかかる。
985	150	SZ59	I-17 SX1	埴輪	—	—	—		外：不明　内：ハケメ	白茶色	2.5㎜の砂粒多含	良	小片	土師質。
986	197	SB45	K-21 P1	土師器	杯	15.9	2.8		底部外面未調整、他はナデ	外：赤茶色 内：淡茶色	精良	良	口縁部小片	摩滅が激しく調整不明確。
987	199	SB45	L-28 P10	土師器	甕	28.2	—		ハケメ	白茶色	1.5㎜の砂粒多含	良好	口縁部小片	口縁端部外面に沈線 1 条。
988	195	SB45	L-28 P10	須恵器	蓋	15.8	2.6		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗青灰色	精良	良好	口縁部 1/8 残	外面に自然釉がかかる。
989	194	SB45	L-27 P8	須恵器	蓋	18.0	2.2		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗青灰色	5㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/6 残	外面に自然釉がかかる。
990	193	SB45	L-27 P7	須恵器	杯	12.2	3.8	底径 8.6	底部外面未調整、他はナデ	暗灰色	3㎜の砂粒若干含	良好	口縁部 1/3 残	
991	191	SB45	L-27 P7	須恵器	杯	14.4	4.6	高台径 8.0	ロクロナデ	淡灰色	3㎜の砂粒若干含	良好	口縁部 1/8、底部 1/4 残	
992	192	SB45	L-28 P5	須恵器	杯	15.0	4.3	高台径 9.6	ロクロナデ	淡紫灰色	精良	良好	口縁部小片、底部 1/6 残	外面一部に自然釉がかかる。
993	196	SB45	L-28 P5	須恵器	高杯	—	—		ロクロナデ	白灰色	精良	良好	筒部 3/4 残	
994	982	SE263	Q-35 SK6	須恵器	甕	47.0	—		外：タタキ後ナデ 内：同心円文後ナデ	明灰色	精良	良好	口縁部 1/7 残	
995	983	SE263	Q-35 SK6 上層	土師器	甕	12.8	11.8		体部外面下半ヘラケズリ、他はハケメ	白茶色	4㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/2 残	
996	980	SE263	Q-35 SK6	土師器	甕	18.0	—		体部内面一部ヘラケズリ	外：淡赤色 内：淡茶色	4㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/6 残	摩滅が激しく調整不明。
997	981	SE263	Q-35 SK6	須恵器	杯	17.0	4.2	高台径 13.2	底部外面未調整、他はロクロナデ	青灰色	4㎜の砂粒多含	良好	口縁部 1/4、底部 1/2 残	
998	1063	SB276	N-45 P1	石器	砥石	長 7.9	厚 1.0	重 63g	—	暗灰色	砂岩	—	完形	携帯用。
999	254	SB166	J-25 P5 掘形	土師器	蓋	15.8	2.9		ナデ？	白茶色	2㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/4 残	摩滅が激しく調整不明確。
1000	214	SB23	D-21 P3	土師器	甕	11.1	10.9		体部外面上半ハケメ、下半ヘラケズリ、内面ナデ	淡黄茶色	微砂若干含	良	口縁部小片、頸部 1/4 残	
1001	250	SB29	I-18 SK5	須恵器	杯	10.2	3.3		底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗青灰色	砂粒若干含	良好	口縁部 1/4 残	
1002	252	SB29	I-18 P10	須恵器	杯	—	—	高台径 10.0	ロクロナデ	淡灰色	3㎜の砂粒含	良好	底部 1/8 残	体部外面下端に墨書「大井」。
1003	201	SB29	I-18 P12	須恵器	杯	—	—	高台径 9.8	底部外面未調整、他はロクロナデ	白灰色	精良	やや不良	底部完存	底部外面に墨書「井買入」。
1004	203	SB29	J-17 P1	須恵器	壺	—	—	高台径 7.5	底部外面未調整、他はロクロナデ	淡紫灰色	3㎜の砂粒若干含	良好	底部完存	
1005	204	SB29	J-18 P10	土製品	土錘	3.0	8.1	残存重 56g	ナデ	茶色	精良	良	1/5 欠損	孔径 8 ㎜。
1006	205	SB29	J-17 P7	土製品	土錘	2.7	8.4	重 58g	未調整	暗茶色	5㎜の砂粒多含	良	完形	孔径 9 ㎜。
1007	206	SB29	J-18 P10	土製品	土錘	3.2	10.0	重 85.9g	ナデ	淡茶色	2㎜の砂粒若干含	良好	完形	孔径 5 ㎜。
1008	200	SB51	L-29 P4	須恵器	蓋	15.8	2.9		天井部外面未調整、他はロクロナデ	青灰色	精良	良好	天井部 1/4 残	天井部外面に墨書「大井」。
1009	213	SE50	M-27 SE6 No.1	須恵器	杯	12.5	2.9	底径 10.0	底部外面未調整、他はロクロナデ	暗灰色	精良	良好	完形	底部外面に墨書「大井」。内面に自然釉が厚くかかる。
1010	2030	SE50	M-27 SE6 ④	木製品	糸巻	幅 2.6	長 11.8	厚 1.0	—	—	—	—	完形	
1011	2044	SE50	M-27 SE6 ④	木製品	糸巻	幅 2.6	長 12.0	厚 1.0	—	—	—	—	完形	
1012	2045	SE50	M-27 SE6 ④	木製品	糸巻	幅 2.6	長 11.7	厚 1.0	—	—	—	—	完形	
1013	1018	SK220	S-49 SK4 ①	須恵器	杯	13.2	3.5	底径 9.4	底部外面未調整、他はロクロナデ	淡灰色	2㎜の砂粒若干含	良好	口縁部 1/3 残	
1014	1017	SK220	S-49 SK4	須恵器	杯	12.7	3.4	底径 9.6	底部外面未調整、他はロクロナデ	灰色	9㎜の小石含	良好	口縁部 1/2 残、底部完存	底部外面に墨書「男」。
1015	1062	SB164	P-38 P6 掘形	須恵器	円面硯	—	—	脚径 19.7	ロクロナデ	淡紫灰色	微砂含	良好	脚部 1/8 残	透孔 12 方。外面一部に自然釉がかかる。
1016	1057	SB184	K-36 P1	土師器	—	—	—	底径 27.0	外面ナデ、内面ハケメ	明淡茶色	2㎜の砂粒含	良	底部 1/3 残	注口直径 1.3cm。摩滅が激しく調整不明確。
1017	1102	SB199	S-38 P14	黒色土器	杯	17.6	3.8		外面未調整、内面ヘラミガキ	淡茶色	精良	良好	口縁部 1/8 残	口縁部内面に暗文。A 類。
1018	246	SK79	N-18 SK5 直上	黒色土器	椀	13.8	5.2		外面ナデ、内面ヘラミガキ	淡茶色	5㎜の小石含	良	口縁部 1/4 残、高台欠損	A 類。
1019	1040	SK230	U-39 SK1 上層	黒色土器	椀	16.1	5.5	高台径 8.5	外面未調整、内面ナデ	暗黄茶色	2㎜の砂粒多含	良	口縁部 1/6 残、底部完存	A 類。摩滅が激しく調整不明確。
1020	247	SB78	K-10 P5	黒色土器	椀	—	—	高台径 8.5	外面ナデ、内面ナデ？	淡茶色	微砂含	良	底部 1/3 残	底部内面に凸線 1 条。A 類。
1021	1104	SK160	P-42 P5	瓦器	椀	14.8	4.4	高台径 5.3	外面未調整、内面ヘラミガキ	暗灰色	精良	良好	口縁部 1/2 残	口縁端部内面に沈線 1 条。
1022	1049	SK238	O-43 SK6 No.3	瓦器	椀	14.2	4.5	高台径 5.3	外面未調整、内面ヘラミガキ	黒色	精良	良好	完形	口縁部に燻しのかからない部分あり。口縁端部内面に沈線 1 条。
1023	1055	SK233	R-47 SK4	瓦器	椀	14.6	4.0	高台径 5.5	外面未調整、内面ヘラミガキ	黒色	精良	やや不良	ほぼ完形	口縁端部内面に沈線 1 条。摩滅のためミガキ不明瞭。
1024	1046	SK239	P-43 P5	瓦器	椀	14.8	4.5	高台径 4.7	外面一部、内面ヘラミガキ、他は未調整	明黒灰色	精良	良好	ほぼ完形	口縁端部内面に沈線 1 条。
1025	1053	SK234	S-47 SK1	瓦器	椀	15.9	4.6	高台径 5.0	外面未調整、内面ヘラミガキ	黒色	精良	やや不良	口縁部 1/4 欠損	口縁端部内面に沈線 1 条。摩滅が激しく調整不明確。
1026	1050	SK235	Q-45 SK8	瓦器	椀	15.1	4.3	高台径 5.3	外面未調整、内面ヘラミガキ	外：淡赤茶色 内：黒色	精良	不良	完形	口縁端部内面に沈線 1 条。外面燻し不良。

第 2 － 20 表　遺物観察表

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種	器形	法量（cm）			調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考
						口径	器高	その他						
1131	1080	—	U-51 包含層下	須恵器	蓋	11.5	2.2		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗紫灰色	2㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/4 残	
1132	1090	—	U-51 包含層下	須恵器	蓋	10.3	2.3		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	灰色	精良	良好	完形	
1133	1078	—	ぁ-46 包含層	須恵器	蓋	14.6	2.9		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	灰色	4㎜の小石若干含	良好	口縁部 1/6 残	
1134	284	—	Q-19 包含層	須恵器	蓋	13.2	2.6		天井部外面未調整、他はロクロナデ	灰色	微砂若干含	良好	口縁部 1/4 残	口縁端部に自然釉がかかる。焼膨が多い。
1135	282	—	C-18 包含層	須恵器	蓋	13.2	2.6		ロクロナデ	暗青灰色	2㎜の砂粒多含	良好	口縁部 1/3 欠損	口縁端部に自然釉がかかる。
1136	283	—	P-20 包含層	須恵器	蓋	15.7	3.4		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	白灰色	3㎜の砂粒若干含	良好	口縁部 2/3 残	
1137	289	—	H-8 包含層	須恵器	蓋	16.2	2.8		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	砂粒若干含	良好	口縁部大半欠損	内面煤付着。
1138	292	—	H-18 包含層	須恵器	蓋	16.2	3.2		ロクロナデ	淡灰色	微砂含	良好	口縁部大半欠損	
1139	293	—	F-10 包含層	須恵器	蓋	17.4	2.8		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	紫灰色	2㎜の砂粒若干含	良好	口縁部若干欠損	
1140	297	—	G-18 包含層	須恵器	蓋	—	—		ロクロナデ	暗灰色	微砂若干含	良好	天井部 3/4 残	天井部外面に墨書「吉」。
1141	299	—	F-19 包含層	須恵器	蓋	17.6	2.1		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	微砂含	良好	口縁部 1/8 残	天井部外面に墨書「大井」。
1142	294	—	H-10 包含層	須恵器	蓋	19.5	2.9		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	紫灰色	4㎜の小石含	良好	口縁部 1/3 残	
1143	290	—	F-21 包含層	須恵器	蓋	11.0	1.9		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗紫灰色	3㎜の砂粒多含	良好	口縁部 1/3 残	
1144	286	—	I-10 包含層	須恵器	蓋	13.0	1.7		内面ロクロナデ、外面不明	灰緑～暗黄色	精良	良好	口縁部大半欠損	外面に自然釉や窯壁が厚く付着し、調整不明。
1145	285	—	I-17 包含層	須恵器	蓋	12.8	2.4		ロクロナデ	暗灰色	3㎜の砂粒多含	良好	口縁部 1/4 残	口縁端部に自然釉がかかる。
1146	298	—	H-9 包含層	須恵器	蓋	15.1	1.5		天井部外面未調整、他はロクロナデ	暗灰色	3㎜の小石若干含	良好	口縁部 1/2 残	
1147	364	—	H-20 包含層	須恵器	蓋	15.0	3.8		ロクロナデ	淡紫灰色	精良	良好	口縁部 1/4 残	口縁部外面に自然釉がかかる。
1148	365	—	F-21 包含層	須恵器	蓋	13.9	3.4		ロクロナデ	淡紫灰色	精良	良好	口縁部 1/6 残	外面に自然釉がかかる。
1149	261	—	G-6 包含層	須恵器	杯	11.0	5.4		底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	外：紫灰色 内：暗灰色	微砂含	良好	口縁部 1/6 残	
1150	260	—	G-7 包含層	須恵器	杯	11.5	—		ロクロナデ	暗紫灰色	精良	良好	口縁部小片、受部 1/5 残	
1151	267	—	L-24 包含層	須恵器	杯	11.0	5.0		底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	灰色	3㎜の砂粒多含	良好	口縁部小片、受部 1/2 残	
1152	262	—	P-21 包含層	須恵器	杯	12.5	5.1		底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	淡灰色	砂粒若干含	良好	口縁部小片、受部 1/5 残	底部外面に自然釉がかかる。
1153	1097	—	ぁ-52 包含層	須恵器	杯	15.3	4.0		底部外面ヘラケズリ、他はロクロナデ	淡青灰色	2㎜の砂粒若干含	良好	口縁部 1/10 残	
1154	296	—	E-15 包含層	須恵器	杯	11.5	3.7		底部外面未調整、他はロクロナデ	淡紫灰色	砂粒若干含	良好	口縁部 1/4 残	
1155	291	—	D-15 包含層	須恵器	杯	10.8	3.6		底部外面未調整、他はロクロナデ	灰色	3㎜の小石含	良好	口縁部 1/2 残	
1156	263	—	J-17 包含層	須恵器	杯	9.0	2.7		底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	砂粒含	良好	口縁部 1/4 残	受部外面に自然釉がかかる。
1157	273	—	O-32 包含層	須恵器	杯	11.0	3.4		底部外面未調整、他はロクロナデ	灰色	4㎜の小石含	良好	口縁部 1/4 残	
1158	1075	—	X-49 包含層	須恵器	杯	11.3	3.4		底部外面未調整、他はロクロナデ	明紫灰色	2㎜の砂粒若干含	良好	口縁部 1/4 欠損	外面に自然釉がかかる。
1159	269	—	E-17 包含層	須恵器	杯	12.0	3.2		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗青灰色	2㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/4 欠損	
1160	278	—	R-32 包含層	須恵器	杯	11.5	3.4		底部外面未調整、他はロクロナデ	淡灰色	3㎜の砂粒多含	良好	口縁部 1/2 残	
1161	270	—	I-11 包含層	須恵器	杯	12.0	3.2		底部外面未調整、他はロクロナデ	暗青灰色	微砂若干含	良好	口縁部 1/4 残	底部外面に記号「×」。
1162	264	—	O-14 包含層	須恵器	杯	12.0	3.6		底部外面未調整、他はロクロナデ	淡灰色	2㎜の砂粒若干含	良好	口縁部 1/4 残	
1163	268	—	H-10 包含層	須恵器	杯	12.0	3.1		底部外面未調整、他はロクロナデ	白灰色	精良	やや不良	ほぼ完形	内面煤付着。
1164	362	—	I-18 包含層	須恵器	杯	—	—	底径 13.4	底部外面未調整、他はロクロナデ	淡青灰色	微砂若干含	良好	底部 1/4 残	底部外面に墨書「里□」。
1165	363	—	I-16 包含層	須恵器	杯	—	—	底径 11.5	底部外面未調整、他はロクロナデ	淡茶色	4㎜の小石若干含	不良	底部 1/4 残	底部外面に線刻「安」。
1166	265	—	I-7 包含層	須恵器	杯	13.0	3.4		底部外面未調整、他はロクロナデ	淡灰色	3㎜の小石含	良好	口縁部 1/4 残	
1167	266	—	H-17 包含層	須恵器	杯	15.0	3.5		底部外面未調整、他はロクロナデ	白灰色	2㎜の小石若干含	良好	口縁部 1/6 残	
1168	274	—	D-8 包含層	須恵器	杯	8.8	2.6		底部外面未調整、他はロクロナデ	淡紫灰色	砂粒若干含	良好	口縁部小片、底部 1/4 残	底部外面に火襷。
1169	314	—	G-21 包含層	須恵器	杯	12.6	3.5	高台径 8.0	底部外面未調整、他はロクロナデ	暗青灰色	砂粒若干含	良好	口縁部若干欠損、底部完存	
1170	316	—	D-9 包含層	須恵器	杯	11.5	3.8	高台径 6.7	底部外面未調整、他はロクロナデ	淡紫灰色	精良	良好	口縁部小片、底部 1/3 残	
1171	302	—	I-16 包含層	須恵器	杯	12.0	3.9	高台径 8.0	底部外面未調整、他はロクロナデ	淡紫灰色	4㎜の小石若干含	良好	口縁部小片、底部 1/4 残	外面に自然釉が若干かかる。
1172	309	—	I-17 包含層	須恵器	杯	12.0	4.0	高台径 8.0	底部外面未調整、他はロクロナデ	紫灰色	微砂若干含	良好	口縁部小片、底部 1/4 残	
1173	310	—	P-20 包含層	須恵器	杯	9.8	3.4	高台径 6.3	底部外面未調整、他はロクロナデ	外：暗灰色 内：淡灰色	3㎜の小石若干含	良好	口縁部 1/4 残	
1174	304	—	I-17 包含層	須恵器	杯	11.4	3.4	高台径 9.0	底部外面未調整、他はロクロナデ	淡紫灰色	精良	良好	口縁部小片、底部 1/4 残	外面に自然釉がかかる。
1175	321	—	E-15 包含層	須恵器	杯	—	—	高台径 9.7	底部外面未調整、他はロクロナデ	灰色	4㎜の小石若干含	良好	底部 1/6 残	底部外面に墨書「□□」。
1176	315	—	G-16 包含層	須恵器	杯	13.1	4.4	高台径 9.8	底部外面未調整、他はロクロナデ	紫灰色	3㎜の砂粒他含	良好	口縁部 1/3 欠損、底部若干欠損	
1177	318	—	A-3 包含層	須恵器	杯	13.1	4.2	高台径 9.4	底部外面未調整、他はロクロナデ	灰色	砂粒若干含	良好	口縁部 1/3 残	
1178	317	—	F-21 包含層	須恵器	杯	10.7	4.3	高台径 6.2	底部外面未調整、他はロクロナデ	紫白色	精良	良好	口縁部 1/4 残、底部 1/2 残	外面に自然釉が弱くかかる。
1179	1081	—	U-51 包含層下	須恵器	杯	15.8	4.5	高台径 10.7	底部外面未調整、他はロクロナデ	青灰色	2㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/4 残	外面に自然釉が厚くかかる。
1180	300	—	I-17 包含層	須恵器	杯	15.8	5.1	高台径 11.0	底部外面未調整、他はロクロナデ	淡紫灰色	精良	良好	口縁部 1/8 残	外面に自然釉がかかる。
1181	320	—	H-16 包含層	須恵器	杯	—	—	高台径 9.8	底部外面未調整、他はロクロナデ	灰色	微砂含	良好	底部 1/4 残	底部外面に墨書「田中」。
1182	319	—	H-19 包含層	須恵器	杯	—	—	高台径 10.0	底部外面未調整、他はロクロナデ	淡灰色	精良	良好	底部 1/4 残	底部外面に墨書「秋」。

第２－23表　遺物観察表

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種	器形	法量（cm）			調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考
						口径	器高	その他						
1183	311	—	P-19 包含層	須恵器	杯	15.0	4.0	高台径 10.8	底部外面未調整、他はロクロナデ	白灰色	微砂含	不良	口縁部 1/4 残	外面に自然釉が弱くかかる。
1184	301	—	H-17 包含層	須恵器	杯	18.4	5.6	高台径 12.8	底部外面未調整、他はロクロナデ	灰色	微砂含	良好	口縁部小片、底部 1/6 残	
1185	313	—	K-23 包含層	須恵器	杯	18.0	5.6	高台径 12.5	底部外面ナデ、他はロクロナデ	暗灰色	3 ㎜の砂粒若干含	良好	口縁部 1/4 残、底部 1/2 残	
1186	1083	—	U-51 包含層下	須恵器	杯	—	—	高台径 14.8	底部外面未調整、体部下半ロクロケズリ	淡灰色	3 ㎜の砂粒含	良好	底部 1/4 残	
1187	312	—	I-17 包含層	須恵器	杯	20.0	4.6		ロクロナデ	淡灰色	微砂含	やや不良	口縁部 1/7 残	
1188	349	—	R-18 包含層	須恵器	Ⅲ	12.6	2.2		底部外面未調整、他はロクロナデ	淡灰色	精良	良好	口縁部 1/8 残	口縁部内面に自然釉がかかる。
1189	348	—	I-18 包含層	須恵器	Ⅲ	23.0	2.6		底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗青灰色	微砂含	良好	口縁部 1/6 残	外面に火襷。
1190	350	—	O-9 包含層	須恵器	Ⅲ	24.0	2.4		底部外面未調整、他はロクロナデ	茶白色	砂粒若干含	不良	口縁部 1/6 残	底部外面一部にタタキ。酸化焼成。
1191	295	—	H-17 包含層	須恵器	Ⅲ	25.7	3.5		底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	淡灰色	2 ㎜の砂粒含	良好	口縁部 1/4 残	
1192	345	—	P-17 包含層	須恵器	壺	9.6	—		ロクロナデ	暗灰色	4 ㎜の砂粒多含	良好	口縁部 1/4 残	頸部に沈線 1 条。外面から口縁部内面に自然釉がかかる。
1193	347	—	H-7 包含層	須恵器	壺	8.3	—		ロクロナデ	暗灰色	精良	良好	口縁部小片、頸部完存	頸部内外面に自然釉がかかる。
1194	346	—	H-10 包含層	須恵器	壺	4.4	—		ロクロナデ	淡灰色	微砂含	良	口縁部 1/3 欠損	提瓶か。頸部内外面に自然釉がかかる。
1195	344	—	H-16 包含層	須恵器	壺	26.4	—		ロクロナデ	灰色	砂粒若干含	良好	頸部 1/8 残	口縁部外面に自然釉が弱くかかる。
1196	341	—	A-9 包含層	須恵器	壺	10.7	—		ロクロナデ	外：暗青灰色 内：淡灰色	精良	良好	口縁部 1/4 残	口縁部内面に自然釉がかかる。
1197	342	—	O-14 包含層	須恵器	壺	9.0	—		ロクロナデ	灰色	精良	良好	口縁部 1/6 残	口縁部外面に自然釉がかかる。
1198	332	—	P-17 包含層	須恵器	壺	—	—	高台径 5.7	ロクロナデ	外：暗灰色 内：淡灰色	砂粒若干含	良好	底部 1/4 残	
1199	325	—	D-17 包含層	須恵器	壺	—	—	高台径 10.1	ロクロナデ	紫灰色	3 ㎜の小石若干含	良好	底部 1/3 残	外面と底部内面に自然釉がかかる。
1200	329	—	I-7 包含層	須恵器	壺	—	—	高台径 8.0	体部下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	青灰色	微砂含	良好	底部完存	
1201	331	—	L-31 包含層	須恵器	壺	—	—	高台径 8.9	ロクロナデ	青灰色	2 ㎜の砂粒含	良好	底部 1/4 残	外面に自然釉がかかる。
1202	326	—	J-8 包含層	須恵器	壺	—	—	高台径 9.4	ロクロナデ	灰色	2 ㎜の小石若干含	良好	底部 1/4 残	
1203	330	—	S-30 包含層	須恵器	壺	—	—	高台径 14.8	体部下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	外：暗灰色 内：青灰色	4 ㎜の砂粒多含	良好	底部 1/4 残	
1204	327	—	K-20 包含層	須恵器	壺	—	—	高台径 12.0	ロクロナデ	灰色	5 ㎜の小石含	良好	底部 1/4 残	
1205	338	—	K-17 包含層	須恵器	壺	—	—	高台径 6.5	ロクロナデ	淡青灰色	3 ㎜の小石若干含	良好	底部 1/4 残	外面に自然釉がかかる。
1206	334	—	I-17 包含層	須恵器	壺	10.1	6.8	高台径 5.7	体部下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	外：暗灰色 内：淡紫灰色	4 ㎜の小石含	良好	底部小片、底部完存	外面に自然釉がかかる。
1207	336	—	J-26 包含層	須恵器	壺	—	—	高台径 5.7	ロクロナデ	外：暗灰色 内：淡紫灰色	精良	良好	底部 1/2 残	外面に自然釉がかかる。
1208	324	—	I-8 包含層	須恵器	壺	—	—		体部最下端タタキ、他はロクロナデ	外：暗灰色 内：淡茶灰色	精良	良好	底部 1/4 残	外面に自然釉が厚くかかる。
1209	323	—	K-11 包含層	須恵器	壺	—	—	底径 9.0	ロクロナデ	外：緑灰色 内：灰色	精良	良好	底部 1/4 残	底部外面に糸切痕。
1210	337	—	Q-19 包含層	須恵器	壺	—	—	底径 10.2	体部下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	外：暗灰色 内：淡灰色	微砂含	良好	底部 1/4 残	
1211	339	—	A-11 包含層	須恵器	壺	—	—	高台径 4.6	ロクロナデ	暗灰色	精良	良好	底部完存	
1212	333	—	H-10 包含層	須恵器	壺	—	—	高台径 5.0	ロクロナデ	淡紫灰色	精良	良好	底部完存	底部内面に自然釉がかかる。
1213	335	—	G-21 包含層	須恵器	壺	—	—	底径 4.0	ロクロナデ	淡灰色	精良	良好	底部完存	外面一部に自然釉がかかる。底部外面に糸切痕。
1214	1089	—	I-40 包含層	須恵器	壺	—	—	底径 6.1	ロクロナデ	白灰色	2 ㎜の砂粒若干含	良好	底部 1/2 残	
1215	356	—	G-16 包含層	須恵器	甕	—	—		ロクロナデ	灰色	微砂含	良好	口縁部小片	口縁部外面に突帯＋波状文。外面に自然釉がかかる。
1216	355	—	G-19 包含層	須恵器	甕	—	—		ロクロナデ	灰色	4 ㎜の小石若干含	良好	口縁部小片	口縁部外面に波状文。内外面に自然釉がかかる。
1217	340	—	I -10 包含層	須恵器	甕	13.6	—		外面タタキ、内面ナデ	外：暗灰色 内：淡灰色	3 ㎜の小石若干含	良好	口縁部 1/8 残	口縁部内面に自然釉がかかる。
1218	343	—	D-8 包含層	須恵器	甕	13.1	—		外面タタキ後ナデ、内面ナデ	白灰色	2 ㎜の砂粒多含	良好	口縁部 1/6 残	
1219	352	—	K-15 包含層	須恵器	甕	21.2	—		外面タタキ後ナデ、内面同心円文	外：灰色 内：茶灰色	3 ㎜の砂粒若干含	良好	口縁部 1/3 残	
1220	1084	—	M-32 包含層	須恵器	甕	38.1	—		ロクロナデ	青灰色	精良	良好	口縁部 1/8 残	外面にタタキ痕若干残る。
1221	354	—	P-16 包含層	須恵器	甕	38.5	—		外面タタキ、内面同心円文	灰色	微砂含	良好	口縁部 1/8 残	
1222	353	—	H-17 包含層	須恵器	甕	41.0	—		外面タタキ後工具ナデ、内面ナデ	暗灰色	精良	良好	口縁部 1/7 残	内面に同心円文若干残る。
1223	374	—	F-17 包含層	須恵器	円面硯	15.0	—		外面ロクロナデ、内面未調整	外：紫灰色 内：淡灰色	小石若干含	良好	硯部 1/8 残	
1224	367	—	K-16 包含層	須恵器	円面硯	14.0	7.0	脚径 19.0	ロクロナデ	淡青灰色	精良	良好	硯部 1/6 残	方形透孔 22 方。外面に自然釉が若干かかる。
1225	369	—	M-7 包含層	須恵器	高杯	—	—	脚径 9.8	外面カキメ、内面ロクロナデ	暗青灰色	微砂含	良好	脚部 1/6 残	方形透かし孔 3 方。
1226	368	—	G-15 包含層	須恵器	高杯	—	—	脚径 8.5	ロクロナデ	灰色	精良	良好	脚部 1/2 残	
1227	361	—	H-17 包含層	須恵器	鉢	16.4	7.7		ロクロナデ	灰色	3 ㎜の砂粒若干含	良好	口縁部 1/4 残	
1228	360	—	I-19 包含層	須恵器	鉢	22.7	—		体部外面中央ロクロケズリ、他はロクロナデ	灰色	3 ㎜の砂粒多含	良好	口縁部 1/5 残	
1229	359	—	E-20 包含層	須恵器	鉢	—	—	底径 15.2	体部外面下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	灰色	1.5 ㎜の砂粒多含	良好	底部 1/6 残	
1230	1086	—	M-32 包含層	須恵器	擂鉢	—	—	底径 8.5	底部外面未調整、他はロクロナデ	白灰色	精良	不良	底部 1/2 残	底部外面に刺突孔多数。体部外面最下部に刺突孔 1 周。
1231	358	—	E-7 包含層	須恵器	擂鉢	—	—	底径 9.2	底部外面未調整、他はロクロナデ	外：青灰色 内：灰色	砂粒多含	良好	底部 1/2 残	底部外面に浅い刺突孔。
1232	351	—	I-8 包含層	須恵器	盤	36.0	12.0		体部外面下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	白茶色	1 ㎜の砂粒若干含	不良	口縁部 1/4 残	1 対の把手がつく。
1233	357	—	H-15 包含層	須恵器	盤	35.4	9.6		体部外面下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	外：暗灰色 内：淡灰色	砂粒含	良好	口縁部 1/7 残	
1234	373	—	H-10 包含層	須恵器	盤	—	—	底径 23.6	脚部ヘラケズリ、他はロクロナデ	灰色	砂粒含	良好	底部小片、1 脚完存	3 足。

第 2 － 24 表　遺物観察表

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種	器形	法量（cm）			調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考
						径	器高	その他						
1235	372	—	P-18 包含層	須恵器	甕	—	—		ロクロナデ	淡灰色	精良	良好	肩部 1/4 残	二重甕。透孔 32 方。体部外面に波状文＋突帯。体部外面上半に自然釉が厚くかかる。
1236	371	—	I-8 包含層	須恵器	甕	—	—		底部外面ヘラケズリ後ナデ、他はロクロナデ	暗灰色	砂粒多含	良好	体部 1/3 残	体部外面に凹線＋波状文。体部外面上半、底部内面に自然釉がかかる。
1237	370	—	A-13 包含層	須恵器	甕	—	—		体部外面一部ロクロケズリ、底部外面未調整、他はロクロナデ	淡青灰色	砂粒含	良好	体部完存	体部外面に凹線２条＋刺突列点文。体部外面上半に自然釉がかかる。
1238	1082	—	N-50 包含層	須恵器	甕	—	—		ロクロナデ	暗青灰色	精良	良好	体部 1/3 残	樽形甕。体部外面に波状文４条。
1239	375	—	O-15 包含層	陶製品	—	—	—		外面ヘラケズリ、内面未調整	灰色	砂粒含	良好	—	須恵質。
1240	248	—	M-32 SK2	黒色土器	椀	15.0	5.5	高台径 7.6	外面ナデ、内面ヘラミガキ	淡茶色	3 ㎜の砂粒若干含	良	口縁部小片、底部 1/2 残	口縁端部内面に沈線１条。A 類。
1241	434	—	J-25 包含層	黒色土器	椀	—	—	高台径 7.8	ナデ	茶色	砂粒若干含	良	底部 1/3 欠損	A 類。
1242	435	—	F-6 包含層	黒色土器	椀	—	—	高台径 7.0	ナデ	茶色	5 ㎜の小石含	良好	底部 1/4 残	A 類。
1243	1091	—	P-41 包含層	緑釉陶器	椀	—	—	高台径 6.8	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	灰色	1 ㎜の砂粒含	良好	底部 1/4 残	削り出し高台。釉はかからず。
1244	450	—	H-12 包含層	灰釉陶器	椀	—	—	高台径 8.0	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	白灰色	小石若干含	良好	底部 1/4 残	灰釉刷毛塗り。
1245	446	—	O-16 包含層	灰釉陶器	椀	—	—	高台径 7.1	底部外面ヨコナデ、他はロクロナデ	白灰色	精良	良好	底部 1/2 残	灰釉刷毛塗り。
1246	448	—	I-18 包含層	灰釉陶器	椀	—	—	高台径 7.4	底部外面未調整、他はロクロナデ	白灰色	精良	良好	底部 1/4 残	灰釉刷毛塗り。
1247	447	—	O-15 包含層	灰釉陶器	椀	—	—	高台径 8.0	ロクロナデ	白灰色	精良	良好	底部 1/4 残	灰釉漬け掛け。
1248	451	—	T-20 包含層	灰釉陶器	皿	—	—	高台径 7.9	底部外面ヨコナデ、他はロクロナデ	白灰色	精良	良好	底部 1/4 残	灰釉刷毛塗り。直接重ね焼き。
1249	449	—	H-7 包含層	灰釉陶器	皿	—	—	高台径 6.5	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	白灰色	精良	良好	底部 1/3 残	灰釉漬け掛け。
1250	445	—	Q-17 包含層	灰釉陶器	皿	—	—	高台径 8.2	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	白灰色	精良	良好	底部 1/4 残	灰釉刷毛塗り。段皿。
1251	1103	—	T-41 SK2	灰釉陶器	皿	13.0	4.0	高台径 6.5	ロクロナデ	白灰色	精良	良好	口縁部 1/4 残、底部 1/2 残	灰釉漬け掛け。
1252	444	—	K-24 包含層	灰釉陶器	皿	—	—	高台径 7.9	底部外面未調整、他はロクロナデ	白灰色	精良	良好	底部 1/4 残	灰釉刷毛塗り。段皿。底部内面に沈線１条。
1253	1087	—	G-31 包含層	灰釉陶器	壺	—	—	高台径 9.7	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	白灰色	微砂含	良好	底部 1/4 残	灰釉刷毛塗り。
1254	433	—	K-21 包含層	瓦器	皿	7.8	1.7		外面未調整、内面ヘラミガキ	灰黒色	精良	良好	口縁部 1/8 残	
1255	432	—	G-11 包含層	瓦器	皿	7.8	1.7		外面未調整、内面ヘラミガキ	明黒色	精良	良好	口縁部 1/8 残	
1256	436 437	—	N-24・K-29 包含層	青磁	椀	16.2	7.2		ロクロナデ	濃黄緑色（釉）	精良	良好	口縁部 1/6 残	合成図。龍泉窯系。内面に陰刻花文。
1257	1093	—	S-41 包含層	青磁	椀	17.1	—		ロクロナデ	淡灰色	精良	良好	口縁部 1/8 残	龍泉窯系。外面に蓮弁文。
1258	441	—	P-15 包含層	白磁	皿	9.5	—		ロクロナデ	緑白色	精良	良好	口縁部 1/8 残	
1259	440	—	P-15 包含層	白磁	椀	17.5	—		ロクロナデ	濁白色（釉）	精良	良好	口縁部小片	口縁部に縁帯。
1260	427	—	L-31 包含層	陶器	甕	—	—		ロクロナデ	外：灰茶色 内：赤茶色	2 ㎜の砂粒多含	良好	口縁部小片	口縁部に縁帯。常滑。
1261	428	—	L-16 包含層	陶器	甕	—	—		ロクロナデ	暗赤茶色	4 ㎜の砂粒多含	良好	口縁部小片	口縁部に縁帯。常滑。
1262	426	—	A-6 包含層	陶器	甕	—	—		ロクロナデ	淡赤茶色	5 ㎜の小石多含	良好	口縁部小片	口縁部に縁帯。常滑。
1263	430	—	A-10 包含層	陶器	擂鉢	—	—		ロクロナデ	淡茶色	4 ㎜の小石多含	良好	口縁部小片	内面にヘラによる擂目。信楽。
1264	429	—	A-10 包含層	陶器	擂鉢	—	—		ロクロナデ	赤茶色	4 ㎜の小石多含	良好	口縁部小片	信楽。
1265	259	SD2 混入	A-7 SD3	埴輪	形象	—	—		ハケメ	白茶色	2 ㎜の砂粒多含	良好	小片	ヘラによる刻目。
1266	425	—	G-19 包含層	埴輪	朝顔形	—	—		ハケメ	白茶色	微砂含	良好	小片	ハケメ横方向。
1267	1094	—	T-47 包含層	石器	砥石	—	—	残存重 212.6g	—	淡白黄色	花崗岩	—	一部欠損	
1268	1095	—	T-47 包含層	石器	砥石	—	—	残存重 219.0g	—	白灰色	花崗岩	—	一部欠損	
1269	443	—	A-11 包含層	石器	石鏃	長 7.7	幅 1.5	重 9.9g	—	暗灰色	サヌカイト	—	ほぼ完形	有茎。
1270	1100	—	W-57 包含層	石器	石鏃	長 2.5	幅 1.4	重 0.9g	—	暗灰色	サヌカイト	—	完形	
1271	1098	—	R-57 包含層	石器	石匙	長 4.3	幅 6.8	重 21.4g	—	暗灰色	サヌカイト	—	ほぼ完形	
1272	1014	SD205 混入	R57 SD1	石器	石匙	長 4.5	—	残存重 27.0g	—	暗灰色	サヌカイト	—	2/3 残	

第２－25表　遺物観察表

Ⅴ．考　　察

１．建物配置と変遷

建物間隔の計測では、長距離の場合、当時の尺数との誤差が大きくなる危険を承知のうえで、30㎝を１尺として数値化した。柱掘形間の計測数値を基準とする場合は、掘形は建物建築に伴い埋め戻されるものであることから、この場合の２棟は同時に建築されたものと推測した。一方、Ａ棟の柱からＢ棟の柱掘形間の計測数値を採用した場合には、先行して建築されたＡ棟の柱からＢ棟の柱掘形位置を決定しているものと考え、Ａ棟建築後にＢ棟が追加されたものと推測した。

Ａ．飛鳥時代

SD201 に東を限られ、そのちかくに桁行の長い建物が散在的に建てられている。建物は大型のものであるが、棟方向等に統一性がないものが多い。そのなかで、3 つの群を抽出したが、すべて 2 棟により構成されるものである。

(1) 1 群（第 116 図）

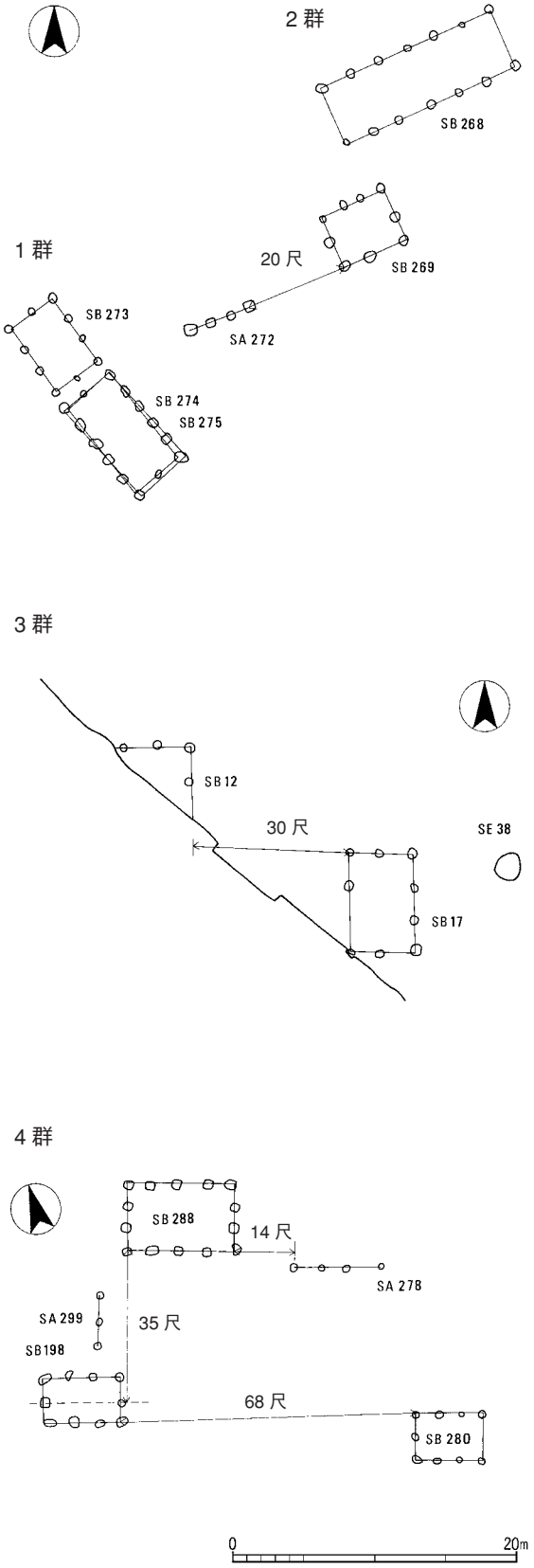
SB273 と SB274 が柱筋を揃え、縦列に配置される。両者は非常に接近しているが、棟方向には若干の誤差がある。SB274 が SB275 に建て替えられても両者の関係には変化が無く、棟方向の誤差はむしろ大きくなっている。

(2) 2 群（第 116 図）

SB268・269 と SA272 で構成される。桁行の長い建物 SB268 と小型の建物 SB269 は、方向を揃えるものの柱筋や間隔等に規則性はない。SB269 と SA272 は建物と柱列ではあるが、同規模の建物が南側を揃えて縦列に配置されていると考えることも可能であろう。その場合両者の間隔は 720 ㎝で 24 尺であるが、1 尺＝ 35.6 ㎝[35]とするとちょうど 20 尺となる。当遺跡においても大尺が用いられていた可能性がある。

(3) 3 群（第 116 図）

SB12・17 と SE38 で構成される。この時代の他の建物が SD201 ちかくに建てられているのと異なり、調査区西端の「哀園森」ちかくに離れて位置する。



第 116 図　1 ～ 4 群 建物配置図（1：500）

両者は方向をおよそ真北に揃えることが、他の建物に比べ特徴的である。他に、真北に沿って建てられている建物は、東に70m離れた倉庫風建物SB187がある程度である。これも同じ建物群としてもよいが、距離値が他の建物群のように尺による10の倍数値を得られず、一応SB187は3群から外しておく。SB12とSB17の間隔は36尺であるが、これを前述のように大尺で求めるとちょうど30尺となる。

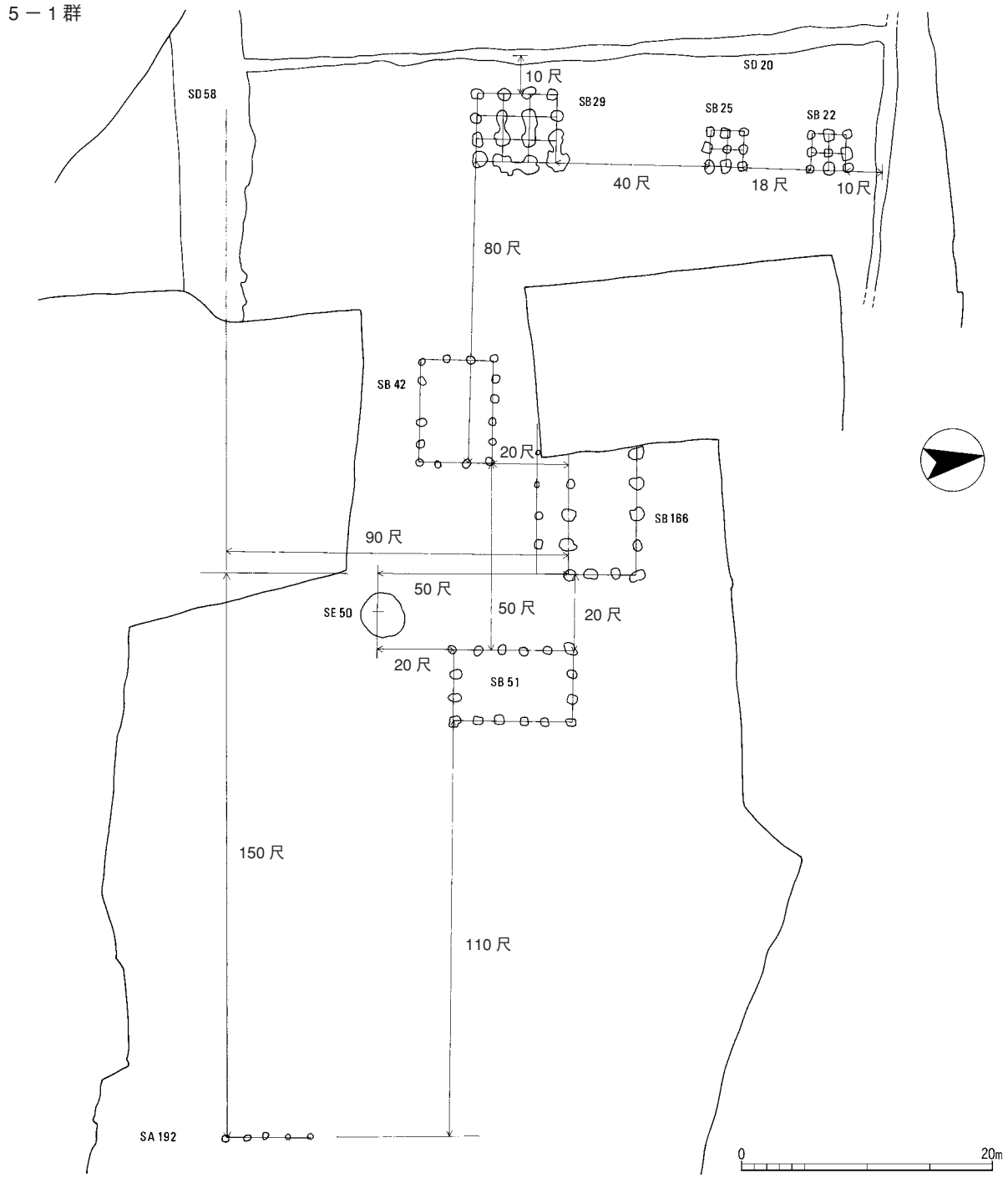
（4）小結

各群の時間的関係は明確でない。2群・3群については、建物位置を大尺による測量により求め、規則的な配列が窺える。これが後代へ続く動きと考え、1群から2・3群への変遷と考えたい。

B．奈良時代

掘立柱建物群が最も盛行する時期である。多数の建物が規則的に配置され、特に第5群は当遺跡の中心的存在である。

（1）4群（第116図）



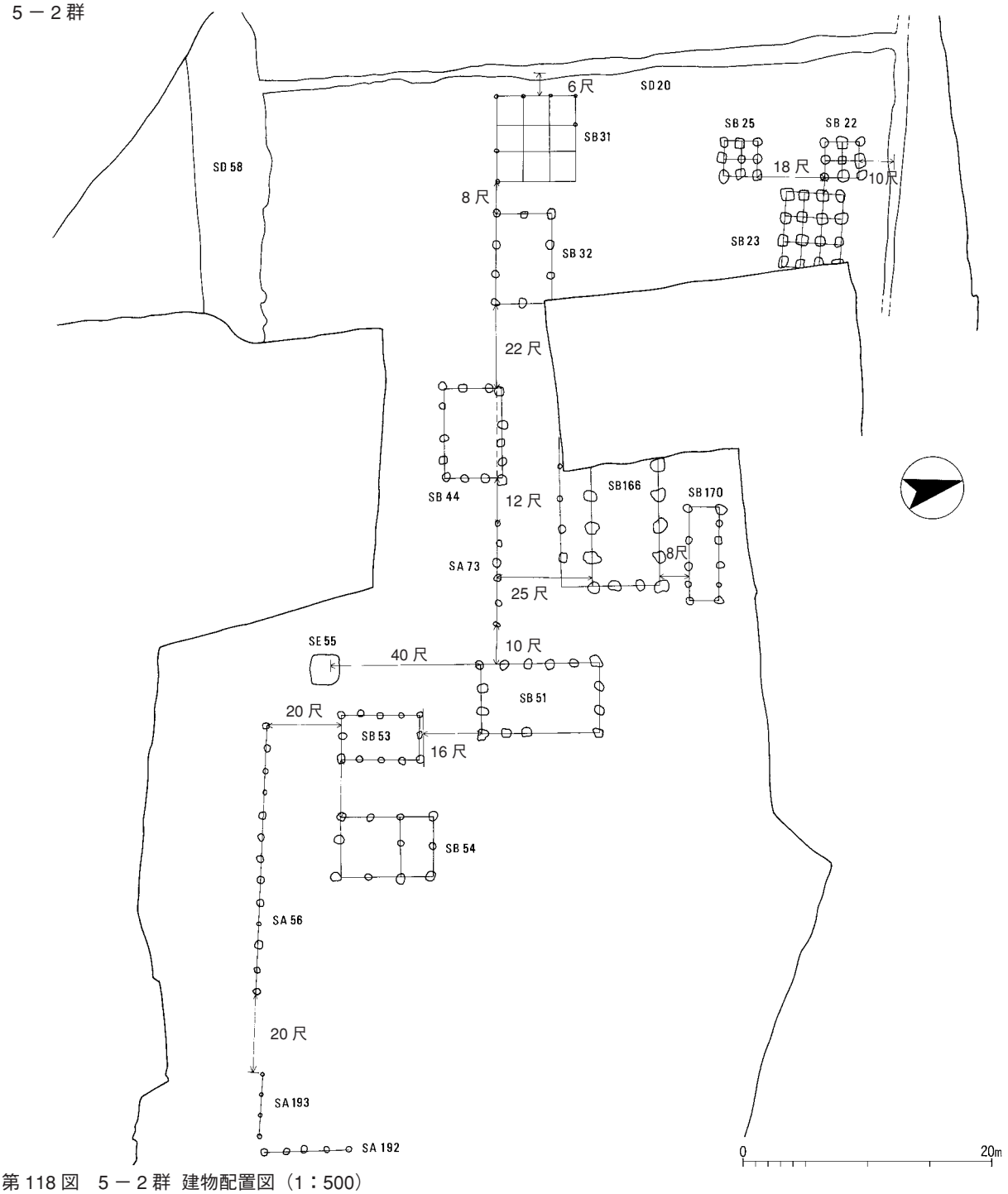
第117図　5－1群 建物配置図（1：500）

調査区東部に位置する建物群である。3棟の建物と柱列で構成される。SB288の西側梁行に東側梁行を揃えるかたちでSB198が建てられ、両者の間隔はSB288の南端からSB198の中央妻柱筋までを計測すると35尺である。また、SB198の南側桁行に北側桁行を揃えるかたちでSB280が位置し、両者の間隔は68尺である。さらに、SB288の東側に14尺の間隔でSA278が設置され、SB288とSB198間にもSA299が設置される。

(2) 5－1群（第117図）

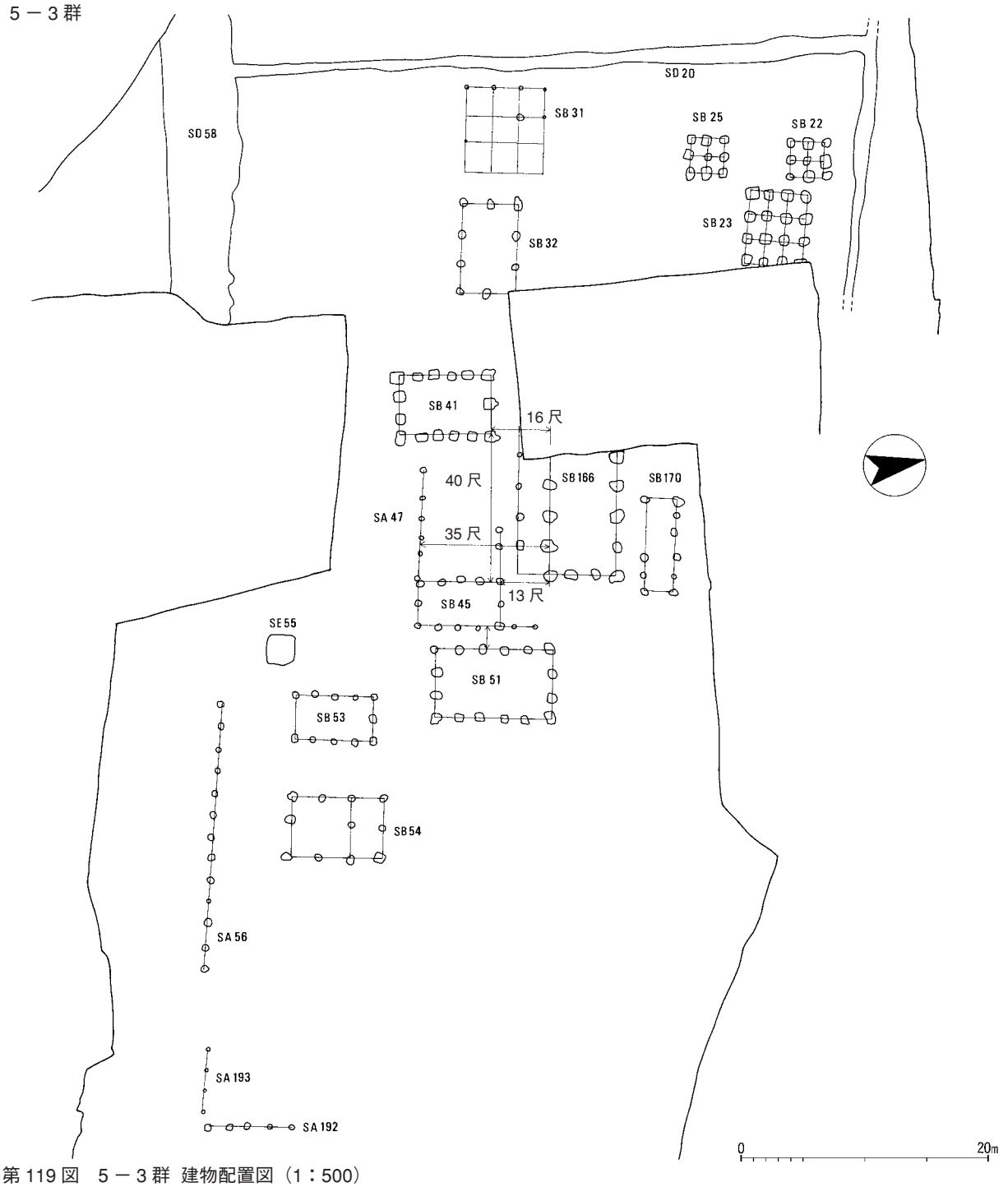
調査区中央部に占地する建物群である。一辺1mを測る柱掘形をもつ当遺跡最大の建物SB166を中心にして品字形に配置される3棟の建物と大型倉庫1棟、小型倉庫2棟、井戸1基、そしてこれらを区画する溝や柱列で構成される。中心建物SB166のみ、他のものと方向の誤差が3°程度あるが、以下の要素からこの群の中心建物として差し支えないものと考えられる。SB166の南側柱列を20尺東に延長

5－2群

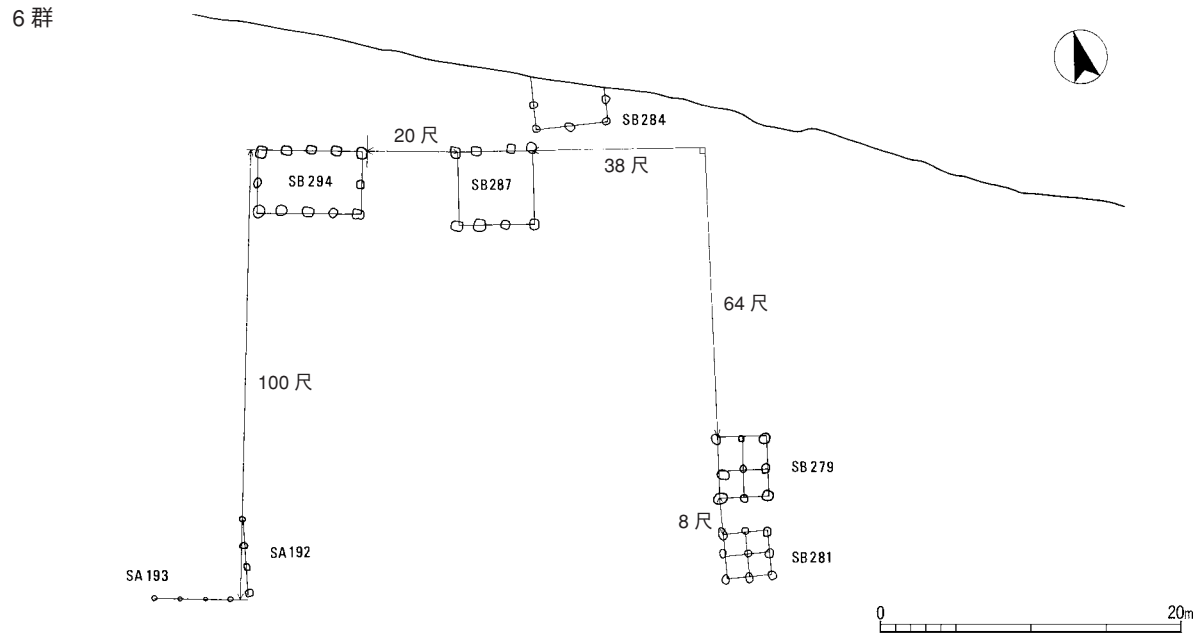


第118図　5－2群 建物配置図（1：500）

すると南北棟SB51の北側梁行に至る。SB166の南西にはSB42が位置し、その間隔は20尺、SB51とSB42では50尺の間隔となる。このSB42の東側梁行から西に80尺で大型倉庫SB29に至り、SB42梁行の北から2本目の柱筋の延長上にSB29の南側梁行を揃えるかたちとなる。さらに、SB29の東側桁行に揃えて小型倉庫SB25があり、両者の間隔は40尺である。建物以外では、SB166とSB51の中間から南に、SB166南側柱列から測って50尺、SB51の南梁行から20尺の位置にSE50が掘削される。また、SB29から西に10尺の地点を溝の中心とするSD20が南北に掘削されている。このSD20は、5-1群とは方向を若干違えるが、これらの西を限るものと思われる。このSD20の北端は東西溝と連結しており、この溝から10尺の間隔で小型倉庫SB22が建てられる[36]。SB22と前述したSB25は柱筋を揃えて建てられ、両者は同規模、間隔は18尺である。SD20の南端は東西溝SD58に連結する。この溝が5-1群



第119図　5－3群 建物配置図（1：500）



第120図　6群 建物配置図（1：500）

の南を限るものと考えられるが、東方へ十分延びておらず疑問もある。ただし、その位置は、溝底北端でSB166南側柱列からちょうど90尺である。この建物群の東を限る施設は明確でないが、SA192を想定している。SA192の南端は、おおむねSD58の底北端の延長上にあり、その距離はSB166東梁行から150尺、SB51の東側柱列からは110尺である。

以上のようにこれらの間隔はすべて10の倍数尺で計測でき、一連の設計のもとに建てられているものと考えられる。

(3) 5－2群（第118図）

5-1群から建物の建て替えや追加が行われている。SB166の北方には8尺間隔でSB170が追加される。SB51の南方には、SB51東側桁行を16尺延長した地点を中心にSB53が、その東に建物の南側を揃えてSB54がそれぞれ追加される。SB53から南に20尺の間隔でこの一群の南を限るSA56が設置される。方向がやや異なるもののSD58の東への延長上に位置する。また、20尺の間隔をおいてさらにSA193が続き、SA192へ至る。SE50も南に移動し、SB51の西側桁行を南に40尺延長するかたちでSE55となる。SB42は、規模をやや縮小してSB44に建て替えられ、SB166の南桁行から25尺の間隔でSA73が設けられる。このSA73はSB51との間に10尺の間隔を確保し、SB44とでは12尺で両者の間隔はほぼ等しい。SA73はSB44の北側桁行とほぼ揃う位置にあるが、さらにその西のSB32､SB31の南側と揃う位置にある。SB31はSB29を建て替えたもので若干規模が拡大されている。SB32との間隔は8尺、SB32とSB44間は22尺である。小型倉庫SB22の東側にも柱筋を揃え大型倉庫SB23が追加されるが、方向はやや異なる。

この様に、5-1群から多数の建物が追加され、最盛期をむかえるが、建物間隔が5の倍数尺によらないものが多く、棟方向の統一を欠くものもある。

(4) 5－3群（第119図）

5-2群のSB44は、大型の南北棟SB41に建て替えられる。SB166南側桁行との距離は16尺である。SB166の南東側にはSB45が建てられる。SB166の東梁行と西側桁行をほぼ揃え、その間隔はSB166南桁行から13尺である。これに伴いSB51が廃止されたかどうかは不明であるが、一応存続するものとして取り扱う。SB45の南端から西にSA47が延び、SB166南桁行からの距離は約35尺である。また、SB41とSB45の間隔もちょうど40尺であり､SB166の南に東西40尺、南北はSB166の南面庇分を減じて28.5尺の閉鎖された空間を確保している。

(5) 6群（第120図）

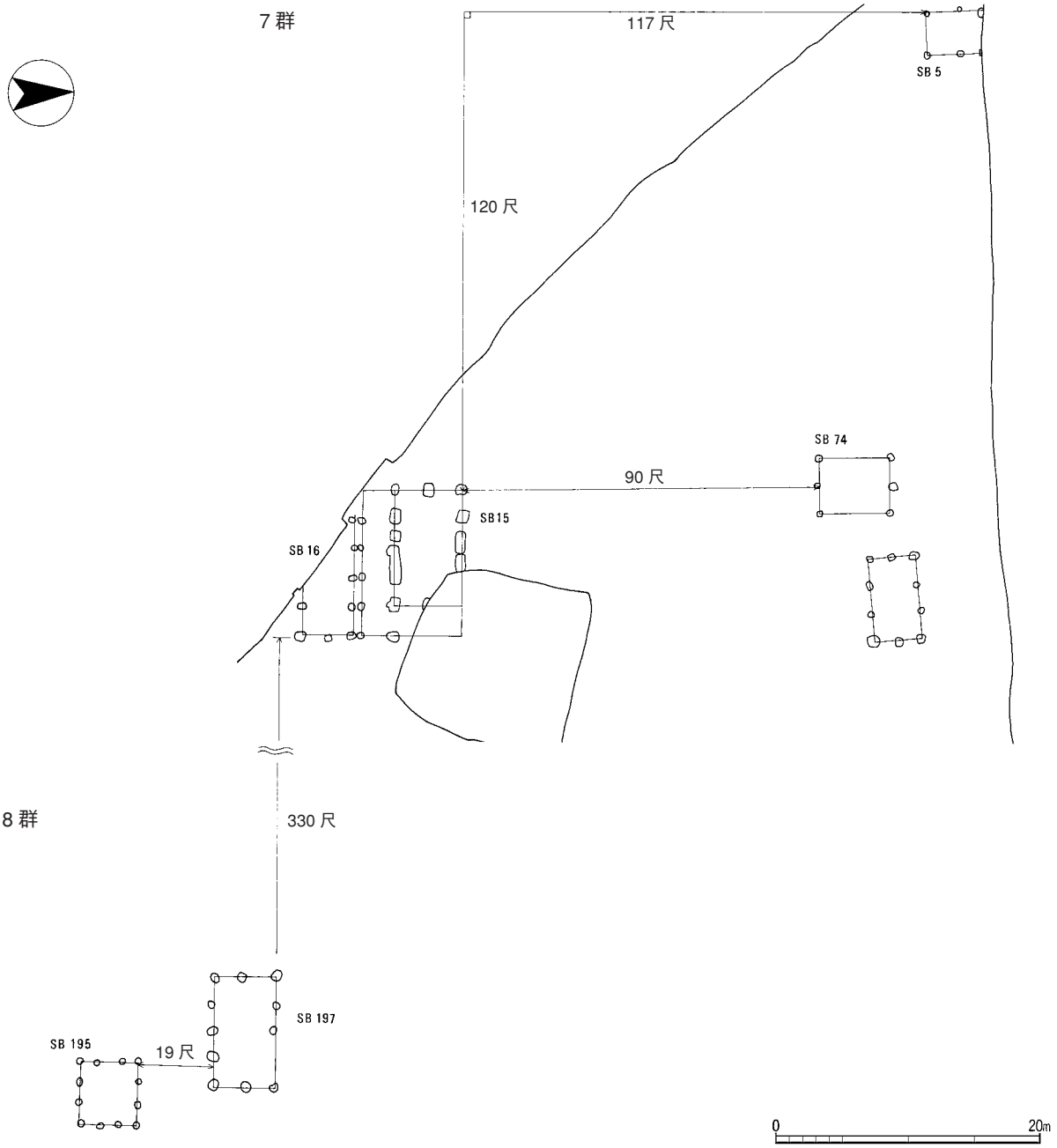
調査区東部に位置する建物群で、3棟の建物と小型の倉庫2棟、柱列で構成される。SB287とSB294

が建物の北側を揃えて建てられている。その間隔は、SB287の柱からSB294の柱掘形端までが、ちょうど20尺である。したがって、SB287を基準にSB294が追加されたものと考えられる。SB287の北東には南北棟SB284が配置される。また、SB287の南東にはSB279とSB281の小型倉庫が柱筋を揃えて建てられている。両者の間隔は8尺である。

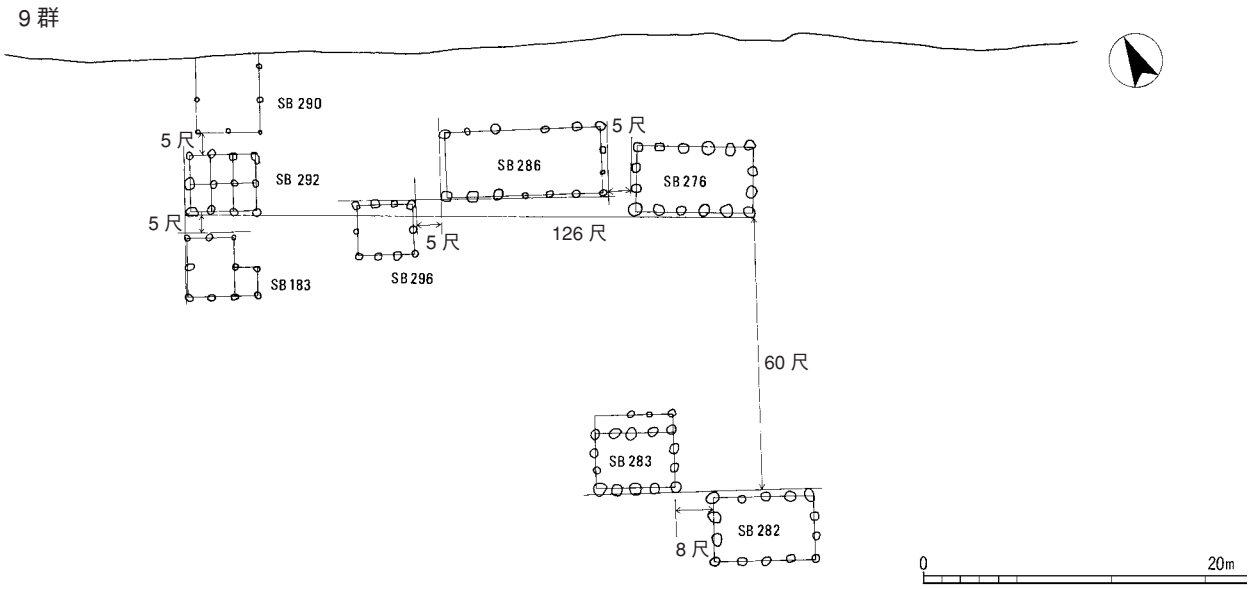
SB294の西側梁行を南に延長すると5群のSA192を経由してSA193の東端にいたる。その距離は、SB294北側桁行からちょうど100尺である。このため、方向は異なるものの5群と6群は同時に存在した時期があるものと考えられる。両者を比較した場合、建物の数や規模等、5群の優位は歴然としている。

(6) 7群（第121図）

調査区西部に位置する建物群である。SB15とSB16の2棟で構成される。SB15は既述したように、布掘の掘形をもつ大型の建物で、南と東の2面に庇をもつ。SB16はSB15の南側に接して棟方向を揃えるだけでなく、柱筋をも揃えて建てられている。両者の距離はSB15の南面庇柱列とSB16の北側柱列間では、2尺しかなく、両者の柱掘形も近接する。



第121図　7・8群 建物配置図（1：500）



第122図　9群 建物配置図（1：500）

このため、SB16は元来存在せず、柱の組合せによってはSB15の建て替えや南面庇の拡張として考えることも生じてこよう。

ここでは、SB15を拡張するかたちでSB16が追加されたものと推測し、外見上、両者は一連の建物であったと考えることとする。北西に約50m離れてSB5がSB15と直角に配置される。また、SB15の西側梁行を90尺北に延長するとSB74に至る。さらに、SB15東側庇から330尺離れて8群が位置する。しかし、SB15・16の付近には、これに付属するあるいは関連する建物は見られない。SB15の規模・形態からすると、これはむしろ異常な状態に思える。SB15の位置は、現在でも「哀園森」として水田開発から免れており、SB15・16は、居住建物とするより、何か特殊な目的をもった建物であった可能性も考えられる。

(7) 8群（第121図）

調査区東部に位置する建物群である。SB195とSB197で構成され、棟方向をほぼ揃えて配置される。両者の距離は側柱間で19尺である。棟方向の他には、特に揃えられているものはない。7群と棟方向が一致するが、約330尺も離れるため、直接関連するものとは考えられない。

(8) 9群（第122図）

調査区東部北側に位置する建物群である。SB183・276・282・283・286・290・292・296の8棟で構成される。SB282の北側桁行の柱掘形北端とSB283の南側桁行柱掘形南端が直線状に並ぶ。両建物はこの線を基準にそれぞれ南北側に建築されているようで、両者の距離は柱間で8尺、掘形間では6尺となる。また、SB282の桁行中央の柱掘形北端から直角に北へ60尺でSB276南東隅柱掘形南端へ至る。そこから直角に西へ126尺で倉庫風建物SB292南西隅柱の掘形西端となる。したがって、この4棟は柱掘形端を基準として配置されているので、おそらく同時に建築されたものであろう。

SB292の南北にはSB183・290が柱筋を揃えて縦列に配置されている。ただし、それぞれの間隔は柱筋間でSB292・183間が6尺、SB292・290間が5尺で統一を欠く。SB292の南側側柱列からSB183の北側梁行柱掘形北端までを計測すると5尺という数値が得られる。これにより、SB290とSB292が5尺の間隔で同時に建築され、その後SB292の柱筋から5尺の間隔を測ってSB183の柱掘形の掘削を開始したと解釈することも可能であろう。しかし、SB292に対してSB290は若干東にずれており、むしろSB183の方がSB292とよく揃った配置である。後に追加された建物の方が規則的であるという結果になり受け入れにくい。したがって、ここではこの3棟は縦列に配置することのみに規制され、それぞれの間隔は厳密な測量によるものではないものとし、3棟の建築順は不明とせざるを得ない。

SB286の南側柱掘形南端とSB296の北側柱掘形北端が直線状に位置し、これはSB282とSB283の関係と同様である。したがって両者は同時に建築されたものと推測され、その間隔は8尺、柱掘形間では5尺となる。この2棟と先述した6棟の位置関係は、明白ではない。SB286の南側桁行の延長上にSB276の南から2番目の柱が位置することから、SB276を意識してその位置を決定しているようである。その間隔は柱間で7尺､掘形間で5尺を測るが、同時に建築されたとするには棟方向の誤差が大きいこと、南側を揃えていないこと等否定的要素が大きい。したがって、SB276を意識しながら後に追加されたものと考えたい。

(9) 小結

これらの建物群は、その位置により、調査区西部の7群、中央部の5-1～5-3群、東部の4・6・8・9群に分類される。既述した様に、柱掘形の重複する建物間の前後関係により、中央部では5-1群→5-2群→5-3群、東部では4群→8群、6群→9群の前後関係が明らかである。また、先述した内容により5-2群と6群、7群と8群が同時に存在した可能性がある。これらの事実を踏まえ、推測を交えて各群の変遷を述べることにする。

Ⅰ期　調査区中央部に企画的に配置される5-1群が出現する。建物間は10の倍数尺で統一され、当調査区最大規模のSB166を中心に、大型倉庫や井戸等を伴うものである。東部では4群が存在するが、建物は3棟で倉庫は無く、5-1群が圧倒的に優位である。

Ⅱ期　次に5-1群は、さらに建物を追加し5-2群に成長し、最盛期をむかえる。しかし、棟方向や建物間隔に不統一な部分もみられ、配列の乱れの兆候が表れる。東部では5棟によって構成される6群がある。倉庫を伴いⅠ期の4群よりは充実するが､5-2群がはるかに優勢である。

Ⅲ期　中央部の5-2群は、多少の建物の建て替え、追加が行われ､5-3群となるが､5-2群から大きな変化はない。東部では､2棟で構成される小規模な8群となりⅡ期の6群より後退する。調査区西部では大型建物SB15を中心とする7群が表れる。5-3群と7群では、やはり5-3群が優位であるが、既述したように7群は非日常的な建物群の可能性も想定される。

ここで、東部の8群は6群と空間的には同時存在の可能性もある。この場合、7群に先行する建物群は西部には無いため､7群をⅡ期に引き上げることも可能である。したがって、Ⅱ期とⅢ期の時期差が無いことも考えられる。

Ⅳ期　東部には多数の建物や小型倉庫で構成される9群が出現する。この期に5-3群や7群が廃絶した確証はないが､次時代の様子を考慮すれば、遺跡の中心が東部に移動した可能性がある。

C．平安時代前期

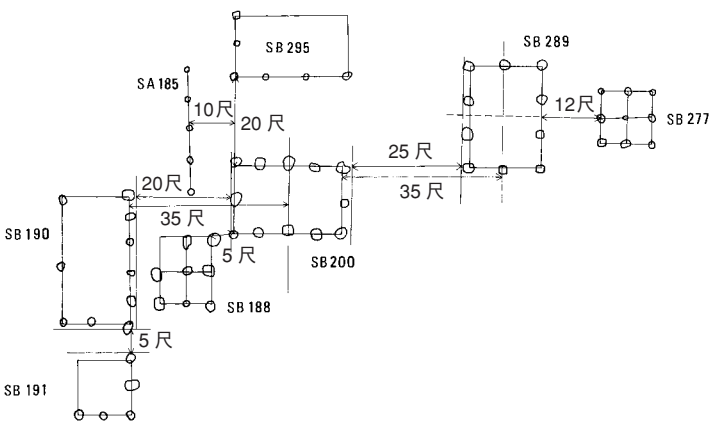
SB289､SB199から黒色土器A類杯の出土があり、おおむね9世紀に属するものと考えられる。しかし、他のものについては遺物による根拠はない。柱間2.1m以上の長いものが現れる特徴があるようである。

(1) １０－１群（第123図）

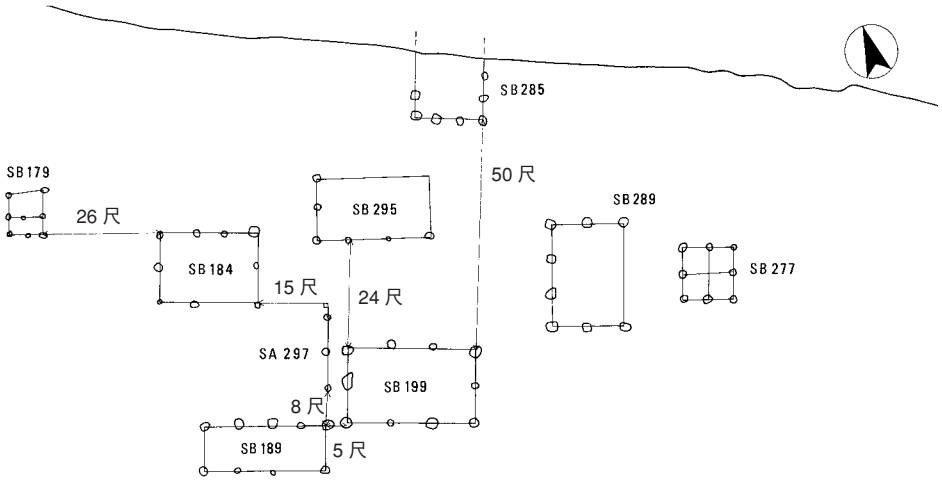
SB200・SB289を中心とする一群で、他にSB188・190・191・277・295の計7棟で構成される。SB200の北側桁行を東に28尺延長するとSB289南梁行に至り、両者は直角に配置される。これを柱掘形間では25尺、SB289の南側妻柱までを計測すると35尺となる。また、柱数や桁行・梁行長が異なるものの面積では両者は32.4㎡で等しい。SB190の北側梁行は、SB200の妻柱位置に揃え、その間隔は23尺であるが、これを柱掘形間で計測すると20尺、SB200中央では35尺となる。さらにSB190の東側桁行と揃えてSB191が縦列に配置され、その間隔は8尺、同様に掘形間では5尺である。これらから、SB190・191・200・289の4棟は柱掘形を基準にしていることから、同時に建築されたものと推定したい。

SB188は、北側梁行をSB200南側桁行と揃え、両者の間隔は5尺の接近した状態である。SB289に付属すると考えられる倉庫風建物SB277はSB289の南北中心線にSB277の中心を揃え、その間隔は12尺である。SB200と西側梁行を揃えてSB295が位置し、両者の間隔は約20尺である。柱痕跡を基準にSB295の棟方向や、桁行長を計測した結果、若干SB200と異なる結果を得ているが、SB295の

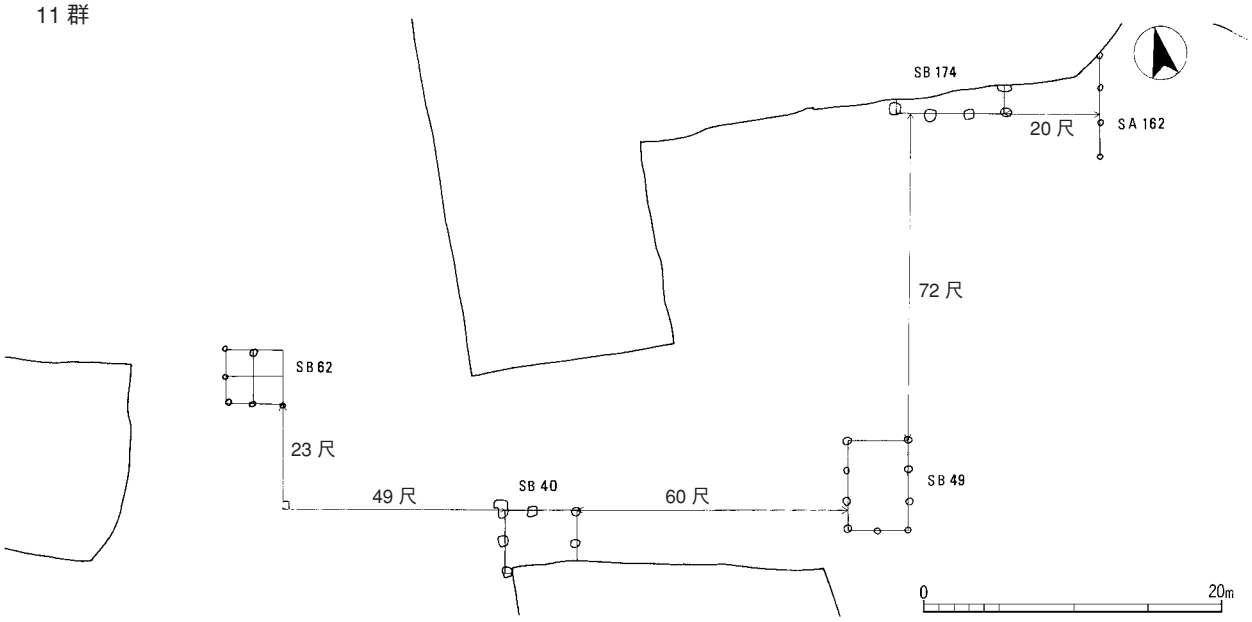
10－1群



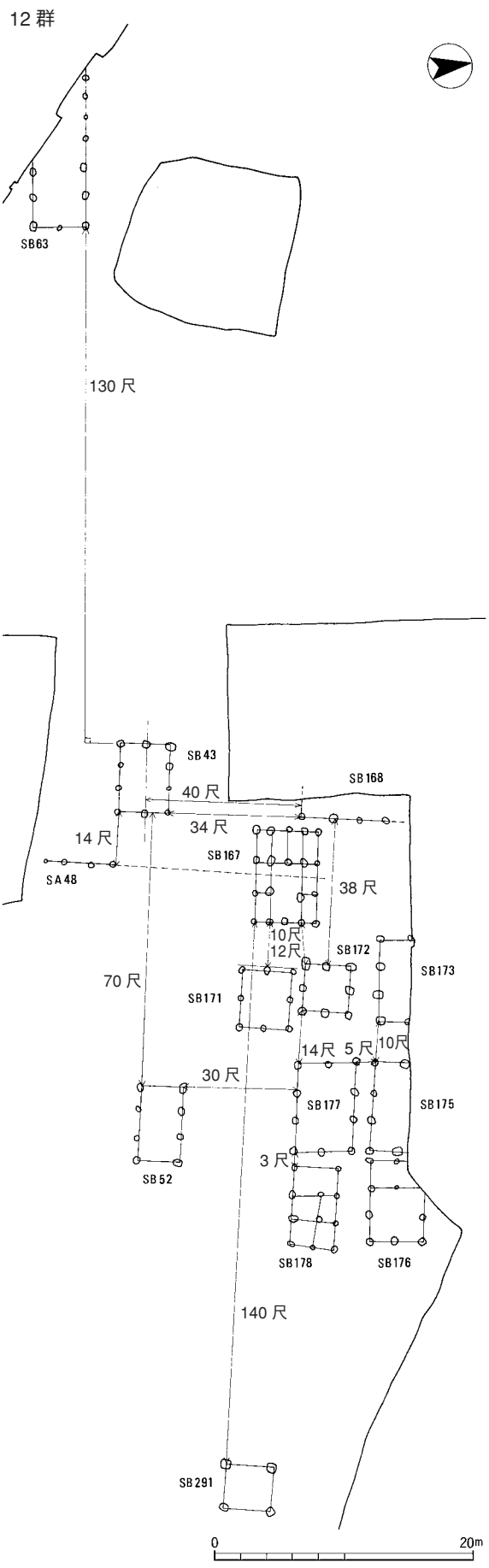
10－2群



11群



第123図　10－1・10－2・11群 建物配置図（1：500）



第124図　12群 建物配置図（1：500）

残存が劣悪であるため、本来は、棟方向や桁行長を揃えて建てられていた可能性も大きい。さらに、この両者の西側には10尺の間隔でSA185が設けられる。以上SB188・295では、他の建物の柱筋からの計測値で5の倍数が得られる。したがって、これらSB277を含む3棟は対応する建物を建築後に追加した可能性も生じることになる。

この様に、10-1群はSB200を中心に4棟がまず建築され、その後倉庫的建物2棟を含む3棟が追加された可能性もあるものと考えられる。

(2) 10－2群（第123図）

SB200が南東にやや位置を変え、面積をやや拡大してSB199に建て替えられる。それに伴いSB188も細長い東西棟SB189に建て替えられる。SB199とSB189の位置関係は、SB200とSB188のそれと同じである。SB199の西側梁行を北に延長すると、10-1群としたSB295の西から2番目の側柱に一致し、その間隔は24尺である。このため、SB199の位置決定にはSB295が影響しているものと考えられ、SB295は10-2群においても存続していたのであろう。

また、SB189の東側梁行を延長するかたちで、柱列SA297が位置し、両者の間隔は8尺、SA297の北端を3尺延長し、西に15尺の間隔でSB184南東隅の柱に至る。SB184の北側桁行とSB179の南側梁行とが26尺の間隔で揃っており、雑舎的建物ではあるもののその位置は規制されたものである。したがって、10-1群からSB189・199の建て替え建築とSA297の新設が行われ、後にSB179・184が追加された可能性がある。

SB199の東側梁行に東側桁行を揃えSB285が位置する。両者の間隔は50尺である。SB285の建築がSB199と同時に行われたのか、後の追加であるのかは推測する根拠をもたない。

また、10-1群のSB277・289が廃絶した根拠は無く、依然として存続していたことも考えられる。

(3) 11群（第123図）

建物群とするには散在的な状態である。SB174の東方に20尺の間隔でSA162が位置する。それとは別に、SB49とSB40の間隔は60尺である。SB49の南側梁行の延長上にSB40の妻柱が位置すると

することもできるが、誤差が大きい。他の建物間は、棟方向を揃えるが、その距離に法則性は無い。SB62は、前代の5群で、大型倉庫が存続した位置に規模を大幅に縮小して建てられている。

(4) 小結

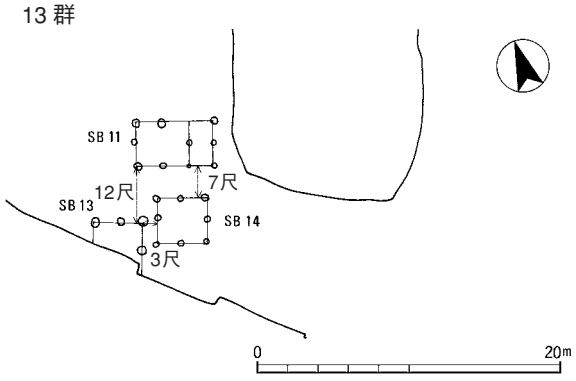
この時期は、調査区の東部に中心を移して、再び整然とした配置で10-1群が形成される。その後10-2群へと変化するが、建物間の規則性にやや後退した状況がある。11群と10群の前後関係は不明であるが、前代の大型倉庫の位置に小型ではあるが倉庫を建てていることから、前代の影響が考えられ、10-1群と11群が同時に存在した可能性が大きい。

D．平安時代中期

12群と13群を抽出した。特に12群は、奈良時代の5群と建物方向が酷似するため、側柱建物の場合、両者が混同する可能性もある。

(1) 12群（第124図）

中世的な束柱をもつものが現れる。SB43・52・167・168・171 ～ 173・175 ～ 178・291の11棟で構成される。SB167梁行の北から2本目の柱筋を東に10尺延長するとSB172の南側梁行の西端に至る。さらに東にSB172と南側桁行を揃えSB177とSB178が配置される。SB172とSB177の間隔は14尺、SB177とSB178の間隔は3尺である。SB168もこれら3棟と建物の南側を揃えており、SB172の妻柱筋を西に38尺延長するとSB168の南から2本目の側柱に至る。また、SB177の北側には5尺の間隔でSB175が柱筋を揃えて建てられている。さらに、SB175の西側には10尺間隔でSB173が、東側にはSB176がそれぞれ南側柱列を揃えて建てられている。SB175とSB176の間隔は非常に狭く、3尺未満で整数は得られない。これらSB168を除く6棟は棟方向等に若干の不揃いがあるものの全体的には2列に規則的に配置されている。しかし、建物間隔については、一定の基準値は求められない。



第125図　13群 建物配置図（1：500）

SB171はSB167梁行の南から2本目の柱筋を東に12尺延長した位置から妻柱掘形が掘削されており、後に追加された可能性がある。

SB168の東側柱を南に34尺でSB43の東側梁行北端に至る。妻柱筋までを計測すればちょうど40尺となる。SB43の南側柱列から14尺東方でSA48の北端柱の掘形端に位置し、SB43建築後にSA48が追加されたものと推測したい。このSA48は、SB167の中央を南下させた位置にも相当する。また、SB43からちょうど70尺東方にはSB52が位置する。この西側梁行を北に延長すればSB177の西から2本目の柱に至り、その距離はちょうど30尺である。

これらの建物群とはやや離れて、SB291がある。その位置は、SB167の南側柱列端から140尺東方に建物の南面を揃えて建てられている。1間×1間の特殊な柱数や比較的大きい掘形等から他の建物群とは異なる性格の建物であることが想像される。

この様に、12群はSB167を中心に配置されている様子が窺えるが、SB167は、規模的には他のものを圧倒する差は無く、この建物群の中心は調査区外にあるのかもしれない。また、SB43から西へ130尺の距離にSB63がある。柱筋を揃えてはいないが、棟方向は一致している。

(2) 13群（第125図）

小規模な建物3棟で構成される。SB11・13・14の3棟は方向を揃えて建てられているが、SB13の北側梁行とSB14の妻柱が揃う他は、柱筋を揃えるものは無い。それぞれの間隔は、SB11とSB13が12尺、SB11とSB14は7尺、SB13とSB14は3尺である。

(3) 小結

建物群の中心は、再び調査区中央部に移る。北に偏った分布であるため、前述したように中心建物は調査区外にある可能性も高い。建物間隔に統一性は無く、棟方向や建物の面を揃えることのみを意識しているようである。

E．まとめ

この様に、当調査区では、古墳時代に出現した掘

遺物番号	墨書内容	器種	器形	墨書位置	出土遺構	出土遺構番号	時代	備　考
44	□…□	須恵器	鉢	底部から体部外面	自然流水路	SD71	飛鳥	3 文字以上。
261	小□奴	土師器	杯	口縁部外面	溝	SD201	飛鳥	2 文字の可能性もあり。
626	大	須恵器	壺	底部外面	溝	SD201	飛鳥	
639	□	須恵器	鉢	体部外面	溝	SD201	飛鳥	小片のため文字数不明。
695	田中	土師器	杯	底部外面	井戸	SE55	奈良	
700	井	土師器	杯	底部外面	井戸	SE55	奈良	
704	千倉	土師器	皿	底部外面	井戸	SE55	奈良	
727	大井	須恵器	蓋	天井部外面	井戸	SE55	奈良	
729	安麿	須恵器	蓋	天井部内面	井戸	SE55	奈良	
736	千倉	須恵器	皿	底部外面	井戸	SE55	奈良	
798	東九	木製品	枠板	外面中央	井戸	SE55	奈良	
800	奉　東八	木製品	枠板	外面中央	井戸	SE55	奈良	「奉」は「東」の可能性もあり。
806	奉　東五	木製品	枠板	外面中央	井戸	SE55	奈良	「奉」は「東」の可能性もあり。
808	東□	木製品	枠板	外面中央	井戸	SE55	奈良	「東四」か。
810	東三	木製品	枠板	外面中央	井戸	SE55	奈良	
812	奉	木製品	枠板	外面中央	井戸	SE55	奈良	「東」の可能性もあり。
814	奉	木製品	枠板	外面中央	井戸	SE55	奈良	「東」の可能性もあり。
819	西八	木製品	枠板	外面中央	井戸	SE55	奈良	
825	西五	木製品	枠板	外面中央	井戸	SE55	奈良	
829	西三	木製品	枠板	外面中央	井戸	SE55	奈良	
831	西二	木製品	枠板	外面中央	井戸	SE55	奈良	
833	西一	木製品	枠板	外面中央	井戸	SE55	奈良	
836	□□	木製品	枠板	外面中央	井戸	SE55	奈良	「南十」か。
846	南五	木製品	枠板	外面中央	井戸	SE55	奈良	
850	□三	木製品	枠板	外面中央	井戸	SE55	奈良	「南三」か。
852	南二	木製品	枠板	外面中央	井戸	SE55	奈良	
854	南一	木製品	枠板	外面中央	井戸	SE55	奈良	
861	北□	木製品	枠板	外面中央	井戸	SE55	奈良	「北八」か。
863	北七	木製品	枠板	外面中央	井戸	SE55	奈良	
865	□□	木製品	枠板	外面中央	井戸	SE55	奈良	「北六」か。
867	北五	木製品	枠板	外面中央	井戸	SE55	奈良	
869	北四	木製品	枠板	外面中央	井戸	SE55	奈良	
871	北三	木製品	枠板	外面中央	井戸	SE55	奈良	
873	北二	木製品	枠板	外面中央	井戸	SE55	奈良	
874	北一	木製品	枠板	外面中央	井戸	SE55	奈良	
892	廣	須恵器	蓋	天井部外面	溝	SD20	奈良	
926	土 (?)	須恵器	蓋	天井部外面	溝	SD58	奈良	
937	千	須恵器	杯	底部外面	溝	SD58	奈良	「十」の可能性もあり。
972	□	須恵器	杯	底部外面	土器溜	SZ59	奈良	
973	廿	須恵器	杯	底部外面	土器溜	SZ59	奈良	
978	大 (?)	須恵器	杯	底部外面	土器溜	SZ59	奈良	欠損のため、文字の一部の可能性あり。
1002	大井	須恵器	杯	体部外面下端	柱穴	SB29	飛鳥	建物時期は奈良。
1003	井買入	須恵器	杯	底部外面	柱穴	SB29	奈良	
1008	大井	須恵器	蓋	天井部外面	柱穴	SB51	奈良	
1009	大井	須恵器	杯	底部外面	井戸	SE50	奈良	
1014	男	須恵器	杯	底部外面	土坑	SK220	奈良	
1128	大井	須恵器	蓋	天井部外面	包含層	—	飛鳥	
1140	吉	須恵器	蓋	天井部外面	包含層	—	奈良	
1141	大井	須恵器	蓋	天井部外面	包含層	—	奈良	
1164	里□	須恵器	杯	底部外面	包含層	—	奈良	
1165	安	須恵器	杯	底部外面	包含層	—	奈良	刻書。「安麿」を示すか。
1175	□□	須恵器	杯	底部外面	包含層	—	奈良	3 文字の可能性もあり。
1181	田中	須恵器	杯	底部外面	包含層	—	奈良	
1182	秋	須恵器	杯	底部外面	包含層	—	奈良	

第 3 表　文字資料一覧

立柱建物が、飛鳥時代には桁行の長い大型の建物が不規則に多数建築される。その一部には、建物間隔を測量により決定しているものも現れる。次の奈良時代には広範囲に測量により位置が決定された建物群が展開する。品字やＬ字状に配置された建物は、小規模になりながらも次の平安時代前期においても、やや場所を変え存続する。平安時代中期には中世的な束柱をもつ建物が現れ、多数の建物が面を揃えて建てられる。品字やＬ字状の配列とは趣を異にするものの、多くの建物が整然と配置される状態には変化は無い。しかし、平安時代末期以降には建物数も極端に減少し、室町時代に至っては皆無となる。

２．文字資料

今回の調査では 54 点の墨書、1 点の線刻文字が確認されている。上野市遺跡調査会の調査においても 16 点の墨書・線刻土器が出土しており[37][38]、計 70 点の文字資料を提供している。これらの時期は、飛鳥時代に属する 6 点の他は全て奈良時代に属するものである。この時期において、これほどの数の文字資料を出土する遺跡は、現時点では伊賀国に無く、伊賀国府[39]や有力豪族夏見氏との関係が推測される鴻ノ巣遺跡[40]・夏見廃寺[41]においてさえ、文字資料の目立った出土は無い。したがって当遺跡は、伊賀国内に限れば、極めて多くの墨書土器等が出土する遺跡と位置付けることが可能である。しかし、これほどの文字資料を出土し、木製品が残り易い土壌であるにもかかわらず、木簡の出土は無い。

文字資料の内訳は、木製の井戸枠にその組立順を示したもの 25 点の他は土器に記されたものである。土器に記されたもの 29 点の内、土師器が 4 点、須恵器が 25 点で、ほとんどが須恵器に記されている。器種では、圧倒的に蓋、杯に記されており、他の器種では壺が 1 点と鉢、Ⅲが 2 点ずつ程度である。

書かれた内容では、数字（「廿」「千」）、人名（「安麿」）、吉祥句（「吉」「廣」「大」）[42]等多様である。「千」は人名の略の可能性もあり[43]、その分類や解釈は困難な状況である。これらのなかで目立つのは 6 点を数える「大井」である。上野市遺跡調査会の調査においても 11 点出土しており[44][45]、圧倒的多数である。「井」とのみ記したものもあり、井戸に対する信仰を示すもの[46]と解釈できる。SE55 から多量の遺物が完形で出土したことも井戸に対する祭祀の表れであろう。また、当遺跡の北西に接して中世城館の「大井氏館跡」がある。大井氏の館とするのは江戸時代の郷土史料[47]によるものであり信憑性は低いものの、「大井」が人名に転じた可能性もある。

官衙関係建物や官職関係を表わすものは無いが、「里」と書かれたものがある。他の 1 文字は不明であるが「里長」と書かれていた可能性も皆無ではない。

３．ＳＤ２０１出土土器

掘立柱建物群の東を限る溝、SD201 からは、当遺跡出土遺物総数の半数をはるかに超える多量の遺物が出土している。これらは、比較的残存の良好なものが多く、後述するように 8 世紀初頭前後に収まるものと考えられる。したがって、溝出土とはいえ、一括性は比較的高いものと考えている。

Ａ．土師器杯

SD201 から出土している土師器杯は、内面にラセン暗文や放射暗文を施す精製のもので、畿内的な要素をもつものである。分類においても既述したように、飛鳥藤原京での分類をそのまま当てはめることが可能であり、杯Ａと杯Ｃに分類できる。第 126 図は飛鳥藤原京出土のものの法量比較図[48]に SD201 出土の資料を合成したものである。これにより、当遺跡と飛鳥藤原京の比較を試みる。

SD201 出土の杯Ａでは、径高指数約 32 で、飛鳥藤原京のⅣ期よりもややおおきい値である。このⅣ期には法量による器種分化が始まっているが、SD201 については、認められない。また、法量のまとまりも悪く、個体差が大きい状況である。口縁部の形体は、Ⅳ期以降の特徴を示しているが、底部外面をヘラケズリする古い要素もある。

杯Ｃでは径高指数 27 が求められ、これは飛鳥藤原京のⅢ期に相当する値である。法量による器種分化も行われており、飛鳥藤原京の杯ＣⅠ、杯ＣⅡ、杯ＣⅢに対応させることが可能である。しかし、杯Ａよりは個体差が少ないものの、3 段階の法量による分化は飛鳥藤原京のものより若干不鮮明な状況である。また、杯ＣⅠ・杯ＣⅡでは、飛鳥藤原京のものより口径がやや縮小した位置に分布する傾向を

つかむことも可能である。調整においては、外面をヘラケズリするものは無く、一部ヘラミガキを施すものがあるものの､ほとんどは未調整である｡これは、むしろⅣ期以降の特徴である。内面の放射暗文が粗いものや、口縁端部ちかくに至らないものもあり、むしろⅤ期にちかいものと考えるべきものもある。

以上、SD201出土のものは、法量等古い要素を残すものの飛鳥藤原京のⅣ～Ⅴ期に並行すると考えることが妥当と思われる。また、杯Ｃにおいて法量による器種分化がみられる等、飛鳥藤原京を意識して作成されている様子が窺える。しかし細部においては法量のばらつき、径高指数が調整や器形の特徴より古相をもつこと、杯Ａ法量の不統一や法量による未分化等、飛鳥藤原京を模倣しきれない部分も併せもっている。このことは、これらの土器が都から運ばれた、あるいは都の工人により製作されたものではなく、在地の工人が都に似せて作成したものと推測されるものである。

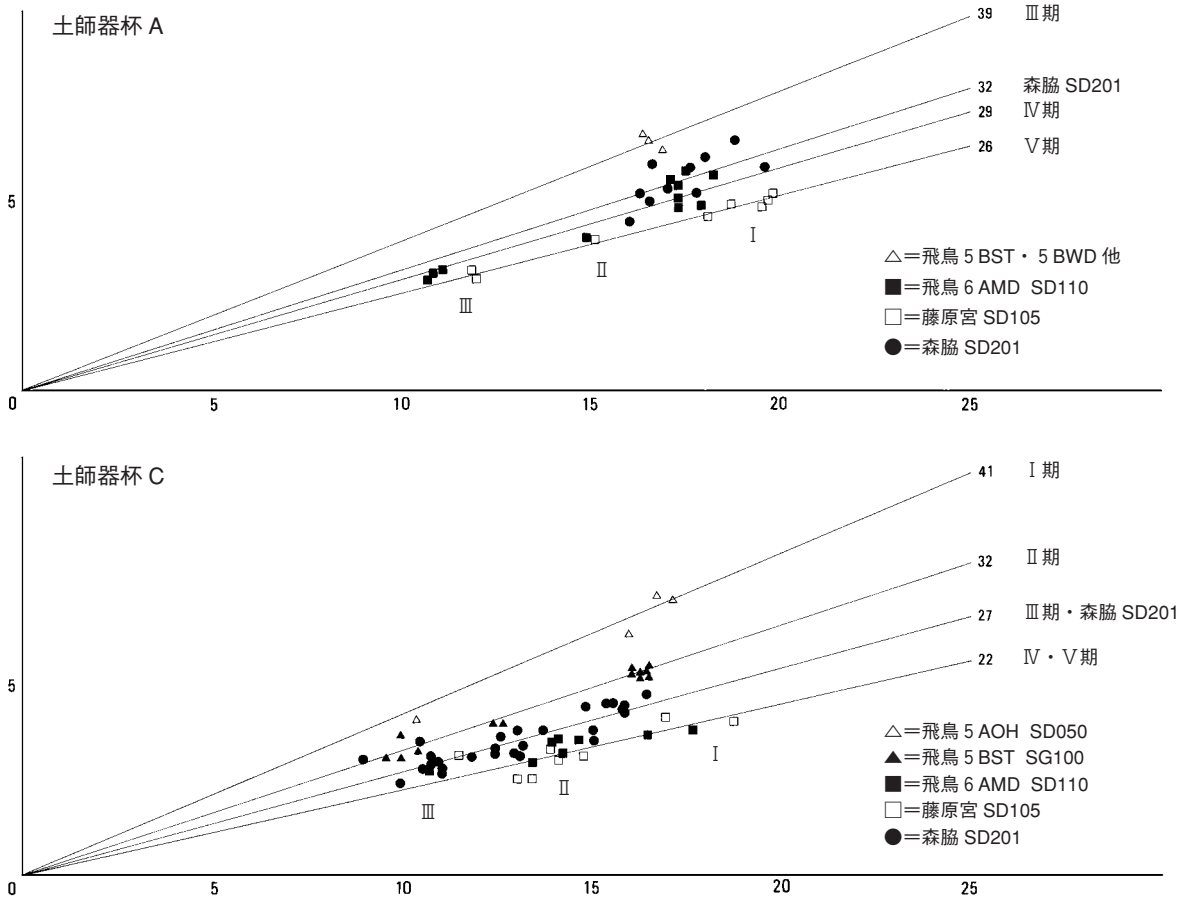
また、精製の土師器杯と粗製の椀の比率は４：６であり、粗製椀が優勢である。この粗製椀にヘラミガキを施し精製杯に似せようとしたものがある。このように、都に似せて似せきれない当遺跡の様子を窺うことができる。

Ｂ．須恵器杯

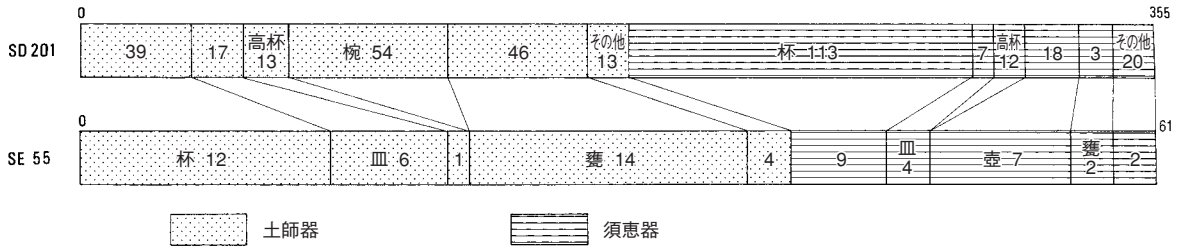
須恵器杯には杯Ｈ、杯Ｇ、杯Ａ、杯Ｂの４種類が出土している。そのうち杯Ｈの出土は僅少である。杯Ｇ：杯Ａ：杯Ｂの比率はおよそ６：１：３である。杯Ｂのうち、底部外面をロクロケズリするものと未調整のものの比率は、２：８で、圧倒的に後者が多い。杯Ｂは、個体差がおおきいものの径高指数30前後に分布するものが多く、飛鳥藤原京のⅣ期[49]に相当する。しかし、杯Ｇの比率が高く、蓋においては陶邑編年[50]のⅢ-1～Ⅳ-2までのものを含み、量的にはⅢ-1～Ⅲ-2のものが多い。このように、須恵器杯・蓋をみれば、SD201出土遺物にはかなりの時期幅があることになる。

Ｃ．器種構成

SD201出土遺物については全体の個体数計測は行



第126図　法量比較図



第 127 図　器種構成図

っていないので､図示したもののみを対象としたが、おおむね全体の器種構成を表わしているものと考えている。土製品、木製品を除く容器のうち、容器に付属する蓋類を除く 355 点を第 127 図に示した。

須恵器と土師器はほとんど同数の出土である。これは、圧倒的に土師器が多い同時期の平生遺跡[51]と比べ異なる特徴である。器種については、食器の杯、皿、椀類の比率は、70% を超え、貯蔵具や煮沸具等を圧倒している。また、食器における比率は、土師器 48%、須恵器 52% である。これらの比率は、須恵器の比率が当遺跡で若干高いことを除けば平城京 SD485 出土土器[52]の構成と酷似する。やや時期の異なる遺構との比較であるが、SD201 出土遺物の器種構成は官衙的様相を示していると言えるであろう。

D．小結

この様に、SD201 出土土器群は、官衙的様相を示し、飛鳥藤原京に類似する要素も多い。しかし、細部においては相違点も多く、既述したように都を強く意識しているものの、完全には模倣しきれない様相を読み取ることができる。

また、この土器群の時期としては、先述の古い要素が残る傾向にあるものの、比較的まとまった様相を示す土師器杯を基準に飛鳥Ⅳ期～Ⅴ期に相当するものと考えられる。その結果、須恵器杯・蓋においては、短期間に急激な形式変化を経たと考えざるを得ない結果に至る。

4．ＳＥ５５出土土器

奈良時代の遺構 SE55 からまとまった遺物の出土があった。これには、完形のものが多く、一括性は高いものと考えられる。土師器杯には、杯Ａと杯Ｂがあり、杯Ｃは掘形出土のものがあるのみである。暗文やヘラミガキは杯Ｂに残るものの杯Ａではほとんど消滅している。杯Ａの口径は 13 ～ 14 ㎝で径高指数は 25、杯Ｂでは、口径 16 ㎝未満、径高指数 22 で、かなり法量が縮小していて、法量分化は認められない。これらは、平城京のものと対比させると平城Ⅵ～Ⅶあたりに相当する[53]が、口縁部の外傾は小さく、形態的には平城Ⅵまでに収まるものと考えられる。この様に、杯Ｂにおいては平城京と形態が相当異なり、当地の編年に対比させることが不可能である。皿Ａについても 4 点ほど出土しているが、平城Ⅵとした場合には、当地の皿ＡⅡよりは口径がやや縮小した状態である。小片ではあるが、唯一出土している高杯では、長脚化しておらず、平城Ⅳ程度の形態を示す。また、この時期に調整の主体とされるＣ手法は SE55 出土遺物ではみられない。この様に、SE55 出土遺物を平城京の編年[54]に基づいて完全にとらえることはできなくなっており、SD201 当時より都の影響が土器において薄れていることが読み取れる。

SD201 と同様な手法で器種構成をみれば、土師器 60%、須恵器 40% となり、SD201 の時期よりも須恵器の後退がみられる（第 127 図）。また、食器の占める割合は 52% に後退し、これは主に、須恵器杯の激減が影響している。土師器の食器だけをみれば SD201 からの比率の変化は小さい。ただし、精製品を上回っていた粗製品の食器（椀）が出土しておらず、土師器の食器は全て精製品で構成されている。全体としては、食器・煮炊具は土師器、貯蔵具は須恵器といった構成になり、生活色が強まる傾向にあるとも考えられる。

5．結語

森脇遺跡の属する伊賀郡の郡衙推定地は、木簡の出土[55]や「郡」という地名が残ること等により、当遺

跡南方1.5㎞の下郡遺跡が有力視されている。しかし、下郡遺跡では昭和53年以来6回の発掘調査が行われているが[56]、郡衙に相当する遺構は検出されておらず、木簡以外では官衙を想定させる遺物の出土も無い。したがって、伊賀郡内においては森脇遺跡が最も郡衙にちかい遺構・遺物を検出していることになる。飛鳥時代では、官衙的な桁行の長い建物が多数みられ、遺物のうえからも非常に官衙にちかい様相を示す。奈良時代では掘立柱建物群が規則的な配列を示し、特にSB166を中心とする5群においては、「品字型」に分類されるもの[57]である。5-1群の倉庫SB29や5-2・5-3群のSB23・31は、面積25㎡以上の中型のもので、郡衙正倉とするに十分な規模[58]である。多数の墨書土器の出土も官衙遺跡に共通の要素である。また、7世紀末から9世紀に盛行し、10世紀の終焉とともに衰退する掘立柱建物群の盛衰は、官衙遺跡の盛衰と一致するもの[59]である。

しかし一方で、官衙遺跡とするには否定的な要素も多い。まず、飛鳥時代のものについては、桁行の長い建物が多いものの規則的な配列に乏しく、官衙遺跡としては程遠い状態である。奈良時代のものでは、最も官衙的な配列を示す5群において、井戸を伴うことや倉庫群が正倉とするには棟数が少ないこと、出土遺物の官衙的要素が薄れていること等があげられる。また、両時代に共通な要素として、当遺跡は木製品の残存に良好な土壌であるにもかかわらず木簡の出土が無いことがあげられる。特に群衙においては、租税の徴収を主な業務とするため木簡は当然出土してしかるべきである。また、多数出土した墨書土器においても直接郡衙を示すものは無い。

以上から、当遺跡は官衙的な要素を含むものの、ただちに郡衙跡と推測することは不適当と考えざるを得ない。8世紀初頭頃には畿内の有力首長層の居宅自体に「官衙風配置」が採用される[60]といわれている。したがって、当遺跡5群等の建物群は、この流れの中にあるものと考え、有力豪族の居館と想定したい。

では、この有力豪族とは、どのようなものであろうか。既述したように「里□」と読める墨書土器が出土している。これをもとに里長クラスの豪族との推測が一案である。菰野町下江平遺跡は「五十戸□」と墨書された土器が出土し、整然と配置された掘立柱建物等から里長クラスの在地豪族の居宅とされている[61]。森脇遺跡の建物群は、この下江平遺跡と比べより官衙的であり、倉庫の規模も大きい。名張市鴻之巣遺跡は名張郡の有力豪族夏見氏と密接な関係をもつ遺跡である[62]。鴻之巣遺跡の建物配置等と比較した場合においても森脇遺跡がより官衙的であり、3棟並ぶ倉は類似点が多いものの森脇遺跡の方が大規模である。この様なことから、森脇遺跡は里長クラスより上位の郡司クラス同等の豪族居館であった可能性が大きいものと考えられる。

次に、飛鳥時代の建物郡であるが、和銅4年の新東海道設置までは東海道が当遺跡を北上し、壬申の乱では大海人皇子がこれを北上している。ぬか塚古墳等を造営した在地豪族の存在や交通の要衝という条件のもとに、時期がやや異なるものの山中敏史氏が定義する初期評衙[63]として成立した可能性も少しはあるものと考えられる。その後、評衙として発展することは無く、伊賀郡の郡衙は、付近に有力古墳群のない「非本拠地型[64]」として下郡遺跡付近に造営されたものと推測したい。森脇遺跡に居住する豪族は、郡衙への通勤（?）を余儀なくされながらも、当地に勢力を保ち続けたものと考えられる。その場合、居館としては大規模な倉庫SB29は郡衙借倉として利用された[65]可能性もあるであろう。そうであれば、官衙と密接に関連した豪族であったことが推測され、その盛衰も官衙と運命を伴にすることになったのではないであろうか。

以上、「有力豪族居館」という以外は推測に推測を重ねる結果となってしまった。森脇遺跡の性格は、律令による地方支配の成立の過程や末端組織、多様な地方の実情等を踏まえ、また、当時期の下級的集落を含め考察されねばならないものであろう。最後に、当地が和歌の名所「哀園森」、「垂園森」として後世に伝えられる要因は何も明らかに出来なかった。SB15の状態がこれを解く鍵を示しているものと推測されるが、現段階では明確な仮設をも持ち得ない。これを含め、今後に残る課題は大きく、多い。

［註］

① 池田龜鑑ほか校注『日本古典文学大系 19　枕草子　紫式部日記』岩波書店　昭和 33 年

② 谷山茂ほか編「歌枕名寄巻第十九」『新編国歌大観第二巻』角川書店　昭和五十九年三月十五日

③ 菊岡如幻『伊水温故』上野市古文献刊行会

④ 藤澤衛彦『日本傳説叢書　伊賀の巻』日本傳説叢書刊行會　大正八年七月廿一日

⑤ 前掲③に同じ

⑥ 前掲③に同じ

⑦ 前掲④に同じ

⑧ 坂本太郎ほか校注『日本古典文学大系 68　日本書紀　下』岩波書店　昭和 40 年

⑨ 森川桜男「壬申の乱と伊賀」『伊賀の歴史・上巻』株式会社郷土出版社　1992 年 11 月 19 日

⑩ 山本雅靖ほか『下郡遺跡発掘調査報告』上野市教育委員会・上野市下郡遺跡調査会　1978 年 9 月

⑪ 山田猛・駒田利治『北堀池遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会

⑫ 倉田直純「浮田遺跡」『平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告―第 1 分冊―』三重県教育委員会　三重県埋蔵文化財センター　1990.3

⑬ 駒田利治「伊賀の中世城館―発掘調査事例の検討―」『菊永氏城跡発掘調査報告』阿山町教育委員会・阿山町遺跡調査会　1987.3

⑭ 福井健二「大井氏城」『三重の中世城館』三重県教育委員会　1976

⑮ 田中秀和・前川依久雄『森脇遺跡発掘調査報告』上野市遺跡調査会　1995 年 3 月

⑯ 前川依久雄『森脇遺跡発掘調査報告』上野市遺跡調査会　1990 年 3 月

⑰ 前掲⑮に同じ

⑱ 前掲⑮に同じ

⑲ 前掲⑮に同じ

⑳ 前掲⑮に同じ

㉑ 前掲⑮に同じ

㉒ 前掲⑮に同じ

㉓ 宇野隆夫「井戸考」『史林 65 巻 5 号』1982 年 9 月

㉔ 前掲⑮に同じ

㉕ 前掲⑮に同じ

㉖ 前掲⑮に同じ

㉗ 前掲⑮に同じ

㉘ 奈良国立文化財研究所『木器集成図録近畿原始篇』1993

㉙ 中村浩氏の御教示による。

㉚ 奈良国立文化財研究所『木器集成図録近畿原始篇』1993

㉛ 西弘海『土器様式の成立とその背景』真陽社　昭和 61 年 5 月

㉜ 玉田芳英「平城宮の土器」『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東―』古代の土器研究会　1992 年 9 月 19 日

㉝ 前掲㉜に同じ

㉞ 増渕徹氏のご教示による。

㉟ 斎藤忠『日本考古学用語辞典』学生社　1992.5

㊱ 前掲⑮に同じ

㊲ 前掲⑮に同じ

㊳ 前掲⑯に同じ

㊴ 泉雄二・服部久士『伊賀国府（第 4 次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1992.3

㊵ 門田了三「鴻之巣遺跡の調査」『鴻之巣遺跡・小谷遺跡・小谷古墳群』名張市遺跡調査会　平成 3 年 7 月 26 日

㊶ 水口昌也『夏見廃寺』名張市教育委員会　昭和 63 年 3 月 31 日

㊷ 吉沢幹夫「宮城県出土の墨書土器について」『東北歴史資料館研究紀要第 10 巻』東北歴史資料館　昭和 59 年 3 月

㊸ 斎藤忠「墨書土器研究の意義」『季刊考古学第 18 号』雄山閣　1987.2

㊹ 前掲⑮に同じ

㊺ 前掲⑯に同じ

㊻ 前掲㊸に同じ

㊼ 前掲③に同じ

㊽ 前掲㉛に同じ

㊾ 前掲㉛に同じ

㊿ 中村浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房　1981 年 11 月 25 日

(51) 吉村利男他『平生遺跡発掘調査報告』平生遺跡調査団　1976

(52) 前掲㉛に同じ

(53) 前掲㊽に同じ

(54) 玉田芳英「平城京の土器」『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東―』古代の土器研究会　1992.9

(55) 山田猛他『下郡遺跡発掘調査報告』上野市教育委員会・上野市遺跡調査会　1978 年 9 月

⑯ 倉田守『下郡遺跡発掘調査報告―第７次調査―』三重県教育委員会　1986.3
⑰ 山中敏史『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房　1994.2
⑱ 前掲⑰に同じ
⑲ 前掲⑰に同じ
⑳ 広瀬和雄「畿内の古代集落」『国立歴史民俗博物館研究報告 22 集』国立歴史民俗博物館　1989
㉑ 駒田利治・森田浩史『下江平遺跡発掘調査報告Ⅱ』菰野町教育委員会　1988.3
㉒ 前掲⑳に同じ
㉓ 前掲⑰に同じ
㉔ 前掲⑰に同じ
㉕ 前掲⑰に同じ

報告書	調査時	報告書	調査時	報告書	調査時	報告書	調査時	報告書	調査時	報告書	調査時	報告書	調査時
SD1	A-2 SD1	SD18	D-14 SD2		I-17 P2		K-27 P1	SD58	Q-15 ～ 21 旧河道	SB82	D-5 P2		G-27 P4
	A-7 SD3	SD19	E-15 SD1	SB31	I-17 P5		K-27 P8			SK160	P-42 P5		G-27 P7
	A-8 SD3		H-15 SD1		I-18 P8		K-27 P14	SZ59	I-17 SX1		I-25 P6		G-28 P1
SD2	A-9 SD3		D-17 SD1		I-18 P11		K-28 P8		M-27 SD5	SB161	I-26 P1	SB173	G-28 P2
	A-10 SD3		E-17 SD3		I-18 P14	SB45	L-27 P6		N-27 SD2		I-26 P7		G-29 P1
	A-11 SD3		F-17 SD1	SB31	I-19 P14		L-27 P7		O-27 SD1		J-25 P2		G-29 P2
	D-3 SD2		G-17 SD3		J-17 P6		L-27 P8	SD60	P-27 SD4		J-26 P5		G-29 P4
SB3	—		H-17 SD1		J-19 P4		L-28 P5		H-28 SD2	SA162	G-32 P2		G-29 P5
SD4	D-4 SD3	SD20	I-17 SD2		J-19 P6		L-28 P10		I-28 SD1		H-32 P9	SB174	G-29 P7
	E-4 SD1		J-17 SD2		J-19 P1		M-28 P5		J-27 SD2		R-38 P6		G-30 P1
	F-4 SD1		K-16 SD3		J-19 P2	SA46	K-26 P1		K-29 SD1		R-39 P11		G-30 P8
SB5	A-2 P2		L-16 SD2		J-20 P2		K-27 P4	SD61	L-29 SD2	SB163	S-39 P4		G-30 P2
	A-3 P1		M-16 SD1	SB32	J-21 P1	SA47	L-26 P7		P-29 SD1		S-40 P1		G-30 P3
	A-3 P2		N-16 SD1		J-21 P2		L-26 P10		I-30 SD6		S-41 P3	SB175	G-30 P5
	D-4 SD2		O-16 SD1		K-19 P5		L-26 P11		J-30 SD4		P-37 P2		G-31 P1
SD6	E-4 SD2	SD21	E-20 SD3		K-20 P8	SA48	M-26 P2		I-17 P1		P-38 P2		G-31 P3
	F-4 SD3		D-19 P1		K-20 P9		M-26 P3		I-17 P5		P-38 P6		H-31 P10
	D-5 SD4		D-19 P2		I-16 SD1		M-27 P1	SB62	I-18 P7		Q-37 P8		G-33 P1
SD7	E-5 SD2	SB22	D-19 P3		K-18 SX1		M-27 P4		I-18 P10		Q-39 P1		G-33 P2
	F-5 SD1		D-19 P4	SD33	K-19 SX6		M-28 P2		J-17 P4	SB164	Q-39 P3		G-33 P3
	G-5 SD1		D-19 P5		L-19 SX3		M-28 P3		J-18 P2		Q-39 P5		H-32 P1
	F-4 SD2		D-19 P6		M-19 SD1	SB49	N-27 P5	SB63	L-11 P1		Q-40 P1	SB176	H-32 P2
SD8	F-5 SD3		D-20 P2		N-19 SK2		N-27 P9		L-12 P1		Q-40 P3		H-32 P3
	F-6 SD1		D-20 P3		N-19 SK3		N-28 SX4	SD64	—		Q-40 P7		H-32 P10
	I-9 SD1		D-20 P4		L-15 SD1		L-27 P1		E-9 SD1		Q-40 P9		H-33 P2
SD9	I-11 SD1		D-20 P5	SD34	L-15 SD6		L-28 P2	SD65	E-11 SD1		L-49 P1		H-33 P5
	I-12 SD1		D-21 P1		M-15 SD1		L-28 P3		E-13 SD1		L-49 P4		H-30 P1
SD10	I-10 SD4		D-21 P2		N-15 SD1	SE50	M-27 SE6		G-8 SX1	SB165	M-49 P6		H-30 P5
	I-12 SD2		D-21 P4		L-14 SX4		N-28 SK6	SD66	D-8 SD1		M-49 P1		H-30 P7
	J-10 P2	SB23	E-20 P1	SD35	M-14 SD3		J-28 P3	SB67	—		M-49 P3		H-30 P8
	J-11 P1		E-20 P4		O-16 SD2		J-28 P4	SK68	G-8 SK2		H-25 P1		H-31 P4
SB11	J-11 P4		E-20 P5		L-14 SD3		J-29 P4	SK69	E-9 SK2		H-26 P10	SB177	H-31 P7
	J-11 P5		E-20 P6	SD36	M-14 SD2		J-29 P5	SK70	F-14 SK1		H-26 P11		H-31 P9
	J-11 P6		E-21 P1		N-14 SD2		J-29 P8		E-7 ～ 12 旧河道		H-27 SK9		I-30 P4
	J-11 P7		E-21 P2	SE37	M-14 SK5		J-30 P1				I-27 P9		I-30 P5
	J-12 P1		E-21 P3	SE38	L-15 SE2		J-30 P2		F-7 ～ 21 旧河道		J-24 P1		I-31 P3
	J-12 P3		E-21 P4		J-22 SD2		K-28 P3			SB166	J-25 P5		I-31 P4
SB12	J-8 P1	SB24	D-20 P1	SD39	K-21 SD1	SB51	K-30 P1		G-6 ～ 21 旧河道		J-25 P7		H-32 P5
	J-10 P1		E-20 P2		L-21 SD1		K-30 P2				J-25 P8		H-32 P6
	K-10 P2		E-19 P4		M-20 SD2		L-28 P6		H-5 ～ 9 旧河道		J-26 P2		H-32 P8
	K-10 P1		E-19 P5		L-21 P4		L-28 P9	SD71			J-26 P4		H-33 P1
SB13	K-10 P3		E-19 P6	SB40	L-22 P4		L-29 P3		H-13 ～ 18 旧河道		J-26 P5		H-33 P3
	K-10 P4		F-18 P2		M-21 P3		L-29 P4				J-27 P5	SB178	I-32 P1
	L-10 P4	SB25	F-19 P1		M-21 P10		L-29 P7		H-20・21 旧河道		H-25 P5		I-32 P3
	K-11 P2		F-19 P2		M-22 P1		L-30 P10				H-26 P12		I-32 P4
	K-11 P5		F-19 P3		K-23 P1		L-30 P11		I-6・7 旧河道		H-27 P10		I-33 P1
SB14	K-11 P6		F-19 P4		K-23 P7	SB52	K-30 P6				I-25 P1		I-33 P2
	K-11 P8		F-19 P5		K-23 P10		K-30 P8		I-8 SX1		I-25 P3		I-33 P3
	L-10 P8		F-19 P6		K-24 P1		K-31 P1		O-15 ～ 18 旧河道		I-25 P5		I-33 P4
	K-11 P1	SD26	—		K-24 P5		L-30 P5				I-26 P3	SB179	J-34 P1
	K-11 P3		G-18 SD2		K-24 P7		L-30 P7		P-15 ～ 21 旧河道		I-26 P6		J-34 P2
	K-11 P7	SD27	G-20 SD1		L-23 P3		L-31 P3				I-26 P8		K-34 P1
	K-11 P9		I-8 SD3	SB41	L-23 P4		L-31 P4		Q-15 ～ 21 旧河道		I-26 P11		K-34 P4
	K-11 P10		I-9 SD2		L-23 P7		N-29 P1				I-27 P4		K-34 P6
	K-12 P1		I-10 SD3		L-23 P8		N-29 P2	SD72	R-16 ～ 21 旧河道		I-27 P8		K-34 P8
	K-12 P2		H-17 P3		L-23 P9		N-29 P3				I-27 P10		K-35 P4
	K-13 P1		H-17 P4		L-24 P2		N-30 P1		S-17 ～ 21 旧河道		J-25 P6		K-35 P5
	L-11 P4	SB28	H-18 P2		L-24 P7	SB53	N-30 P3				J-26 P3	SB180	K-35 P12
	L-11 P5		H-18 P4		L-24 P12		N-30 P5		T-18 ～ 21 旧河道	SB168	H-25 P2		L-33 P1
SB15	L-11 P7		I-17 P7		M-24 P2		O-29 P1				H-25 P4		L-33 P4
	L-12 P2		I-18 P5		K-22 P3		O-29 P5		U-19 ～ 21 旧河道		I-25 P2		L-34 P3
	L-12 P3		I-18 P9		K-23 P2		O-30 P4			SB169	G-26 P2		L-34 P4
	L-12 P7		I-18 P12		K-23 P3		O-30 P5		L-26 P1		G-26 P3		L-34 P9
	L-12 P9		I-18 P16		K-24 P2		M-31 P1	SA73	L-26 P2		G-26 P1		L-35 P4
	L-12 P10		I-18 P17	SB42	K-24 P10		N-31 P2		L-27 P9		G-27 P3		L-35 P12
	L-13 P1		I-18 P18		L-24 P4		N-32 P2		L-27 P12		G-27 P6		K-32 P1
	L-13 P2		I-18 SK15		L-24 P6		N-32 P4		D-10 P1		G-27 P10		K-33 P2
	M-11 P1		I-19 P15		L-24 P9	SB54	N-32 P6	SB74	D-11 P1	SB170	H-26 P5		K-33 P5
	M-12 P1		I-19 P17		L-24 P11		O-31 P1		D-11 P3		H-26 P9	SB181	K-34 P2
	M-12 P9		J-17 P1		K-23 P6		O-31 P3		A-13 ～ 17 旧河道		H-27 P3		K-34 P10
	M-11 P2	SB29	J-17 P7		K-24 P3		O-31 P4	SD75			H-27 P4		L-33 P2
	M-12 P2		J-17 P10		L-23 P2		O-32 P5		D-8 ～ 11 旧河道		H-27 P5		L-33 P12
SB16	M-12 P10		J-18 P7	SB43	L-23 P5		P-32 P4				I-28 P2		L-34 P5
	M-13 P1		J-18 P9		L-24 P1	SE55	O-28 SK1	SK76	G-8 SK3		I-28 P3		K-35 P7
	M-13 P2		J-19 P5		L-25 P5		Q-29 P2	SA77	K-28 P5		I-28 P4		K-35 P8
	M-13 P3		J-19 P7		L-25 P9		Q-31 P3		K-10 P5	SB171	I-29 P1		K-35 P9
	N-13 P2		J-19 P8		K-23 P5	SA56	Q-31 P4	SB78	L-10 P1		I-29 P7		K-35 P10
	N-13 P4		K-18 P9		K-23 P8		Q-32 P4		L-10 P5		J-28 P1	SB182	K-35 P13
	M-12 P3		K-18 P10		K-24 P4		Q-33 P2		L-10 P6		J-28 P5		L-35 P3
	M-12 P4		K-19 SX7		K-24 P6	SE57	Q-31 SE5	SK79	N-18 SK5		J-29 P7		L-35 P5
SB17	M-14 P6		I-18 P3	SB44	K-25 P8		O-15 ～ 18 旧河道	SK80	Q-32 P1		H-28 P3		L-35 P7
	N-13 P9	SA30	I-19 P13		L-23 P6	SD58			Q-32 P2		H-29 P3		L-35 P13
	N-13 P10		I-20 P15		L-24 P3		P-15 ～ 21 旧河道		I-20 P5	SB172	I-28 P5		
	N-14 P1				L-24 P10			SB81	I-21 P1		I-28 P6		
					L-24 P13				J-21 P3		I-29 P7		

第４－１表　遺構番号対照表

報告書	調査時	報告書	調査時	報告書	調査時	報告書	調査時	報告書	調査時	報告書	調査時	報告書	調査時
	K-37 P6		Q-40 P2		Y-47 溝 1	SD216	M-56 SD2		V-57 SD2		X-45 P1		K-42 P2
	K-37 P14		Q-40 P11	SD201	Y-48 溝 1	SD217	—		W-55 SD2	SB274	X-45 P2		K-42 P10
	K-38 P10		Q-41 P2		Z-47 溝 1		M-49 SD8		X-54 SD1		X-45 P3	SB286	L-42 P1
SB183	L-37 P7		R-40 P4		ぁ -46 溝 1		N-49 SD5		X-55 SD3		W-44 P2		L-42 P11
	L-37 P12	SB195	R-40 P8		Y-47 溝 2	SD218	O-49 SD5		X-61 SK2	SB275	X-44 P1		L-44 P1
	L-37 P13		R-40 P9	SD202	Z-46 溝 2		Q-48 SD1		Y-53 SD1		X-44 P3		M-44 P5
	L-38 P4		R-40 P14		Z-47 溝 2		R-48 SD5		Y-54 SD1		X-44 P6		K-42 P6
	K-36 P1		R-41 P1		F-34 溝 3	SK219	S-53 SK3	SX259	Z-54 SD1		L-55 P4	SB287	K-43 P12
	K-36 P5		R-41 P3		G-35 溝 3	SK220	S-49 SK4		ぁ-54 SD1		M-44 P1		L-42 P7
	K-37 P1		R-41 P7		H-35 ～ 37 溝 3		Y-45 SK3		ぁ-55 SD1		M-44 P9		L-43 P5
SB184	K-37 P10		P-40 P3				Y-46 SK3		ぃ-54～56 SD1		M-45 P1		L-40 P11
	L-36 P6		P-40 P7		N-54 SD1		Y-46 SK4				M-45 P2		L-41 P1
	L-36 P17		P-40 P8		N-56 SD2		Y-46 SK6		ぅ-54～56 SD1		M-46 P1		L-41 P5
	L-37 P5		P-40 P9		N-57 SD2	SK221	Y-46 SK7			SB276	M-46 P5		L-41 P6
	M-37 P1		P-41 P1		N-59 SK1		Z-45 SK1	SK260	K-41 SK2		M-46 P7		L-41 P7
SA185	—		P-41 P6		O-54 SD3		Z-46 SK1	SE261	R-32 SE6		M-46 P9		L-41 P8
	L-36 P4	SB196	P-42 P1		O-54 SK2		Z-46 SK3	SE262	O-57 井戸 2		N-45 P1	SB288	L-42 P3
	L-36 P18		Q-40 P4		O-55 SD4		ぁ -46 SK2	SE263	Q-35 SK6		N-45 P2		L-42 P6
SB186	M-36 P5		Q-40 P5		O-56 SK1	SK222	W-43 SK5	SB264	X-52 P5		N-46 P1		M-40 P11
	M-36 P6		Q-40 P10		O-56 SD2	SK223	S-40 SK2	SB265	Y-52 P1		N-46 P2		M-41 P2
	M-36 P9		Q-41 P1		P-58 ～ 60 SD1		S-40 SK7		Z-52 P1		N-46 P4		M-41 P5
	N-33 P4		Q-41 P4			SK224	U-54 SK1		ぁ-52 P1		M-44 P11		M-42 P4
	N-33 P6		Q-41 P5		Q-64 溝 3		V-53 SK1		ぁ-53 P1		N-44 P2		M-42 P6
	N-33 P12		Q-42 P1	SD203	K-43 ～ 45 溝 3	SK225	Z-50 SD1		ぃ-52 P1	SB277	N-44 P5		M-42 P7
	N-33 P14		O-38 P12				ぁ -49 SD1	SB266	ぃ-52 P2		N-44 P6		M-42 P1
	N-34 P12		O-39 P11		K-46 SD1	SK226	N-34 SK16		ぃ-52 P3		O-45 P1		M-42 P2
	N-34 P15		O-40 P12		K-47 SD1	SK227	L-33 SK13		ぃ-53 P1	SA278	N-43 P6		M-43 P1
	N-34 P17	SB197	O-40 P17		L-47 SD2	SK228	M-33 SK10		ぃ-54 P2		N-44 P11		M-43 P2
SB187	N-34 P18		P-38 P5		L-48 SD2		M-34 SK13		ぅ-53 P1		P-45 P6	SB289	M-43 P10
	O-33 P2		P-39 P7		M-51 SD1	SK229	M-33 SK11		Q-50 P2		Q-45 P3		N-42 P3
	O-33 P5		P-40 P1		N-51 SD6	SK230	U-39 SK5	SA267	Q-50 P3		Q-45 P6		N-42 P6
	O-33 P6		P-40 P5		N-52 SD2	SK231	V-49 SK1		Q-51 P4	SB279	Q-45 P7		N-42 P7
	O-33 P8		O-38 P1		N-53 SD2	SK232	X-49 SK2		Q-50 P4		Q-46 P5		N-43 P4
	O-34 P2		O-38 P2		H-38 溝 3	SK233	R-47 SK4		Q-51 P6		Q-46 P13		O-43 P4
	O-34 P6		O-38 P13		H-39 溝 3	SK234	S-47 SK1		R-48 P6		R-46 P1	SB290	I-38 P2
	O-34 P7	SB198	O-39 P6		I-38 ～ 41 溝 3	SK235	Q-45 SK8		R-49 P2		Q-44 P2		I-39 P5
	N-37 P6		O-39 P18			SK236	O-43 SK9	SB268	R-49 P3		Q-44 P6		J-37 P2
	O-36 P10		O-40 P4		J-40 ～ 44 溝 3	SK237	O-42 SK13		R-50 P3		Q-45 P1	SB291	J-38 P2
	O-36 P11		P-40 P11			SK238	O-43 SK6		R-50 P4	SB280	Q-45 P2		J-38 P3
SB188	O-37 P3		N-38 P2		M-55 SD1	SK239	P-43 P5		R-51 P3		Q-45 P5		K-37 P12
	O-37 P11		N-38 P5	SD204	N-57 SD1	SK240	P-42 SK7		S-49 P1		R-45 P5	SB292	J-38 P1
	O-37 P12		N-39 P8		O-60 SD1	SK241	P-42 P8		S-49 P3		R-46 P2		J-38 P4
	O-37 P13		N-40 P9		Q-57 SD1	SK242	M-41 P7		T-49 P1		R-45 P1		K-37 P13
	O-36 P12	SB199	O-38 P14	SD205	R-57 SD1	SK243	M-40 P2		T-49 P2		R-45 P2	SB292	K-38 P2
	O-36 P16		O-39 P9		T-55 SD1	SK244	M-41 SK8		T-49 P3		R-46 P4		K-38 P9
	O-37 P1		O-39 P13	SD206	S-57 SD1	SK245	N-41 P4		U-48 P2	SB281	R-46 P5		J-39 P3
	O-37 P4		O-40 P11		T-55 SD2	SK246	N-40 P3	SB269	U-49 P4		R-46 P6		J-39 P5
SB189	O-37 P9		O-40 P15	SD207	S-51 SD1	SK247	V-43 SK4		U-49 P9		S-45 P1	SB293	K-39 P1
	O-38 P7		M-38 P2		T-52 SD1	SK248	R-53 SK2		U-50 P1		S-46 P1		K-39 P8
	O-38 P10		M-38 P6		L-46 ～ 48 SD1	SK249	V-46 P1		U-50 P2		R-43 P9		K-39 P9
	N-36 P7		M-39 P5			SH250	T-37 SK2		U-50 P3		R-43 P10		K-38 P6
	N-36 P8		N-38 P4		M-47 ～ 49 SD1		T-38 SD7	SA270	U-49 P7		R-44 P10		K-39 P2
	N-36 P10		N-38 P8			SH251	R-36 竪穴 1		U-50 P5		S-43 P4		K-39 P5
	M-35 P7	SB200	N-38 P10		N-50 SD1		R-36 P4		M-47 P4	SB282	S-45 P2		K-39 P10
	M-35 P9		N-39 P6		N-51 SD1		P-38 SK1		M-48 P14		S-45 P3		K-40 P3
	M-36 P7		N-40 P2		J-40 SD7		P-38 P4		N-47 P3		S-45 P4		K-40 P7
SB190	N-36 P2		N-40 P13		J-41 SD8		P-39 SK9		N-47 P4		T-44 P5	SB294	K-40 P8
	N-36 P4		O-39 P3		J-42 SD5		P-39 SD6		N-48 P2		T-45 P1		L-38 P1
	N-36 P11		O-40 土坑 9		K-43 SD5	SH252	P-39 P3		N-48 P3		Q-42 P2		L-39 P1
	O-36 P7		M-57 溝 1		K-44 SD4		Q-38 P3	SB271	N-48 P6		Q-42 P4		L-39 P2
	O-36 P17		N-58 溝 1		K-45 SD1		Q-39 P6		O-47 P1		Q-42 P5		L-40 P4
	P-36 P11		O-57 SD1		P-42 SD2		Q-39 SD7		O-47 P3		Q-42 P6		L-40 P5
	P-36 P12		P-56 SD2	SD209	Q-42 SD3		Q-39 SD8		O-47 P6		Q-42 P8		L-40 P6
SB191	Q-35 P1		P-57 SD1		R-41 SD6	SH253	L-43 SD3		O-48 P1	SB283	Q-43 P1		K-39 P3
	Q-35 P4		P-57 SD2		T-40 SD2		M-43 SD5		P-47 P8		Q-43 P3	SB295	K-39 P7
	Q-35 P7		P-57 SD3		Q-43 SD7	SH254	T-42 SK1		P-48 P2		Q-43 P4		L-38 P5
	P-37 P5		Q-55 SD1	SD210	R-42 SD4		U-41 P2		P-48 P4		Q-43 P5		L-40 P13
SA192	Q-37 P6		Q-56 SD1		S-41 SD2	SH255	Q-51 SD1	SA272	—		R-42 P2		L-40 P10
	Q-37 P7		Q-56 SD2		S-42 SD3		R-50 SD1		V-43 P2		R-43 P4	SB296	L-40 P12
	R-37 P1	SD201	R-53 溝 1		R-41 SD5		Q-51 SD5	SB273	V-43 P5		R-43 P5		L-41 P4
SA193	—		R-54 SD1	SD211	R-43 SD7	SH256	R-50 SD2		W-43 P1		K-43 P1		M-38 P3
	Q-38 P4		R-55 SD1		R-44 SD11		R-51 SD1		W-43 P3	SB284	K-43 P2	SA297	N-38 P1
	Q-39 P4		S-53 溝 1		S-39 SD7	SD257	W-48 SD4		W-43 P4		K-44 P1		N-38 P9
	R-38 P3		S-55 SD1		O-38 溝 12	SK258	W-47 SK2		X-44 P2		K-44 P2		M-38 P7
	R-38 P8		T-53 溝 1	SD212	P-38 SD3		R-59 SD2		Y-44 P2		K-44 P5	SA298	M-39 P2
SB194	R-39 P4		T-54 SD1		R-38 SD4		R-60 SD2		Y-45 P1		J-41 P1		N-38 P6
	R-40 P3		U-53 溝 1	SD213	Q-65 SD1		S-58 SD2		Y-45 P2		J-41 P6		O-38 P6
	R-40 P10		V-50 溝 1		R-66 SD4	SX259	T-57 SD2	SB274	Y-46 P2	SB285	J-41 P7	SA299	N-39 P2
	S-38 P2		V-51 溝 1	SD214	Q-67 SD1		U-56 ～ 58 SD2		W-44 P1		J-42 P2		N-40 P15
	S-39 P2		X-49 溝 1		R-66 SD1				X-44 P4		J-42 P6		
	S-40 P3		X-50 溝 1	SD215	Q-69 SD1		V-55 SD2		X-44 P5		K-42 P4		

第４－２表　遺構番号対照表

調査前風景　ー哀園森（手前）と垂園森ー（西から）

調査前風景　ーぬか塚（手前）と垂園森ー（北から）

PL 2

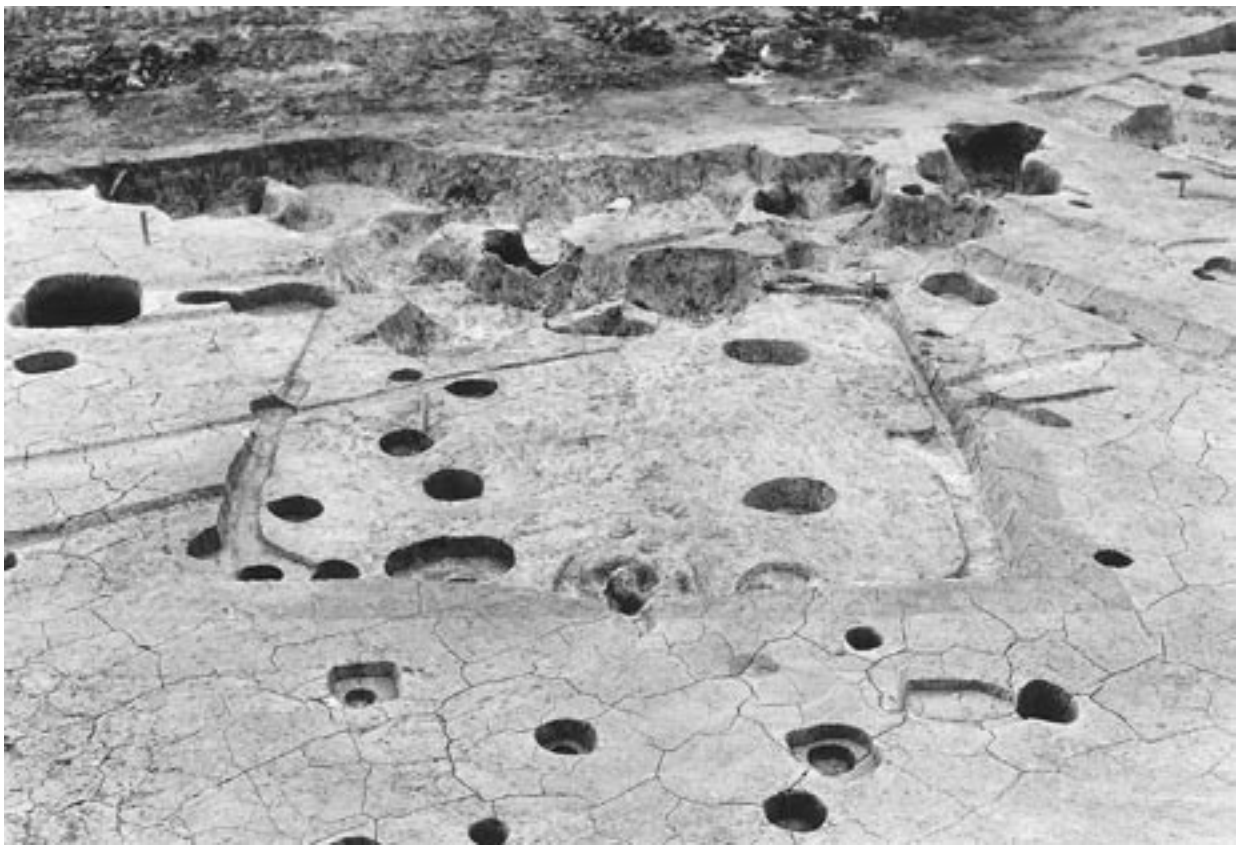
第一次調査全景（東から）

第二次調査遠景（北東から）

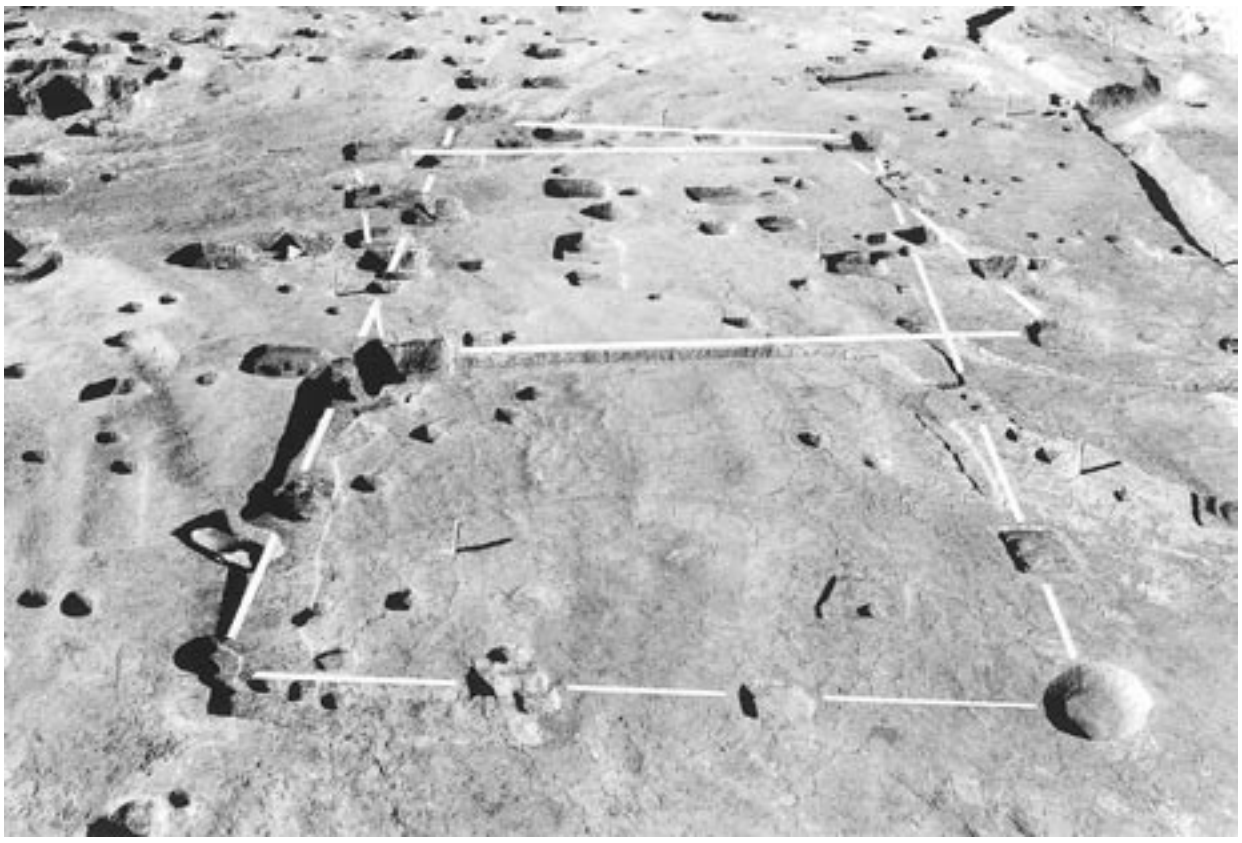
第二次調査全景（西から）

第二次調査全景（西から）

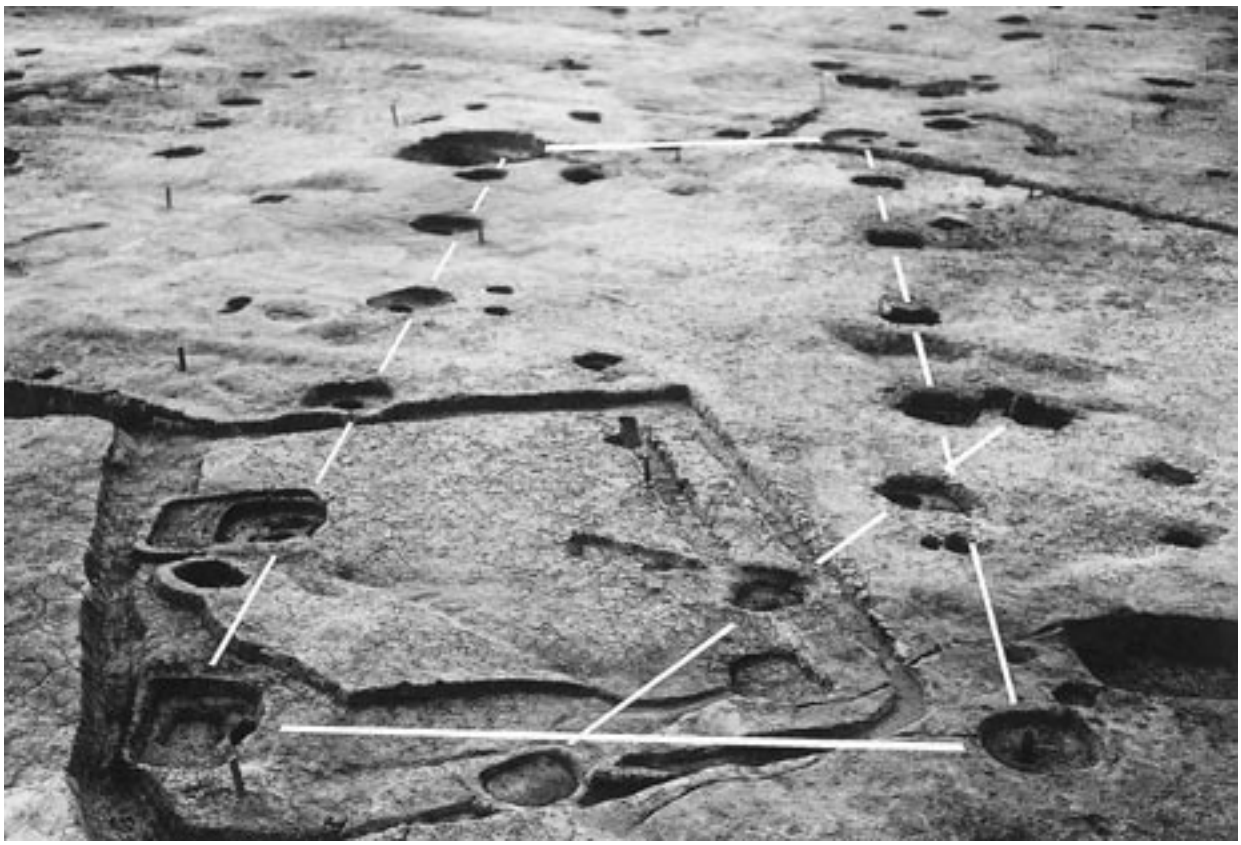
PL 4



SH251（北東から）



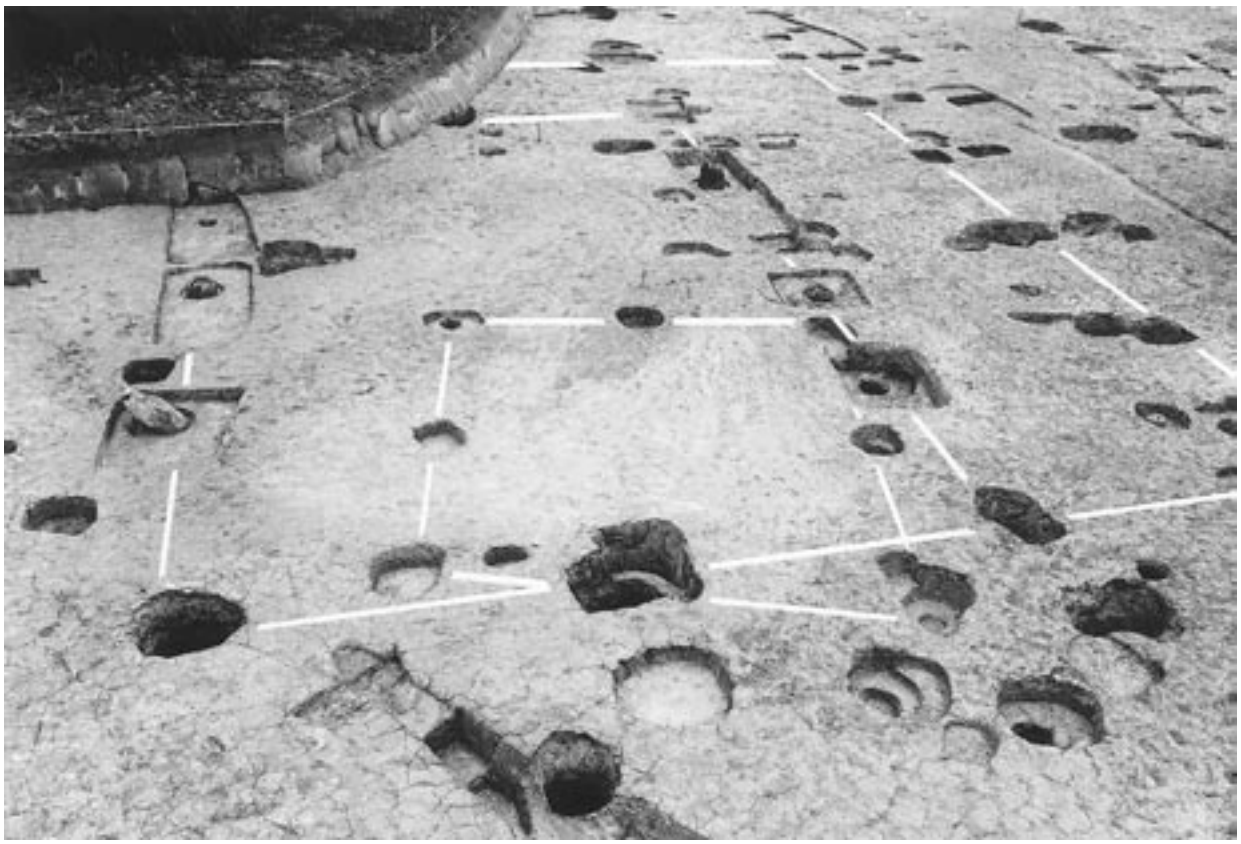
SH253、SB286・287（東から）



SH255・256、SB268、SA267（東から）

SB13 柱穴（南西から）

PL 6



SB14・15（西から）

SB15 柱根（西から）

SB15・16 と哀園森（南から）

SB16・17・63（東から）

PL 8

SB22 ～ 25（北から）

SB25 柱穴断面（南から）

SB29（東から）

SB32 と哀園森（北東から）

PL 10

SB41・42（北から）

SB43・44（東から）

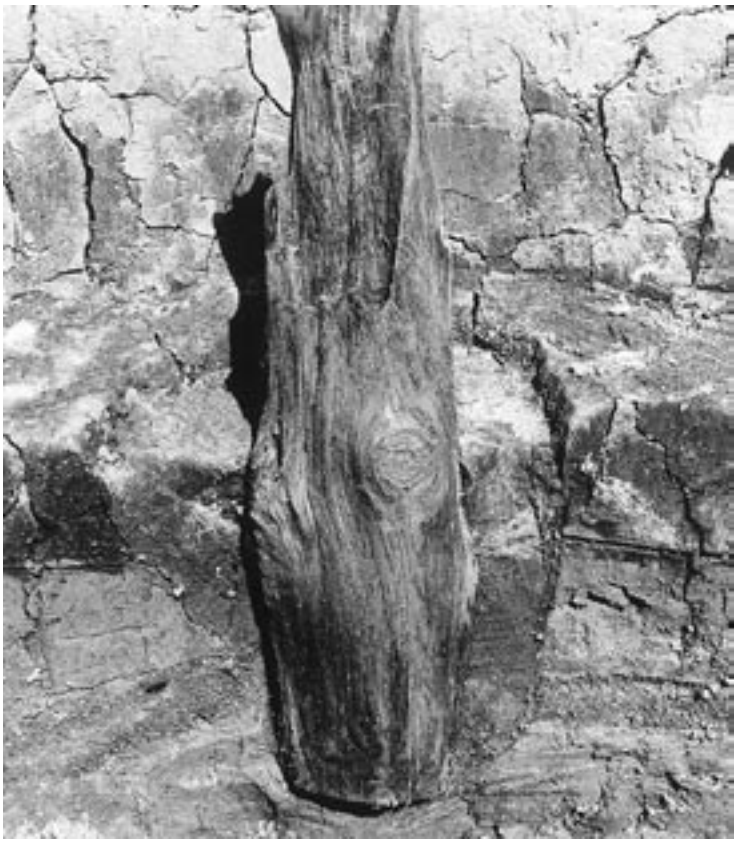
SB45・49、SA46 ～ 48・73・77（北東から）

SB45 柱穴遺物出土状況（南から）

SB51 ～ 54、SA56（北から）

SB53、SA56（北から）

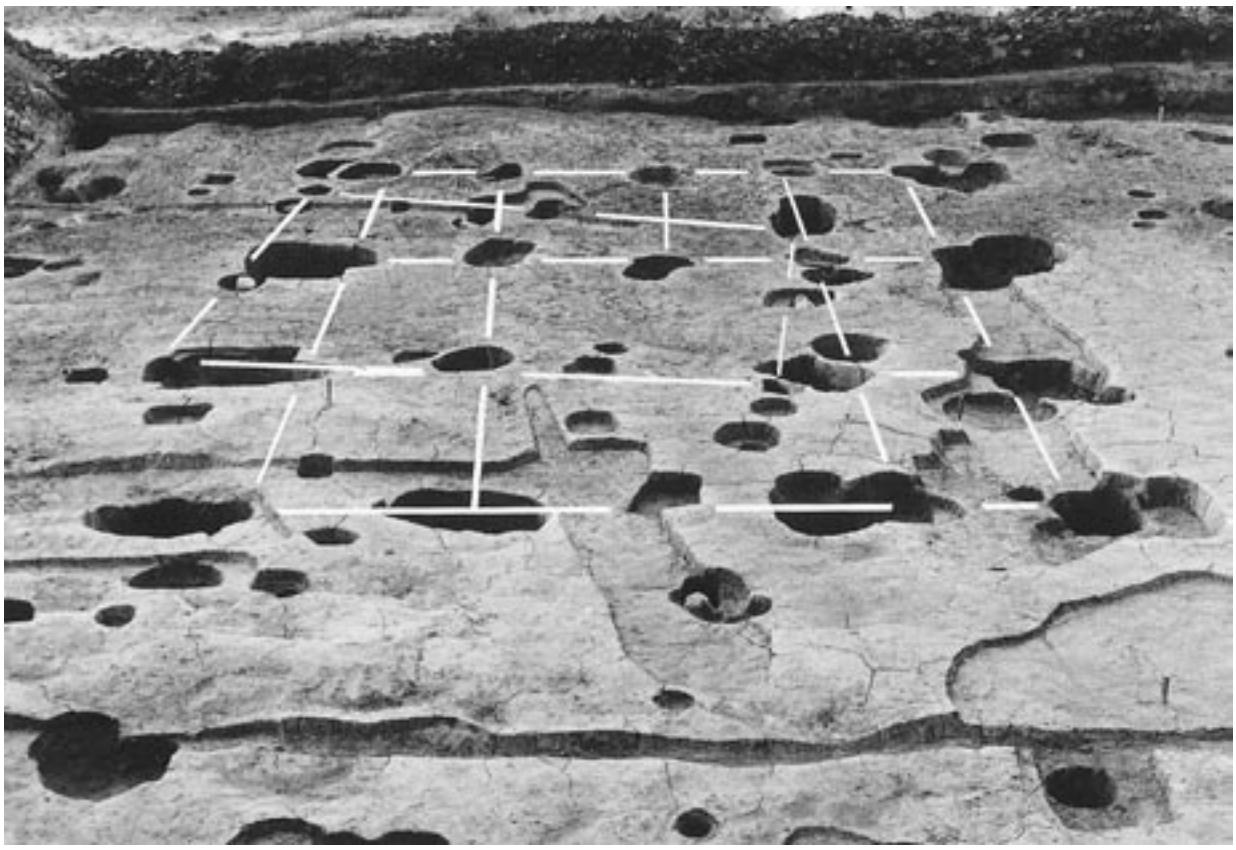
SB74（西から）



SB74 柱穴断面（南から）

SB166（東から）

PL 14



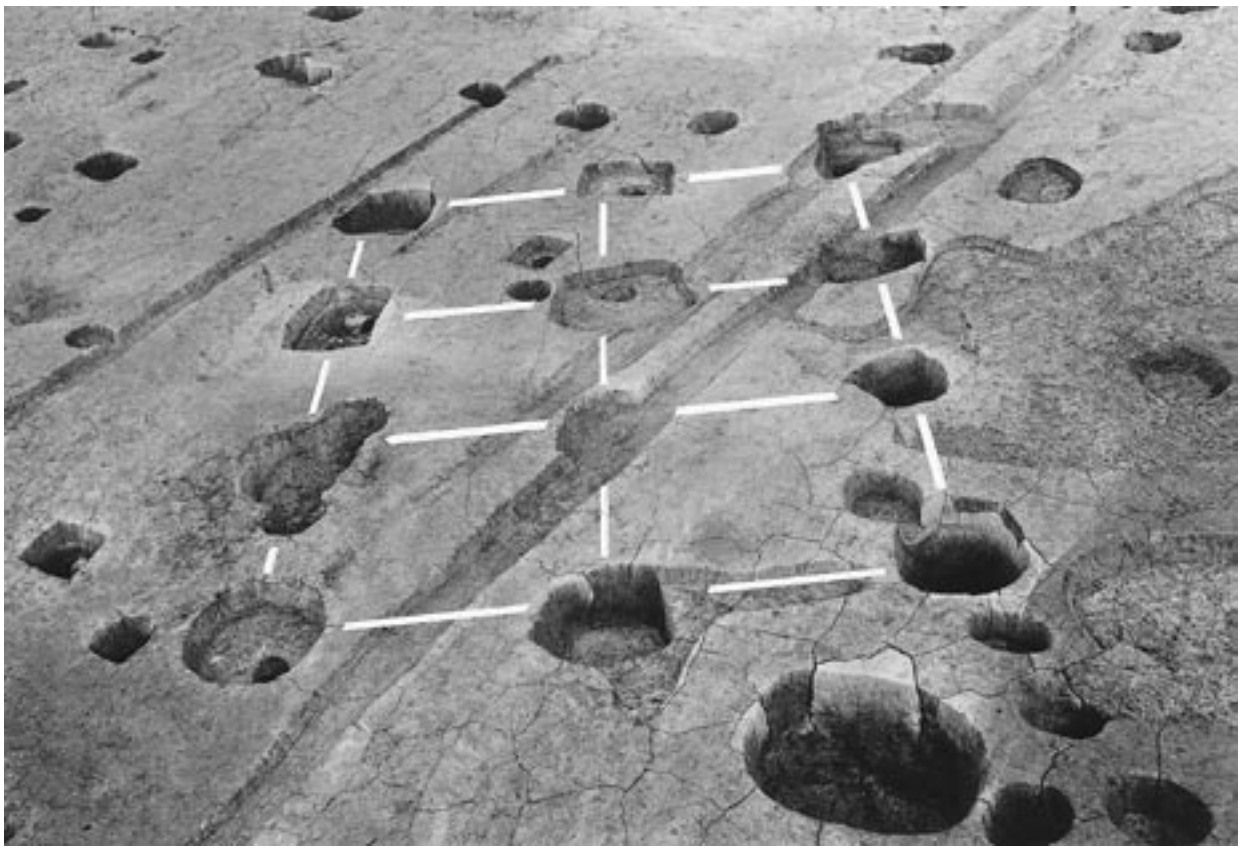
SB161・167（東から）

SB171（南から）

SB172・173（南から）

SB175 ～ 178（東から）

PL 16



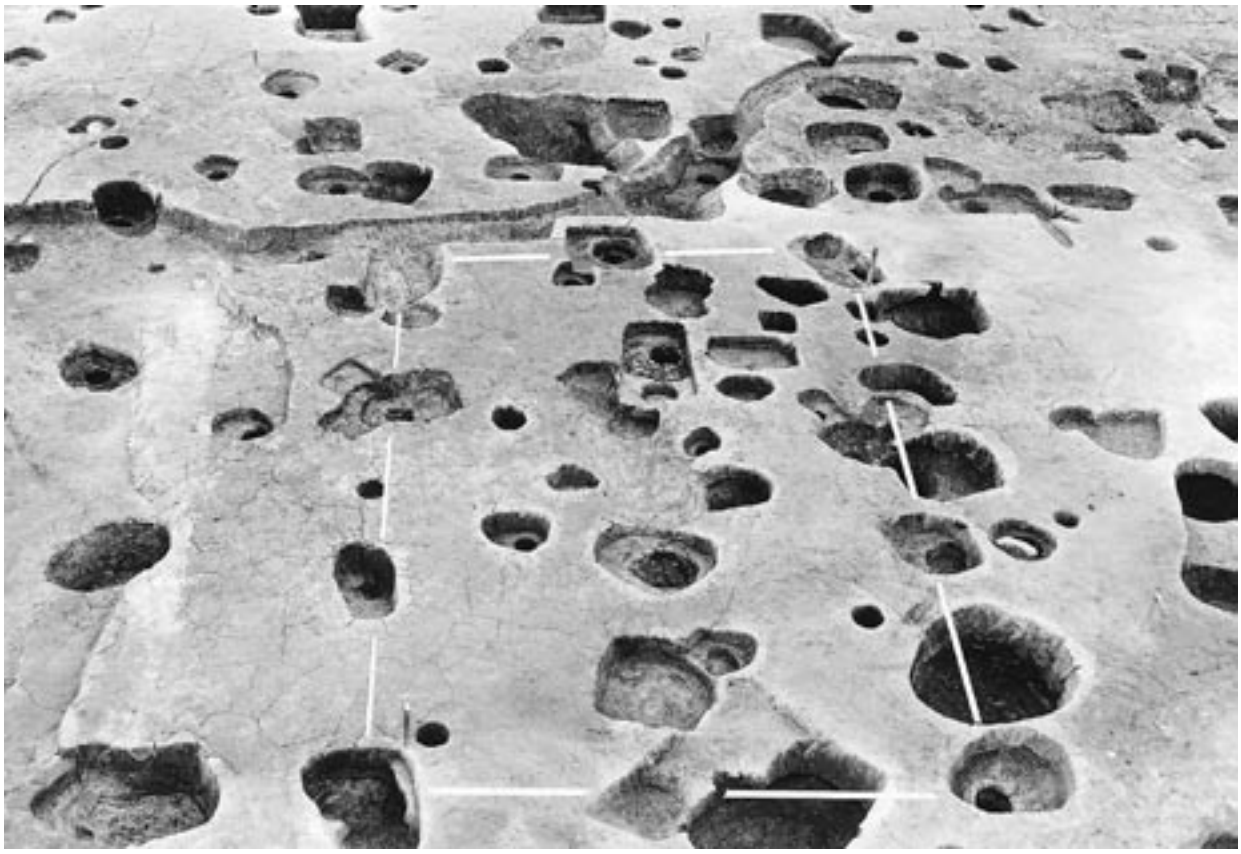
SB182（南から）

SB187（西から）

SB188・189（東から）

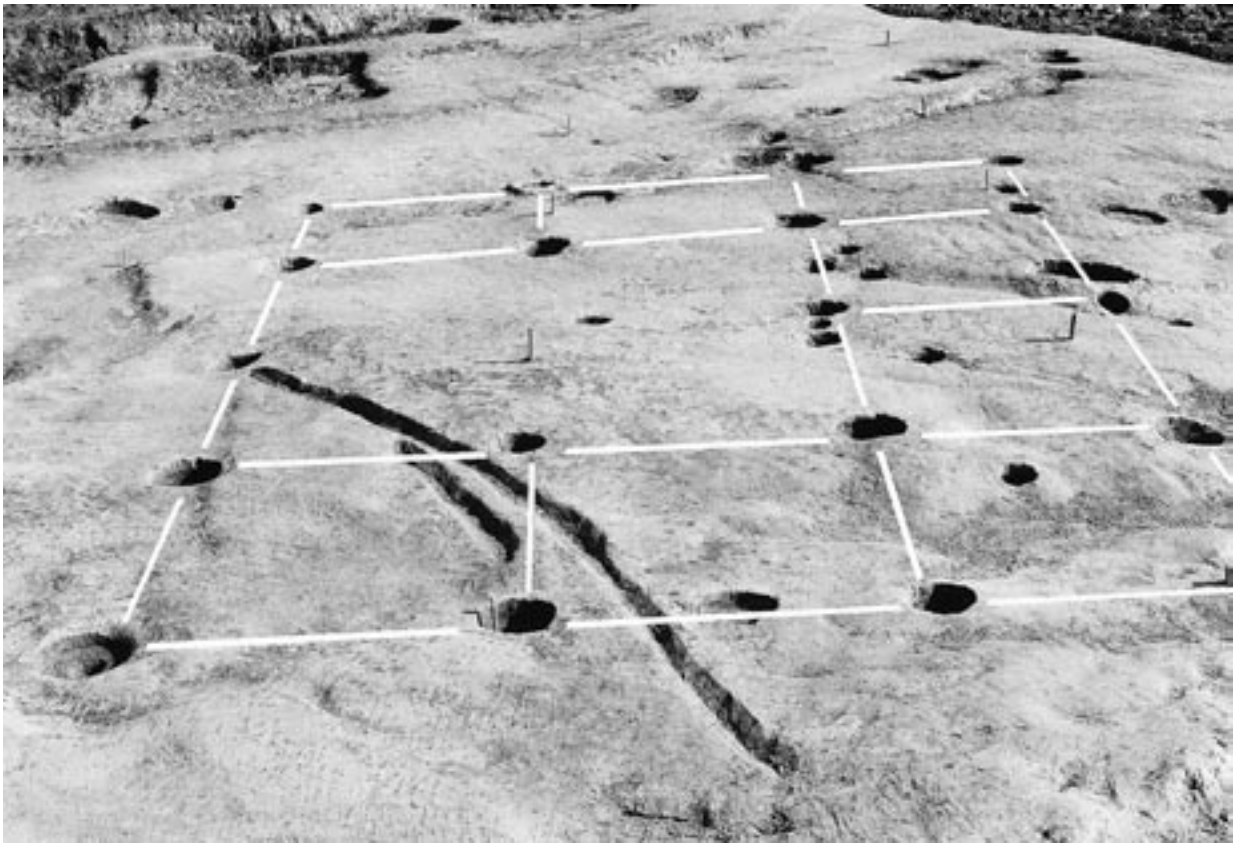
SB195（東から）

SB196・283（東から）



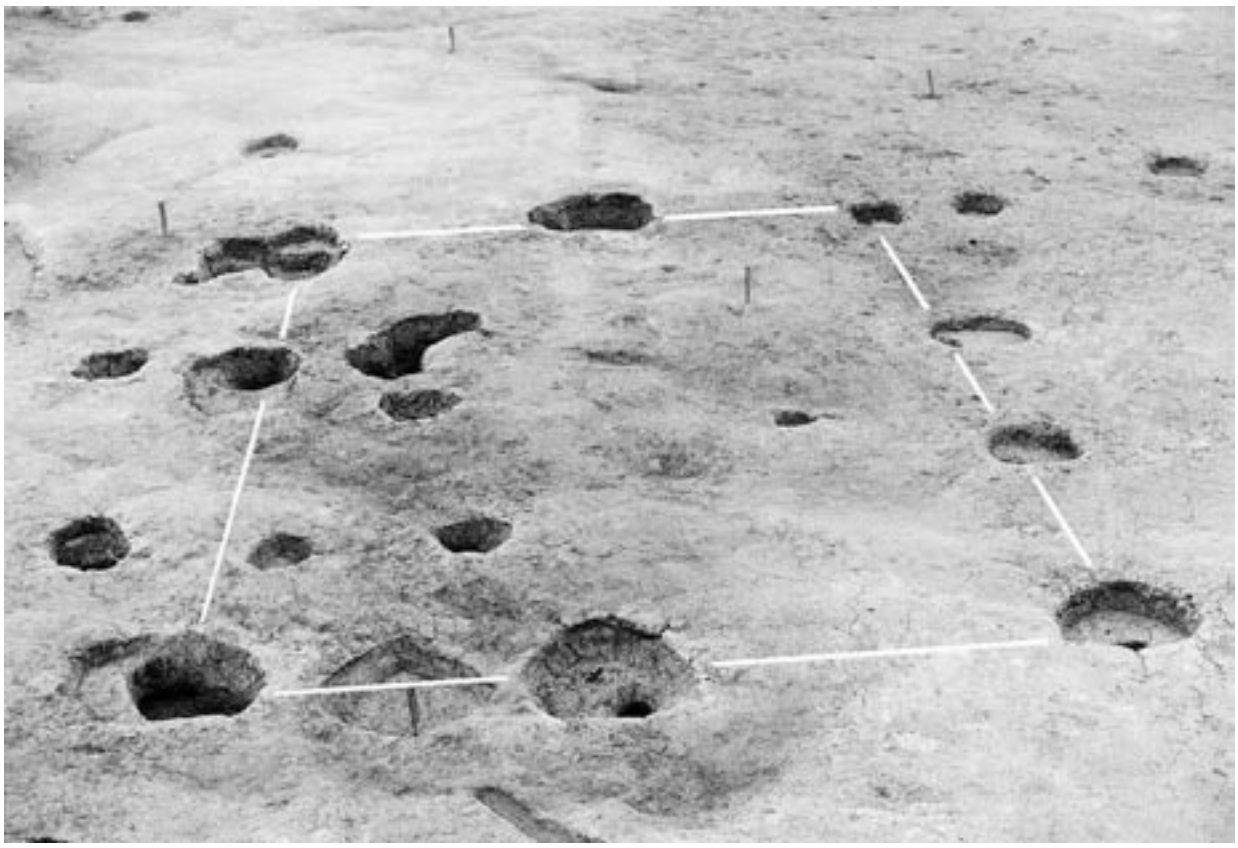
SB198（東から）

SB200（南東から）



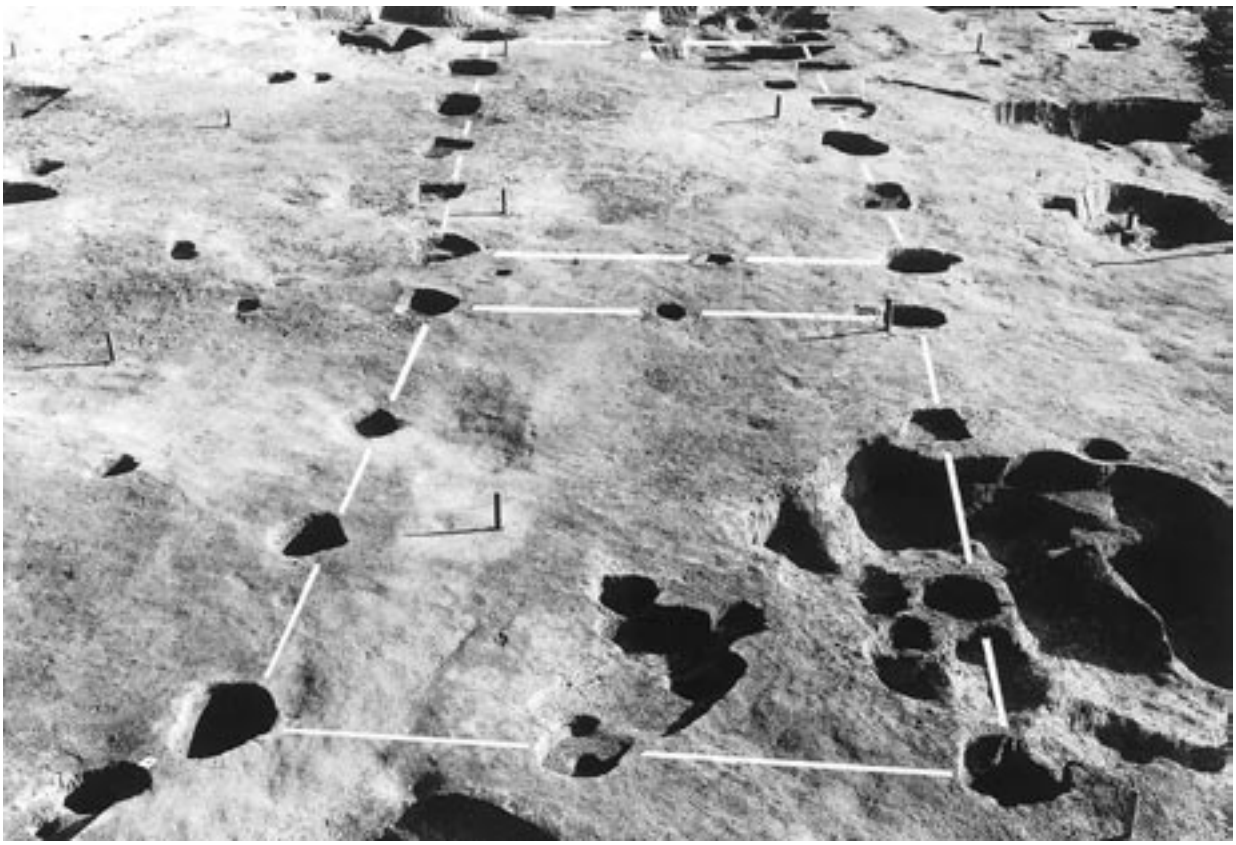
SB266（西から）

PL 20

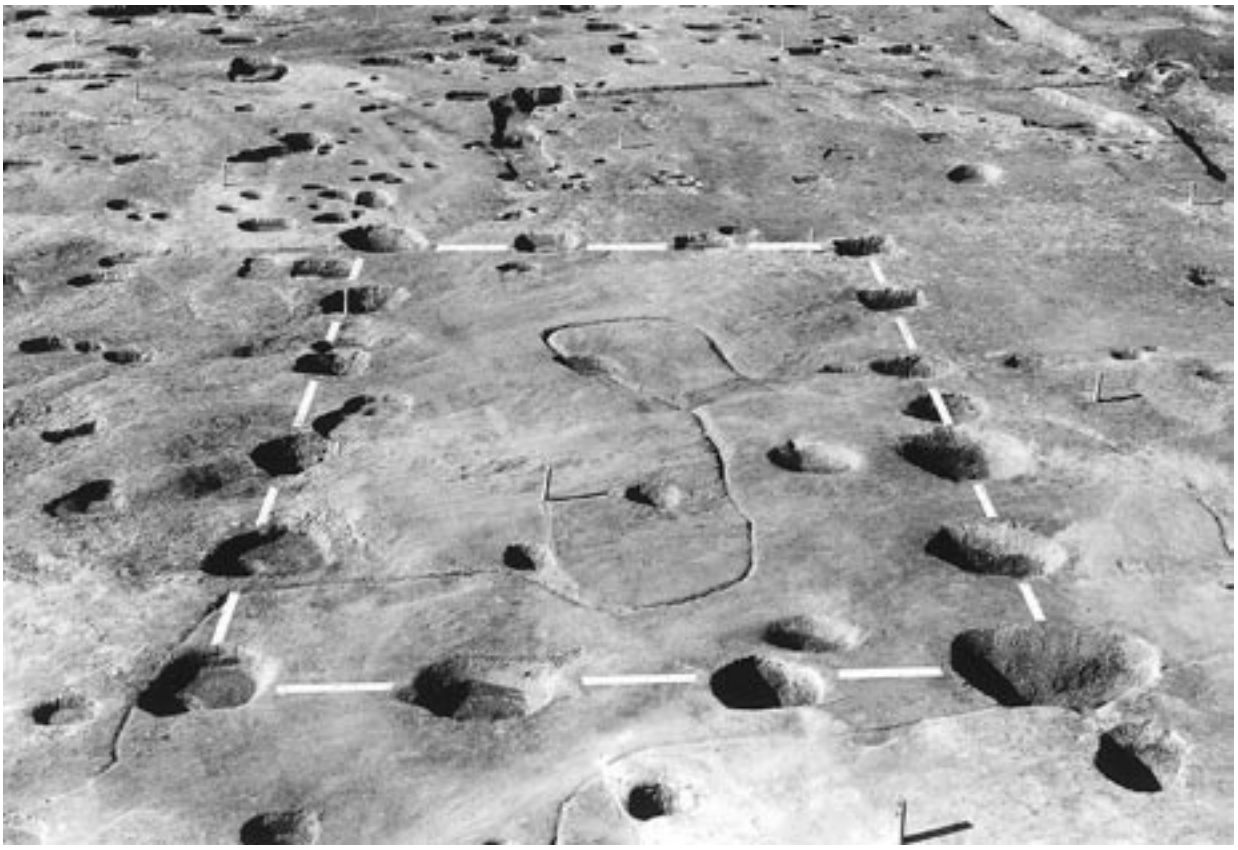


SB269（東から）

SB271（南から）

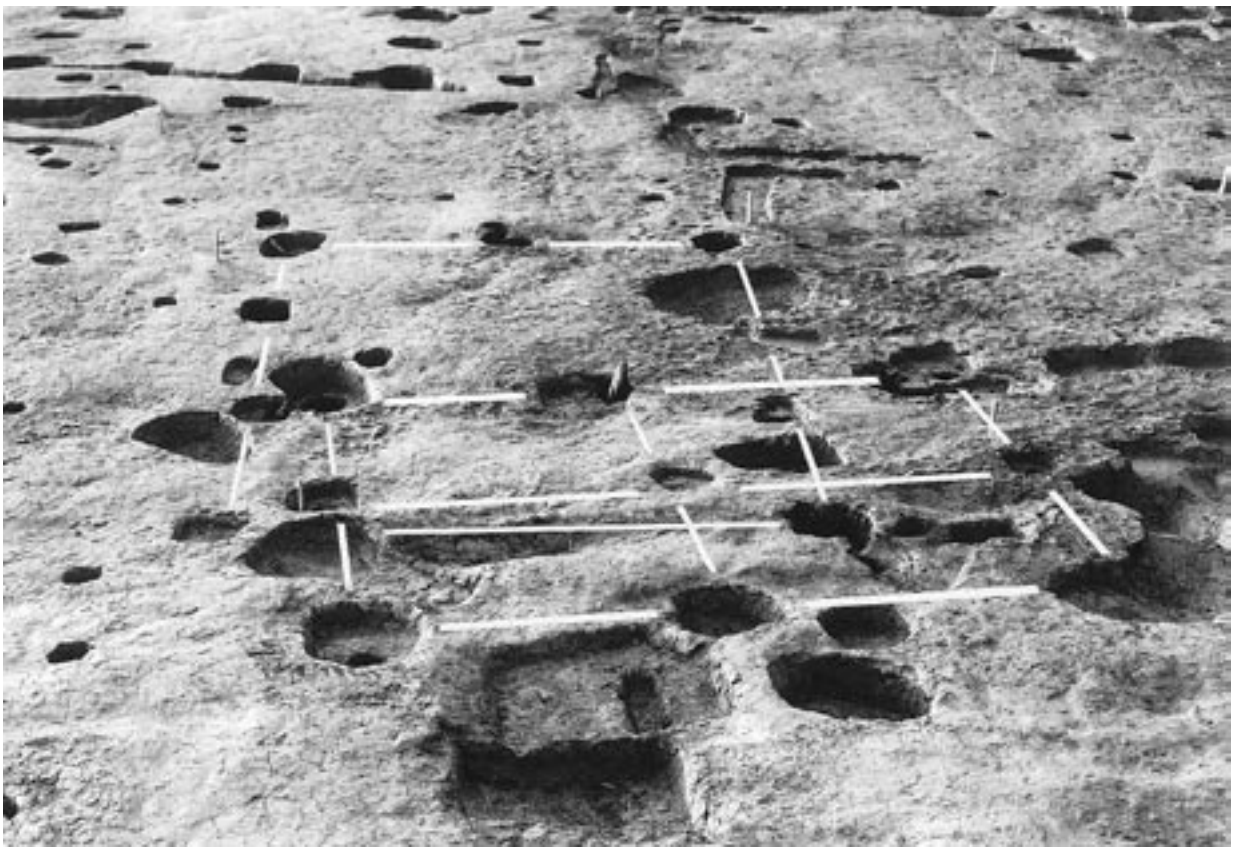


SB273・274（北西から）

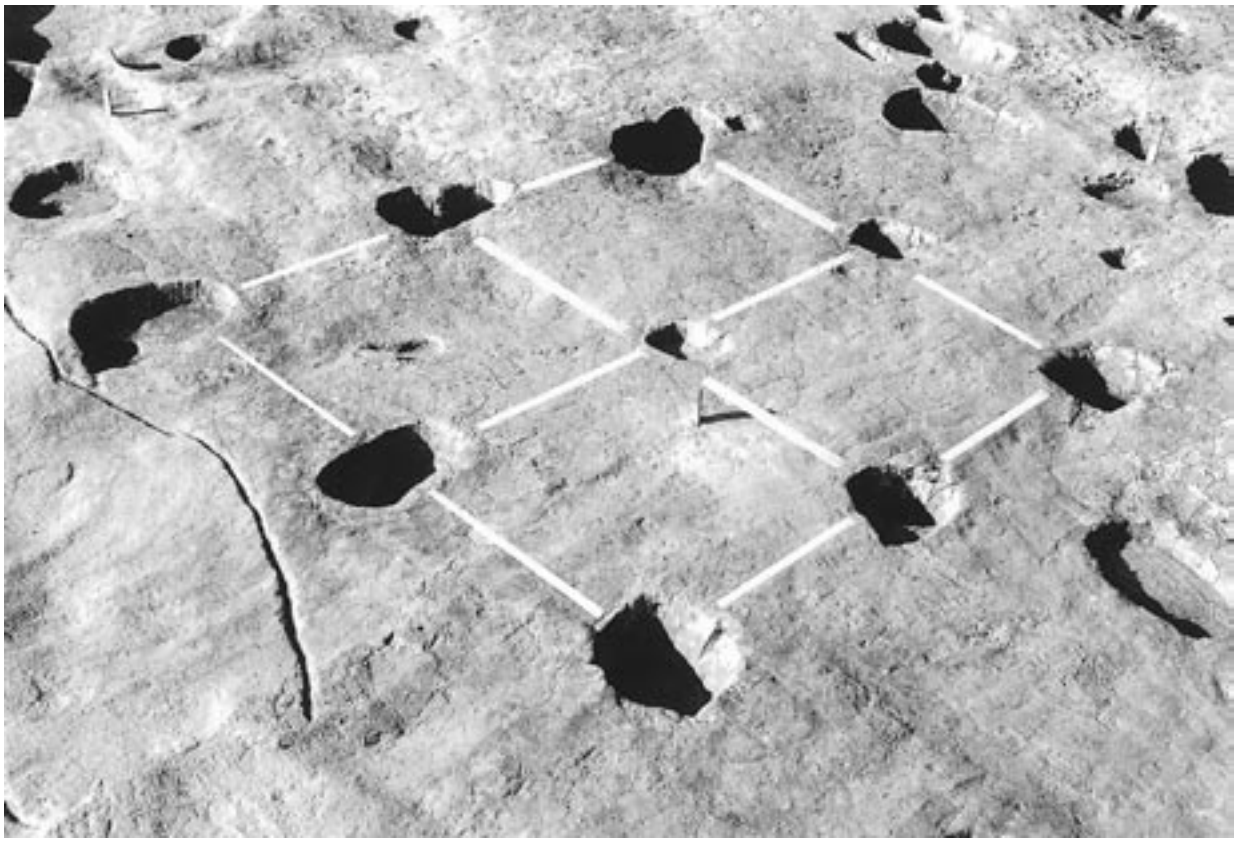


SB276（東から）

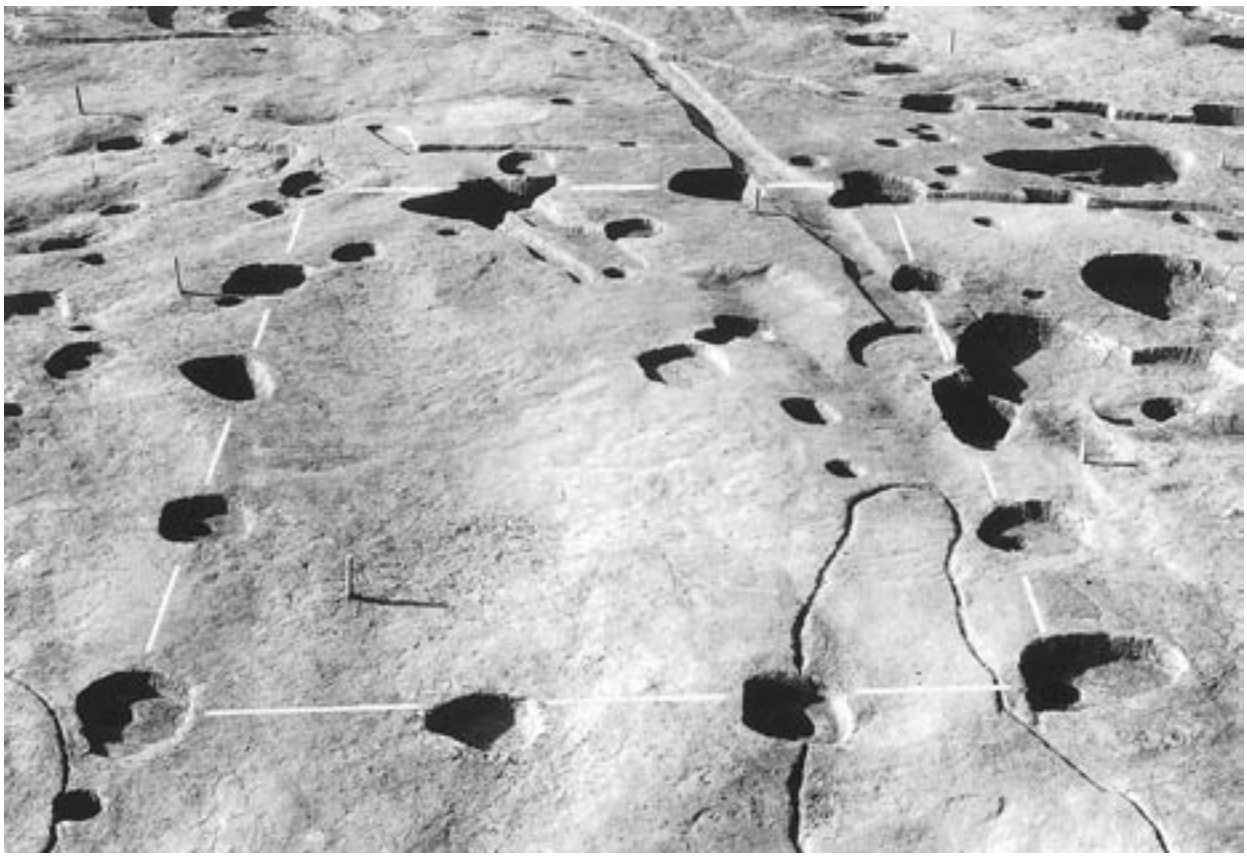
PL 22



SB279・280（東から）



SB281（南東から）



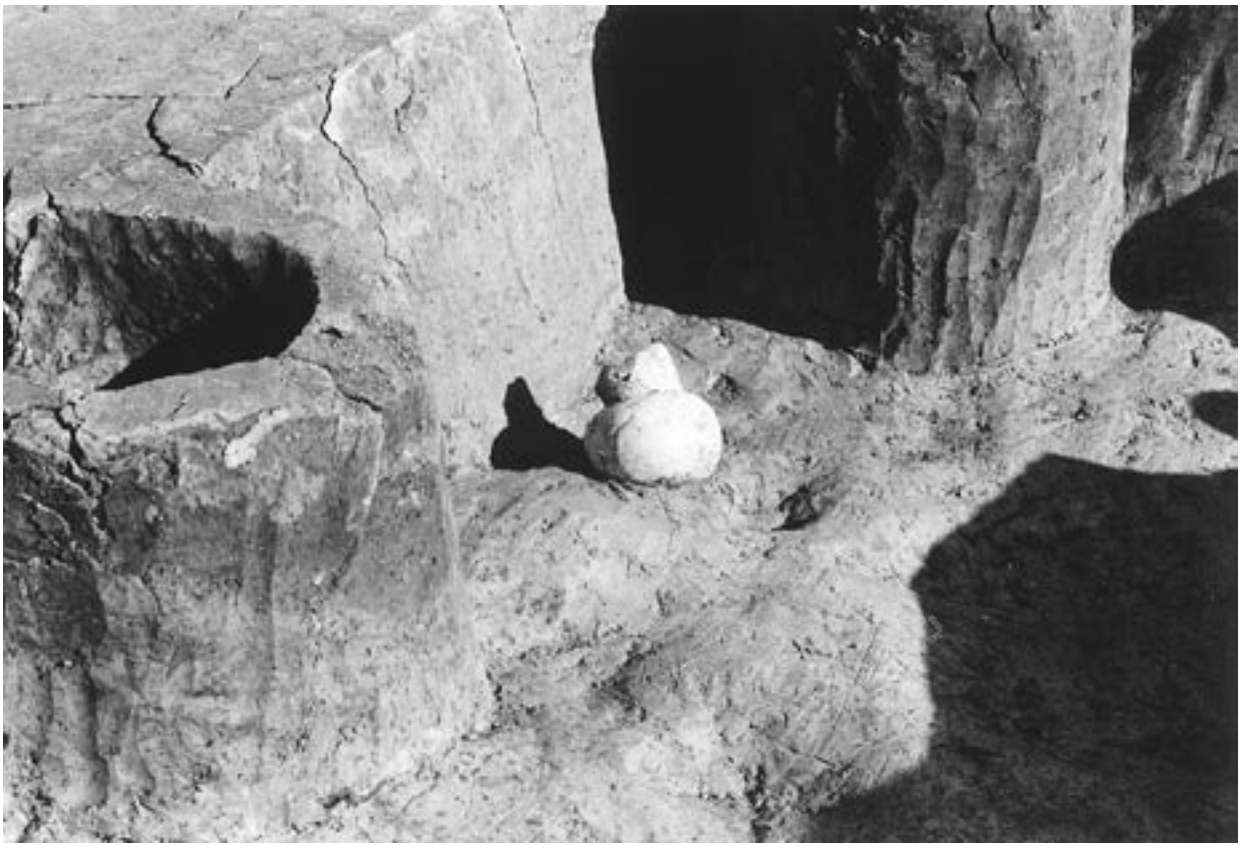
SB282（東から）

SB288（東から）

SB293・294（東から）

SB296（東から）

SK69（北から）



SK226 遺物出土状況（南西から）

PL 26

SK247 遺物出土状況（東から）

SK248（西から）

SK233・234 遺物出土状況（北東から）

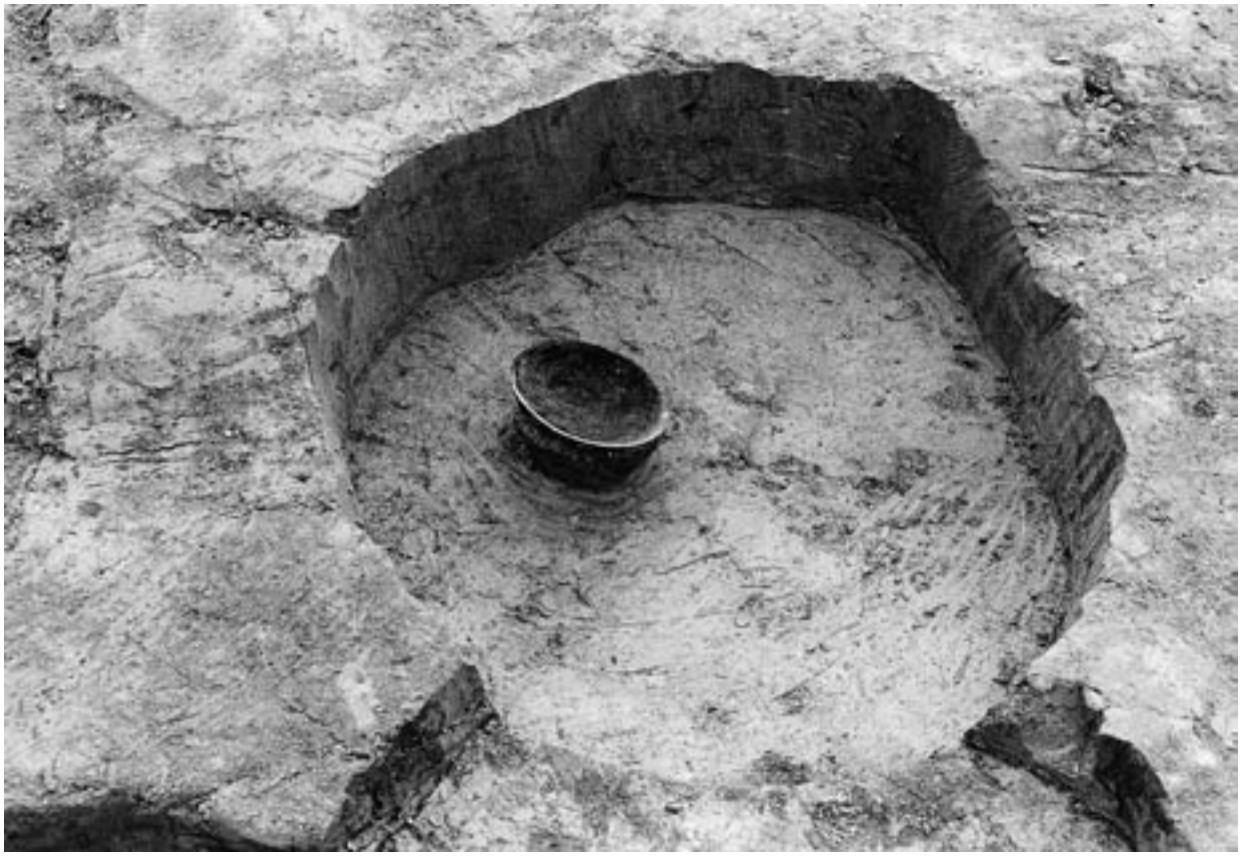
SK236 遺物出土状況（北から）

PL 28

SK239 ～ 241 遺物出土状況（南から）

SK242 ～ 244 遺物出土状況（南から）

SK242 遺物出土状況（北から）



SK243 遺物出土状況（北から）

PL 30

SK245・246 遺物出土状況（北から）

SK246 遺物出土状況（南東から）

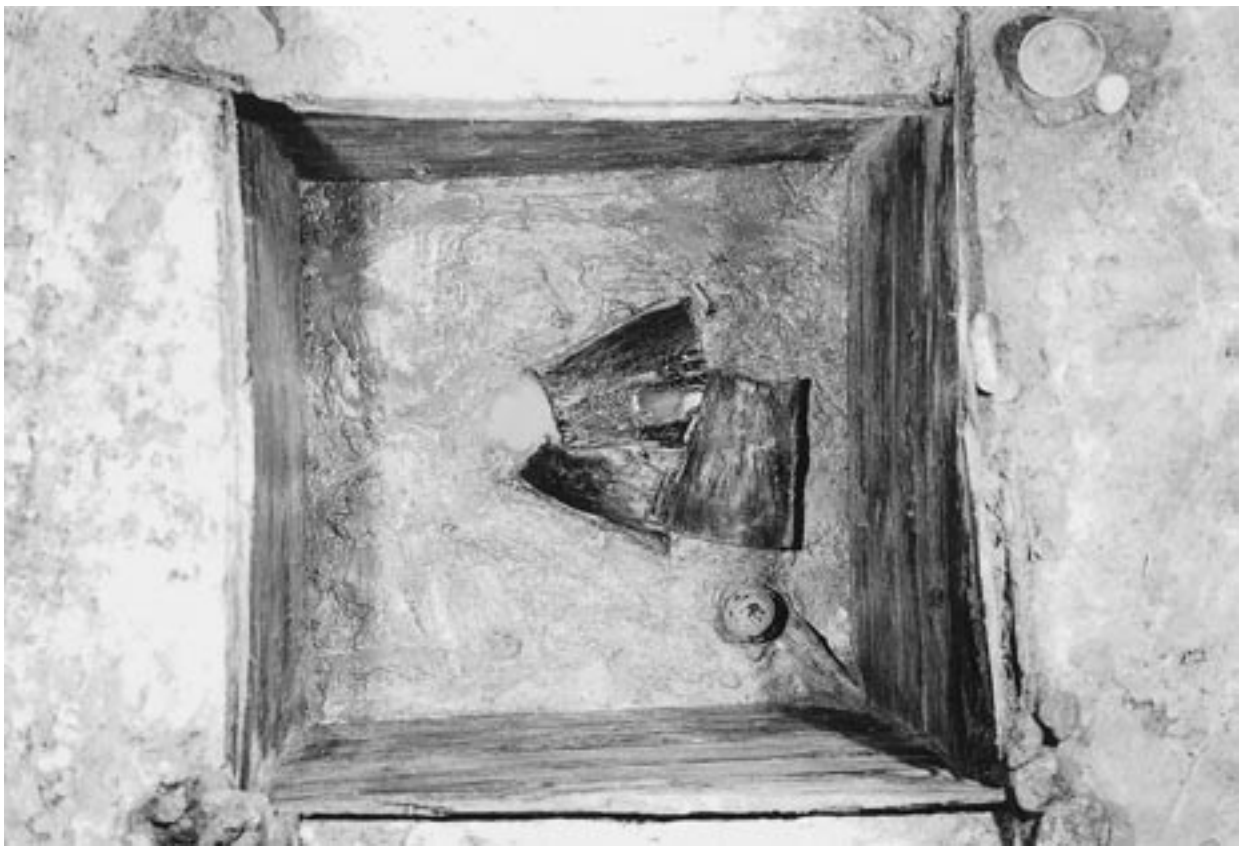
SE50（東から）

SE57（北東から）

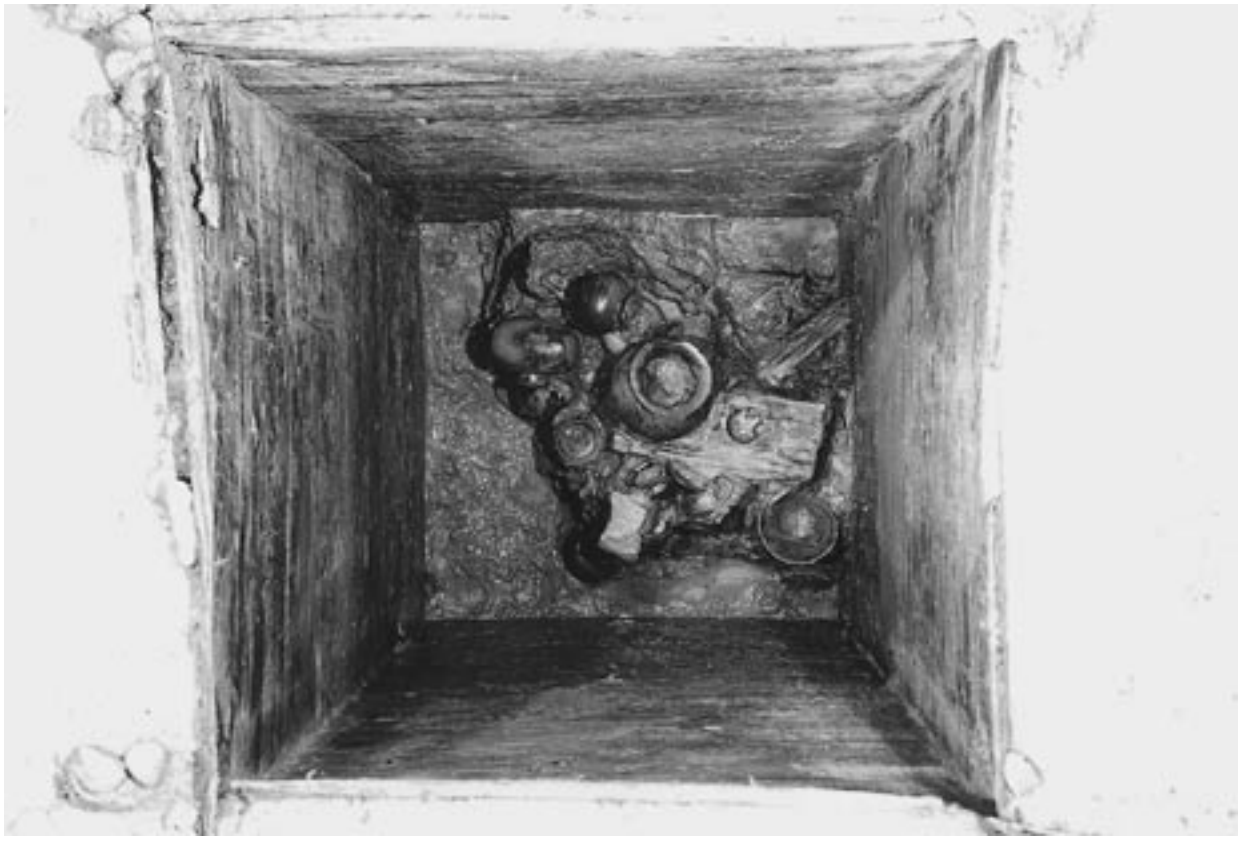
PL 32

SE55（西から）

SE55 断面（西から）



SE55 遺物出土状況（上から）



SE55 遺物出土状況（上から）

PL 34

SE55 解体作業風景（北西から）

SE261（北から）

SE262（北から）

SD71（東から）

PL 36

SD71 断面（西から）

SD71 流木出土状況（北東から）

SD33 遺物出土状況（北から）

SD202 内　井堰（西から）

SD202 内井堰及び遺物出土状況（南から）

SD202 内井堰内高杯埋納状況（西から）

SD202 遺物出土状況（西から）

SD202 遺物出土状況（北西から）

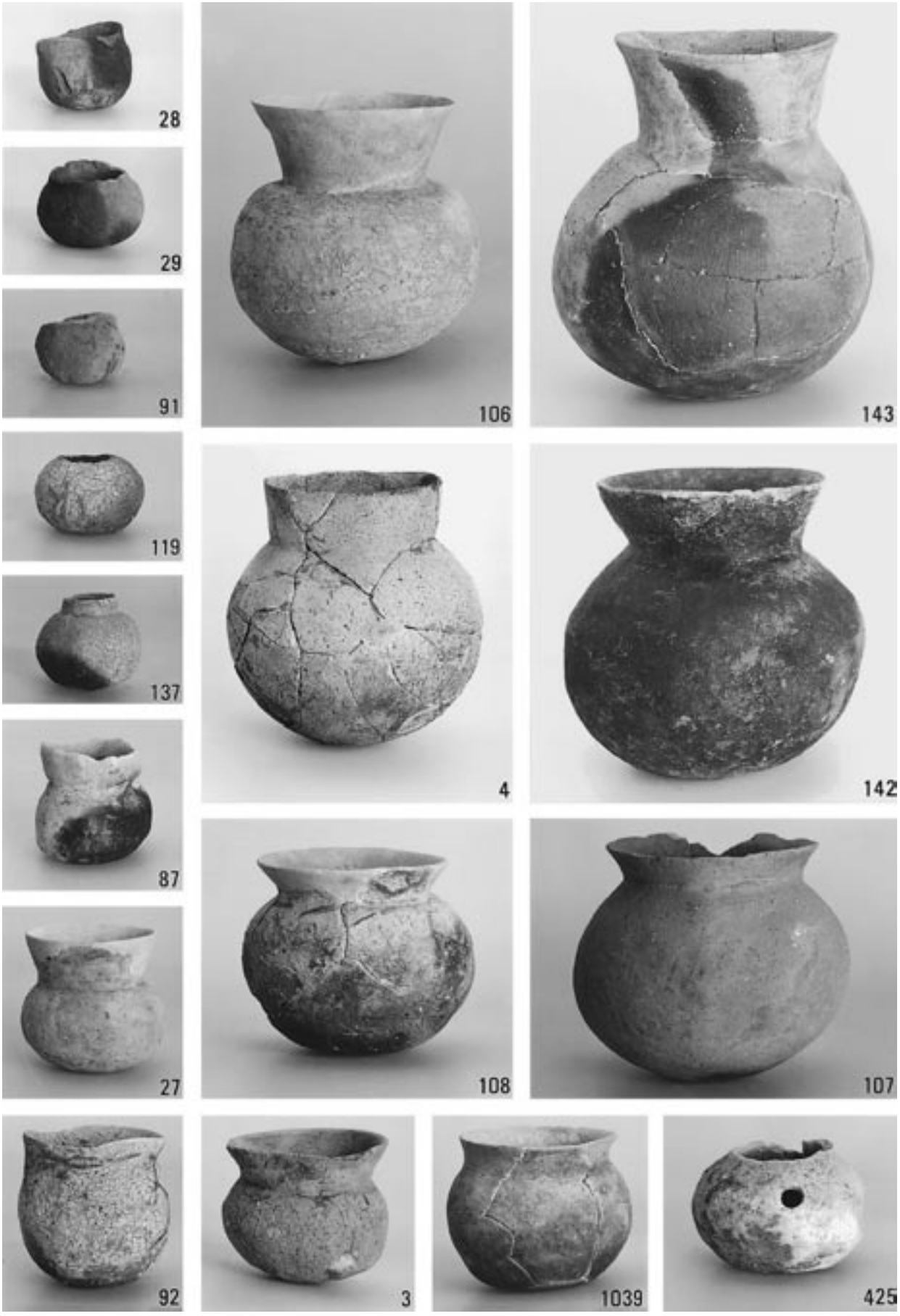
PL 40

ぬか塚と SX259（東から）

SZ59（南から）

弥生土器（1：3）

PL 42



土師器 壺（1：3）

98

149

1047

147

136

148

332

302

303

333

304

305

342

306

309

338

312

314

355

317

318

316

321

322

326

323

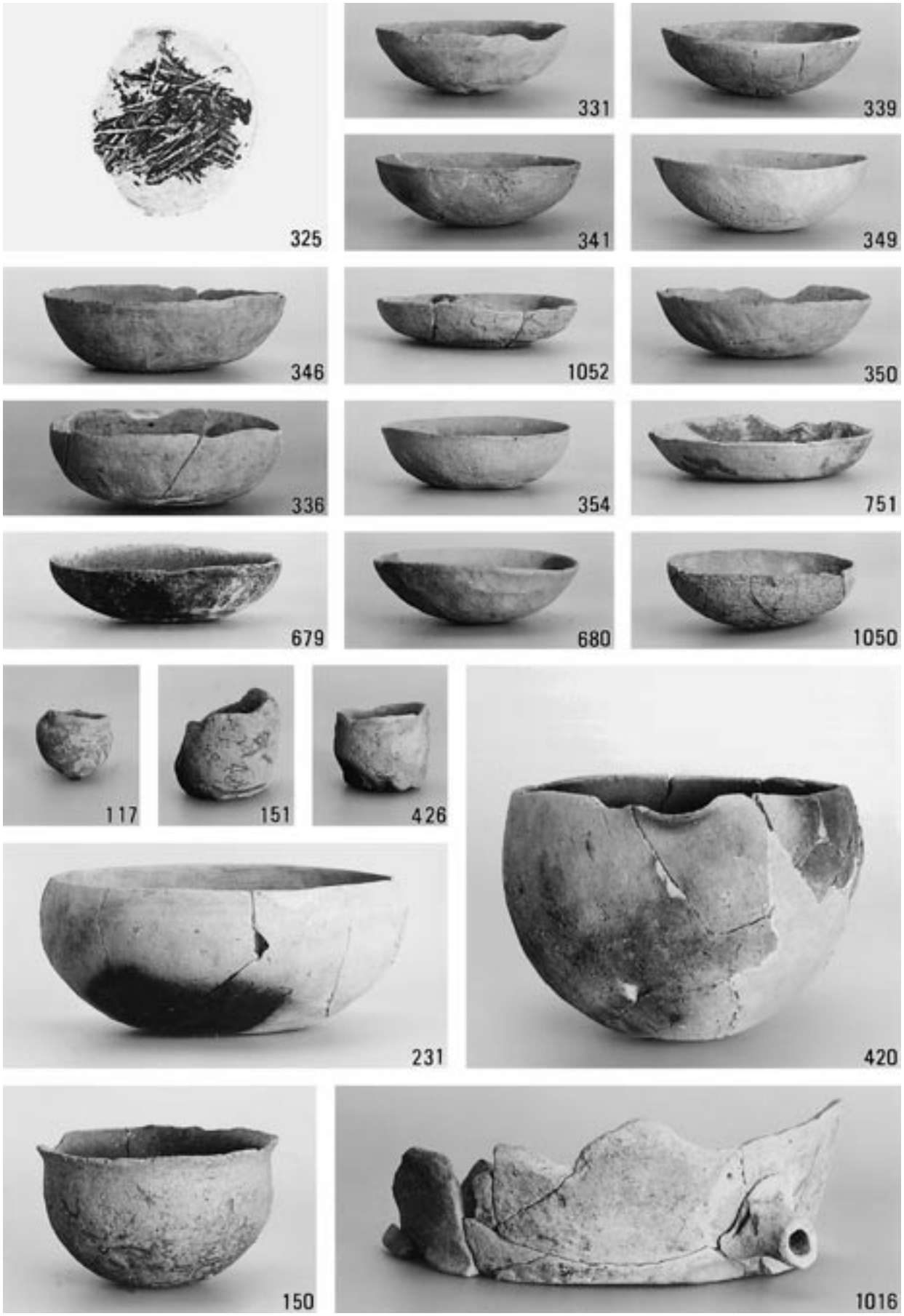
324

328

330

土師器 椀（1：3）

PL 44



土師器 椀・鉢（1：3）

265
271
264
278
253
284
699
282
701
255
695
702
262
696
698
703
285
706
704
296
291
295
923

土師器 杯・皿・盤（1：3）

PL 46

160

156

161

154

1055

155

356

土師器 高杯・蓋（1：3）

土師器 甕（1：3）

PL 48

168

169

170

173

174

413

土師器 甕（1：3）

土師器 甕（1：3）

PL 50

720

722

724

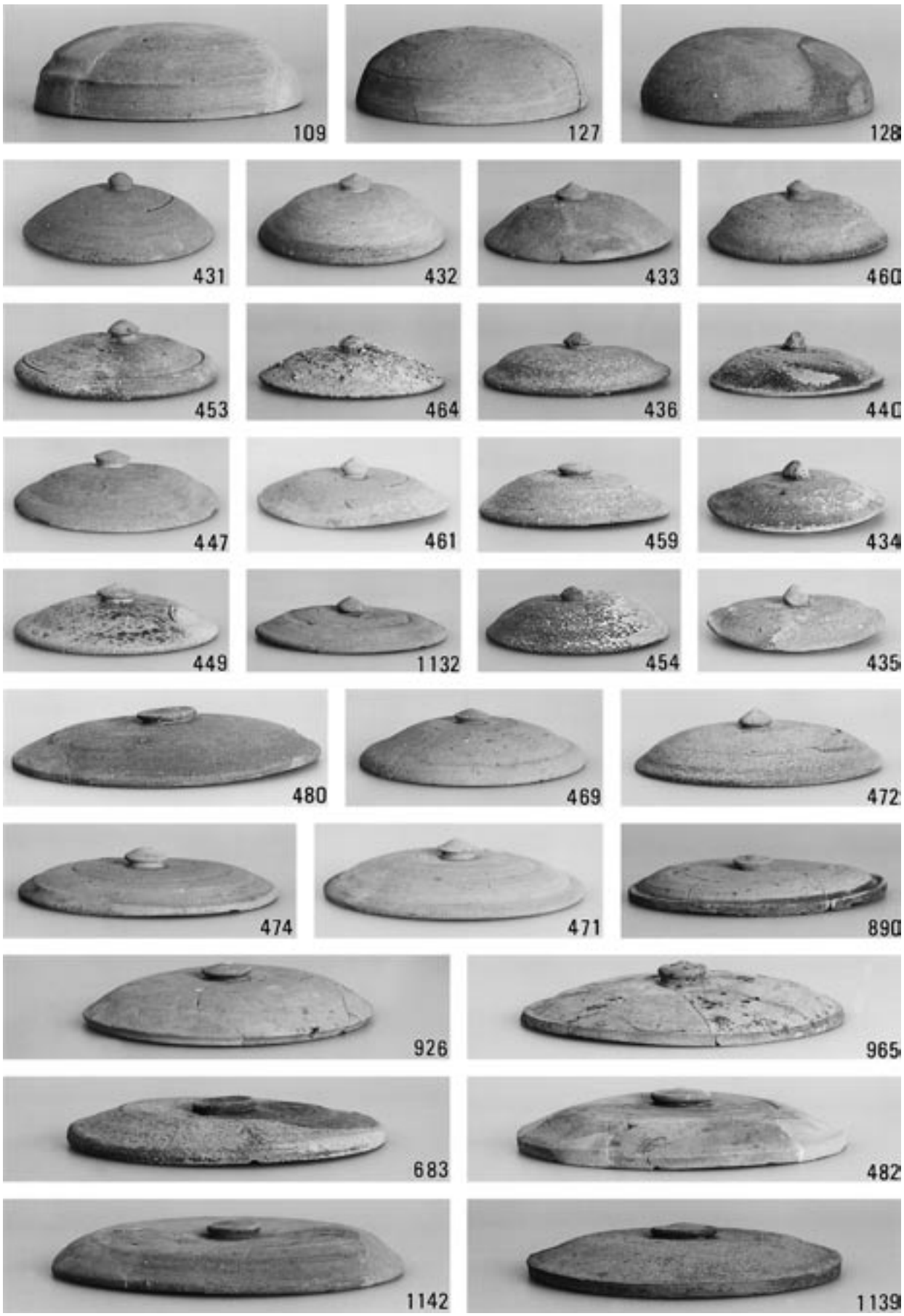
723

718

717

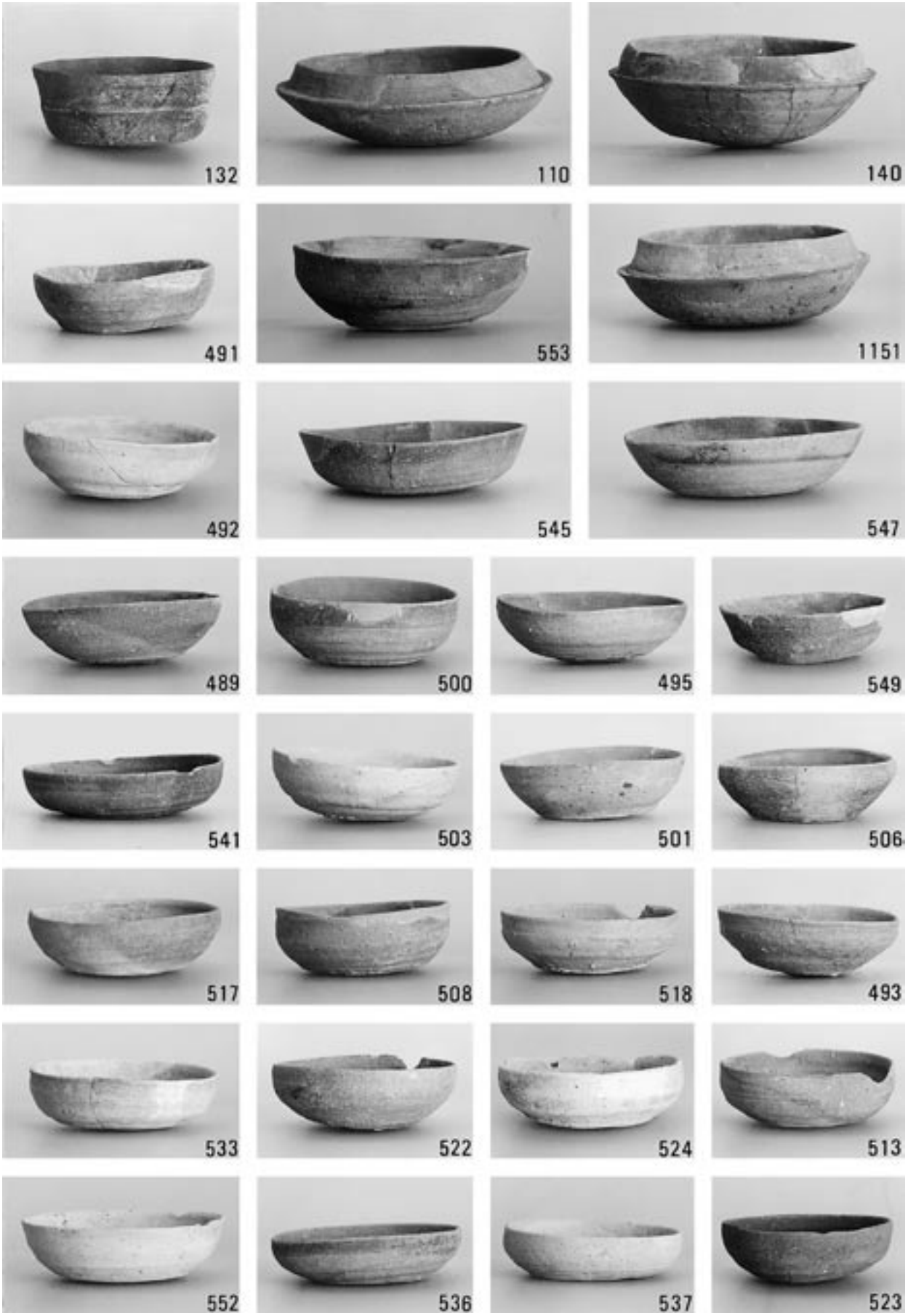
682

土師器 甕（1：3）

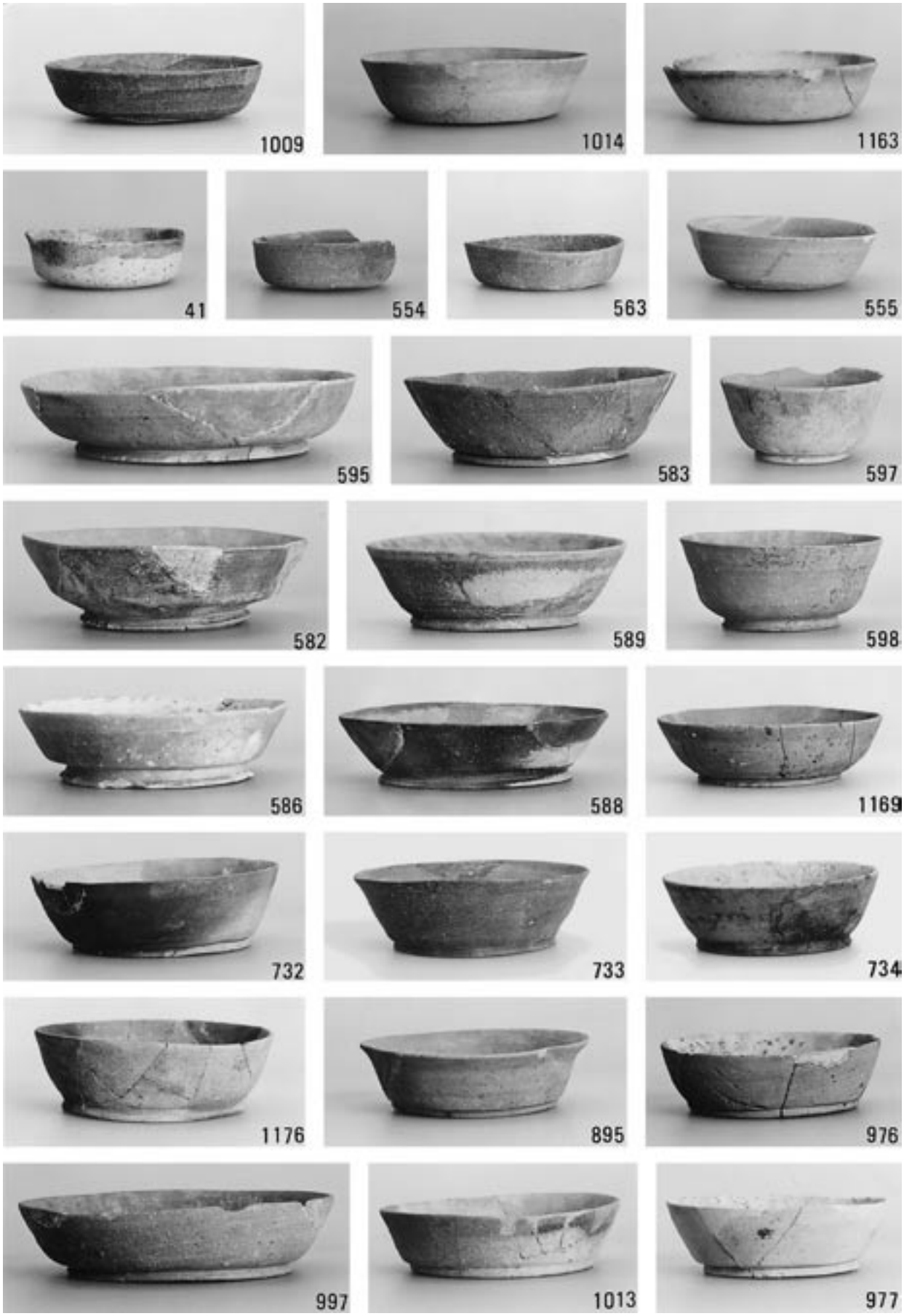

109
127
128
431
432
433
460
453
464
436
440
447
461
459
434
449
1132
454
435
480
469
472
474
471
890
926
965
683
482
1142
1139

須恵器 蓋（1：3）

PL 52



須恵器 椀・杯（1：3）


1009
1014
1163
41
554
563
555
595
583
597
582
589
598
586
588
1169
732
733
734
1176
895
976
997
1013
977

須恵器 杯（1：3）

PL 54

須恵器 高杯・皿・鉢・盤（1：3）

618

658

629

1211

1206

747

須恵器 壺・甕（1：3、658 ＝任意）

PL 56

須恵器 壺・瓶・硯（1：3）

644

645

744

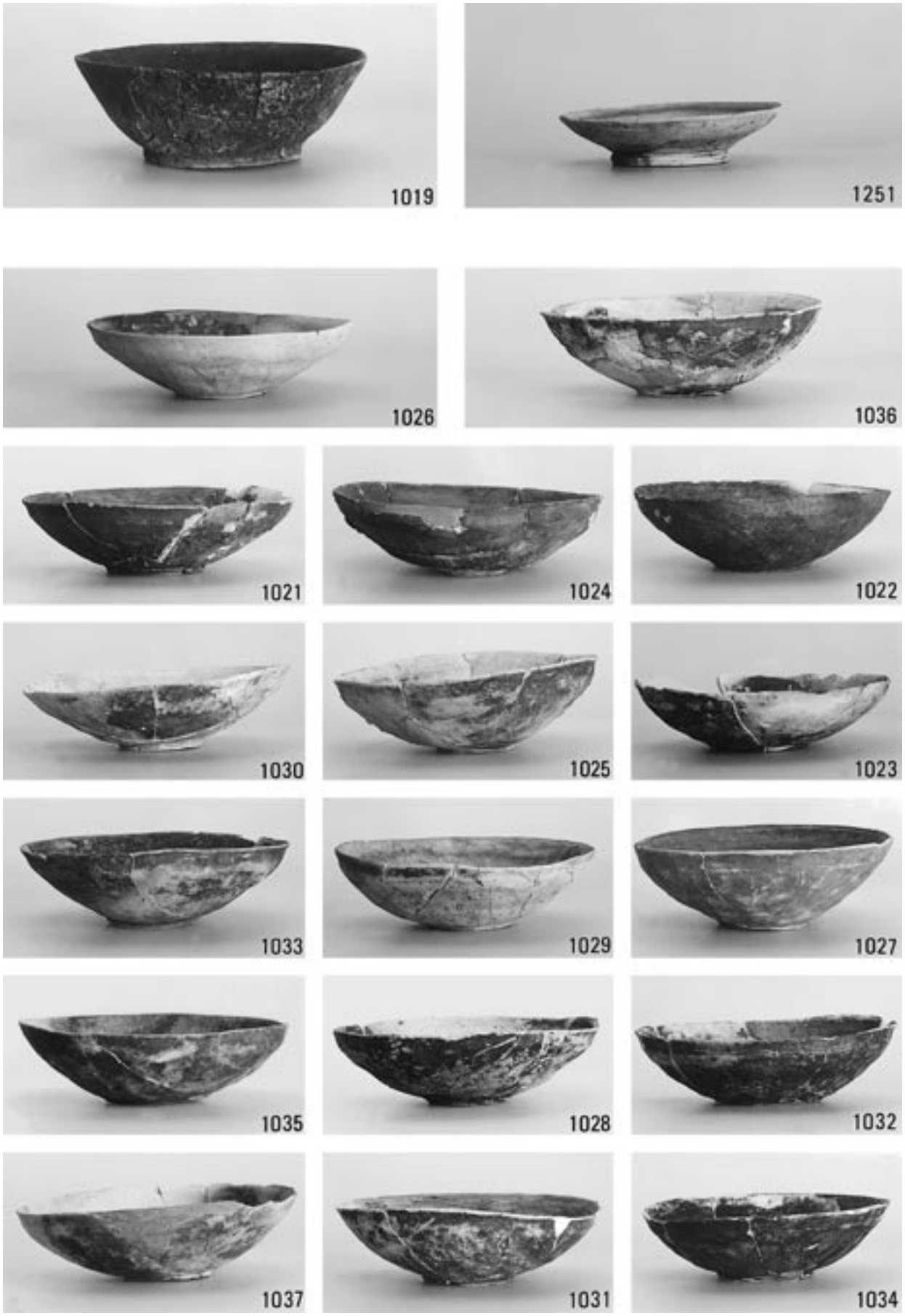
647

646

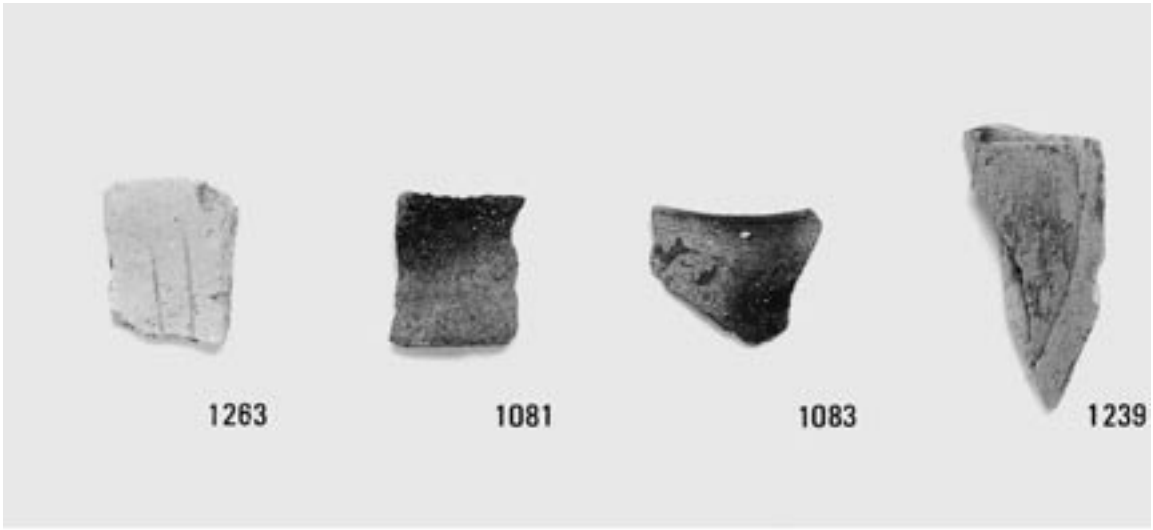
745

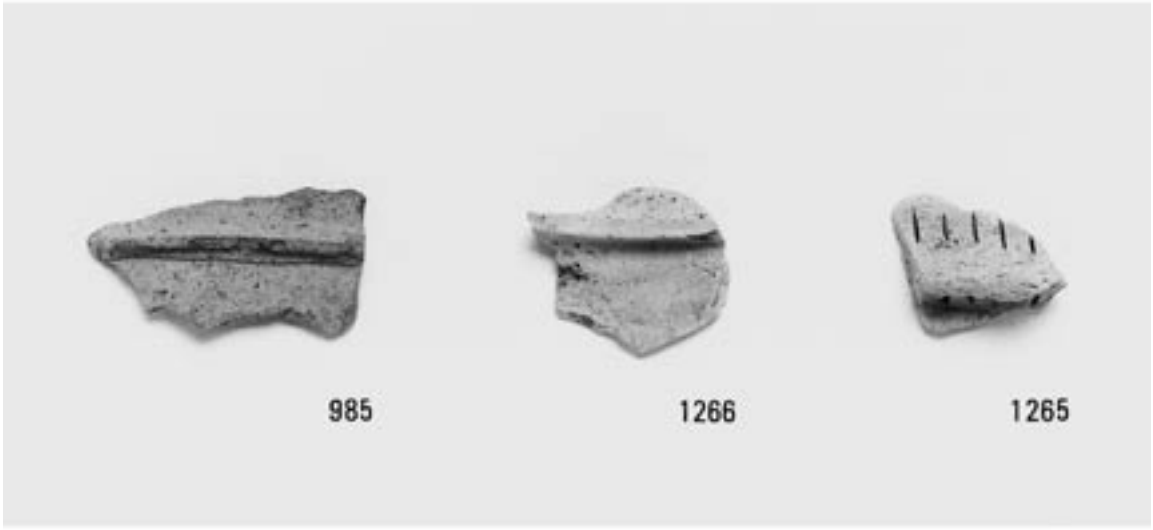
須恵器 平瓶・横瓶（1：3）

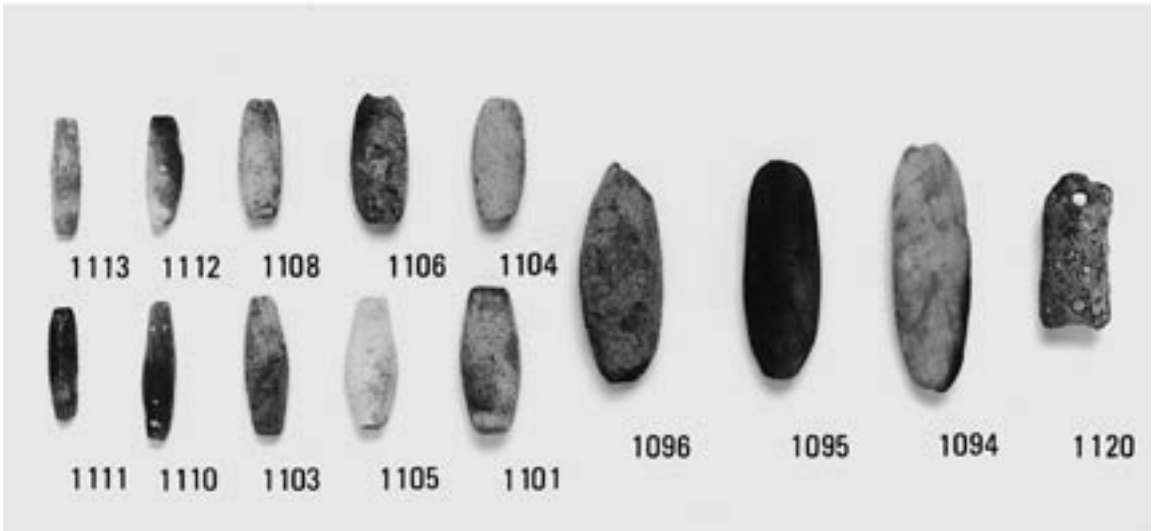
PL 58



黒色土器 椀・灰釉陶器 皿・瓦器 椀（1：3）

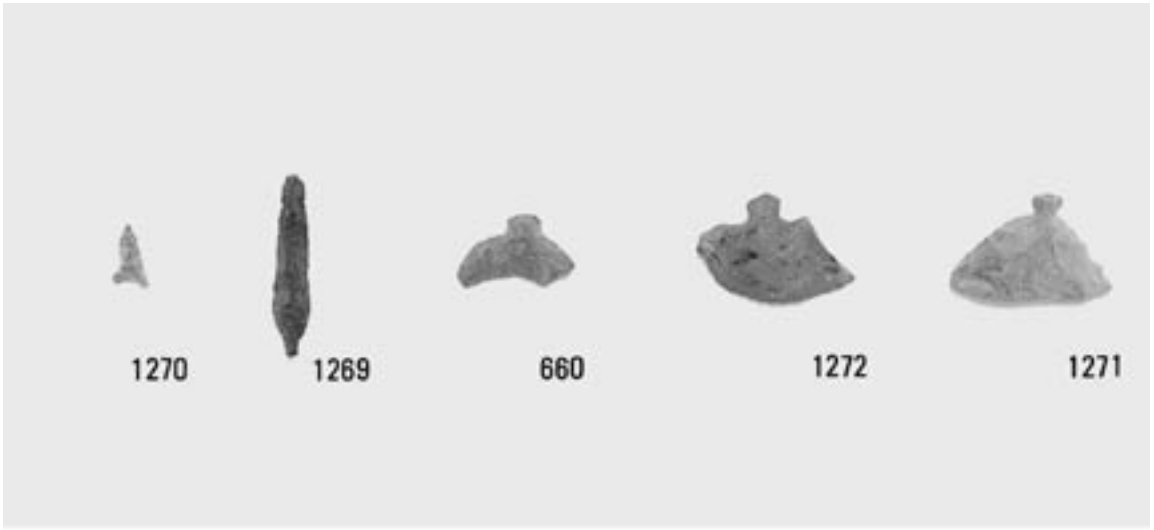


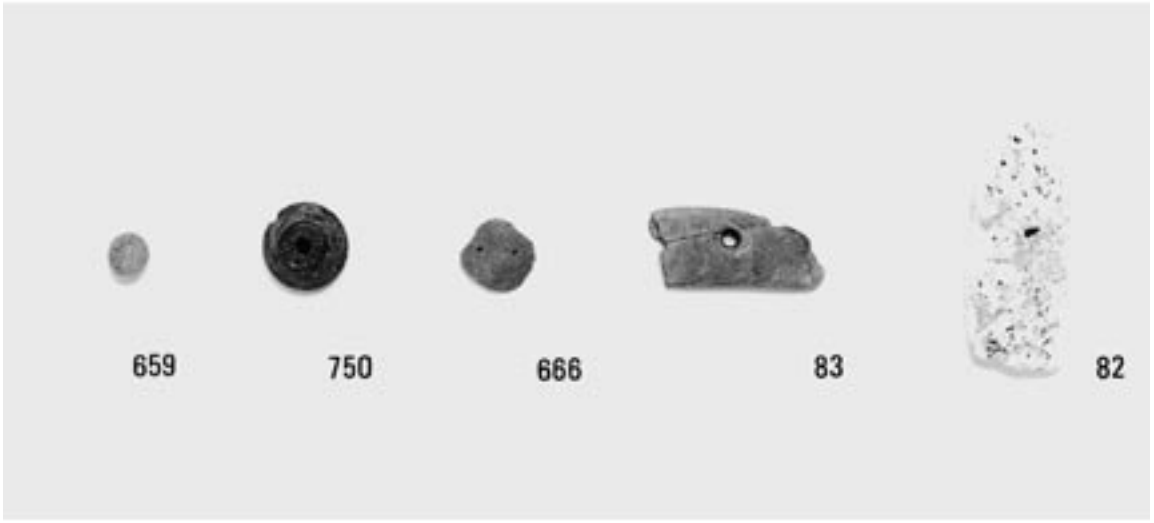




土師器・陶器・埴輪・土製器（1：3）

PL 60





石器・石製品（1：3）

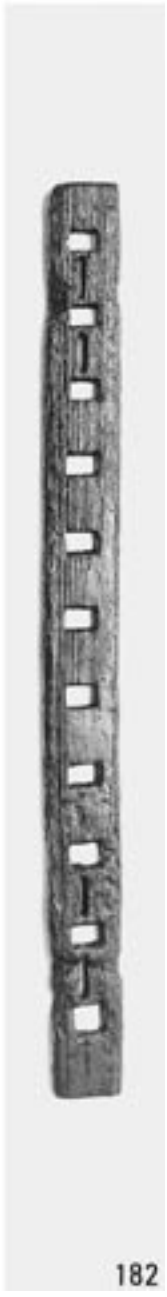
農具　他

PL 62

49

47

85


182

84

農　具

667

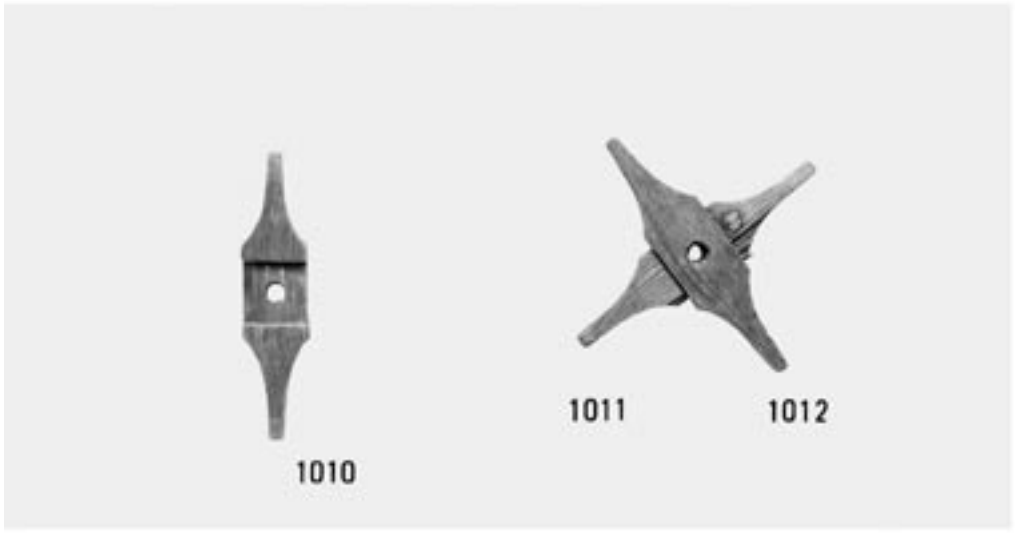
176

189

190

669

農具・腰掛・部材



糸巻・櫛・部材　他

229

46

784

785

203

786

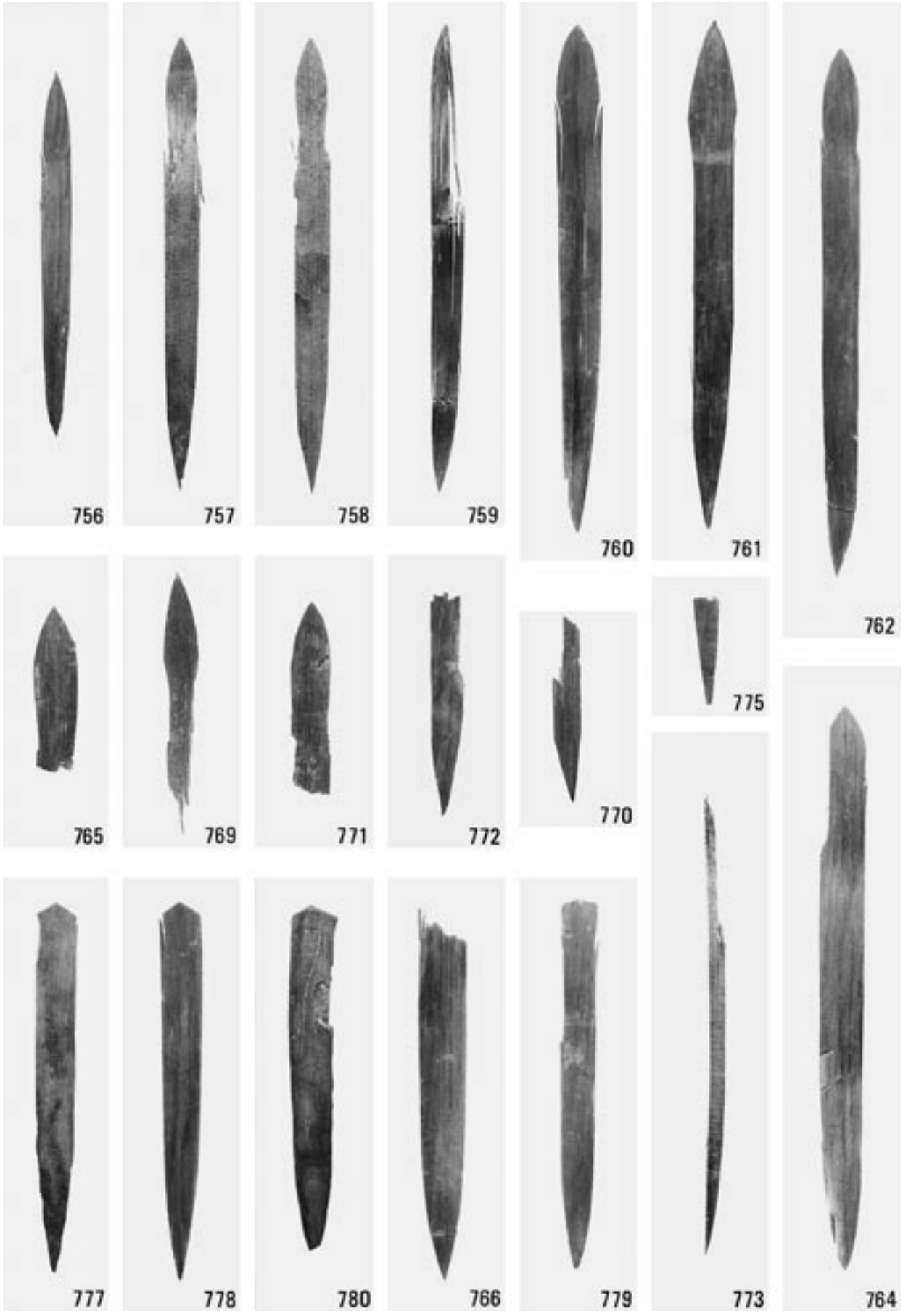
786

201

787

剣形・杭・棒　他

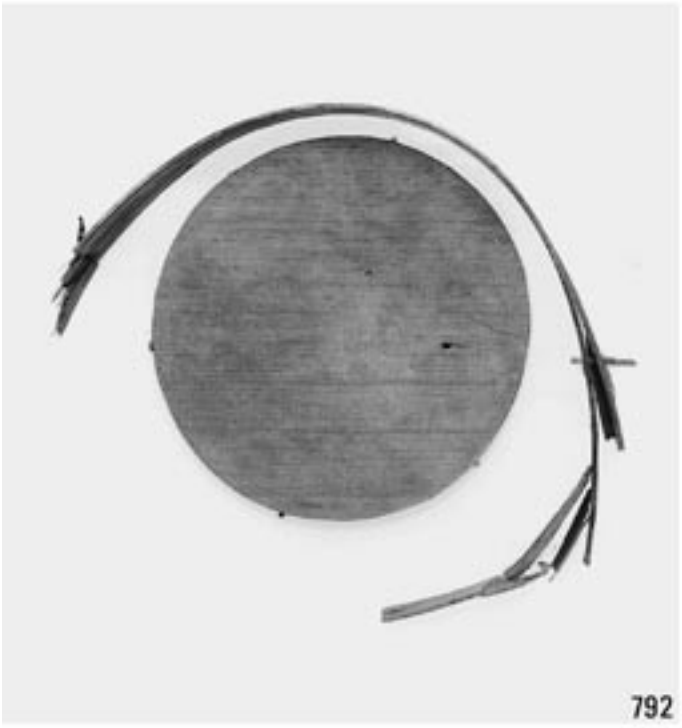
PL 66


756
757
758
759
760
761
762
765
769
771
772
770
775
777
778
780
766
779
773
764

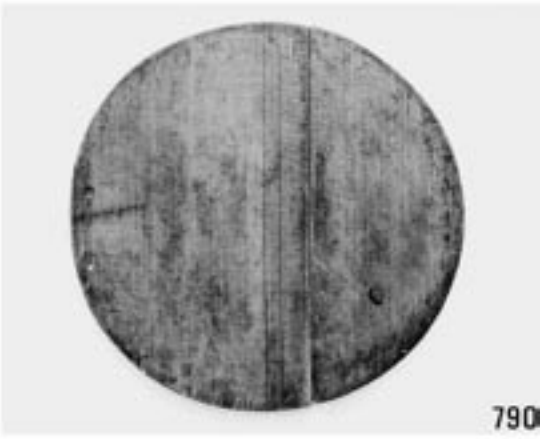
斎串（1：3）

672

791


792

791

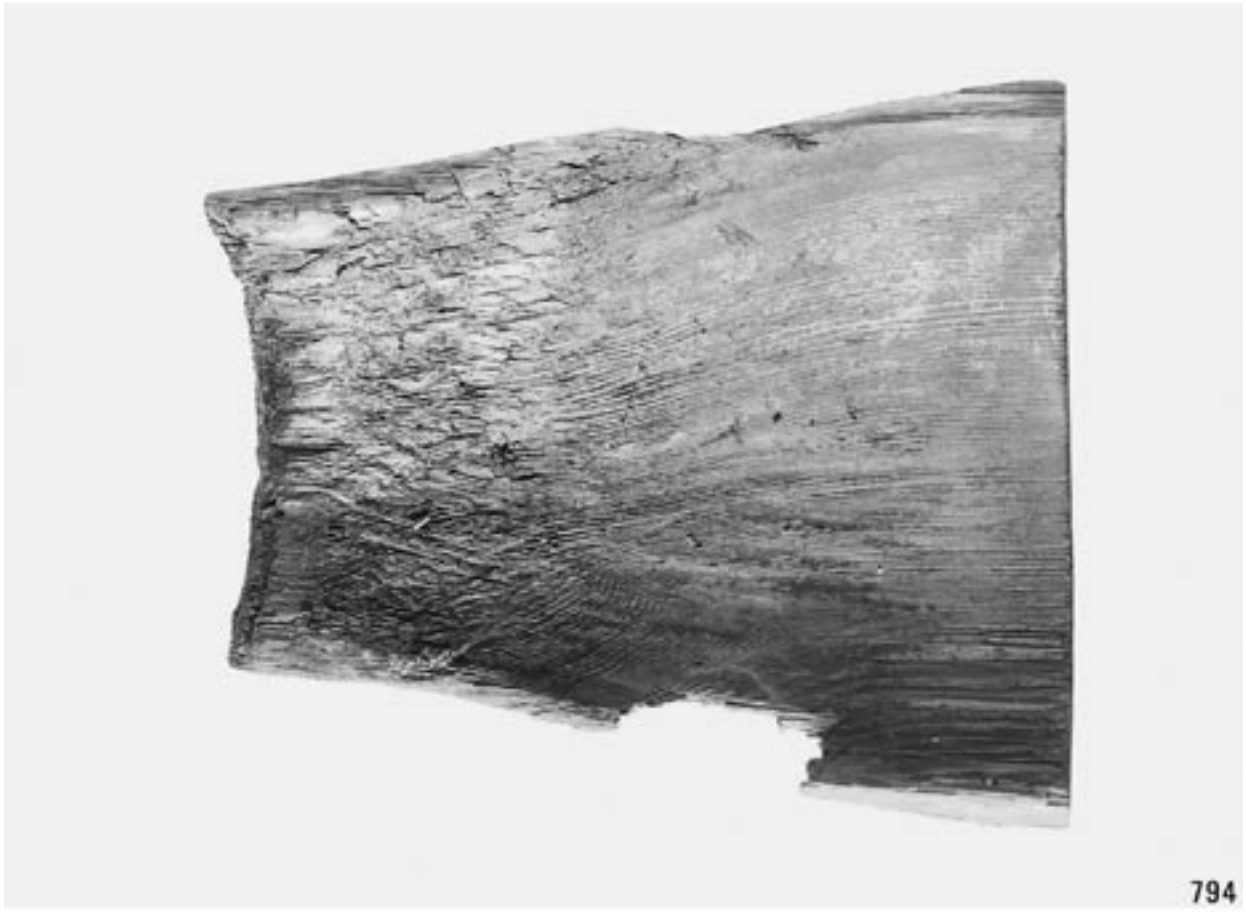

790

795

788

容器（1：3）

PL 68



桶（1：3）

妻壁板・部材

PL 70

192

195

197

198

部　材

214

215

214

215

柱

PL 72

184

684

177

232

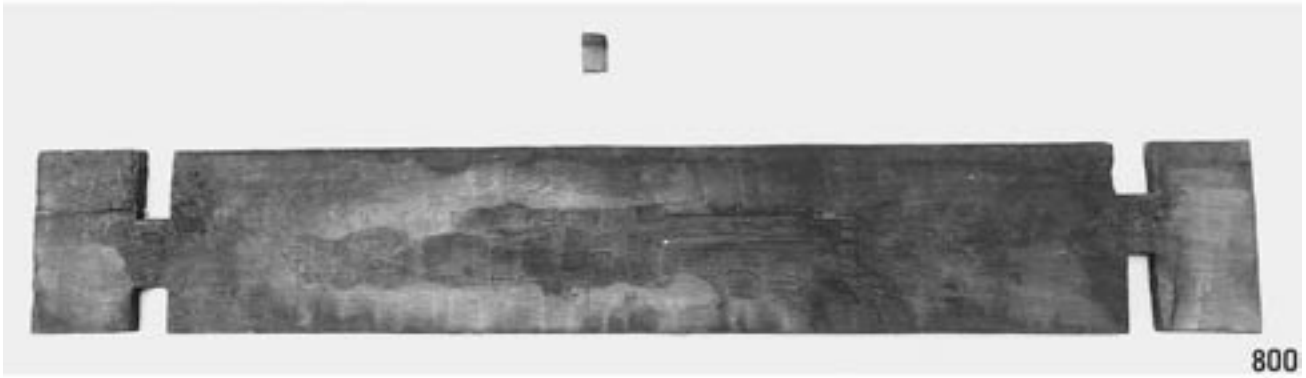
233

234

235

部材・木樋・井戸枠

798



800

802

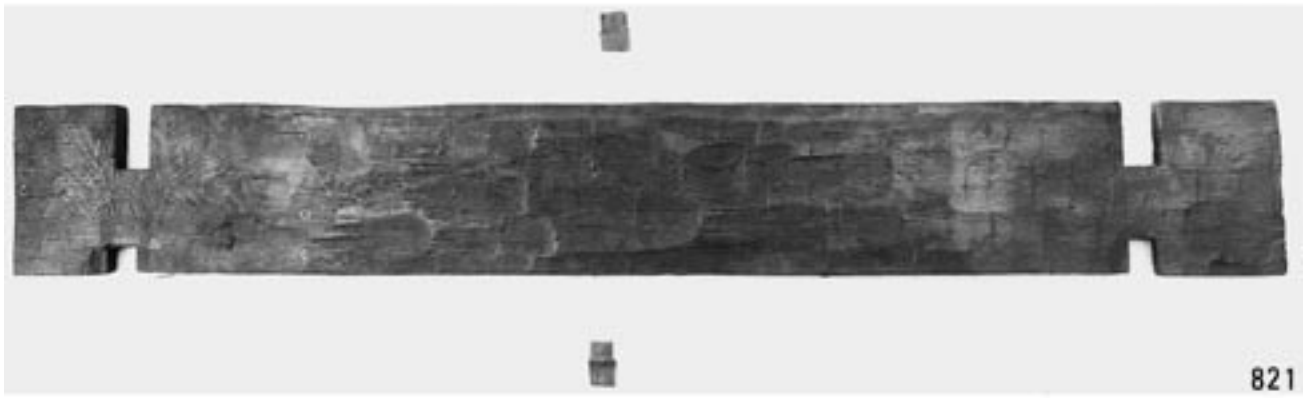
810

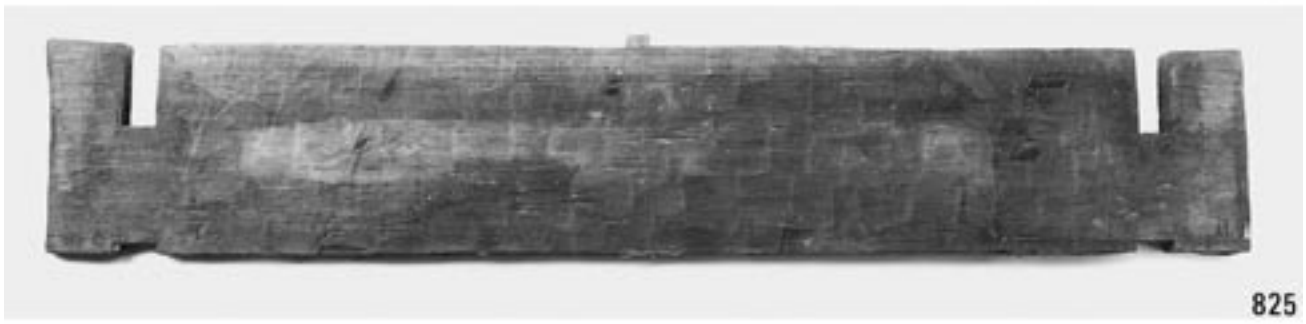
812

SE55 枠板

814

819


821


825

829

SE55 枠板

833

838

842

844

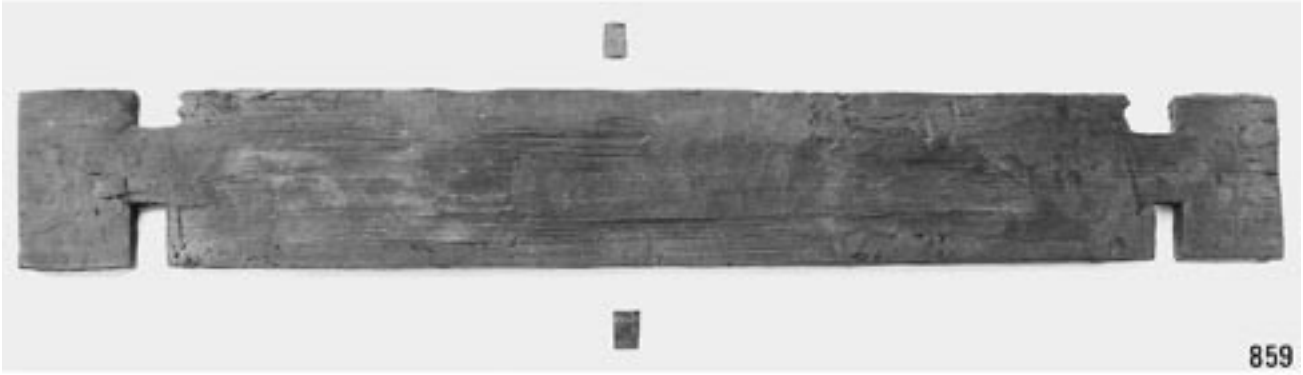
850

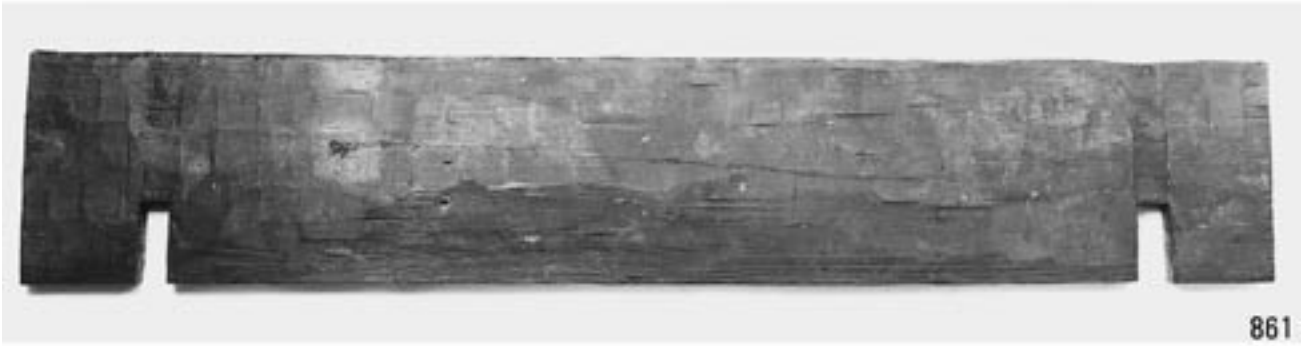
SE55 枠板

PL 76

852

854


859


861

863

SE55 枠板

865

867

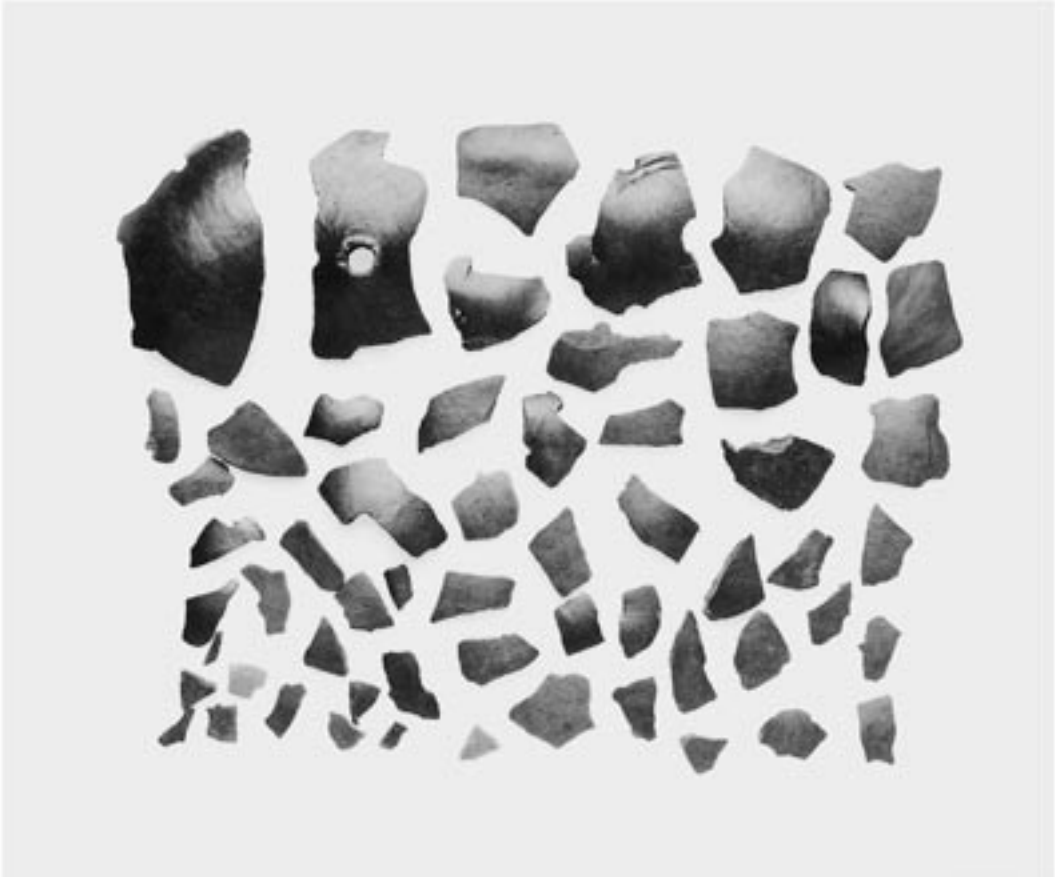
869

871

874

SE55 枠板

火付木



瓢　箪

44

261

695

639

626

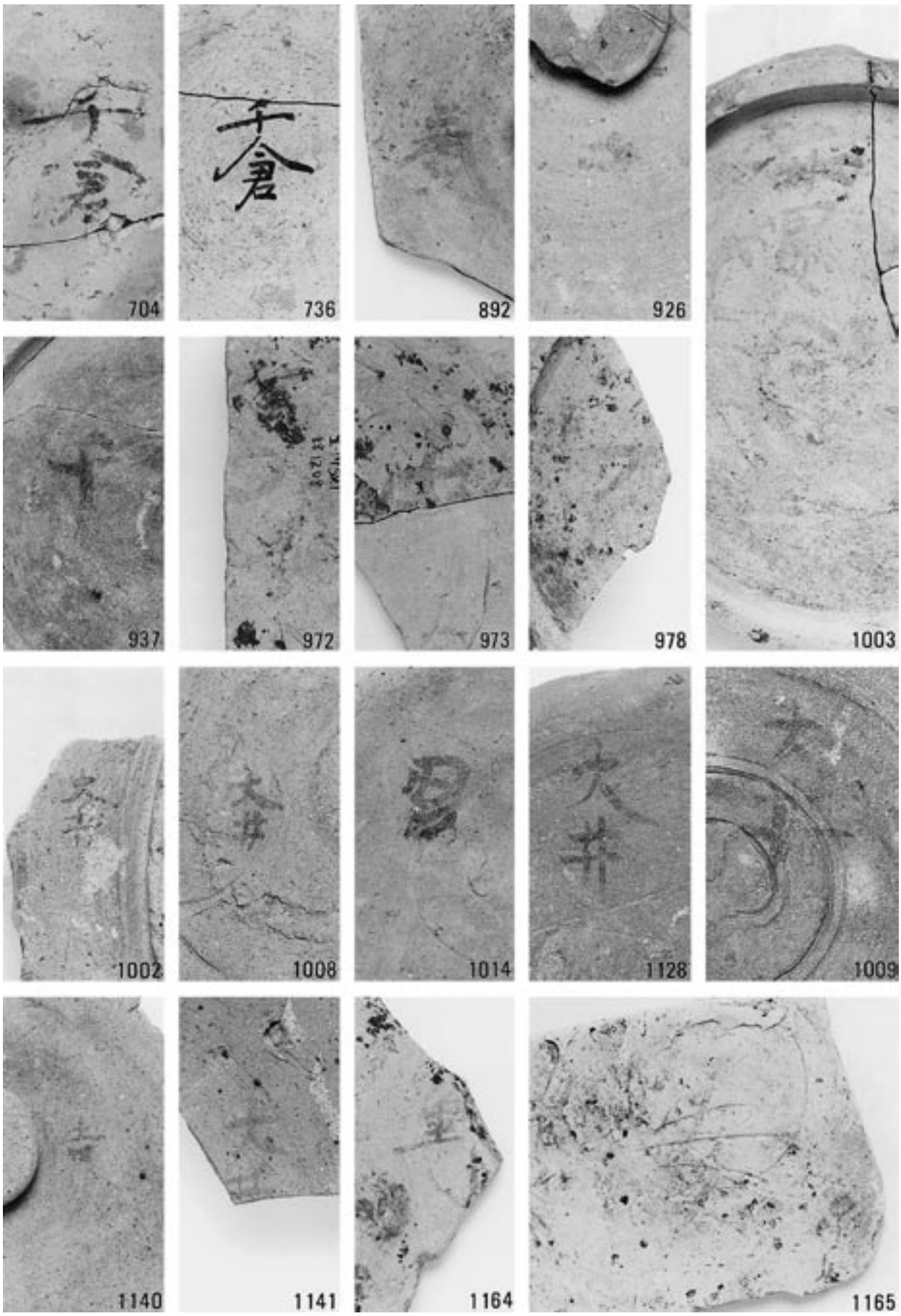
780

721

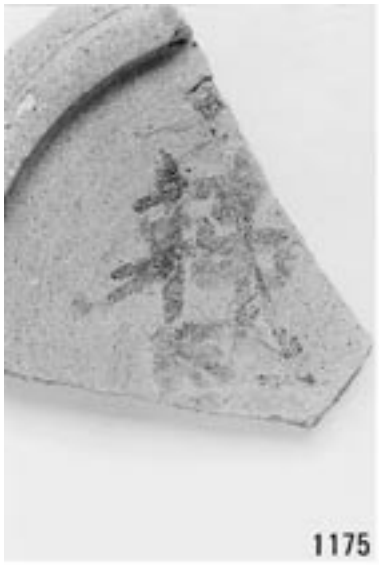
729

墨 書

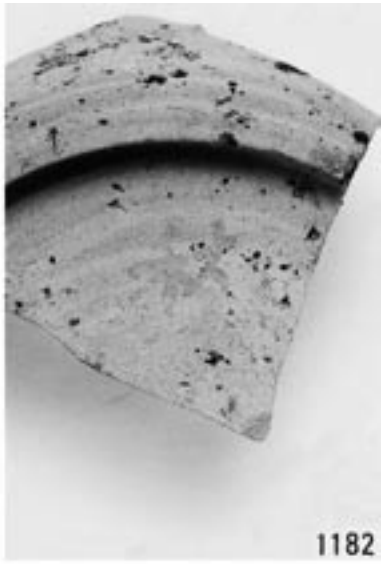
PL 80


704
736
892
926
937
972
973
978
1003
1002
1008
1014
1128
1009
1140
1141
1164
1165

墨書・刻書


1175

1181


1182

798

800

806

814

829

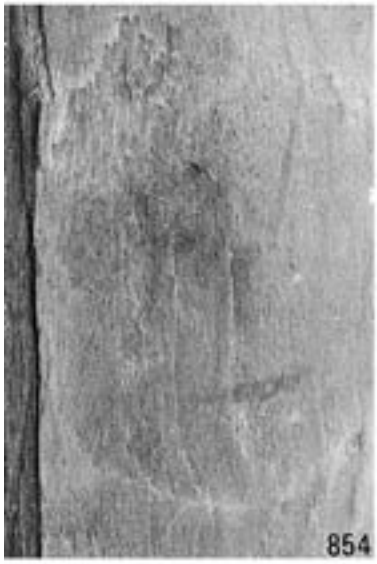
墨 書

PL 82

831

838

852


854

867

869

871

873

874

墨　書

報　告　書　抄　録

ふりがな	もりわきいせき
書　　名	森脇遺跡
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	研究紀要
シリーズ番号	第 12 号
編 著 者 名	森川常厚
編 集 機 関	三重県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒 515-0325　三重県多気郡明和町竹川 503　TEL 0596-52-1732
発行年月日	西暦　2002 年　9 月

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
森脇遺跡（もりわきいせき）	三重県上野市市部（みえけんうえのしいちべ）	206	671	34° 43′ 31″	137° 7′ 12″	第 1 次調査 19880801 ～ 19890122	4,300	農業基盤整備事業に伴う事前調査
ぬか塚（ぬかづか）			149			第 2 次調査 19890620 ～ 19891227	7,000	

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
森脇遺跡	集落跡	縄文	貯蔵穴	石器（石鏃、石匙）	
		弥生	溝 自然流水路	弥生土器（壺、甕、高杯） 木製品（横槌、鍬、剣形）	
		古墳	竪穴住居 掘立柱建物 井堰	土師器（壺、椀、高杯、甕） 須恵器（杯、二重𤭯、樽形𤭯、高杯） 木製品（扉、腰掛、田下駄、建築部材）	初期須恵器あり
		飛鳥～平安	竪穴住居 掘立柱建物 井戸	土師器（杯、皿、椀、高杯、甕） 須恵器（杯、壺、鉢、平瓶、横瓶、円面硯） 木製品（鍬、木樋、斎串、桶、曲物、櫛）	規則的な建物配列 墨書多数
		平安末～鎌倉	土坑	瓦器（椀）	
ぬか塚	古墳	古墳	周溝	土師器（甕）　須恵器（杯、高杯）	帆立貝形前方後円墳

研究紀要　　第 12 号

森　脇　遺　跡

2002.9

編集
発行　三重県埋蔵文化財センター
印刷　文化印刷有限会社